鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（129）

向椅城跡

二〇〇八年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（129）

南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（XXVI）

（伊集院IC～市来IC間）

向椅城跡（むかいがこいじょうあと）

（日置市東市来町）

2008年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



向栫城跡遠景



中世出土遺物集合

序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）建設に伴って，平成９年度から平成10年度にかけて実施した日置市東市来町伊作田に所在する向椎城跡の発掘調査の記録です。

向椎城跡は，標高約50ｍの独立台地上にあります。調査の結果，旧石器時代から近世までの遺構・遺物が発見されました。

特に，中世から近世にかけての空堀・帯曲輪・掘立柱建物跡・竪穴状遺構・炉跡などの遺構や遺物などが発見され，中世山城を知るうえで，貴重なものとなっています。

こうした遺跡の成果が積み上げられることによって，鹿児島の歴史の解明が進むものと期待しています。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

最後に調査に当たりご協力をいただいた国土交通省鹿児島国道事務所，日置市（旧東市来町）教育委員会及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成20年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　宮　原　景　信

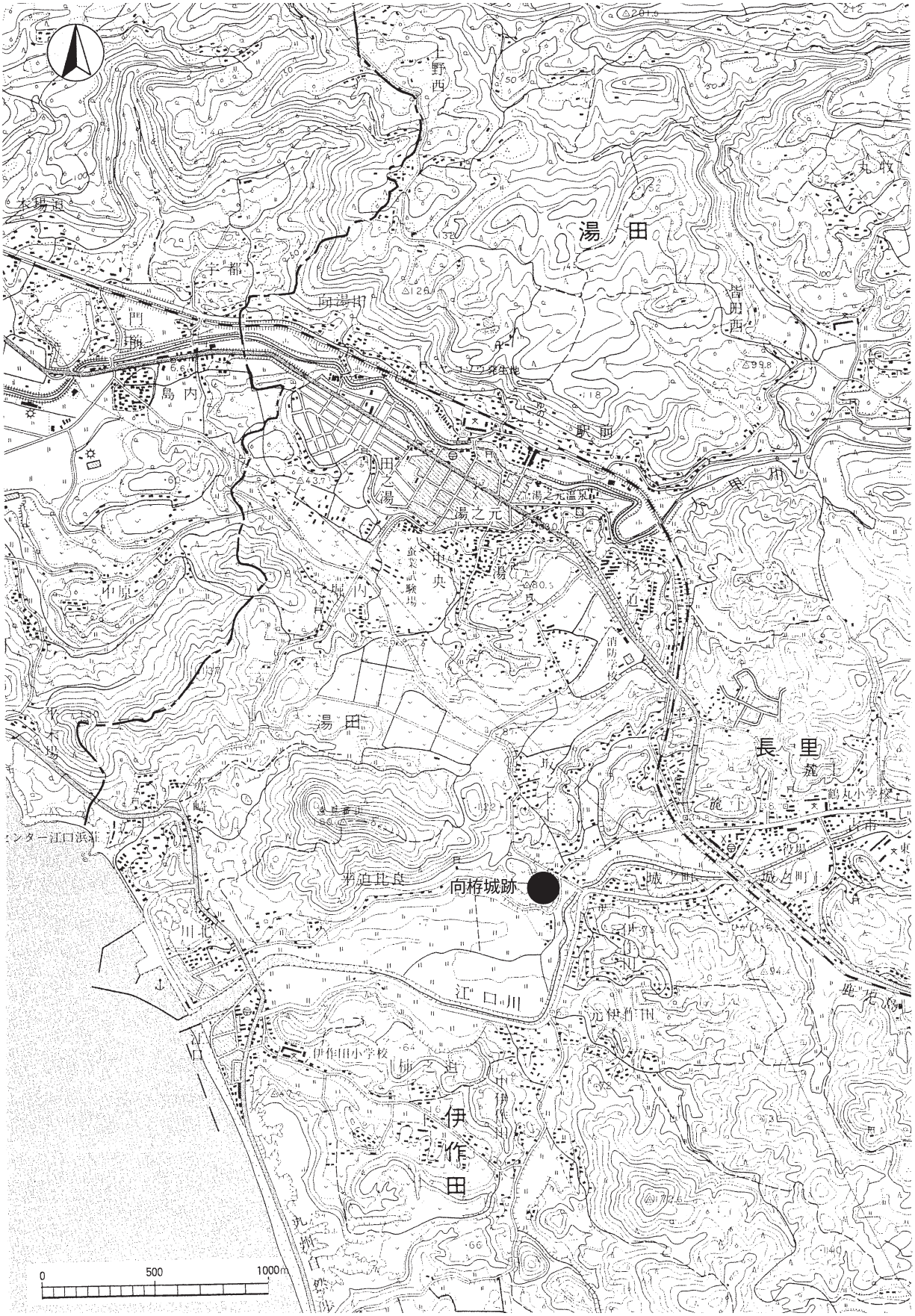
報 告 書 抄 録

ふりがな	むかいがこいじょうあと
書　　名	向椿城跡
副 書 名	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	XXVI
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第129集
編 著 者 名	牛ノ濵　修・ 鶴田　静彦・木之下悦朗
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡0995－48－5811
発行年月日	西暦2008年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
むかいがこいじょうあと 向 椿 城 跡	かごしまけんひおきし 鹿児島県日置市 ひがしいちきちょういざくだ 東 市来 町 伊作田 あざうわかこい　なかかこい 字上 椿・中 椿・ しもかこい 下 椿	462162	2917	31° 39' 17"	130° 20' 17"	確認調査 19961120 ～ 19961225 本調査 19970421 ～ 19980324 19981008 ～ 19990316	16,000 (12,000)	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向椿城跡	集落跡 中世城館	旧石器 縄文草創期～ 縄文晩期 古墳 古代 中世 近世	配石遺構１基，集石７基 竪穴住居跡11軒 円形周溝１基・土坑４ 空堀，曲輪・掘立柱建物跡３軒・炉跡19基 掘立柱建物跡１軒	剥片尖頭器・ナイフ 細石刃核・細石刃・石鏃・隆帯文土器・無文土器 阿高・市来・並木・黒川式土器，成川式土器，破鏡 須恵器・土師器・墨書土器・古銭 肥前・薩摩焼等	

遺跡の概要	標高約50mの独立台地上に所在する複合遺跡である。旧石器時代ナイフ形石器文化期の剥片尖頭器・ナイフ形石器，旧石器時代末～縄文時代草創期にかけての細石刃・細石刃核や隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また，古墳時代の竪穴住居跡や古代の円形周溝遺構が検出され，出土遺物も成川式土器や須恵器・土師器とともに，破鏡・墨書土器等貴重な出土もあった。中世から近世にかけては空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などの中世山城の遺構が検出された。



第１図　向栫城跡位置図

例　　言

１　この報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）建設に伴う向椿城跡の発掘調査報告書である。

２　本遺跡は，鹿児島県日置市東市来町（旧日置郡東市来町）伊作田字上椿・中椿・下椿に所在する。

３　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，国土交通省から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

４　発掘調査事業は，平成９年４月21日～平成11年３月16日まで実施し，整理作業・報告書作成は平成18・19年度に実施した。

５　遺物番号は，通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

６　挿図の縮尺は，各図面に示した。

７　本書で用いたレベル数値は,国土交通省が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

８　発掘調査における図面の実測・写真の撮影は，調査担当者が行った。なお、遺構実測の一部は，株式会社埋蔵文化財サポートシステム，空中撮影については株式会社パスコに委託した。

９　遺構実測図のトレースは，整理作業員の協力を得て，鶴田靜彦・木之下悦朗が行った。

10　土器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て，鶴田靜彦・木之下悦朗が行った。

11　石器の実測・トレースの大部分は，㈱九州文化財研究所及び大成エンジニア㈱に委託し，監修は牛ノ濵修が行った。

12　陶磁器の実測・トレースの大部分は，㈱九州文化財研究所及び株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し，監修は鶴田靜彦が行った。

13　遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定及び樹種同定は，株式会社加速器分析研究所及び古環境研究所に委託した。また，残留磁気測定については，古環境研究所に委託した。

14　遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。

15　本書の執筆は，第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅳ章を牛ノ濵　修，第Ⅴ章第２節の縄文草創期を新東晃一，その他の第Ⅴ章を木之下悦朗，第Ⅲ章・第Ⅵ章を鶴田靜彦，第Ⅶ章第１節を鶴田靜彦，第２節を池畑耕一，第Ⅷ章第１節の建物関係及び炉跡を松元佑輔，それ以外の遺構を鶴田靜彦，第Ⅸ章第１節を木之下悦朗，第２節を関明恵が執筆した。また，第Ⅺ章は，文末にそれぞれの文責を記した。

16　本書の編集は,鶴田靜彦,木之下悦朗が行った。

17　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，向椿城跡の遺物注記の略号は「ムカイ.」である。

目　　次

巻頭図版

序文

抄録

例言

目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過…… 1
　第１節　西回り自動車道建設に
　　至るまでの経過…… 1
　第２節　向栁城跡発掘調査経緯…… 7
　第３節　調査の組織…… 7
　第４節　調査の経過（日誌抄）…… 9
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 14
　第１節　遺跡の位置及び自然環境…… 14
　第２節　歴史的環境…… 14
第Ⅲ章　発掘調査の概要…… 20
　第１節　発掘調査の方法…… 20
　第２節　遺跡の地形及び層序…… 22
第Ⅳ章　旧石器時代の調査…… 25
　第１節　ナイフ形石器文化…… 25
　第２節　細石刃文化…… 28
第Ⅴ章　縄文時代の調査…… 60
　第１節　遺構…… 60
　第２節　遺物…… 68
第Ⅵ章　古墳時代の調査…… 144
　第１節　遺構…… 144
　第２節　遺物…… 167
第Ⅶ章　古代の調査…… 171
　第１節　遺構…… 171
　第２節　遺物…… 182
第Ⅷ章　中世の調査…… 191
　第１節　遺構…… 191
　第２節　遺物…… 264
第Ⅸ章　近世の調査…… 291
　第１節　遺構…… 291
　第２節　遺物…… 295
第Ⅹ章　科学分析…… 308
第Ⅺ章　発掘調査のまとめ…… 362

写真図版…… 371
あとがき…… 431

挿図目次

第１図　向椎城跡位置図
第２図　南九州西回り自動車道関係遺跡位置図…… 6
第３図　向椎城跡の位置及び周辺遺跡…… 17
第４図　周辺地形及び発掘範囲…… 20
第５図　向椎城跡全遺構配置図…… 21
第６図　土層柱状断面図…… 22
第７図　G-7・8・9東壁断面図…… 23
第８図　F・G・H-10, G-8北壁断面図…. 24
第９図　Ⅶ層出土遺物全ドット図…… 29
第10図　Ⅶ層石材別分布図…… 30
第11図　ナイフ形石器文化期出土遺物分布図… 31
第12図　ナイフ形石器・台形石器…… 32
第13図　尖頭器…… 33
第14図　スクレイパー（1）…… 34
第15図　スクレイパー（2）…… 35
第16図　スクレイパー（3）…… 36
第17図　スクレイパー（4）・二次加工剥片 .. 37
第18図　二次加工剥片…… 38
第19図　楔形石器（1）…… 39
第20図　楔形石器（2）…… 40
第21図　石錐・剥片…… 41
第22図　細石刃・細石刃核分布図…… 42
第23図　細石刃（1）…… 43
第24図　細石刃（2）…… 44
第25図　調整剥片…… 45
第26図　細石刃核（1）…… 46
第27図　細石刃核（2）…… 47
第28図　細石刃核（3）…… 48
第29図　細石刃核（4）…… 49
第30図　ブランク…… 50
第31図　石鏃分布図…… 51
第32図　石鏃・土器分布図…… 52
第33図　石鏃（1）…… 53
第34図　石鏃（2）…… 54
第35図　石鏃（3）…… 55
第36図　石鏃（4）…… 56
第37図　石核…… 57
第38図　凹石・敲石・磨石（1）…… 58
第39図　凹石・敲石・磨石（2）…… 59
第40図　縄文時代遺構配置図…… 61
第41図　縄文時代草創期遺構配置図及び地形図…. 62
第42図　縄文時代草創期１号集石…… 63
第43図　縄文時代草創期２号集石…… 64
第44図　縄文時代草創期配石遺構…… 64
第45図　縄文時代草創期土器出土状況（№466）…. 64
第46図　縄文時代集石遺構等位置図…… 65
第47図　縄文時代集石遺構３・４号…… 65
第48図　縄文時代集石遺構５・６・７号
　　及び黒曜石集積遺構…… 66
第49図　黒曜石集積出土遺物…… 67
第50図　縄文時代草創期土器出土状況…… 69
第51図　縄文時代草創期出土土器…… 70
第52図　縄文時代早期出土土器（1）…… 72
第53図　縄文時代早期出土土器（2）…… 73
第54図　縄文時代早期出土土器（3）…… 74
第55図　縄文時代早期出土土器（4）…… 75
第56図　縄文時代早期出土土器（5）…… 76
第57図　縄文時代早期出土土器（6）…… 77
第58図　縄文時代早期出土土器（7）…… 78
第59図　縄文時代早期出土土器（8）…… 79
第60図　縄文時代早期出土土器（9）…… 80
第61図　縄文時代早期出土土器（10）…… 81
第62図　縄文時代早期出土土器（11）…… 82
第63図　縄文時代早期出土土器（12）…… 83
第64図　縄文時代早期出土土器（13）…… 84
第65図　縄文時代早期出土土器（14）…… 85
第66図　縄文時代早期出土石器…… 85
第67図　縄文時代前期～中期出土土器（1）… 86
第68図　縄文時代前期～中期出土土器（2）… 87
第69図　縄文時代前期～中期出土土器（3）… 88
第70図　縄文時代後期出土土器（1）…… 89
第71図　縄文時代後期出土土器（2）…… 90
第72図　縄文時代後期出土土器（3）…… 91
第73図　縄文時代後期出土土器（4）…… 92
第74図　縄文時代後期出土土器（5）…… 93
第75図　縄文時代後期出土土器（6）…… 94

第76図　縄文時代後期出土土器（7）…… 95
第77図　縄文時代後期出土土器（8）…… 96
第78図　縄文時代後期出土土器（9）…… 97
第79図　縄文時代後期出土土器（10）…… 98
第80図　縄文時代後期出土土器（11）…… 99
第81図　縄文時代後期出土土器（12）…… 100
第82図　縄文時代後期出土土器（13）…… 101
第83図　縄文時代後期出土土器（14）…… 102
第84図　縄文時代後期出土土器（15）…… 103
第85図　縄文時代後期出土土器（16）…… 104
第86図　縄文時代後期出土土器（17）…… 105
第87図　縄文時代後期出土土器（18）…… 106
第88図　縄文時代後期出土土器（19）…… 107
第89図　縄文時代後期出土土器（20）…… 108
第90図　縄文時代後期出土土器（21）…… 109
第91図　縄文時代後期出土土器（22）…… 110
第92図　縄文時代後期出土土器（23）…… 111
第93図　縄文時代前期～晩期出土土器底部（1）‥ 112
第94図　縄文時代前期～晩期出土土器底部（2）‥ 113
第95図　縄文時代後期出土土器（24）…… 114
第96図　縄文時代後期出土土器（25）…… 115
第97図　縄文時代後期出土土器（26）…… 116
第98図　縄文時代後期出土土器（27）…… 117
第99図　縄文時代後期出土土器（28）…… 118
第100図　縄文時代晩期出土土器（1）…… 120
第101図　縄文時代晩期出土土器（2）…… 121
第102図　縄文時代晩期出土土器（3）…… 122
第103図　縄文時代晩期出土土器（4）…… 123
第104図　縄文時代晩期出土土器（5）…… 124
第105図　縄文時代晩期出土土器（6）…… 125
第106図　縄文時代晩期出土土器（7）…… 126
第107図　縄文時代出土土製品（1）…… 127
第108図　縄文時代出土土製品（2）…… 128
第109図　縄文時代前期～晩期出土石器（1）…… 128
第110図　縄文時代前期～晩期出土石器（2）…… 129
第111図　縄文時代前期～晩期出土石器（3）…… 129
第112図　縄文時代前期～晩期出土石器（4）…… 130
第113図　縄文時代前期～晩期出土石器（5）…… 131
第114図　縄文時代前期～晩期出土石器（6）…… 132
第115図　縄文時代前期～晩期出土石器（7）…… 133
第116図　縄文時代前期～晩期出土石器（8）…… 134
第117図　縄文時代前期～晩期出土石器（9）…… 135
第118図　縄文時代前期～晩期出土石器（10）…… 136
第119図　縄文時代前期～晩期出土石器（11）…… 137
第120図　縄文時代前期～晩期出土石器（12）…… 138
第121図　縄文時代前期～晩期出土石器（13）…… 139
第122図　縄文時代前期～晩期出土石器（14）…… 140
第123図　縄文時代前期～晩期出土石器（15）…… 141
第124図　縄文時代前期～晩期出土石器（16）…… 142
第125図　縄文時代前期～晩期出土石器（17）…… 143
第126図　古墳時代遺構配置図…… 145
第127図　住居跡配置図…… 146
第128図　１号住居跡及び出土遺物…… 147
第129図　２号住居跡出土土器…… 148
第130図　３号住居跡…… 148
第131図　３号住居跡出土土器（1）…… 149
第132図　３号住居跡出土土器（2）…… 150
第133図　４号住居跡及び出土土器…… 151
第134図　５号住居跡及び出土土器…… 152
第135図　５号住居跡出土土器…… 153
第136図　６号住居跡…… 153
第137図　６号住居跡出土土器…… 154
第138図　７号住居跡及び出土土器…… 155
第139図　８号住居跡及び出土土器…… 156
第140図　８号住居跡出土土器…… 157
第141図　９・10・11号住居跡位置図…… 158
第142図　９号住居跡…… 158
第143図　９号住居跡出土土器（1）…… 159
第144図　９号住居跡出土土器（2）…… 160
第145図　９号住居跡出土土器（3）…… 161
第146図　９号住居跡出土土器（4）…… 162
第147図　10号住居跡及び出土土器…… 163
第148図　10号住居跡出土土器（1）…… 164
第149図　10号住居跡出土土器（2）…… 165
第150図　10号住居跡出土土器（3）…… 166
第151図　11号住居跡…… 167
第152図　包含層出土状況…… 168
第153図　包含層出土土器（1）…… 168
第154図　包含層出土土器（2）…… 169
第155図　包含層出土土器（3）…… 170
第156図　古代全遺構配置図…… 172
第157図　古代遺構配置図（1）…… 173
第158図　古代遺構配置図（2）…… 174
第159図　竪穴遺構及び出土遺物…… 175
第160図　円形周溝遺構及び出土遺物…… 176
第161図　土坑１及び出土遺物…… 177

第162図　土坑１出土遺物 …… 178
第163図　土坑２及び出土遺物 …… 179
第164図　土坑２出土遺物 …… 180
第165図　土坑３及び出土遺物 …… 181
第166図　土坑４及び出土遺物 …… 181
第167図　土坑４出土銭貨 …… 181
第168図　土坑５ …… 181
第169図　埋納土師器甕出土状況 …… 182
第170図　埋納土師器甕 …… 182
第171図　古代出土遺物（1） …… 183
第172図　古代出土遺物（2） …… 184
第173図　古代出土遺物（3） …… 185
第174図　古代出土遺物（4） …… 186
第175図　古代出土遺物（5） …… 187
第176図　古代出土遺物（6） …… 187
第177図　古代出土遺物（7） …… 188
第178図　古代出土遺物（8） …… 189
第179図　古代出土遺物（9） …… 190
第180図　中世遺構配置図 …… 193
第181図　向椎城跡地形図及び横断・縦断面図… 194
第182図　発掘調査前空堀及び帯曲輪等 … 195
第183図　発掘調査後空堀及び帯曲輪等 … 196
第184図　発掘調査後空堀及び帯曲輪等コンタ図… 197
第185図　帯曲輪ｃ及び空堀２断面図 …… 198
第186図　空堀１出土遺物（1） …… 199
第187図　空堀１出土遺物（2） …… 200
第188図　空堀１出土遺物（3） …… 201
第189図　曲輪ａ出土遺物（1） …… 202
第190図　曲輪ａ出土遺物（2） …… 203
第191図　曲輪ｂ出土遺物 …… 204
第192図　曲輪ｃ出土遺物 …… 205
第193図　曲輪１遺構配置図 …… 206
第194図　掘立柱建物跡１ …… 207
第195図　掘立柱建物跡２ …… 208
第196図　掘立柱建物跡３ …… 209
第197図　空堀及び土坑群 …… 210
第198図　空堀及び土坑群断面図（1） …… 213
第199図　空堀及び土坑群断面図（2） …… 214
第200図　大型円形土坑２出土遺物（1） … 215
第201図　大型円形土坑２出土遺物（2） … 216
第202図　大型円形土坑２出土遺物（3） … 217
第203図　大型円形土坑２出土遺物（4） … 218
第204図　大型円形土坑２出土遺物（5） … 219
第205図　空堀及び土坑群出土遺物（1） … 221
第206図　空堀及び土坑群出土遺物（2） … 222
第207図　空堀及び土坑群出土遺物（3） … 223
第208図　空堀及び土坑群出土遺物（4） … 224
第209図　空堀及び土坑群出土遺物（5） … 225
第210図　空堀及び土坑群出土遺物（6） … 226
第211図　空堀及び土坑群出土遺物（7） … 227
第212図　空堀及び土坑群出土遺物（8） … 228
第213図　空堀及び土坑群出土遺物（9） … 229
第214図　空堀及び土坑群出土遺物（10） … 230
第215図　空堀及び土坑群出土遺物（11） … 231
第216図　空堀及び土坑群出土遺物（12） … 232
第217図　曲輪２遺構配置図 …… 234
第218図　竪穴遺構１・２ …… 235
第219図　竪穴遺構３ …… 236
第220図　竪穴遺構３出土遺物 …… 236
第221図　曲輪３遺構配置図 …… 238
第222図　曲輪３出土遺物（１） …… 239
第223図　曲輪３出土遺物（２） …… 240
第224図　曲輪３出土遺物（３） …… 241
第225図　中世墓１ …… 242
第226図　中世墓１出土遺物 …… 242
第227図　中世墓２ …… 243
第228図　中世墓３ …… 243
第229図　中世墓４及び出土遺物 …… 243
第230図　土坑１及び出土遺物 …… 244
第231図　土坑２ …… 244
第232図　土坑３ …… 245
第233図　土坑３出土遺物 …… 245
第234図　土坑４～土坑９及び出土遺物 … 246
第235図　土坑10～土坑16 …… 247
第236図　土坑17～土坑25及び出土遺物 … 250
第237図　土坑26～土坑35 …… 251
第238図　土坑36～土坑43 …… 252
第239図　土坑44～土坑49及び出土遺物 … 253
第240図　炉跡位置図 …… 254
第241図　１号炉跡～４号炉跡 …… 255
第242図　５号炉跡～９号炉跡 …… 256
第243図　10号炉跡～14号炉跡 …… 257
第244図　15号炉跡～18号炉跡 …… 258
第245図　19号炉跡 …… 259
第246図　青磁及び土師器埋納遺構 …… 260
第247図　不明遺構 …… 261

第248図　不明遺構出土遺物（1）…… 262
第249図　不明遺構出土遺物（2）…… 263
第250図　出土遺物（土師器）…… 265
第251図　出土遺物（須恵器・擂鉢等）…… 266
第252図　出土遺物（擂鉢）…… 267
第253図　出土遺物（瓦質土器）…… 268
第254図　出土遺物（瓦質・土師質土器等）… 269
第255図　出土遺物（石鍋）…… 270
第256図　出土遺物（青磁１）…… 271
第257図　出土遺物（青磁２）…… 272
第258図　出土遺物（青磁３）…… 273
第259図　出土遺物（青磁４）…… 274
第260図　出土遺物（青磁５）…… 275
第261図　出土遺物（青磁６）…… 276
第262図　出土遺物（白磁１）…… 278
第263図　出土遺物（白磁２）…… 279
第264図　出土遺物（青花１）…… 280
第265図　出土遺物（青花２）…… 281
第266図　出土遺物（青花３）…… 282
第267図　出土遺物（青花４）…… 283
第268図　出土遺物（陶器１）…… 284
第269図　出土遺物（陶器２）…… 285
第270図　出土遺物（天目茶碗）…… 286
第271図　出土遺物（銭貨１）…… 287
第272図　出土遺物（銭貨２）…… 288
第273図　出土遺物（銭貨３）…… 289
第274図　出土遺物（銭貨４）…… 290
第275図　近世遺構配置図 …… 292
第276図　掘立柱建物跡位置図 …… 293
第277図　掘立柱建物跡 …… 294
第278図　柱穴群位置図 …… 295
第279図　柱穴群 …… 296
第280図　磁器（１）…… 297
第281図　磁器（２）…… 298
第282図　陶器（１）…… 299
第283図　陶器（２）…… 300
第284図　陶器（３）…… 301
第285図　陶器（４）…… 302
第286図　陶器（５）…… 303
第287図　陶器（６）…… 304
第288図　陶器（７）…… 305
第289図　陶器（８）…… 306

表　目　次

第１表　伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間遺跡一覧表（1）‥ 4
第２表　伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間遺跡一覧表（2）‥ 5
第３表　周辺遺跡（1）…… 18
第４表　周辺遺跡（2）…… 19
第５表　旧石器時代石器観察表（1）…… 324
第６表　旧石器時代石器観察表（2）…… 325
第７表　旧石器時代石器観察表（3）…… 326
第８表　旧石器時代石器観察表（4）…… 327
第９表　旧石器時代石器観察表（5）…… 328
第10表　旧石器時代石器観察表（6）…… 329
第11表　旧石器時代石器観察表（7）…… 330
第12表　旧石器時代石器観察表（8）…… 331
第13表　縄文時代土器観察表（1）…… 332
第14表　縄文時代土器観察表（2）…… 333
第15表　縄文時代土器観察表（3）…… 334
第16表　縄文時代土器観察表（4）…… 335
第17表　縄文時代土器観察表（5）…… 336
第18表　縄文時代土器観察表（6）…… 337
第19表　縄文時代土器観察表（7）…… 338
第20表　縄文時代石器観察表（1）…… 339
第21表　縄文時代石器観察表（2）…… 340
第22表　古墳時代破鏡観察表…… 341
第23表　古墳時代土器観察表（1）…… 341
第24表　古墳時代土器観察表（2）…… 342
第25表　古墳時代土器観察表（3）…… 343
第26表　古代土師器・須恵器観察表（1）… 344
第27表　古代土師器・須恵器観察表（2）… 345
第28表　古代土師器・須恵器観察表（3）… 346
第29表　古代土師器・須恵器観察表（4）… 347
第30表　古代陶磁器観察表…… 347
第31表　古代石器観察表…… 347
第32表　古代土坑観察表…… 347
第33表　中世土師器・須恵器・瓦質土器等
観察表（1）…… 348
第34表　中世土師器・須恵器・瓦質土器等
観察表（2）…… 349

第35表　中世土師器・須恵器・瓦質土器等観察表（3）…… 350
第36表　中世土師器・須恵器・瓦質土器等観察表（4）…… 351
第37表　中世陶磁器観察表（1）…… 352
第38表　中世陶磁器観察表（2）…… 353
第39表　中世陶磁器観察表（3）…… 354
第40表　中世陶磁器観察表（4）…… 355
第41表　中世陶磁器観察表（5）…… 356
第42表　中世石器観察表…… 357
第43表　中世土坑観察表…… 358
第44表　古代・中世出土銭貨観察表（1） 359
第45表　古代・中世出土銭貨観察表（2） 359
第46表　近世陶磁器観察表（1） …… 360
第47表　近世陶磁器観察表（2） …… 361

図版目次

図版１　空堀遠景…… 371
図版２　土層断面図･調査中の故 勇氏…. 372
図版３　旧石器・縄文時代草創期遺構…. 373
図版４　縄文時代草創期集石…… 374
図版５　縄文時代集石…… 375
図版６　古墳時代住居他（1）…… 376
図版７　古墳時代住居他（2）…… 377
図版８　古代遺構・遺構内遺物他…… 378
図版９　発掘前の空堀…… 379
図版10　空堀近景…… 380
図版11　曲輪１から曲輪２・３を臨む…. 381
図版12　曲輪１・空堀俯瞰…… 382
図版13　中世掘立柱建物跡…… 383
図版14　曲輪２全景…… 384
図版15　中世墓…… 385
図版16　炉跡（1）…… 386
図版17　炉跡（2）…… 387
図版18　炉跡（3）…… 388
図版19　炉跡（4）…… 389
図版20　大型円形土坑２他…… 390
図版21　曲輪・空堀・帯曲輪等…… 391
図版22　近世掘立柱建物跡（1）…… 392
図版23　近世掘立柱建物跡（2）…… 393
図版24　薩摩焼他…… 394
図版25　旧石器時代石器（1）…… 395
図版26　縄文時代草創期出土遺物（1）…. 396
図版27　縄文時代草創期出土遺物（2）…. 397
図版28　縄文時代草創期出土遺物（3）…. 398
図版29　縄文時代早期出土遺物…… 399
図版30　縄文時代前期～後期出土遺物…. 400
図版31　縄文時代後期出土遺物（1）…… 401
図版32　縄文時代後期出土遺物（2）…… 402
図版33　縄文時代後期～晩期出土遺物…. 403
図版34　縄文時代出土遺物…… 404
図版35　古墳時代住居跡出土遺物（1）…. 405
図版36　古墳時代住居跡出土遺物（2）…. 406
図版37　古墳時代住居跡出土遺物（3）…. 407
図版38　古墳時代包含層出土遺物…… 408
図版39　古代遺構内出土遺物（1）…… 409
図版40　古代遺構内出土遺物（2）…… 410
図版41　古代遺構内出土遺物…… 411
図版42　古代出土遺物（1）…… 412
図版43　古代出土遺物（2）…… 413
図版44　古代出土遺物（3）…… 414
図版45　土師器甕集合…… 415
図版46　空堀・曲輪・土坑等投弾…… 416
図版47　中世大型円形土坑２内出土遺物. 417
図版48　中世遺構内出土遺物（1）…… 418
図版49　中世遺構内出土遺物（2）…… 419
図版50　埋納遺構出土青磁・土師器…… 420
図版51　中世出土遺物（1）…… 421
図版52　中世出土遺物（2）…… 422
図版53　中世出土遺物（3）…… 423
図版54　中世出土遺物（4）…… 424
図版55　中世出土遺物（5）…… 425
図版56　中世出土遺物（6）…… 426
図版57　中世出土銭貨（1）…… 427
図版58　中世出土銭貨（2）…… 428
図版59　近世出土遺物…… 429
図版60　薩摩焼集合…… 430

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　西回り自動車道建設に伴う発掘調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，文化課が平成３年６月に伊集院ＩＣと市来ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には，27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて，平成８年度から平成12年度にかけて，毎年度，計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。なお事業区間内の遺跡の概要については，以下の通りである。

１　一ノ谷……日置市伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高90m～95mの丘稜端部に位置し，調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。

２　永迫平……日置市伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150mの小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の２か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し，縄文時代早期前半の前平式期には９軒の住居跡を始め，３基の連穴土坑と９基の集石，多数の土坑を検出。その他，古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。

３　下永迫Ａ…日置市伊集院町下谷口字下永迫の標高約85m～110mのやせ尾根に挟まれた谷間に立地し，調査面積は2,600㎡で，縄文時代後期の指宿式土器と石鏃，古墳時代の成川式土器，古代～中世では土坑・集石が検出され，青磁・白磁が出土した。

４　柳原……日置市伊集院町下谷口の標高約90m～100mの山間の谷間，傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は8,000㎡である。縄文時代早期の集石４基や後期の石匙，石鏃，古代の土坑，焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。

５　上山路山…日置市伊集院町大田字上山路山の標高約130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり，平坦面から続く緩やかな斜面と谷頭を含んだ，かなり急な斜面からなる調査面積は6,300㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早期・後期），弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは，縄文時代

早期の遺構で，道跡や集石，遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

6　大田城跡…日置市伊集院町大田字下城山迫の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は3,500㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが，山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化，細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石，土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。

7　堂平窯跡…日置市東市来町美山の標高約85m～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で，窯，作業場，物原が発見された。窯は長さ約30m，幅1.2m，傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壷・徳利・土瓶・こね鉢・擂鉢・動物形土製品），瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。

8　池之頭……日置市東市来町美山字池之頭にあり，美山池北西部の標高約80m～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し，調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃，縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器，晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器(甕・壷・高坏等)が多く発見された。

9　雪　山……日置市東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で，旧石器時代の細石刃核・細石刃，縄文時代の集石２基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石，古墳時代の成川式土器が出土したが，主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で，炉跡・物原・土坑等から薩摩焼（茶家・土瓶・擂鉢・瓶・碗），染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。

10　猿　引……日置市東市来町長里字猿引の標高約110m～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で，旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群１基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曽畑式土器・黒曜石片が出土した。

11　犬ヶ原……日置市東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は2,000㎡で，旧石器時代の細石刃核・細石刃，縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鏃・石匙，古墳時代の成川式土器（甕・壷・鉢）等が出土したが，主になるのは平安時代で，掘立柱建物跡（４間×４間・総柱），製鉄に関する遺物（鞴羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。

12　向栫城跡（本報告書）…日置市東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は16,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ，縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世の空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などの中世山城の遺構が検出された。

13　堂園平……日置市東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり，標高約50mの平坦

地に立地する。調査面積は2,000㎡で，旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群９基と剥片尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃，縄文時代の集石４基・吉田式・塞ノ神式・轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

14　今里……日置市東市来町伊作田字今里の標高約65ｍの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で，旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群，剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し，縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器，古墳時代の成川式土器が発見された。

15　市ノ原……いちき串木野市大里字上ノ原前から日置市東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50ｍ台地西側に所在する。調査面積は81,500㎡である。遺跡は第1地点から第５地点まであり，旧石器時代ナイフ形石器文化，細石刃文化，縄文時代（早期～晩期），弥生時代の住居跡・壷棺，古墳時代の住居跡，古代～中世，近世の街道跡など多時期に渡り，多種多様な遺構・遺物が発見された。

16　上ノ原……いちき串木野市大里の東シナ海を望む標高約40ｍの台地上に立地し，三方は急峻な傾斜面，調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石３基，土坑が検出され，塞ノ神式，轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土し，古墳時代は竪穴式住居跡１基と土坑・成川式土器，古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が出土した。

※刊行報告書

「一ノ谷遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（31）	2001.3
「池之頭遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（32）	2002.3
「今里遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（33）	2002.9
「市ノ原遺跡（第１地点）」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）	2003.3
「犬ヶ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（50）	2003.3
「雪山遺跡・猿引遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（53）	2003.3
「上ノ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（62）	2003.3
「下永迫Ａ遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（72）	2004.3
「永迫平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（93）	2005.3
「柳原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（94）	2005.3
「大田城跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（95）	2005.3
「堂園平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（104）	2006.3
「市ノ原遺跡（第５地点）」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（105）	2006.3
「堂平窯跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（106）	2006.12
「上山路山遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（116）	2007.3

第１表　南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表（1）（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）

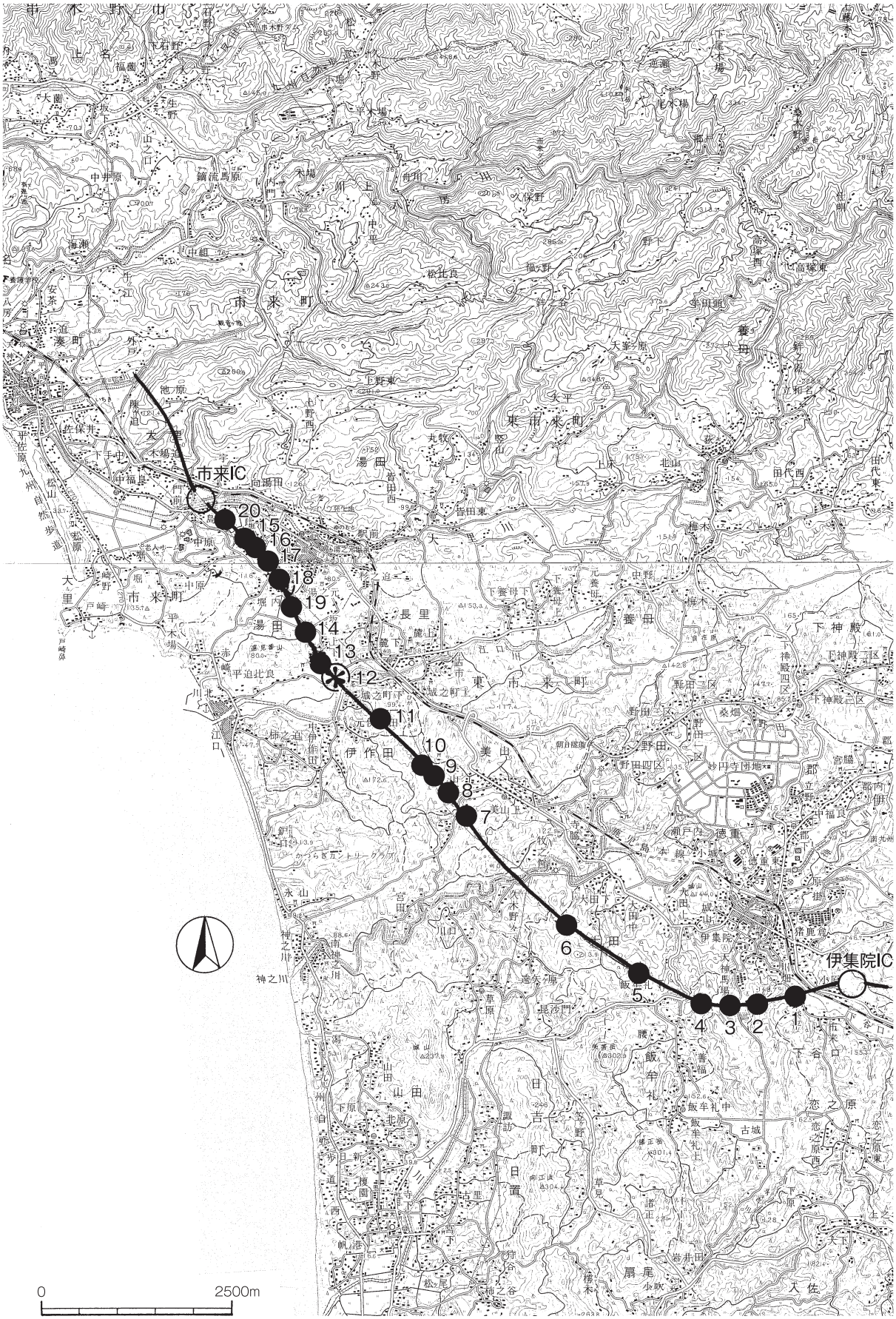
番号	遺跡名	所　在　地	調査面積（㎡）	調　査　期　間	調　　査　　員	時　　代	概　　要
①	一ノ谷	日置市伊集院町 下谷口	1,250	確認H8.10 全面H8.10～11	三垣・桑波田 三垣・桑波田	中世～近世	掘立柱建物跡・土坑 陶磁器 （県埋文センター報告書31　2001刊行）
②	永迫平	日置市伊集院町 下谷口	14,000	確認H8.10～12 全面H8.10～H10.7	三垣・桑波田 繁昌・藤崎・三垣・中原・桑波田・川口・大窪	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文 古代～近世	礫群，剥片尖頭器・ナイフ形・台形石器 細石刃 竪穴住居跡・集石・連穴土坑，前平式・吉田式土器 青磁・土師器・陶磁器 （県埋文センター報告書93　2005刊行）
③	下永迫	日置市伊集院町 下谷口	2,600	確認H9.10 全面H10.5～7	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	古代～中世	土坑・集石，須恵器・土師器 青磁・白磁 （県埋文センター報告書72　2004刊行）
④	柳　原	日置市伊集院町 下谷口	8,000	確認H9.11 全面H10.5～7	池畑・三垣・元田 繁昌・中原・川口・大窪	古代～中世 中世～近世	土坑・焼土，須恵器・土師器・鉄製品 ピット・溝状遺構，陶磁器 （県埋文センター報告書94　2005刊行）
⑤	上山路山	日置市伊集院町 大田	6,300	確認H9.2 全面H9.5～H10.3	三垣・桑波田 寺原・桑波田	旧石器 縄文 弥生～古墳	剥片・砕片 道跡・集石，岩本式・前平式・吉田式・市来式土器 成川式土器 （県埋文センター報告書116　2007刊行）
⑥	大田城	日置市伊集院町 大田	3,500	確認H8.12～H9.1 全面H9.12～H10.3	三垣・桑波田	旧石器 縄文	三稜尖頭器 集石・土坑，前平式土器，石鏃・磨石 （県埋文センター報告書95　2006刊行）
⑦	堂平窯	日置市東市来町 美山	3,500	確認H10.2 全面H10.8～12	池畑 池畑・繁昌・宮田・森田・元田他	江戸	窯・柱跡・粘土溜まり・土坑・物原 陶器・瓦・窯道具 （県埋文センター報告書106　2006刊行）
⑧	池之頭	日置市東市来町 美山	7,500	確認H9.8 全面H10.8～11 H12.7～8	湯之前・橋口 宮田・寺原 宮田・三垣	旧石器 縄文 古墳	ナイフ形石器・台形石器・石核・細石刃核・細石刃 集石，前平式・吉田式・出水式・黒川式土器 成川式土器 （県埋文センター報告書32　2002刊行）
⑨	雪　山	日置市東市来町 美山	2,700	確認H12.6 全面H12.6～8	宮田・三垣 宮田・三垣	縄文 古墳 近世～近代	前平式・春日式土器，石鏃・磨石・敲石・石皿 成川式土器 窯道具・焙烙・石臼・陶磁器・砥石・鉄製品 （県埋立センター報告書53　2003刊行）
⑩	猿　引	日置市東市来町 長里	800	確認H12.5 全面H12.5～6	宮田・三垣 宮田・三垣	旧石器 縄文	礫群，剥片尖頭器・ナイフ・細石刃核 曽畑式土器，石斧・磨石・敲石 （県埋文センター報告書53　2003刊行）
⑪	犬ヶ原	日置市東市来町 伊作田	2,000	確認H9.2，H10.6 全面H11.11～H12.2	池畑・三垣 牛ノ濵・橋口・大窪	旧石器 縄文 古代～中世	細石刃核・細石刃・剥片 黒川式土器，石斧・石皿・石鏃 掘立柱建物跡・竪穴遺構，須恵器・土師器 （県埋文センター報告書50　2003刊行）
12	向栫城	日置市東市来町 伊作田	16,000	確認H8.11～12 全面H9.4～H10.3 全面H10.7～8	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ 石鏃，隆帯文・前平式・市来式土器 竪穴住居跡，成川式土器 空堀・帯曲輪・曲輪・堀切・竪穴遺構・掘立柱建物跡・炉跡・土坑，青磁・備前焼，鉄製品 （県埋文センター報告書129　2008刊行）

○報告書刊行済

第２表　南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表（2）（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）

番号	遺跡名	所　在　地	調査面積（㎡）	調査期間	調　査　員	時　代	概　　要
⑬	堂園平	日置市東市来町 伊作田	2,000	確認Ｈ8.11～Ｈ8.12 全面Ｈ10.5～Ｈ10.11	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文 古代	尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石 礫群，細石刃核・細石刃 集石，吉田式・塞ノ神式・轟式土器 土坑，須恵器・土師器 （県埋文センター報告書104　2006刊行）
⑭	今　里	日置市東市来町 伊作田	14,000	確認Ｈ8.11～Ｈ8.12 全面Ｈ10.5～Ｈ10.11	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文 古墳	礫群，剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃核・細石刃・ブランク・調整剥片 集石，前平式・深浦式・出水式・黒川式土器 成川式土器 （県埋文センター報告書33　2002刊行）
⑮	市ノ原 第１地点	いちき串木野市 大里	12,000	確認Ｈ8.10～Ｈ8.12 全面Ｈ9.4～Ｈ10.3	繁昌・西園・宮田 寺師・藤野	縄文 弥生 古代 中世～近世	集石，前平式・春日式・黒川式土器，玦状耳飾り 埋甕 掘立柱建物跡・土坑・溝，須恵器・墨書土器 道跡・近世墓，青磁・白磁・羽釜・染付 （県埋文センター報告書49　2003刊行）
16	市ノ原 第２地点	日置市 東市来町湯田	1,000	確認Ｈ8.10～Ｈ8.12 全面Ｈ9.4～Ｈ10.3	池畑・繁昌・西園・宮田 八木澤・松崎	旧石器（ナイフ） 縄文 近世	ナイフ形石器 塞ノ神式・苦浜式土器 陶磁器 （県埋文センター報告書130　2008刊行）
17	市ノ原 第３地点	日置市 東市来町湯田	34,500	確認Ｈ8.10～Ｈ8.12 全面Ｈ8.12～Ｈ9.3 全面Ｈ9.4～Ｈ10.3 全面Ｈ10.5～Ｈ11.3 全面Ｈ11.5～Ｈ11.7	池畑・繁昌・西園・宮田 池畑・前野・三垣・元田・西村・松村 前野・上之園・八木澤・三垣・横手・松村・大窪 前野・三垣	旧石器（細石刃） 縄文 弥生～古墳 古代～中世	細石刃核・細石刃 集石，刻目突帯文・岩本式・前平式・吉田式・石坂式・桑ノ丸式・押型文・平栫式・塞ノ神式・轟式・曽畑式・深浦式・竹崎式・春日式・指宿式・市来式土器 竪穴住居跡・土坑・焼土，高橋式・入来式・黒髪式・山ノ口式・須玖式・成川式土器 掘立柱建物跡・溝状遺構，須恵器・土師器，青磁・白磁・石鍋
18	市ノ原 第４地点	日置市 東市来町湯田	22,300	確認Ｈ8.10～Ｈ8.12 全面Ｈ9.4～Ｈ10.3 全面Ｈ10.5～Ｈ11.3 全面Ｈ11.5～Ｈ11.7	池畑・繁昌・西園・宮田 池畑・前野・三垣・元田・西村・松村 前野・上之園・三垣・松村・大窪 前野・三垣	旧石器 縄文 弥生～古墳 古代～中世 近世	剥片・砕片 集石・竪穴住居跡・土坑，前平式・吉田式・桑ノ丸式・押型文・平栫式・塞ノ神式土器 竪穴住居跡・土坑，高橋式土器・成川式土器 竪穴住居跡・焼土・溝状遺構，須恵器・土師器 街道跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉，陶磁器 （県埋文センター報告書130　2008刊行）
⑲	市ノ原 第５地点	日置市 東市来町湯田	11,700	確認Ｈ8.10～Ｈ8.12 全面Ｈ9.4～Ｈ10.3 全面Ｈ10.5～Ｈ11.3	繁昌・西園・宮田 森田・中原 寺原・松村	旧石器 縄文 弥生～古墳 古代～中世	礫群，ナイフ・台形石器・細石刃核・細石刃 落し穴・集石，前平式・押型文・深浦式土器 弥生土器・成川式土器 道跡，須恵器・土師器，滑石製石鍋 （県埋文センター報告書105　2006刊行）
⑳	上ノ原	いちき串木野市 大里	2,000	確認Ｈ8.11 全面Ｈ10.7～Ｈ10.9	繁昌・西園・宮田 上之園・栗林	縄文 古墳 古代～中世	集石・土坑，塞ノ神式土器 竪穴住居跡・土坑・貝殻土坑，成川式土器 須恵器・土師器・青磁 （県埋文センター報告書62　2003刊行）

○報告書刊行済



第２図　南九州西回り自動車道関係遺跡位置図

第２節　向栫城跡発掘調査経緯

向栫城跡については，建設省九州建設局鹿児島国道工事事務所（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省地方整備局鹿児島国道事務所）と文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称）の協議に基づき，国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

調査は，平成８年11月20日から12月25日までに確認調査を行い，遺跡の範囲や性格等を把握した。その結果を基に，平成９年度：平成９年４月21日から平成10年３月24日まで（実働日182日），平成10年度：平成10年10月８日から平成11年３月16日まで（実働日90日）発掘調査を実施し，報告書作成を平成18・19年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。調査面積は16,000㎡である。

第３節　調査の組織

平成８年度（確認調査）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉元　正幸
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾﨑　　進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	調査課長補佐	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑　耕一
調査担当者	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑　耕一
	〃	文化財調査員	西園　勝彦
調査事務担当	〃	主査	前屋敷裕徳
	〃	主事	追立ひとみ

平成９年度（本調査）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉元　正幸
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾﨑　　進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	調査課長補佐	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑　耕一
調査担当者	〃	文化財主事	鶴田　靜彦
	〃	文化財主事	勇　　健三
調査事務担当	〃	主査	前屋敷裕徳

調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主　　査	政倉　孝弘
	〃	主　　事	追立ひとみ
調査指導者	鹿児島大学歯学部	教　　授	小片　丘彦
	〃	助　　手	竹中　正巳
	鹿児島短期大学	学　　長	三木　　靖
	国立歴史民俗学博物館	助　　手	千田　嘉博

平成10年度（本調査）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	吉永　和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾﨑　　進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	調査課長補佐	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑　耕一
調査担当者	〃	文化財研究員	八木澤一郎
	〃	文化財研究員	横手浩二郎
調査事務担当	〃	主　　査	政倉　孝弘
	〃	主　　事	溜池　佳子
調査指導者	鹿児島県考古学会	会　　長	河口　貞徳
	鹿児島短期大学	学　　長	三木　　靖

平成18年度（整理作業）

事業主体者	国土交通省鹿児島国道事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	上今　常雄 （～H18.7）
	〃		宮原　景信 （H18.8～）
調査企画者	〃	次長兼総務課長	有川　昭人
	〃	次　　長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
整理担当者	〃	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
調査事務担当	〃	総　務　係　長	寄井田正秀
	〃	主　　査	蒲池　俊一

平成19年度（整理作業）

事業主体者	国土交通省鹿児島国道事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原　景信
調査企画者	〃	次長兼総務課長	平山　　章
	〃	次長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
整理担当者	〃	文化財研究員	鶴田　靜彦
	〃	文化財研究員	木之下悦朗
調査事務担当	〃	総務係長	寄井田正秀
	〃	主査	蒲池　俊一

報告書作成検討委員会　平成19年12月　宮原所長ほか12名
報告書作成指導委員会　平成19年12月　新東次長ほか３名
企画担当者　八木澤一郎，関　明恵

第４節　調査の経過（日誌抄）

１　発掘調査

発掘調査は，平成９年度（平成９年４月21日～平成10年３月24日），平成10年度（平成10年10月８日～平成11年３月16日）に行った。経過は日誌抄により月毎に略述する。

＜平成９年度・発掘調査＞

４月

確認トレンチの清掃。８・９・10トレンチ設定後，掘り下げ。

５月

グリッド設定

Ｃ・Ｄ・Ｅ-12～14区，Ｇ・Ｈ・Ｉ-９・10区，表土排除後，Ⅲa層掘り下げ，遺構検出。

竪穴住居跡１～３号，検出。溝状遺構１条，検出。

６月

Ｃ・Ｄ-12～14区，Ｇ～Ｋ-７～11区，遺構検出。

竪穴住居跡１～３号，検出。Ｆ-10区，土器集中箇所。

７月

Ｅ～Ｈ-11～13区，遺構検出。竪穴住居跡１号，検出。

土坑（古墳時代）１・２号，掘り下げ，実測。

土坑墓，人骨検出（Ｆ-11区）。小片丘彦氏(鹿児島大学歯学部教授)，竹中正巳氏(同大学歯学部助手)人骨の取り上げ（男性１体）指導のため来跡。

G－９・10区，円形周溝遺構，検出。集石１・２号掘り下げ，実測。

８月

Ｆ～Ｊ-10～16区，遺構検出。竪穴住居跡３～６号，検出。

土坑４～６号掘り下げ，実測。

９月

Ｆ～Ｊ－９～15区，遺構検出。

竪穴住居跡３～６号，検出。土坑４・５号，掘り下げ，実測。

河口貞徳氏（10日），上村俊雄氏（11日），東市来町社会教育課長（12日）来跡。

10月

Ｆ・Ｇ－７～10区，Ⅶ層（旧石器時代），掘り下げ。

竪穴住居跡１・７・８号，検出。炉跡１～６号，検出。

栗島義明氏（埼玉県教育委員会・９日），山本信夫氏・松川博一氏（太宰府市教育委員会・17日），上村俊雄氏・本田道輝氏（鹿児島大学・23日），中山光夫氏・上田耕氏（知覧町教育委員会・31日）来跡。

11月

Ｆ・Ｇ－７～10区，Ⅶ層（旧石器時代），掘り下げ。

Ｈ～Ｉ-24～30区，遺構検出。竪穴住居跡９号，検出。

土坑８号，掘り下げ，実測。

橘昌信氏（別府大学・21日），山崎純男氏（福岡市教育委員会・21日）来跡。

12月

Ｆ～Ｈ－８～11区，Ⅶ層（旧石器時代），掘り下げ。礫群２基，検出。配石炉，検出。

福田裕二氏(北海道南茅部町教育委員会・18日)，高橋理氏(千歳市埋文センター・18日)来跡。

平成10年１月

Ｆ・Ｇ－９～11区，Ⅶ層（旧石器時代），掘り下げ。

Ｈ～Ｋ-26～29区，遺構検出。

礫群・配石炉，検出。竪穴住居跡９～11号・炉跡１～６号，検出。

２月

Ｉ・Ｊ-16～20区，遺構検出。Ｇ・Ｈ-16～21区，遺構検出。掘立柱建物跡，検出。

土坑内より「天聖元寶」,「景徳元寶」出土。

小林達雄氏（國學院大學・23日），三木　靖氏（鹿児島短期大学学長・24日）現地指導。

千田嘉博氏（国立歴史民俗博物館助手・25～26日），現地指導。

３月

Ｈ・Ｉ-16～22区，Ｈ-28・29区，遺構検出。竪穴状遺構１～３号，検出，実測。

３・５号墓の人骨取り上げ(男性１体)，小片丘彦氏（鹿児島大学歯学部教授），竹中正巳氏(同大学歯学部助手)の立ち会い・指導(６日)で来跡。

河口貞徳氏（鹿児島県考古学会会長），現地指導（10日）。

24日，平成９年度調査終了。

＜平成10年度・発掘調査＞

10月

８日，平成10年度調査開始。Ⅰ-18・19区

下層確認トレンチ設定後掘り下げ。

Ｈ・Ⅰ-18区　掘立柱建物跡柱穴半截。

柴田博子氏（宮崎産業経営大学・16日）来跡。

11月

Ｈ～Ｊ-24～26区Ⅲa～Ⅴ層掘り下げ。Ｈ-24・25区検出集石実測。

曲輪１・曲輪２間空堀清掃。Ｈ・Ⅰ-27～29区Ⅶ層下部掘り下げ。

Ⅰ-30・31区帯曲輪トレンチ設定後掘り下げ。

Ⅰ-20・21区炉跡掘り下げ。

時枝克安氏（島根大学・30日）による炉跡の「熱残留地磁気」測定。

12月

Ｇ～Ⅰ-30・31区帯曲輪トレンチ掘り下げ。

Ｌ・Ｍ-27・28区空堀掘り下げ。

Ⅰ-20区，Ｇ・Ｈ-22区炉跡の検出，実測。

Ｇ-19区，Ｋ・Ｌ-30区Ⅲa層掘り下げ。

藤本強氏（新潟大学・21日）来跡。

平成11年１月

Ｈ-18区，Ｆ～Ｈ-32・33区，Ｊ・Ｋ-29・30区Ⅲa層掘り下げ。

炉跡13・17～19号検出，実測。大型円形土坑検出。

帯曲輪，空堀１・２土層断面図実測。

三木　靖氏（鹿児島短期大学学長）現地指導（19日）。

２月

Ｆ～Ｈ-20～29区Ⅲa層掘り下げ。炉跡２・４～７・９号検出，実測。

小畑弘巳氏（熊本大学・26日）来跡。

３月

Ｆ～Ｈ-22～24区Ⅲa層掘り下げ。

炉跡13～16・18号検出，実測。

検出ピット配置図及びコンタ図作成。16日調査終了。

２　整理作業の経過

整理作業は，平成18・19年度にかけて，霧島市国分上野原縄文の森に所在する鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。大まかな整理作業および報告書作成作業の経過は下記の通りである。

＜平成18年度・整理作業＞

４月

発掘担当者との引継ぎ。
出土状況図，コンタ図，遺構図，遺構配置図等の整理，遺構配置図の作成。
５月
遺物の水洗及び注記，各時代別遺物選別作業。遺物接合作業。
６月
時代別遺構配置図の作成。時代別（中世，古代）陶磁器の分類（陶器，磁器）。
７月
古代・中世の土師器の実測。草創期の遺物のバインダー処理。
８月
古代・中世の土師器の実測。
縄文時代の土器の接合開始（特に草創期の土器を中心とする）。
９月
古代・中世の土師器の実測，縄文時代の土器の接合。
10月
古代・中世の土師器の実測。縄文時代の土器の接合磨石，石皿等の実測。
11月
縄文時代の土器の実測。古代・中世の土師器の実測。
磨石，石皿等の実測。
12月
各遺構図のトレース準備（鉛筆トレース等の下図の作成及びレベル等の確認）。
縄文時代の土器の実測。古代・中世の土師器の実測，磨石，石皿等の実測。
Ｃ-14等の科学測定委託準備
１月
各遺構図のトレース準備（鉛筆トレース等の下図の作成及びレベル等の確認）。
縄文時代の土器の実測。
古代・中世の土師器の実測，磨石，石皿等の実測。
２月
各遺構図のトレース準備（鉛筆トレース等の下図の作成及びレベル等の確認）。
縄文時代の土器の実測，磨石，石皿等の実測。古代・中世の土師器の実測。
３月
陶磁器の実測委託準備。
縄文時代の土器の実測。古代・中世の土師器の実測。
古代・中世の土師器の実測。
次年度担当者への引継書の作成。

＜平成19年度・報告書作成作業＞
４月

前年度の整理作業担当者との引継ぎ。陶磁器の実測委託。
各時代のトレース。遺構図のトレース。

５月

各時代のトレース。遺構図のトレース。縄張図の作成。
遺物出土状況のデーター入力。

６月

各時代のトレース。遺構図のトレース。遺物出土状況のデーター入力。
実測委託の見直し。現場写真仮レイアウト。

７月

各時代の遺物トレース。遺構図のトレース。
遺物出土状況のデーター入力。
各時代の遺物・遺構の観察表の作成。現場写真レイアウト。

８月

各時代の遺物・遺構の観察表の作成。遺物出土状況のデーターの分析。
各時代の遺物トレース。遺構図のトレース。

９月

各時代の遺構レイアウト。遺物出土状況のデーターの分析。
遺構の観察表の作成，遺物復元。

10月

各時代の遺構・遺物レイアウト。遺物出土状況のデーターの分析。
遺構の観察表の作成，遺物復元。

11月

各時代の遺構・遺物レイアウト。原稿執筆。遺物復元。

12月

原稿執筆。遺物写真撮影。

１月

原稿及び図面の編集作業。入札。

２月，３月

遺物・写真の整理及び収納作業。

調査協力者（下記の方々に発掘調査及び報告書作成において指導・助言，協力をいただいた。敬称略，順不同）

森村健一（堺市教育委員会），峰　和治(鹿児島大学歯学部助手)，上村俊雄,本田道輝(鹿児島大学法文学部助教授),上園博文(旧東市来町)，時枝克安(島根大学総合理工学部),小林達雄，小畑弘巳，新東晃一，立神次郎，池畑耕一，中村耕治，宮田栄二，中村和美，関　明恵，黒川忠広，岩屋高広，内山伸明，上床　真，日髙正人，日髙勝博，内村光伸，羽嶋敦洋，桑畑武士，松元佑輔，園田ひとみ，韓盛旭，羅善華

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置及び自然環境

向椎城跡は，日置市東市来町大字伊崎田字上椎・中椎・下椎に所在する。

日置市東市来町は，平成の大合併で，平成17年５月１日，伊集院町・日吉町・吹上町と合併し，51,955人の日置市となった。

旧東市来町は，薩摩半島の北西部に位置し，東は旧伊集院町，南は旧日吉町，北はいちき串木野市に接し，西は東シナ海に面している。鹿児島市から西方約28kmに位置し，東西16km，南北約９kmの細長い地域で面積は70.97ｋ㎡，人口13,623人（平成12年10月１日国勢調査人口）である。1889年（明治22）市来郷の湯田・伊作田・神之川・長里・養母の５か村を合わせて東市来村として発足，1937年（昭和12）４月，町制を施行，1956年（昭和31）９月，旧下伊集院村の南神之川・苗代川（美山）・宮田・牧之角を合併し，平成17年５月に周辺の伊集院町・日吉町・吹上町と合併し日置市となり現在に至る。

向椎城跡のある旧東市来町の地形は，北部の重平山・中岳・大峰ヶ原など数百ｍの旧火山灰の山地と，南西部の中生層の低い山地を除けば，これらの山地の間を埋めた50～180m内外の火山灰（シラス）台地である。大里川・江口川は町の中央部を貫流し，南端の町境及び南端部を流れる神之川とともに東シナ海に注いでいる。また，それらの河川によってつくられた小さな盆地状の谷底平野がいくつも並び，そこに大里・養母・湯之元などの集落が発達している。水田は主としてこの三河川流域に沿って開け，畑地はその丘陵に分布しているが，大半はシラス台地である。シラス台地は，錦江湾奥部にある姶良カルデラから噴出した火砕流が堆積した台地で，シラスは約25,000年前の火山噴出物で「入戸火砕流堆積物」と呼ばれている。

江口浦の海岸には，海岸砂丘の発達がみられず，シラスの海食崖には，卓越風による風食地形が発達し，「江口蓬莱」の名がある。

薩摩半島の東シナ海側の，ほぼ全域といっていいほどに白砂青松の砂浜が続く浜は，吹上浜と呼ばれ，日本三大砂丘の一つである。南北47㎞にわたる海岸線は，いちき串木野市から南さつま市にかけて３市にわたり，距離的には日本最長の砂丘である。冬は北西の風が強く，海岸の砂は内陸部に吹き溜まり，最大幅２㎞，最高所47m（南さつま市金峰町竹原）の吹上浜砂丘ができた。

遺跡は，日置市東市来町の南西部，伊作田地区の北西方に位置する。上伊作田集落の東後方の丘陵上にあり，標高約66ｍの独立丘陵のシラス台地上にあり，ＪＲ東市来駅の西側にあたる。

第２節　歴史的環境

旧東市来町では昭和62年養母の上二月田遺跡で縄文時代前期・後期の調査がなされ，仮牧段遺跡・桜町遺跡などわずかな遺跡が知られていたのみで，昭和59年度発行の遺跡地名表では寺院・城跡・窯跡を含んでも15か所が紹介されているのみであったが，平成３年から始まった北薩伊佐地区埋蔵文化財分布調査や南九州西回り自動車道建設に伴う調査が行なわれたこと等により，遺跡数が一気に増加し，現在では92か所の遺跡が周知されている。そこで，周辺遺跡と併せて主な遺跡を時代順に若干紹介したい。

旧石器時代

旧東市来町では，南九州西回り自動車道建設が始まるまでは，旧石器時代の遺跡は伊作田の老ノ原遺跡で細石刃核・細石刃が出土したことが知られているのみであったが，今では旧松元町・旧伊集院町と並んで県内でも有数の遺跡群となっている。

今里遺跡は伊作田の標高約63mの台地端の傾斜地に所在し，ナイフ形石器文化期の剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパーと細石刃文化期の細石刃核・細石刃が出土している。特に細石刃は比較的小規模な発掘にも限らず101点と多く出土し，また分類・編年等もでき，今後の旧石器文化研究に重要な遺跡となっている。猿引遺跡は長里の標高約110～115mの尾根上の台地に所在し，旧石器時代の遺跡は迫状窪みに集中して出土した。ナイフ形石器文化の礫部１基と三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃がみつかった。池之頭遺跡は美山の標高約80m～100mのシラス台地の尾根状部分に所在し，ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃が出土した。向椎城跡は伊作田の標高約50mの独立台地上に所在し，剥片尖頭器・ナイフ形石器が出土した。堂園平遺跡は伊作田の遠見番山から下る斜面の裾野にあり，標高約50mの平坦地に所在する。ナイフ形石器文化の礫群９基と剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃が出土した。また，湯田の市ノ原遺跡でも多くの旧石器時代の遺物が出土している。

縄文時代

上二月田遺跡は養母に所在し，縄文時代後期の住居跡２基・土坑２・炉跡などが検出した遺跡で，遺物には平椎式・寒ノ神式・深浦式・西平式・黒川式・夜臼式土器等が出土している。今里遺跡では早期の集石３基と早期～晩期の岩本式・前平式・押型式・深浦式・春日式・出水式・上加世田式・黒川式土器と共に，多くの石器（石鏃・石匙・磨石等）が出土している。特に独鈷状石器は注目される。池之頭遺跡では早期の集石８基と，前平式・吉田式・石坂式土器の他，春日式・並木式・阿高式・入佐式・黒川式土器が出土している。隣接する雪山遺跡では前平式土器の円筒土器と角筒土器の完形品が出土している。向椎城跡では，草創期の配石遺構・集石が多量の隆帯文土器や石鏃・敲石・石斧・石皿と共伴して出土している。前期～晩期でも轟式・阿高式・市来式・黒川式土器が出土している。市ノ原遺跡は湯田の標高約50mの台地西側に所在し，調査面積は62,000㎡と広範囲の遺跡で早期～晩期まで多種多様な遺構・遺物が発見された。特殊な遺物として竹崎式土器や耳飾り・三角壽形の土・石製品等，交易品と考えられるものも出土している。

弥生～古墳時代

調査対象地域は台地が多いせいか，弥生時代の遺跡は少ないが，上二月田遺跡で高橋式土器が出土し，市ノ原遺跡では竪穴住居や壷棺に，高橋式・北麓式・黒髪式・山ノ口式土器と石鏃・石錐・石斧等が，共伴して出土している。

古墳時代の遺跡は多く発見されている。住居跡が検出された遺跡では向椎城跡11基，市ノ原遺跡で7基がある。遺物では成川式土器の甕・壷・高坏・手捏土器と磨石・磨製石鏃等が出土してい

る。老ノ原遺跡では成川式土器と須恵器が共伴して出土した。

古代

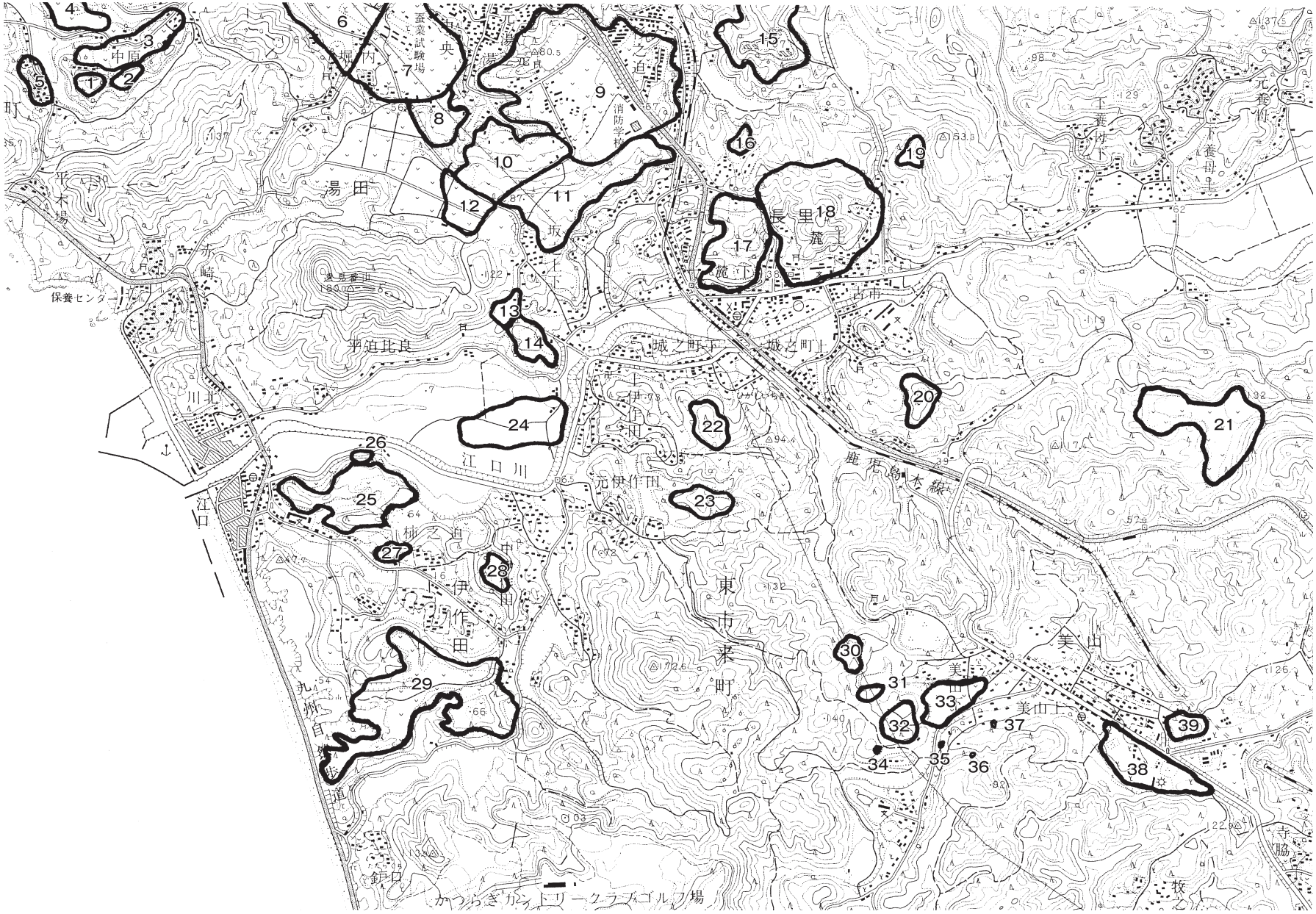
旧東市来町は古代においては旧市来町と薩摩国日置郡に属していたと考えられている。市来院は宝亀年間以降，郡司の大蔵氏一族が支配していた。向椎城跡では円形周溝遺構・土坑に土師器・墨書土器・須恵器・古銭と共伴して出土している。市ノ原遺跡では第１地点で掘立柱建物跡15棟・土坑が検出され，墨書土器も100点以上出土し，「春」「奉」「松」「厨」などの文字が判読されている。隣接する旧市来町では安茶ヶ原遺跡から「日置厨」の墨書土器が出土している。

中世～近世

旧東市来町は中世山城が多く，中心となる鶴丸城は古代から，大蔵氏が居を構えて市来氏と称していた。中世，椎宗姓を称した市来氏は島津軍に攻められ滅亡するが，1550年，フランシスコ・ザビエルが鶴丸城に立ち寄り，布教活動をしたとの記録も残されている。また，11年後に鶴丸城をたずねた宣教師のイルマン・ルイス・デ・アルメイダは「私たちは城に到着しましたが，これは世界で最も堅固なものの一つです。それは十の要塞に分かれている山にあるからです。そのひとつひとつが互いに離れ，つるはしで削り取ったように険しく，人間の手で作ることは不可能であると思われるほど，深い堀で囲まれています。一つの要塞から他の要塞へ行くためには跳ね橋を渡るのですが，渡るときに下を見ると，はなはだしく高いので地獄を見ているようです。全要塞の中心に本丸があって，そこに城主が住んでいますが，これは鹿児島の大名の家来です。」（注１）と詳細な記録を残している。

向椎城跡では，空堀，帯曲輪，曲輪，堀切，通路状遺構，大型円形土坑，竪穴建物跡，掘立柱建物跡，炉跡などの遺構が検出された。また市ノ原遺跡では出水筋（薩摩街道）の道跡が検出されているが，向椎城跡でも，周辺に出水筋(薩摩街道)が通っていたことが，現地の聞き取り調査や『歴史の道調査報告書　第１集　出水筋』（注２）でも判明している。

（注１）結城了悟『鹿児島のキリシタン』春苑堂書店　1975
（注２）鹿児島県教育委員会『歴史の道調査報告書　第１集　出水筋』 1993



第３図　向椎城跡の位置及び周辺遺跡

第３表　周辺遺跡（１）

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
1	下諏訪	28-11	いちき串木野市大里	縄文	土器片・打製石斧	1
2	中諏訪	28-12	いちき串木野市大里	古墳	土師器・須恵器	1
3	西ノ鼻	28-39	いちき串木野市大里	古墳・中世	土師器・陶器	2
4	半崎堀	28-40	いちき串木野市大里	弥生～中世	弥生土器・土師器・陶器	2
5	上平山	28-41	いちき串木野市大里	弥生・古墳	土器	2
6	市ノ原 ３地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世	細石刃核，集石・岩本式・塞ノ神式等 竪穴住居跡・土坑・高橋式・成川式等 掘建柱建物跡・鍛冶炉・陶磁器等	2
7	市ノ原 ４地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世 近世	竪穴住居跡・集石，前平式・押型文等 竪穴住居跡・土坑，高橋式・成川式等 竪穴住居跡・溝，須恵器・土師器等 街道跡，鍛冶炉，陶磁器等	2
8	市ノ原 ５地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世	礫群，落し穴，ナイフ・前平式等 弥生土器，成川式 道跡・掘立柱建物跡，土師器等	3
9	諏訪原	29-61	日置市東市来町湯田	古墳・中世	土師器・陶器・染付	2
10	森薗平	29-62	日置市東市来町長里	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器	2
11	浦田	29-73	日置市東市来町長里	古墳・中世	土師器	2
12	今里	29-67	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳	礫群・尖頭器・ナイフ・細石刃核 集石・前平式・深浦式・出水式・石匙 成川式土器	4
13	堂園平	29-90	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古代	礫群・ナイフ・尖頭器・細石刃核 集石・吉田式・塞ノ神式・轟式等 土坑・土師器・須恵器	5
14	向椎城	29-17	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	配石遺構，剥片尖頭器・ナイフ・剥片 隆帯文・石鏃・前平式・市来式 竪穴住居跡・成川式 空堀・曲輪・竪穴状遺構・炉跡・青磁	本報告書
15	古城跡	29-13	日置市東市来町長里	南北朝	石塁	6
16	番屋城跡	29-10	日置市東市来町長里	南北朝～室町	消滅	6
17	平之城跡	29-11	日置市東市来町長里	南北朝～室町	空堀・古墓塔	6
18	鶴丸城跡	29-５	日置市東市来町長里	南北朝～室町	空堀・土塁・礎石	6
19	得仏城跡	29-15	日置市東市来町長里	中世	鶴丸城の出城	6
20	総陣ヶ尾	29-14	日置市東市来町長里	中世	五輪塔	6
21	馬場ヶ原	29-64	日置市東市来町長里	弥生・古墳 中世～近世	弥生土器・成川式 土師器・陶器	2
22	犬ヶ原	29-65	日置市東市来町伊作田	旧石器・縄文 古代～中世	細石刃核・細石刃・黒川式・石鏃 掘立柱建物跡・鍛冶炉・土師器・硫黄	7
23	金木山	29-66	日置市東市来町伊作田	古墳・近世	土器・陶器	2
24	西原持原	29-76	日置市東市来町伊作田	古墳・中世		2
25	伊作田城	29-12	日置市東市来町伊作田	南北朝	伊作田道材居城	8

第４表　周辺遺跡（２）

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
26	古城	29-12	日置市東市来町伊作田	古墳 古代	土坑，成川式（甕・壺・高坏・鉢） 畝状遺構，土師器・須恵器・黒色土器	9 10
27	前畑	29-１	日置市東市来町伊作田	縄文・古墳 古代～中世	土坑，黒川式・石鏃・石匙・石斧 竪穴住居跡・掘立柱建物跡，成川式等	8
28	椿城	29-22	日置市東市来町伊作田	中世		6
29	老ノ原	29-76	日置市東市来町伊作田	旧石器・縄文 古墳	細石刃核，前平式・春日式・黒川式 成川式	11 12
30	猿引	29-90	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文	礫群・ナイフ・台形石器・尖頭器 曽畑式	13
31	雪山	29-91	日置市東市来町伊作田	縄文 近世～近代	集石・前平式 陶器・磁器・瓦・窯道具	13
32	池之頭	29-92	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳	ナイフ・台形石器・細石刃核・細石刃 集石・石皿集積・前平式・春日式 成川式土器	14
33	池之平	29-78	日置市東市来町伊作田	古墳・近世	土器・土師器・陶器	6
34	五本松窯	29-13	日置市東市来町伊作田	江戸	町指定史跡	15
35	堂平窯	29-84	日置市東市来町伊作田	江戸	窯跡	16
36	御定式窯	29-14	日置市東市来町美山	江戸	町指定史跡	15
37	南京皿山窯	29-15	日置市東市来町美山	江戸	町指定史跡	15
38	水溜	29-79	日置市東市来町美山	中世～近世	土師器・陶器・磁器	2
39	大田城塁跡	29-６	日置市東市来町美山	南北朝～室町	五輪塔・青磁・白磁・須恵器・瓦器	15

引用文献

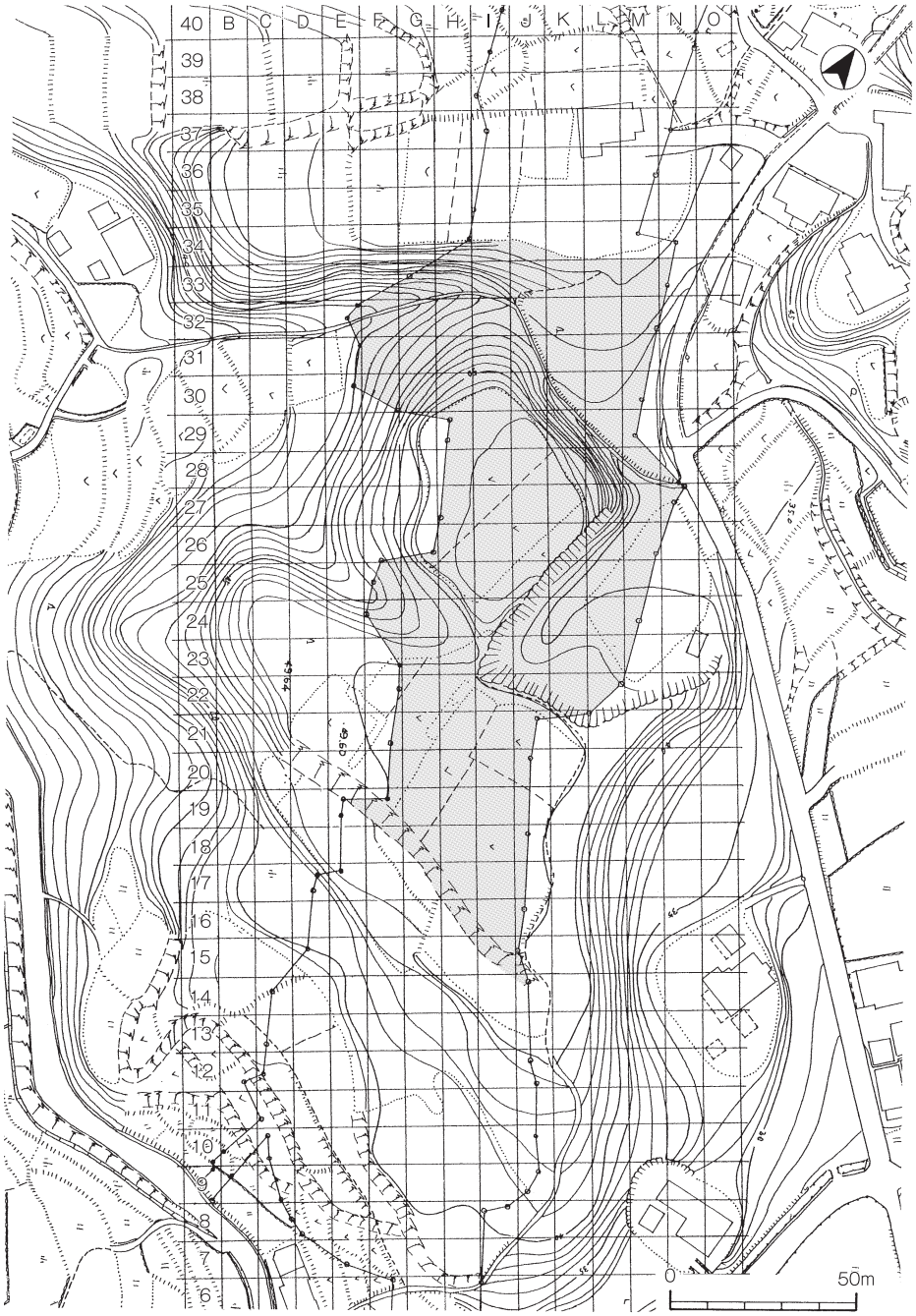
1 『市来町郷土誌』 市来町 1982
2 「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅰ）」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（61） 1992
3 「市ノ原遺跡５地点」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（105） 2006
4 「今里遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（33） 2002
5 「堂園平遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（104） 2006
6 「中世城館」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（40） 1987
7 「犬ヶ原遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（50） 2003
8 「前畑遺跡・伊作田城跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（６） 1995
9 「古城遺跡Ⅰ」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（７） 1996
10 「古城遺跡Ⅱ」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（10） 2004
11 「老ノ原遺跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（８） 1996
12 「老ノ原遺跡２」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（９） 1998
13 「猿引遺跡・雪山遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（53） 2003
14 「池之頭遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（32） 2002
15 『東市来町郷土誌』 東市来町教育委員会 1987
16 「堂平窯跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（106） 2006

第Ⅲ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査の方法

向椿城跡の調査は，国土交通省の設計図面のセンターラインをもとに10m×10mのグリッドを設定して，重機で表土を除去して行った。

遺跡の主体が，中世の山城であるため，便宜上，グリッドの６列～15列部分までを曲輪３，15列～23列を曲輪２，24列～29列までを曲輪３とし，それより北側を空堀分部と呼ぶことにした。なお，近隣の人々は曲輪１を本丸と呼んでいたこと，小字が北から上椿，中椿，下椿であることの２点を考慮したものである。



第４図　周辺地形及び発掘範囲

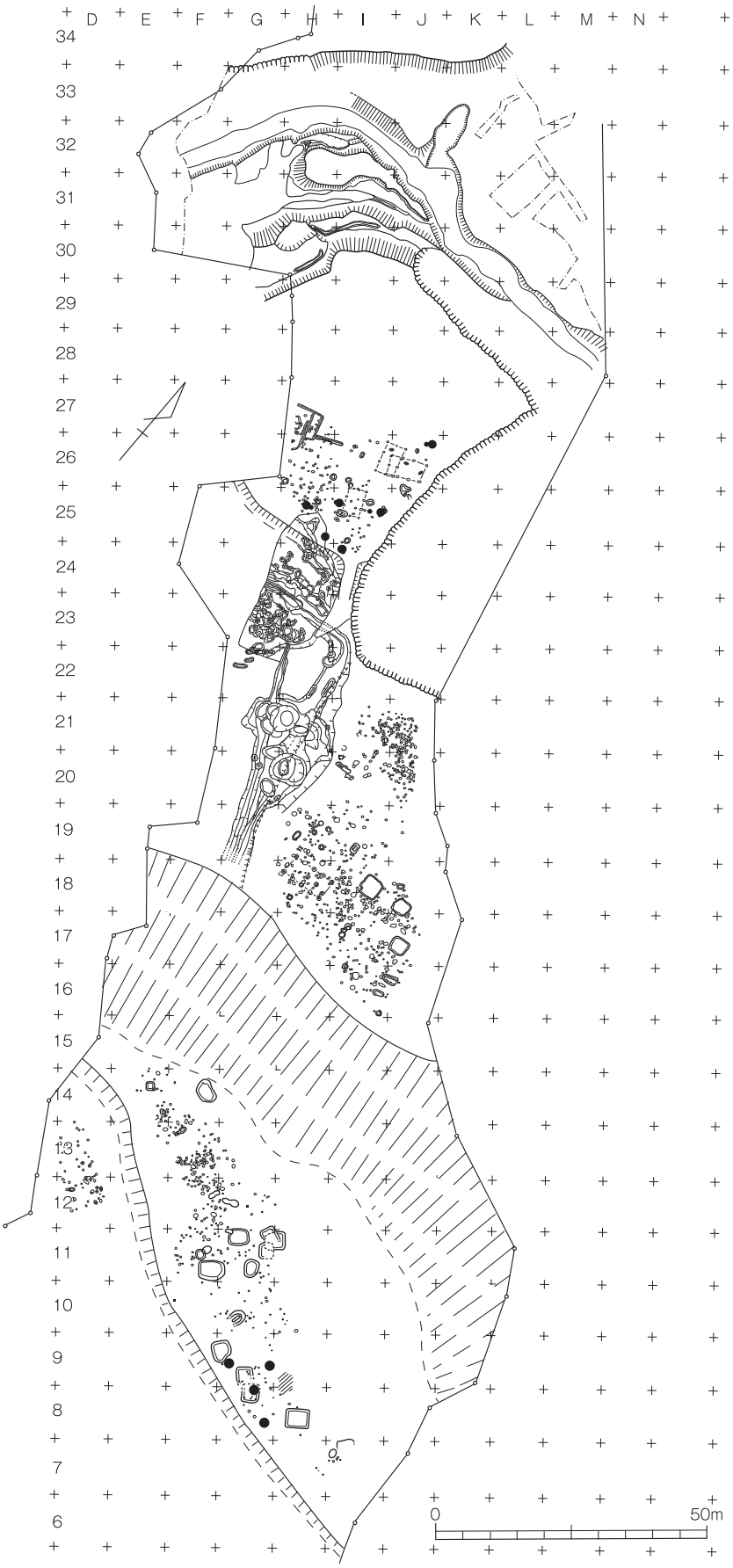
平成９年度は工事着手時期との関係から，遺跡の中では，標高の一番低い畑地部分と曲輪３の部分に年度の前半の力を注いだ。その結果，畑地部分からは，近世の建物跡とその一括資料（17世紀）と思われる遺構・遺物検出された。

また，曲輪３からは,旧石器・縄文・古墳・古代・中世と幅広い時代の遺物遺構が検出された。

平成９年度の後半は，二ノ丸部分（曲輪２）東側と本丸部分（曲輪１）の遺構の調査を行った。

また，雑草，灌木や竹類の繁茂が著しい夏場を避けて，平成10年の当初に北側の空堀部分の伐採を行った。

平成10年度は，２班に分かれて，曲輪２の西側の空堀及び土坑群の調査と空堀部分の調査を同時並行で行った。特に空堀の調査



第５図　向栫城跡全遺構配置図

は，堀底から曲輪１までの比高差が10m以上もあり，崩落の危険性もあった。そこで，廃土により一旦ある程度の高さまで埋め戻しを行い，その廃土と同時に表土を除去しながら，遺構の検出を行った。

第２節　遺跡の地形及び層序

向椎城跡は，10数メートルの深い空堀を隔てた北側には，標高180.0mの遠見番山という急峻な山を背にした，本山城の付属部分とも考えられる堂園平遺跡が存在する。この空堀の南側に曲輪１が存在し，標高約50mと一番高い。また，大規模な造成が行われたためか，広い面積の平坦地を有する。ただし，この曲輪１の東側は，数年前に大規模なシラスの採取により消滅している。

その南側が曲輪２であり，曲輪１よりやや低く，南へ傾斜している。曲輪３は，曲輪２とは，かなりの比高をもって山城としての曲輪を形成している。この曲輪の南端は，標高約30mである。発掘範囲以外の東西部分については，曲輪２及び曲輪３の東側は，なだらかな傾斜であり，台地の縁辺には，土塁状の盛土も存在している。西側は急な斜面であり，空堀から続き，現在も人道として用いられている道へとその傾斜は至っている。

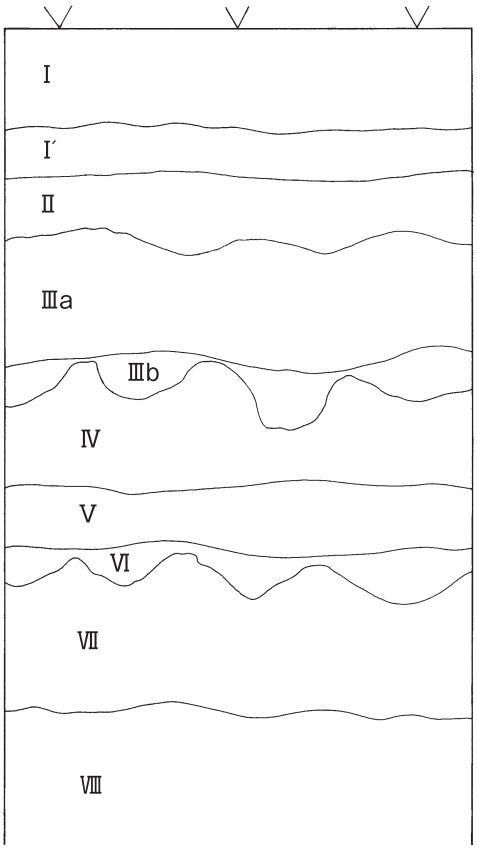
向椎城の層序は発掘対象範囲が，10，000㎡以上に及ぶことや山城という起伏に富んだ地形であることから，場所によってかなりの変化があった。また，古墳時代以降は，各時代毎に当時の生活に適した地形に造成されていたようである。

たとえば，第５図でわかるように，曲輪３の北東側斜面近くの平坦地には全く遺構が存在しない。つまり，近世以降に造成が行われたと言えよう。また、中世の項で詳しく述べるが，曲輪３とは逆に空堀部分では帯曲輪状に盛土を行って，畑地としていた部分もあった。

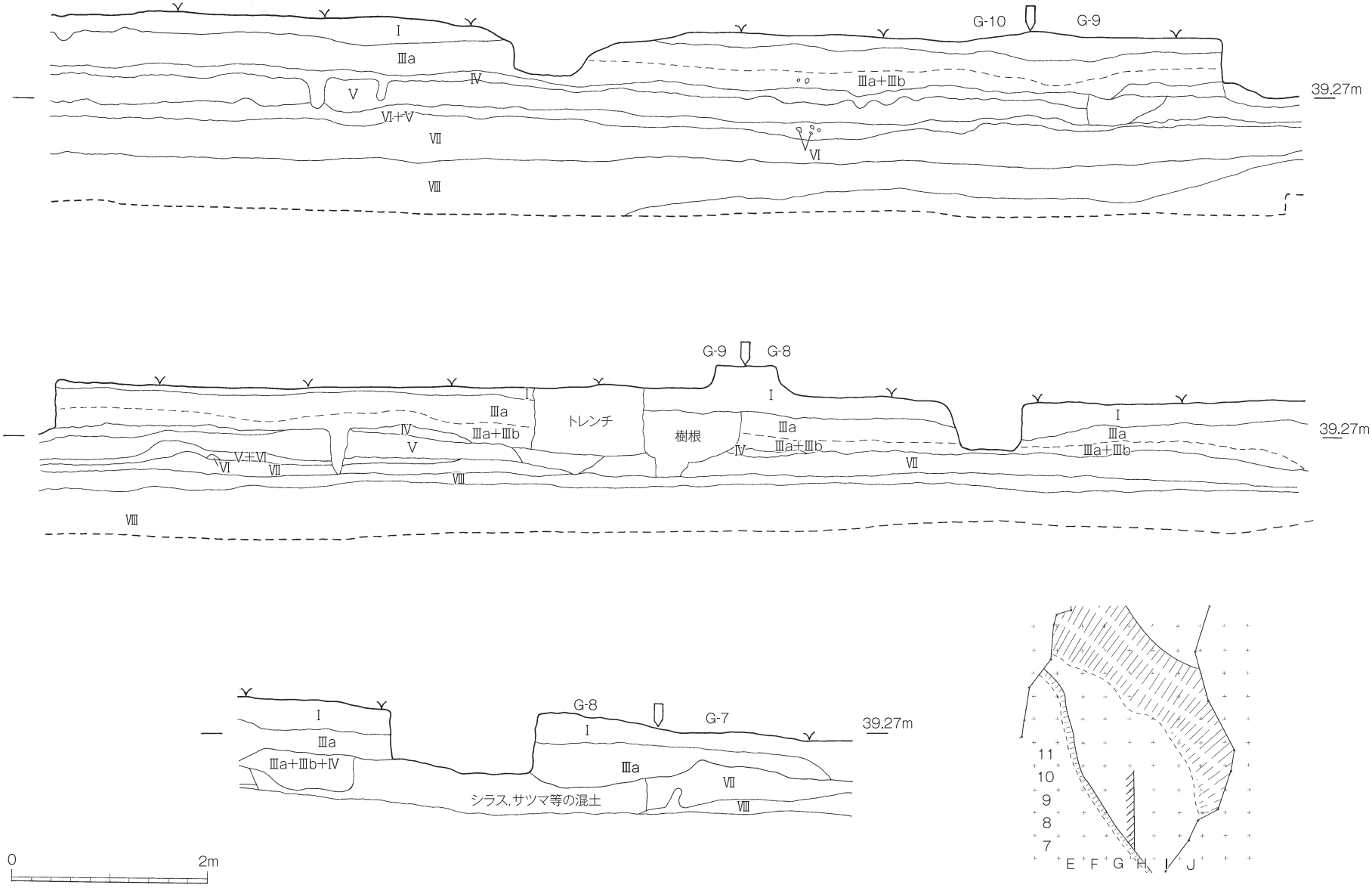
上述のような状況から，遺構は存在するものの遺物包含層の残存度は良好な状態ではなく，表土から出土する遺物が非常に多かった。遺物包含層として，良好な残存状況であったのは，調査区南端の旧石器時代・縄文時代草創期のみと言っても過言ではない。ただし，この部分も台地先端の崖ぎりぎりまで遺構や遺物が検出されることから，以前はまだ南へ延びていた台地であったことが考えられる。

本城の標準的な層序は，以下の通りである。

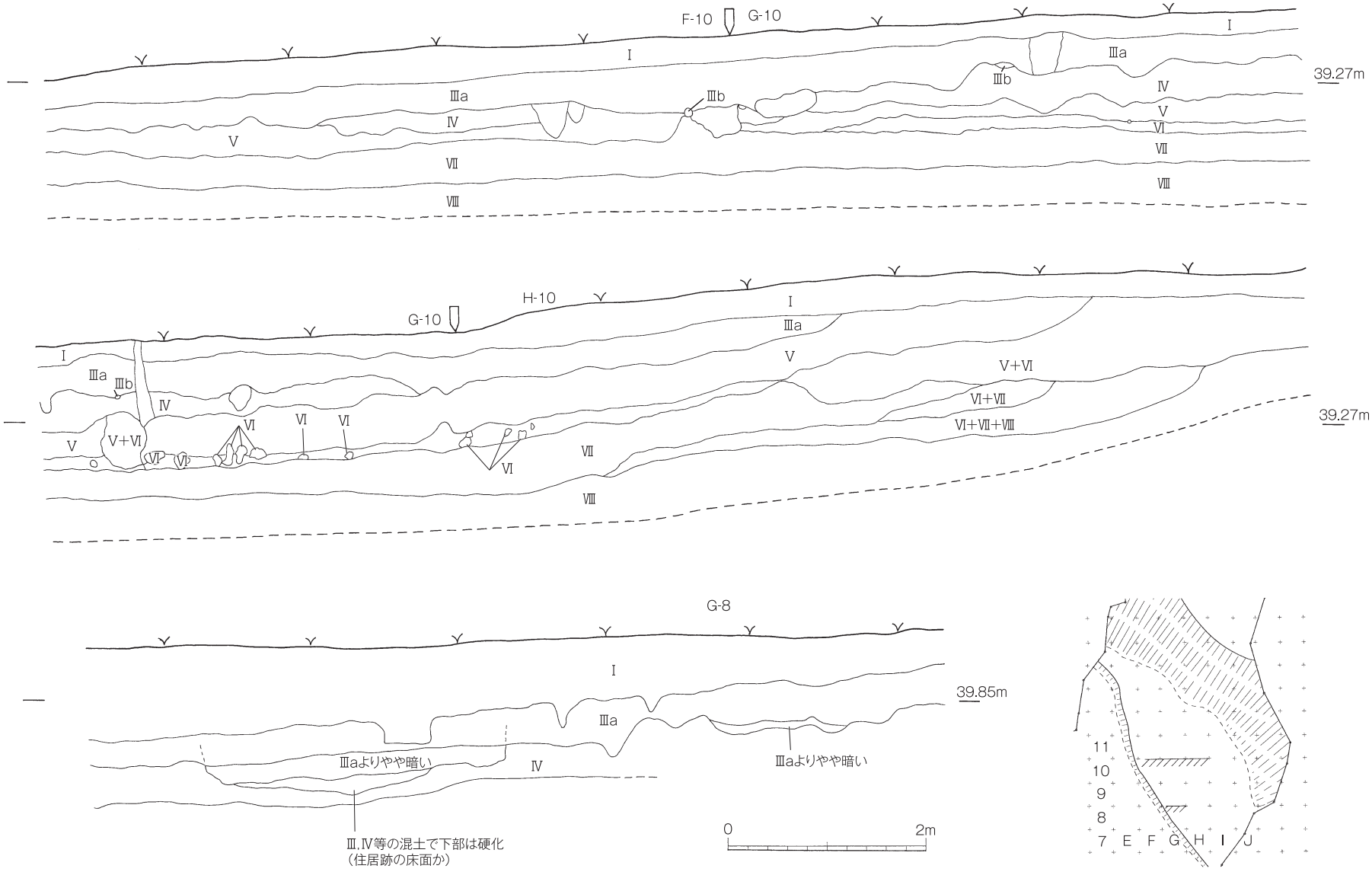
Ⅰ層：現耕作土と旧耕作土に分けられる。
Ⅱ層：主に中世の包含層であるが，残存度はよくない。
Ⅲ層：アカホヤ火山灰で一次・二次堆積に分けられる。
Ⅳ層：乳白色土で縄文時代早期の包含層である。
Ⅴ層：茶褐色度で縄文時代早期の包含層である。
Ⅵ層：薩摩火山灰で，部分的に存在する。
Ⅶ層：暗紫色粘質土で，旧石器時代の包含層である。
Ⅷ層：シラス



第６図　土層柱状断面図



第７図　G-７・８・９東壁断面図



第８図　Ｆ・Ｇ・Ｈ-10，Ｇ-８北壁断面図

第Ⅳ章　旧石器時代の調査

第１節　ナイフ形石器文化

Ⅶ層からは，旧石器～縄文時代草創期の遺物が出土した。台地は古墳時代遺構の集落や，中世山城により削平された部分が多く，Ｆ・Ｇ－８～12区に集中して出土した。遺構は配石遺構・集石等が検出されたが，これらの遺構は縄文時代草創期の項で取り上げる。

主な遺物は，ナイフ形石器文化のナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・尖頭器・三稜尖頭器・スクレイパー・二次加工剥片・楔形石器・石錐・剥片と細石刃文化の細石刃・細石刃核・調整剥片・石鏃・凹石・敲石・磨石等が出土した。

石材は，黒曜石・頁岩・安山岩・チャート・砂岩・凝灰岩等であり，黒曜石は肉眼的観察により県内産の三船・上牛鼻・平木場，県外産の桑ノ木津留・腰岳・針尾などの産地のものがみられた。

第10図は石材別にⅦ層出土状況を示しているが，黒曜石・安山岩は全体的に出土していることを示しているが，この遺跡の特徴である凝灰岩がＧ-10・11区に集中していることが特筆される。出土状況からもブロックの可能性もあったが，一地域に集中していたことからブロック別に取り上げなかった。

旧石器時代の石器に用いられた石材には黒曜石・頁岩・安山岩・チャート・砂岩・凝灰岩等であり，黒曜石は肉眼的観察により下記のとおり分類した。

黒曜石三船……　黒色を呈する黒曜石であり，気泡が多く県内では南大隅町長谷・鹿児島市三船・大口市日東・猩々・五女木などがあるが，本遺跡の黒曜石は，鹿児島市吉野町三船原産の特徴がみられるため三船原産とした。三船の原石は，強く溶結した柱状節理の発達した吉野火砕流の中にレンズ状の黒曜石が含まれている。黒曜石は灰色っぽい黒い線が入ることもある。

黒曜石上牛鼻…　ガラス質が弱く，一見石炭を思わせるものである。風化が著しく進み，淡黒褐色を呈するが内面は真っ黒であり光を通さない。気泡は少なく軽石が若干混じる良質の黒曜石である。褐色のベルトが入ることもある。薩摩川内市樋脇町上牛鼻，いちき串木野市平木場の原石と推定される。

黒曜石腰岳……　ガラス質の黒色を呈するもので，気泡が少なく良質の黒曜石である。佐賀県腰岳の原石と推定される。

黒曜石針尾……　ガラス質が弱く，灰褐色を呈し光を通さない。気泡は少なく良質の黒曜石である。長崎県針尾島周辺の原石と推定される。

ナイフ形石器（第12図・１～７）

１～５は頁岩を石材に用いたナイフ形石器である。１は片側縁にブランティングが施され，基部は片面からのブランティングを施している。２は基部が欠損しているが，片側縁にブランティングを施したものである。３も基部を欠損しているが，片側縁に片面からの丁寧なブランティングで背面を施したものである。４はやや大型の縦長剥片を素材に用いたもので，片側縁にブラン

ティングが施してある。５も大型の縦長剥片を素材に用いたもので，片側縁に片面からのブランティングを施している。刃部には使用痕が認められる。６は砂岩を石材に用いたもので，先端部を欠損しているが，基部は片面からのブランティングを施して成形している。７は上牛鼻原産の黒曜石を石材に用いたもので，ナイフ形石器の基部である。片面からの丁寧なブランティングにより基部を成形している。

台形石器（第13図，８～14）

８は桑ノ木津留原産の黒曜石を石材に用いたもので，不定形剥片を横位に利用し，両側縁は両面からの丁寧なブランティングにより成形されている。９・10は上牛鼻原産の黒曜石を石材に用いている。９は不定形剥片を横位に利用し，両側縁に両面からのブランティングを施したものである。10は縦長剥片を横位に利用し，両側縁は片面からのブランティングと平坦剥離により成形されている。11は珪質凝灰岩を石材に用いたもので，縦長剥片を横位に利用し，片側縁は片面からのブランティングで成形している。12は玉髄を石材に用いたもので，不定形剥片を利用し，両側縁に片面からのブランティングを施し成形している。刃部に使用痕が認められる。13・14は三船原産の黒曜石を用いたものである。両側縁を平坦剥離により成形している。刃部には使用痕が認められる。

剥片尖頭器（第13図，15～18）

15～18は剥片尖頭器である。15～17は頁岩を石材に用いている。15は先細りの縦長剥片を素材としたもので，打面付近にはノッチ状の基部加工が，左側縁部には二次加工が施されている。16は厚みのある縦長剥片を素材に用い，打面付近に粗いノッチ状の基部加工を施し，先端部には腹部からの調整剥離が施されている。製作途中の剥片尖頭器と考えられる。17は縦長剥片を用い，打面付近にノッチ状の基部加工を施したものであるが，摩耗が激しく使用痕が認められない。左側縁部には節理面が残る。18は粘板岩を素材に用いた剥片尖頭器である。これも摩耗が激しく使用痕等は認められないが，やはり打面付近にノッチ状の基部調整が施されている。

尖頭器（第13図，19）

19は瑪瑙の縦長剥片を素材に用いた尖頭器で，両側縁を腹面側からの急角度でブランティングを施し，打面付近に基部調整を施しているものである。これは，大口市小原野遺跡で出土し，宮田栄二氏が「小原野型尖頭器」と名称したものである。

三稜尖頭器（第13図，20・21）

20・21は黒曜石を素材に用いた三稜尖頭器である。20は先端部のみであるが，一面に剥離痕をもち，二面に調整剥離のあるもので断面は三角形を呈している。21は上牛鼻産の横長剥片を石材に用い，先端部が欠損し基部のみであるが，やはり一面に剥離痕をもち，二面に調整剥離のあるものである。断面は台形を呈す。

スクレイパー（第14～17図，22～63）

22～26は上牛鼻産の黒曜石を石材に用いたスクレイパーである。片側辺に調整剥離を施し，刃部としている。27は良質な腰岳産の黒曜石を用いたもので，腹面からの剥離によって刃部を形成している。29～47は三船産の黒曜石を用いたもので，やはり一側面に片面からの調整剥離を加えているものである。30は先端部の両側辺に片面からの調整剥離を施したスクレイパーである。形

態的に石錐の可能性もあったが，使用痕等からスクレイパーで取り上げた。48は凝灰岩，49はチャートを石材に用いたもので，側辺部に二次加工を施したものである。50は瑪瑙の大型剥片を石材に用いたもので下縁部に調整剥離を施し，刃部を形成している。51・52は鉄石英・硬質頁岩を用いたもので片側辺に調整剥離を施している。53・54は頁岩の縦長剥片を使用し，側辺部に調整剥離が施されている。55～62は安山岩を石材に用いたもので，一側辺部に調整剥離が施されたものである。

二次加工剥片（第17・18図，64～81）

64～81は一部破損しているが，調整剥離等の二次加工がみられるものである。72・74は調整剥片の可能性もある。76は楔形石器の可能性もあったが潰れ等が顕著でないので二次加工剥片で取り上げた。

楔形石器（第19・20図，82～99）

82・83は上牛鼻産の黒曜石を用いた楔形石器である。横長剥片を用い上・下端に調整剥離を加え，その上に使用による潰れがみられる。83はやや厚みにある剥片を用いたもので，上・下端部に使用による潰れがみられる。84は三船産の黒曜石を用いたもので，やはり横長剥片を用いたものである。上・下端部に潰れがみられる。85～99は本遺跡の特徴である安山岩を石材に用いたものである。やや厚みにある剥片を用い，楔状に成形し２～３辺に潰し痕のみられるものである。85・86は剥片を利用し，二側面に潰しがみられる。87はやや大型の縦長剥片を用い，両側辺からの剥離によって楔状に成形したもので，上下部に潰し痕がみられる。90は厚みのある剥片を用い，上下端からの加撃により縦断面を楔形に成形している。上端部には使用によると思われる潰し痕が顕著にみられ，下端は欠損しているが一部に潰し痕が残っている。97・98は幅の狭い厚みのある剥片を用いたもので，一側辺に潰し痕がみられるものである。

石錐（第21図，100～102）

100～102は安山岩を石材に用いた石錐である。100はやや厚みにある縦長剥片を用い，両側辺部に交互剥離による粗いタッチを加えて，先端部を鋭利にし，錐部を形成している。先端部は欠損している。101も同様の石材を用い，片側辺は片面からの調整剥離を施し，片面には両面からの調整剥片を施し錐部を形成している。先端部には使用による磨り痕が若干みられ，断面は台形を呈している。100・101とも頭部と錐部の境が明瞭でない。102は幅広の安山岩剥片を用いた石錐である。頭部と錐部が明瞭なもので，頭部は背面からの剥離により円形状を呈している。錐部は両面からの交互剥離により丁寧に作り出されている。錐部は長さ1.2cmを測り，断面は球状を呈す。

剥片（第21図，103～110）

103・104は砂岩・頁岩の縦長剥片であり，この剥片は頭部調整が顕著に施されており，打面は平坦な自然面である。103は両側辺部に使用痕がみられ，104は背面側に二次加工を施している。スクレイパーの可能性もあったが，加工痕と破損部が重なったため剥片で取り上げた。

105～110は黒曜石のやや厚みにある剥片を用いた使用痕のある剥片である。

第２節　細石刃文化

第22図は細石刃と細石刃核の石材別出土状況である。凝灰岩の細石刃核がＧ-10区に集中し，また細石刃も周辺に散布していることから，このＧ-10区周辺で細石刃を剥出したものと考えられる。この第22図でわかるように細石刃は集中する傾向にあり，槍先等に装着したものがそのまま残った可能性もある土器同様の出土状況を示していることから，草創期土器の使用範囲と重複している。

石鏃と土器の共伴関係であるが，土器は傾斜部に集中し，石鏃はやや山手の方で出土する傾向にある。

細石刃（第23・24図，111～244）

細石刃は約150点出土し，そのうち134点を実測した。分類は頭部・中間部・尾部に分類し，それぞれ特徴のあるものを示した。

111～119は頭部から尾部まであり，半裁されていないものである。石材は腰岳・針尾・上牛鼻・三船産の黒曜石と安山岩である。３㎝を超える長いものもある。

120～134は打点をもつ頭部のみのものである。調整のため半裁し破棄したものと思われる。石材は黒曜石（腰岳・針尾・桑ノ木津留・上牛鼻），凝灰岩，頁岩，安山岩と豊富である。

135～180は本遺跡で一番多く出土したもので，打点をもつ中間部の細石刃である。石材も良質の黒曜石（腰岳・針尾・上牛鼻）を用いているものが多く，三船産，凝灰岩もみられた。168は瑪瑙を石材に用いているものである。

181～228は打点のある頭部と尾部を半裁した中間部である。やはり良質な黒曜石（腰岳・針尾・桑ノ木津留・上牛鼻産）を多用し，凝灰岩も用いている。中には長さ２㎝を超えるものもある。

229～239は，打点のある頭部を半裁したものである。黒曜石・凝灰岩を用いている。

240～244は尾部のみで，石材は黒曜石である。

調整剥片（第25図，245～251）

245・246は針尾産の黒曜石を用いた打面再生調整剥片である。247も同様の調整剥片で細石刃剥出部がみられる。248・249は凝灰岩を用いた調整剥片である。250・251も安山岩を石材に用いた調整剥片である。

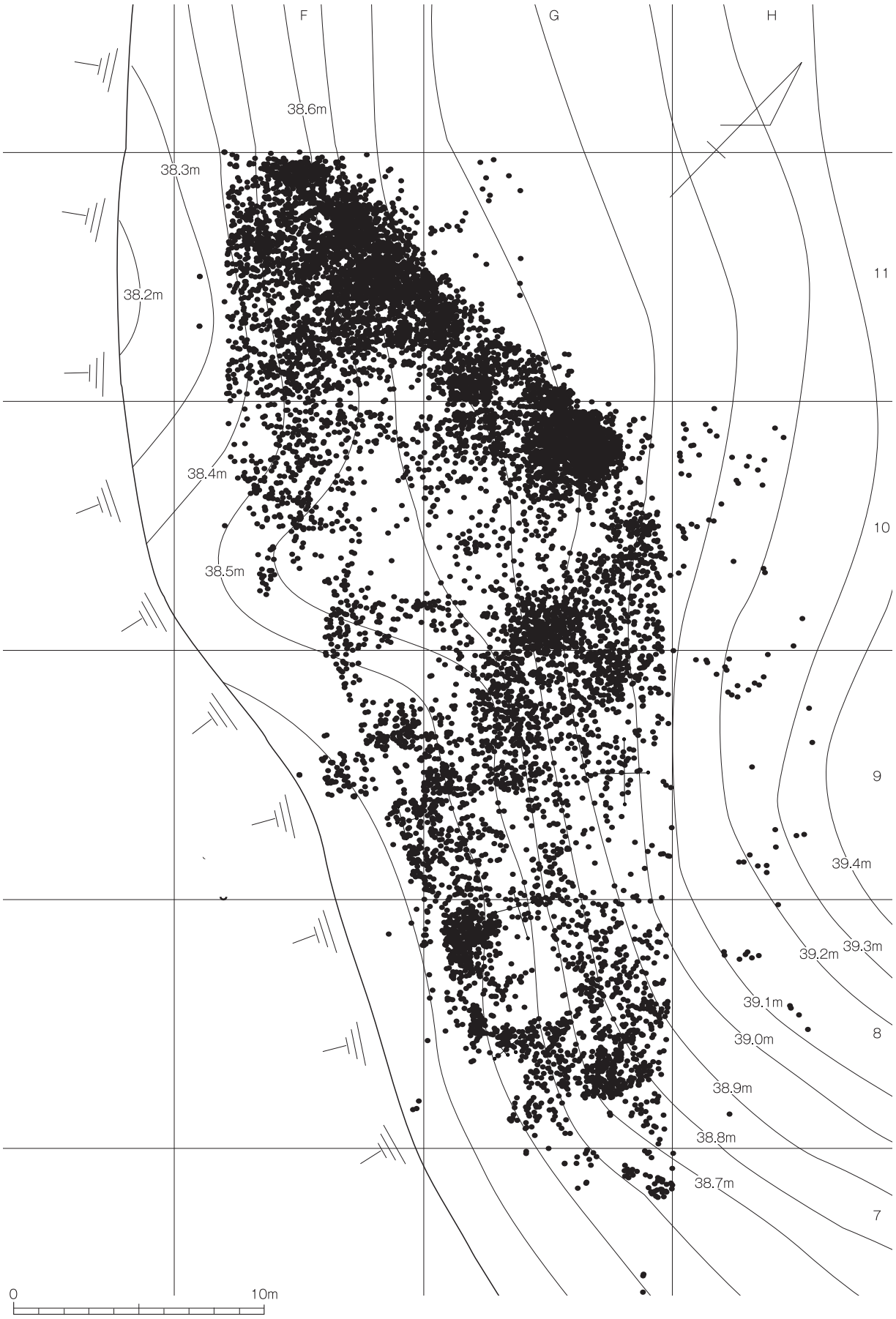
細石刃核（第26～29図，252～319）

細石刃核は68点の出土であった。石材は凝灰岩が多く45点で有り，遺跡全体の６割弱である。そのほか黒曜石（針尾１・上牛鼻13・三船９）の石材もある。

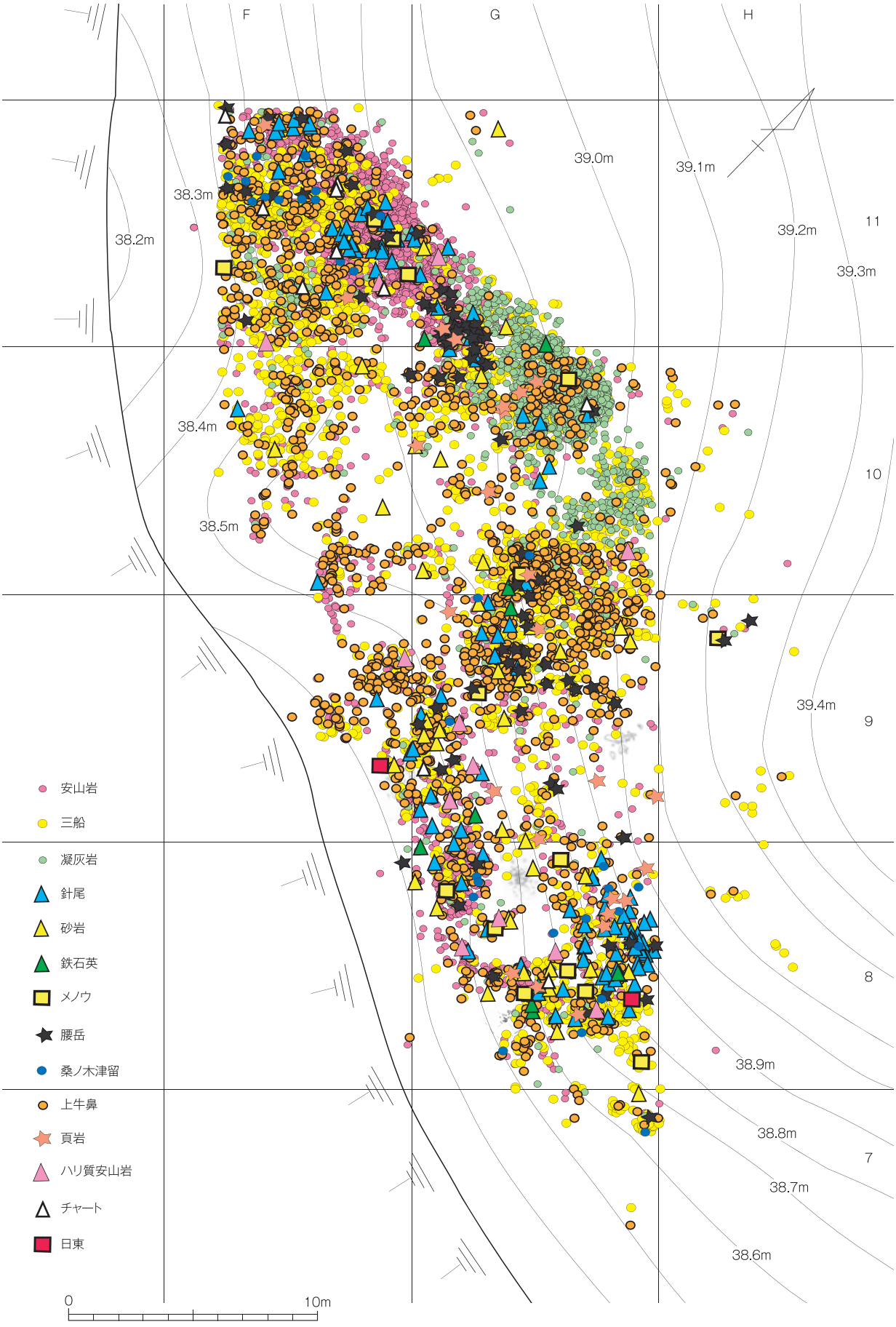
252は針尾産の黒曜石を素材に用いたもので，礫を半割したものを素材に用い，平坦な打面からの調整剥離によって成形し，正面には細石刃作業面がみられ，下縁調整が施されている。

253～265は上牛鼻産の黒曜石を素材に用いたものである。円礫を半割し，その時得られた平坦面を側面・打面にし，打面からの調整剥離によって成形を行っているものである。自然面を残すものも多くみられる（253～255・258・264）。256・258は細石刃剥出作業面と平行する後背面を有し，後方に傾斜する打面である。

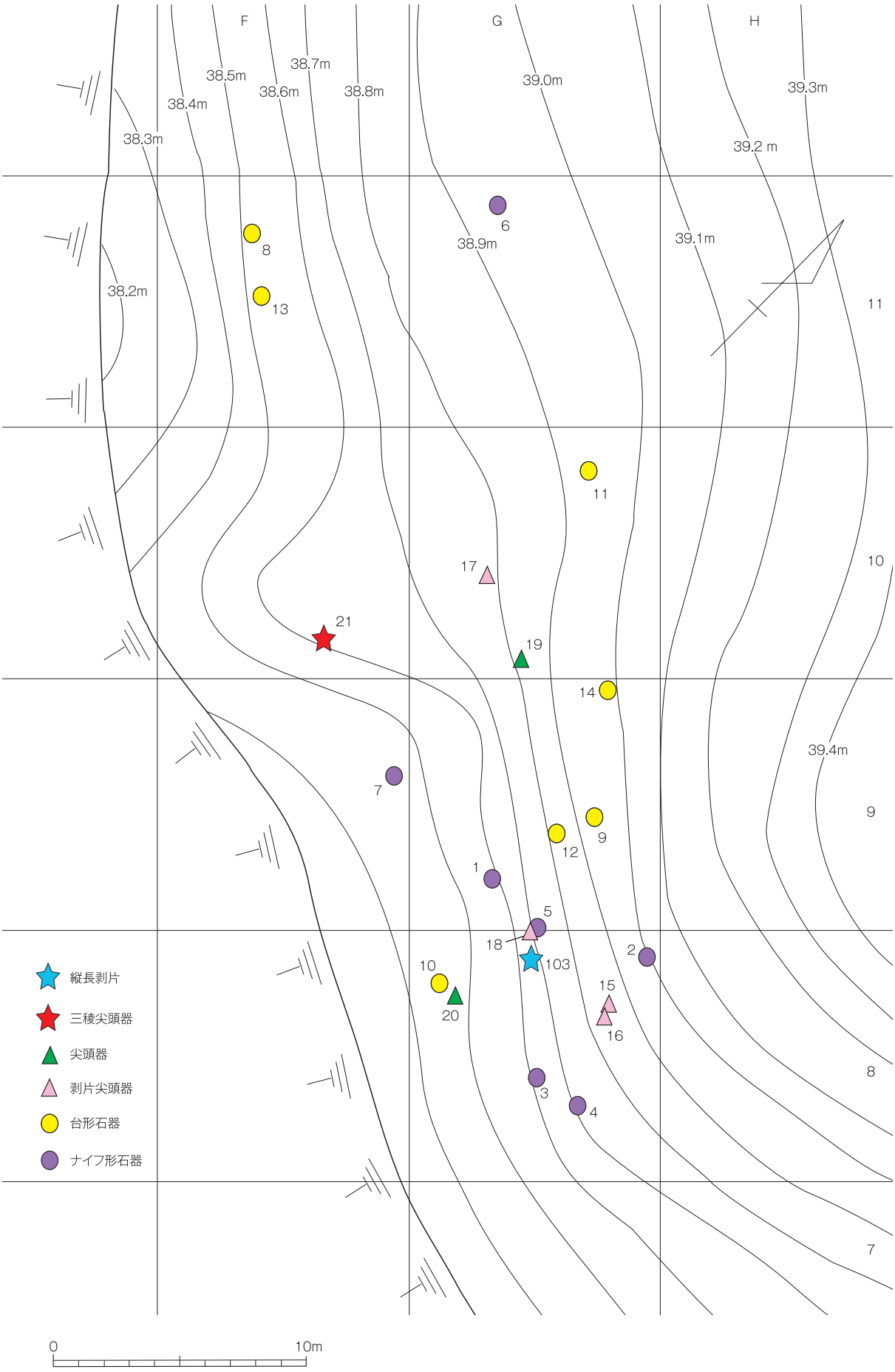
266～273は三船産の黒曜石を素材に用いたものである。やはり，礫を半割しその時得られた平坦面を側面・打面にし，打面からの調整剥離によって成形を行っているものである。これらは平



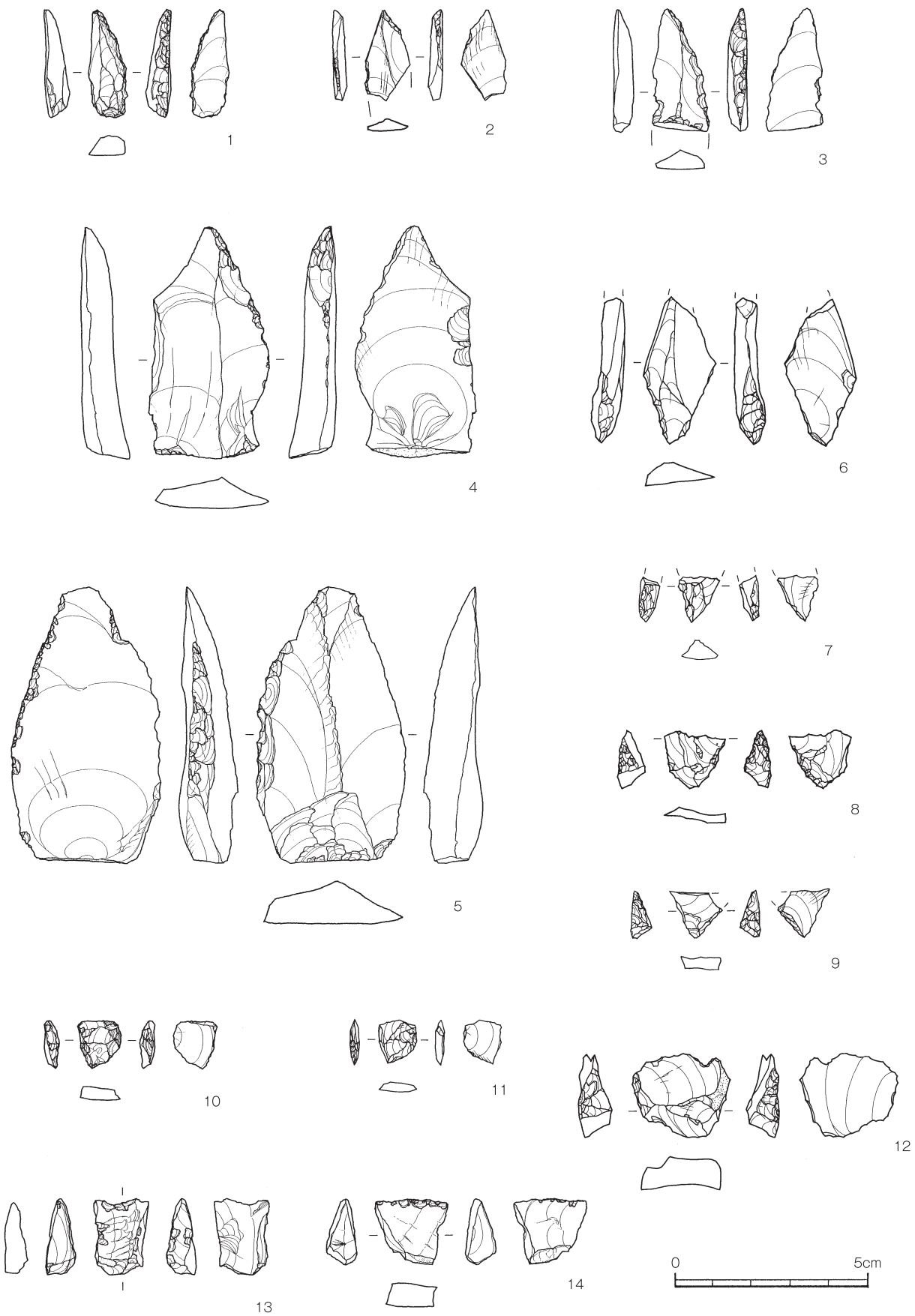
第９図　Ⅶ層出土遺物全ドット図



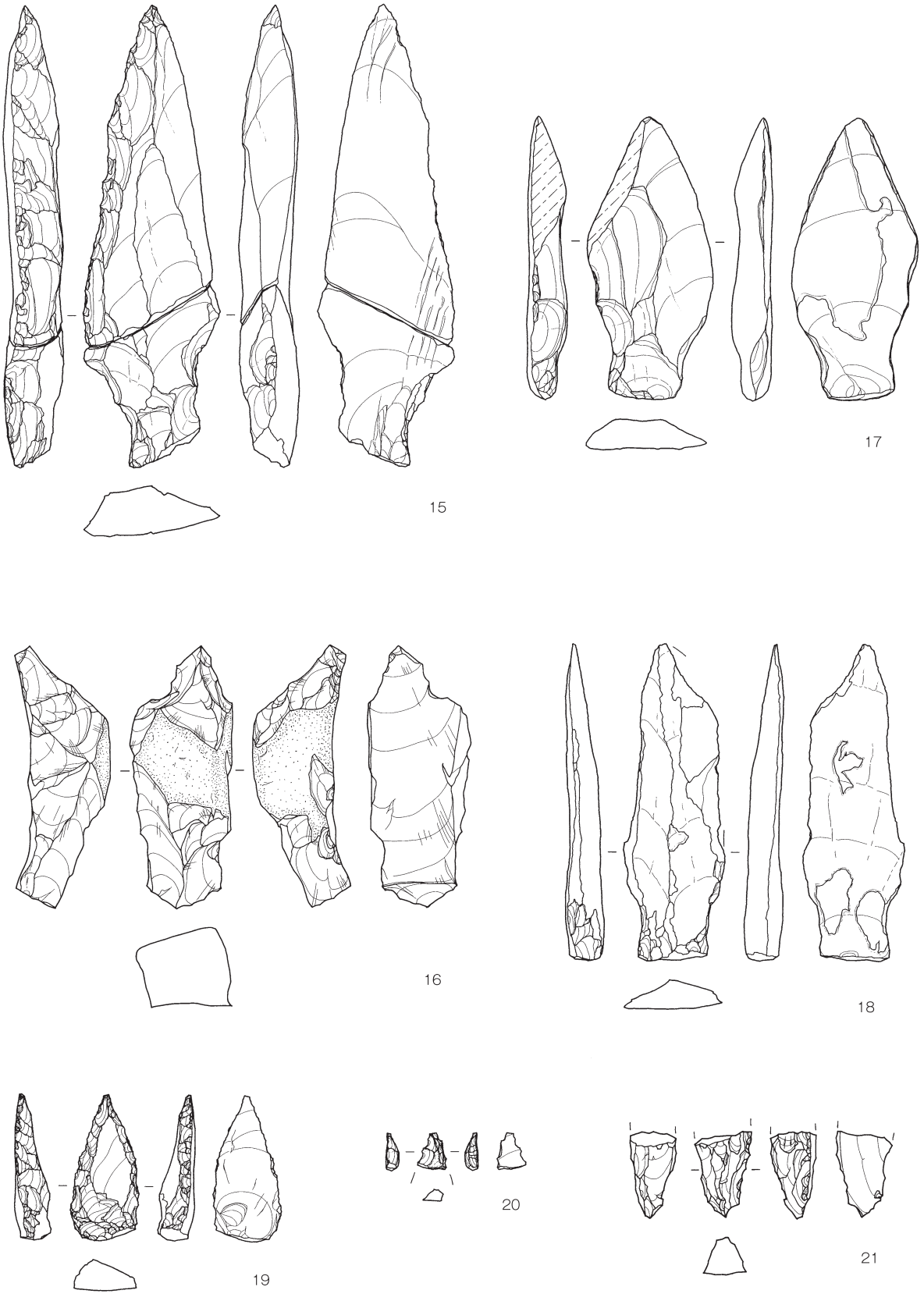
第10図　Ⅶ層石材別分布図



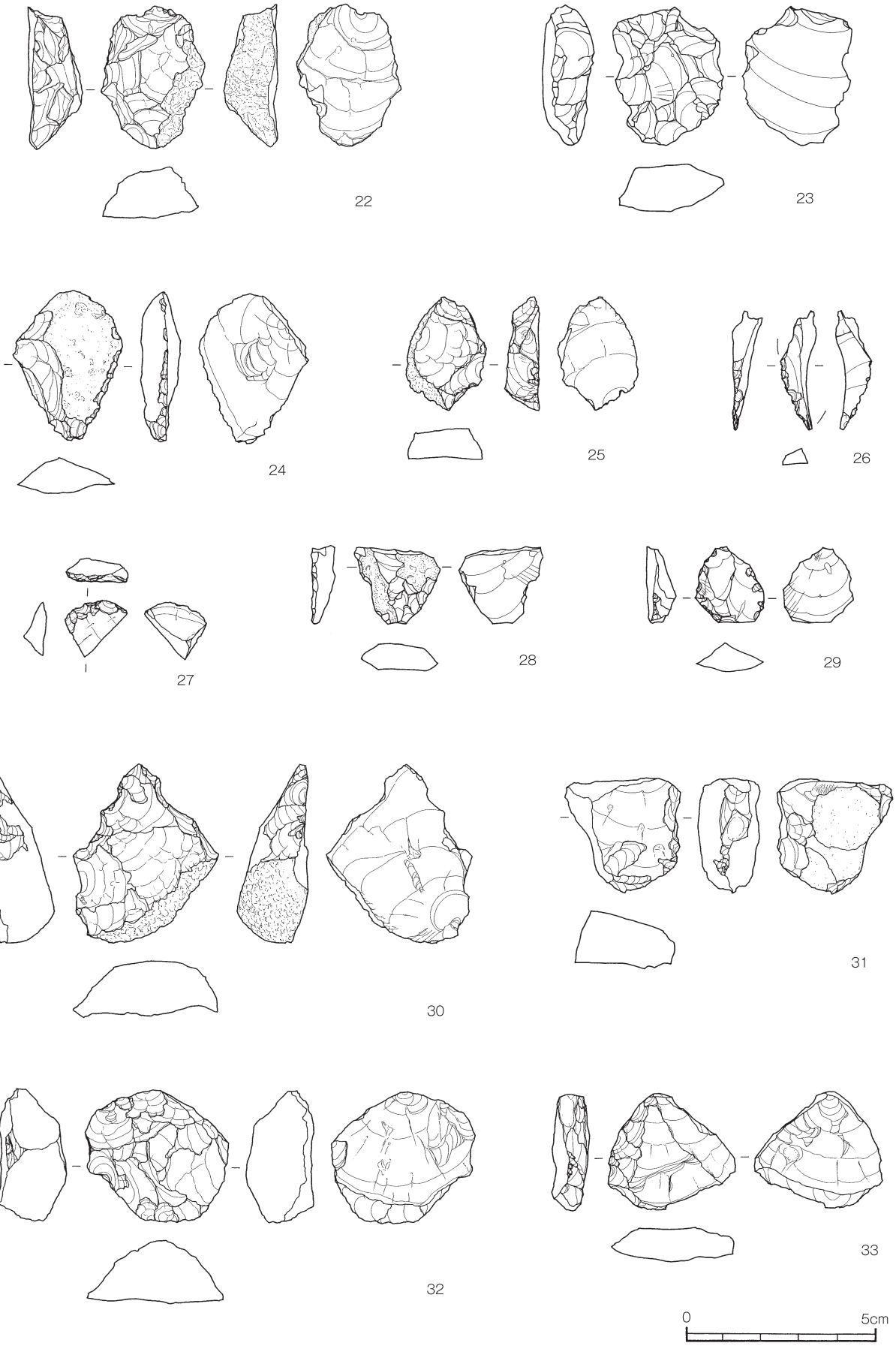
第11図　ナイフ形石器文化期出土遺物分布図



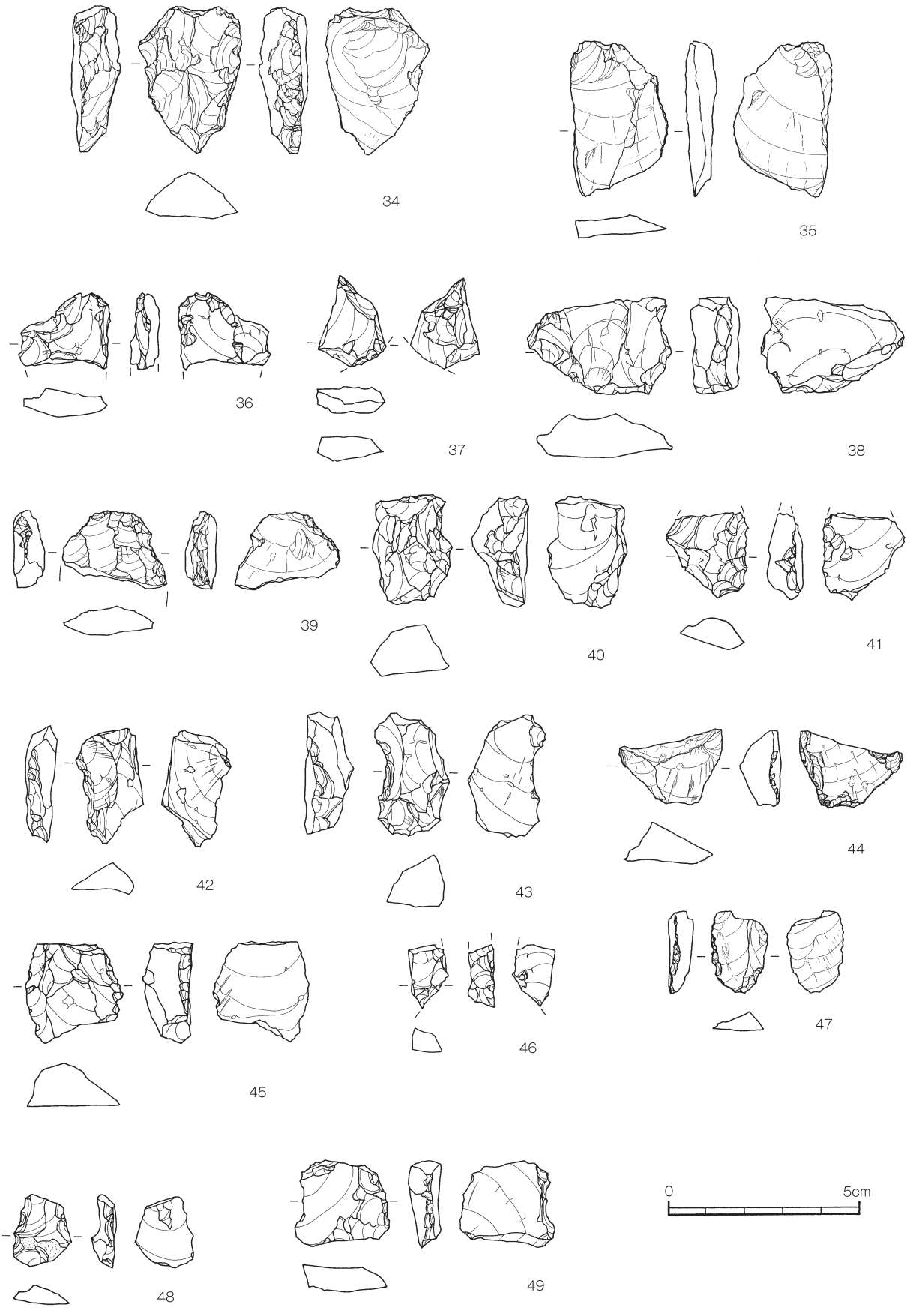
第12図　ナイフ形石器・台形石器



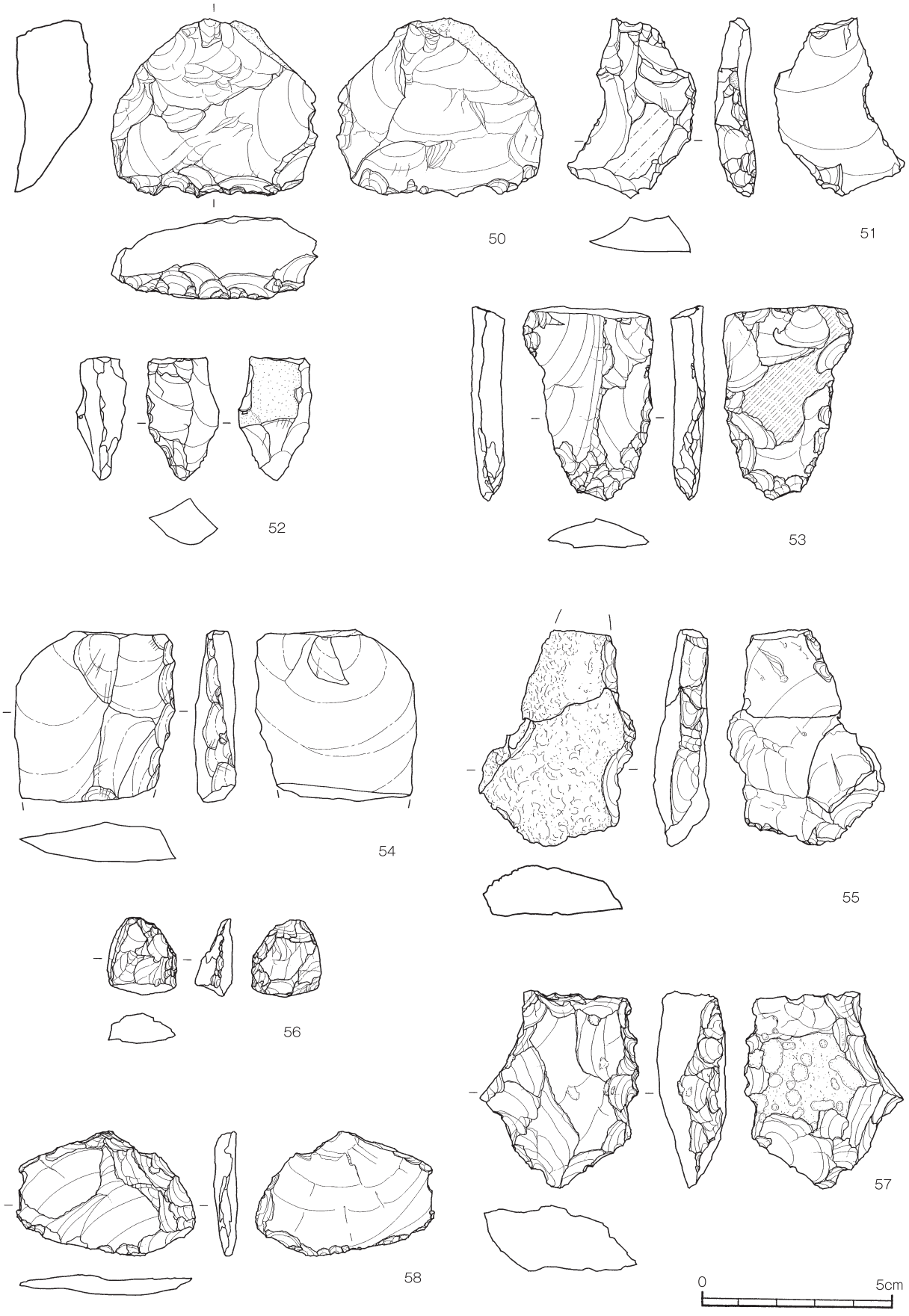
第13図　尖頭器



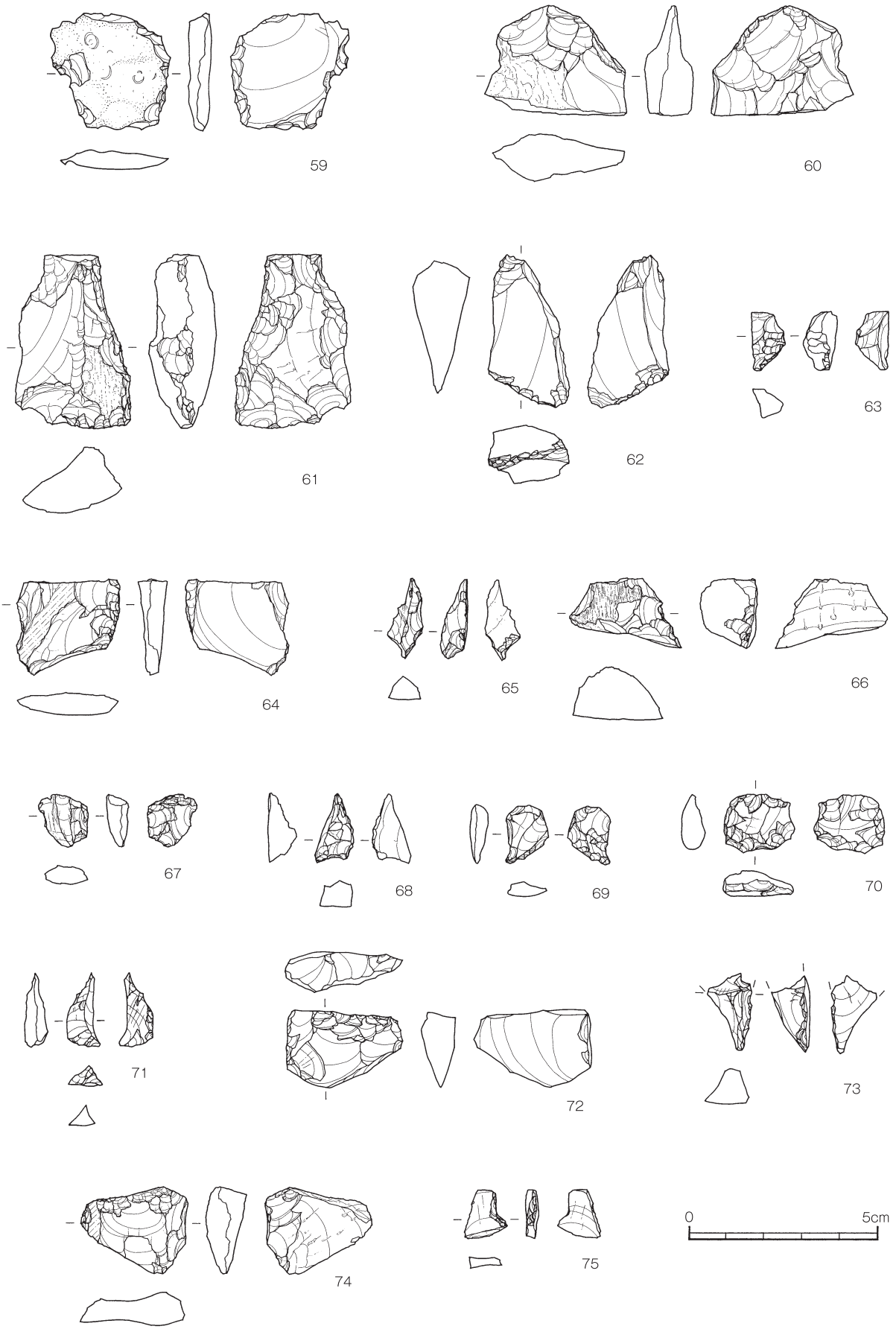
第14図　スクレイパー（1）



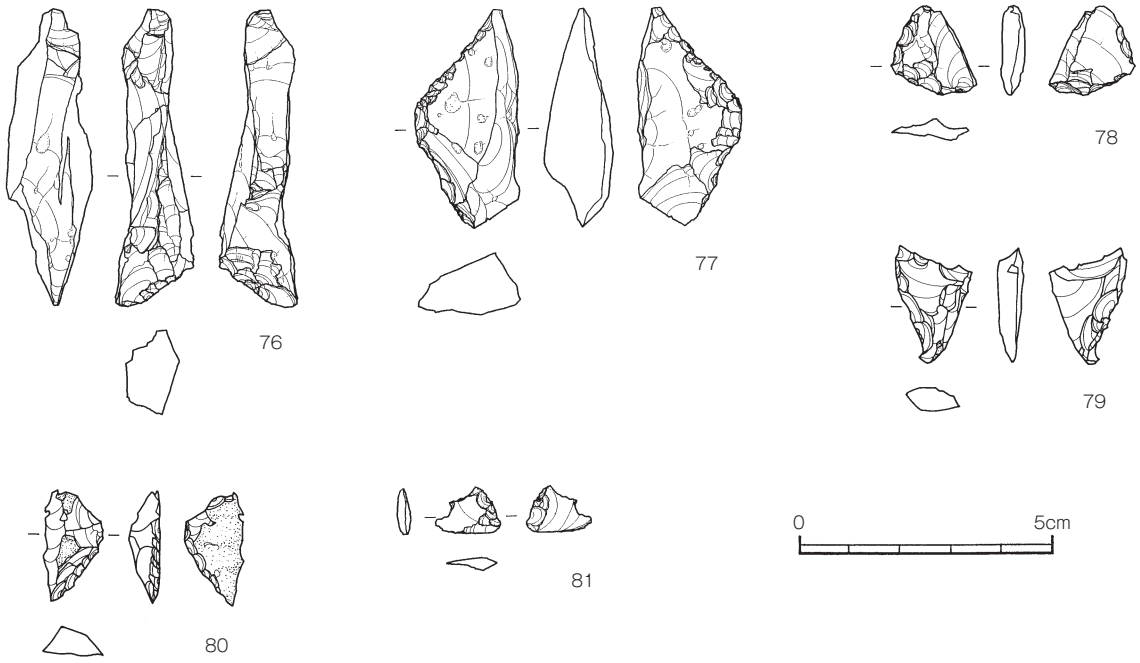
第15図　スクレイパー（2）



第16図　スクレイパー（3）



第17図　スクレイパー（4）・二次加工剥片



第18図　二次加工剥片

坦な打面から側面調整を施したものである。船野型細石刃核として分類されるものである。

274は気泡の多い茶褐色を呈した黒曜石で原産地が特定できないものである。平坦な剥離面を打面とした剥片素材の細石刃核であり，求心状に剥離したもので側面部に細石刃作業面がみられる。

275～319は凝灰岩を素材に用いたものである。この凝灰岩は節理面で板状の剥片になるものである。275～280は楔形を呈した細石刃作業面が１面みられるものである。278・280は自然面を残していて，280は側面が欠損している。

281は円礫を半割し，その時得られた平坦面を側面・打面にし，打面からの調整剥離によって成形を行っているものである。細石刃作業面が３面みられる。

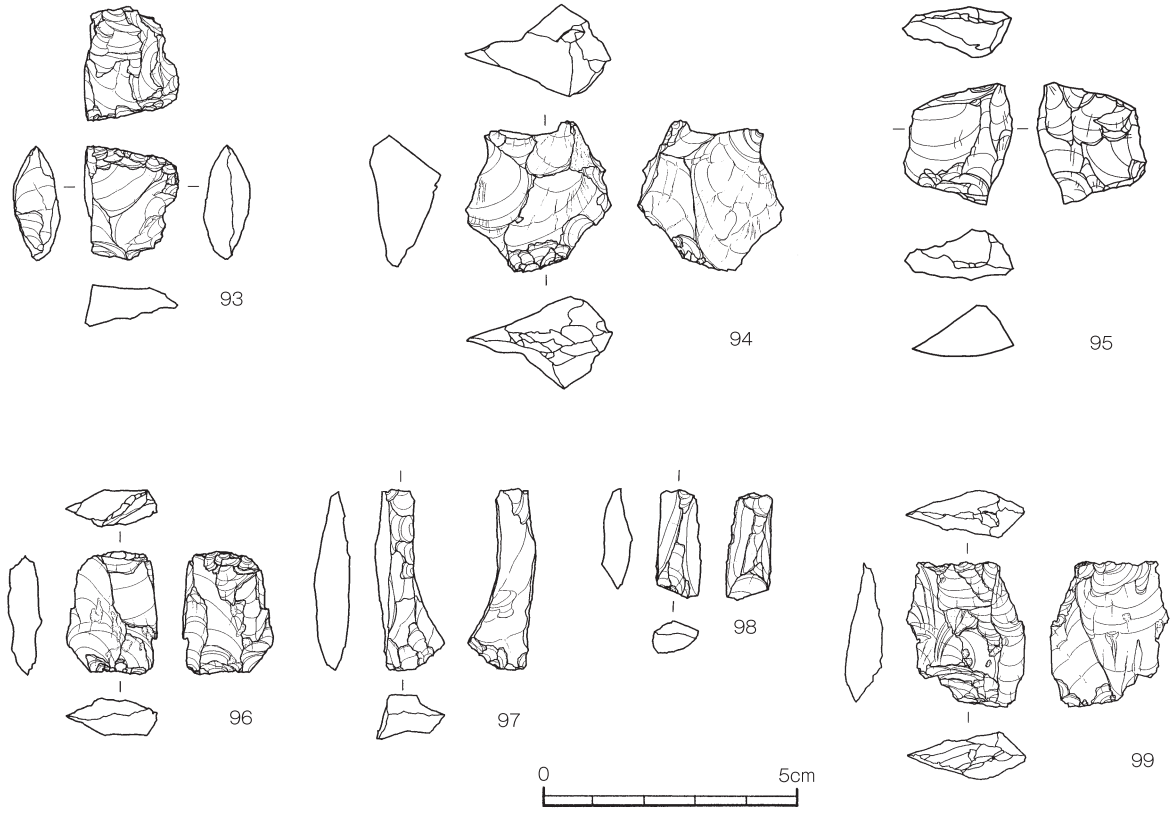
283は幅狭な平坦な打面から側面調整が施されたもので，下縁からの調整が施されている。この凝灰岩質の細石刃核は石材が軟質なためか，欠損している箇所が多く分類するのに困難な面がみられた。

287・288は細石刃剥出作業面と平行する後背面を有し，後方に傾斜する打面をもつものである。下縁調整が施されている。

289～296は細石刃作業面が１面みられるものである。297・299は２面細石刃作業面がみられ，298は４面に細石刃作業面がみられる。下半分は欠損している。305～307・309・310は節理面が残っているもので，下縁調整を施して成形を行っている。308・312は打面を欠損しているものである。313は礫を半割したものを素材に用い，打面からの調整剥離によって成形したもので１面の細石刃剥出作業面が認められる。314は過半分が欠損しているもので，やはり１面の細石刃作業面が認められる。315は平坦な打面から側面調整が施されたもので，船野型細石刃核として分類されるものである。316は下縁調整を施した細石刃核である。317は打面に自然面を残している



第19図　楔形石器（1）



第20図　楔形石器（2）

が細石刃剥出を行ったが，再生の際に欠損したと思われる。319は節理面を多く残した細石刃核である。

ブランク（第30図，320～329）

320・321は上牛鼻産の黒曜石を素材に用いた細石刃剥出のみられないブランクである。

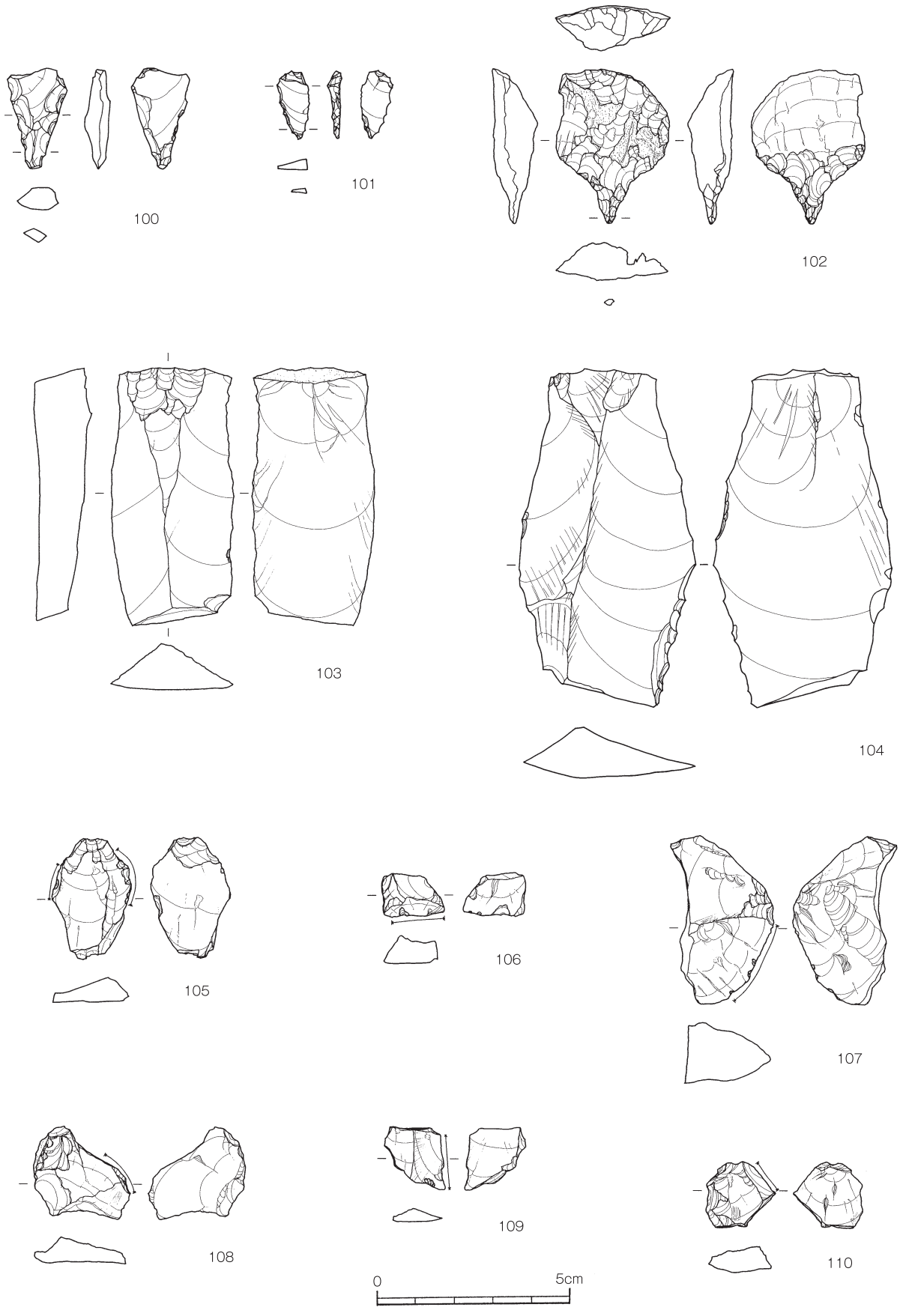
320は礫を半割したものを素材にし，その時得られた平坦面を側面・打面にして，打面からの調整剥離を施して成形していて下縁調整は施されていない。321も礫を半割したものであるが，下縁調整が施されたものである。323～327は三船産の黒曜石を素材に用いたブランクである。やはり礫を半割したものを素材にし，平坦面を打面にしている。325・327は下縁調整が施されている。328は平坦な自然面を打面にしたものである。329は凝灰岩を素材に用いたもので，礫を半割して打面を成形し，その面から調整剥離を施して成形している。下縁部が欠損しているため詳細は不明である。

石鏃（第33～36図，330～426）

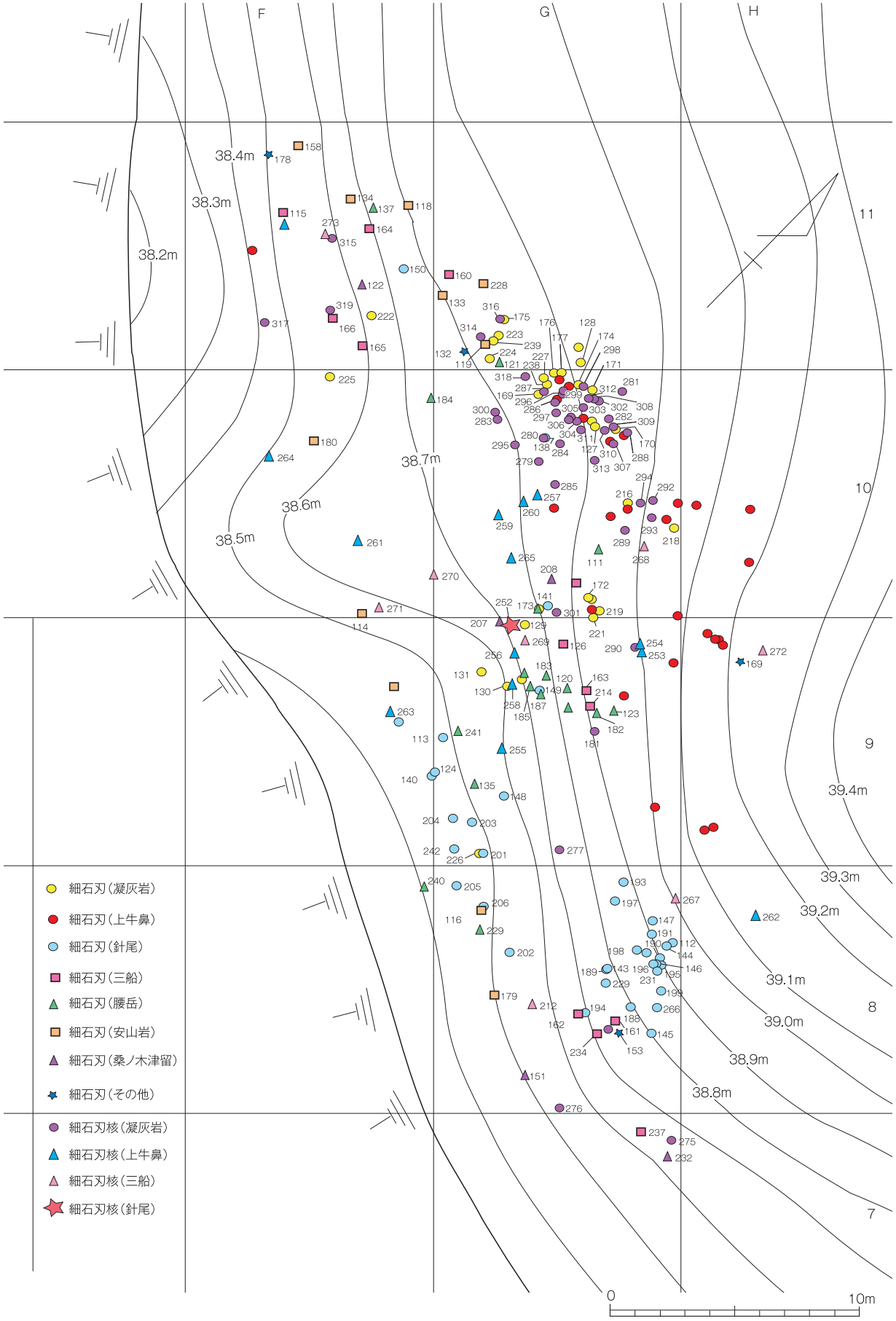
石鏃は遺跡南西部に集中して出土した。分布状況はⅦ層からの出土であり，細石刃・細石刃核等も出土しているが，縄文草創期の土器と出土状況はほぼ一緒であり，縄文草創期の石鏃と推定される。

石鏃の形態は，平基鏃・鍬形鏃等多種であり，また石材も安山岩を主体とするが，黒曜石・チャート・頁岩・鉄石英などを用いている。

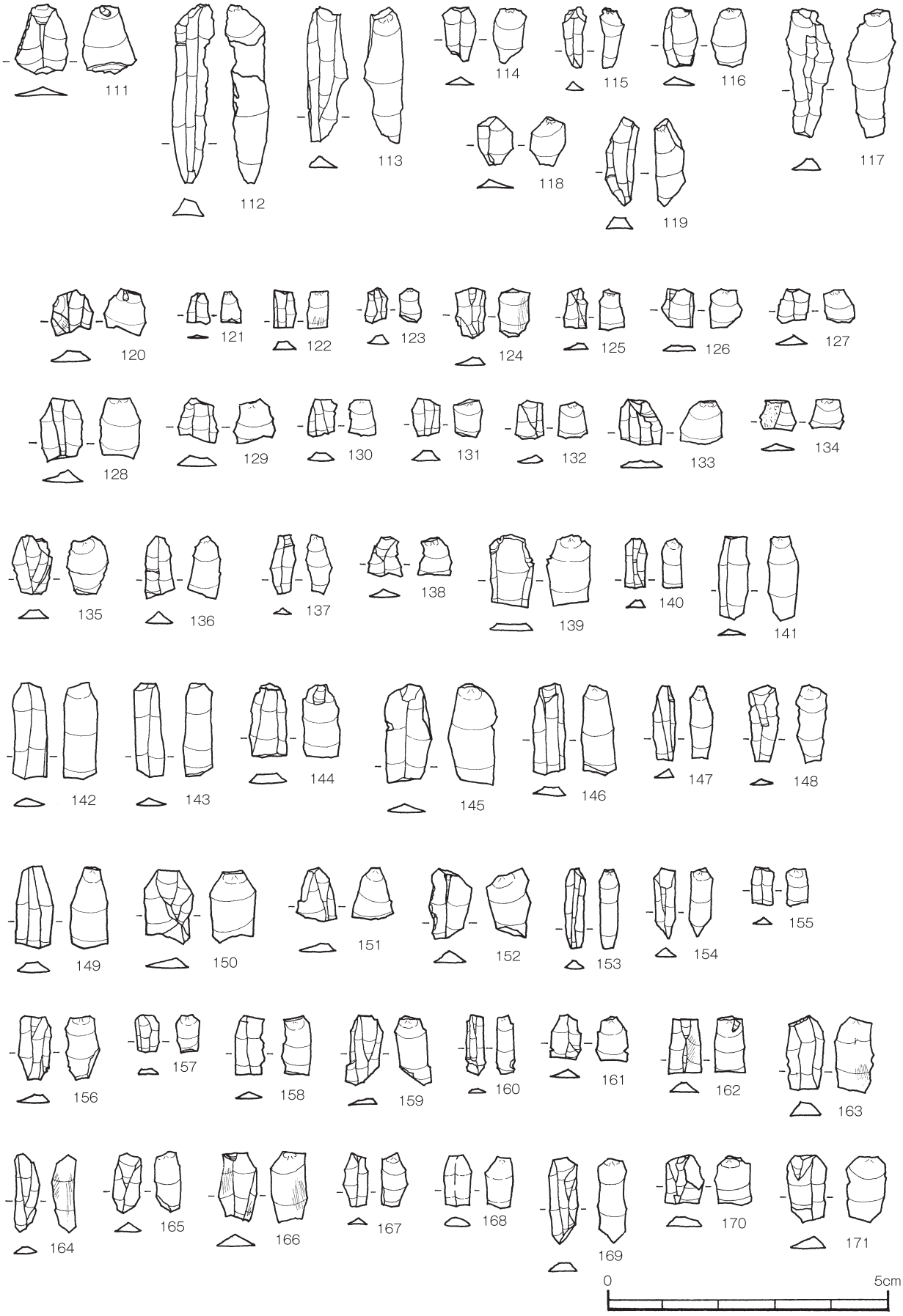
石鏃の形態は下記のとおり分類した。



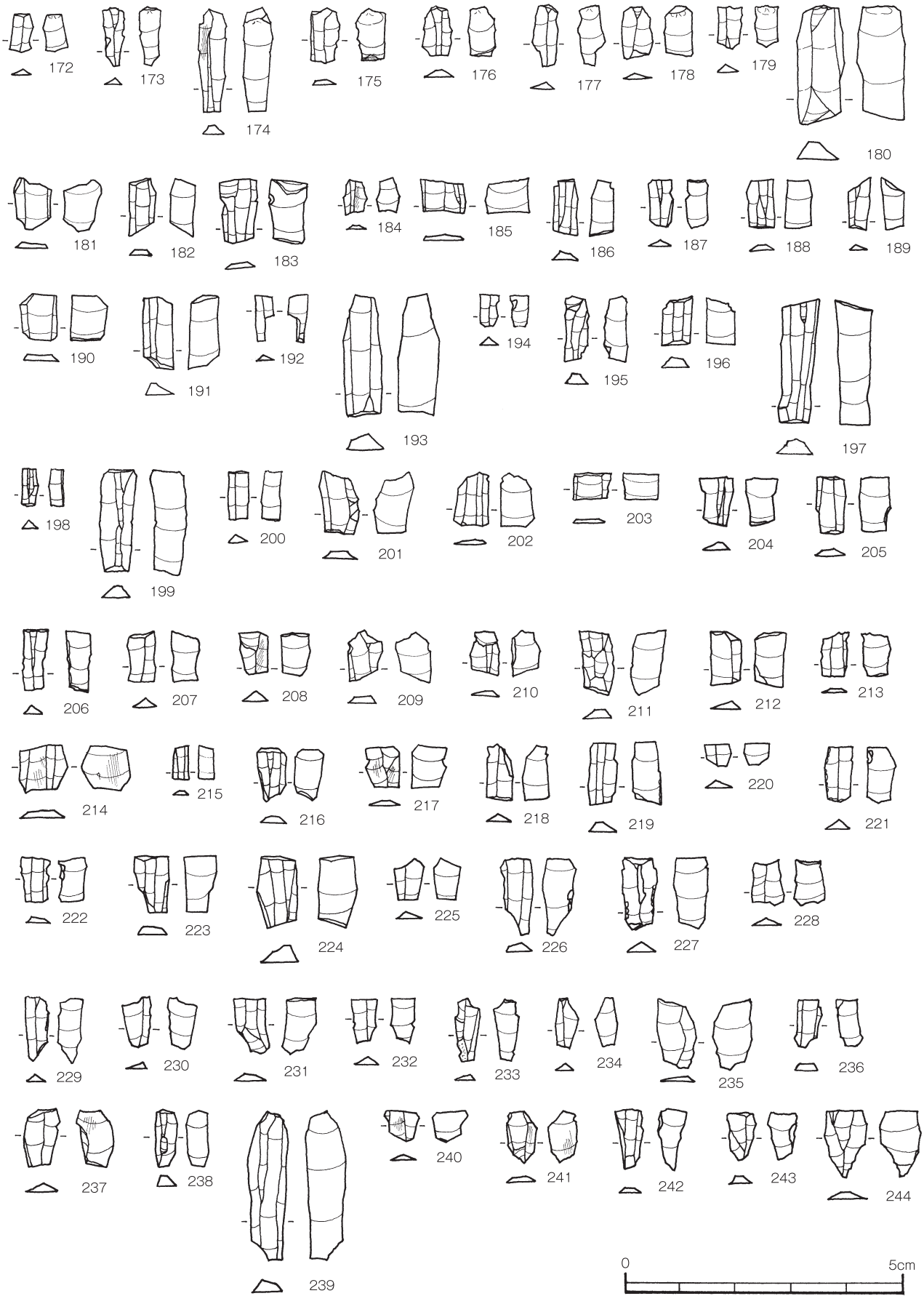
第21図　石錐・剥片



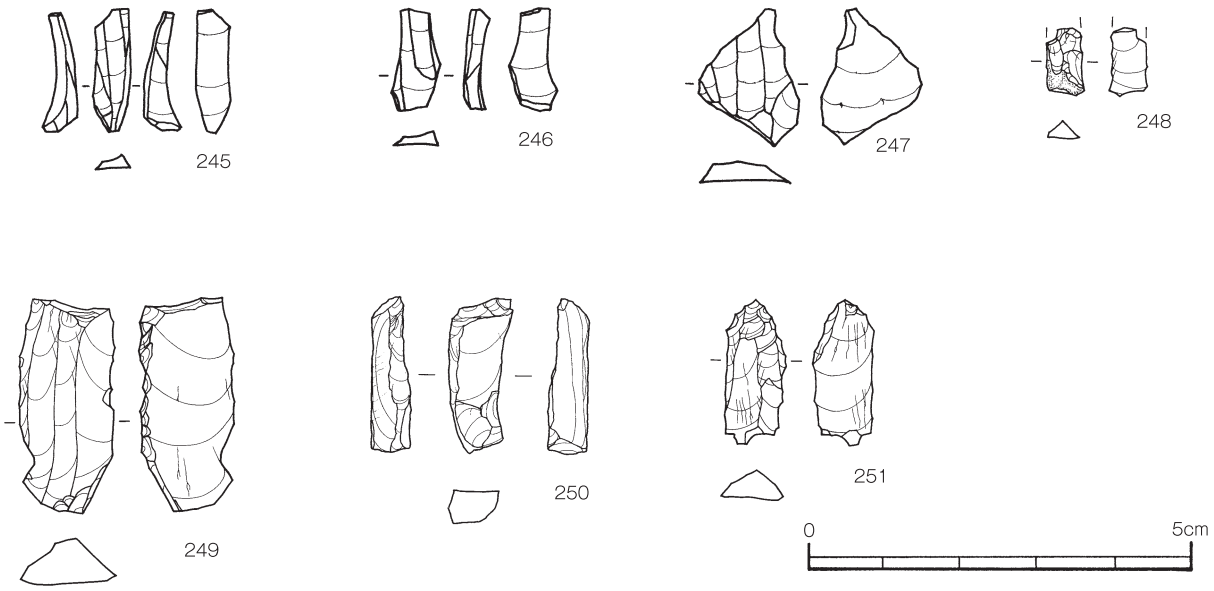
第22図　細石刃・細石刃核分布図


111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
0
5cm

第23図　細石刃（1）


172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
0
5cm

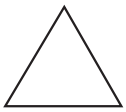
第24図　細石刃（2）



第25図　調整剥片

A類…側辺部が直線的で，基部に抉りがある。
B類…側辺部が弯曲し，基部に抉りがある。
C類…側辺部が直線的で，基部が直線である。
D類…側辺部が弯曲し，基部が直線である。
E類…基部の片脚が違う。
F類…基部が膨らむもの。

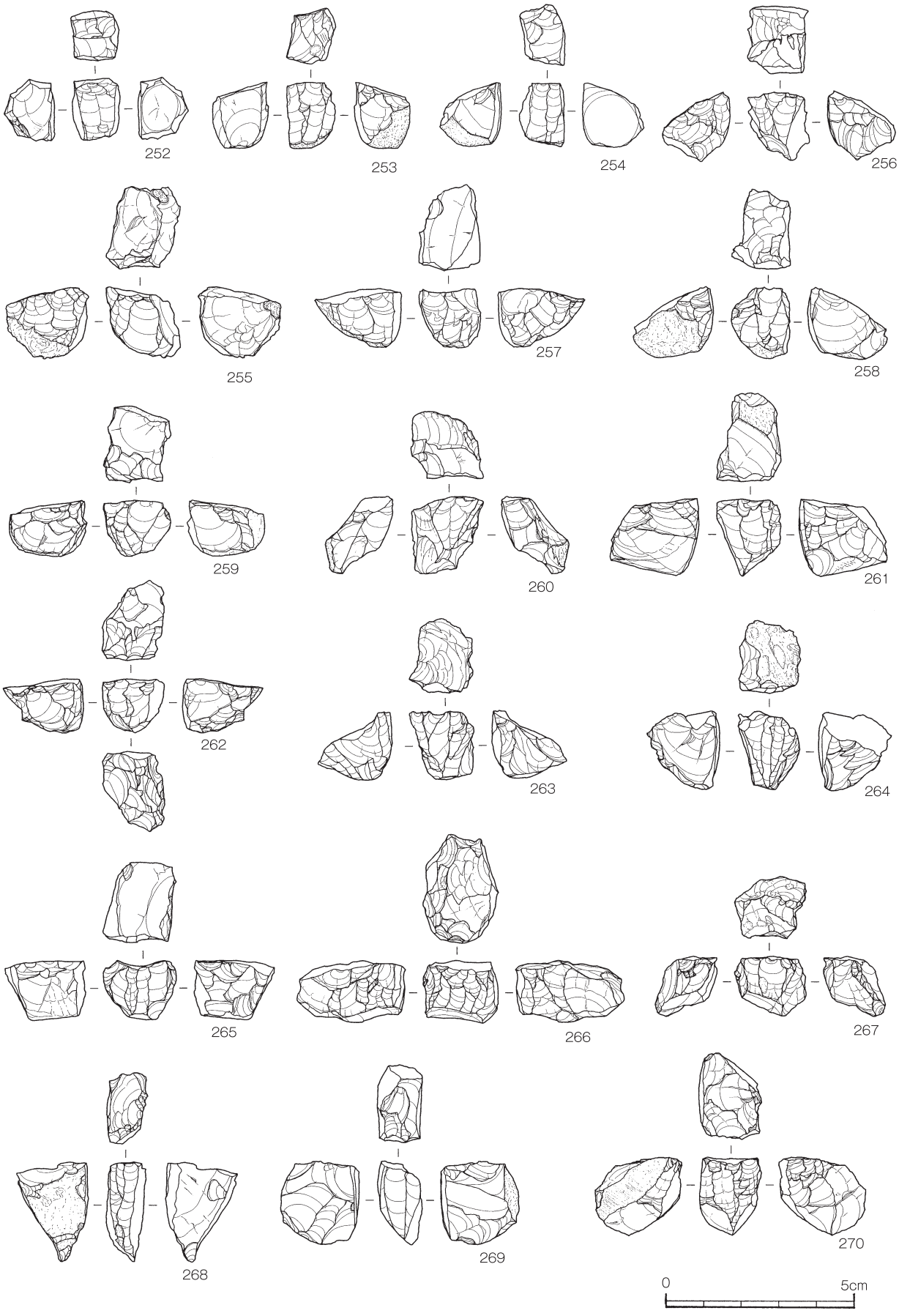
石鏃分類図

A 類	B 類	C 類	D 類	E 類	F 類
					

330～356は安山岩以外の石材を用いた石鏃である。

330・331はA類の石鏃で，側辺部が直線的で基部に抉りがあるものである。基部の逆刺は鋭く抉りが浅いものである。片脚を欠損し石材は鉄石英・頁岩である。

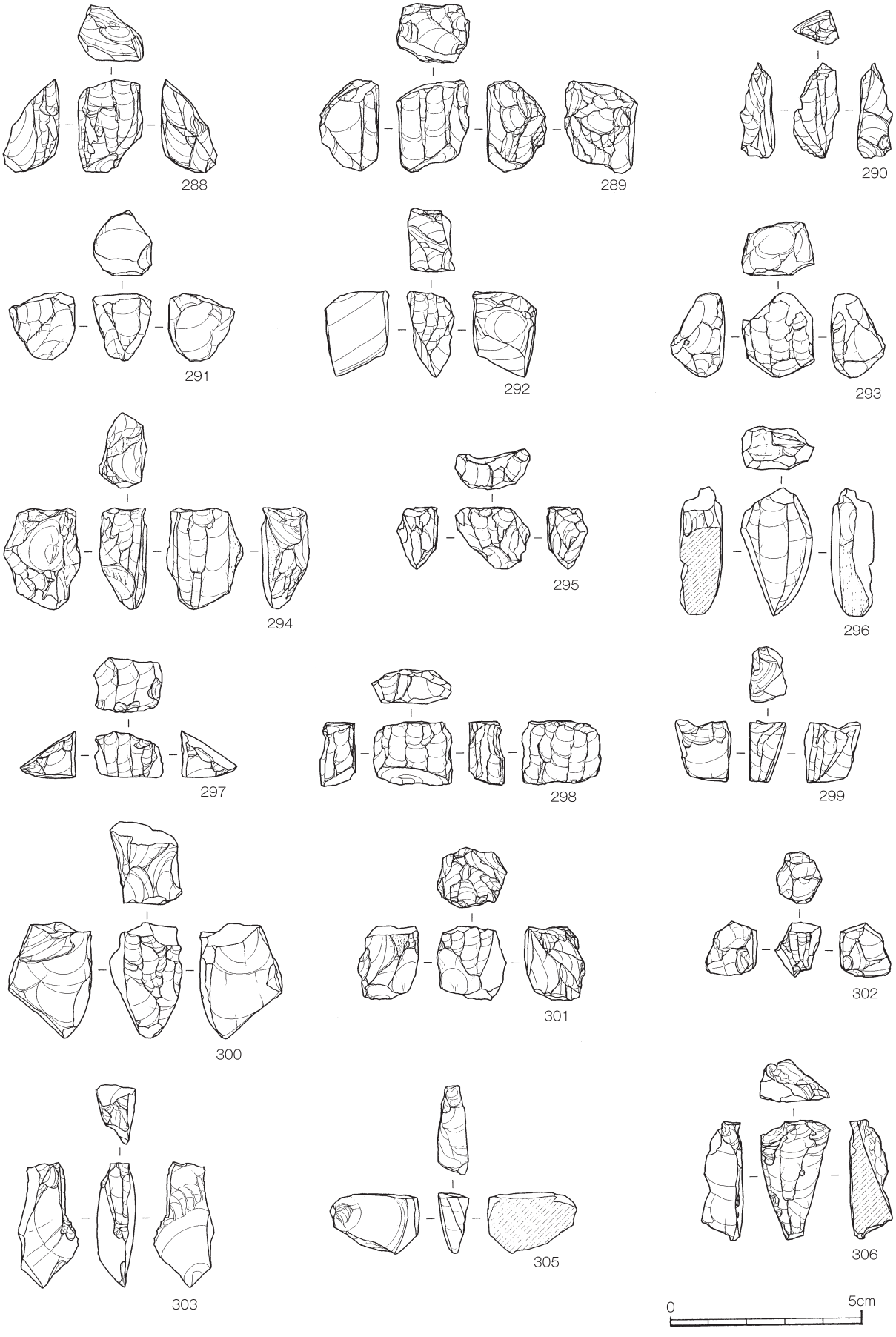
332～337はB類の石鏃で，側辺部が外弯的で基部に抉りがあるものである。332は黒曜石（針尾）を石材に用いたもので，やや横長の小型鏃である。先端部は鋭く側辺は外弯し最大幅は下方にある。基部の逆刺は鋭く抉りはやや浅い。334は側辺・基部を欠損しているが，頁岩を石材に用いた製作途中の石鏃と思われる。先端部は円く側辺は外弯している。336はチャートを石材に用いたもので，先端部が欠損しているが側辺部が外弯し最大幅を下方にもつものである。基部の逆刺は円く抉りの深いものである。Ⅶ層出土の石鏃では例外的に抉りの深いものであり，また石材の


252
253
254
256
255
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
0
5cm

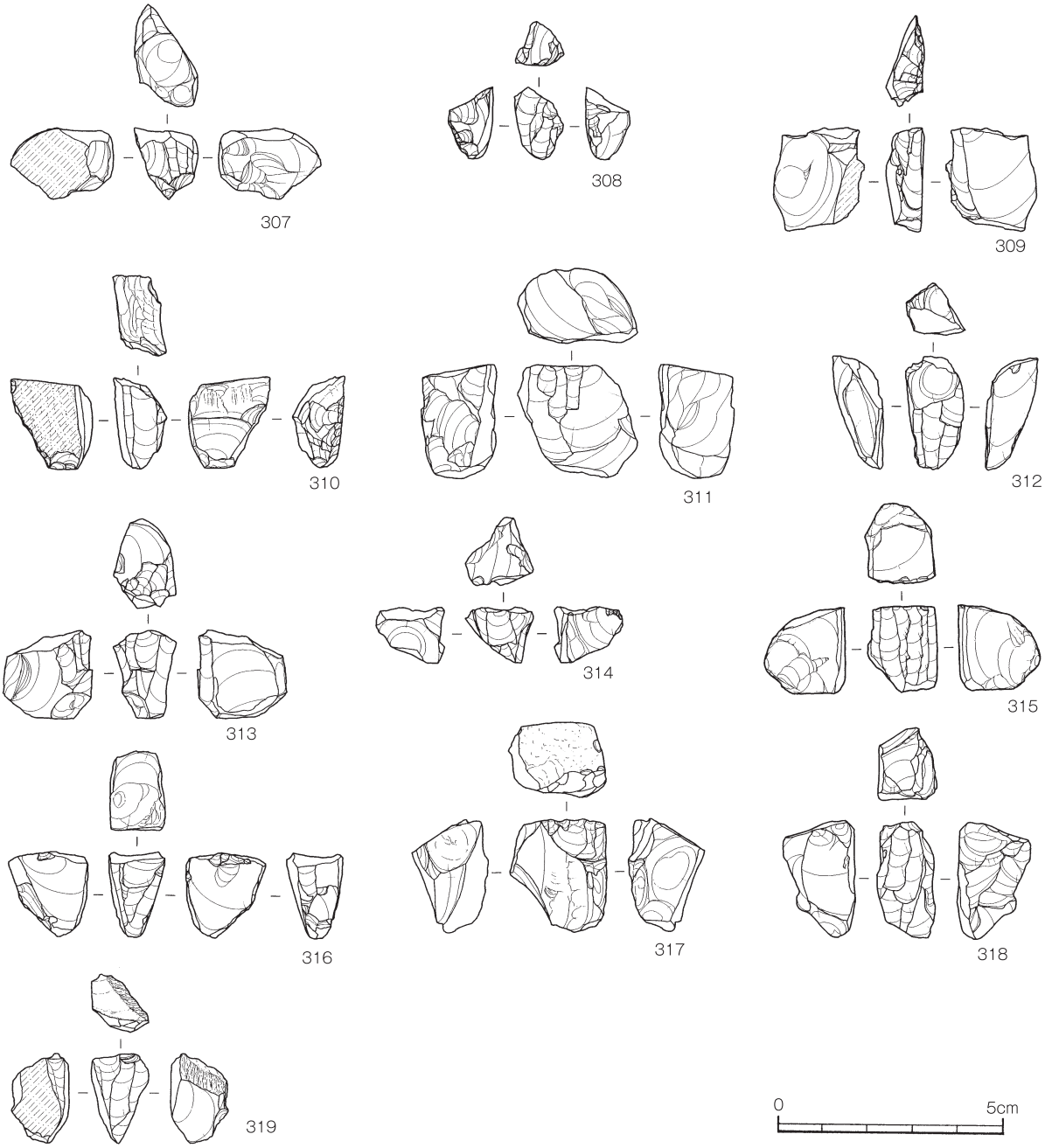
第26図　細石刃核（1）


271
272
275
273
274
276
277
279
278
281
282
280
283
284
285
286
287
0
5cm

第27図　細石刃核（2）


288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
305
306
0
5cm

第28図　細石刃核（3）



第29図　細石刃核（4）

チャートもその他のⅦ層出土の石鏃とは異質であり，層位の混入の可能性もある。

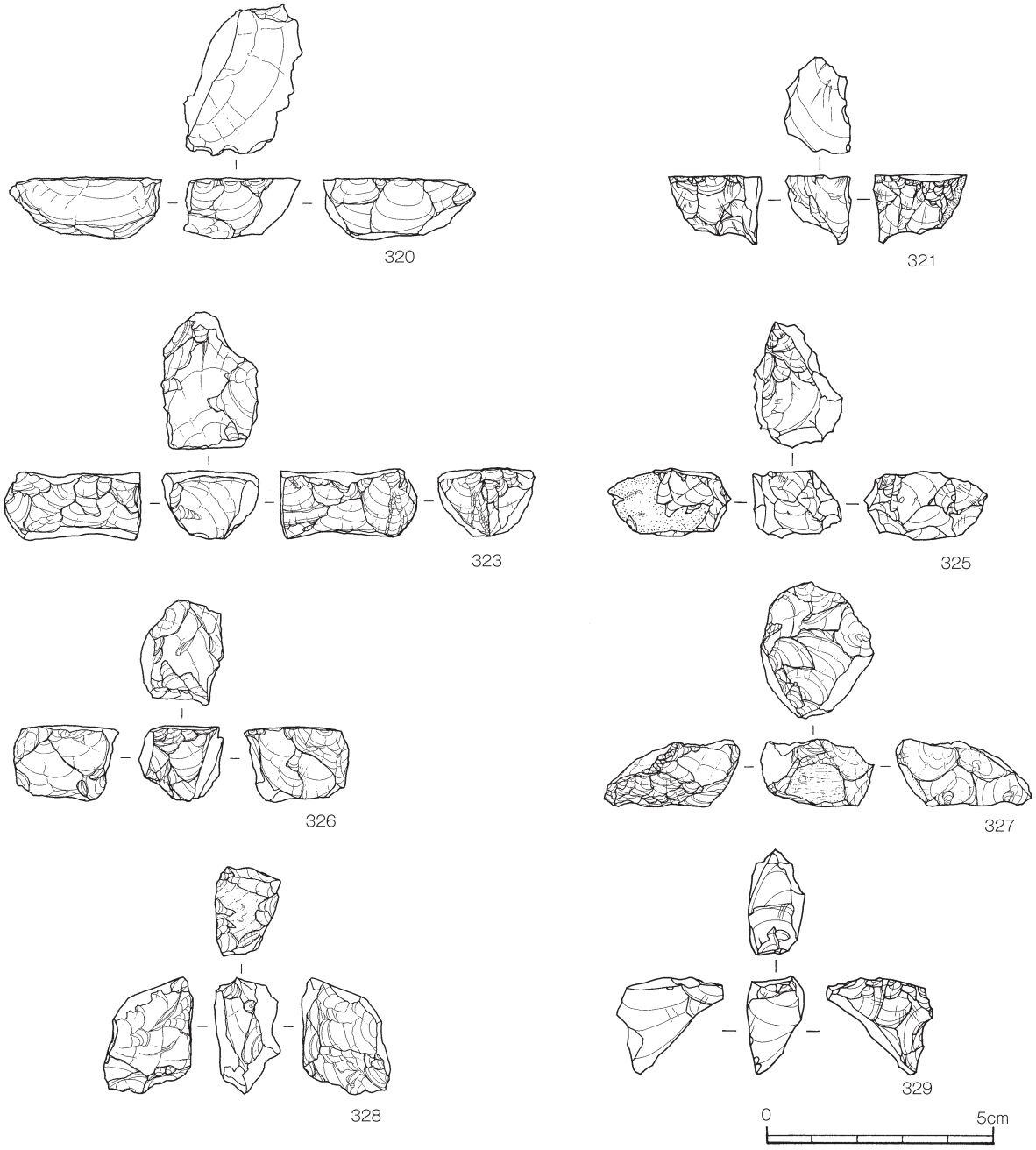
338～343はＣ類の石鏃で，側辺部が直線的で基部も直線的なものである。340～342は小型鏃で，いずれも調整剥離を丁寧に行っている。

344～348はＤ類の石鏃で，側辺部が外弯的で基部は直線的なものである。

344・345・348は側辺部が鋸歯状を呈している。349の石材は頁岩を用いたもので，先端部が円く幅狭な石鏃である。側辺は外弯し中央部付近に最大幅があるものである。基部は細くなり直線的である。350は硬質頁岩を石材に用いた剥片鏃で，片側面のみ調整剥離を施している。基部は片脚の長さが違うものである。

350～356は片脚の長さが違うＥ類である。

357～426は安山岩を石材とする石鏃である。



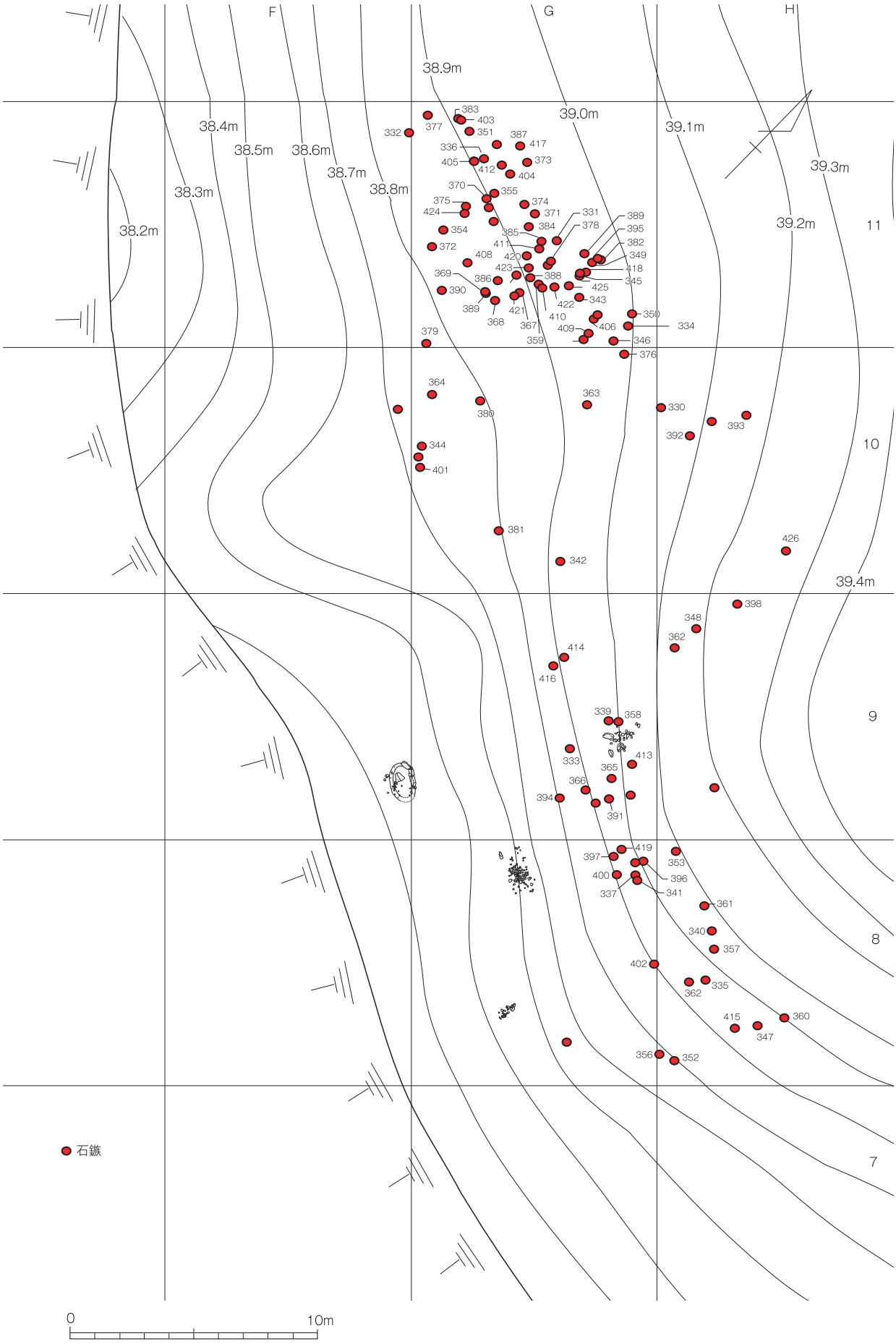
第30図　ブランク

A類（357～381）

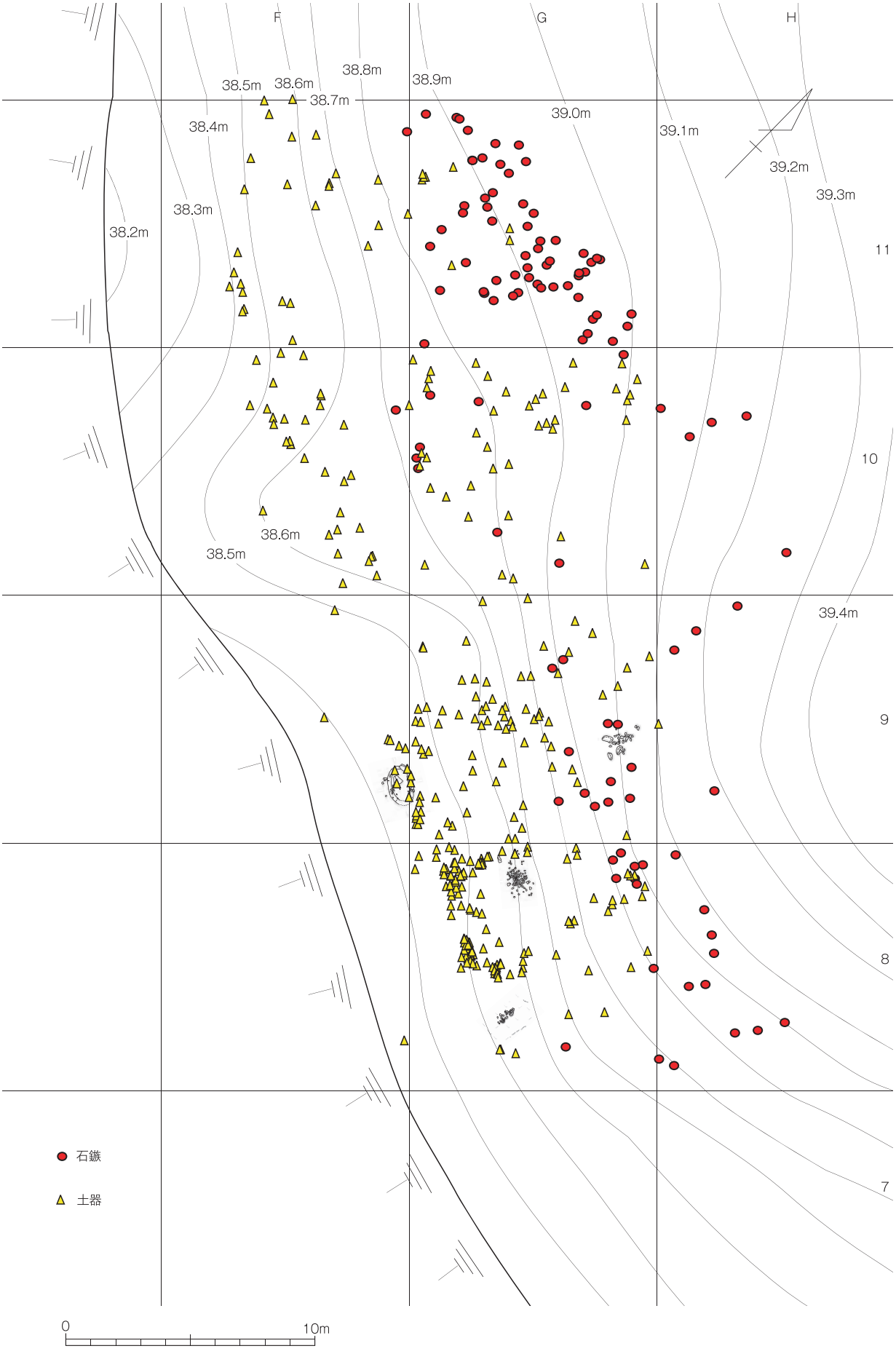
側辺部が直線的で基部に抉りがあるものである。357は幅狭の小型の剥片鏃である。基部の抉りは浅い。361は先端部を欠損しているが，やや深い抉りをもつものである。363・366・374は剥片鏃である。367は側辺部が鋸歯状を呈す。375・376は側辺がやや内弯気味のものである。基部の逆刺は円く抉りはやや深い。

B類（382～395）

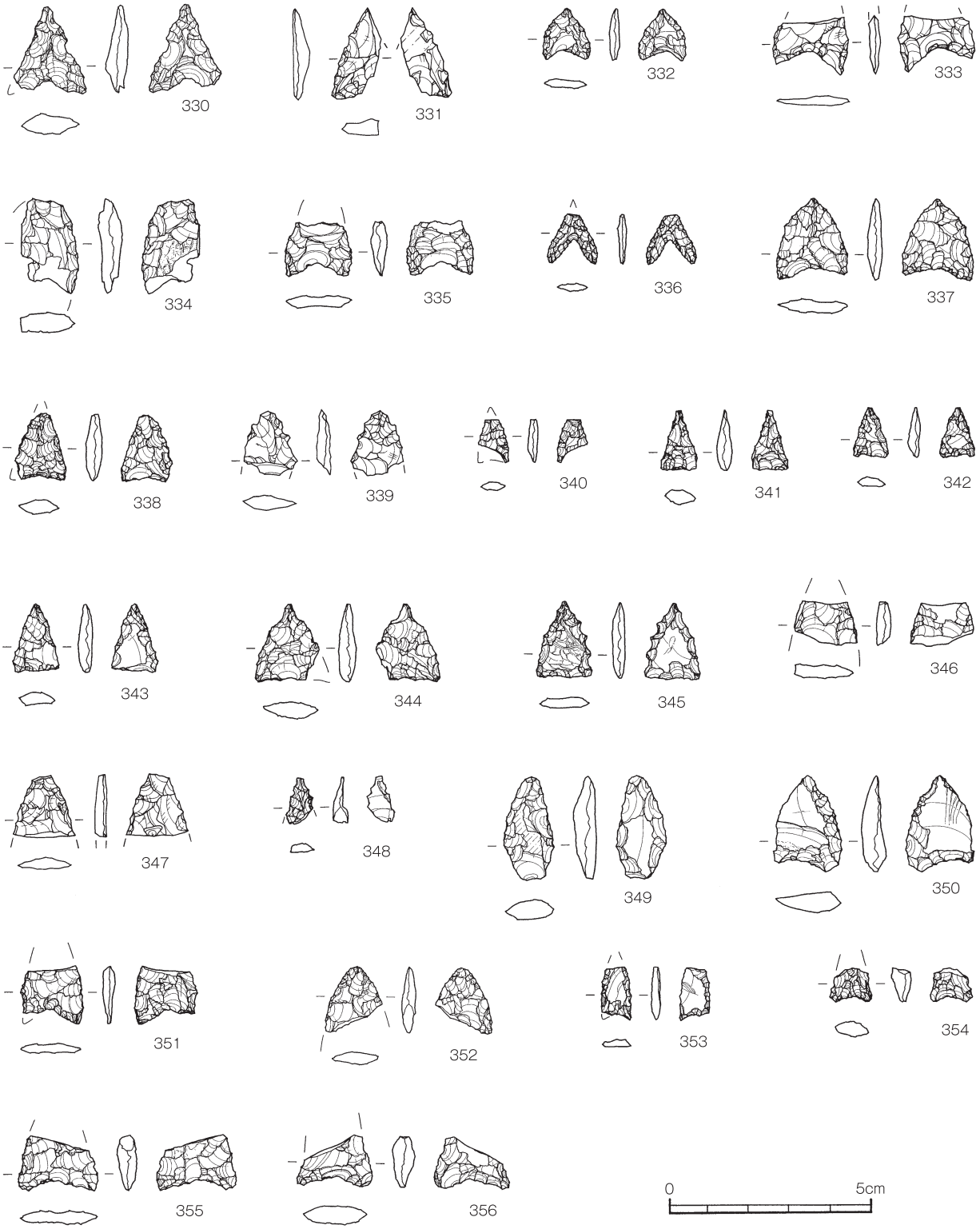
側辺部が外弯し基部に抉りがあるものである。382・383は先端部がやや鈍く側辺は外弯し，基部の逆刺は鋭く抉りがやや深いものである。やや横長の石鏃が多い。393は縦長の石鏃であるが基部が欠損している。395は剥片鏃で基部調整のみ施したもので製作途中と思われる。


F
G
H
38.9m
39.0m
39.1m
39.3m
38.4m
38.5m
38.6m
38.7m
38.8m
38.3m
38.2m
39.2m
39.4m
11
10
9
8
7
石鏃
0
10m

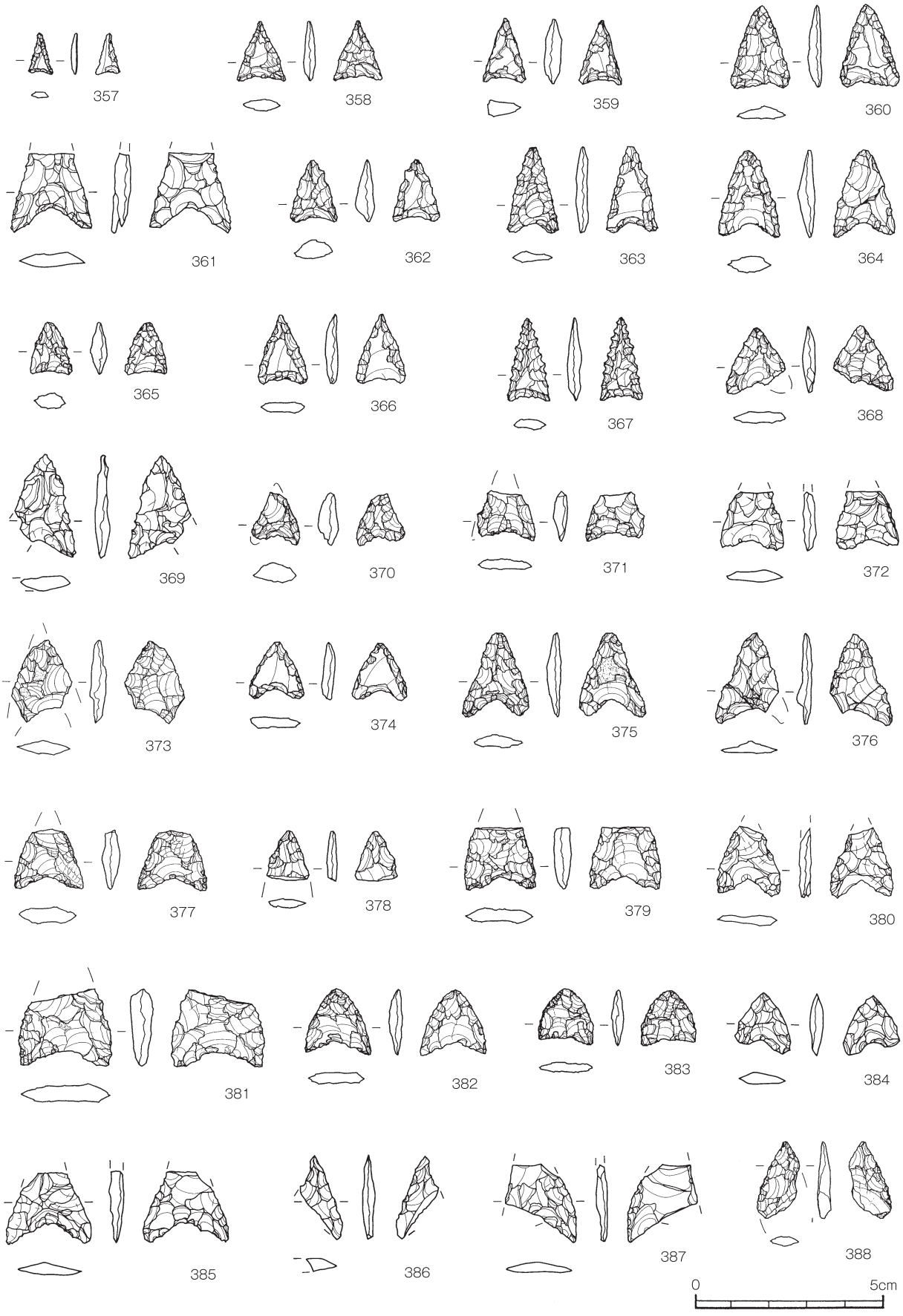
第31図　石鏃分布図



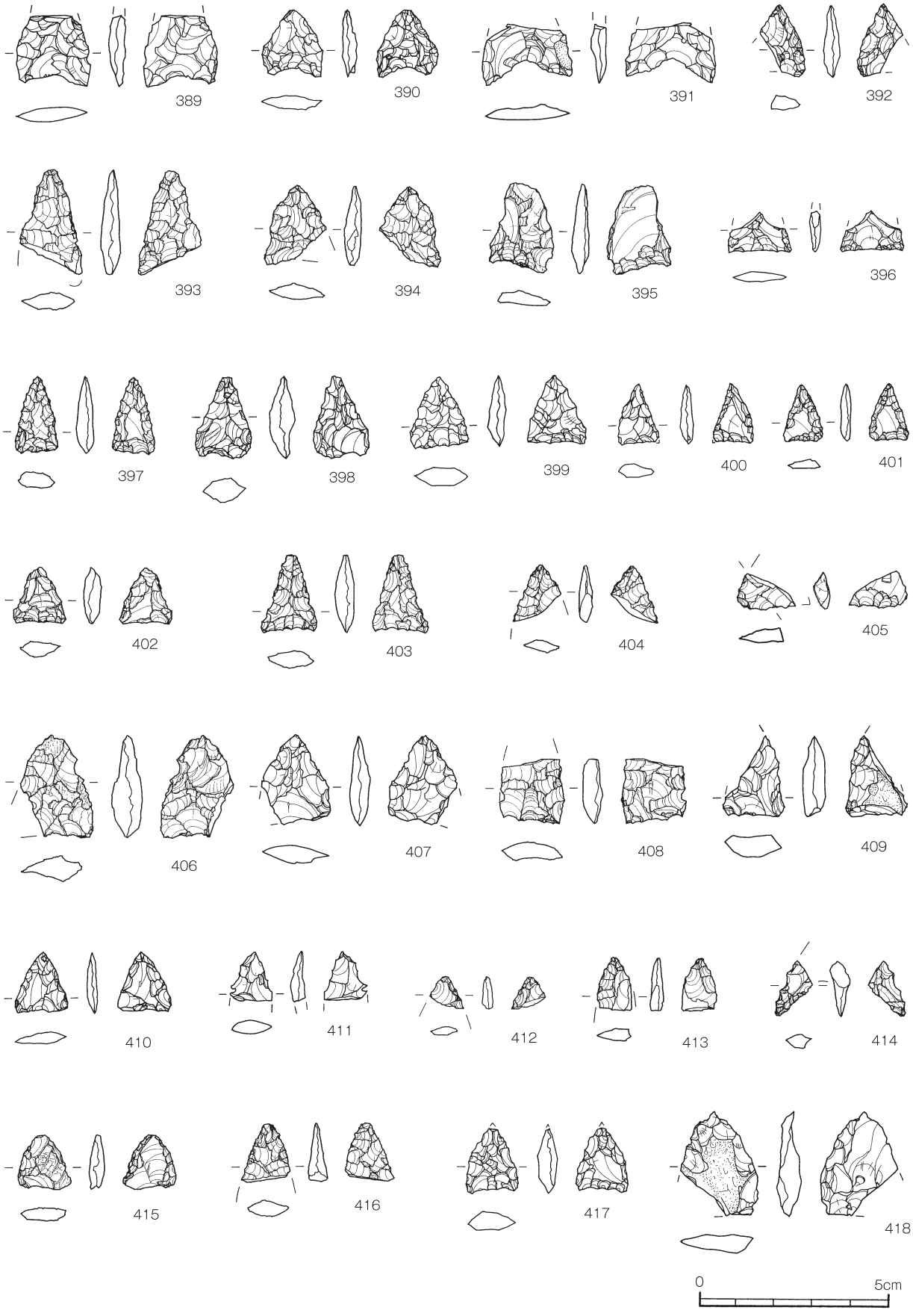
第32図　石鏃・土器分布図


330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
0
5cm

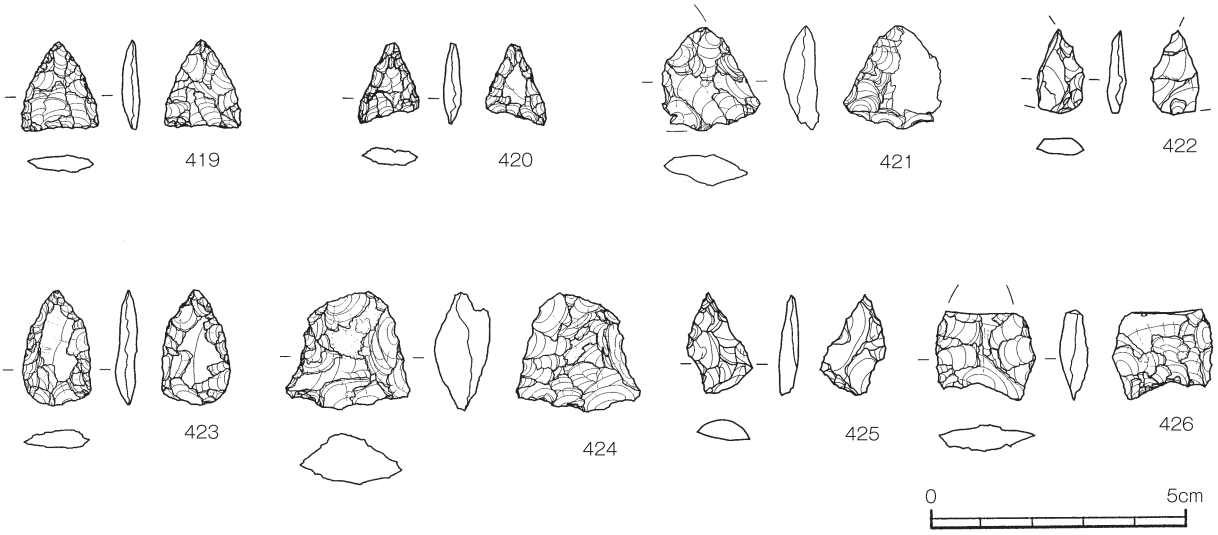
第33図　石鏃（1）


357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
0
5cm

第34図　石鏃（2）


389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
0
5cm

第35図　石鏃（3）



第36図　石鏃（4）

C類（396～412）

側辺部が直線的で基部も直線的なものである。396は先端部を欠損しているが基部が直線的なものである。397～403は幅狭な石鏃で基部は直線的であるが若干弯曲しているものもある。400～402は剥片鏃である。403は先端部が鈍く側辺はやや内弯するものである。404～409は一部欠損のみられるものであるが外弯し，基部が直線的なものである。407～409は五角形鏃に類似している。

D類（413・415～419）

側辺部が外弯し基部が直線的なものである。418は剥片鏃で一部自然面を残している。419はやや横長のもので調整剥離が丁寧に施されている。

E類（420～425）

基部に膨らみをもつものである。421は欠損品であり，側辺部の調整のみで製作途中と思われる。423は側辺が外弯し五角形を呈したものであり，基部は膨らんでいる。424は先端部が欠損しているもので基部に膨らみがある。425の先端部は鋭く側辺が直線的なものである。

F類（426）

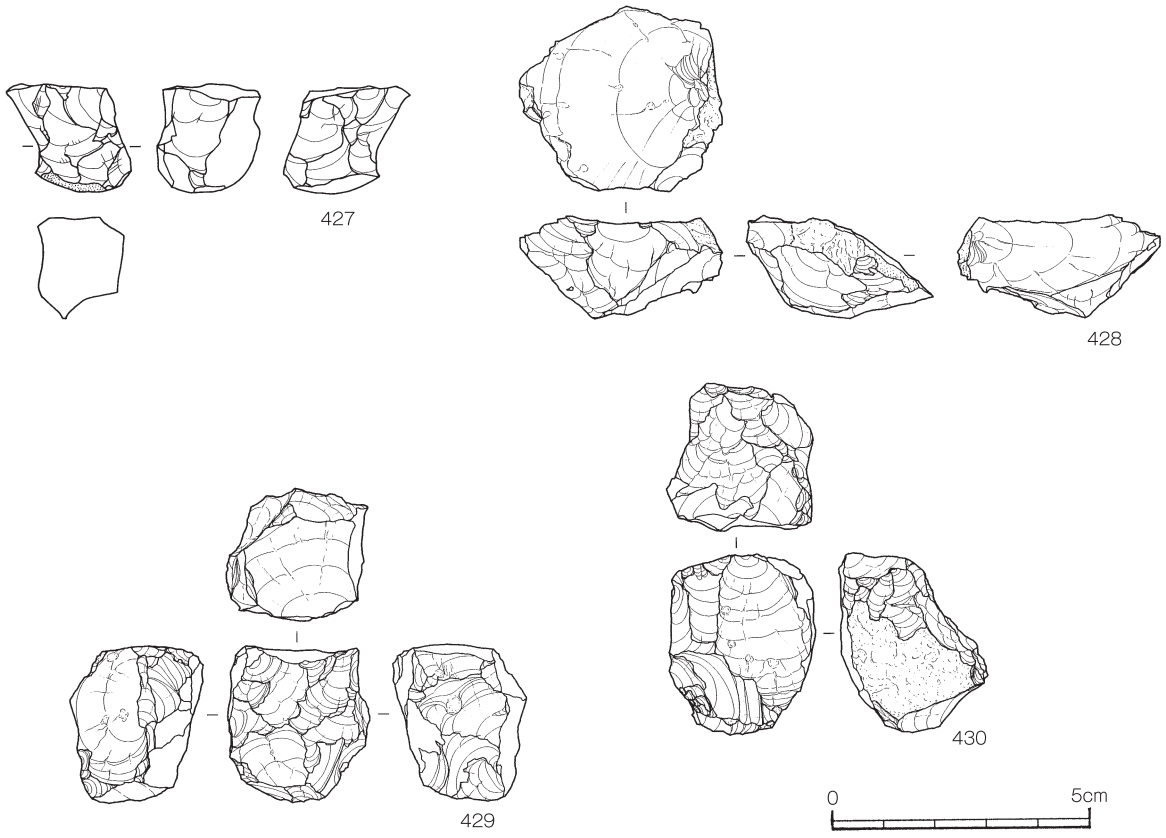
426は片脚が違うものである。

ただし，414は片脚のみであるが，基部の抉りが深く，336同様ほかのⅦ層出土の石鏃とは異質なものである。この２点については，他層からの混入の可能性もある。

石核（第37図，427～430）

Ⅶ層出土の石核であるが，ナイフ形石器文化・細石刃文化に共通するものであったので，この項でまとめた。427・428は上牛鼻産の黒曜石を，429・430は三船産の黒曜石を石材に用いている。

427は平坦な剥離面を打面とし，小型の剥片を剥いでいる石核であり，一部に自然面を残している。428は平坦に近い剥離面を打面とした剥片素材の石核であり，片面に求心状の剥離を行った石核である。429は平坦な剥離面を打面とし，正面と右側の打面方向の２方向から小型の剥片を剥いでいる石核である。430も平坦な剥離面を打面とし，剥片を剥いでいる石核で自然面を残し



第37図　石核

ている。

凹石・敲石・磨石（第38～39図）

凹石・敲石・磨石は元来分類すべきであろうが，形態の類似性や使用痕跡の複合性など，分類が難しく同一の項で取り扱うこととした。

凹石（431）

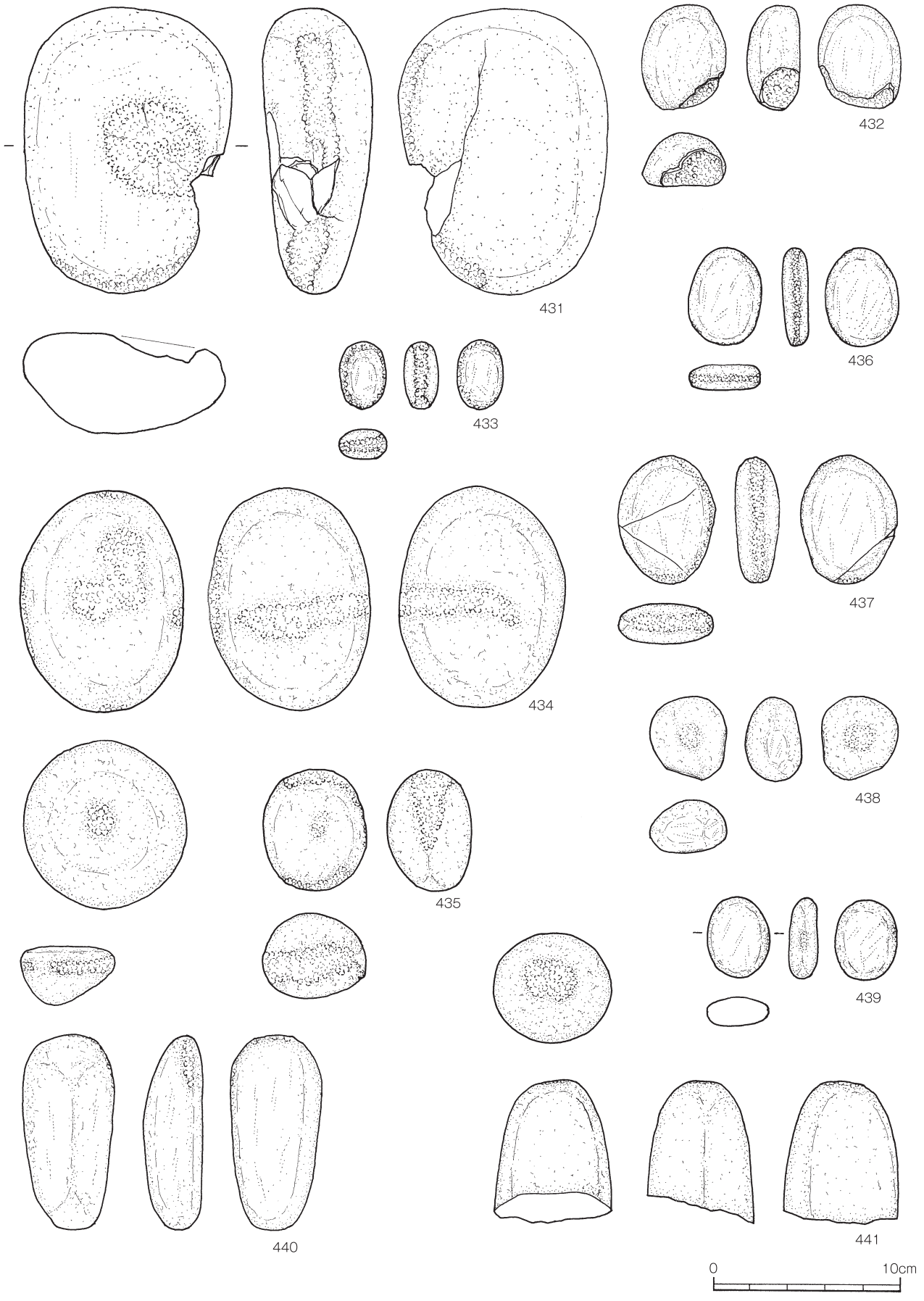
Ⅶ層出土の凹石は１点のみである。砂岩製の大型川原石を石材に用い，裏の平坦面縁辺部に径５㎝程で深さ1.2㎝の凹部をもつものである。平坦面には磨り面がみられ，片側縁部には敲打痕がみられる。

敲石（432～442）

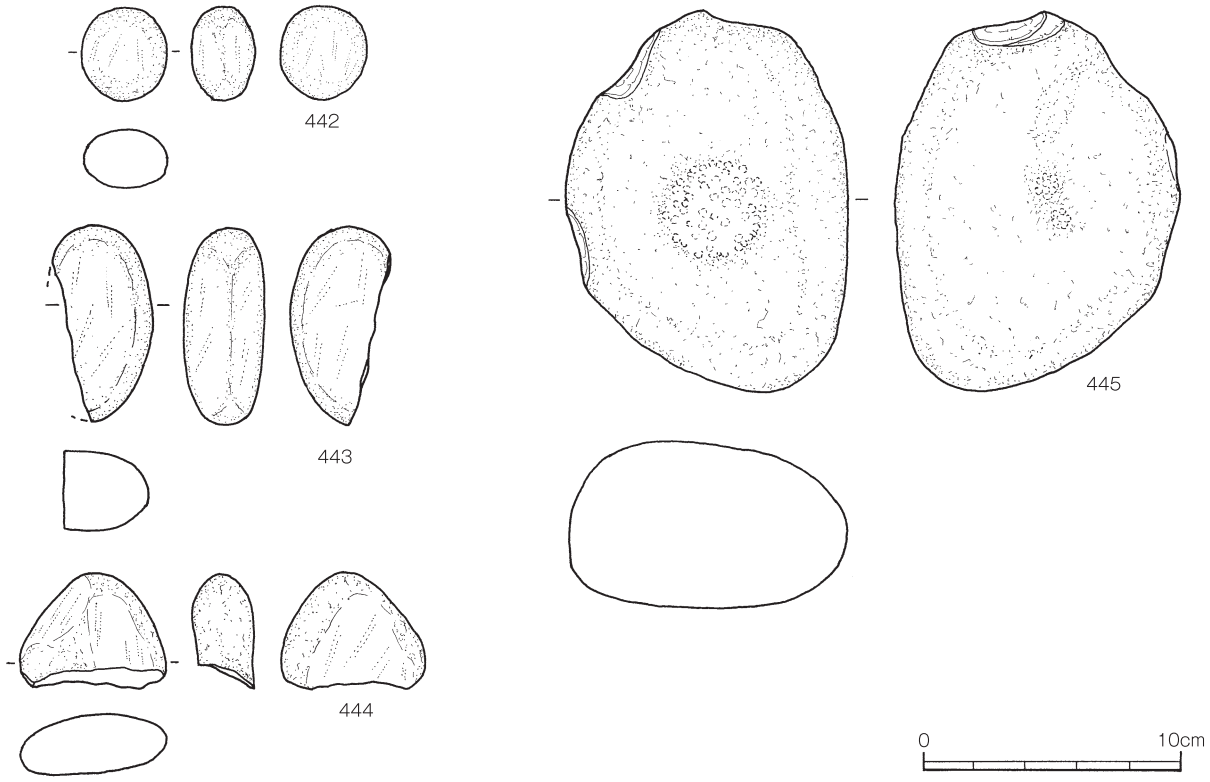
Ⅶ層出土の敲石は25点であり，そのうち９点の実測を行った。

432は，扁平な砂岩製の川原石を石材に用い，側縁部に敲打痕のみられるものである。表裏面ともに磨り面がみられる。これらは，石器製作に用いられたハンマーとも考えられる。

433～437は安山岩の楕円川原石を石材に用いた敲石で，433は上下両端と表面中央部に敲打痕がみられる。また裏面には若干の磨り面もみられる。434は上下端部と中央部に一巡するような敲打痕がみられる。440・441は棒状の敲石である。440は断面三角形の砂岩川原石を石材に用い，上端部に敲打痕がみられるもので，裏面の平坦面には磨り面がみられる。441は砂岩で棒状の川



第38図　凹石・敲石・磨石（1）



第39図　凹石・敲石・磨石・台石（2）

原石を石材に用いたもので，上端部に敲打痕がみられるものである。

磨石（443・444）

Ⅶ層出土の磨石は18点であり，そのうち２点の実測を行った。443・444とも扁平な砂岩製の川原石を用い，磨り面のみられるものである。

台石（第39図，445）

Ⅶ層出土の台石は１点のみの出土である。安山岩製の川原石を石材に用い，表面の中央部に約２㎝幅の敲打痕がみられるものである。その他に磨り面・敲打痕等が認められなかったので，台石として取り扱った。

第Ⅴ章　縄文時代の調査

縄文時代の遺構は，調査区の南西側において，縄文時代草創期の遺構及び土器や石鏃が良好な状態で検出された。また，調査区の中央部よりやや北側，つまり，曲輪１の南側で，集石遺構５基と黒曜石の原石の集中か所が検出された。

しかし，第Ⅲ章でも述べたように，山城による土地の造成等により，遺物包含層の残存状況は良好なものではなく，早期から晩期までの各時期の遺物が多量に表土から出土した。

第１節　遺構

１　草創期

草創期においては，G－９区を中心として２基の集石遺構と配石遺構１基及び１個体に近いと思われる土器・配石遺構や小片ではあるものの大量の土器片や石鏃等が検出された。

ただし，第Ⅳ章の旧石器時代で述べたように，草創期の遺物は，大量の細石器文化期の遺物と同一層より出土し，時期区分には苦慮した。集石遺構は磨石と思われるものを含んでいること，配石遺構は，県内の数か所で検出されている舟形配石炉にその形態が近いこと，検出面がⅦ層をやや掘り下げたレベルであることなどから，縄文時代草創期のものとして判断したものである。

また，これらの遺構の立地を見ると，９列より南側に位置し，崖面まで数ｍしかないことから，旧石器時代及び縄文時代草創期には，この台地はまだ南側へ舌状に延びていたものと考えられる。

・１号集石（第42図）

１号集石は，G－９区の西側で検出された。検出面は，Ⅶ層である。中央部分に大きめの安山岩の板石状のものを配している。板状の安山岩の大き目の破片が多いことから，被熱により破砕したものと思われる。他には，砂岩の円礫も用いられている。大き目の石が集中する部分が中心部と考えられ，西から東へ長楕円状にこれらの石は分布している。掘り込みはされなかった。

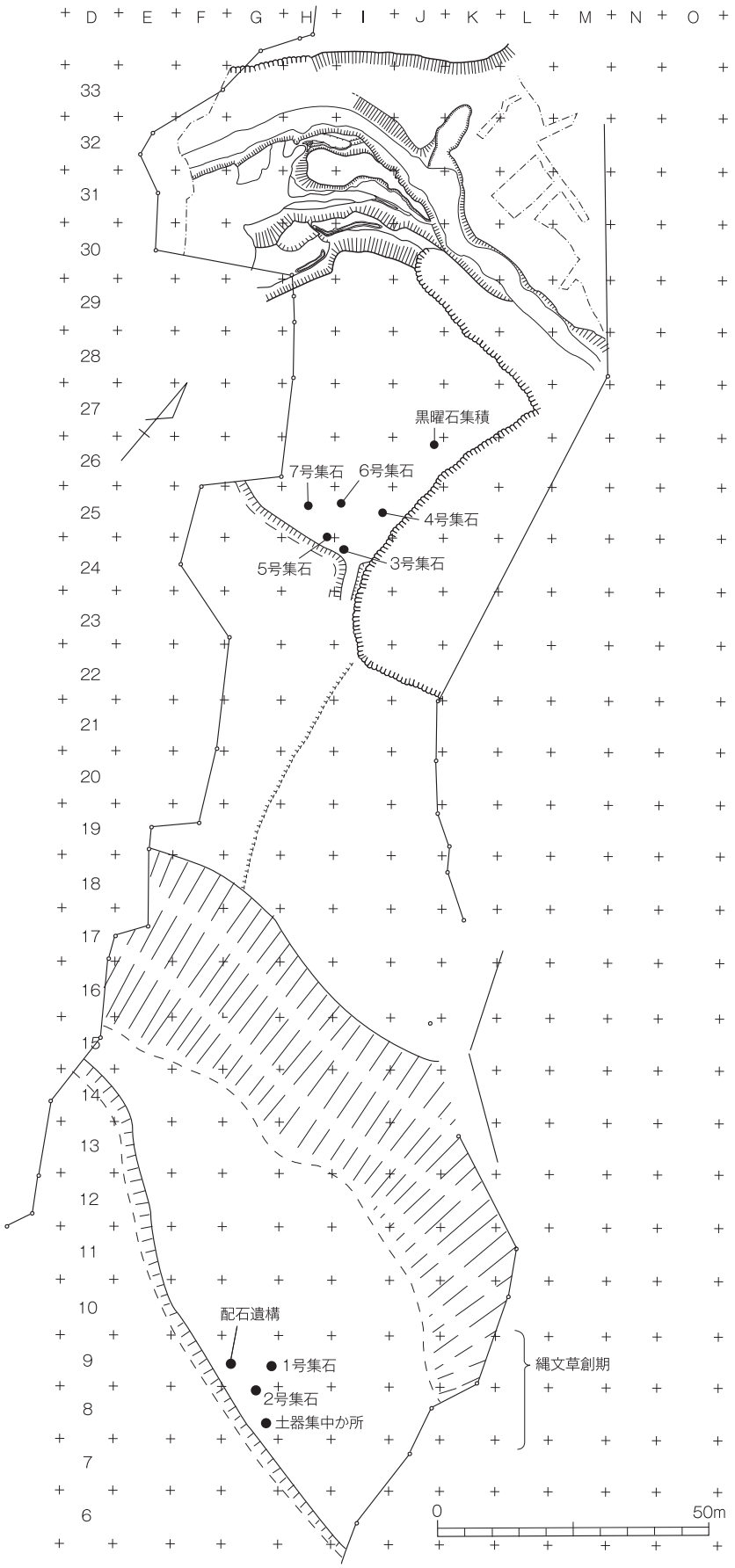
・２号集石（第43図）

２号集石もⅦ層で検出された。1号集石より６ｍほど南にあり，１号集石に比するとその規模は大きくない。人頭大から数㎝の大きさの石で構成されている。1号集石と比べると，大きめの板状の石を用いていることや安山岩や砂岩を用いていること，掘り込みを有しないなどの共通点がある。

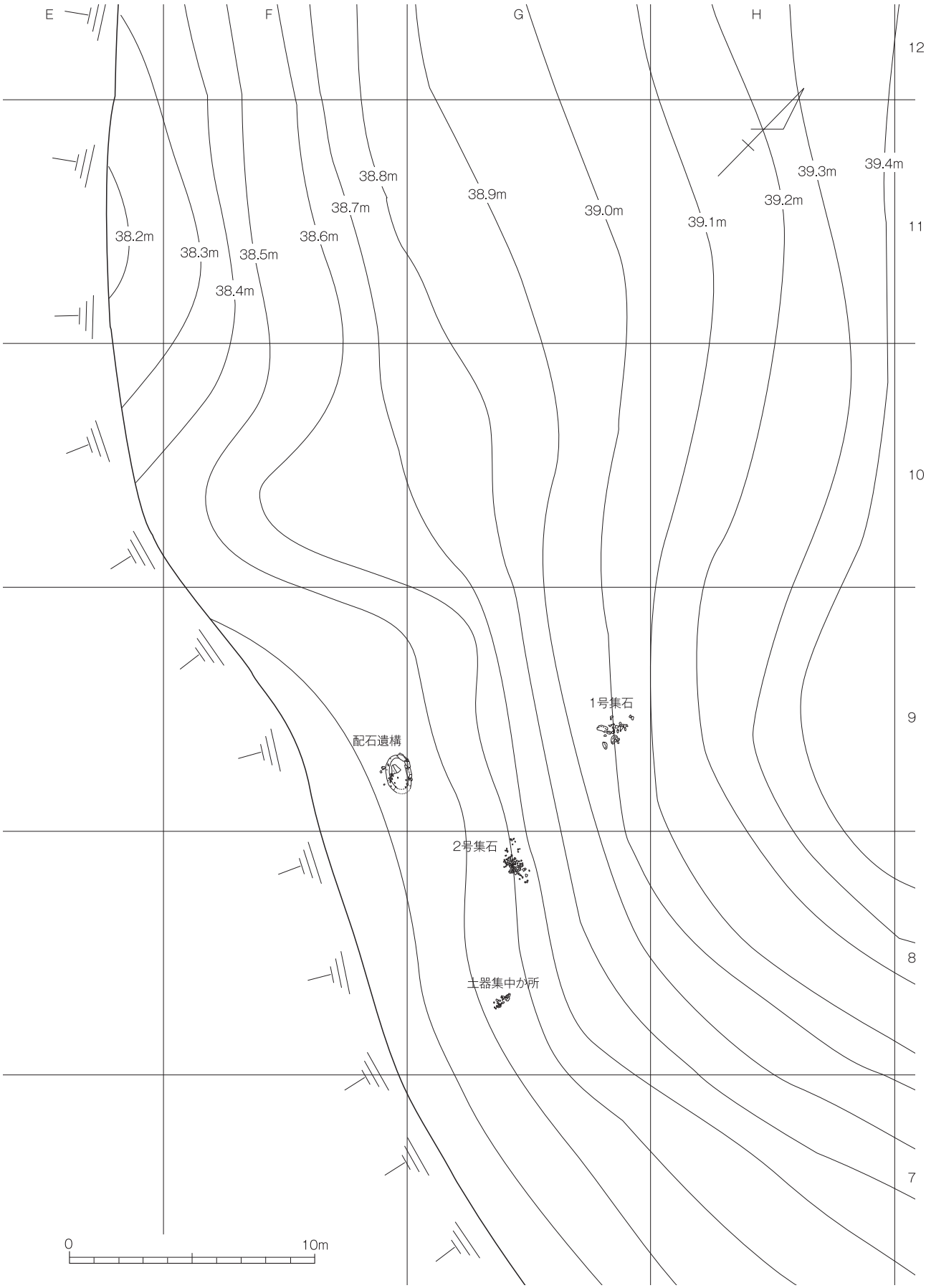
・配石遺構（第44図）

配石遺構は，２号集石の西側約５ｍの地点，Ⅶ層面で検出された。約90㎝×50㎝の長楕円形で，検出面からの深さは約20㎝である。検出面部分には，10㎝×20㎝程度の煉瓦状の安山岩が整然と３枚並べられていた。検出面にそって浅い窪みがあったことから，楕円状に板石を配していたと思われる。

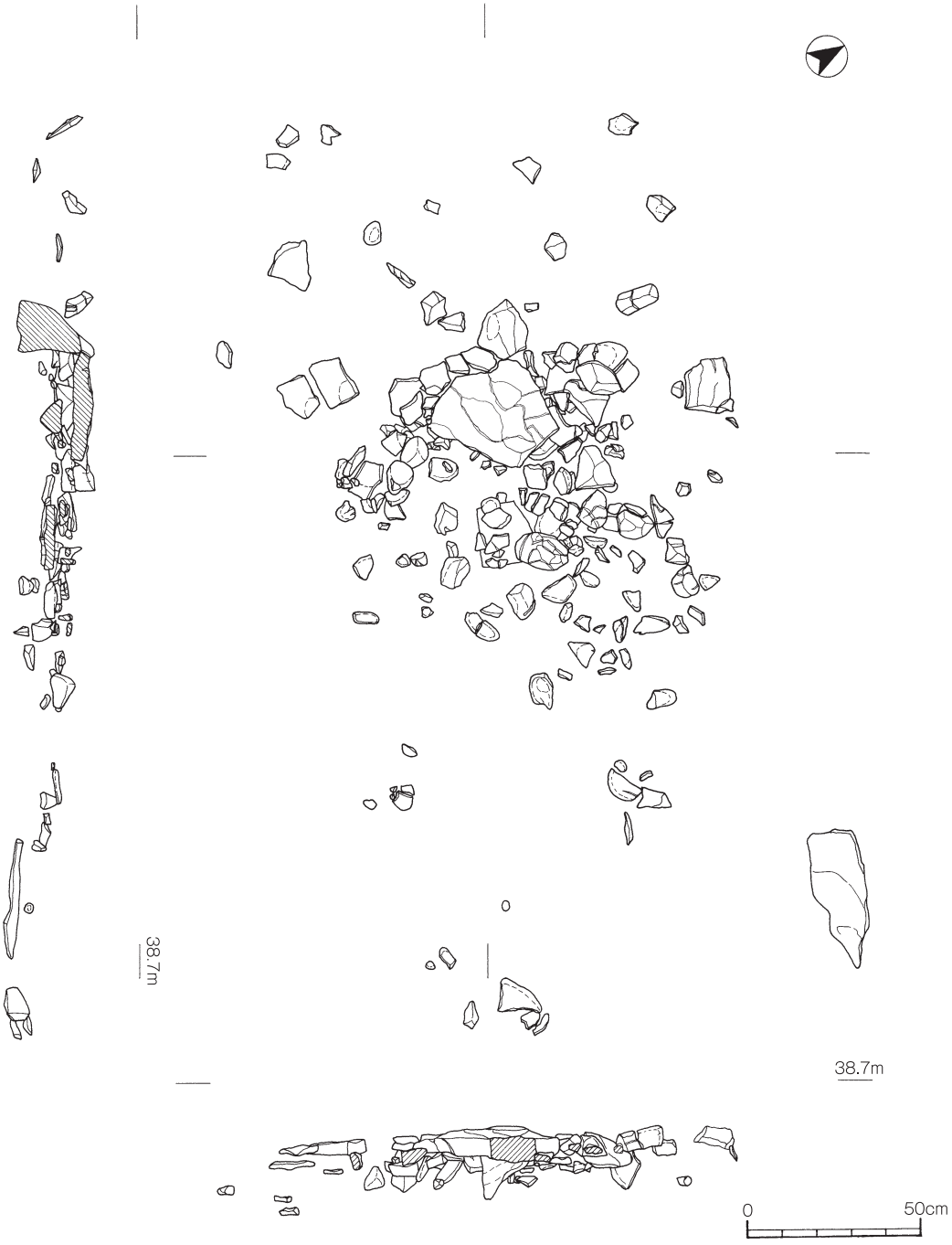
また，埋土及び遺構の周辺からは，草創期の土器が出土している。



第40図　縄文時代遺構配置図



第41図　縄文時代草創期遺構配置図及び地形図



第42図　縄文時代草創期１号集石

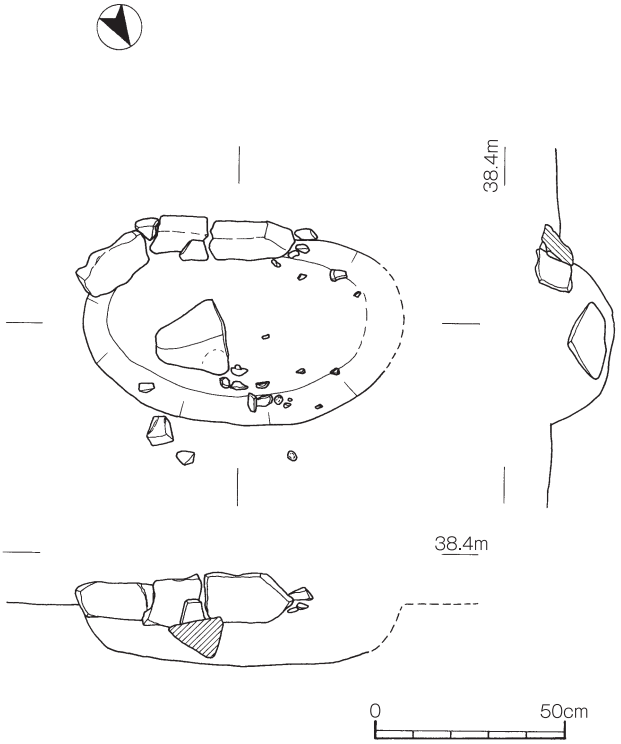
・土器集中か所（第45図）

G－８区の中央部において，他の遺構とほぼ同様にⅦ層をやや掘り下げたところで，一個体に近い状態と思われる土器を検出した。出土した土器は非常に脆かったため，現場で薬品処理を行った。その後，土ごと切り取って持ち帰り，埋蔵文化財センターで再度薬品処理を行って接合作業を行った。

検出当初は，完形に近い状態に復元が可能かと思われたが，土器が非常に脆かったために完全に接合したものは少なかった。接合を行い，図上復元したものが，第51図の466である。その特徴等については，遺物の項で述べることにする。



第43図　縄文時代草創期２号集石



第44図　縄文時代草創期配石遺構



第45図　土器集中か所（No.466）

２　早期

Ⅳ層検出の集石遺構は，Ⅰ-25区周辺を中心に検出されている。３号集石～６号集石である。ただし，アカホヤの一次堆積であるⅢb層がブロック状に存在するため，その時期は，縄文前期以降の可能性も否めない。

・３号集石

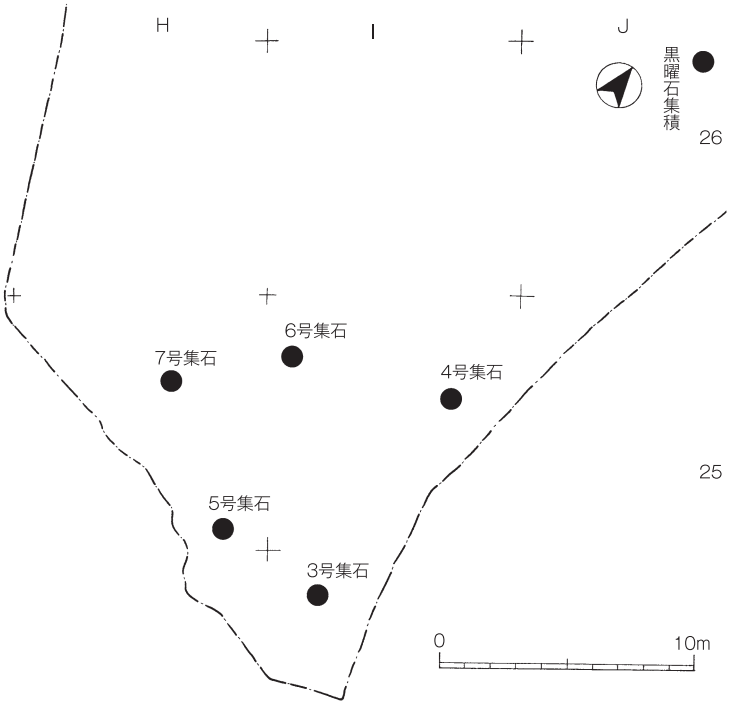
３号集石は，拳大程度以下の円礫や角礫で構成されている。特に大き目の礫が集中している。東側及び北側がこの集石の中心であると思われる。

・４号集石

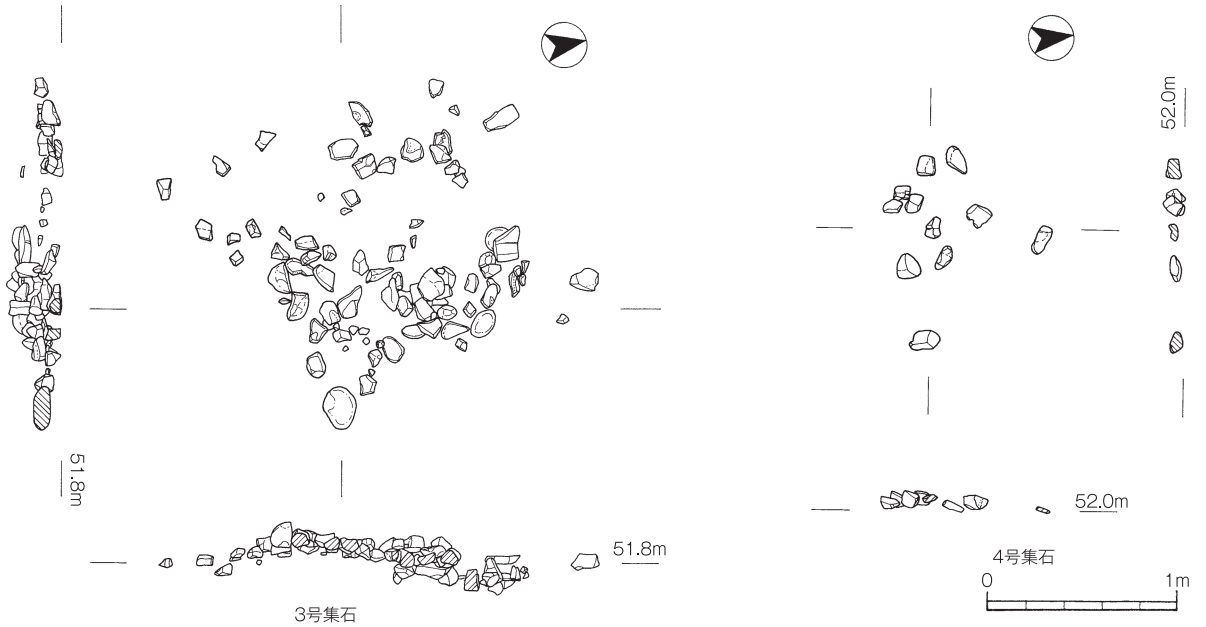
４号集石は，11個の拳大の安山岩と砂岩で構成されたもので，全ての礫がほぼ同じレベルである。

・５号集石

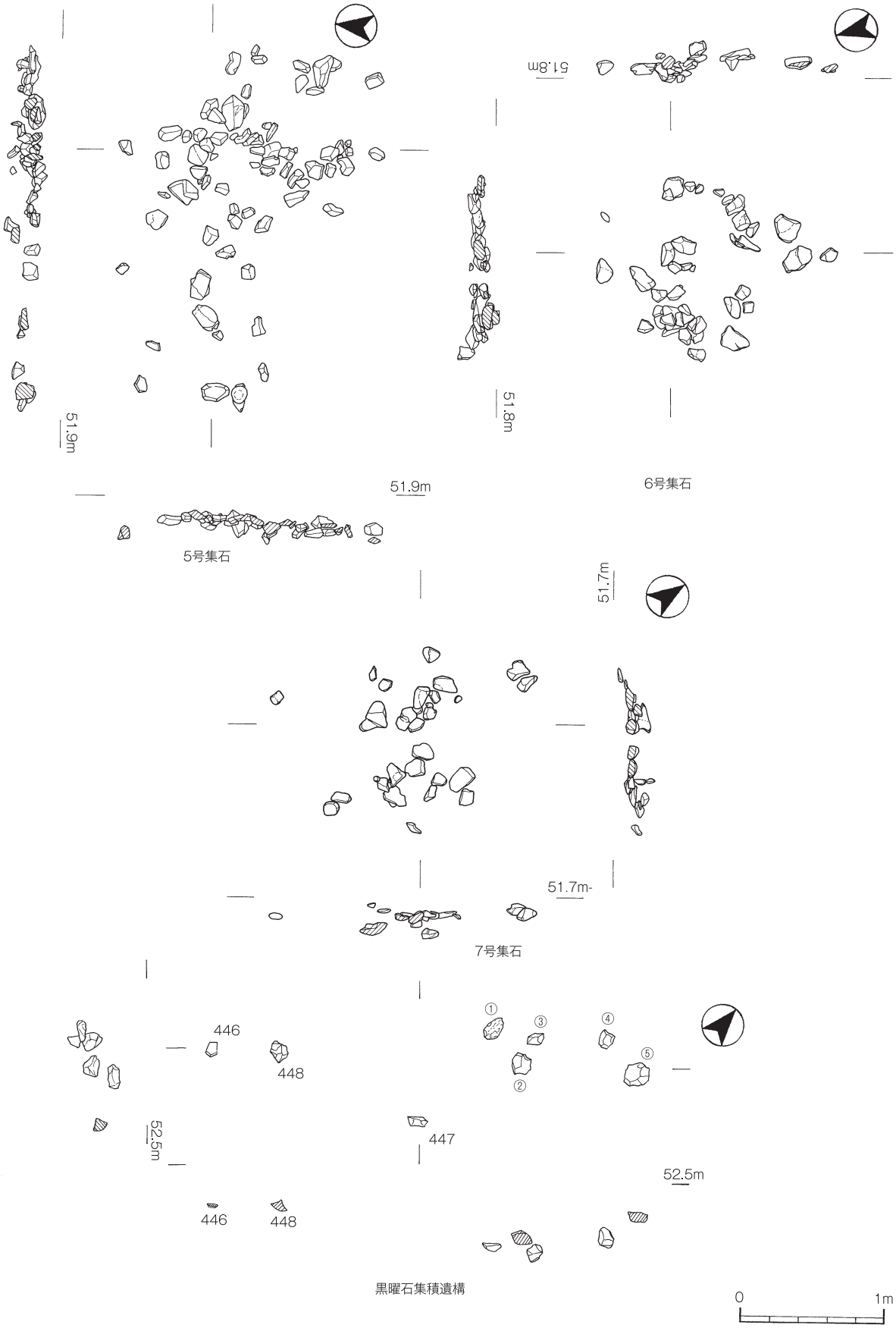
５号集石は，３号集石の５ｍほど西側にあり，約40個の角礫を中心として，構成されている。東側に大き目の礫があり，集中度も高い。４号集石と同様に全ての礫がほぼ同じレベルである。



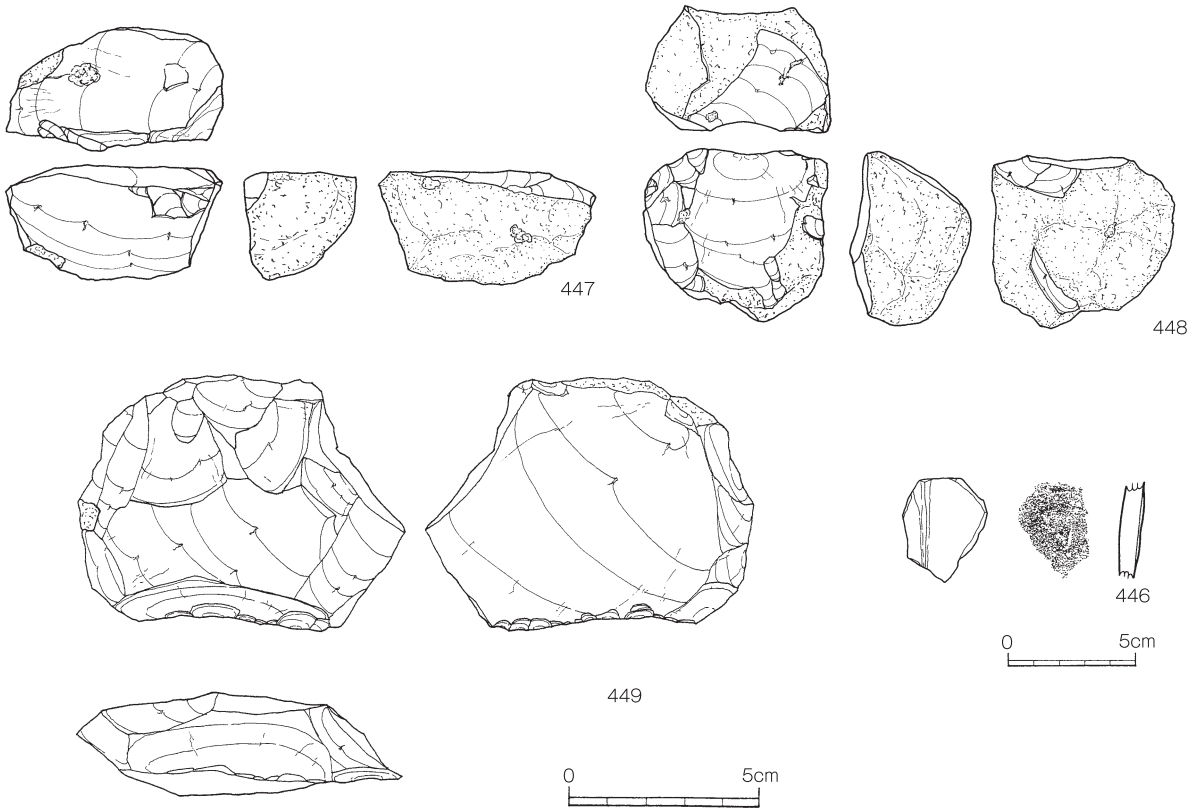
第46図　縄文時代集石遺構等位置図



第47図　縄文時代集石遺構３・４号



第48図　縄文時代集石遺構５・６・７号及び黒曜石集積遺構



第49図　黒曜石集積出土遺物

・６号集石

６号集石は，検出された集石の中では，もっとも北側にある。一見，５号集石を小さくしたように見えるが，数個の大き目の礫が被熱して破砕したもののようで，石質も同様のものが多い。また，４号集石から６号集石のすべてにおいて，掘り込みは検出されなかった。

３　前期

・７号集石

３号集石から６号集石は，Ⅳ層の検出であったが，７号集石は，アカホヤの一次堆積であるⅢｂ層から検出されている。円礫と角礫の中間的な礫20個程度で構成されており，東側と西側に分割されたように見える。また，検出層から，縄文前期以降と考えられる。

・黒曜石集積遺構

この遺構は，Ｊ-26区のⅢ層から検出されたもので，７個の黒曜石と１個の土器が３×２ｍの範囲から検出された。また，この集積からやや離れた地点で，449の黒曜石が出土している。

449は三船原産の気泡の多い黒曜石を用いたスクレーパーである。大形剥片の打点部を残し，先端部を半裁して，一側縁部に粗い調整剥離を両面から加えて刃部にしている。

出土した７個の黒曜石は，全て上牛鼻原産の黒曜石で447と448以外は原石である。447と448は自然面を残しながら礫を半裁したものである。ほとんどが原石としてこの地に持ちこまれたものである。446は，深鉢の薄手の胴部片で，縦位の微隆帯を施す深浦式であり，周辺からも同様の遺物が出土している（第49図）。次の表は，黒曜石集積遺構出土の原石の法量である。

黒曜石集積遺構観察表

遺物番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	原産地	備考
447	3.0	5.7	3.0	57.08	上牛鼻	石核
448	4.5	4.6	3.2	73.43	上牛鼻	石核
①	5.9	4.0	2.4	61.84	上牛鼻	原石
②	4.6	3.8	3.8	95.36	上牛鼻	原石
③	5.7	3.7	2.8	86.85	上牛鼻	原石
④	5.2	4.8	4.0	121.63	上牛鼻	原石
⑤	5.2	4.7	3.3	118.03	上牛鼻	原石

第２節　遺物

縄文時代の遺物は，草創期から晩期まで各時期の遺物が出土しているが，安定して出土したのは草創期のみで，他は後世のピット，土坑，竪穴，空堀などや表土から出土したものが多かった。また，層的にも狭い範囲の残存か所が多かったため，出土状況の分布図の掲載は草創期だけにとどめた。

１　草創期

草創期の遺物としては，土器片，石鏃，磨石，凹石類が出土した。石鏃やその他の石器についての出土状況分布図，実測図等は，旧石器時代の最後の部分に掲載した通りである。

（１）土器（第51図　450～466）

確認調査時の遺物も含めて，約336点の土器がF・G－８～11区を主に出土し，接合を実施した結果，資料数としては17点（450～466）になった。土器の器種としては，深鉢形土器で，口縁部・胴部・底部（丸底）がある。

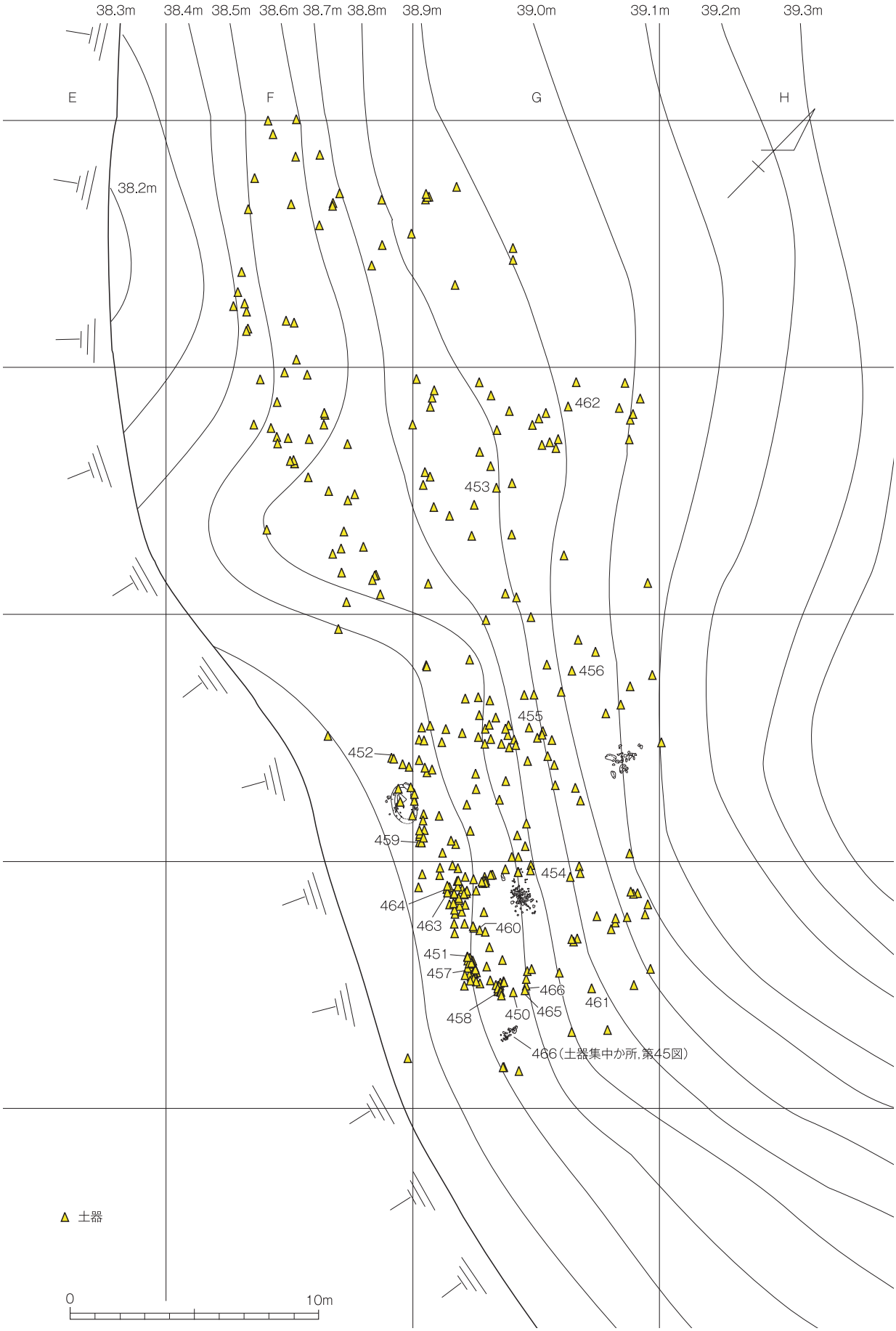
深鉢形土器は，いわゆる隆帯文土器と呼ばれる土器がほとんどである。

450～453は，口縁部片である。450と452には口唇部には刻目が施され，451・453は無文で丸みを呈した仕上げがみられる。口縁部の器形は若干内弯気味で，幅広の隆帯文を巡らせるタイプである。器壁厚味は８㎜から10㎜の肉厚である。450・451は口縁部上端部に隣接して２条以上の隆帯文が巡り，453は１条が巡る。隆帯文は，幅10㎜～17㎜，高さ５㎜～10㎜の幅広の太い隆帯が特徴である。452には僅かに貝殻の肋頂部の押圧痕が確認されるが，他は無文の刻目である。

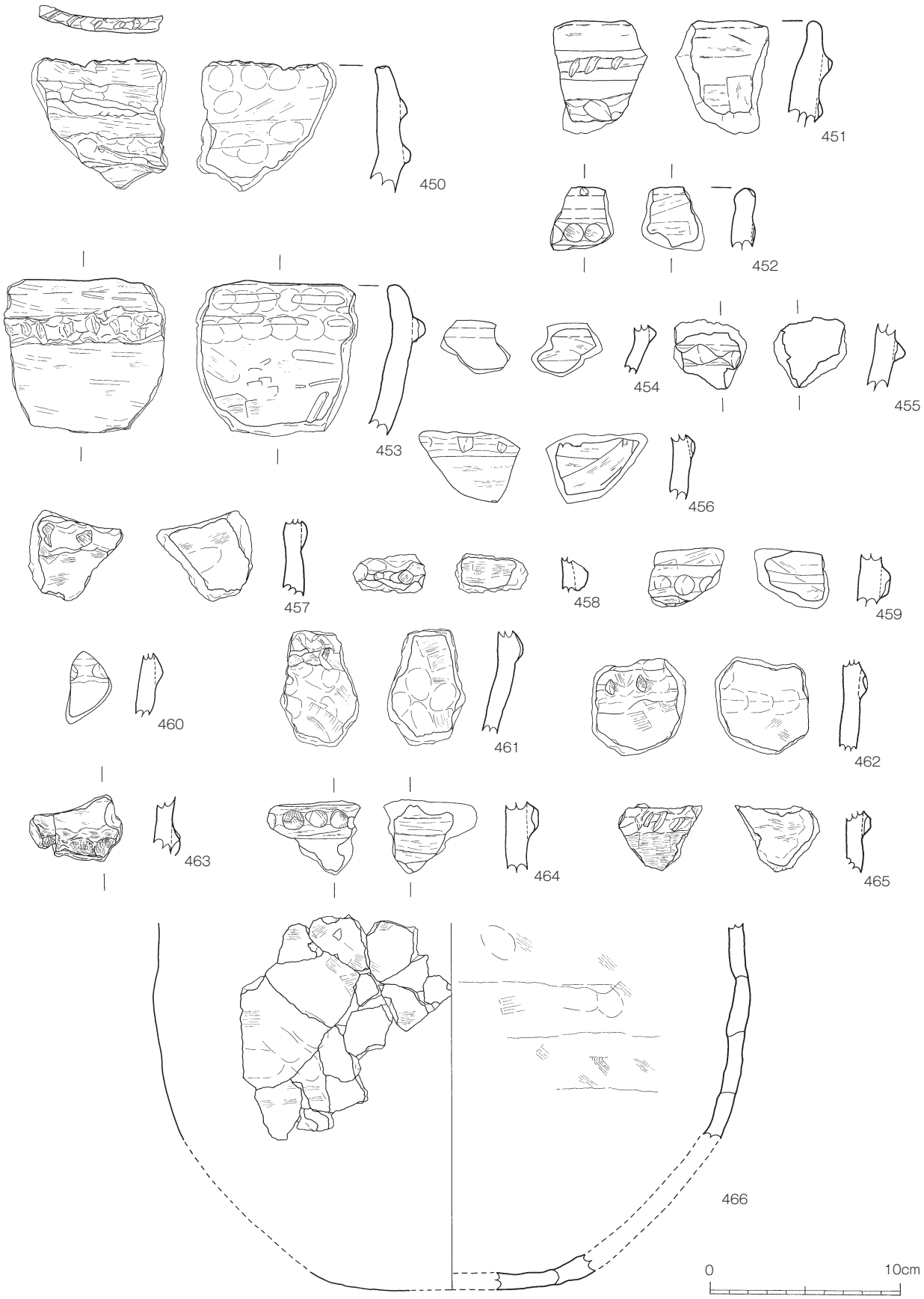
454～465は口縁部に近い胴部片で，１条の隆帯文が確認される破片である。隆帯は，口縁部とほぼ同じで，幅広の太めのタイプである。463の刻目には明らかに貝殻の肋頂部の押圧痕が確認される。また，器表面の剥離が著しいが，455・464にも僅かに確認され，口縁部同様に肋頂部の押圧痕が施される刻目が存在することが判明した。

466は胴部から底部片の一括資料である。胴部と底部は直接接合しないが，図のように器形を復元出来る。器壁厚味は約６㎜程度で，２㎝程度の輪積み手法が確認される。

隆帯上の刻目については２種に分けられる。刻目が細く深いものはヘラ状の施文具で，刻目が幅広く浅いものは貝殻の肋頂部の押圧痕を施すタイプである。



第50図　縄文時代草創期土器出土状況



第51図　縄文時代草創期出土土器

2　早期（第52図～第66図）

縄文時代早期の土器は，包含層としては，Ⅳ層及びⅤ層からの出土である。ただし，包含層からの出土は多くない。出土遺物は，前葉では前平式系及び貝殻押圧文ないしは押引文等を施すもの，後葉では，押型文土器や塞ノ神式土器等が出土している。

・土器（第52図～第65図）

467～530は貝殻条痕による文様が施されているものである。器形は大まかに円筒形と角筒形とに分かれるが，不明瞭なものが多い。467～493はやや太めの貝殻条痕文が施されているものである。この内，467～473は円筒形の口縁部片である。467は，口縁部上端に斜位の貝殻刺突文を施す。470は，貝殻刺突文を３列に密に施すものである。471の胴部には，貝殻条痕文の後に貝殻刺突による連点状の施文が施されている。472は，縦位の貝殻条痕文が重ねられている。473は，縦位の貝殻刺突文を施した後に下位に横位貝殻刺突文を巡らせる。

474・476は角筒形の口縁部片である。477～493は胴部片である。条痕文のみの477と二重施文の478～493とに大別できる。器形は，477・478が円筒形で479～493が角筒形である。479は角部に近い破片で，流水文の他に貝殻刺突による連点文が見られる。488は，角筒形の胴部片である。貝殻条痕文の上に短い沈線文を菱形状に施文されている。487は，緩やかな角部を有する。流水文から菱形状に斜位の貝殻刺突文が施されている。494～511は，貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねるものである。497～499は，やや縦位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が重ねられる。500は口縁部に近い。クサビ状の貼付文が見られる。

512～519は底部片である。512はレモン形の可能性も考えられる。512～514はやや太めのキザミ目が施される。515～519は角筒形の可能性が高い。518と519は胎土色調から同一個体と考えられる。

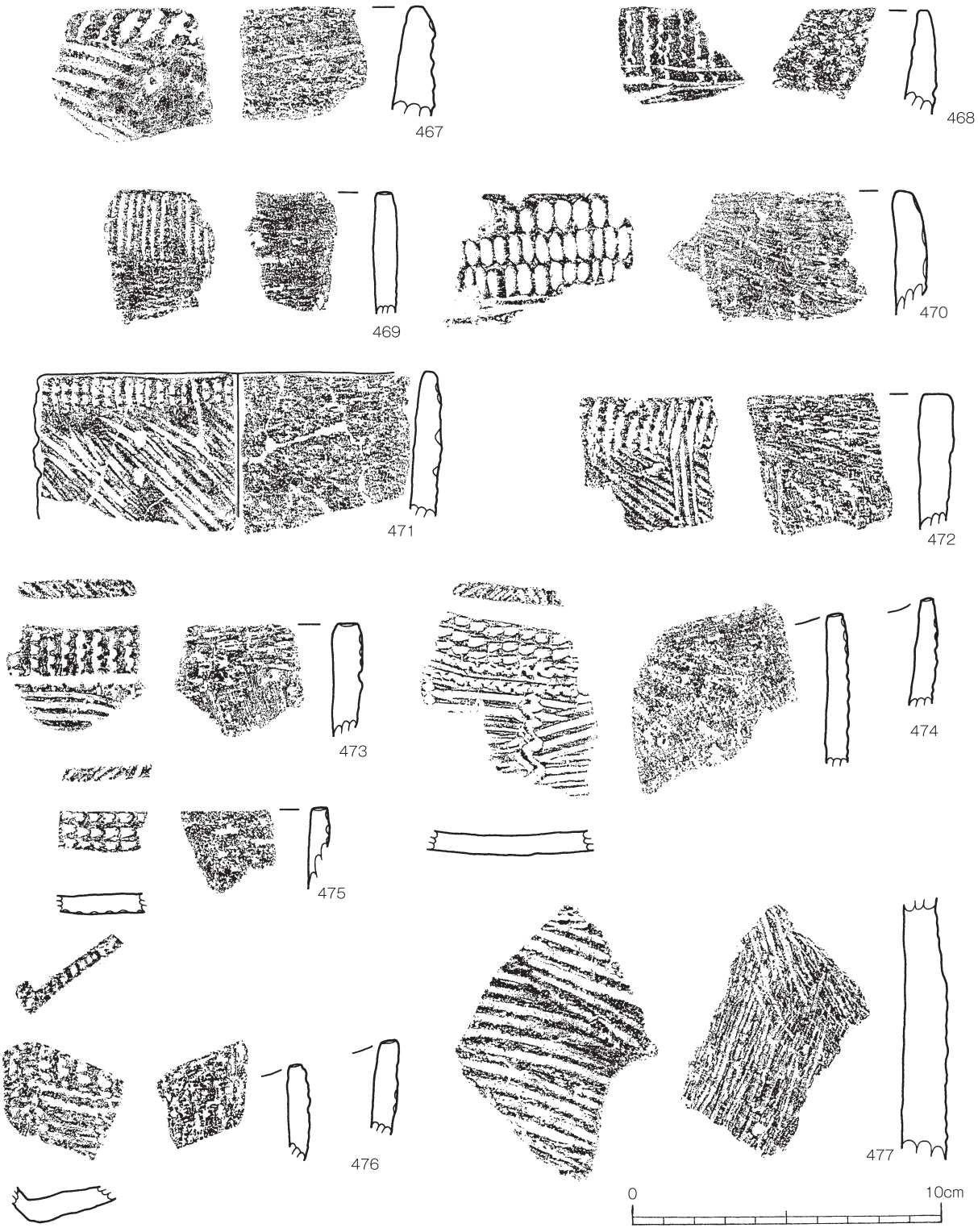
520～529は胴部に貝殻押圧文ないしは押引文を施すものである。520は，口縁部がわずかに外傾する。口唇部にキザミ目が施され，口縁部には連点状の貝殻刺突文がめぐりその下位に縦位に連点状の貝殻刺突文が施されている。530は，口縁部が外反し，斜位の貝殻刺突文が施されている。

531～579は器面に押型文を施す一群である。山形文を中心に，楕円文や条線文などが出土している。531～558は山形押型文である。胎土や色調などから同一個体の可能性が高い。口縁部は外反して，胴部でわずかに膨らむ器形を呈する。口唇部は平坦に仕上げられ，押型文が施文される。口縁部から胴部に至るまで縦位の押型文を主体とするが，場所によっては斜位になる。口縁部内面にも押型文が施され，これは横位に施文される。559は同一器面上に山形文と楕円文とが施される。560・561は楕円文が施される。押型の粒は，長軸で５mm程度，短軸で３mm程度である。562～564はやや間延びした山形文である。

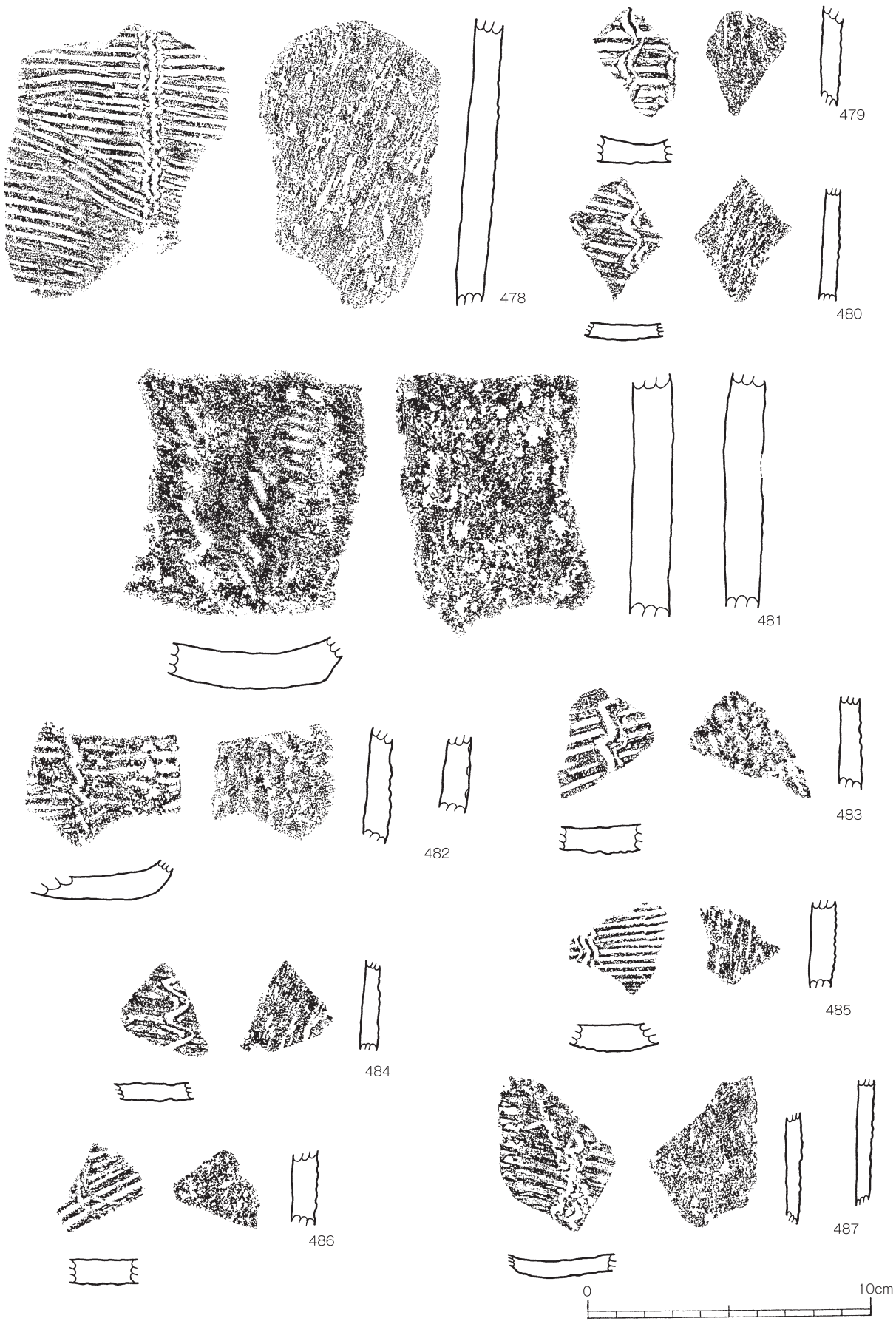
565～580は条線押型文である。口縁部がわずかに外反し，胴部はわずかに膨らんで径の小さな底部へと至る器形を呈する。胎土や色調などからこれらは同一個体の可能性が高い。内面は全体的に丁寧なナデが施されている。

581は口縁部が外反して頸部でしまり胴部でわずかに膨らむ器形を呈する。口唇部はやや丸みを帯びている。内面は丁寧にナデが施され，口縁部内面には縄文が施文されている。

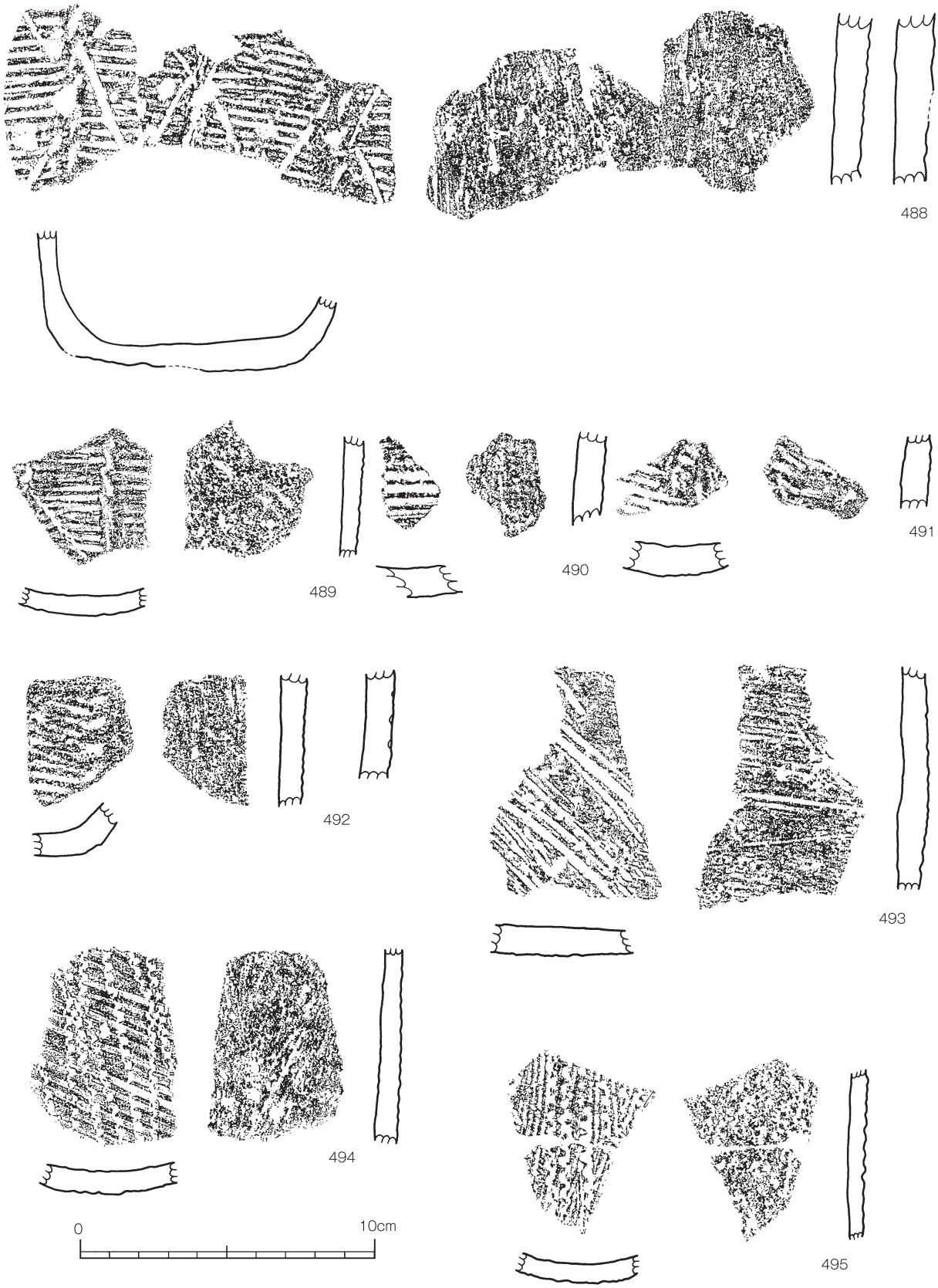
582～600は口縁部がラッパ状に外反する器形を呈する。582～586は胎土や色調から同一個体で



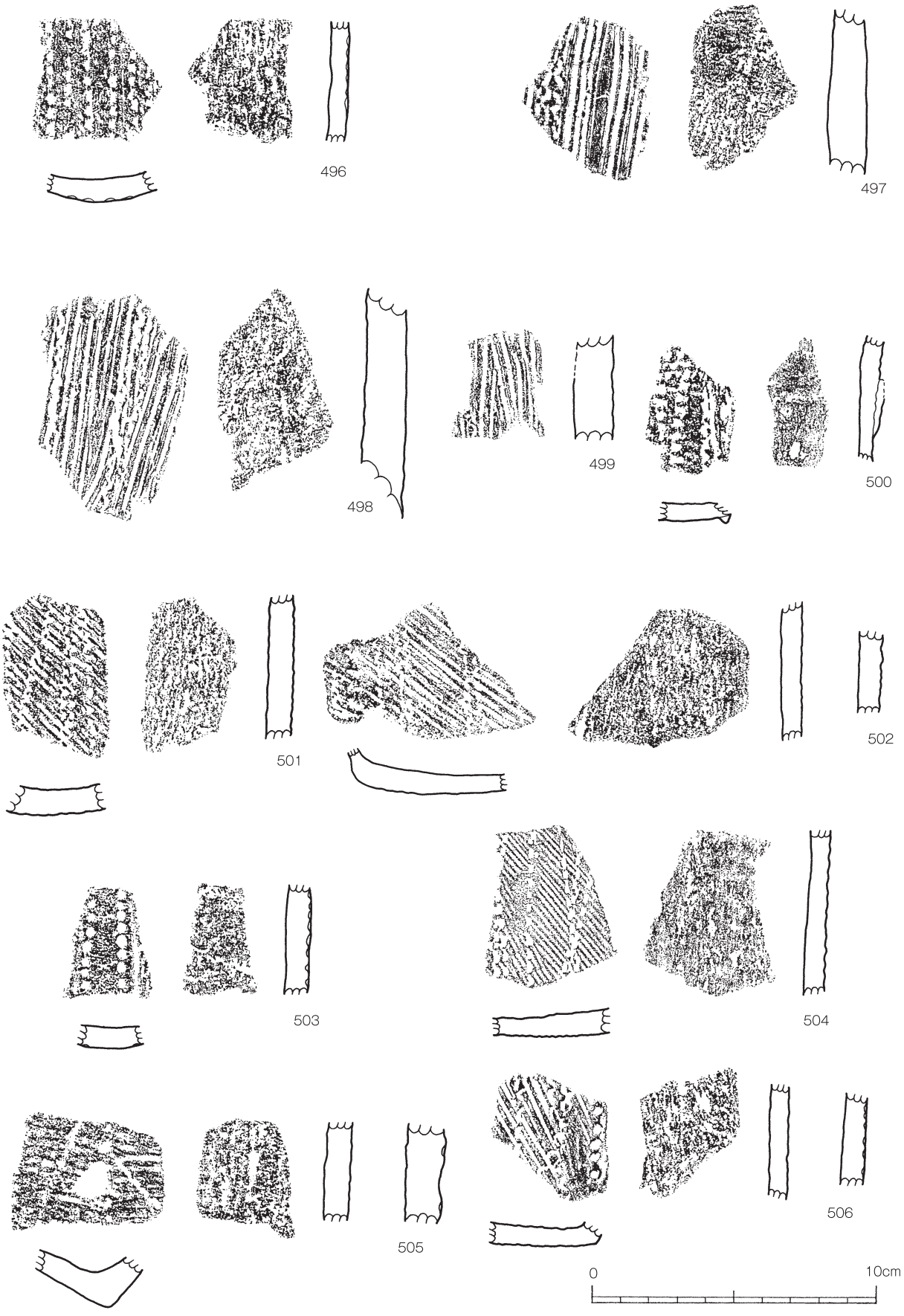
第52図　縄文時代早期出土土器（1）



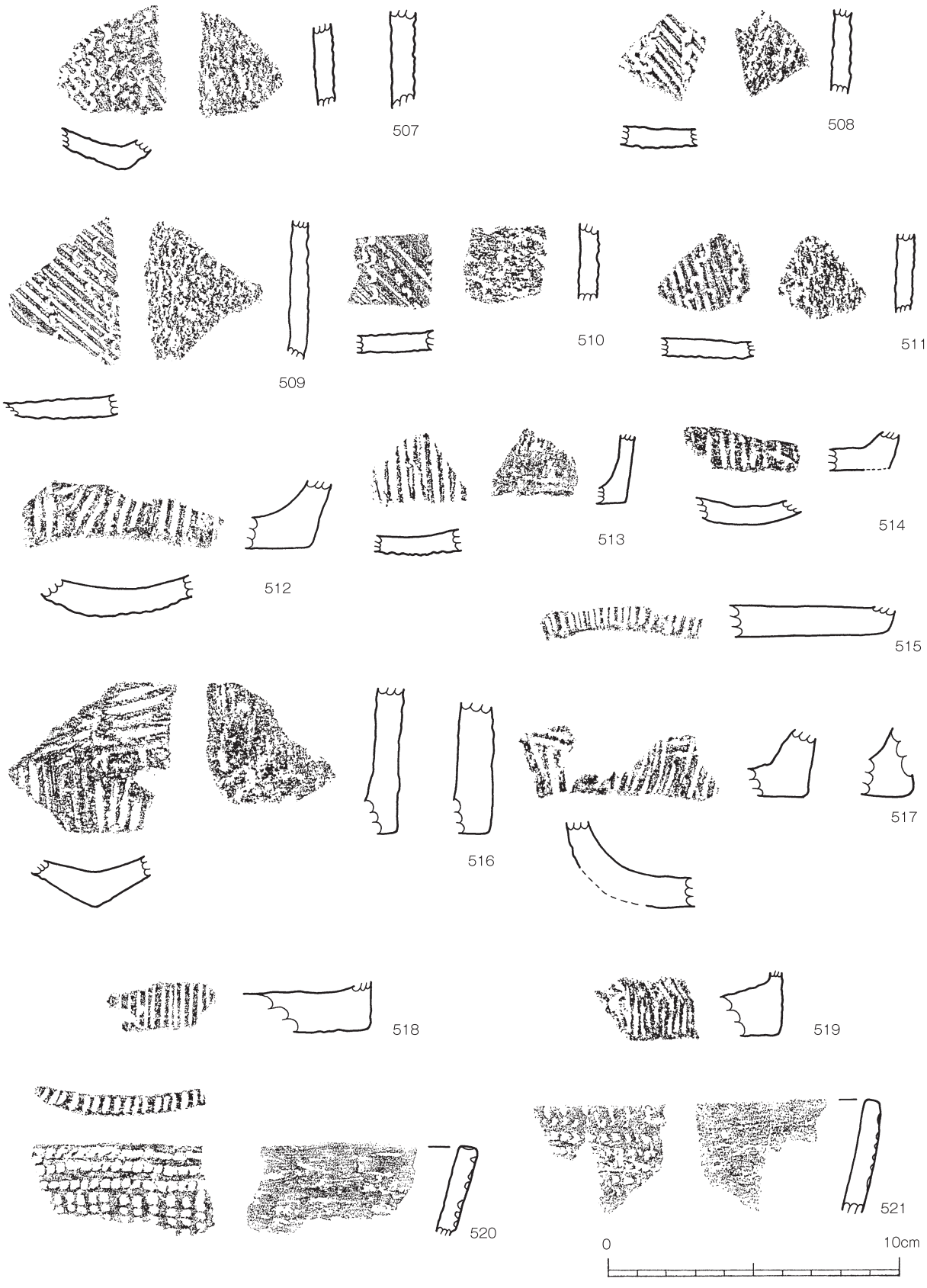
第53図　縄文時代早期出土土器（2）



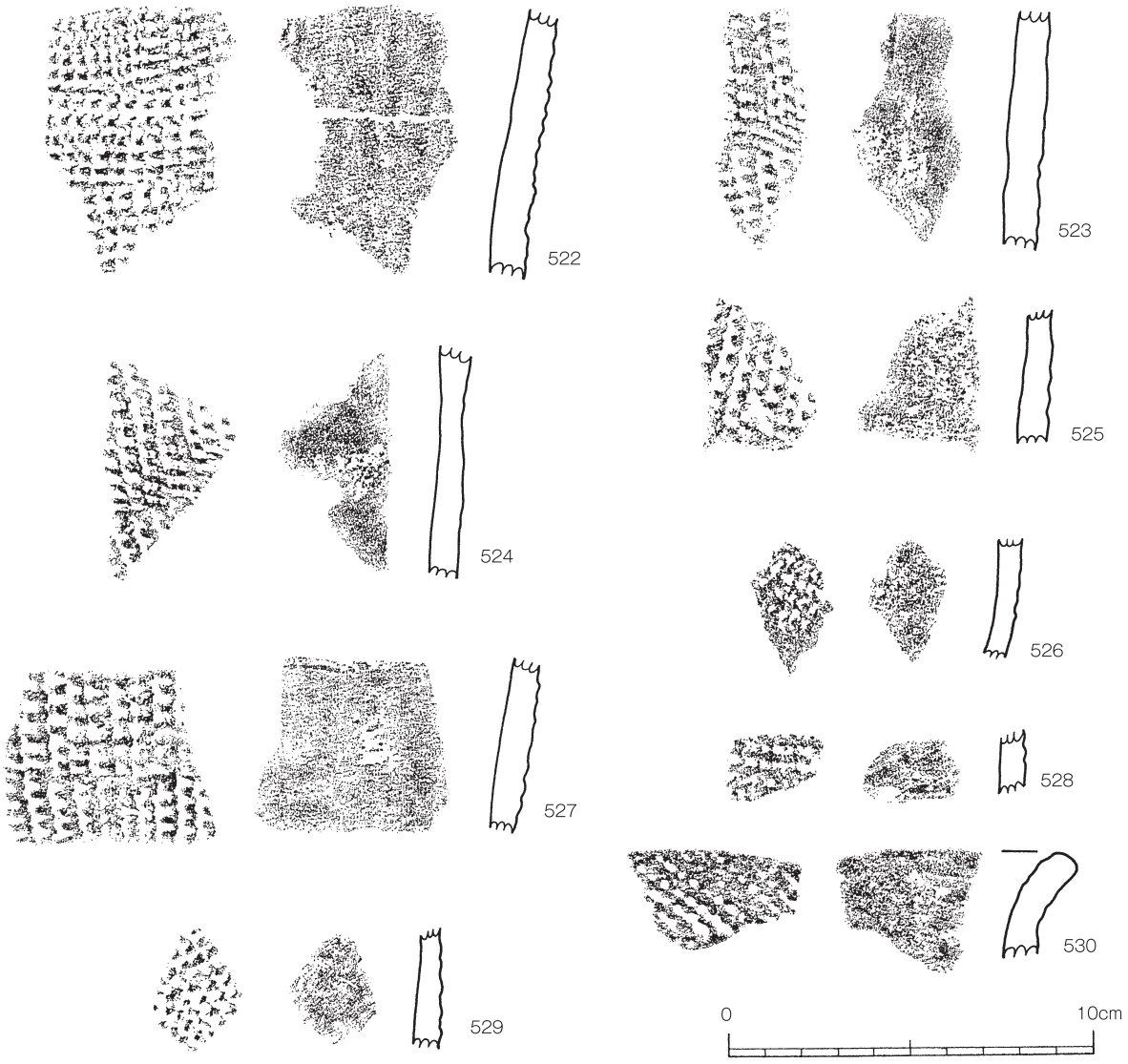
第54図　縄文時代早期出土土器（3）



第55図　縄文時代早期出土土器（4）



第56図　縄文時代早期出土土器（5）



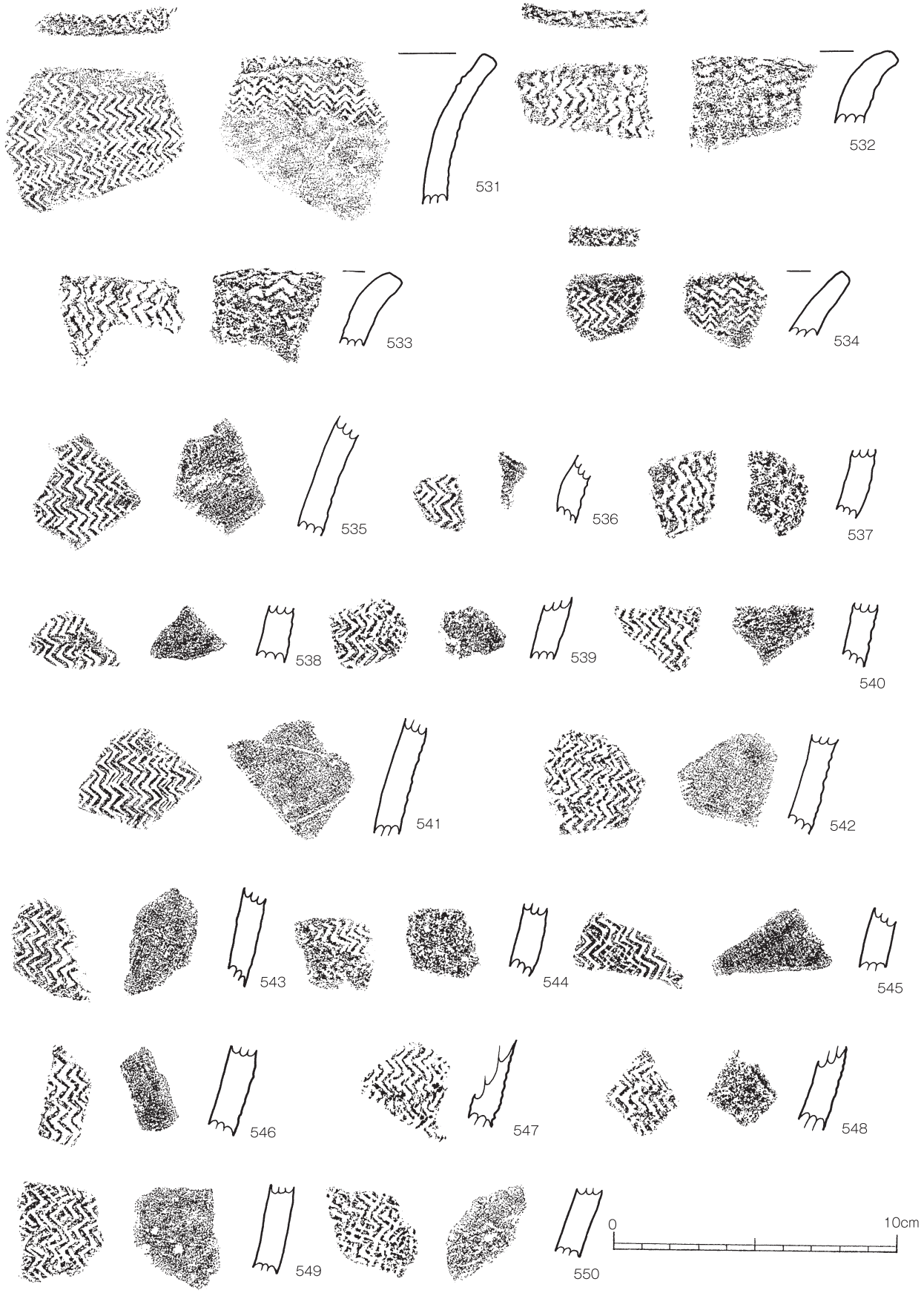
第57図　縄文時代早期出土土器（6）

あると思われる。口唇部端部にはキザミ目が施される。施文前には器面全体が丁寧になでられている。口縁部上位と胴部との境には４本１組の沈線が横位に施され，その間に４本１組の斜位の沈線が施される。587～590は網目撚糸文を縦位に無文部を左右に有しながら施文されている。591は口縁部がわずかに「く」の字状に屈曲する。592～596は口縁部片である。592は口唇部外端と口縁部下位にキザミ目が施され,その間に撚糸文が施されている。なお,593～596は同一個体と思われる。599～600は沈線間に網目撚糸文が施されている。沈線の外側には連点文が並行する。

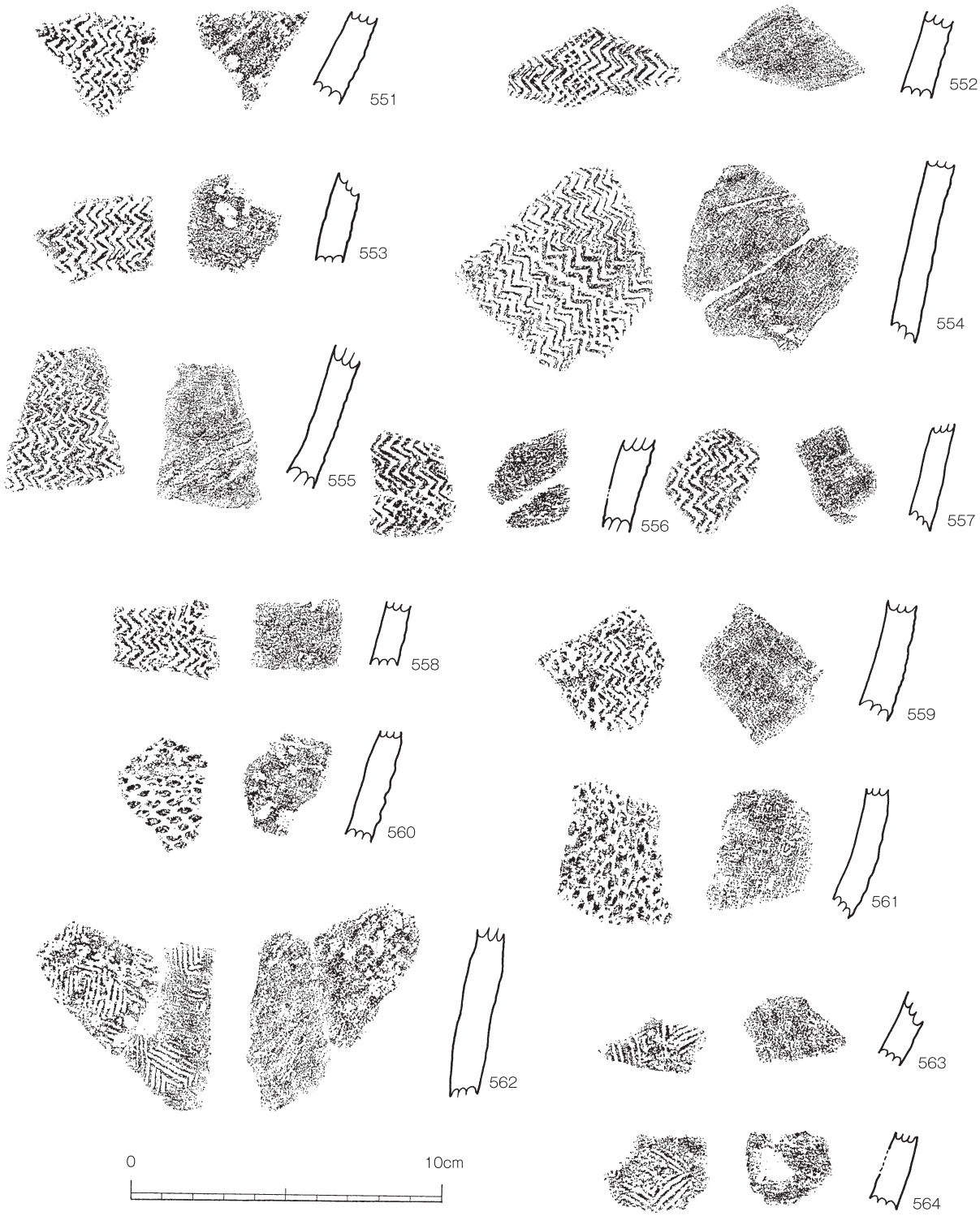
・石器（第66図）

縄文時代早期の石器の出土は余り多くない。これも，今まで述べてきたこの山城の変遷からの層の残りの悪さによるものであろう。

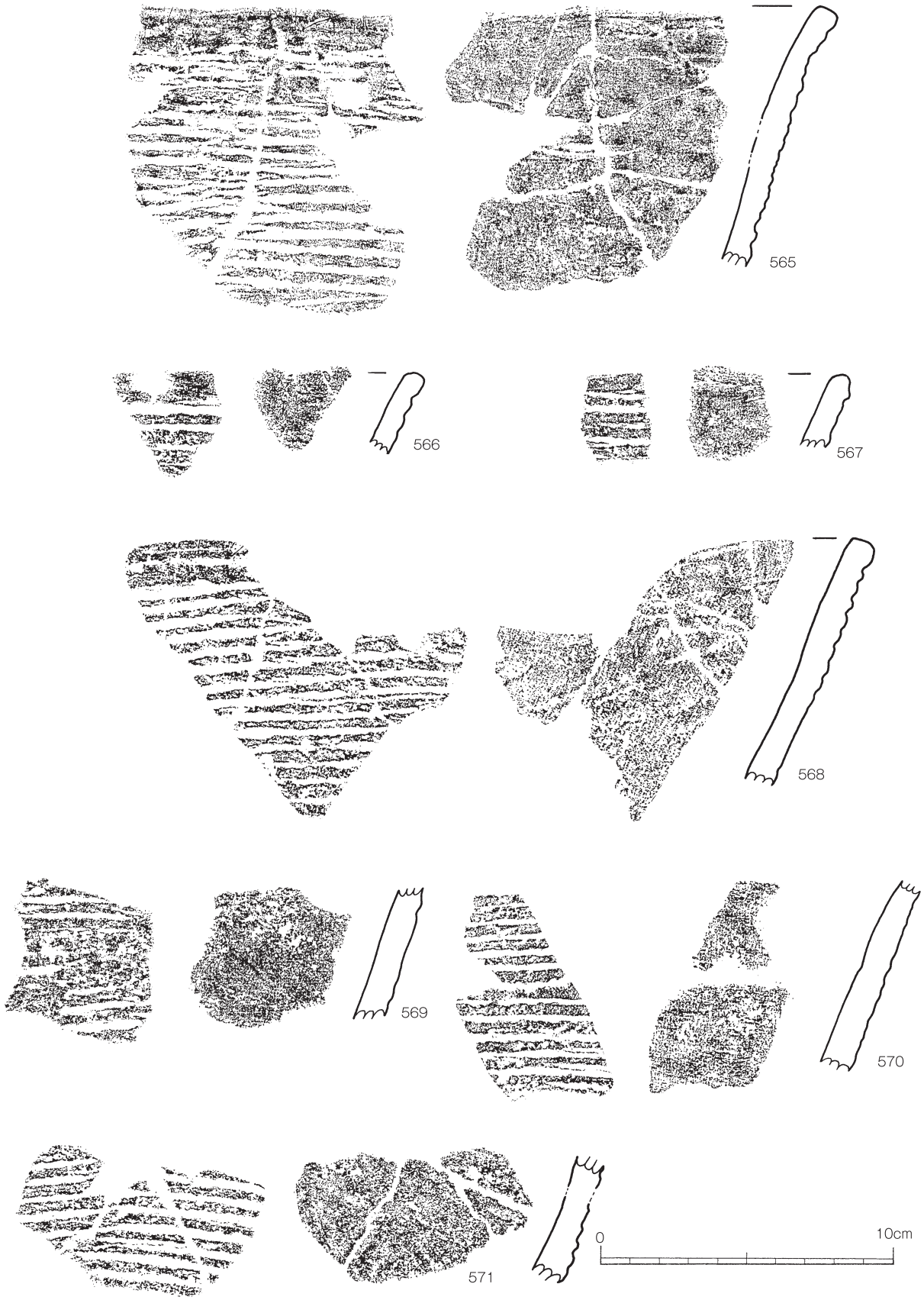
601は，Ⅴ層から出土した石鏃で，細身の二等辺三角形に深く丁寧な抉りを施した石鏃である。石材は，安山岩である。602は，側縁部に調整剥離を施したスクレイパーであり，石質は鉄石英である。603はⅣ層，604はⅤ層から出土した円礫を用いた砂岩の磨石である。



第58図　縄文時代早期出土土器（7）



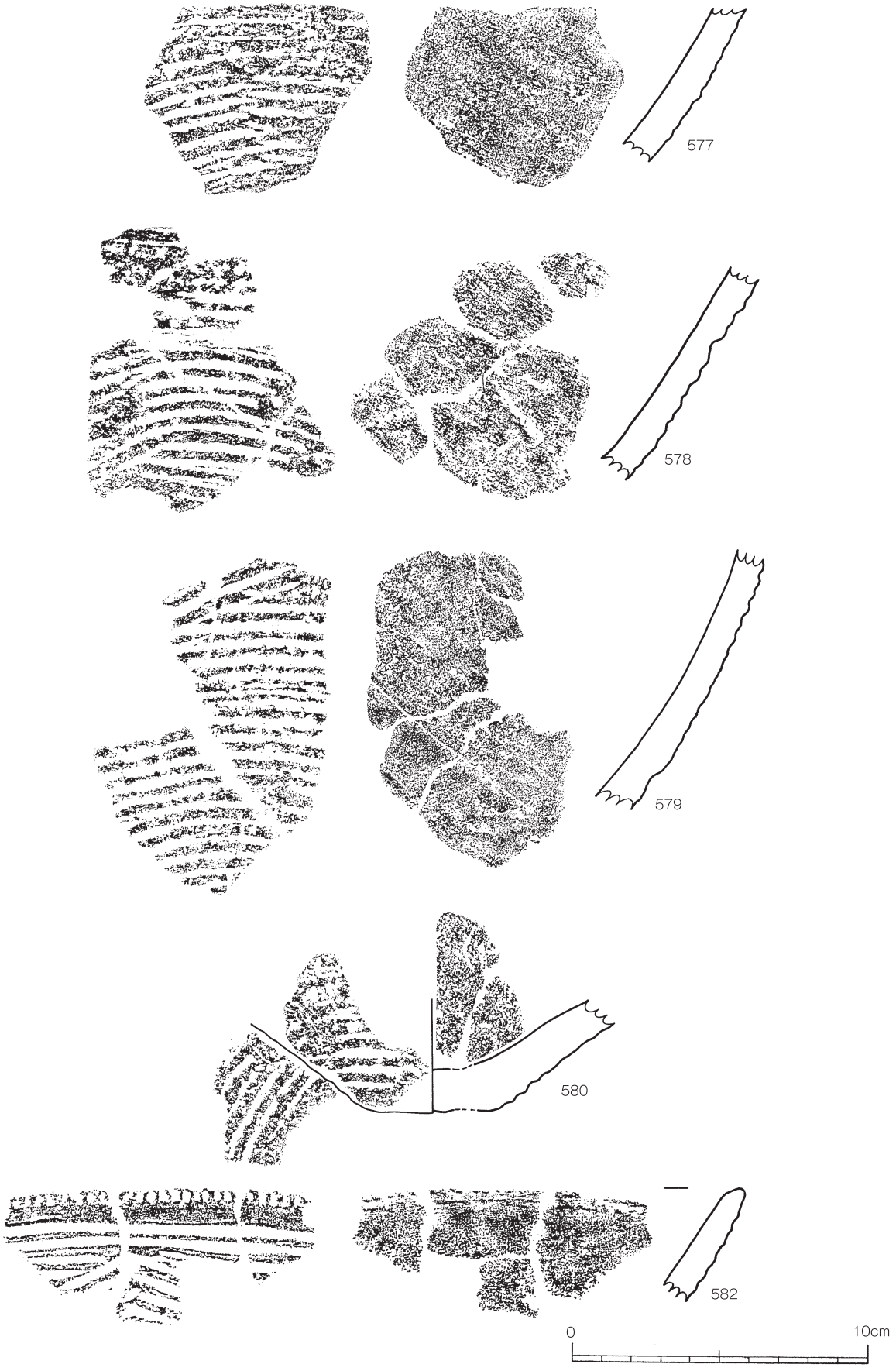
第59図　縄文時代早期出土土器（8）



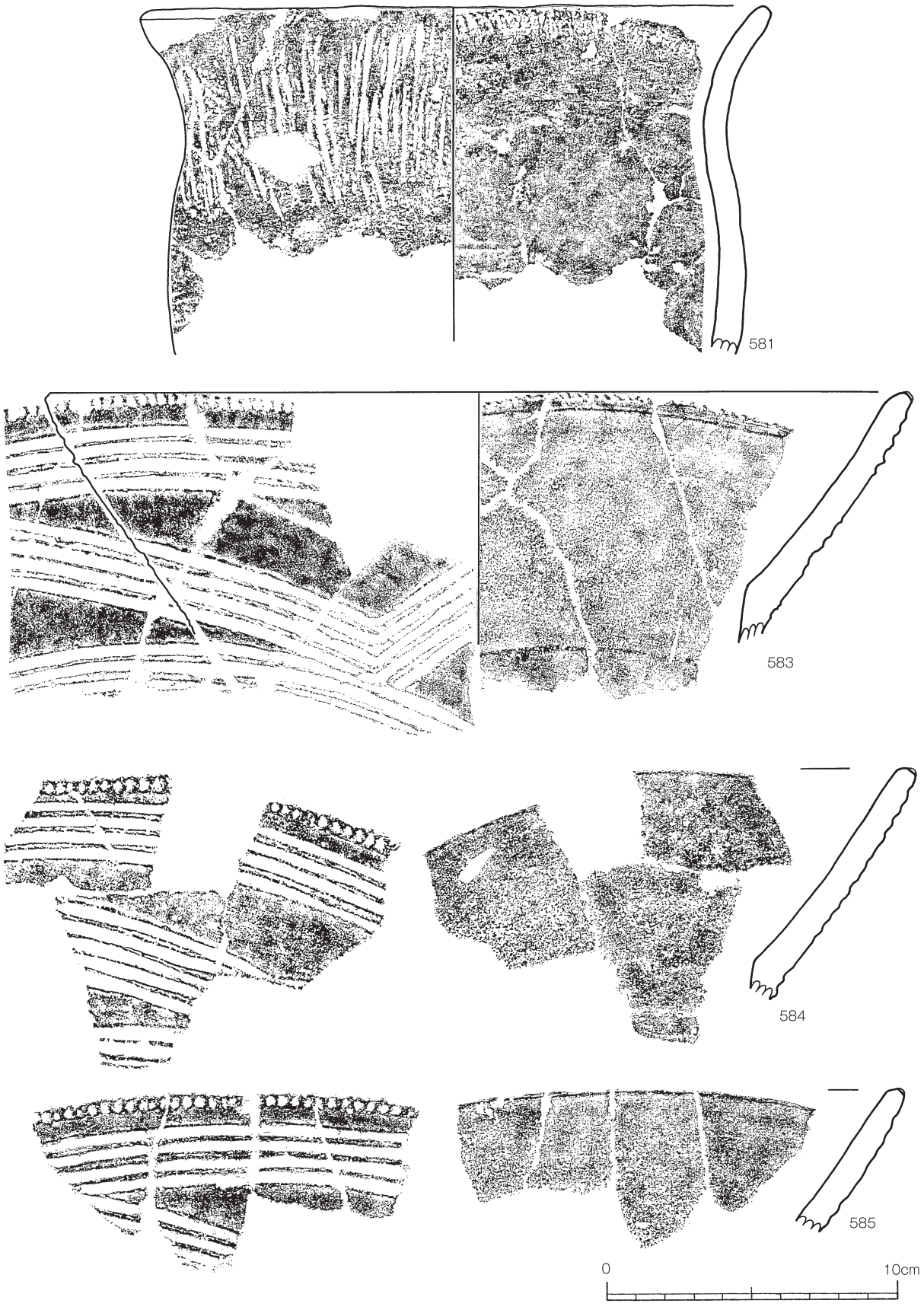
第60図　縄文時代早期出土土器（9）



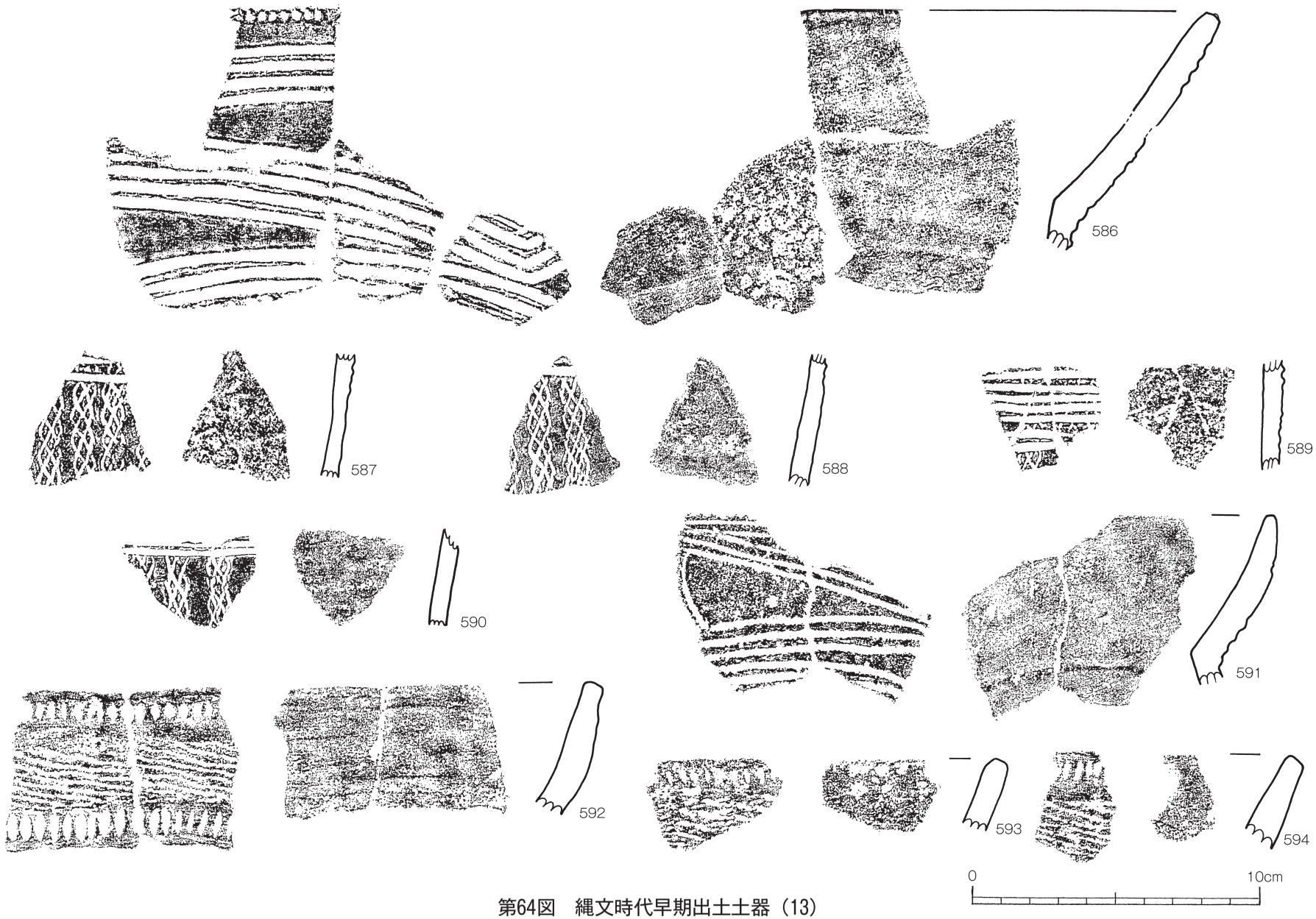
第61図　縄文時代早期出土土器（10）



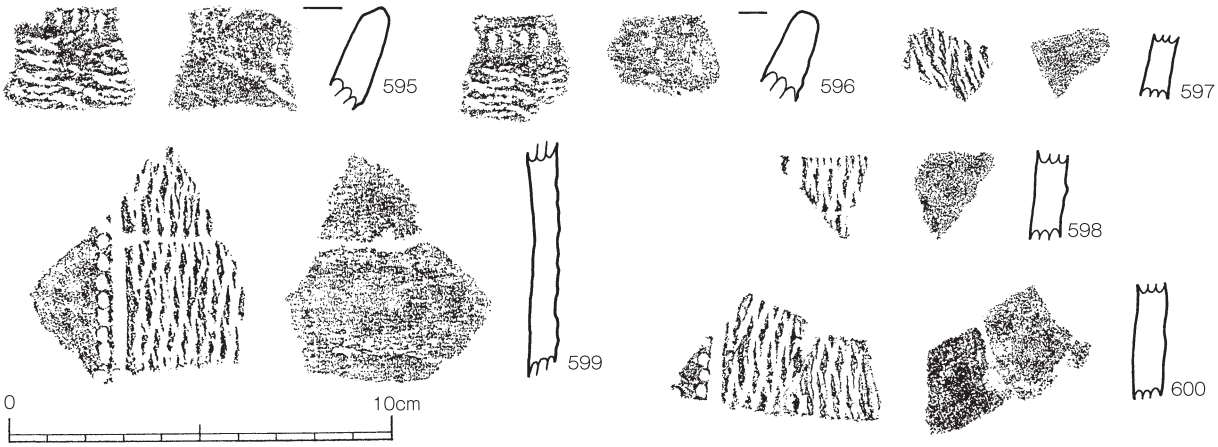
第62図　縄文時代早期出土土器（11）



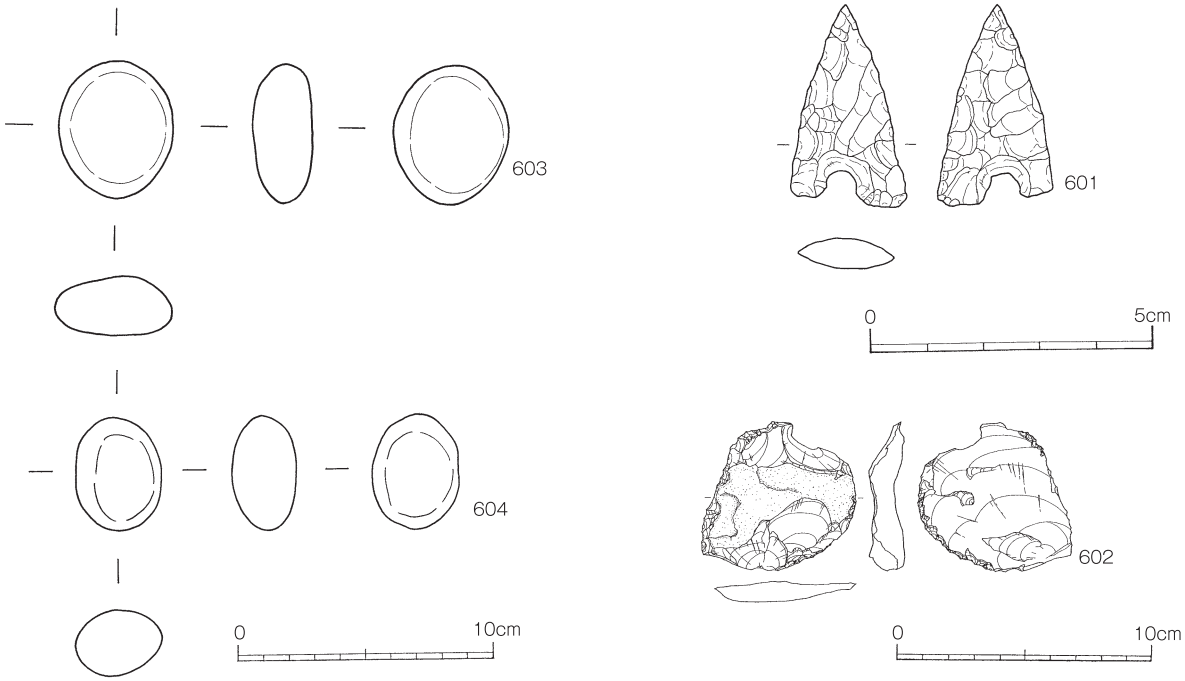
第63図　縄文時代早期出土土器（12）



第64図　縄文時代早期出土土器（13）



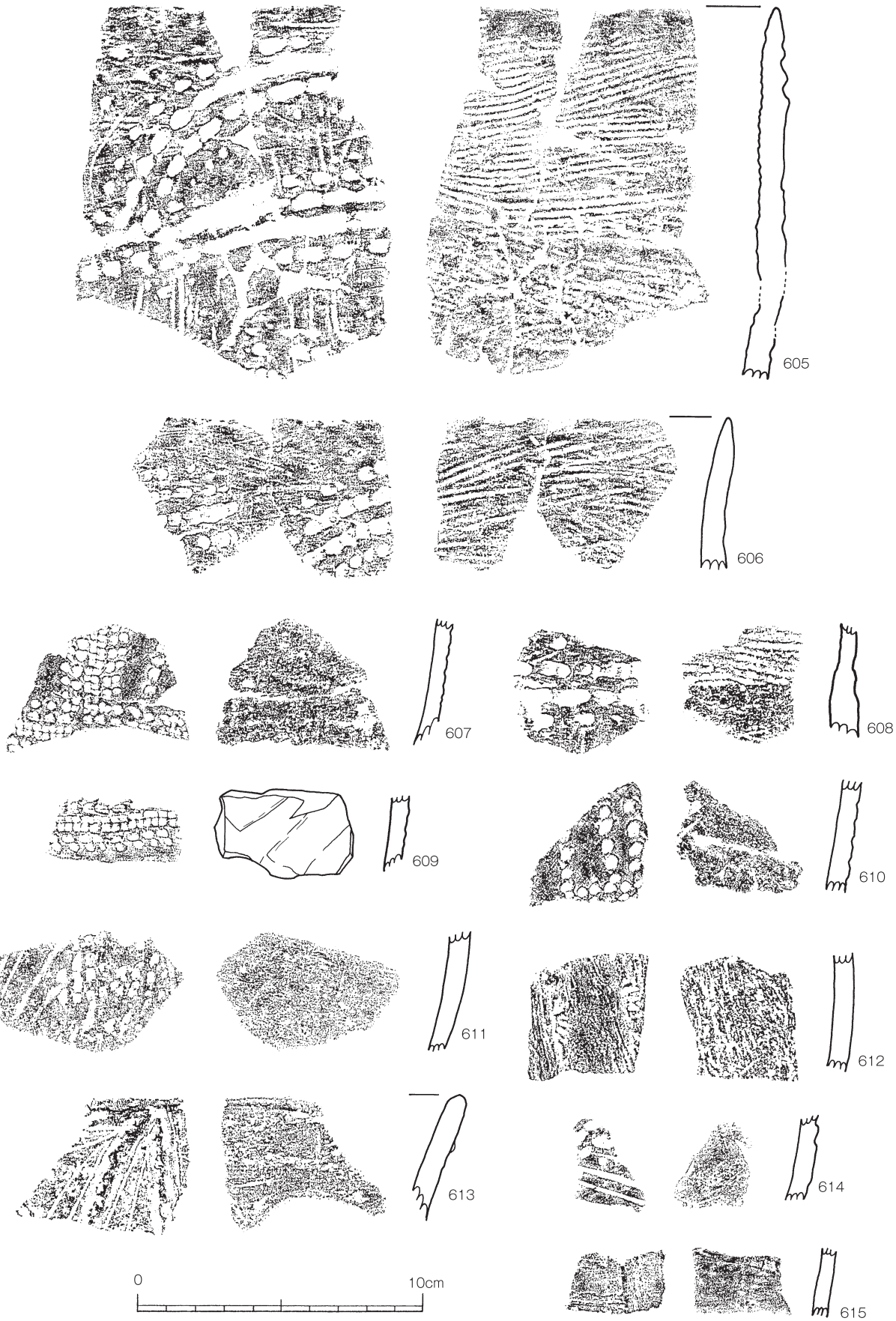
第65図　縄文時代早期出土土器（14）



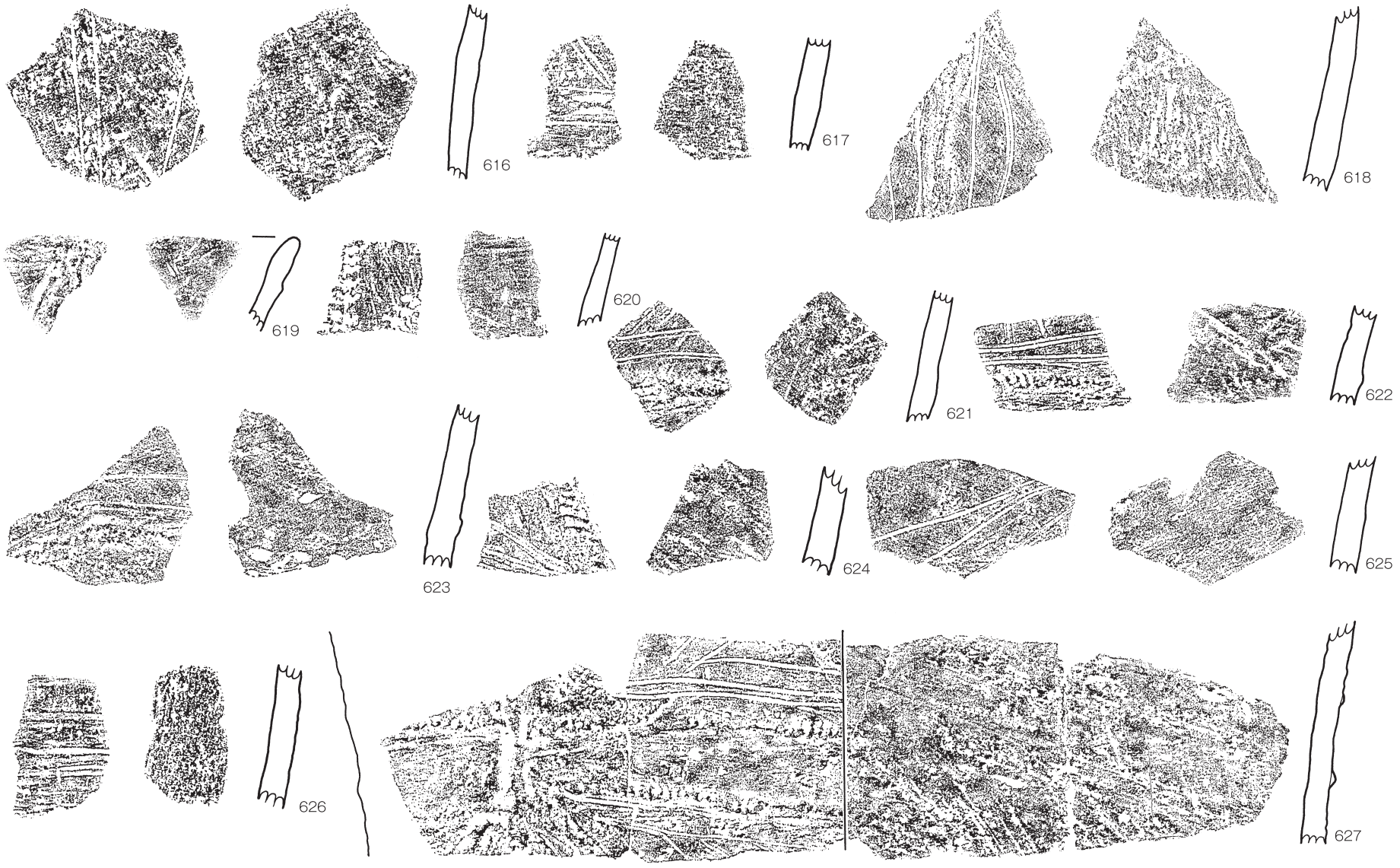
第66図　縄文時代早期出土土器（15）

3　前・中期（第67図～第69図）

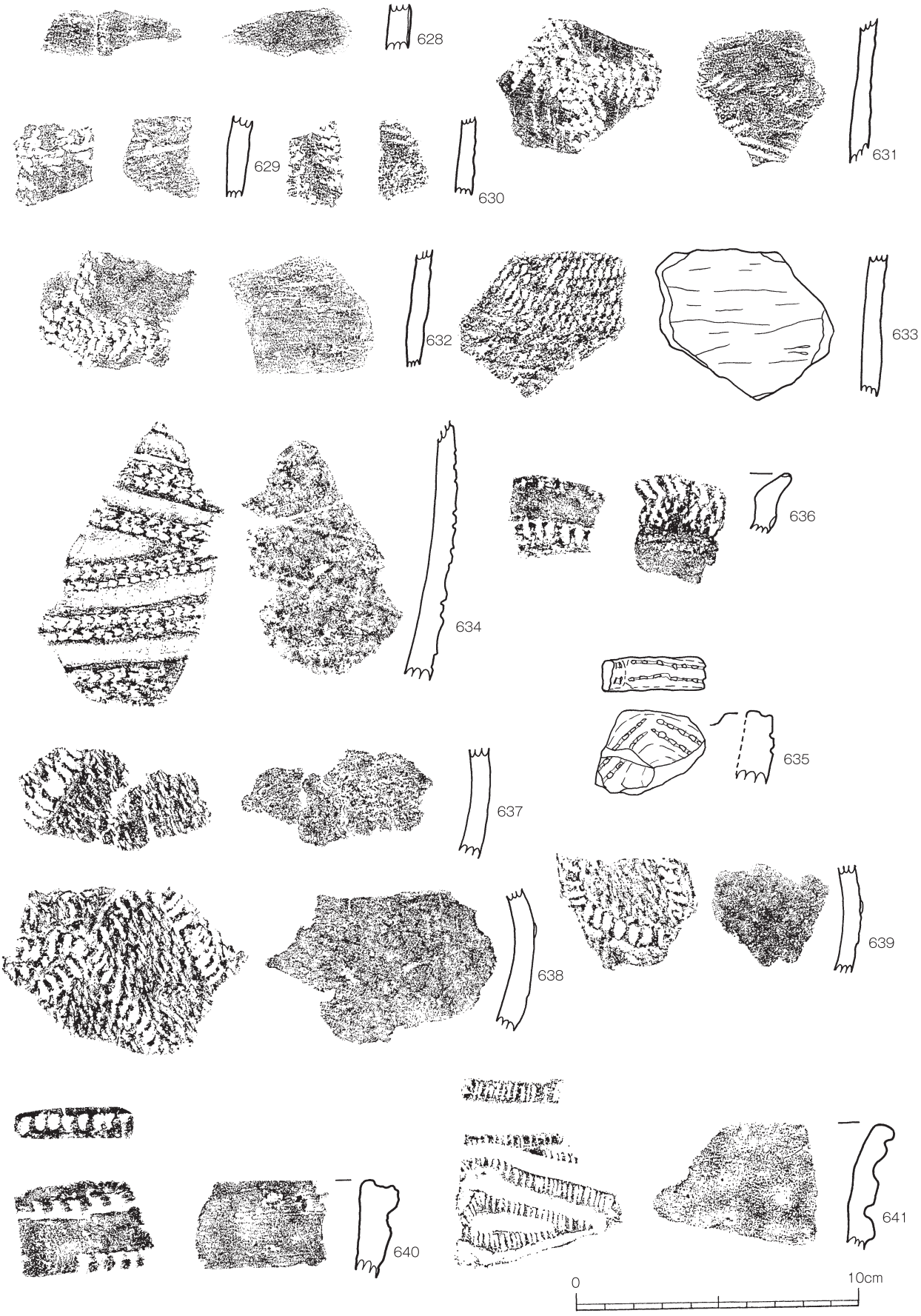
605～639は，縄文時代前期・中期の遺物である。605は内外面に貝殻条痕を施し，外面はこれをナデ消した後に，押引文に近い連点文を施している。607・609・610はやや薄手の土器である。605は，608と同一個体の可能性が高い。613～615は微隆帯が施され，その間に細い沈線文が施される。614は細沈線文と押引状の連点文が施される。616は細沈線文のみが見られる。618は微隆帯とやや不規則な浅い沈線文が見られる。627は縦位と横位の微隆帯の他に斜位の微隆帯を有する。この微隆帯の貼り付けは弱く，部分的に剥落している。内面には，ケズリ痕が明瞭に残る。631は密な押引文で，629は相交弧文が見られる。632は押引文に見えるが相交弧文である。634・635・640は多量の滑石が混入され二叉状工具による刺突文が施され，その間に太めの凹線文が施



第67図　縄文時代前期～中期出土土器（1）



第68図　縄文時代前期～中期出土土器（2）



第69図　縄文時代前期～中期出土土器（3）

される。また,641は,凹線を施しその凹線と凹線の間の部分に縦位の密な刻みを施すものである。636～639は粗い縄文が施されているものである。

4　後期

・土器（第70図～第99図）

縄文時代後期の土器は，以下の８つに分類した。

・642～650の口縁部に刺突文が，主体的に施されている土器。

・651～668は口縁部に凹線文もしくは沈線文が，直線的に（希に曲線を）用いて明確に表現されている土器。

・669～694の深鉢の口縁部に粘土紐を付け装飾し，刻目や刺突文沈線を施した土器。

・695～735の断面三角形を呈する土器。

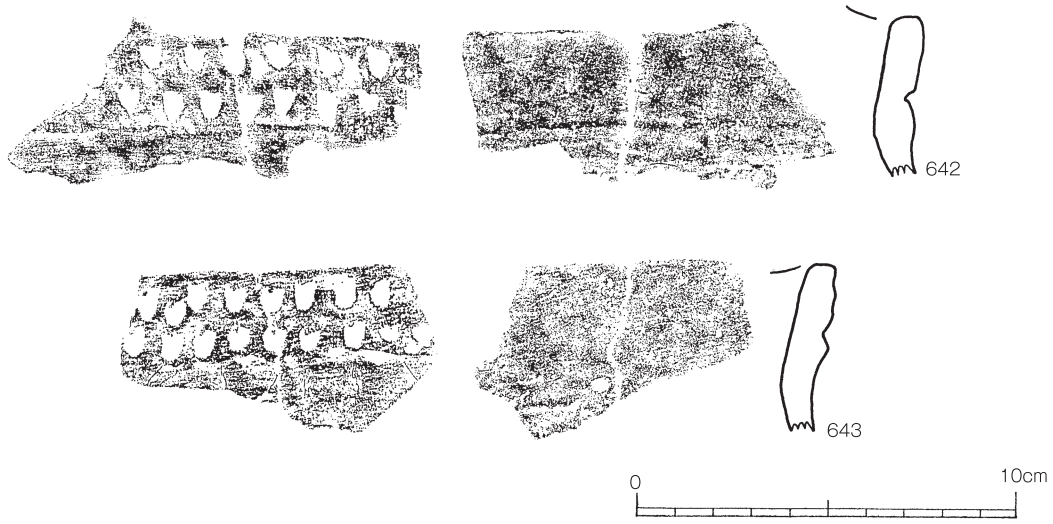
・736～741の無文土器。

・742～759の磨消条痕文を施した土器。

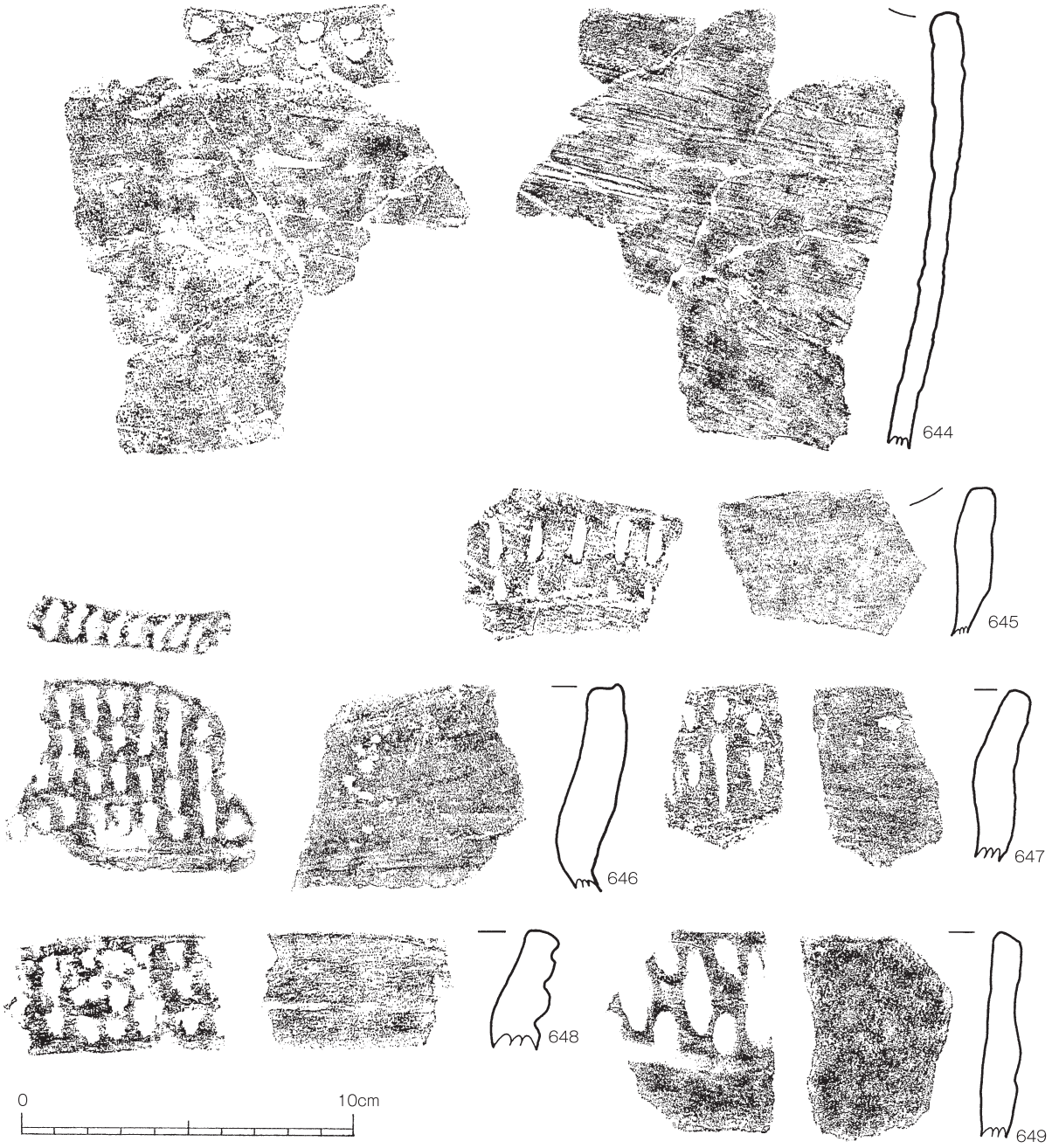
・760～777の縄文時代前期～晩期の土器の底部。

・778～792の市来式土器の台付皿形土器。

642～650図は，口縁部に工具状の刺突文による文様が施されているものである。口唇部は，647を除き，ほぼ平坦である。642～644は同一個体と思われる。径５㎜の棒または円柱状で，先端部や円筒部に刻目を施した工具によって刺突文が施してある。刺突の方法は，口縁部を斜め下から上に刺し，粘土を斜め上手前に掻きだしている。口縁部～胴部に向かって１列ずつ２行に刺突文を施している。調整については，内面は横位に貝殻条痕が施してある。645は，口縁部に２叉状の工具を，上から下に粘土を掻き取って刻目文を施している。646は，口唇部に半截竹管文状の文様が連続して施文してある。口縁部には，３㎜幅の角状ないし板状の工具を押し当て，斜め手前に掻き取っている。口縁部～胴部に向かって一列ずつ刺突文を施している。３～４行の刺突文になっている。口縁部中位から外反気味に肥厚し，口唇部では直口している。647は，口縁部中位からやや内弯し，口唇部は外反している。円筒状の工具の円筒部を押し当てて手前に引き抜いてい



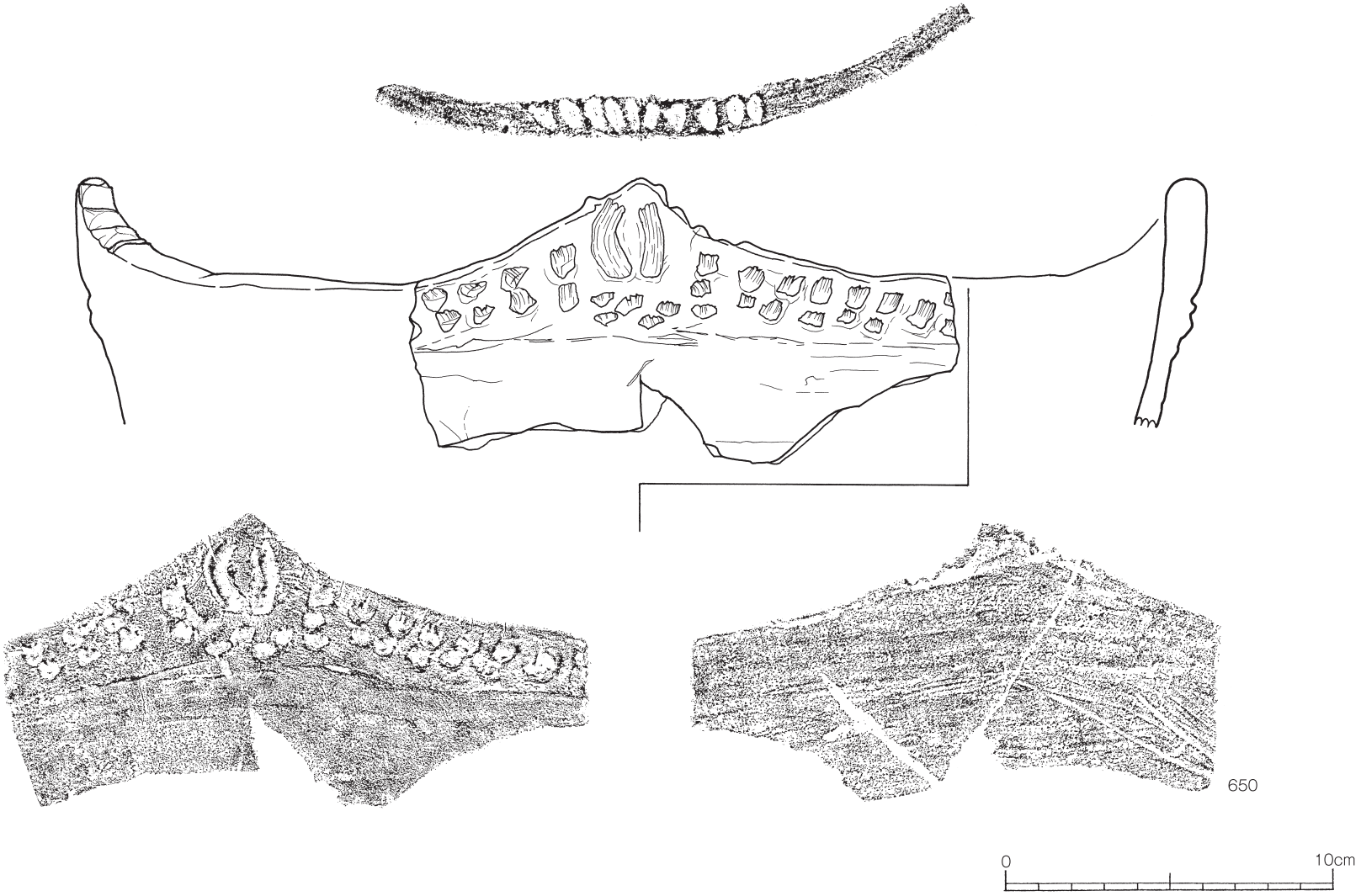
第70図　縄文時代後期出土土器（1）



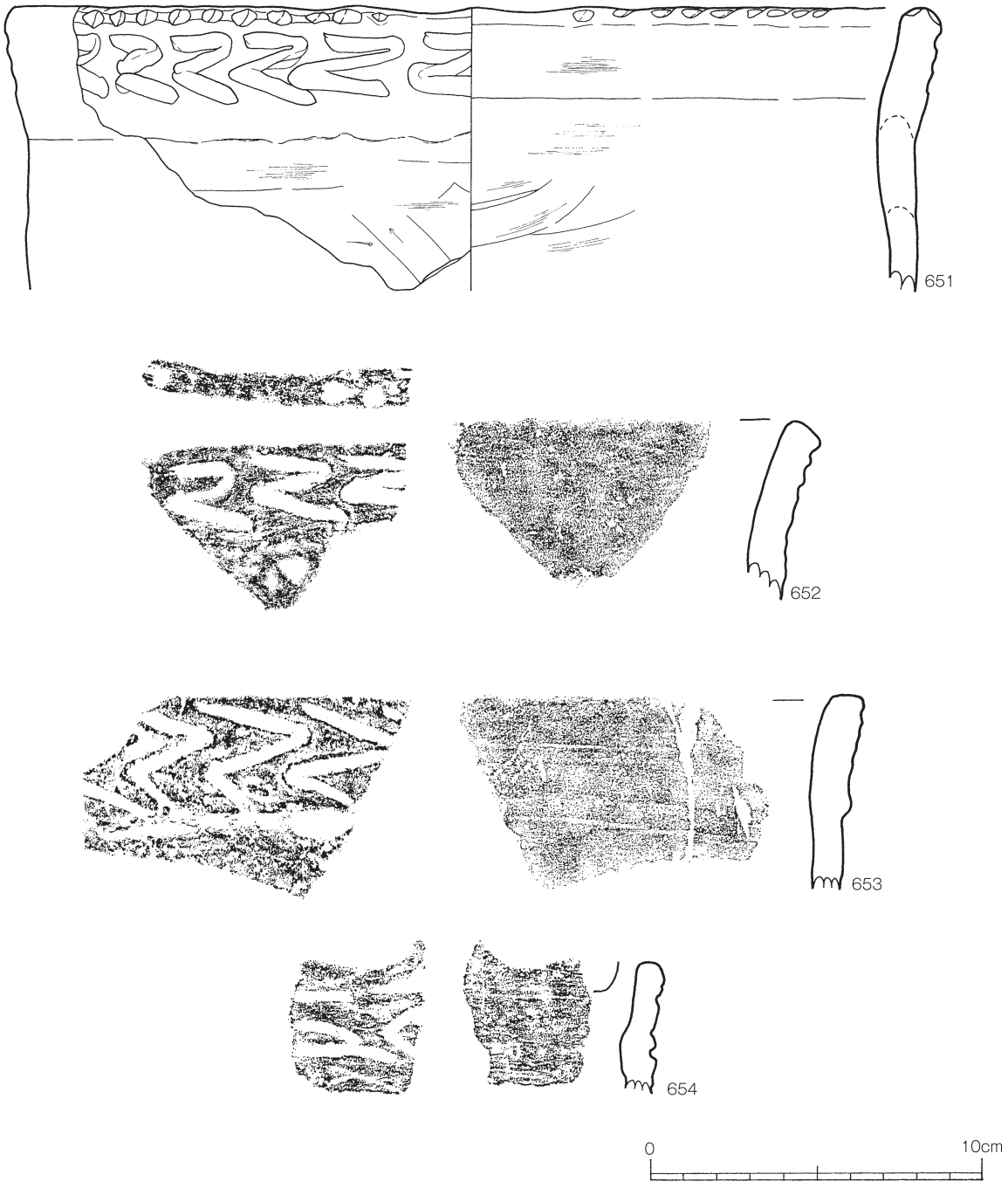
第71図　縄文時代後期出土土器（2）

る。649も同様に文様を１本，２本と交互に連続して施している。648は，板状か角状の工具を斜め上から下にあてて手前に引き抜いている。650は，波状口縁をなし，その頂上部の口唇部には，刻目を施している。口縁部下部から上部に向かって板状か角状の工具で刺突をしている。波状部から右側は，斜め上から刺突文を施し，左側は，左斜め下から上に向かって刺突し，左斜め上手前に掻き出している。波状口縁の頂上部に施文されている（　）状の文様は，上から下へ工具によって押し引かれている。

651～668は，口縁部に直線的な凹線文あるいは，沈線文の特徴を強く持つ土器である。南福寺系の土器と比定できる。651～653は，口縁部にＺ字の連続する凹線文がある土器である。651・652は，口唇部に内側と外側に指先状の工具ないし，指先で互い違いに施されている部分がある。653の口唇部は平坦で直口している。654はＺ字が簡略化され，「２」字なっている。659～661は，Ｖ・Λ・左斜め方向・右斜め方向への斜線を基本とする直線である。662～663は，曲線（隅丸方形

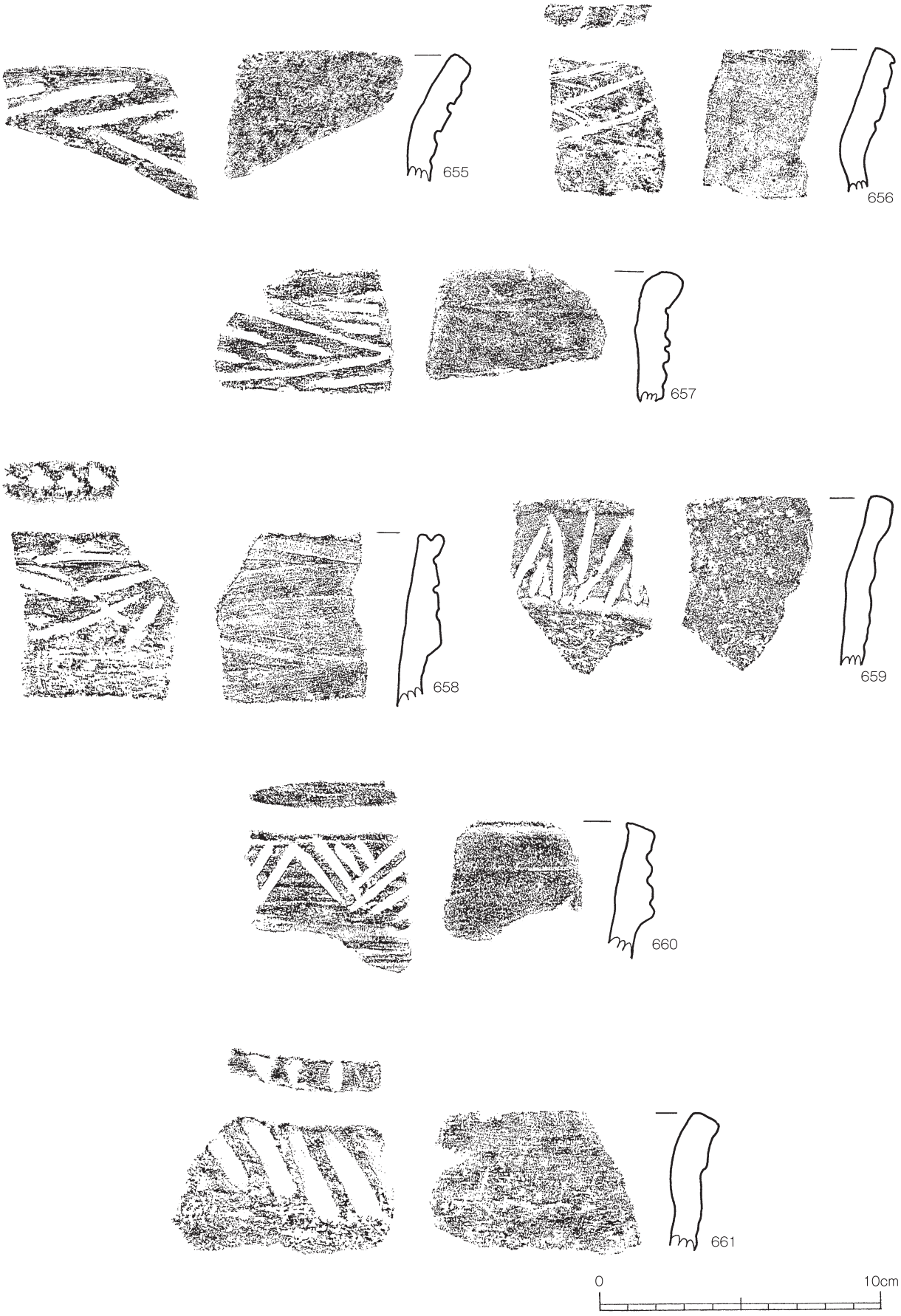


第72図　縄文時代後期出土土器（3）

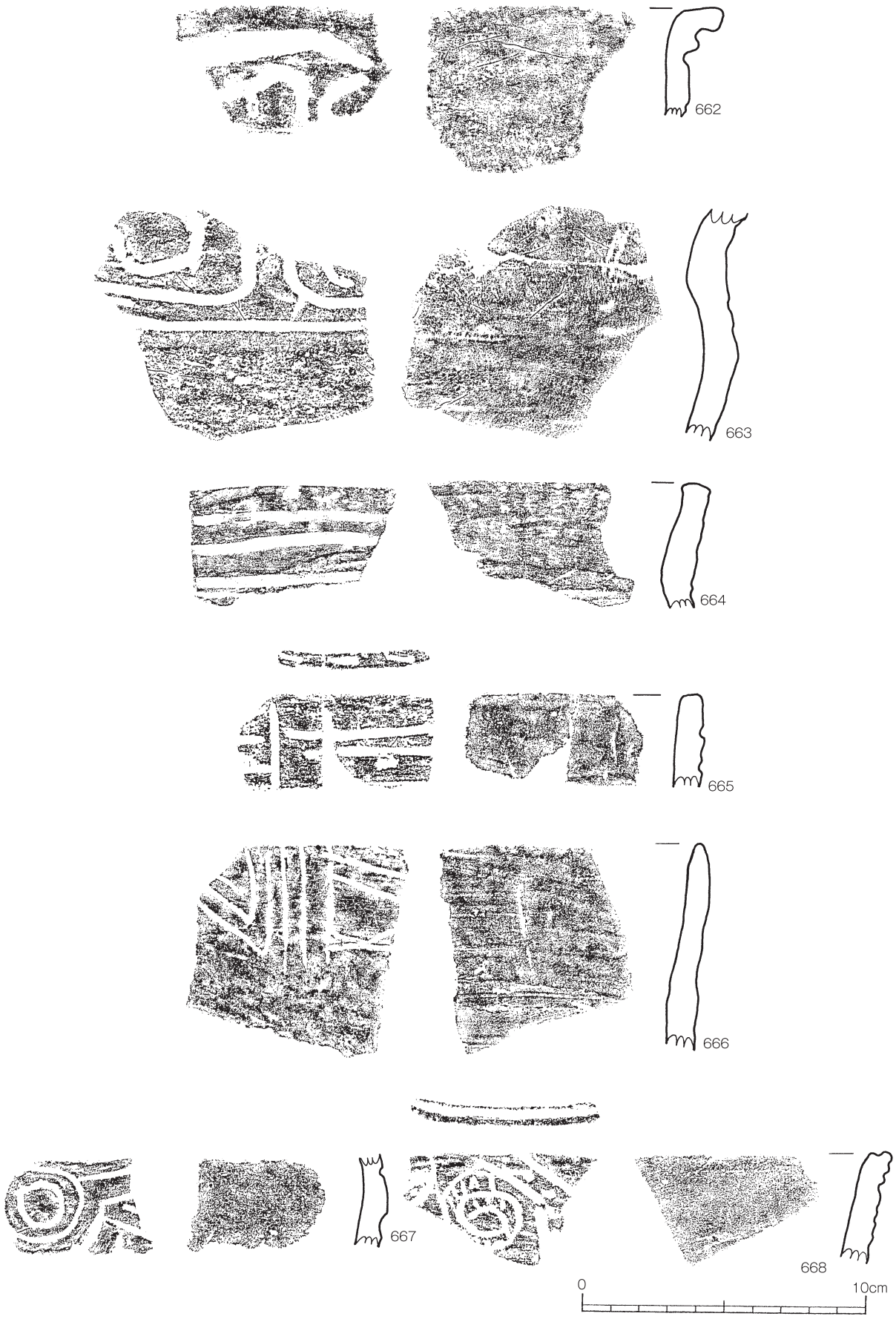


第73図　縄文時代後期出土土器（4）

や円形等）に特徴を持つ土器である。662は，深い沈線文を呈している。664～666は，直線を不規則に組み合わせた沈線文が施されている。654～658は口縁部に施文された文様が，Ｚ字から＜字もしくは，＞字の直線的な文様に変化している。651～653は凹線文，654～668は沈線文である。口唇部については，656・661は刻目，658は先が鋭い物で突き刺したと思われる刺突文が施されている。665は，口唇部に添って点線状に刺突文が，668は口唇部に添って１条の沈線文が施されている。667と668の口縁部の施文，丸と直線を組み合わせた沈線文である。667は鐘崎式土器の可能性もある。



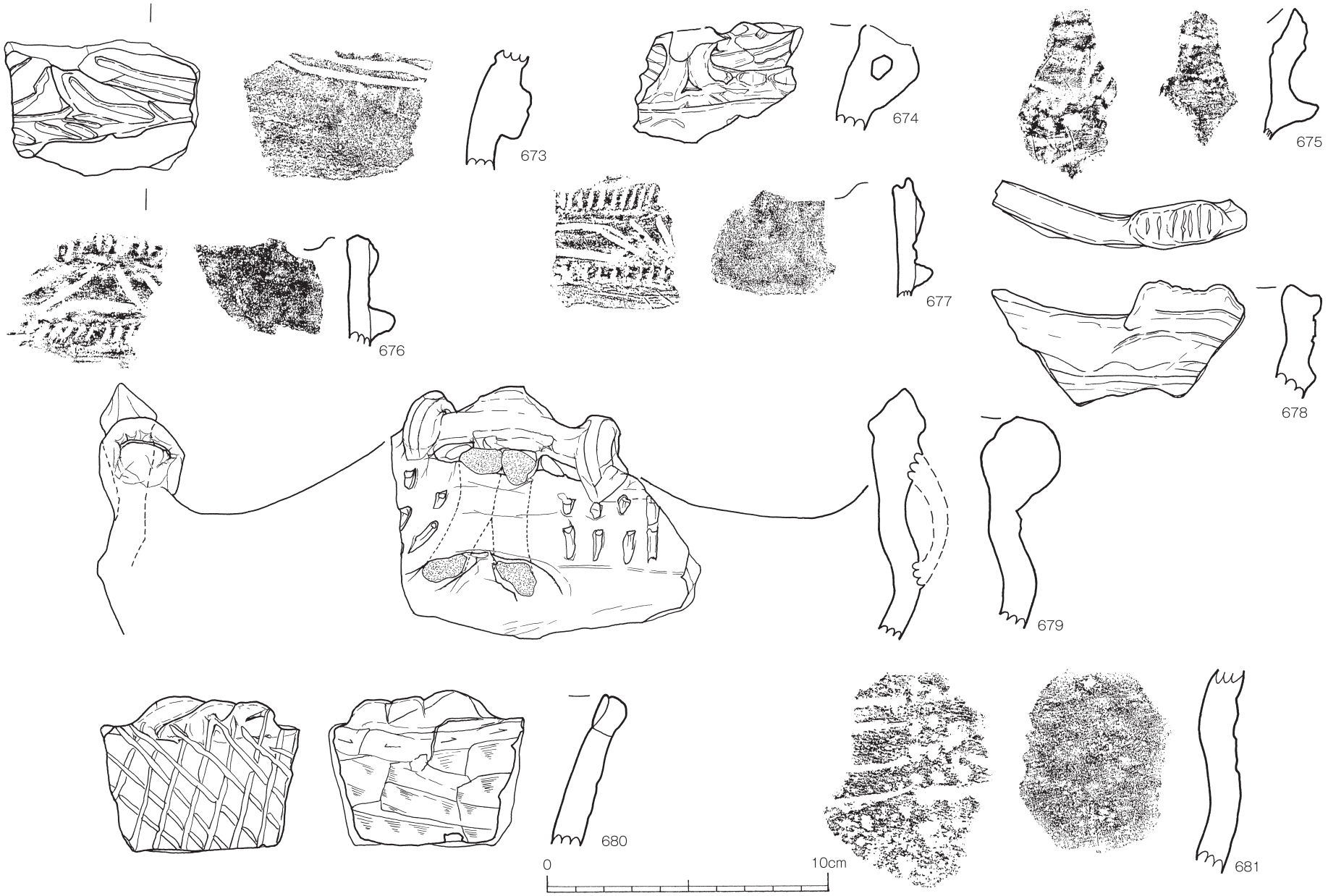
第74図　縄文時代後期出土土器（5）



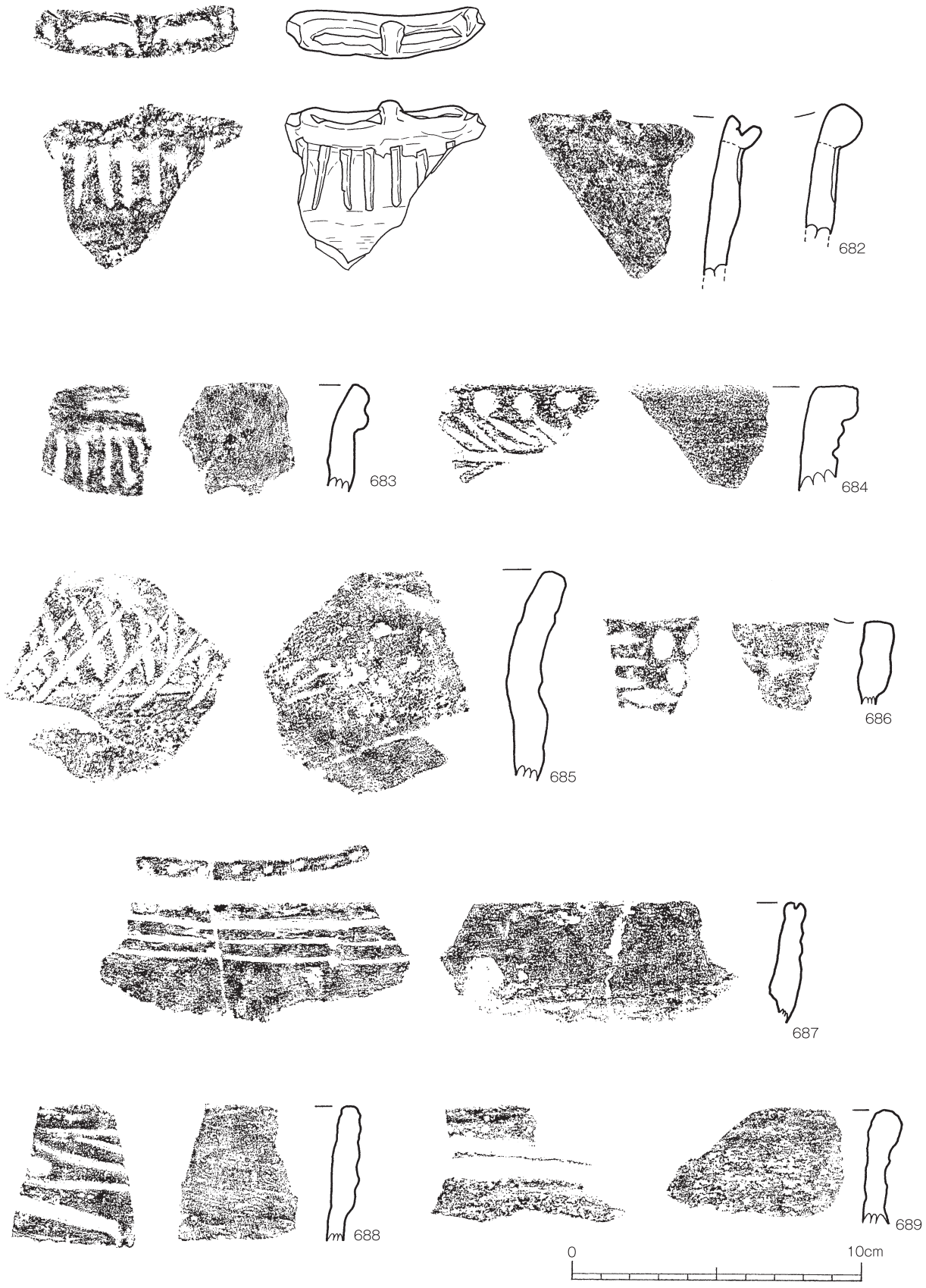
第75図　縄文時代後期出土土器（6）



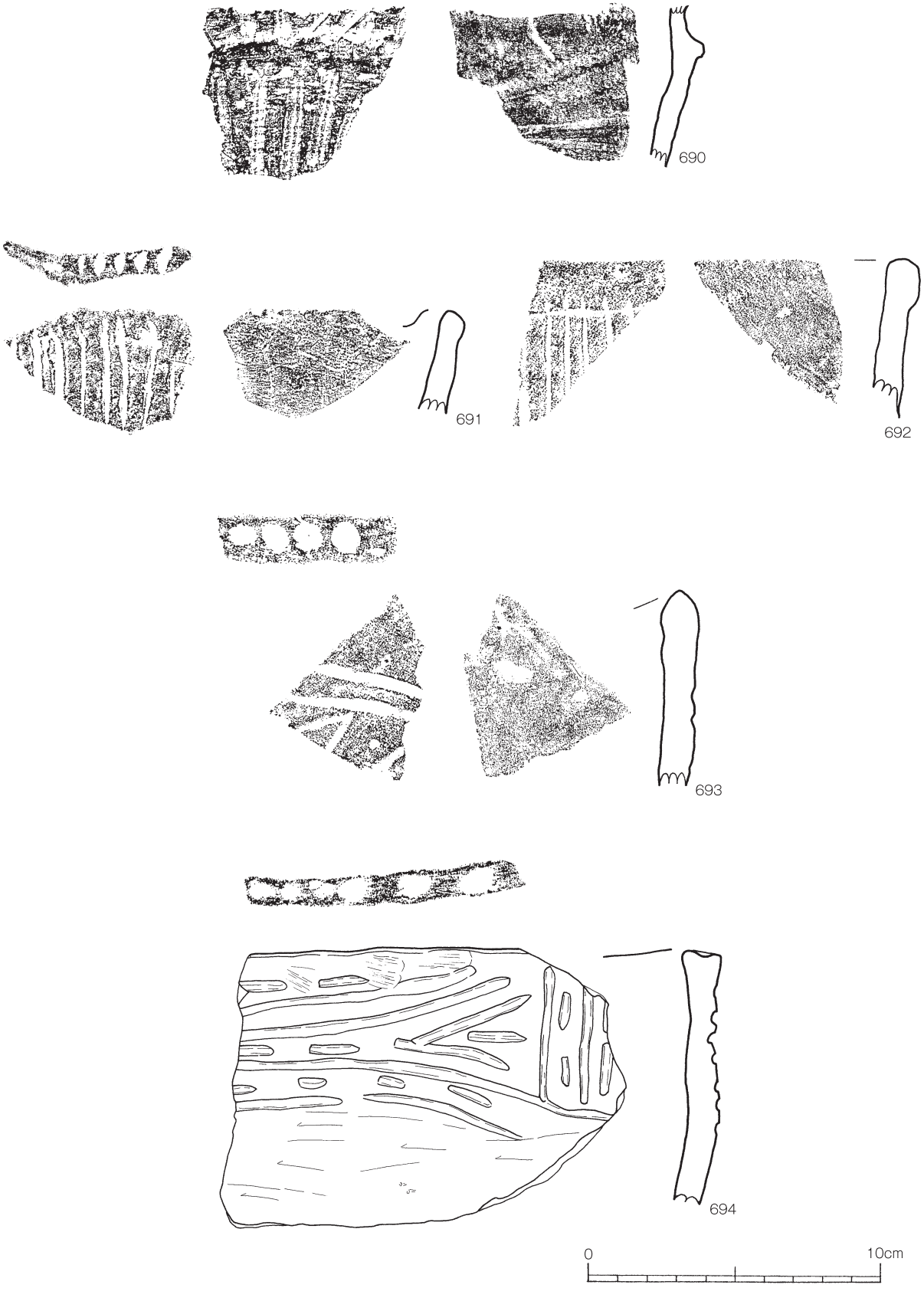
第76図　縄文時代後期出土土器（7）



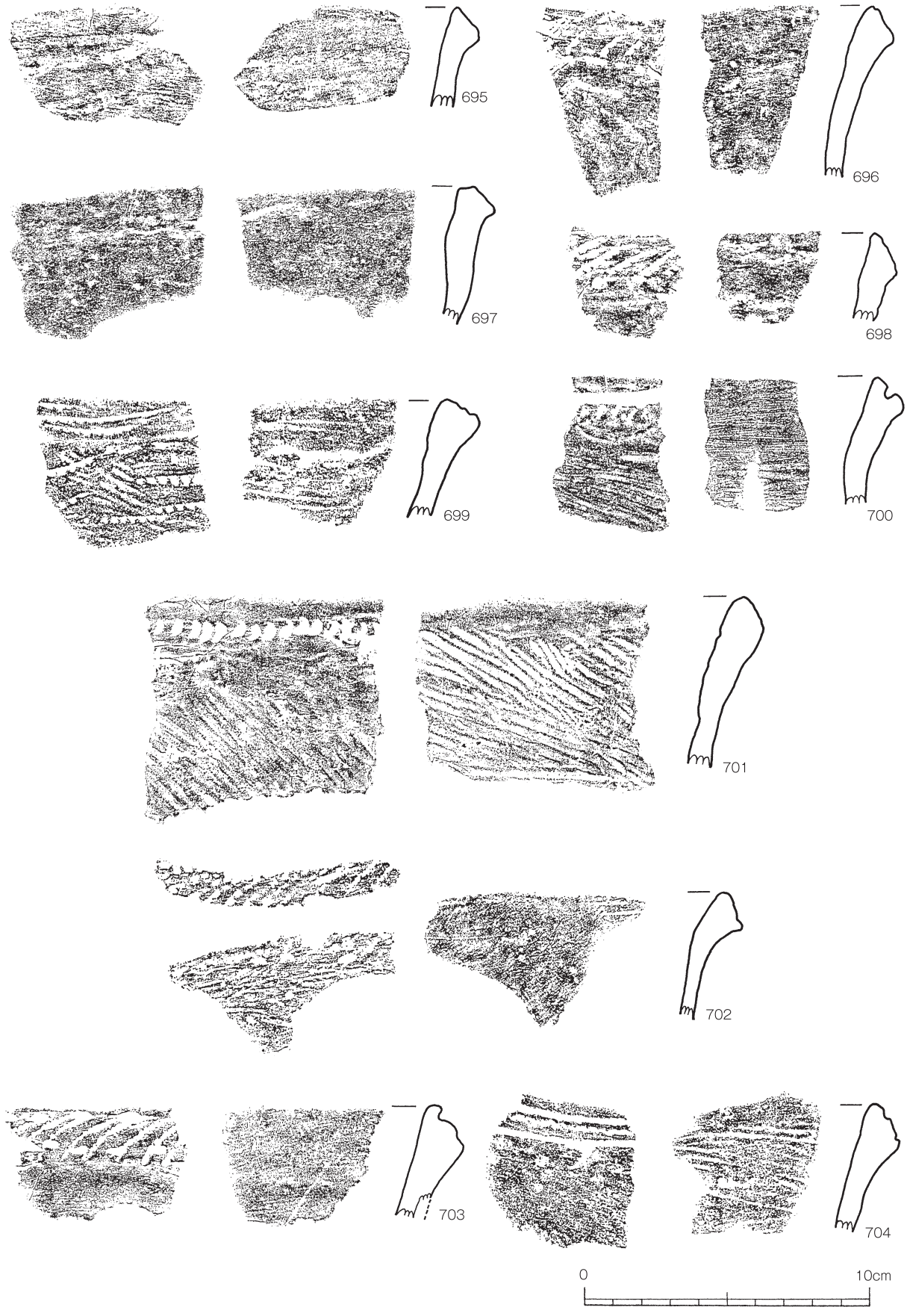
第77図　縄文時代後期出土土器（8）



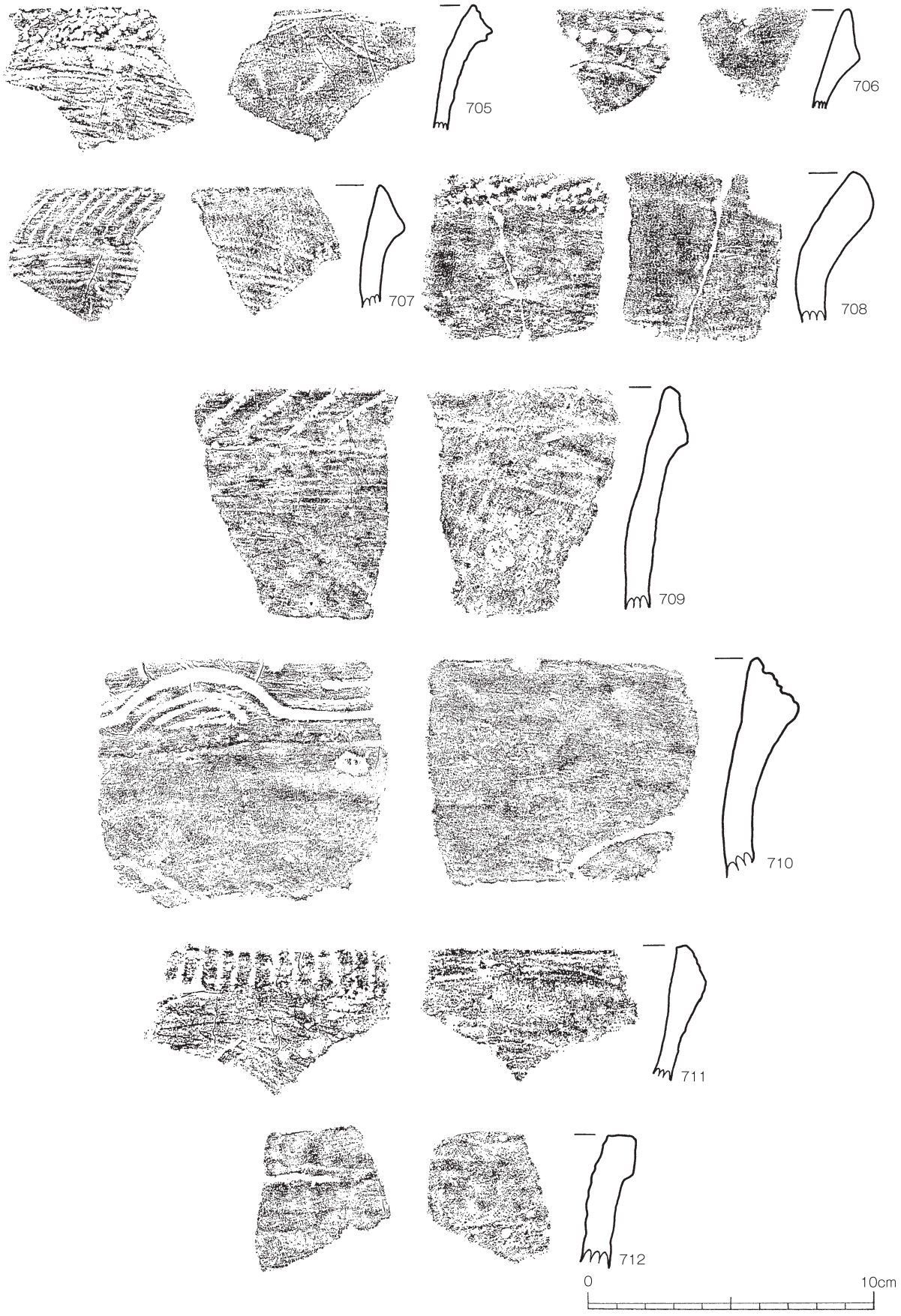
第78図　縄文時代後期出土土器（9）



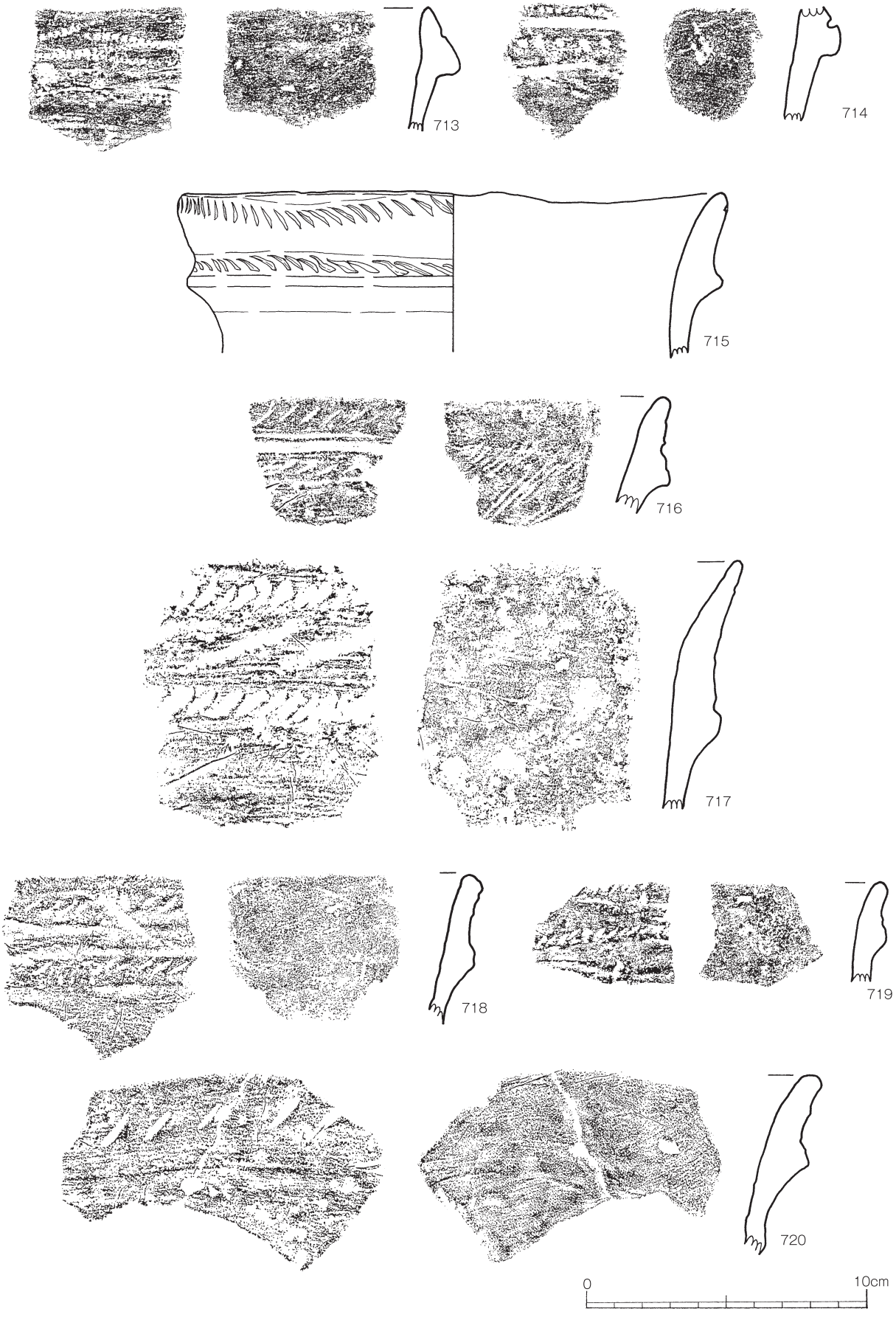
第79図　縄文時代後期出土土器（10）



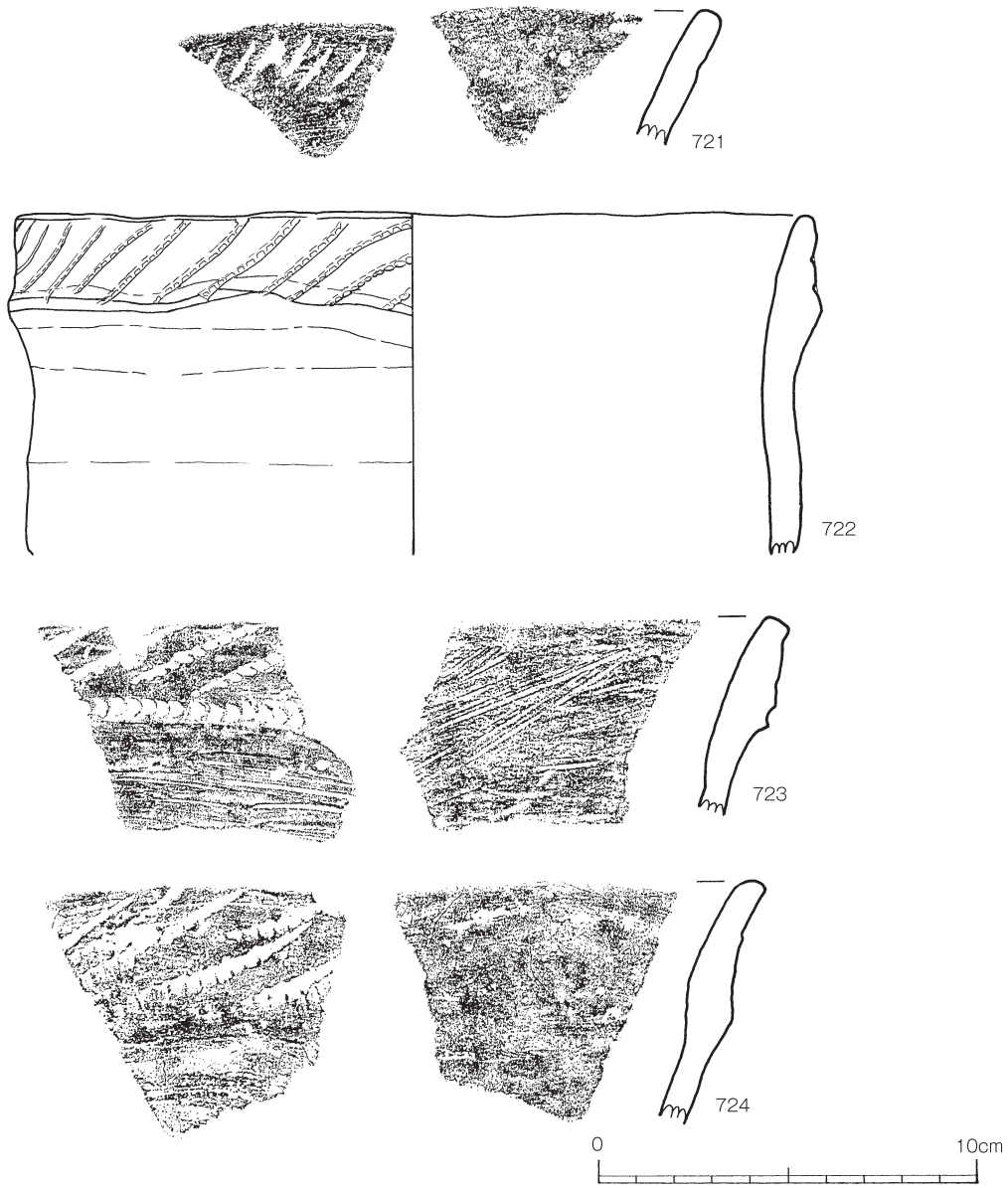
第80図　縄文時代後期出土土器（11）



第81図　縄文時代後期出土土器（12）

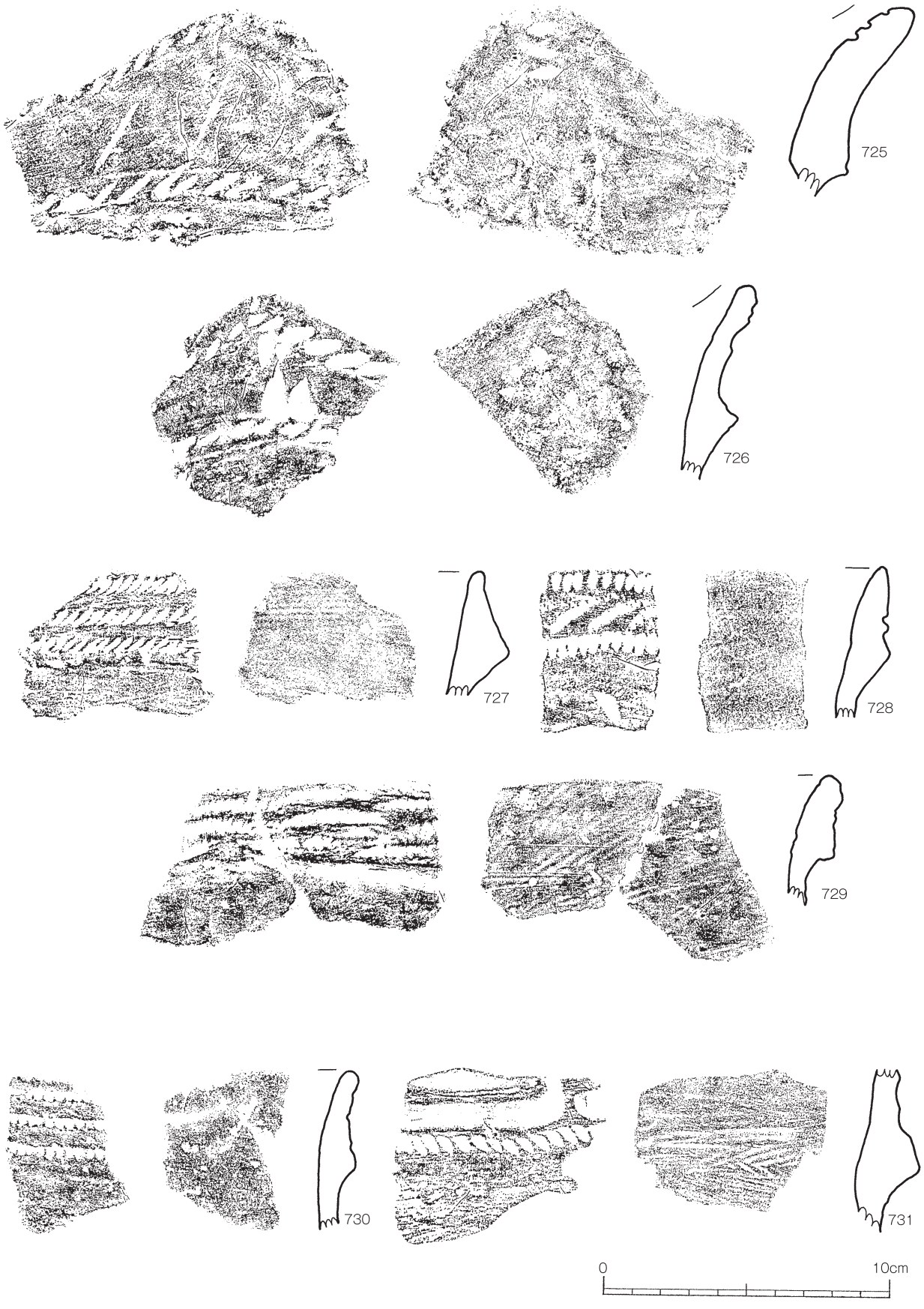


第82図　縄文時代後期出土土器（13）

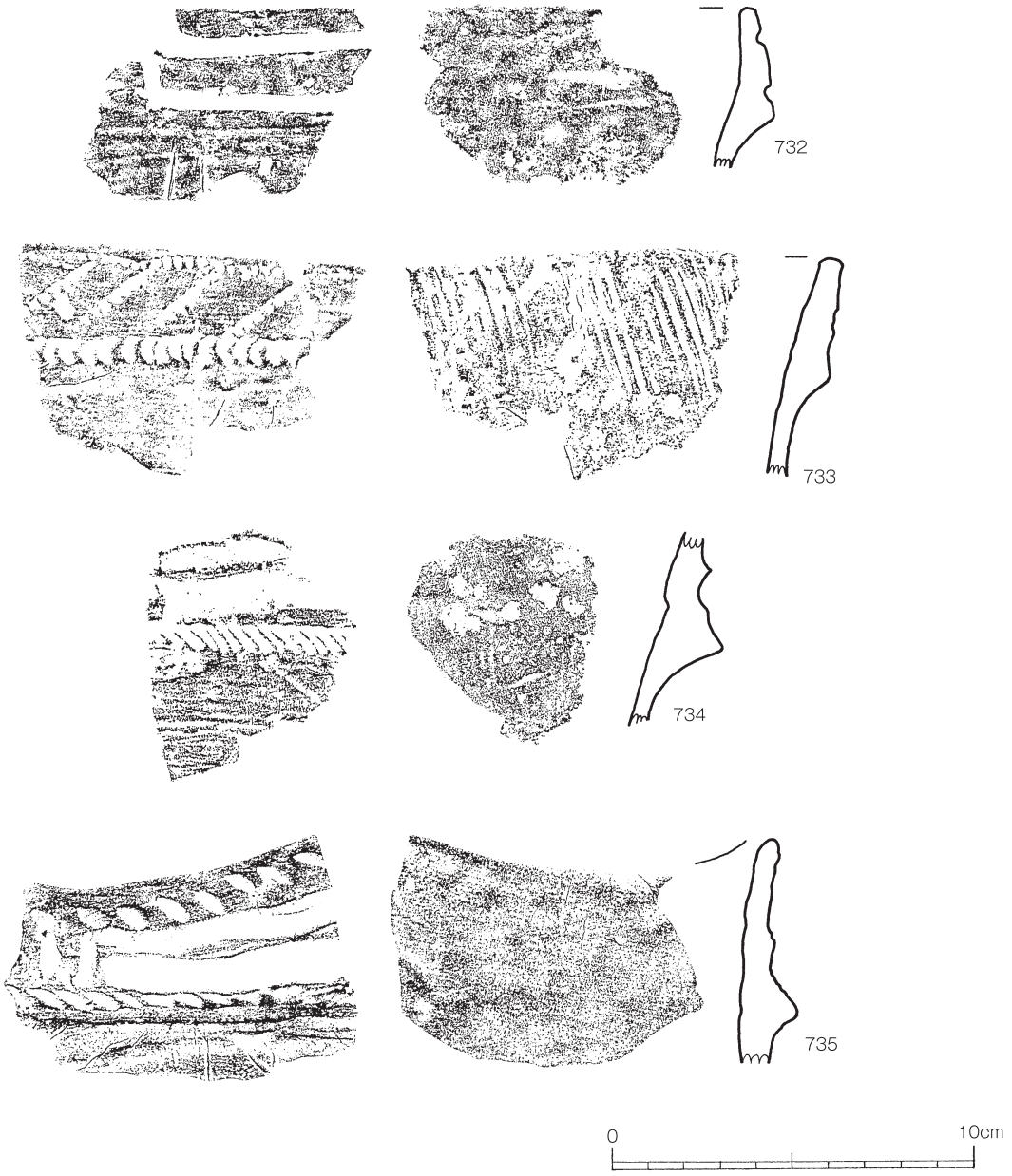


第83図　縄文時代後期出土土器（14）

669～694は，651～668の表現に新たに口縁部に粘土紐を加工し，沈線文・刺突文を，繊細でかつ巧みに装飾を施した南福寺系の土器である。胎土は，672・682・688・689には滑石が含まれている。671は，赤色の塗料（丹と思われる）が確認された。また，内面は指頭圧痕が確認される。器形では，669・671・672・674は橋状把手が施されている。670・681・686・687・688・689・693・694は複雑な模様を凹線文や沈線文で施されている。673・675・676～680・682～684・690～692は，口縁部に粘土を貼り付け，成形したり，沈線文・凹線文を組み合わせたものである。676・677は，同一個体であると考えられる。口唇部については678・691は刻目，682・687・693は刺突文が施されている。679は波状口縁の部分の装飾が施されている。口縁部は粘土紐を組合わせており文様帯には橋状把手の痕跡が上下に２か所あり，その左右には２列に，角状ないし板状の工具を押し当て，斜め手前に掻き取っている。695～735は，口縁部の文様帯が断面三角形を呈している土器である。市来式土器の深鉢に比定するものである。695～724の口縁部は，水平を呈する平口縁，725～735は波状口縁の可能性が高い。695～714は，文様帯が小さく初期のものと考えられる。

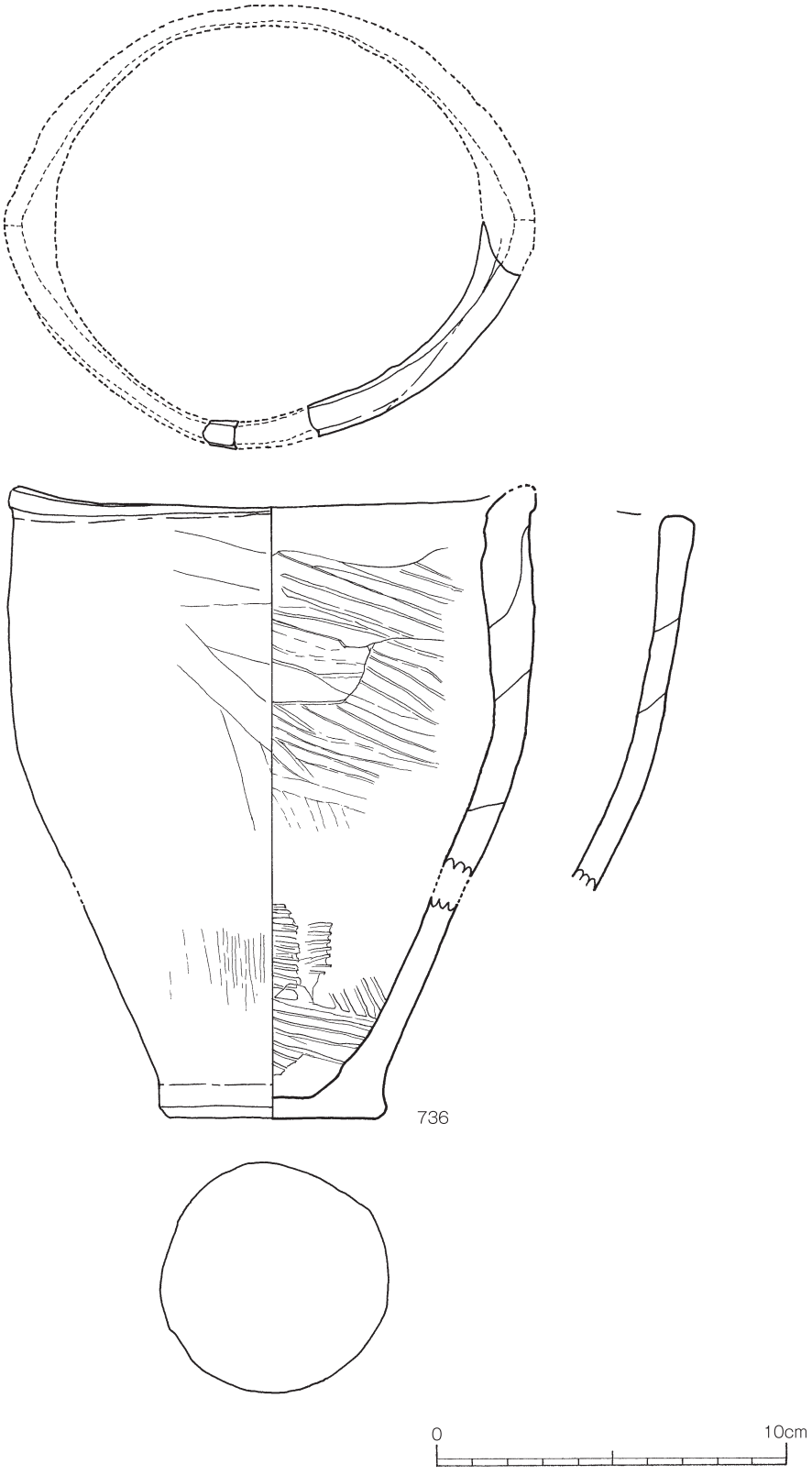


第84図　縄文時代後期出土土器（15）

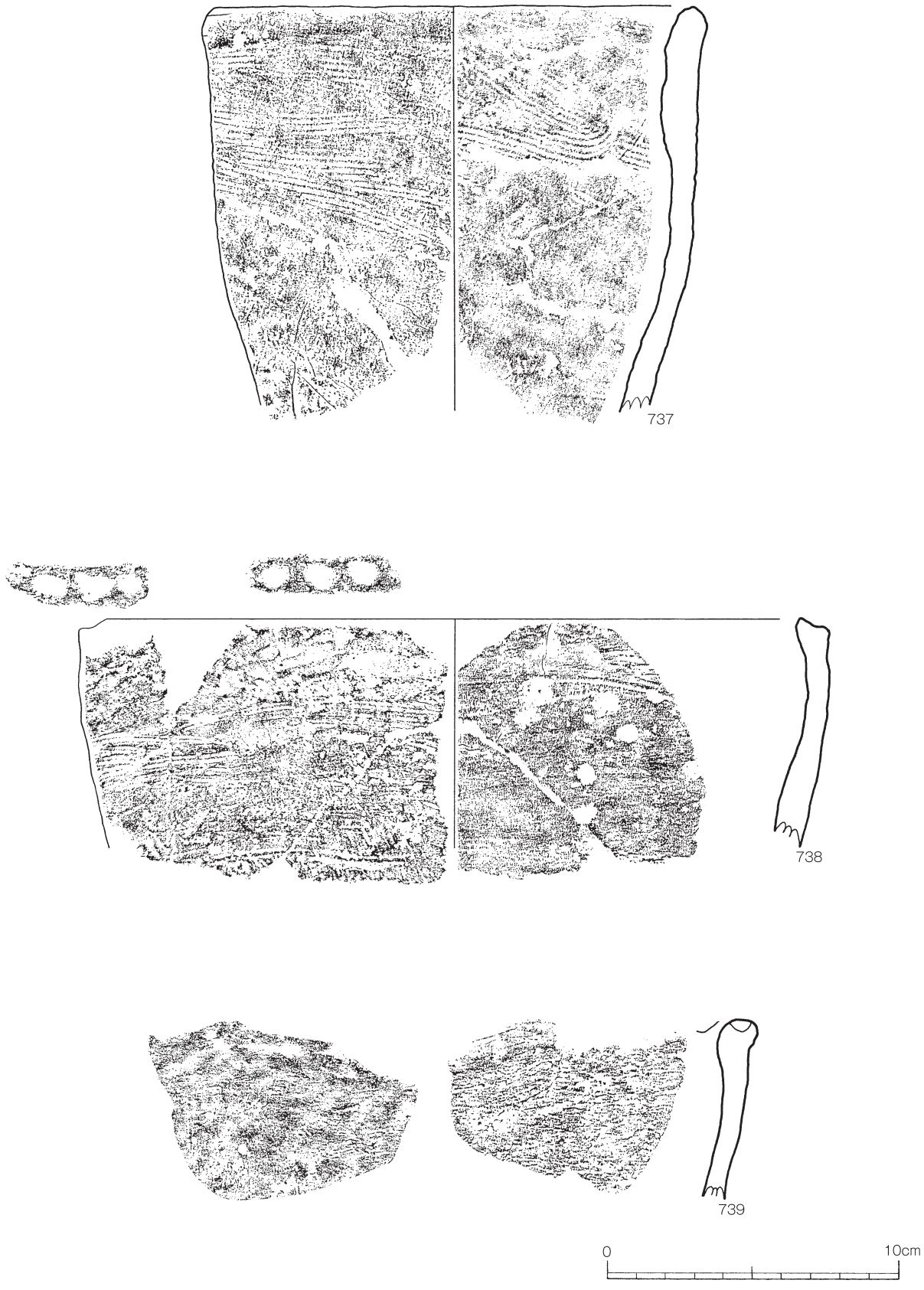


第85図　縄文時代後期出土土器（16）

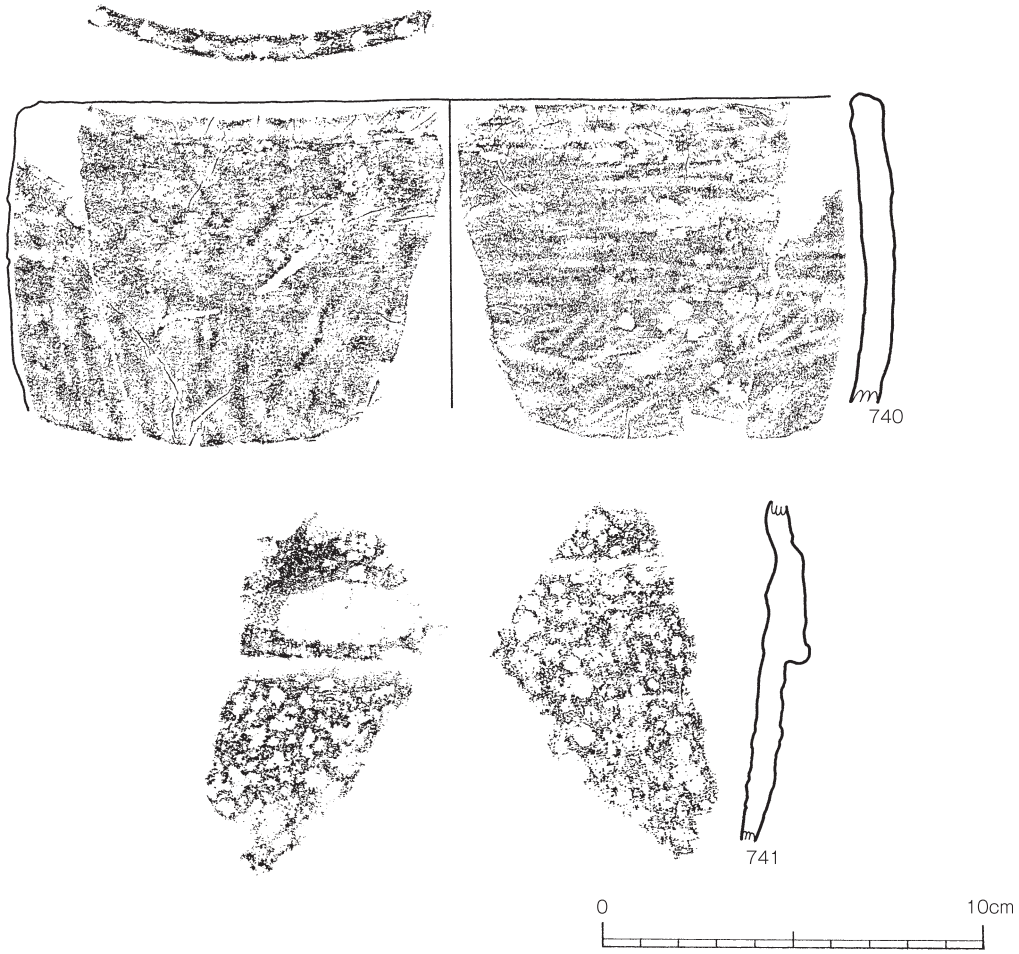
695～710は基本的に口縁部が外反し，711～714は内弯するものである。695・697は無文で，一番初期のものと考えられる。696・698・702・703・706・708・709は文様帯のみに貝殻刺突文が711は縦方向に，713は横方向に３行，左斜め方向への斜線が施されている。699は文様帯や胴部に貝殻刺突文が施され，700は口唇部に添って文様帯に沈線が１条，外面側に斜位の刻目が上下に施されている。701は，文様帯に半裁竹筒文が連続に施されている。内外面共に貝殻条痕文の調整がある。704は，文様帯に２条の沈線文の間に貝殻刺突文が，706は刺突文が１列に，710は沈線文と貝殻条痕文を交互に２条ずつ，714は貝殻条痕文・沈線文と刺突文が施されている。712は，口唇部が平坦で断面四角形を呈している。715～735は，695～714に比べ，文様帯が広く，文様帯の下部が肥厚している，新しい時期の土器である。715～721，723～731，733～735は外反し，732は内



第86図　縄文時代後期出土土器（17）



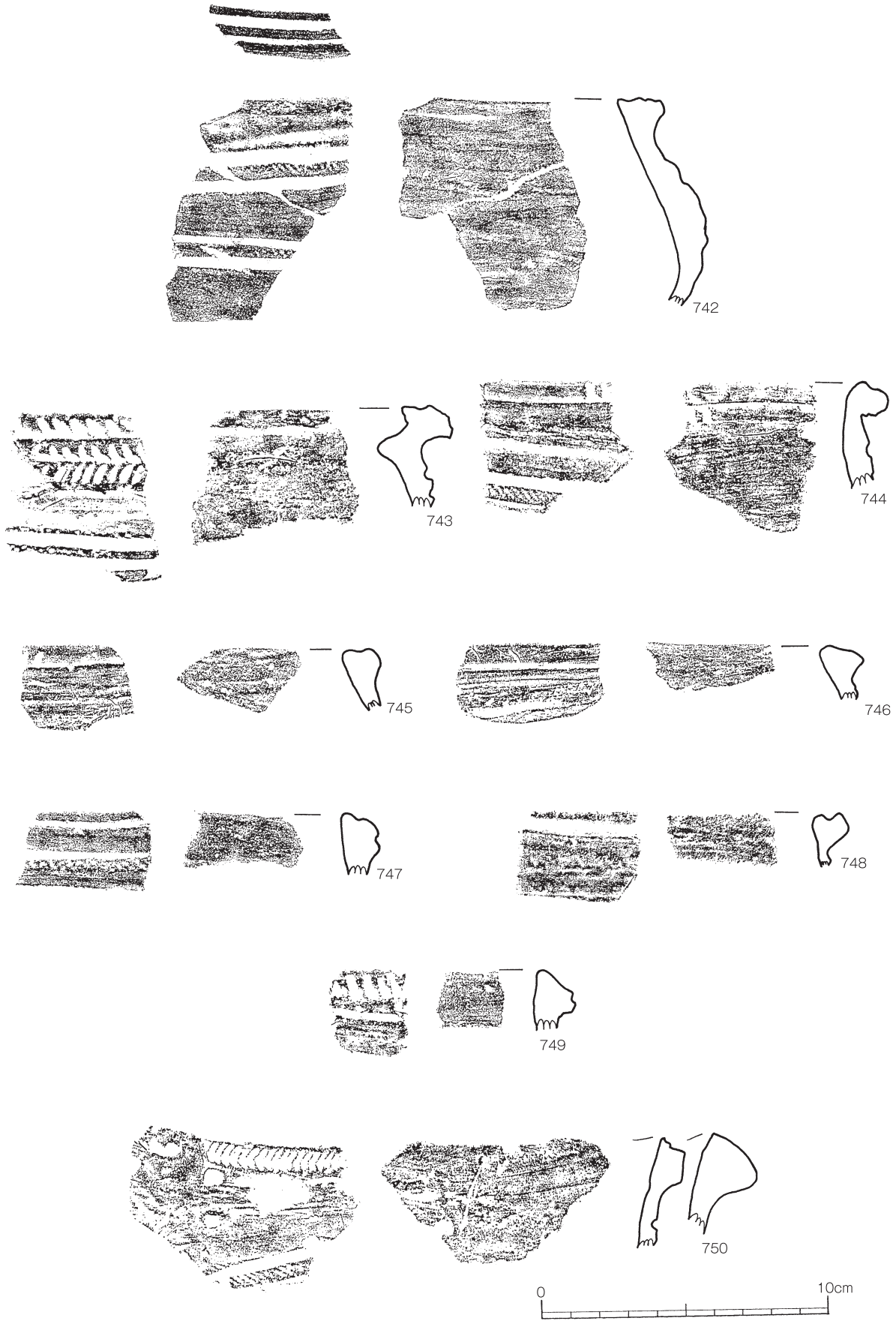
第87図　縄文時代後期出土土器（18）



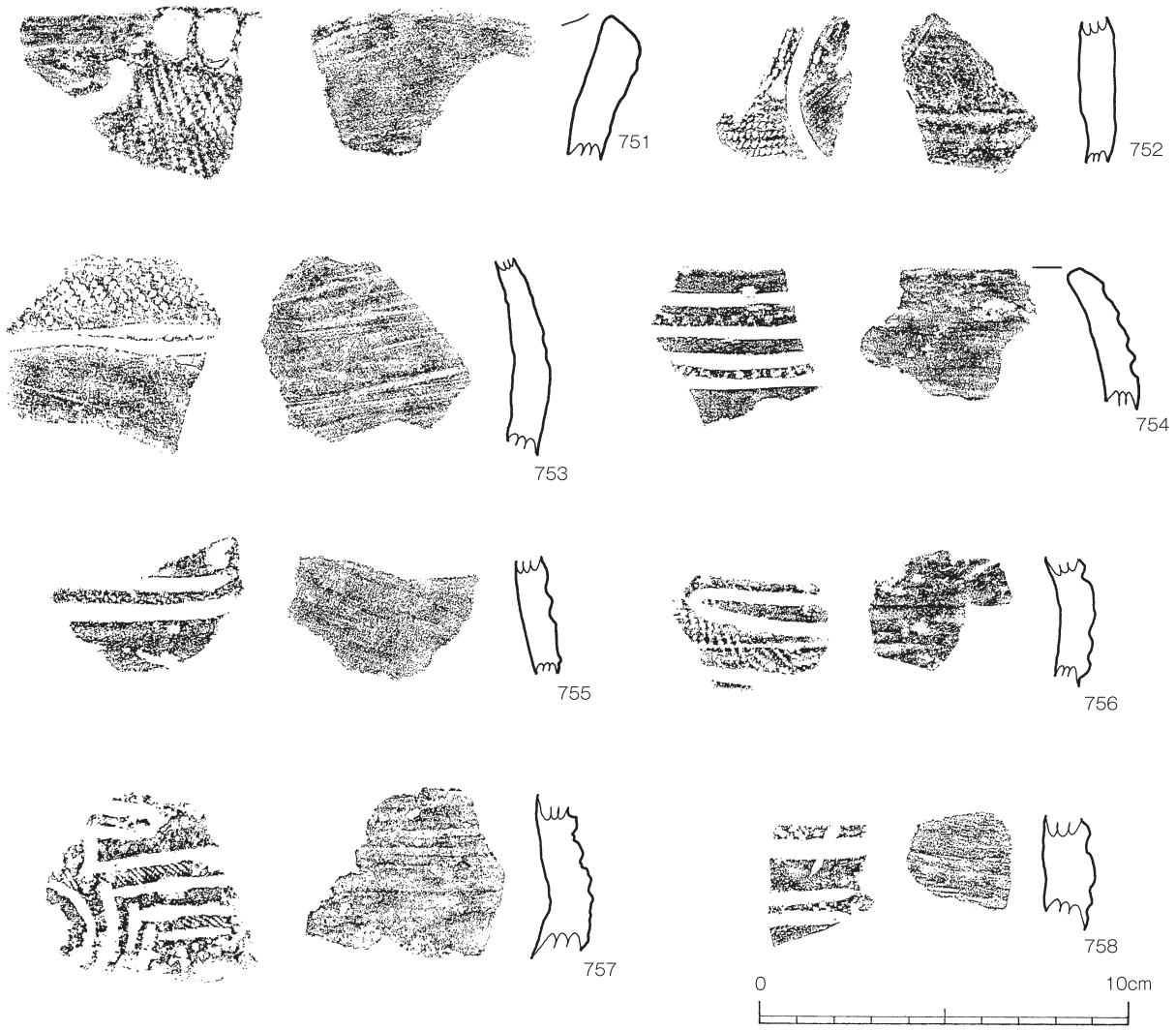
第88図　縄文時代後期出土土器（19）

弯している。722は口縁部は若干外反気味ではあるが，直立している。713～722は斜位に刻目が施されている。713は右斜め方向に，それ以外は左方向に刻目が施されている。文様帯に722は１行，713～720は文様帯の上下の刻目間に，無文もしくは凹線文・沈線文もしくは貝殻条痕文が施されている。715･719は無文，718は沈線文，716は凹線文，717は貝殻刺突文が施されている。722･724は，左下方向へ斜位に貝殻刺突文が１列，723はそれに加え，下に横斜位から円筒状の工具による刺突文が施されている。725と726は山頂部である。文様帯には上下に，左下方向へ斜位に刻目を施し，その間には，723は左下方向へ斜位に，長さ２㎝～３㎝の刻目・凹線文・刻目が施されている。725は，内面の山頂部，横位に刻目が施されている。727は３条の刻目，728は上下に縦方向の刻目が，間には左下方向へ斜位に貝殻条痕文が，729・730は貝殻条痕文が３条，731と734・735は隅丸方形の凹線文と刻目と下に右下方向へ斜位に刻目，732は二重に隅丸方形の沈線文が，731と734の凹線文の下に左下方向へ斜位に刻目文が施されている。733は貝殻刺突文が，口唇部付近と文様帯，文様帯下部には先の丸い工具による刺突文が連続している。内側の調整については，729は斜位に，733は下から上に向かって貝殻条痕文が施されている。

736～741は無文土器である。736は，波状を呈し上面観はレモン形である。外面にケズリ，内面は斜位に，口縁部付近にいくに従って横位に，貝殻条痕文が施してある。737は，内外面共に，口縁部から胴部中央部にかけて横位に貝殻条痕文が施され，また内部から新たに粘土が重ねて貼り



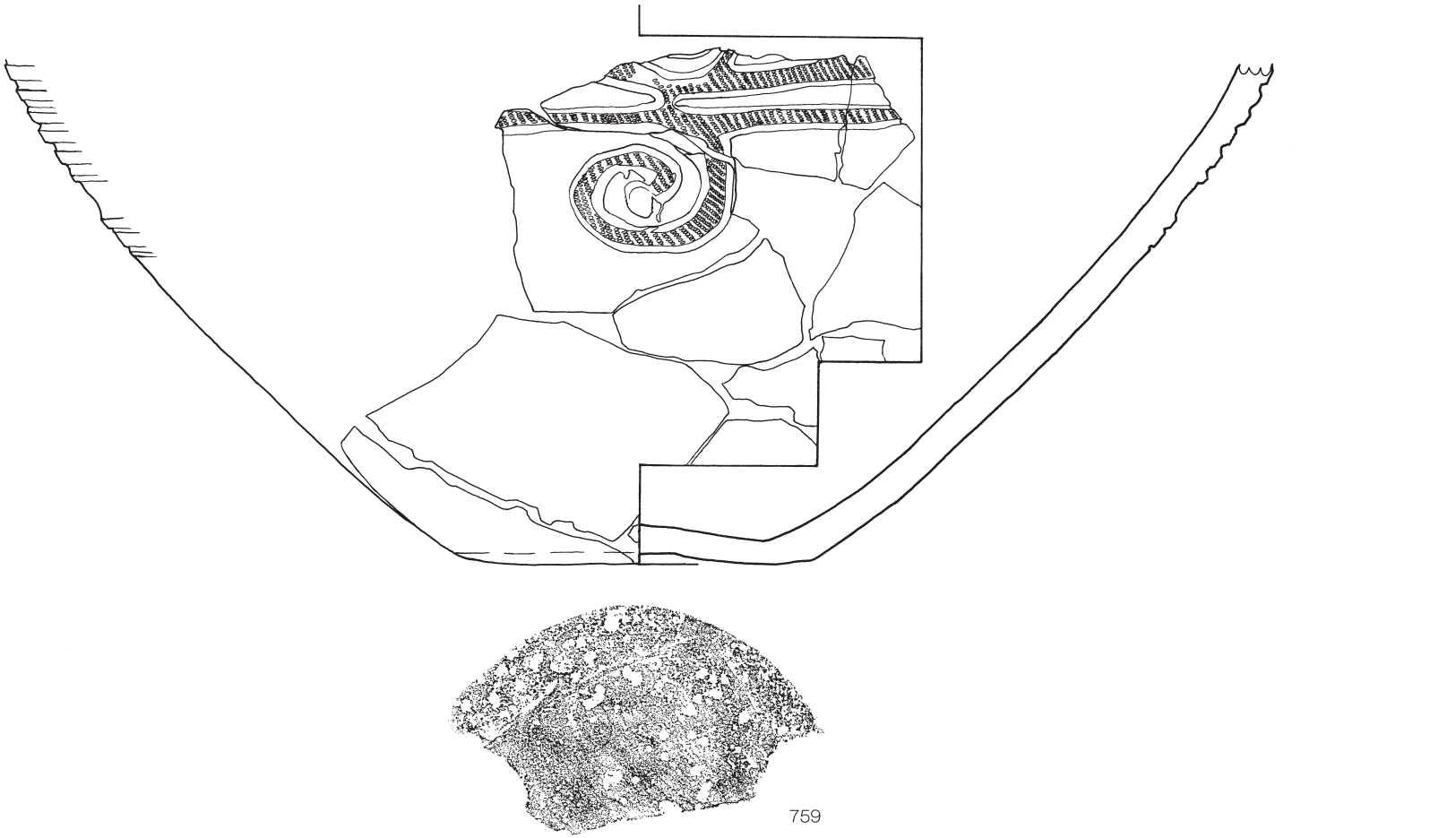
第89図　縄文時代後期出土土器（20）



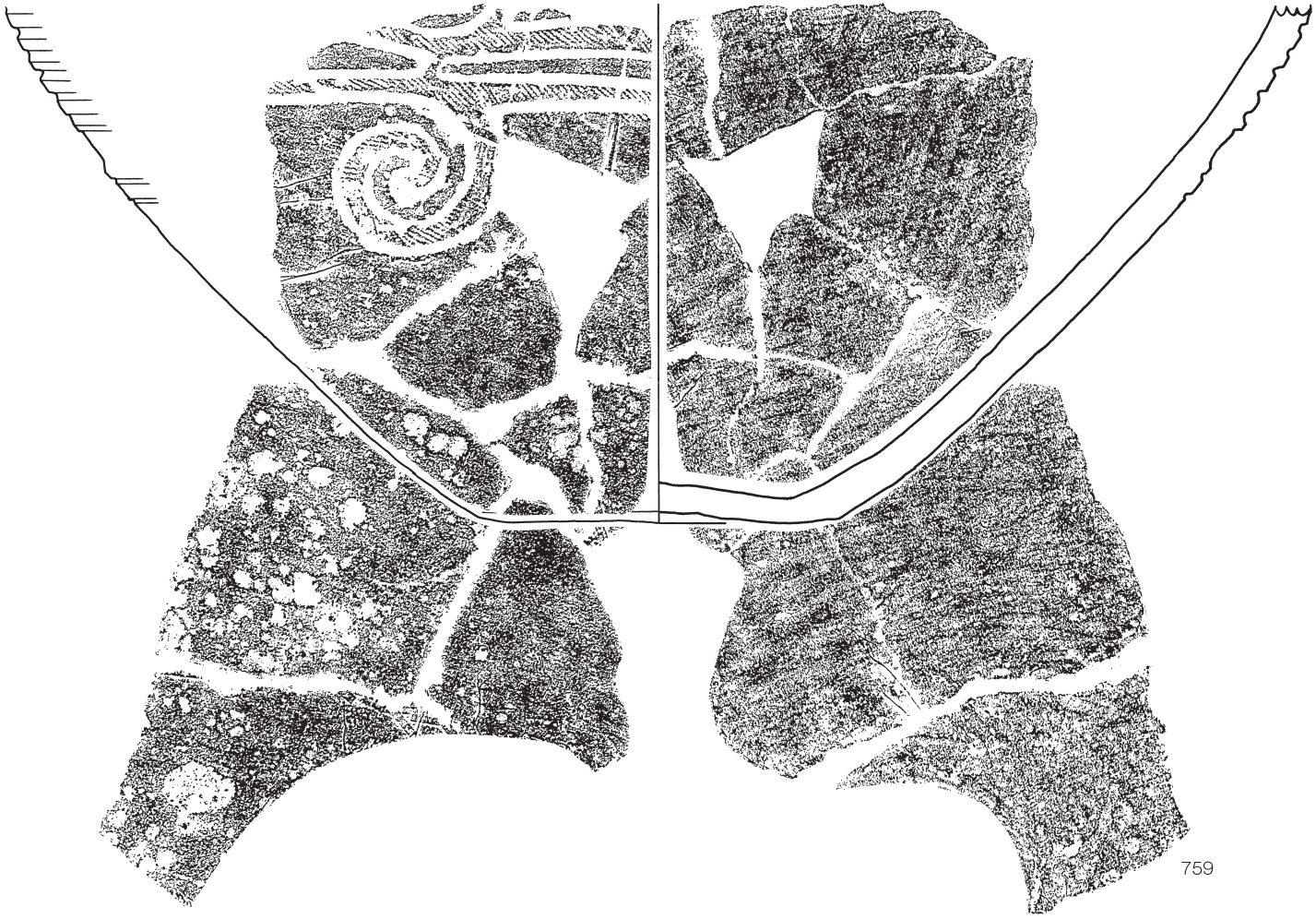
第90図　縄文時代後期出土土器（21）

付けており，その分肥厚している。738は口唇部が平坦で，若干外側に傾斜し連続した凹点文が施してあり，口縁部付近は文様帯らしい凸部が外面に残り，調整の痕が伺える。南福寺式土器の深鉢の可能性がある。738は，口縁部は平坦で，若干内側に内弯し，口縁部は長さ３㎝の凹点文が施されており，口唇部が１㎝程盛り上がっている。739は，口唇部には約１㎝おきに刺突文が施されている。741は，断面が口縁部付近に広い文様帯と思われる凸部が確認されるが，剥離が多い。特徴的には市来式土器の新しい時期を呈し，口縁部中位で２段階に内弯している。剥離や口唇部の欠損で，市来式土器と比定するのは難しい。

742～759は，磨消縄文の文様を呈する土器である。ミガキ・ケズリ・ナデを施され，胴部に入組渦巻文もしくは，入組鉤手文様を呈している。形状は頸部で強く外反し，胴部中位が張り出している。鉢もしくは浅鉢である。鐘崎式土器に比類されるものである。口唇部については，742は２条の沈線文，743は外面，上面２段と３段に刻目，744～748は凹線文，749は沈線文および斜位の刺突文，750は肥厚し，刺突・刻目文・沈線文・穿孔が，751は刻目が施されている。751は鐘崎式土器ではない可能性が高い。759は，胴部から底部を図化できた。口縁部付近の外面の胴部は入組渦巻文を呈している。残存していない上部の胴部も対称的な入組渦巻文があったものと推

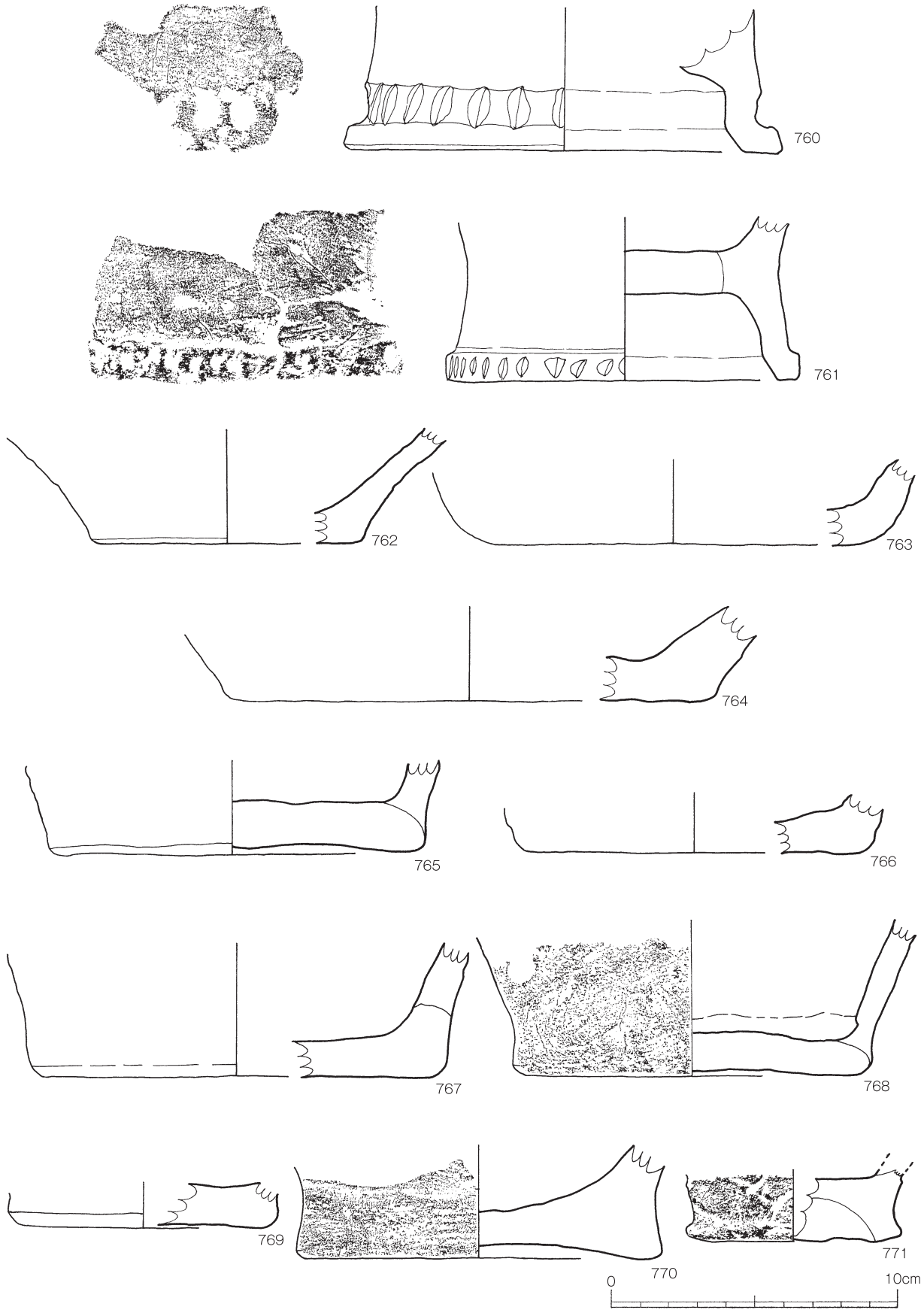


第91図　縄文時代後期出土土器（22）

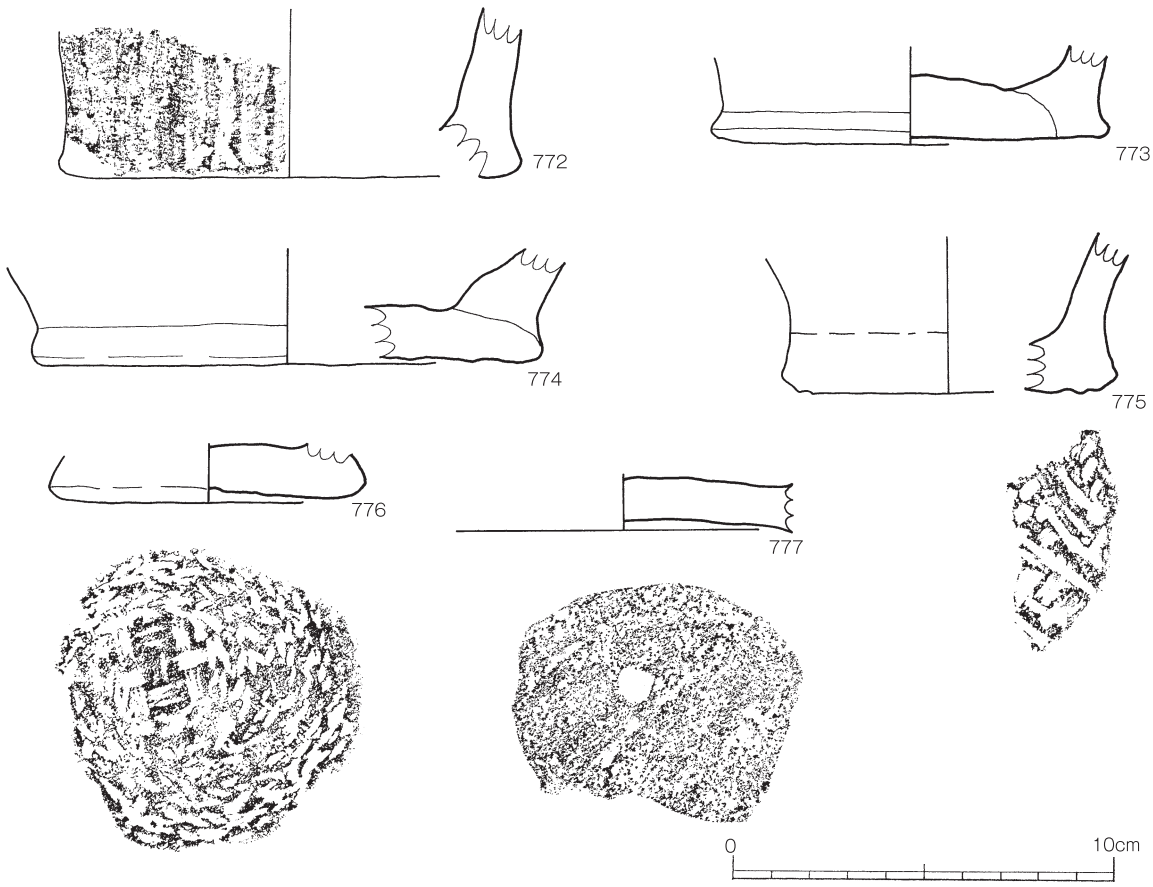


0 10cm

第92図　縄文時代後期出土土器（23）



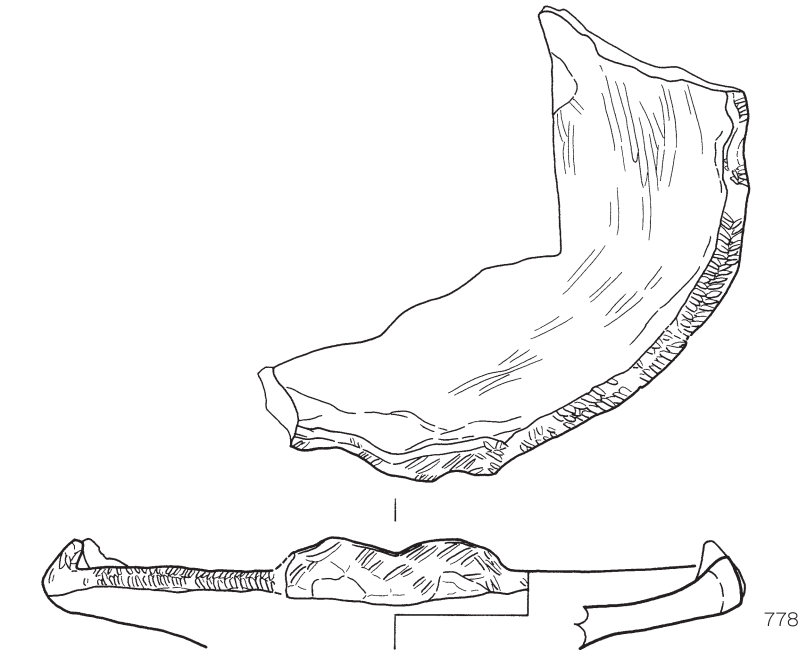
第93図　縄文時代前期～晩期出土土器底部（1）

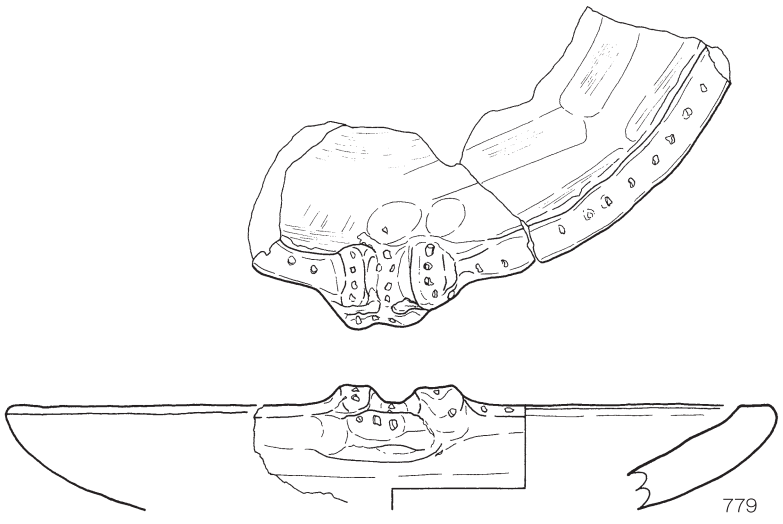


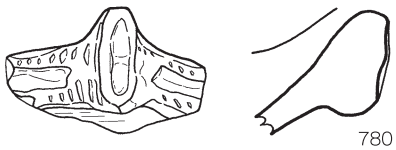
第94図　縄文時代前期～晩期出土土器底部（2）

測される。磨消縄文の部分には赤色塗料が付着しており，分析の結果，顔料の量が少なく鉄分と確認されたが，丹とは確認ができなかった。また，758は，下の沈線文にも赤色顔料が確認できた。743は，口縁部中位から「く」の字状に外反している。744は，口縁部中位からL字状に，若干下方へ屈曲している。

760～777は底部である。760・761は，脚部である。下部に刻目が連続して施されている。縄文時代後期の南福寺式土器の深鉢の可能性が高い。762～776，768・770以外は，円盤状の底部に円筒状の粘土を載せ，積み上げて土器を作り，770は円盤状の底部と一回り大きい胴部を個々に作り隙間を新たに粘土で撫で，埋めて，繋いで土器を作ったと考えられる。765は，底部と胴部の接続痕をナデで隠している。767は，底部の縁を上に伸ばし胴部の下部を作成し粘土を重ねて上へ伸ばしている。768は，その円盤状の底部の縁に粘土を円筒状に，そして若干外反気味に積み重ね，その痕跡をナデて，隠していることが，胴部の接続痕を見て取れる。特に胴部と底部との接合部は指頭で執拗にナデ消した痕跡が伺える。771の底部は脚部のついた底部にその後，粘土を加えて充実高台にしている痕跡を欠損部分から見て取ることができる。776が，充実高台風の平底をもつものである。775・776は網代底である。766は胎土に，楕円球形の礫（長径1.5cm，短径６㎜）が含まれていた。777は，底部の裏に球状の小石もしくは種子の痕跡と思われる凹部が伺える。762～764は，外側にやや開いてまっすぐ伸び平底をもつ。765～767は，底部から口縁部に向かっ

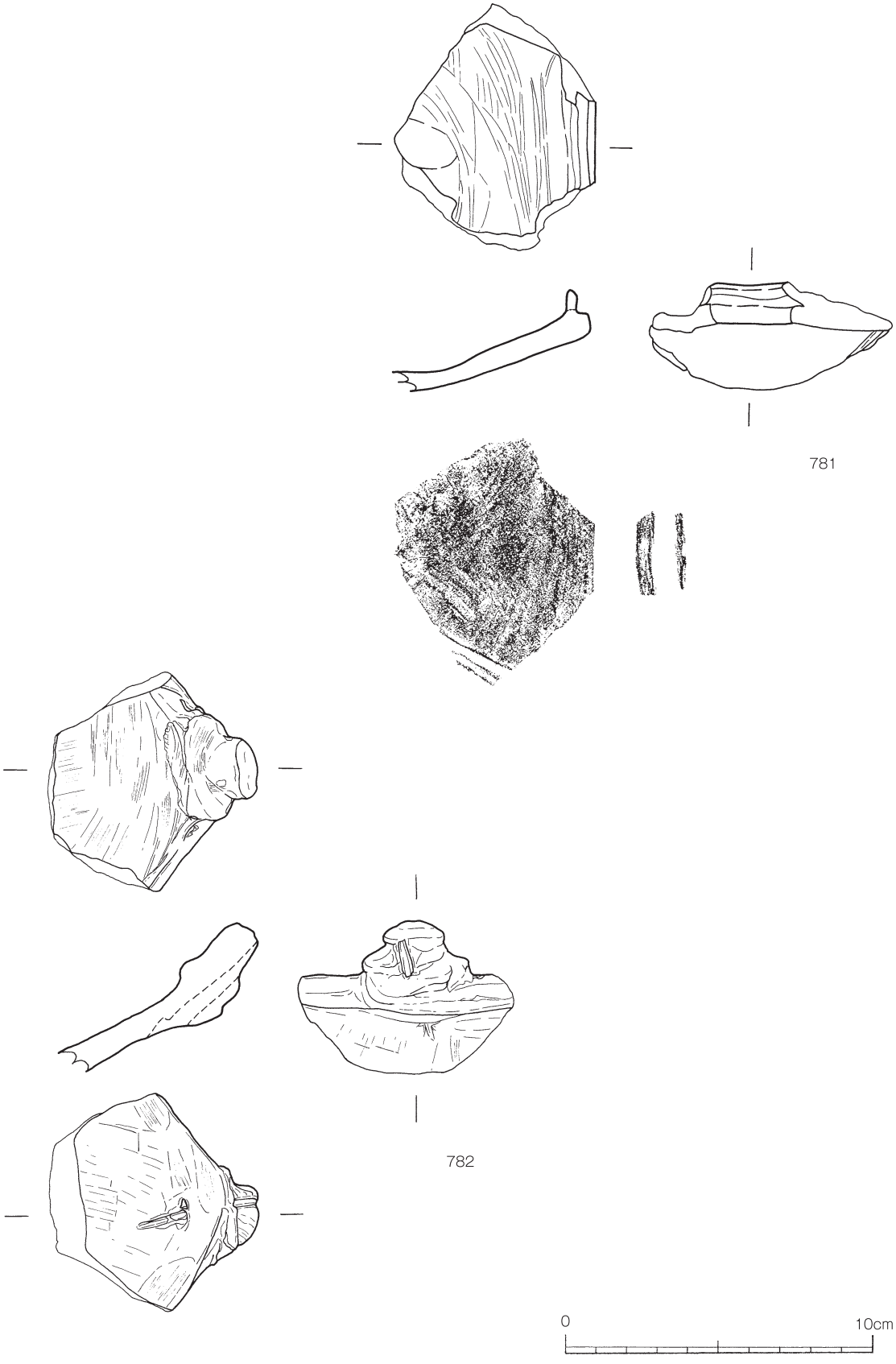




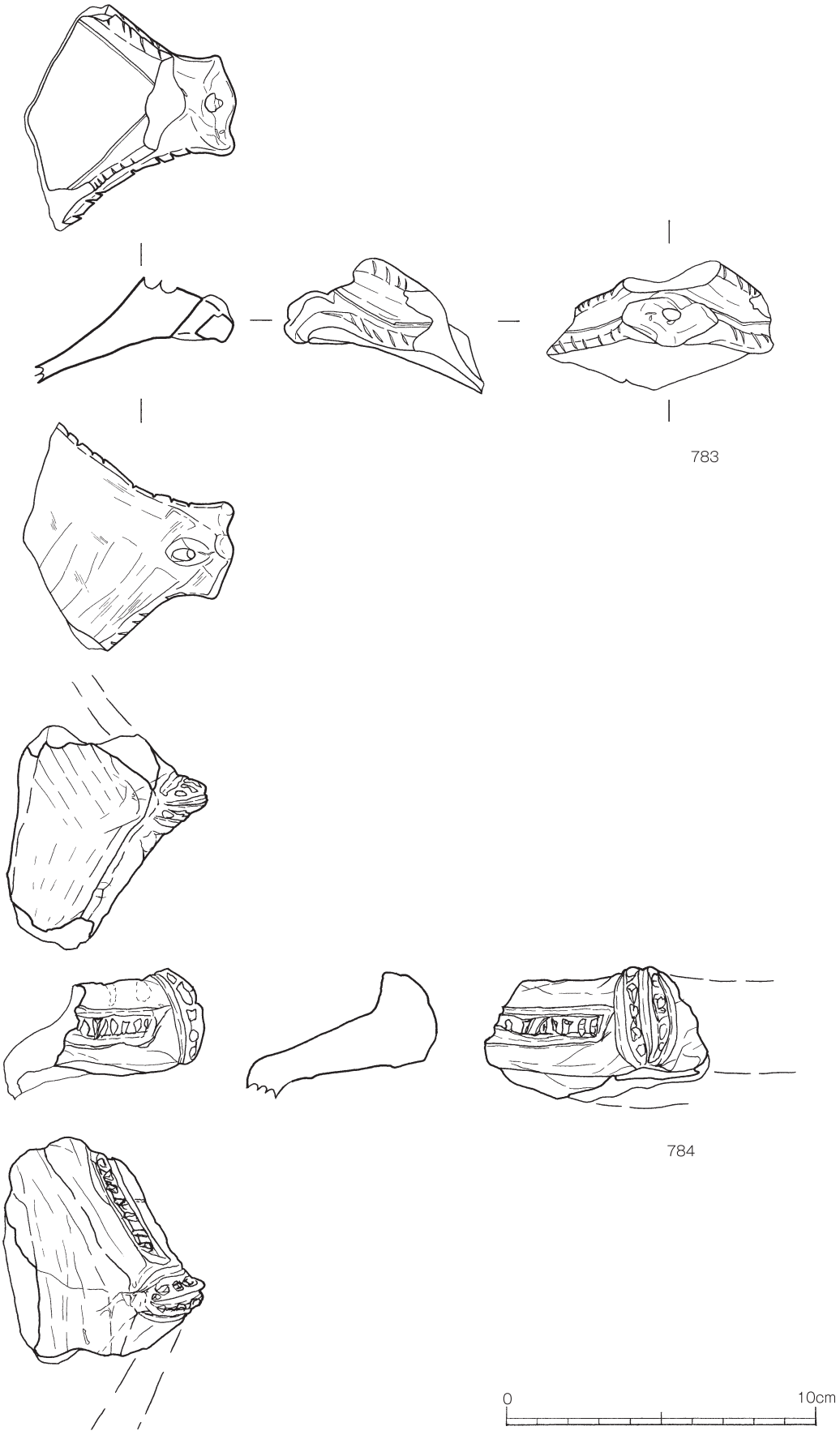




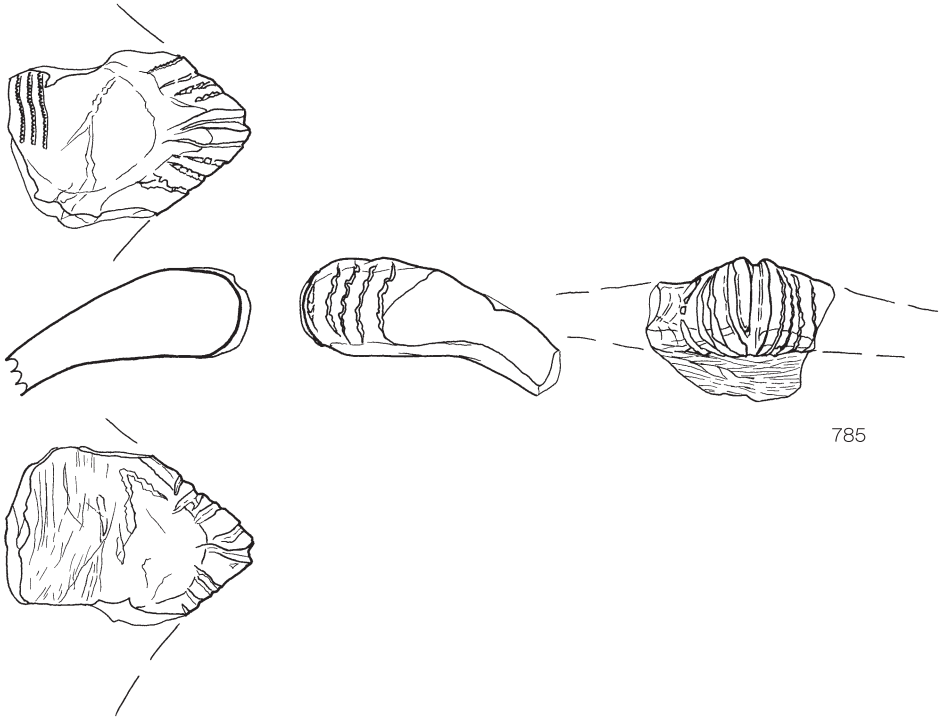
第95図　縄文時代後期出土土器（24）

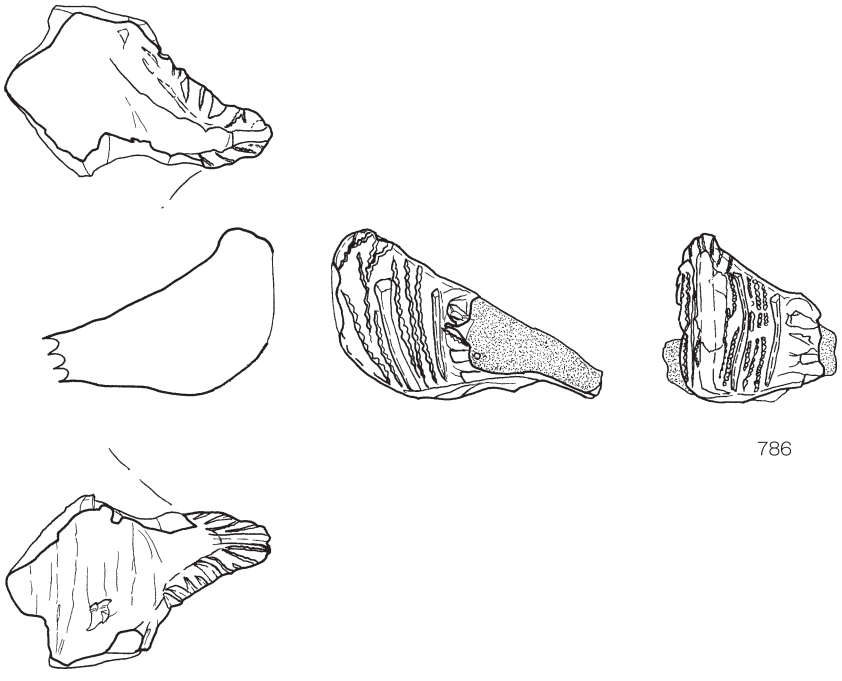


第96図　縄文時代後期出土土器（25）



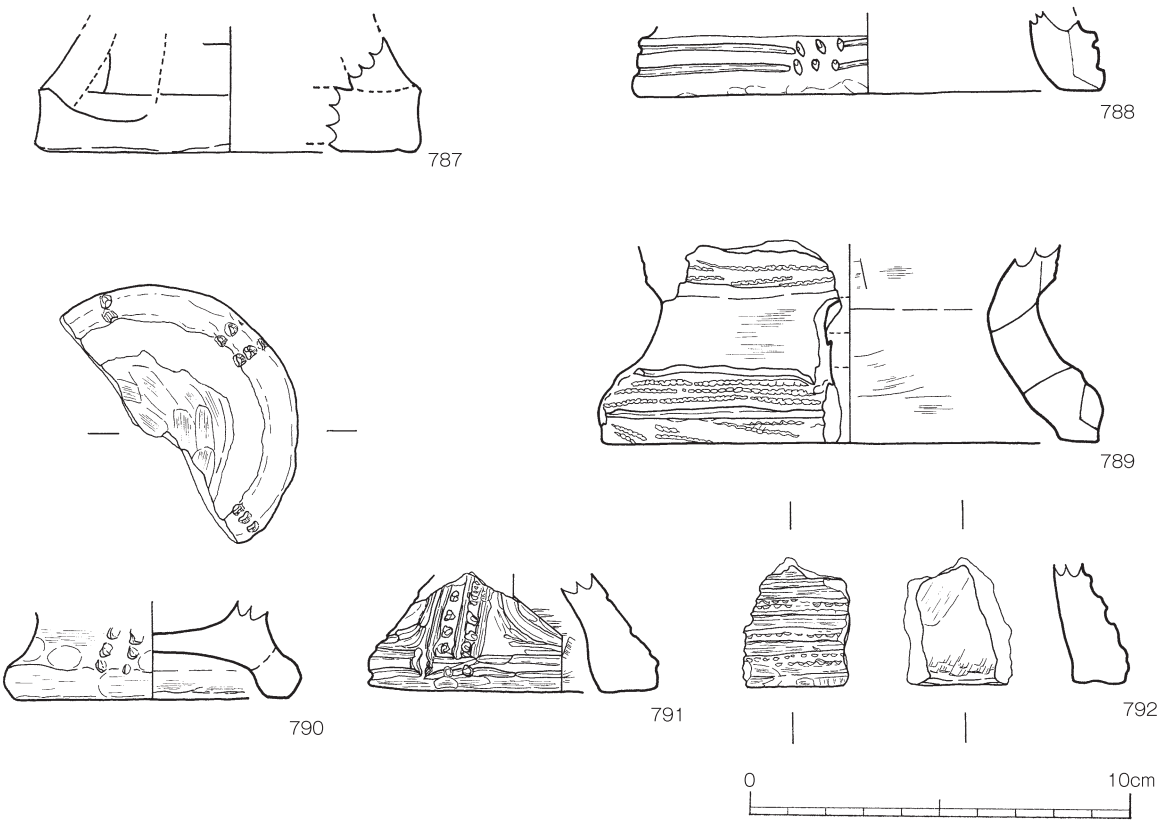
第97図　縄文時代後期出土土器（26）







第98図　縄文時代後期出土土器（27）



第99図　縄文時代後期出土土器（28）

て直口気味に立ち上がっている。

778～792は，市来式土器の台付皿形土器と考えられる。778～786は皿部，787～792は脚部である。上面観については，778～780は円形，783～786は方形，781・782は円・方形と判別が不可能のものである。反しのある土器は，781・784・786である。僅かにあるのは778・779・782・783・785である。不明確なのは780である。778は粘土紐を波状にしての装飾した口唇部以外は刻目状に施し，779は口唇部とその装飾部に径が約２㎜の刺突文が施されている。780の装飾は，口縁部に刻目文・沈線文が施され，船の船首を連想させる形になっている。781の装飾については，口唇部に沈線文を施すことにより５㎜程度の反しの部分をつくっている。782の装飾部は，２段の楕円の筒が重なった形を呈し，径２㎜，長さ５㎝程度の穿孔が外面部に施してある。783は２段に皿を重ねたような形になっている。上段にあたる部分の口縁部の先端は欠損し，下段にあたる部分は径４㎜，長さ２㎝の穿孔が外面部に施してある。口縁部には刻目文が施してある。784の装飾部は，先端部には３条の沈線文を施し，その間に刺突文が施してある。口縁部には方形の沈線文，その中に刻目状の刺突文が施されている。高さ1.5㎝，厚さ９㎜の反しがついている。785の装飾部は，先端部に沈線文を施し，その両脇を４条ずつ貝殻刺突文が施されており，舌状の形を呈している。786の装飾部は，先端部は欠損しているものの，貝殻刺突文と沈線文を組み合わせた文様になっている。船の船首を連想させるような形状を呈し，僅かながら反しが施されている。780・785・786は，市来式土器の深鉢の可能性も考えられる。787以外は脚部が確認されている（787は欠損が激しいため）。787・791は，透かし穴の痕が伺える。788は，脚部の底部に新たに沈線文・

工具による刺突文底部を帯状に貼り付けた痕跡，789は底部の沈線文の間に施された貝殻条痕文の帯を後で貼り付けられた痕跡が断面から２か所伺える。789・792は貝殻刺突文・沈線文が交互に，790は工具による刺突文が施されていた。

５　晩期（第100図～第108図）

・土器

縄文時代晩期の土器は，浅鉢形土器と深鉢形土器が出土している。

・深鉢形土器

793～810は深鉢形土器である。793～799は，その口縁部で，796以外は，内弯する口縁である。793・796・797は外面に数条の工具状の施文具により沈線を施すものである。他は条痕による調整である。内面の調整は，条痕の後にナデ調整を行っている。

800～802と805は胴部最大径の部分であり，いずれも条痕とナデを中心とした調整である。特に805の内面の調整は粗い。803・804は底部から立ち上がり胴部最大径へと至る部分の破片である。

806～807は口縁部が「く」の字状に内弯するもので，807は「く」の字状に内弯した後，直線状に立ち上がり，口縁端部をやや外反させるものである。復元口縁径は，40cmを越えるほどの大型のものである。808・809は厚さや大きさなどからして，これらの深鉢形土器あるいは，これらに類似したものの胴部屈曲部以下の破片である。調整は，外面が条痕，内面が条痕後ナデである。809の内面は特に丁寧なナデである。

810は，底径が５cm程度の小型の深鉢で，底面はやや丸みを帯び緩やかな弧状に胴部へと立ち上がるものであるが，口縁部の形状については判然としない。

・浅鉢形土器

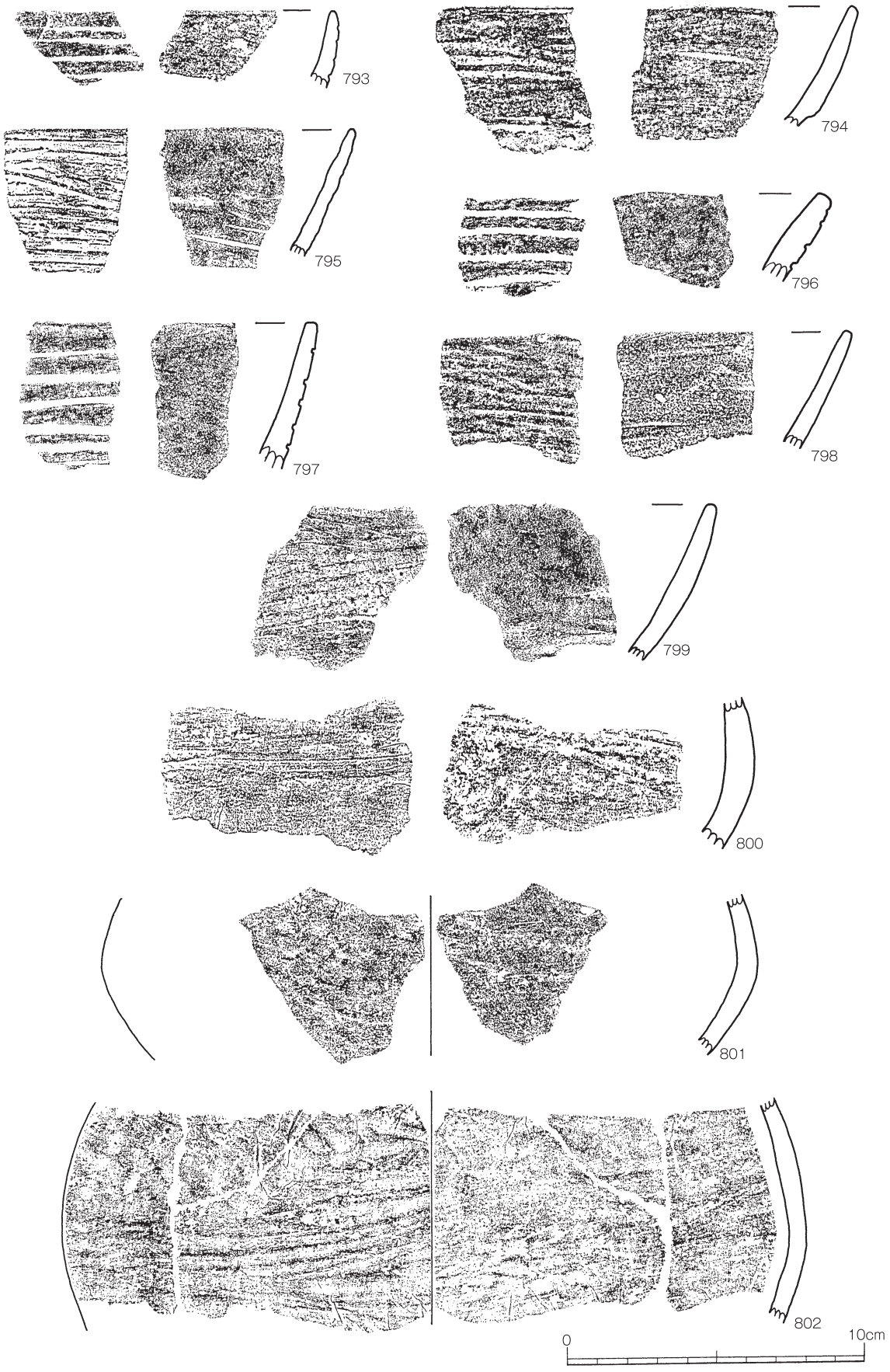
811～819は，浅鉢形土器の胴屈曲部から外反して立ち上がる口縁部である。811～815は口縁端部が垂直気味に立ち上がり，外面に沈線を施すものあるいは，814・815のように沈線状の窪みを部分的にもつものである。816・817は先端がやや玉縁状，818・819は先端を鋭く収めるものである。814～825は，胴屈曲部である。820は，浅鉢形土器にしては，内外とも荒いナデ調整を施している。他は丁寧なミガキである。822は，屈曲部外面に沈線を施す。

826～831は，ボール状の器形と思われるもので，826～828，830のように内弯した口唇部に凹線を施し，先端が細くなるもの，829のように外面に沈線を施すもの等がある。831は，浅鉢形土器底部から立ち上がる部分の可能性もある。

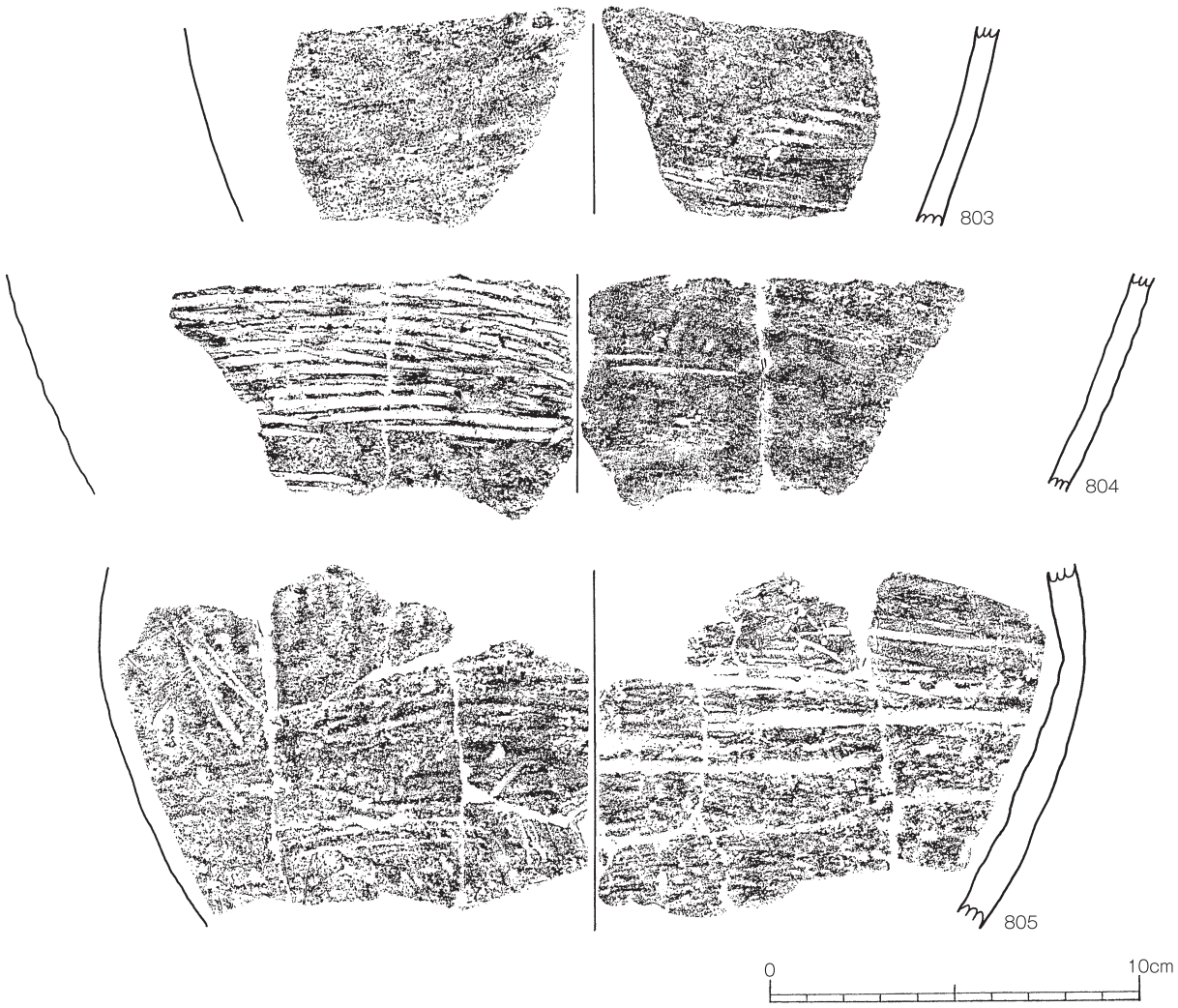
832～837は，胴部が大きく内側へ屈曲し，口縁部が「く」の字状に外反する浅鉢の一群である。832～834は，やや丸みを帯びた口縁端部に外面を主として浅い沈線を施すものである。853も同様の口縁部を有するものと考えられる。836・837は，口縁端部に装飾的風に内外に丁寧な沈線や凹線を施すもので，837は，この時期特有の「ヒレ」状の突起を有するものである。

・土製品（第107図・第108図）

縄文時代前期以降の土製品は，そのほとんどがⅢａ層を中心とする層から出土したため，晩期の部分で一括して取り扱った。また，土製品の全てがメンコである。



第100図　縄文時代晩期出土土器（1）



第101図　縄文時代晩期出土土器（2）

直径は，約２cm～４cm程度のものが平均的であるが，839や845のように直径が６cm～８cm程度のものもある。839～846までは，縄文時代後期の無文及び沈線を施したものと思われ，他は，縄文時代晩期の深鉢形土器を加工したもののようである。

また，847は胴部の屈曲部，851は底部から胴部へ立ち上がる部分，854は口縁部，856は底部の加工品と思われる。

・石器（第109図～第125図）

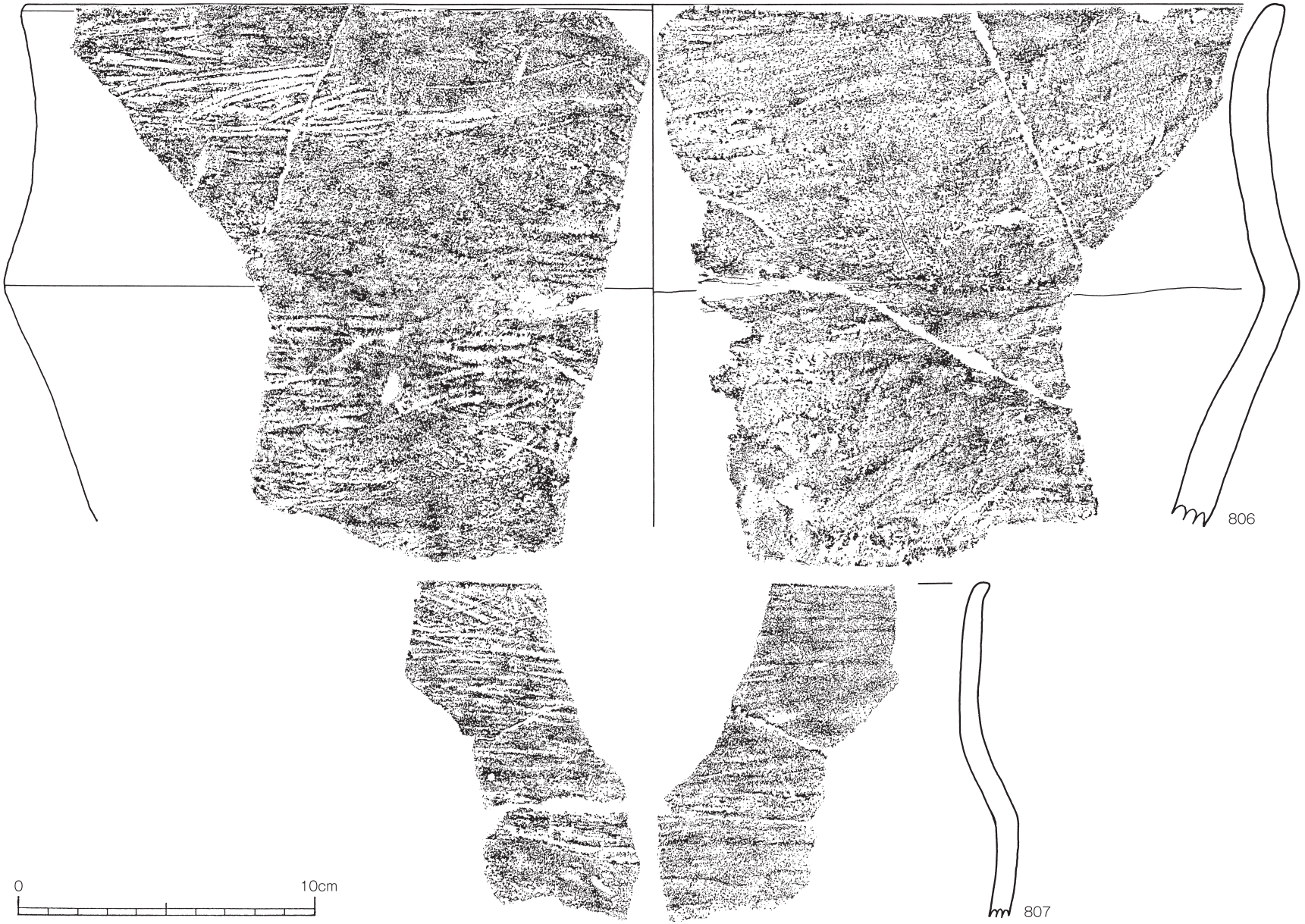
縄文前期以降の石器は，ほとんど同一層より出土したことから，土製品同様に晩期の部分で一括して扱った。

・石鏃（第109図）

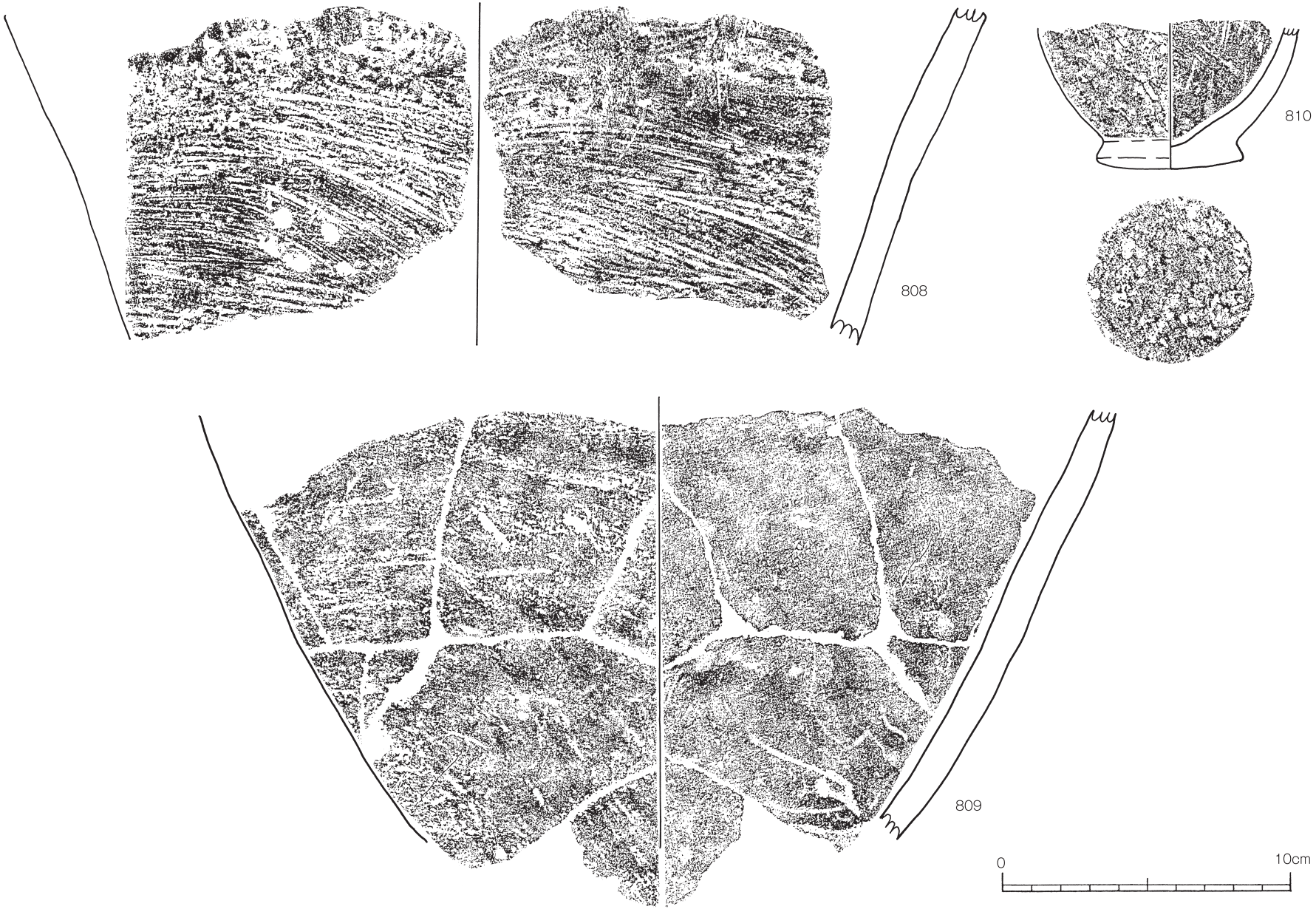
857～860は，石鏃である。857は，両面に自然面を残し，基部は抉りを有しないものである。858～860は，ほぼ正三角形の形状で基部の抉りは，浅い弧状のものである。859は，基部も緩やかな弧状を呈する。

・石匙（第109図）

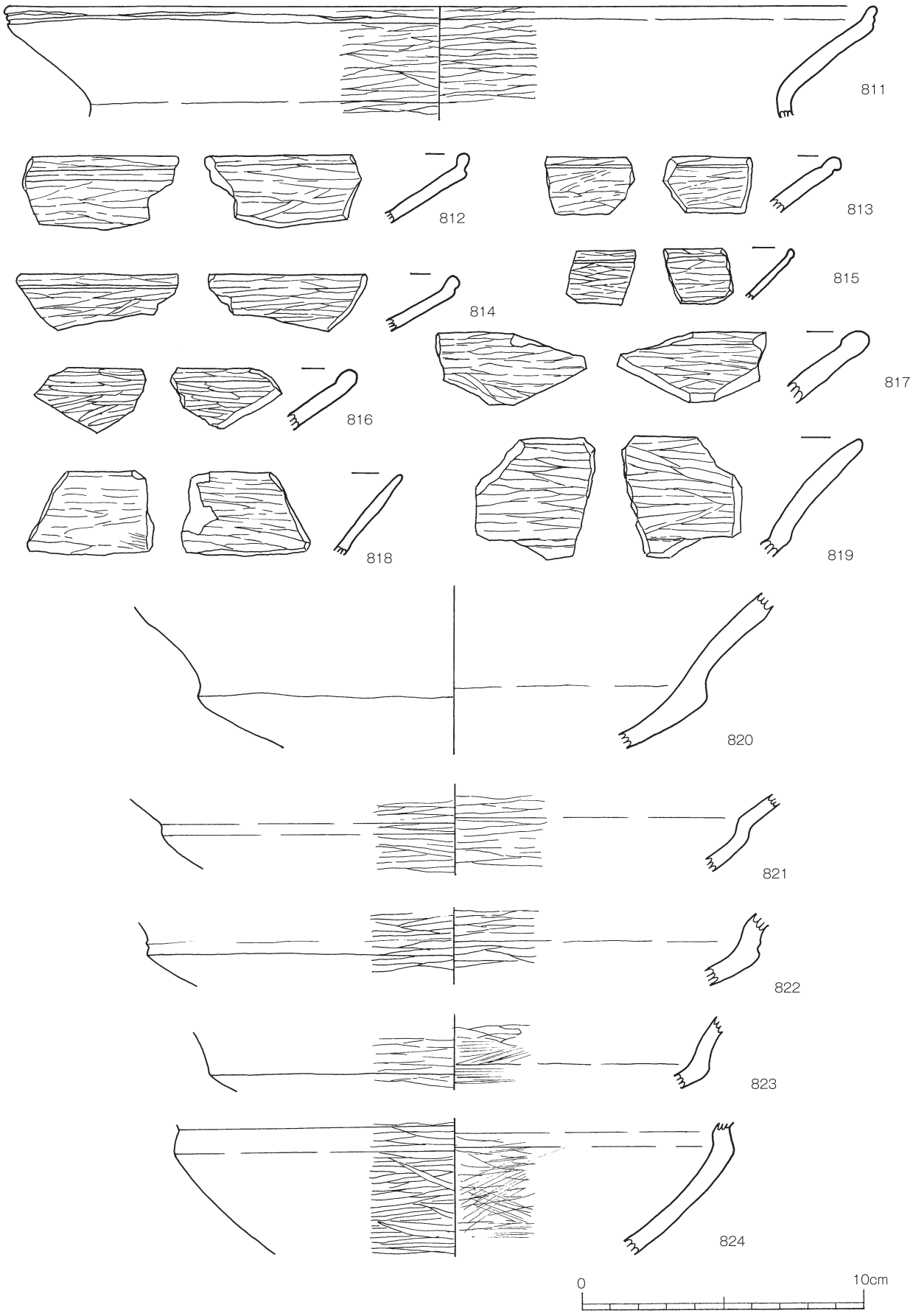
861～863・865は，石匙である。石質は，861と863が鉄石英，862が頁岩である。861は全面に丁寧な加工を施すものである。862は，刃部を中心に丁寧な加工を施している。刃部が「U」の字状



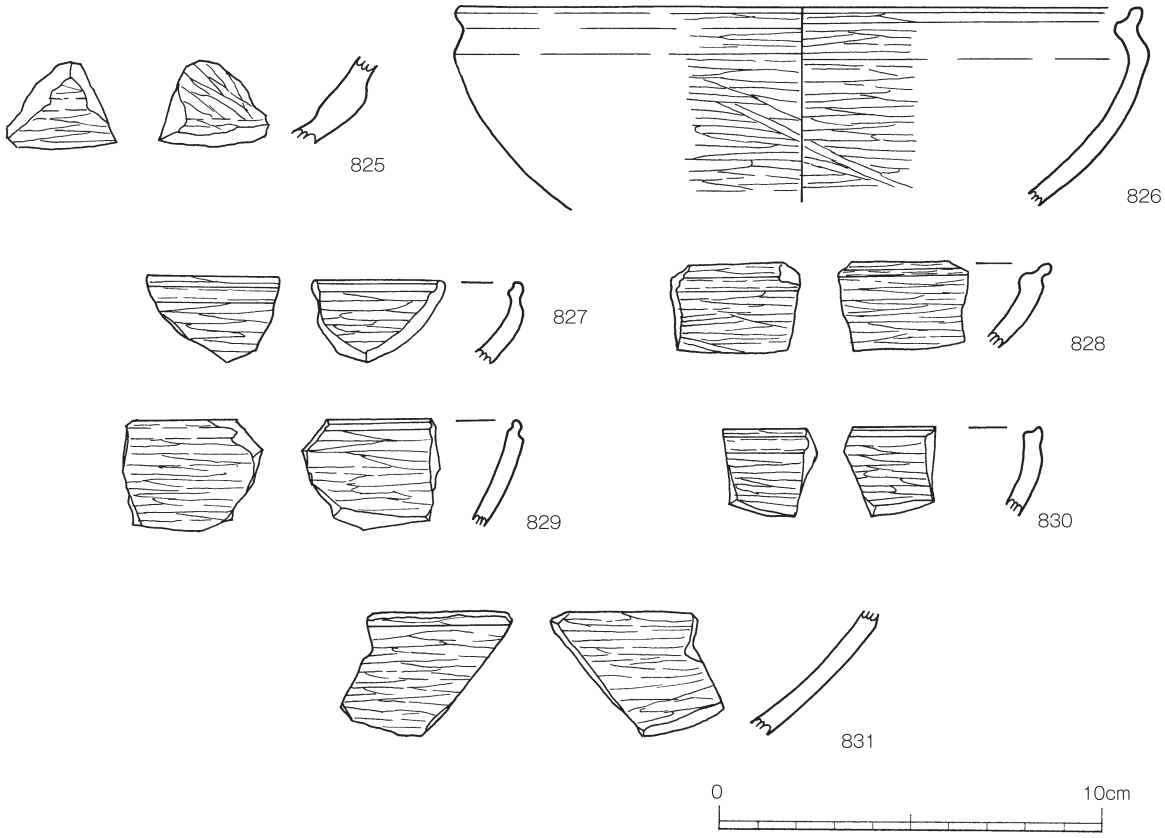
第102図　縄文時代晩期出土土器（3）



第103図　縄文時代晩期出土土器（4）



第104図　縄文時代晩期出土土器（5）



第105図　縄文時代晩期出土土器（6）

の形状となっているのがこの石匙の特徴である。863は，作出の段階で鋭い刃部が形成されたためであろうか，刃部の細かな調整はほとんど行われていない。865は，横長剥片を縦に用い，一方の側縁部を中心に加工を行い，刃部を形成しているものである。

・剥片類（第109図・第110図）

864は最大長が5.2cm，幅2.6cmで断面が三角形の上牛鼻産の黒曜石である。側縁の下端に使用痕と思われる剥離が見られるものである。866は，メノウ製の剥片で下端部に微細な使用痕と思われる剥離が見られるものである。

・スクレイパー（第110図）

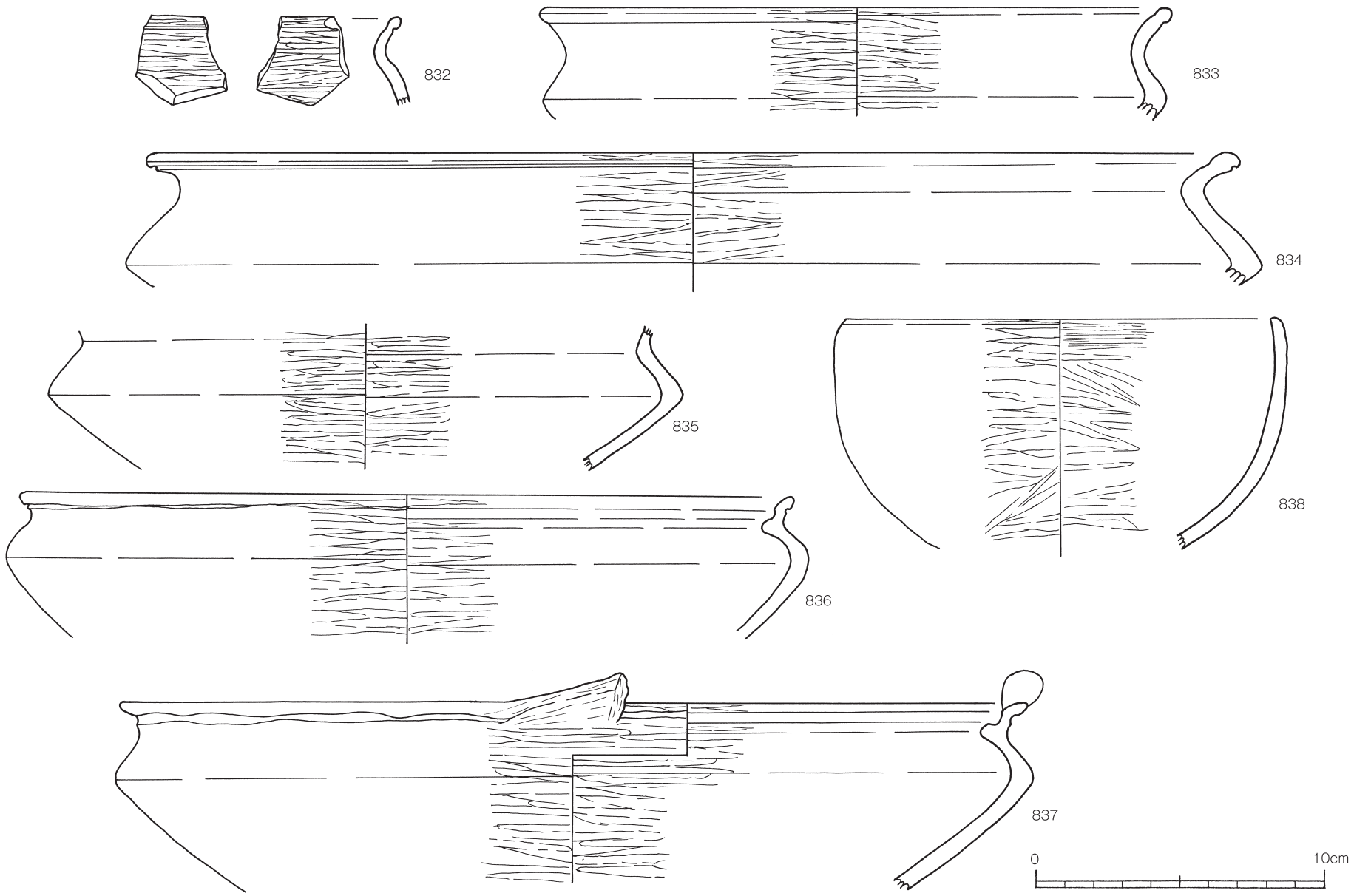
867は，チャート製の縦長剥片の一方の側縁部に丁寧な交互剥離を施したもので，ややくぼみ気味に刃部を形成している。

・石斧（第111図～第113図）

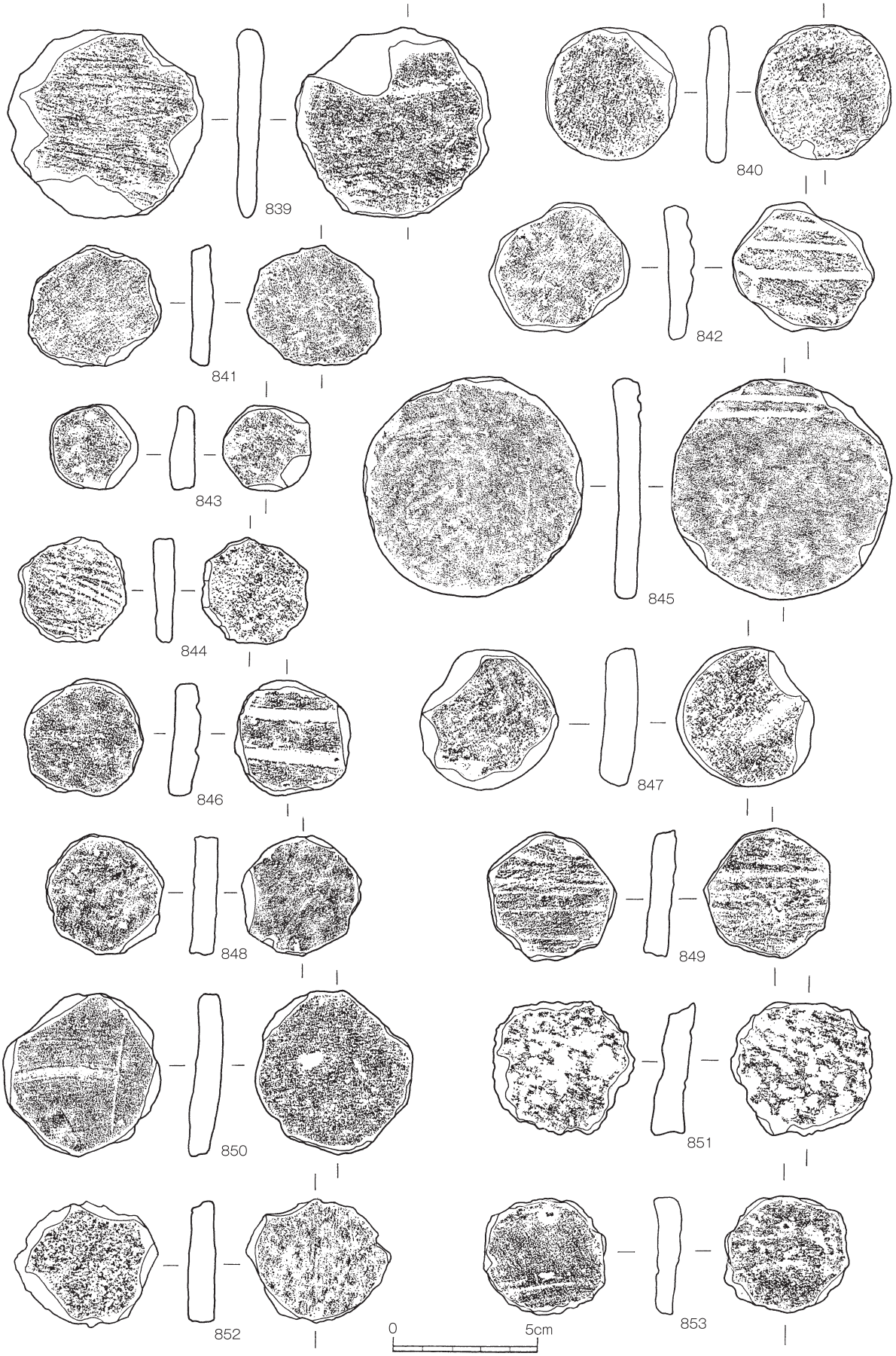
868～883は，打製・磨製の石斧類であり，その石質の大半は頁岩と砂岩である。

866は，磨製石斧の半欠品を再利用したものである。特に，先端部（旧刃部）を中心に敲打具として用いられていたものと思われる。

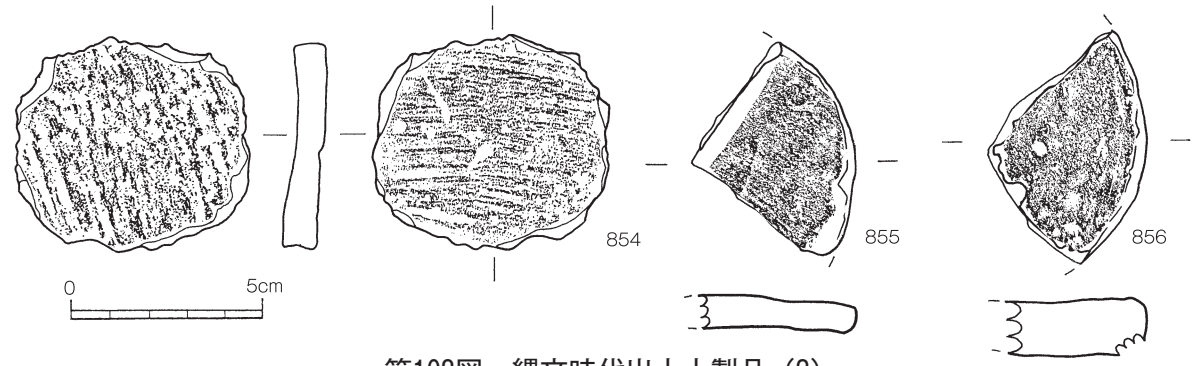
869～872は，打製石斧である。869と870は，半欠品であるが，短冊形を呈していたものと思われ，869は，一部に敲打成形が見られる。871は，両面から丁寧な剥離を施し，側縁部も鋭く仕上げている。872は，縦長剥片を用いて，丁寧に成形し，その後，刃部を中心として研磨をおこなっている。



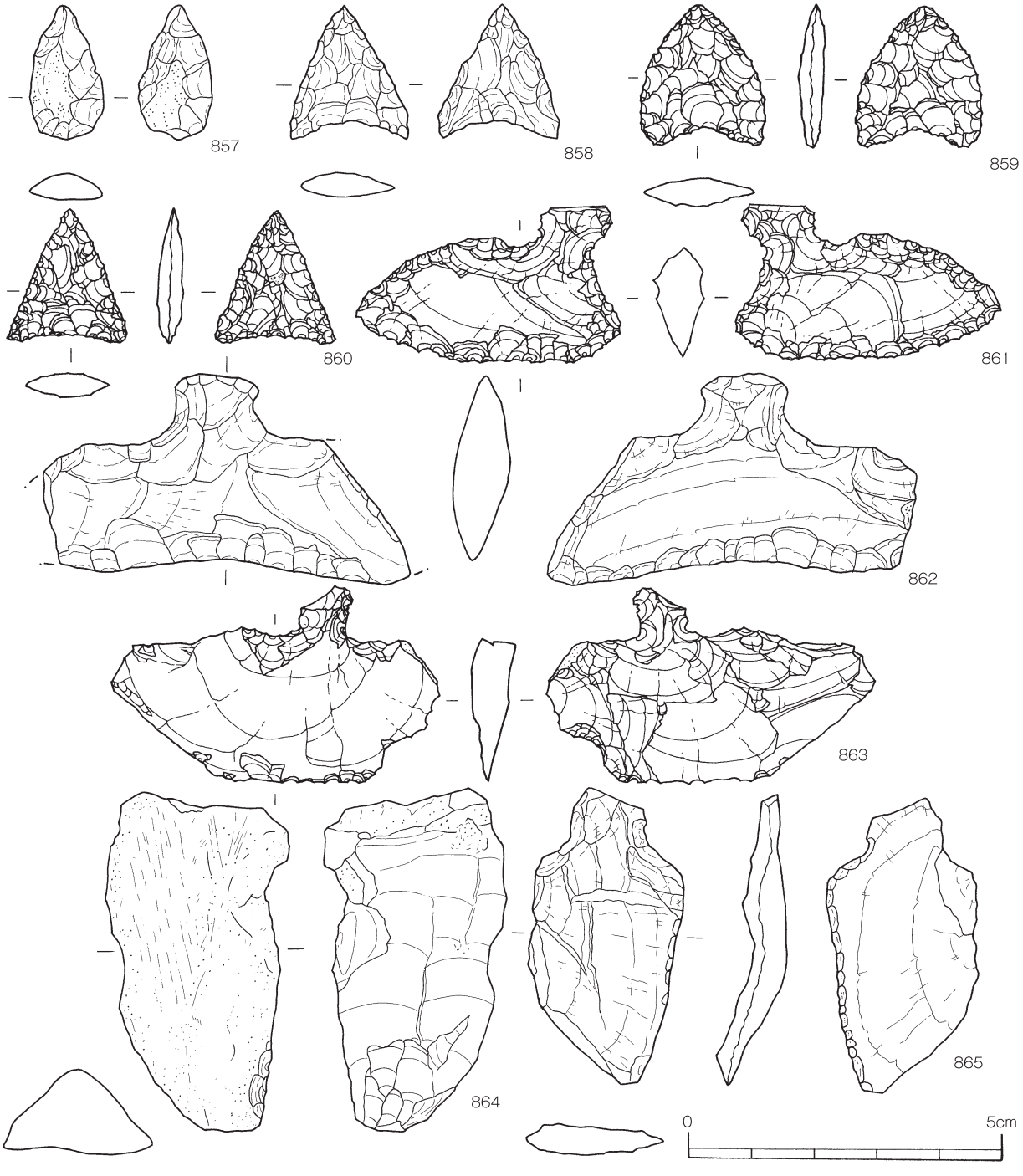
第106図　縄文時代晩期出土土器（7）



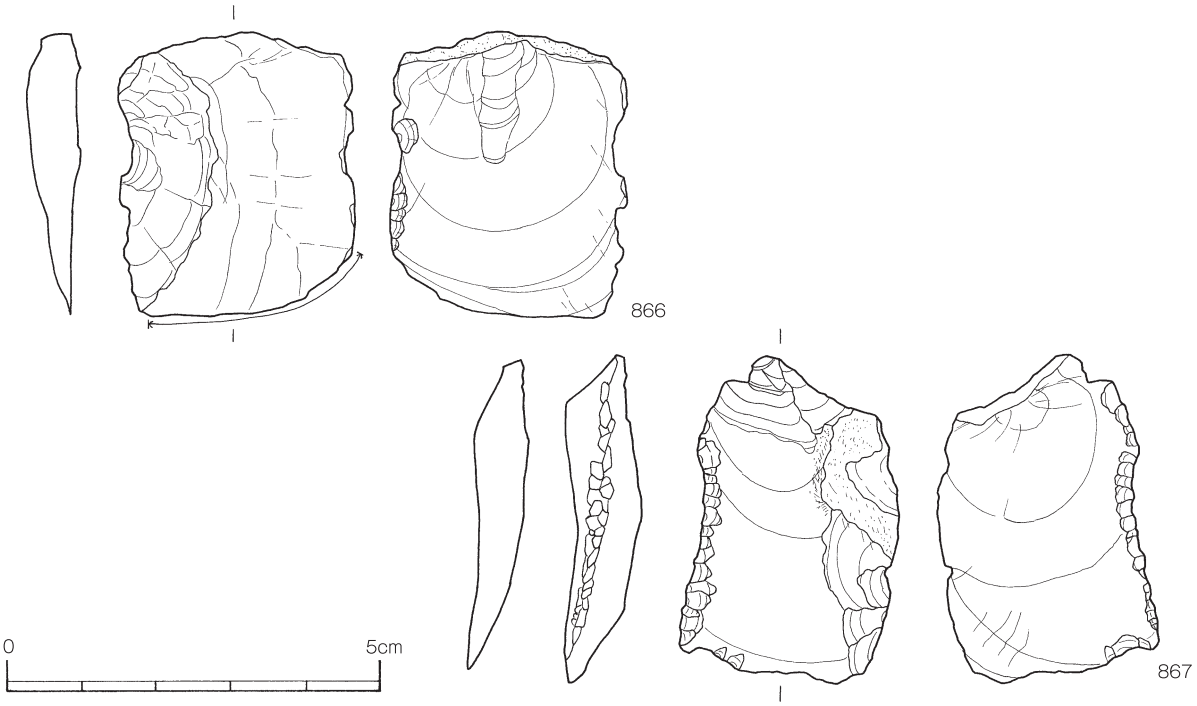
第107図　縄文時代出土土製品（1）



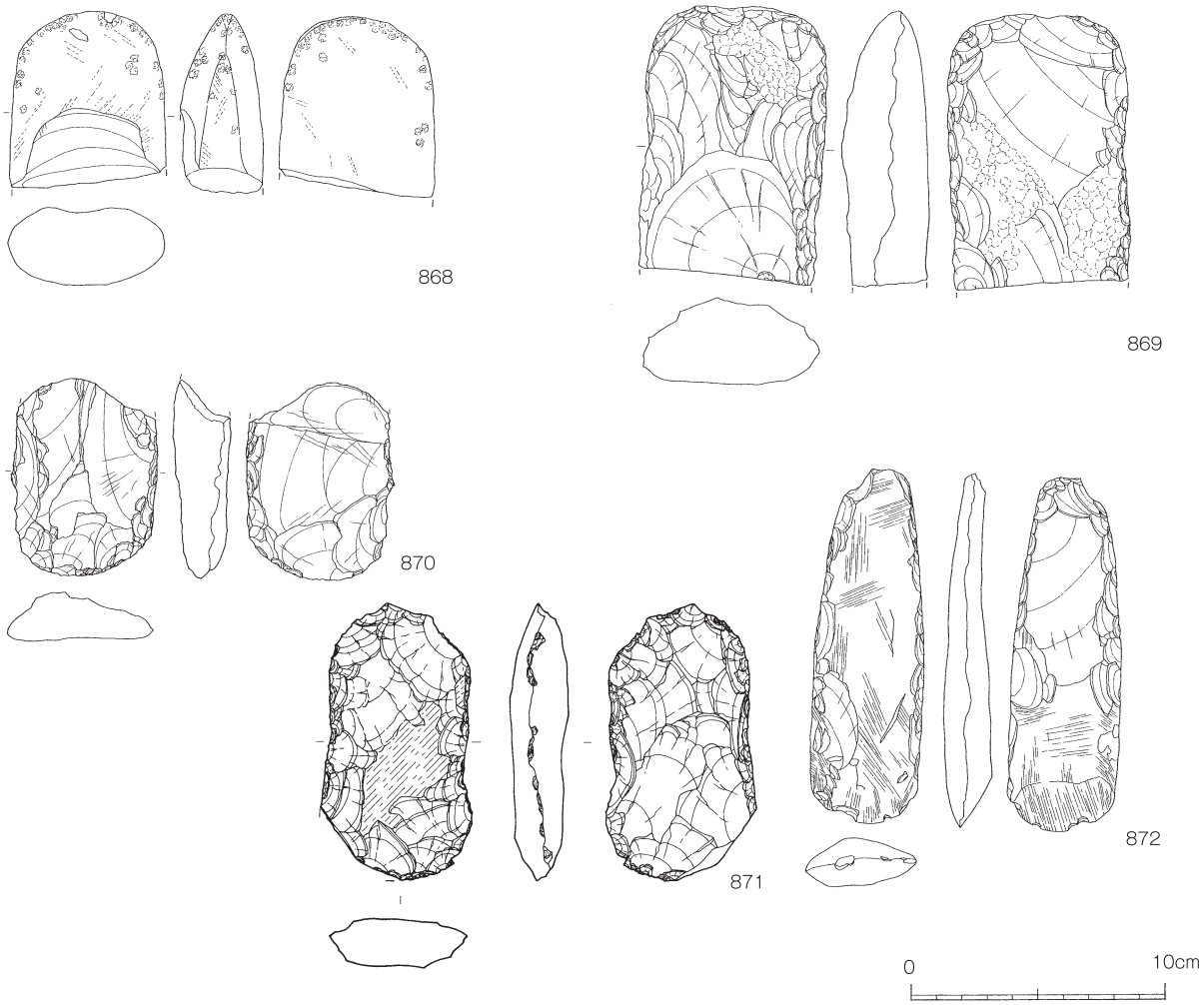
第108図　縄文時代出土土製品（2）



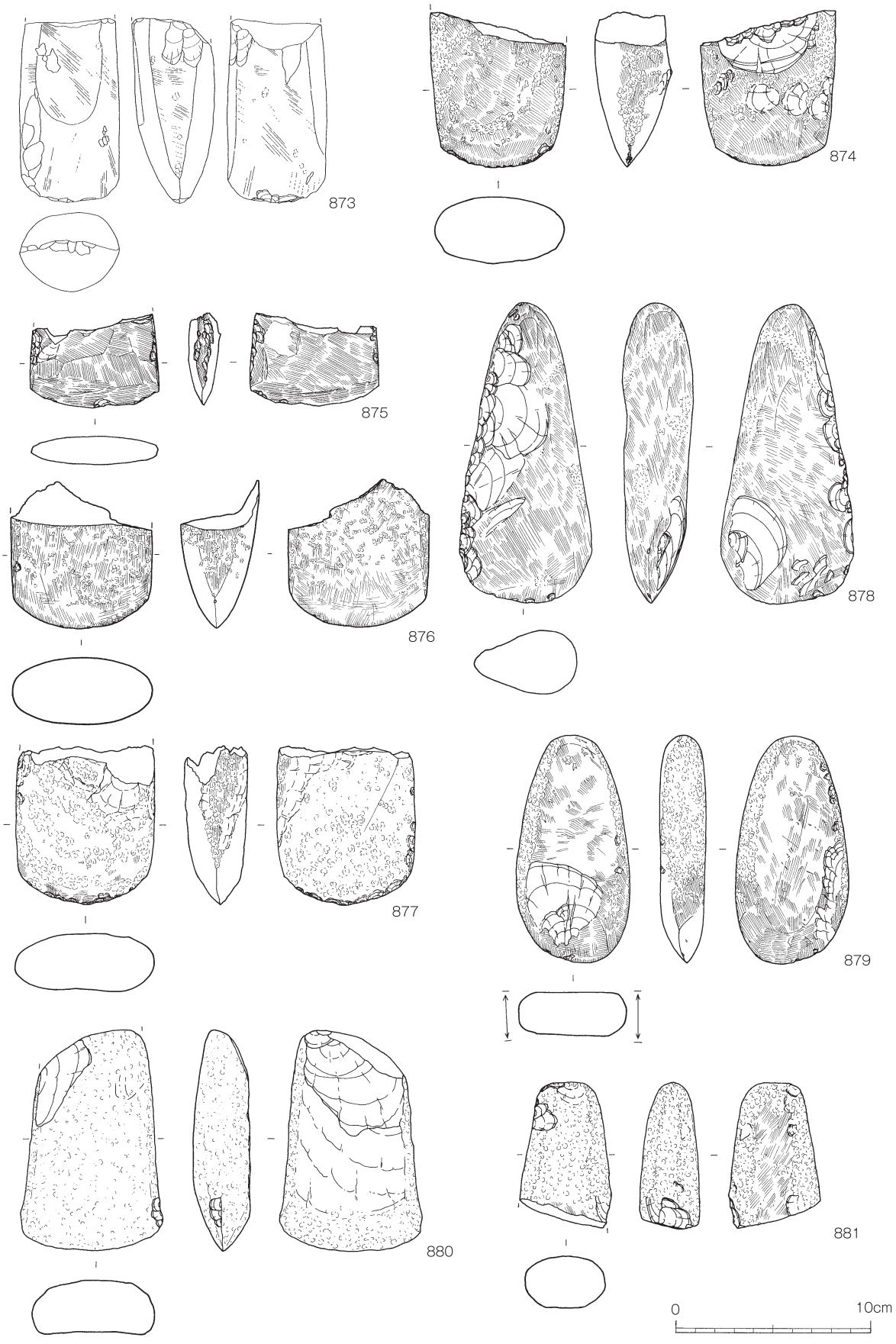
第109図　縄文時代前期～晩期出土石器（1）



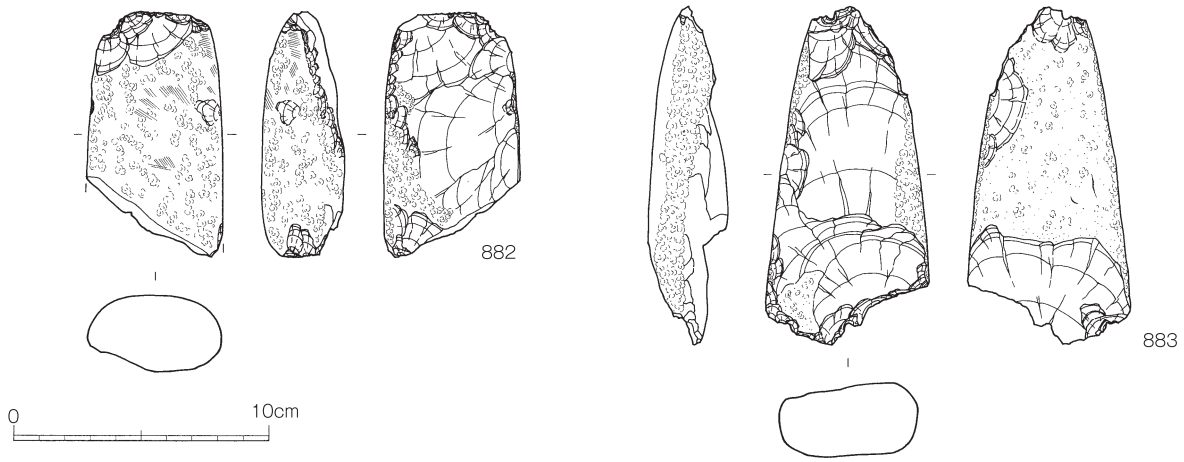
第110図　縄文時代前期～晩期出土石器（2）



第111図　縄文時代前期～晩期出土石器（3）



第112図　縄文時代前期～晩期出土石器（4）



第113図　縄文時代前期～晩期出土石器（5）

873～883は，基本的に敲打成形と研磨の両方を用いて石斧を製作している。887・880・881・882・883は，敲打による成形が主であり，他はその逆である。特に878は基部に若干の敲打が見られるだけでほとんどが研磨による成形である。また，879は，敲打成形したのか，あるいは，側縁部を敲打具としたのかと思えるほど，側縁部の敲打痕が著しい。

・磨石・敲石・凹石（第114図～第124図）

円礫を用い，磨石のみの機能をもったもの，磨石と敲石の機能を持ったもの，磨石・敲石・凹石の機能を併せ持ったものや変形した自然の礫を敲石としたもの等がみられる。

884～925は自然礫の円礫や棒状の礫を磨石等として用いたものである。926～937は，磨石と敲石の機能をもつもので，部分的に敲打痕が見られる。938～943は，凹石である。特に940は両面ともよく使い込まれており，断面が瓢箪状を呈している。

944は，下端部が扁平になるまで使いこまれた敲石であり，側縁にも部分的に敲打の跡が見られる。

・石錘（第124図）

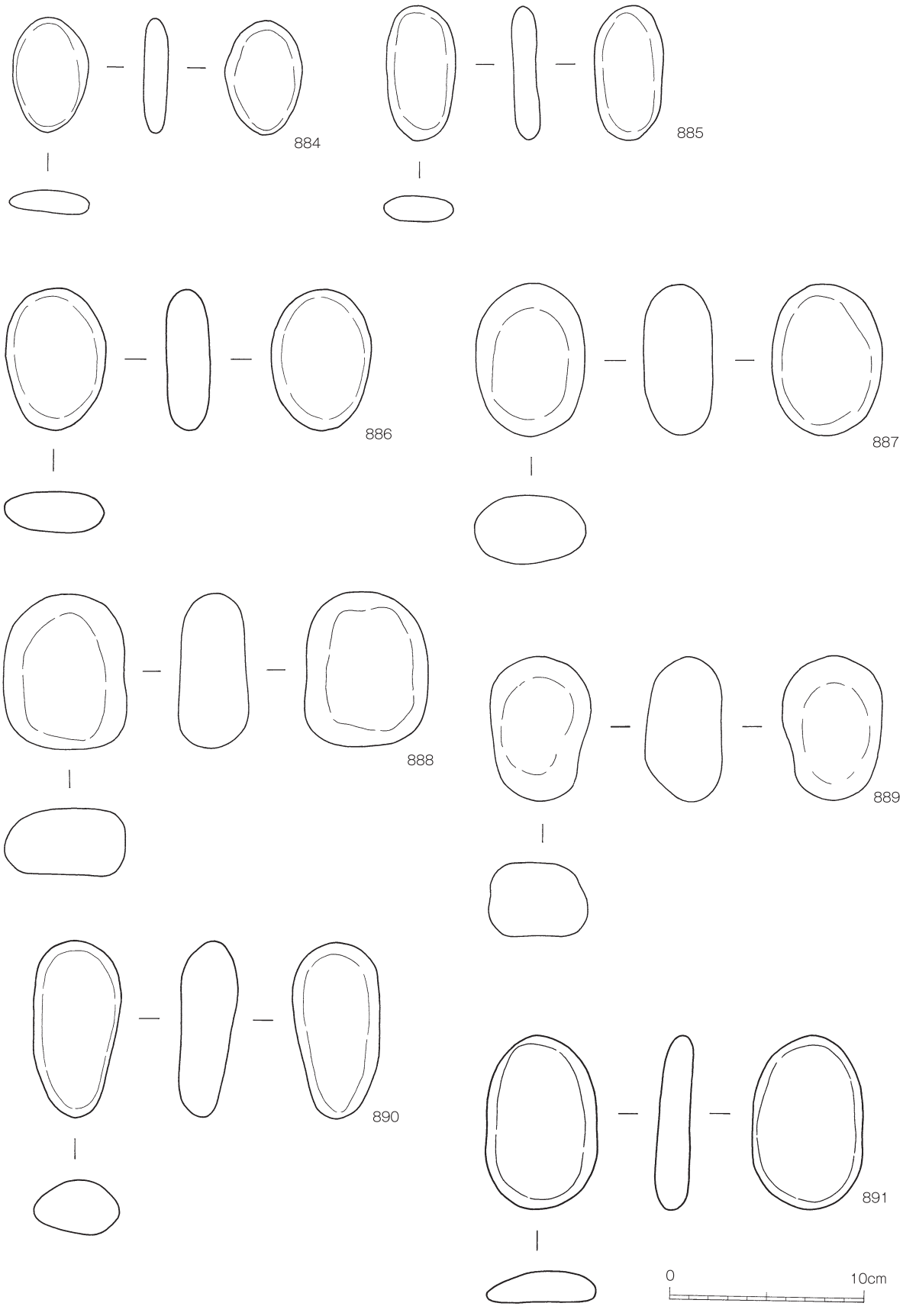
945は，最大径が約4.5cm程度で厚さが約１cmの石錘である。上下端とも数回の打撃で凹部を作り出している。

・軽石製品（第124図）

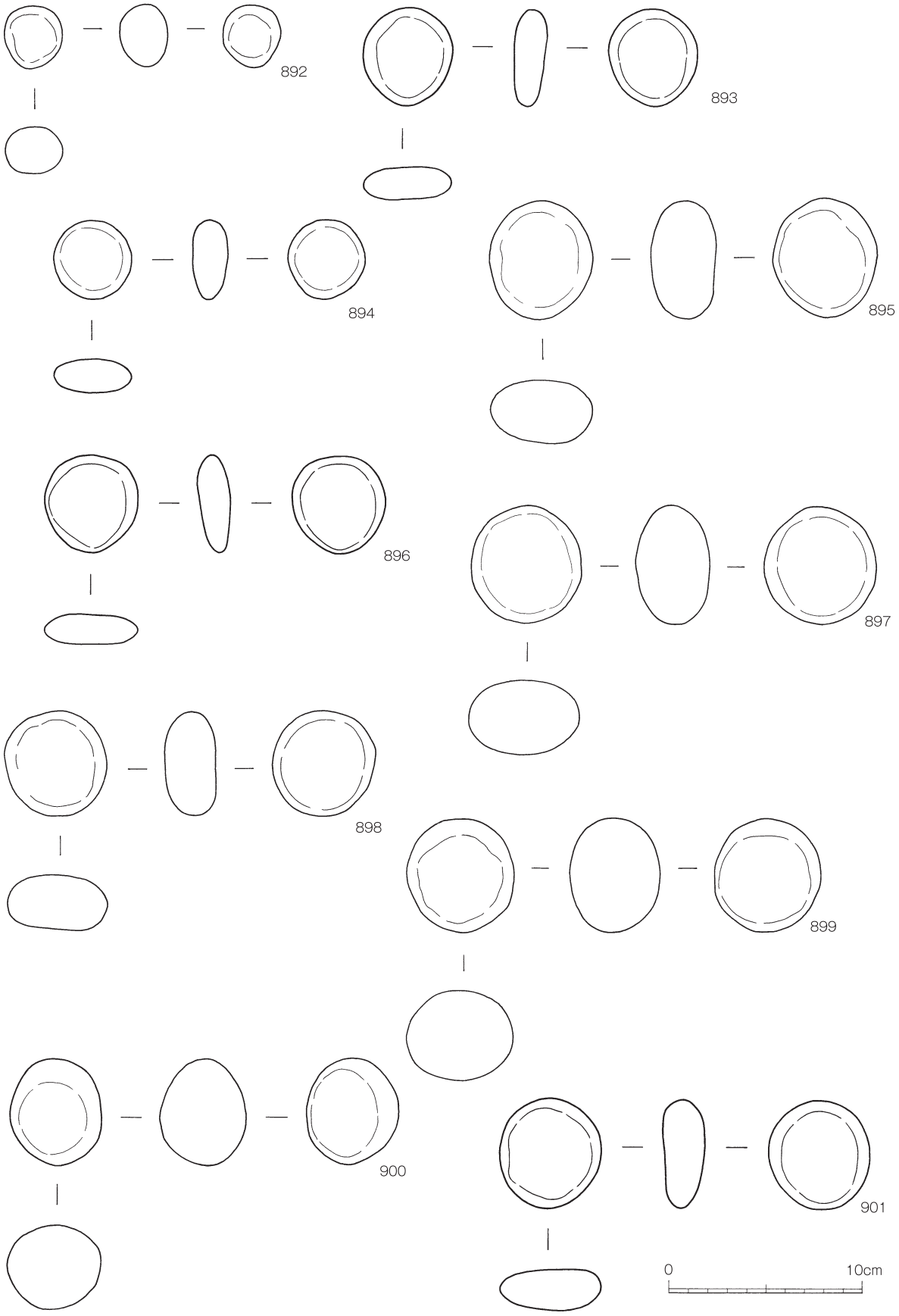
946・947は，軽石製品である。両方とも円形で扁平に加工されている。946は，直径が約4.5cm，947は，約9.5cmである。947は，両面からと思われる穿孔が施されている。

・石皿（第125図）

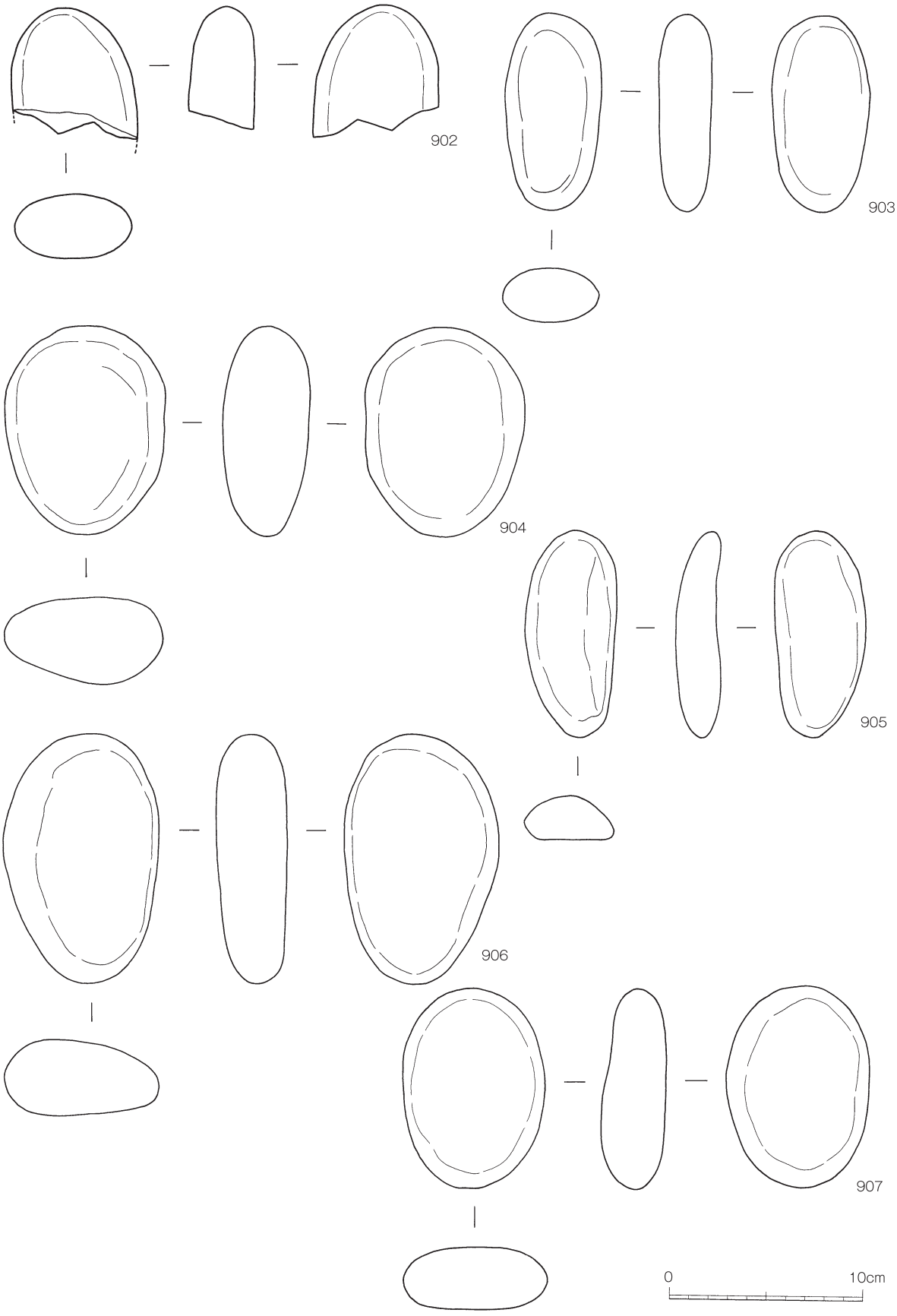
948・949は，安山岩製の石皿である。948は，平坦で片面のみが使用されている。949は，片面が大きく窪むほど使い込まれている。下端部の窪みは，注ぎ口か，移動用の紐掛けの可能性もある。



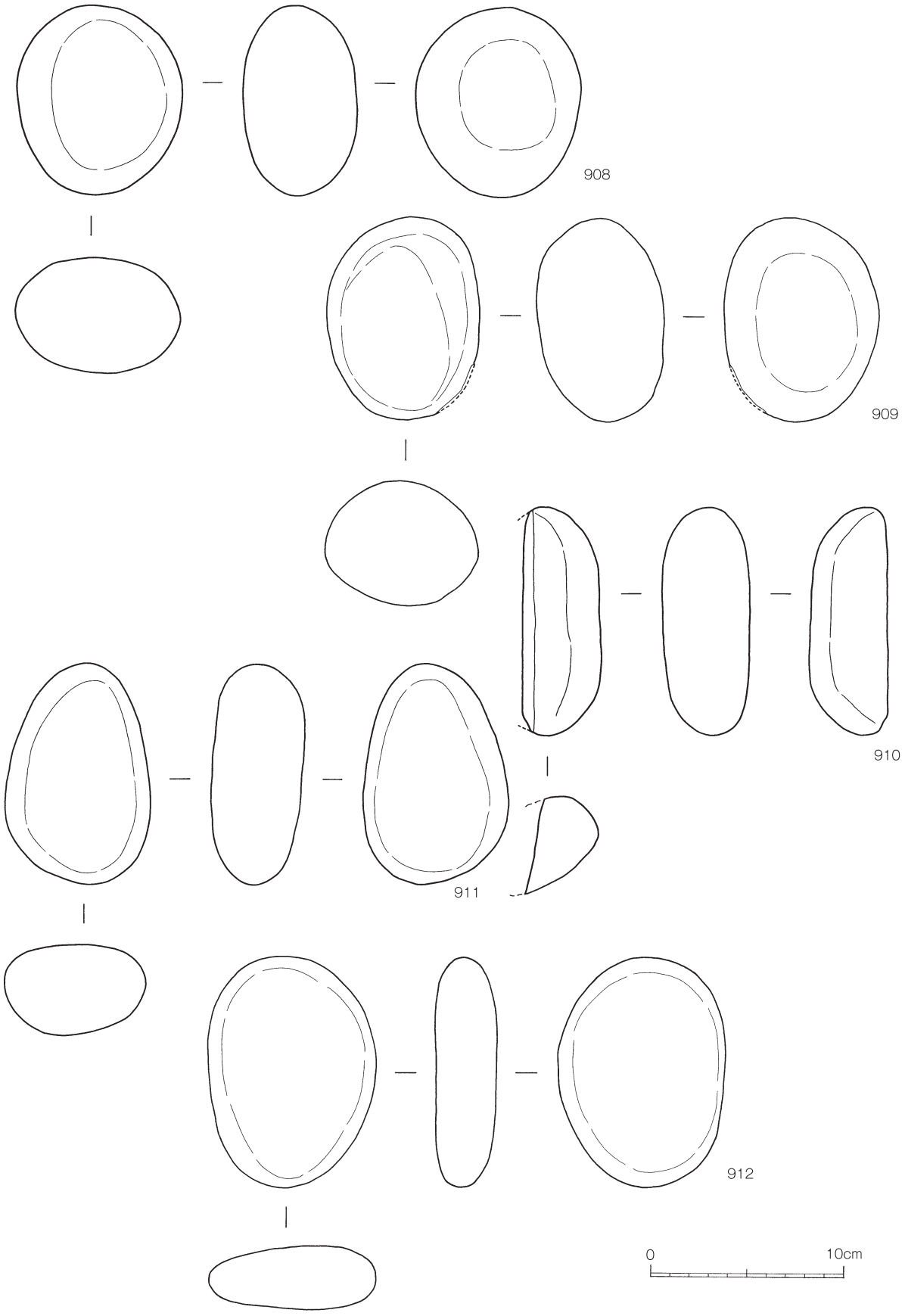
第114図　縄文時代前期～晩期出土石器（6）



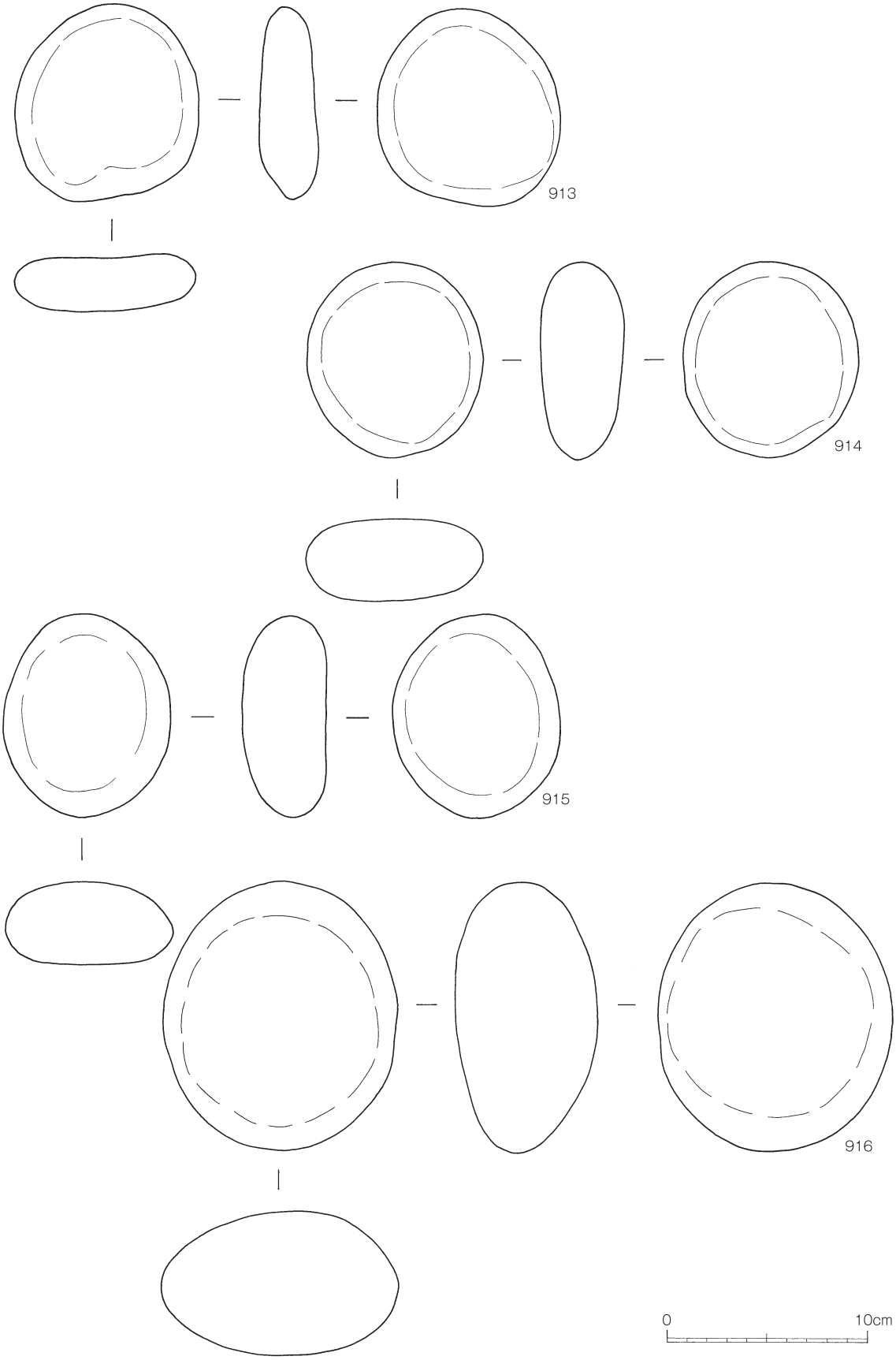
第115図　縄文時代前期～晩期出土石器（7）



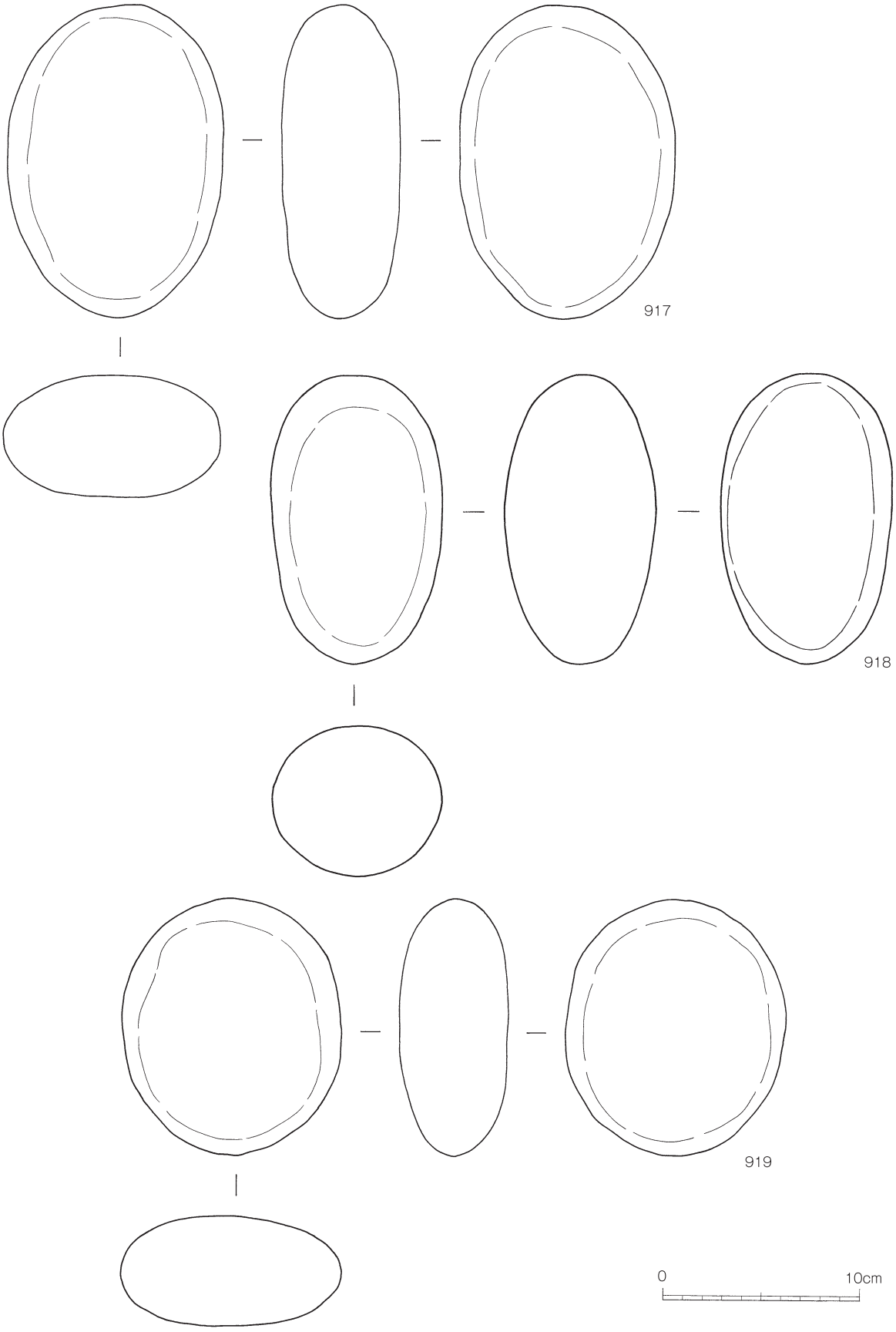
第116図　縄文時代前期～晩期出土石器（8）



第117図　縄文時代前期～晩期出土石器（9）



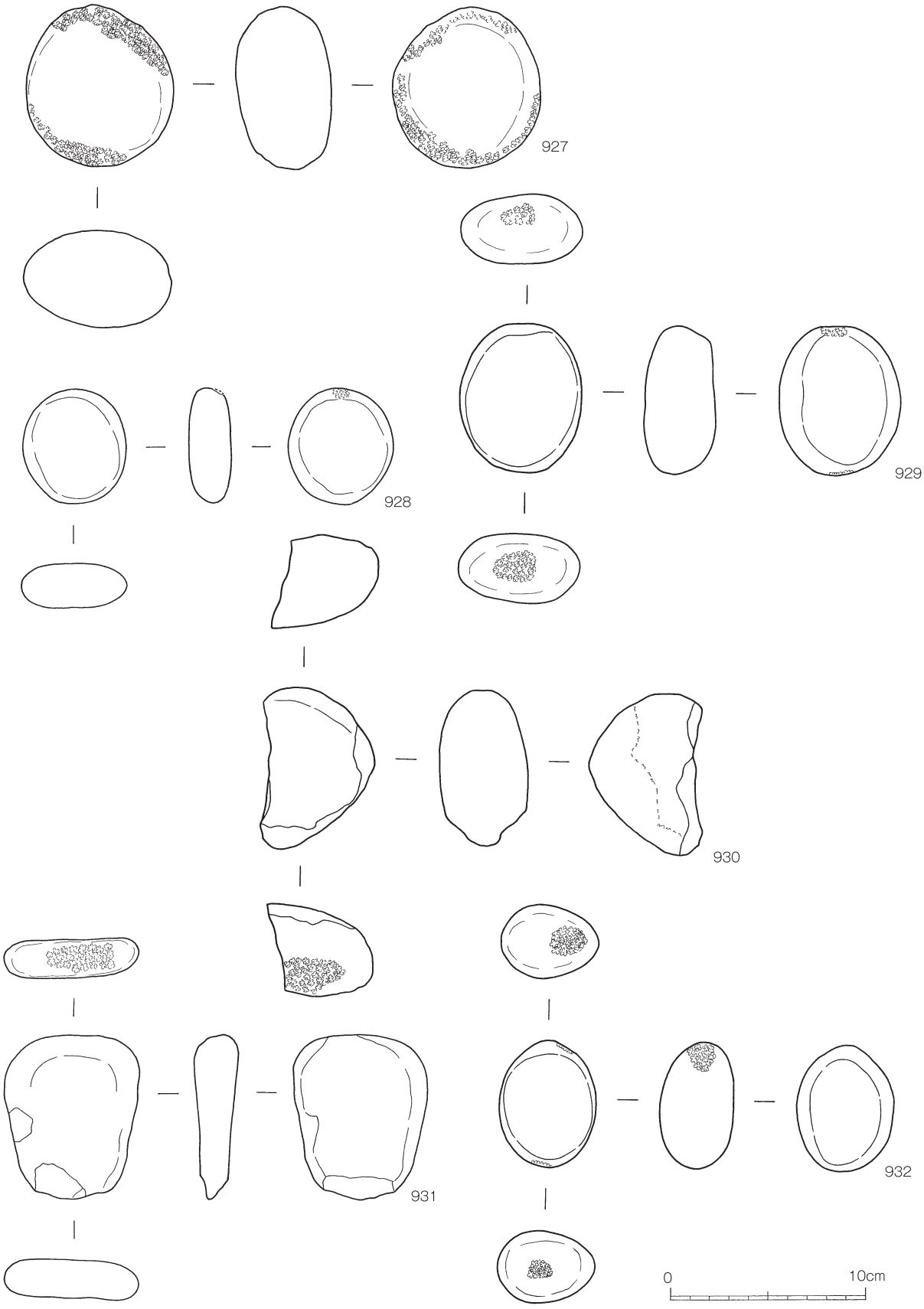
第118図　縄文時代前期～晩期出土石器（10）



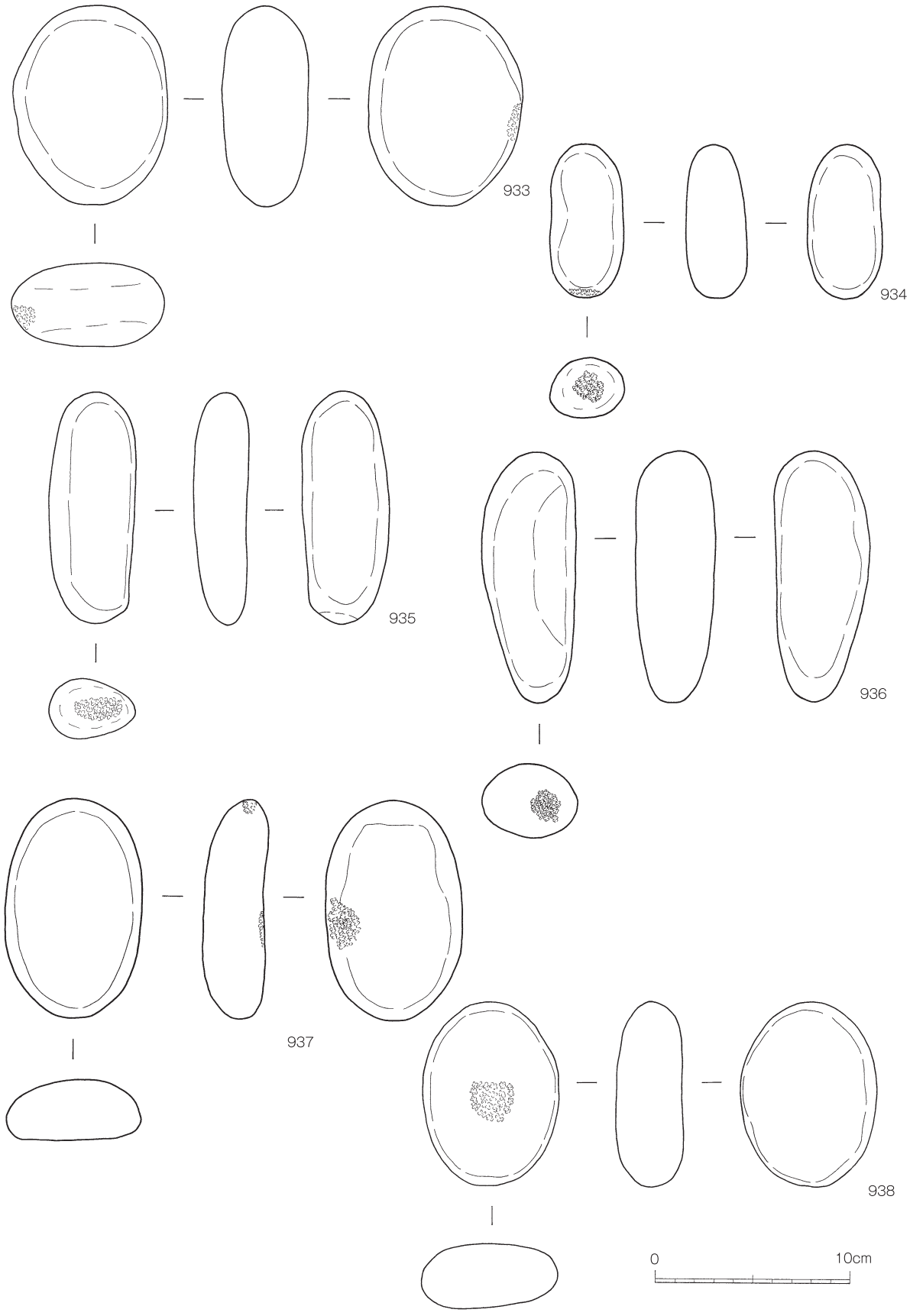
第119図　縄文時代前期～晩期出土石器（11）



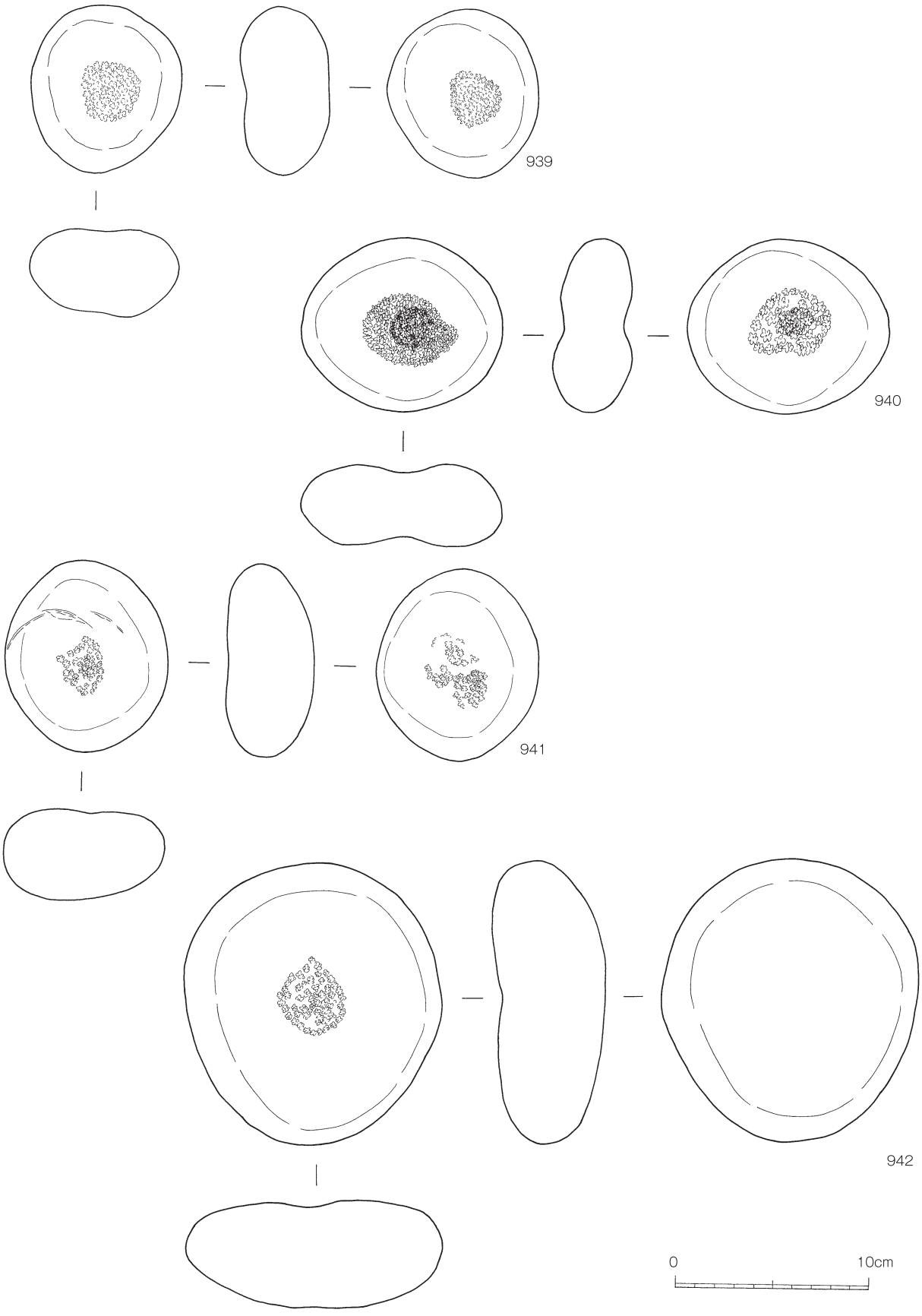
第120図　縄文時代前期～晩期出土石器（12）



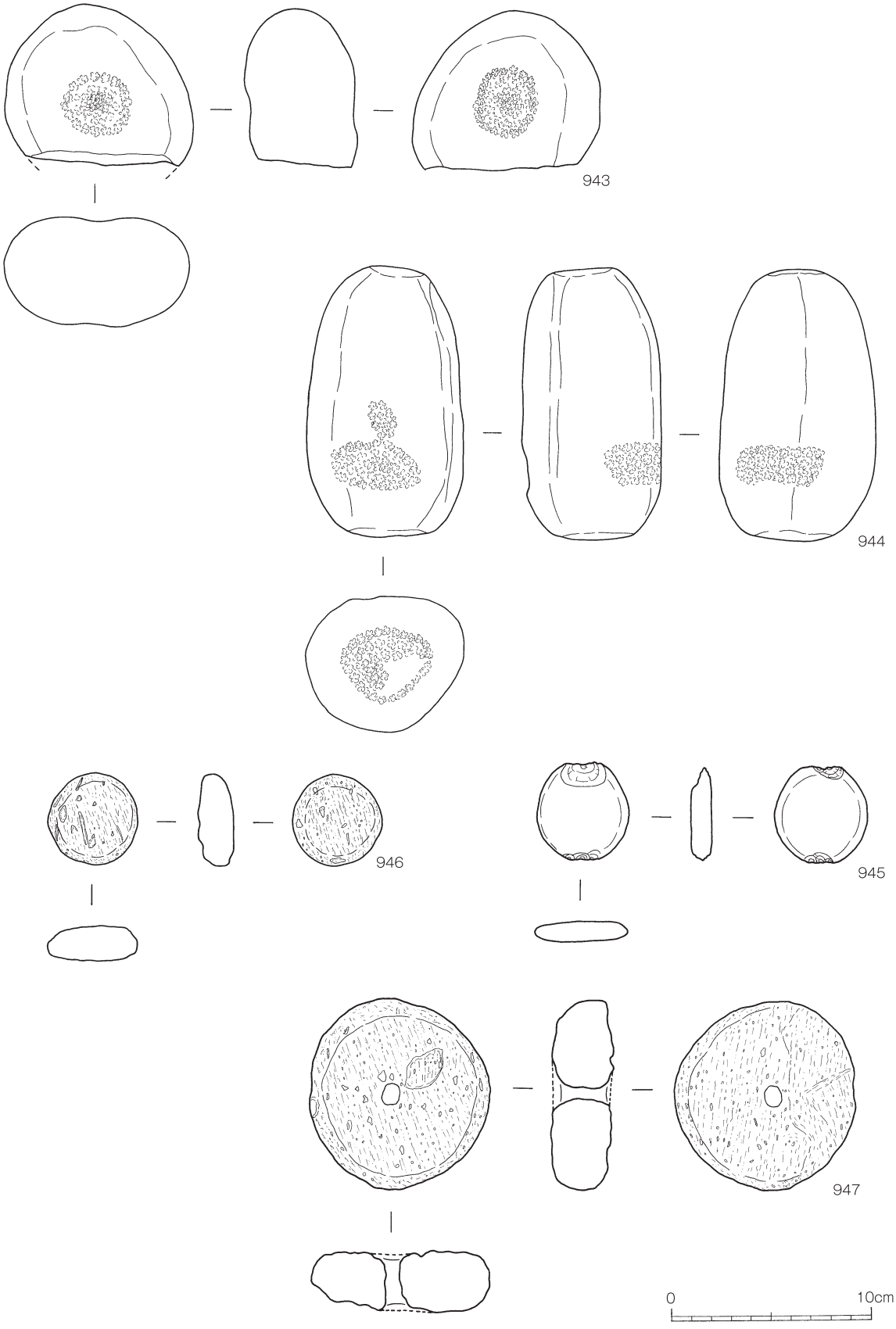
第121図　縄文時代前期～晩期出土石器（13）



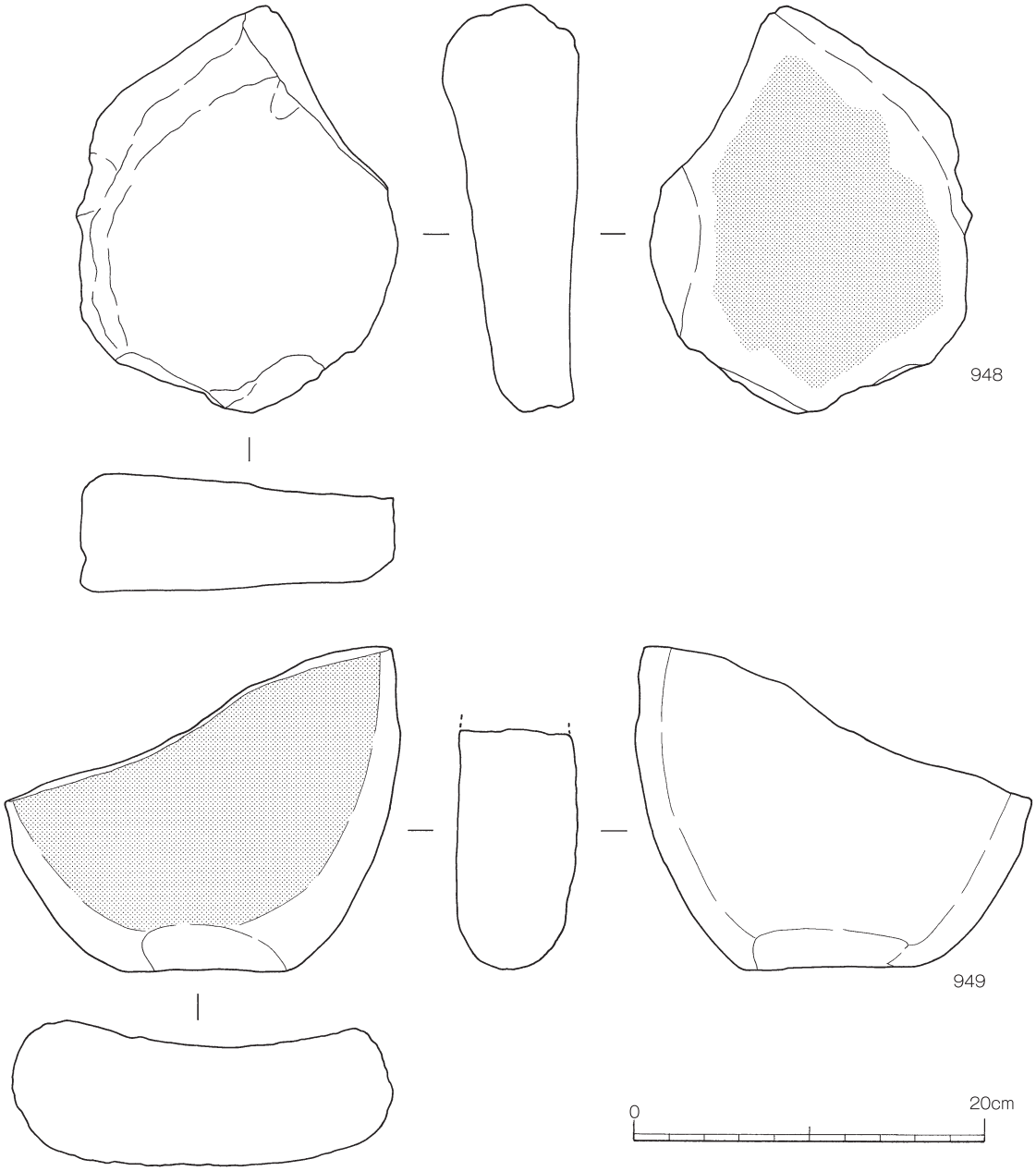
第122図　縄文時代前期～晩期出土石器（14）



第123図　縄文時代前期～晩期出土石器（15）



第124図　縄文時代前期～晩期出土石器（16）



第125図　縄文時代前期～晩期出土石器（17）

第Ⅵ章　古墳時代の調査

古墳時代の遺構・遺物は，調査区の南西側斜面（曲輪３）の部分から住居跡が11軒と遺物が検出された。ただし，表土からは，おびただしい量の破片が出土したことや，表土を除去するとすぐ遺構面が現われることから，現代までにかなりの削平を受け，かろうじて11軒の住居跡が残存したものであることが考えられる。この状況から当時，この地にはかなり大規模な古墳時代の集落があったであろうことが伺える。

検出面は，基本的にはⅢa層であるが，層的には不安定であり，その検出面が南側ではⅢ層，北側ではⅦ層に及ぶ場合もあった。また，この曲輪３は同一面で，古墳時代，古代，中世の遺構が検出されるため，その時期区分には苦慮した。なお，この曲輪３以外の地区では古墳時代の遺物・遺構は検出されなかった。

第１節　遺構

古墳時代の遺構は，前述のように11軒の住居跡が検出されている。ただし，２号住居跡は，著しい削平により，床面と思われる硬化面が検出されたのみであり，９号・10号・11号は切りあった関係で検出された。また，1号住居跡から５号住居跡，６号住居跡から11号住居跡の２群とにとらえられないこともない。これら住居跡の埋土のほとんどは，Ⅲａ層の濁ったものであった。

１号住居跡（第128図）

１号住居跡は，3.6m×３mの方形のプランで，検出面は，基本的にⅢa層である。11軒の住居跡の中では，最も西側に位置する。検出面から床までは20cmと浅い。

埋土からは，縄文時代から古墳時代にかけての小片の遺物が多数出土した。図化は，床着の遺物を中心として行った。

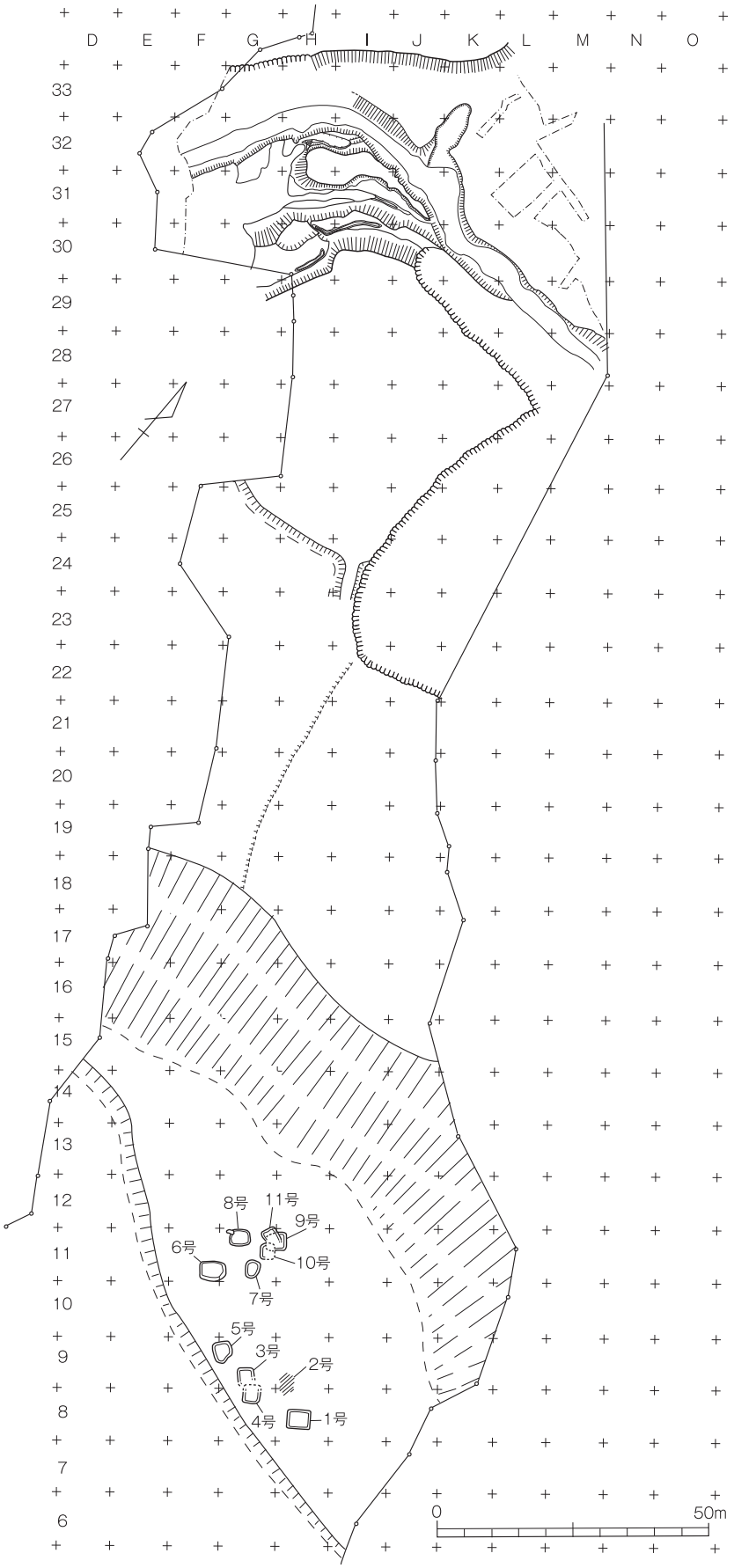
950は，厚さ約2.5mm，最大幅約2.5cmの青銅製の破鏡である（原寸図化）。中央よりややずれた部分に両面から穿孔が行われている。深緑色で表面は非常に滑らかである。文様は観察できないが，図右側の左上部分の盛り上がりが文様の可能性もある。

951は，甕形土器である。胴部から口縁部にかけては，緩やかに屈曲して外反する。頸部から口縁部にかけての外面の調整は，ハケによる掻き上げである。952・953は甕形土器の中空の脚台部分である。ともに，外面はハケ及び接地部は横ナデ，内面は指頭による調整である。柱穴，その他の施設については，精査を行ったが検出されなかった。

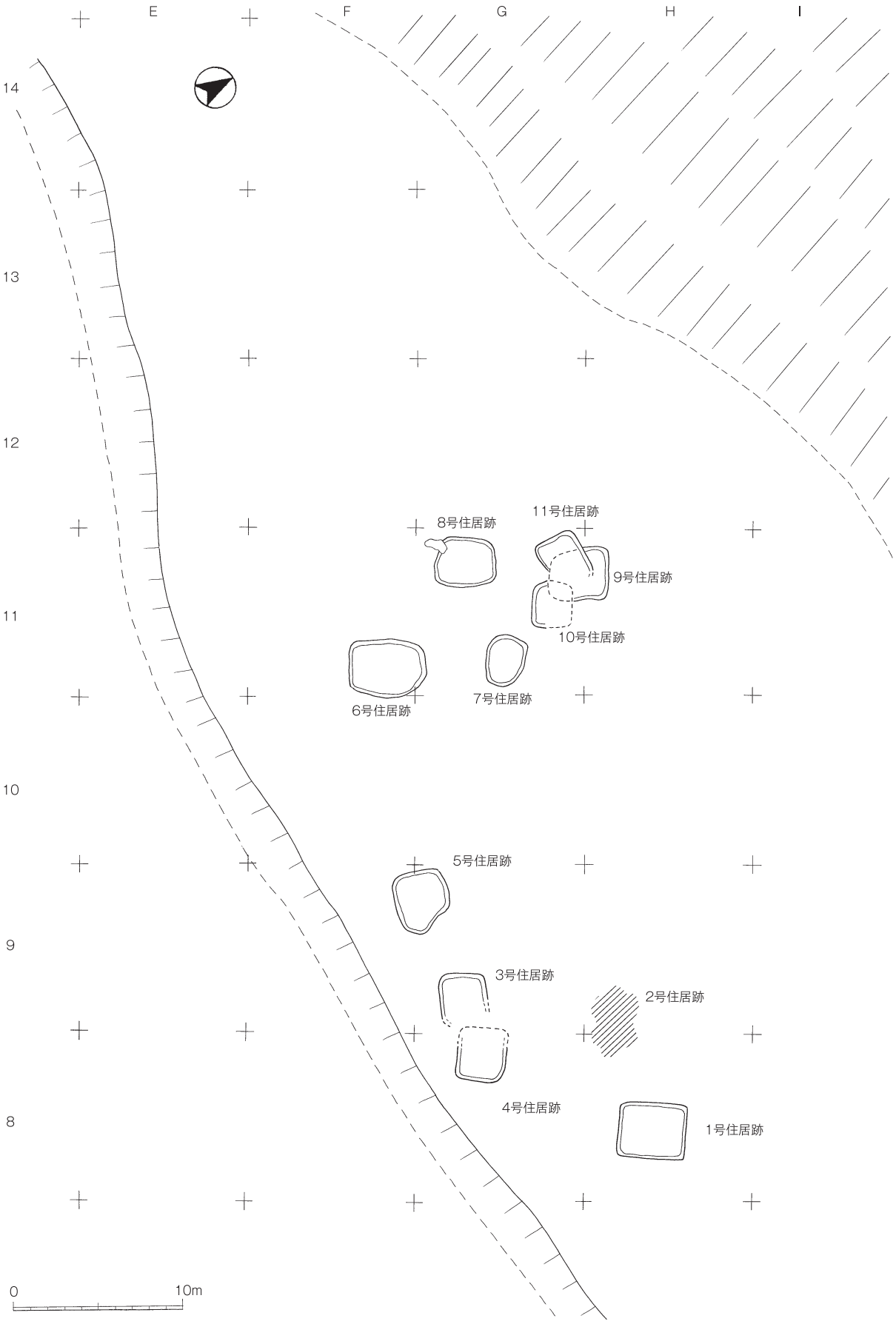
２号住居跡（第129図）

２号住居跡は，１号住居跡から数m西側に位置し，床面と思われる硬化部分が見られ，また，その上面から遺物が出土したため，住居跡として扱ったものである。

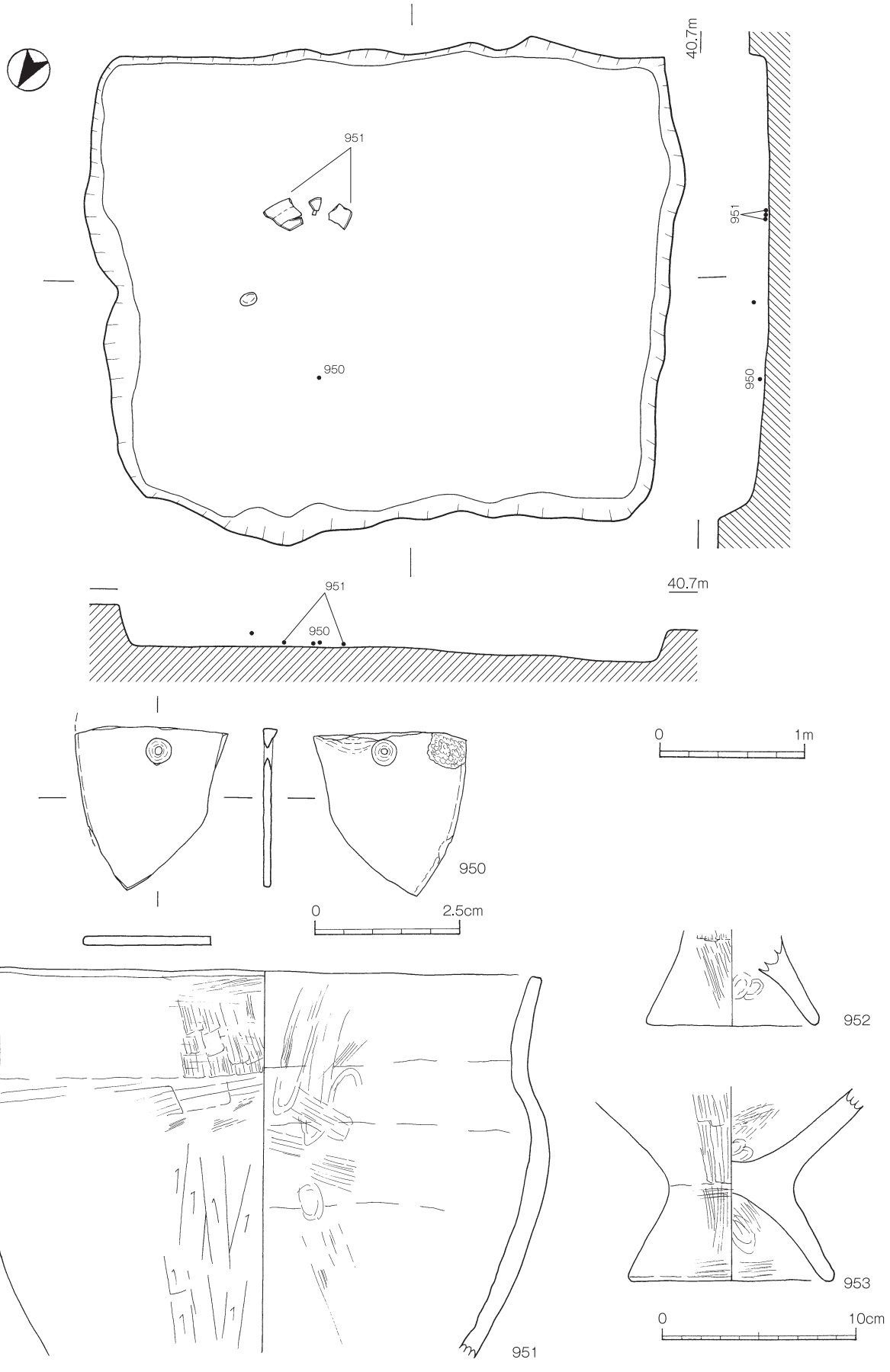
954・955は，甕形土器の脚台部分である。954は，薄手の器壁のものであるが，955は，厚手の器壁で「ハ」の字状に大きく外へ広がるものである。また，944よりも丁寧な作りであり台付鉢の可能性もある。両者ともその調整は，外面はハケ及び接地部は横ナデ，内面は指頭による調整である。956は，高坏の裾部と思われるがその作りは荒い。957・958は，手捏土器である。957は，直径３cm程度の完形品である。958は，直径約９cmで胴部の器形は，957と同様であるが，口縁部



第126図　古墳時代遺構配置図



第127図　住居跡配置図



第128図　1号住居跡及び出土遺物

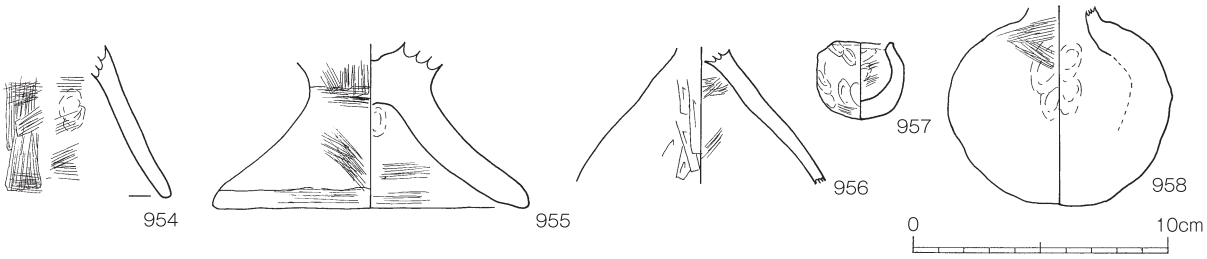
がやや立ち上がっていくもののようである。

３号住居跡（第130図～第132図）

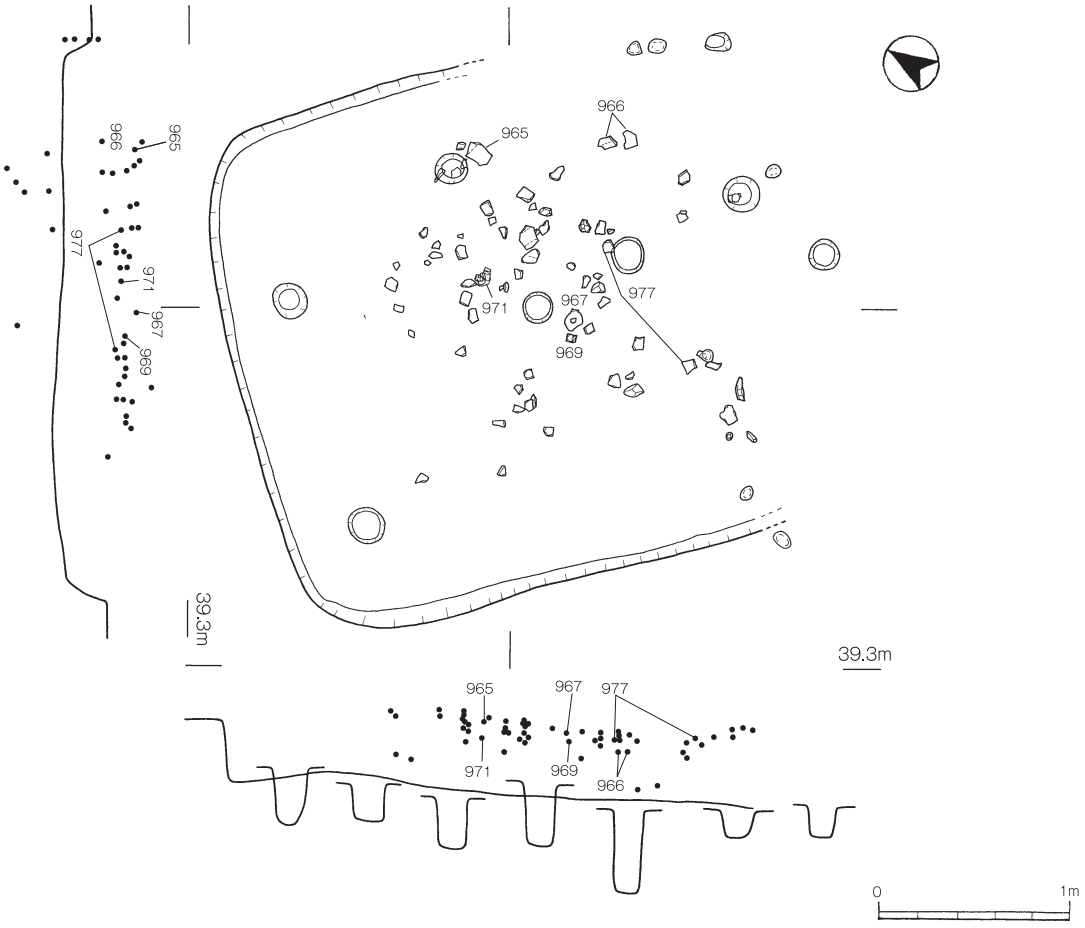
３号住居跡は，東側部分の１/３が消失した状況で検出された。他の住居跡等から考慮すると，３ｍ×３ｍ程度の隅丸方形だったと考えられる。埋土より出土した遺物の量は多く，相対的に甕形土器の出土量が多かったと言えよう。959～977は，甕形土器である。

959～962は，外反する頸部から口縁にかけての破片である。963～966は，胴部から口縁部にかけての破片で，頸部で「く」の字状に外反するものである。頸部から口縁部にかけての調整は，基本的には，ハケによる掻き上げである。967も甕形土器であるが，今までのものに比すると，その大きさは，半分程である。器壁も厚く調整や胎土も粗である。

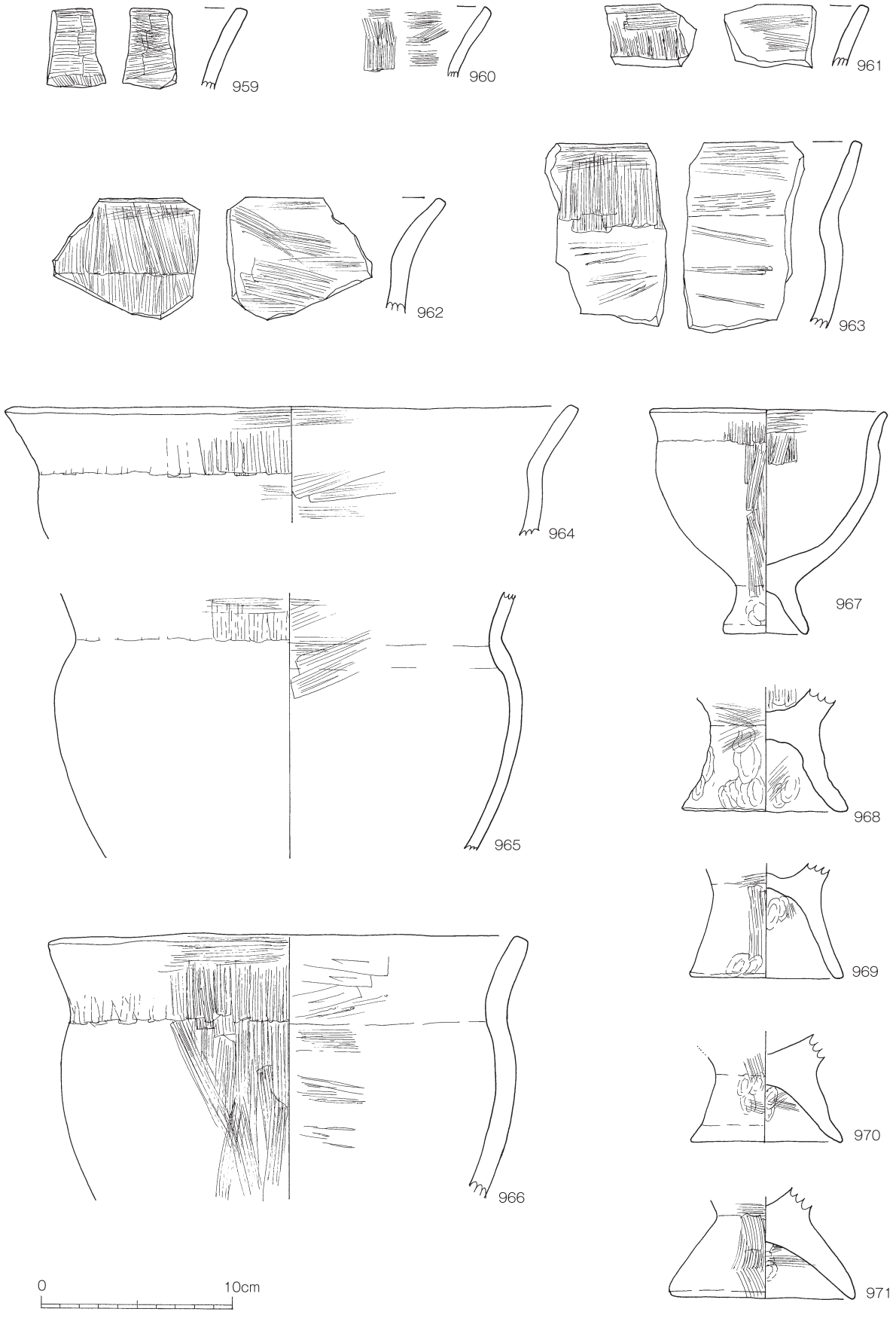
968～972は，甕形土器の中空の脚台である。971は，接地部へ向けてやや内弯し，972は大きく



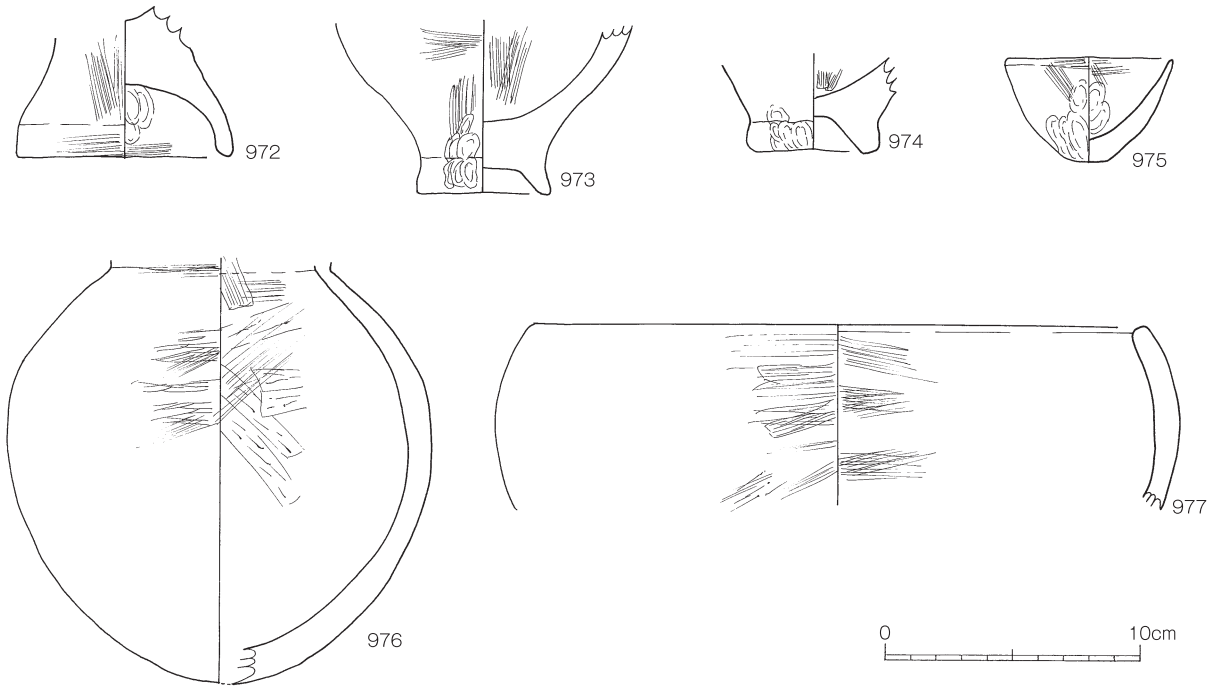
第129図　２号住居跡出土土器



第130図　３号住居跡



第131図　３号住居跡出土土器（1）



第132図　３号住居跡出土土器

内弯するものである。

973・974は，高台状の短い脚を有する甕形土器あるいは，鉢形土器である。975は，口縁部径約５㎝程度の鉢状の手捏土器である。976は，丸底でほぼ球形を呈する壷形土器である。頸部より上部の形態については定かでない。977は，口縁部径約25㎝程度の鉢状を呈する土器と思われ，内外面共にハケ及びナデによる調整である。

４号住居跡（第133図）

４号住居跡は，３号住居跡のすぐ東側にて検出された，４号住居跡は３号住居跡と逆方向の西側１/３が消失した状況で検出された。西側は，３号住居跡と切りあっていた可能性もある。その規模も３号住居跡と同程度だったと思われる。

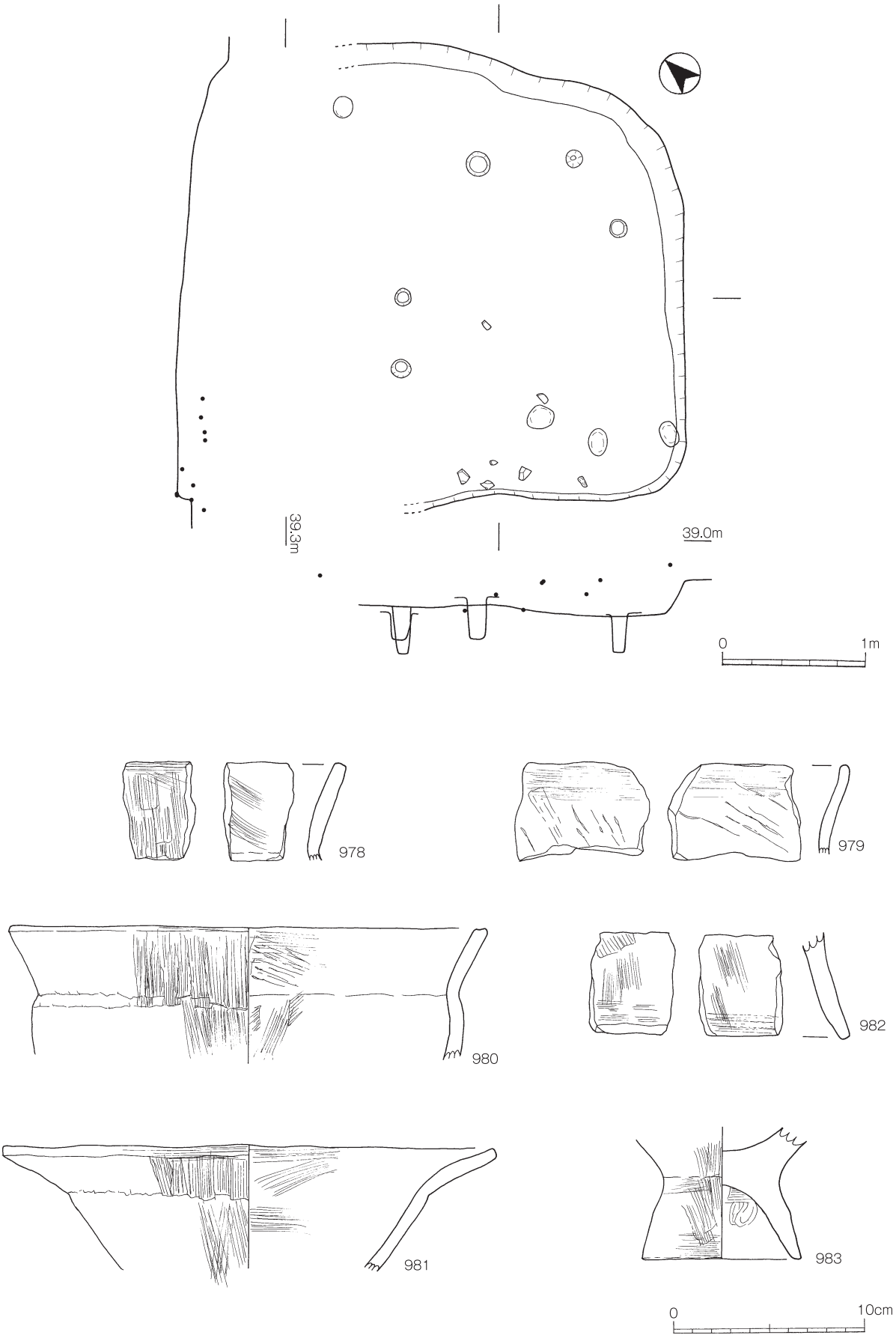
978～980は，甕形土器の頸部から口縁部にかけての破片で，頸部は緩やかな「く」の字状を呈するものである。981は高坏の坏部と思われ，口縁部は甕形土器と同様の緩やかな「く」の字状を呈する。また，978・980・981は，ハケによるいわゆる掻き上げ口縁である。982・983は甕形土器の中空の脚台で982は接地面へかけてやや「ハ」の字状，983はやや内弯である。また，埋土中から磨石が数点検出されたが，縄文時代の磨石の混入と思われる。

検出された柱穴については，３号住居跡も同様であるが，他の時期の柱穴も混在している可能性があり，その構造は明らかにし得なかった。

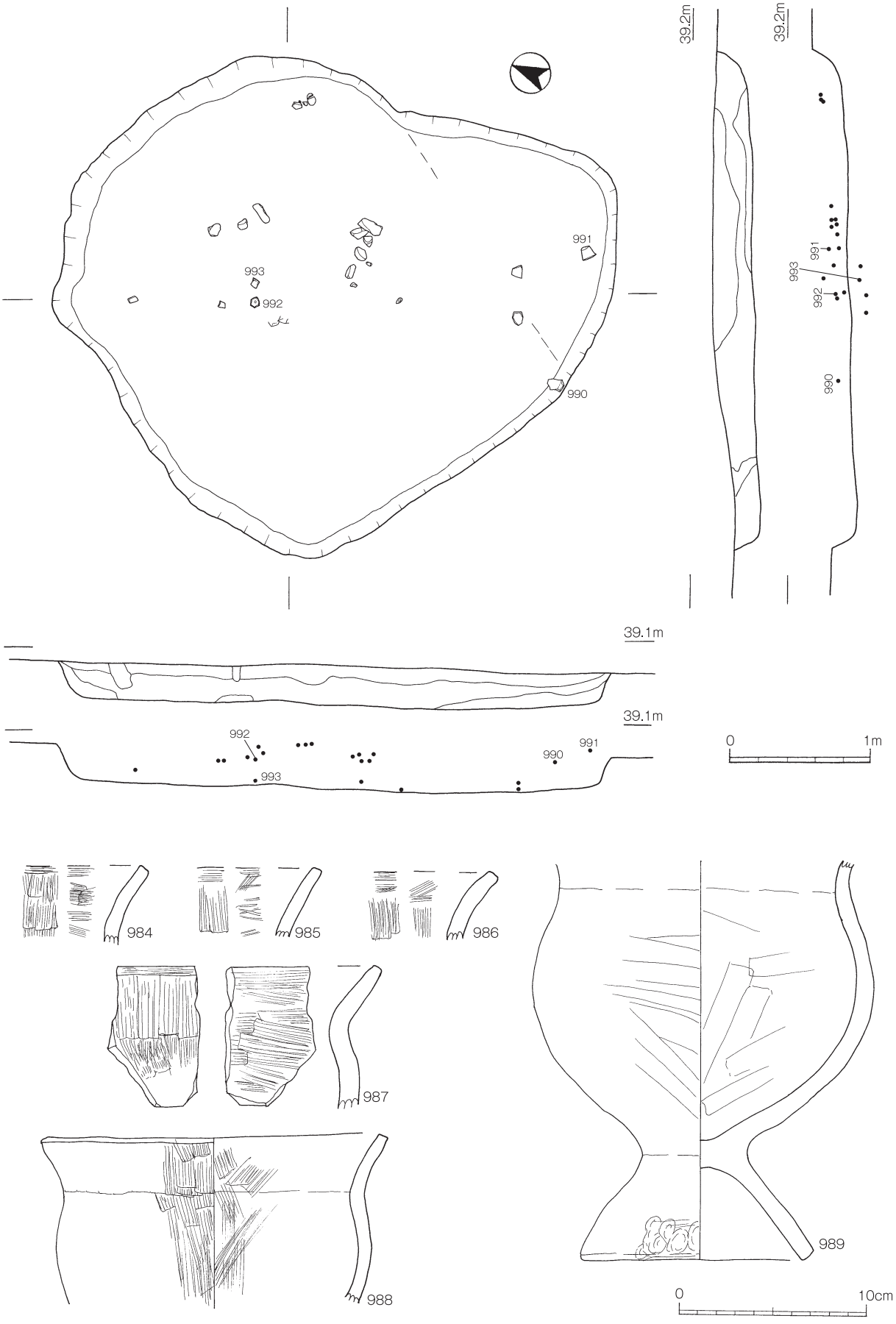
５号住居跡（第134図・第135図）

５号住居跡は３号住居跡の西側５ｍ程のところで検出された。東側に１ｍほどの張り出しを持つが他の住居跡の多くが隅丸方形であることから，本来は，南北を長軸とする隅丸方形であった可能性が高い。

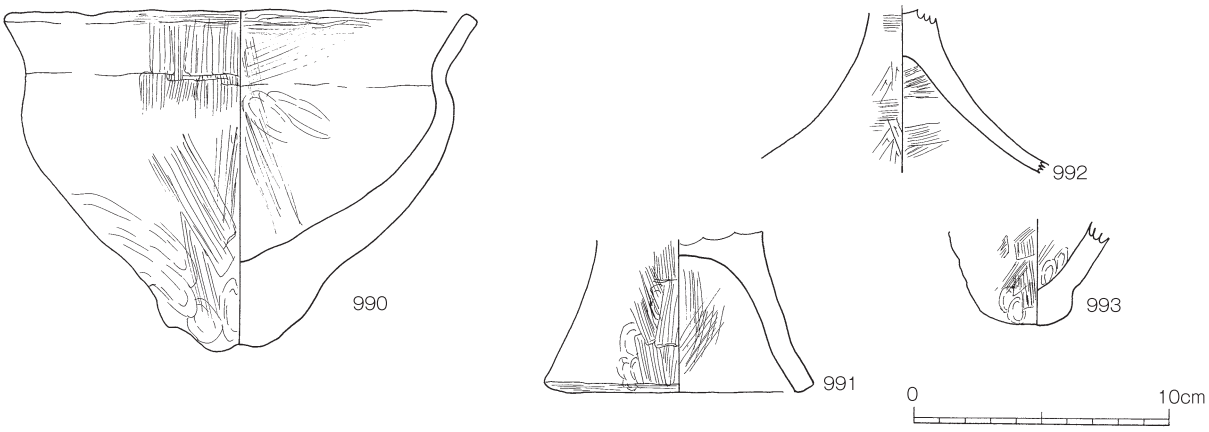
この住居跡の埋土は，下部が濁ったⅢa層とⅣ層の混土，そしてその上部がそれよりやや暗く濁ったⅢa層とⅣ層の混土，検出面は濁ったⅢ層と言うような状況であった。984～986は，甕形土



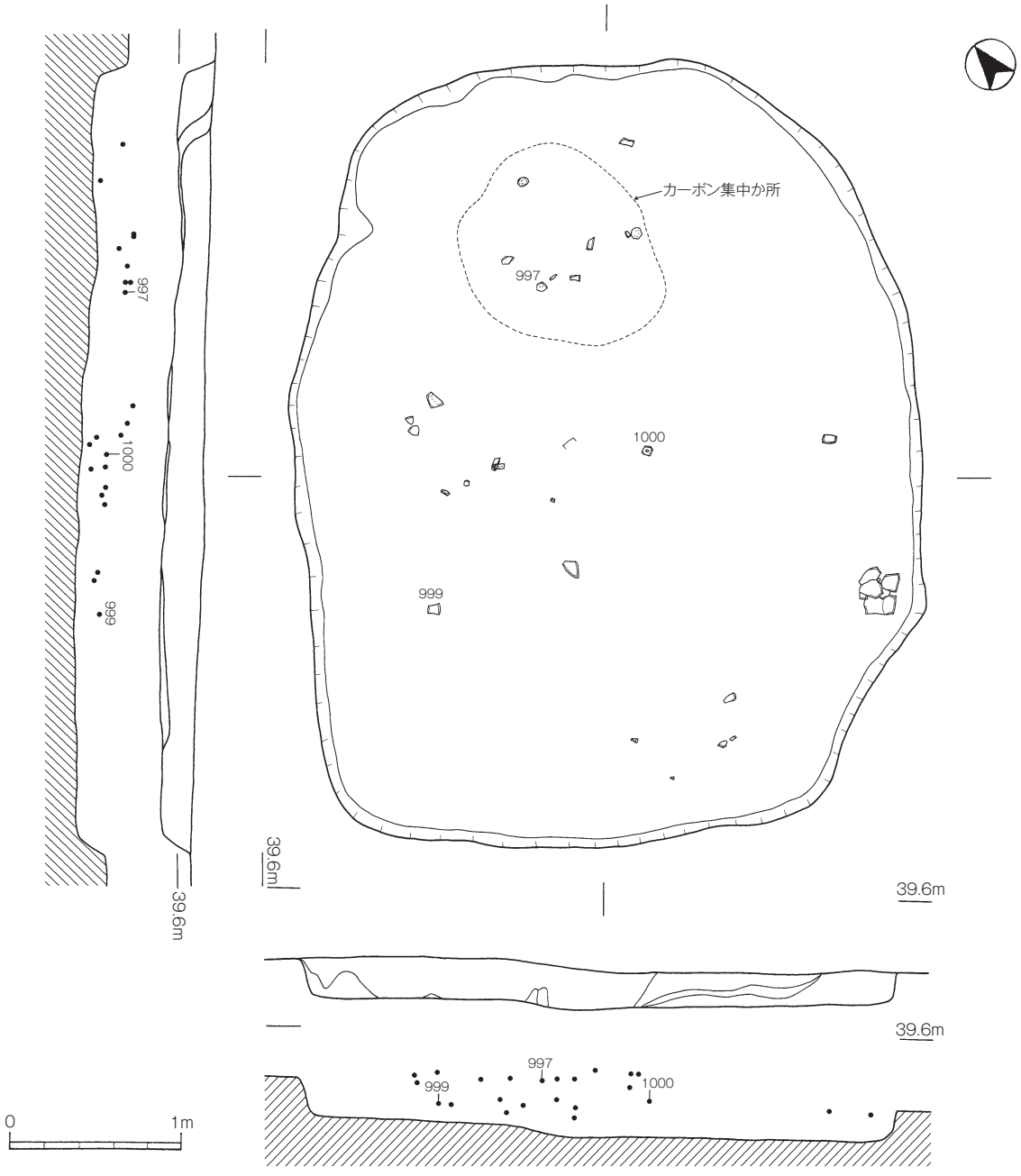
第133図　４号住居跡及び出土土器



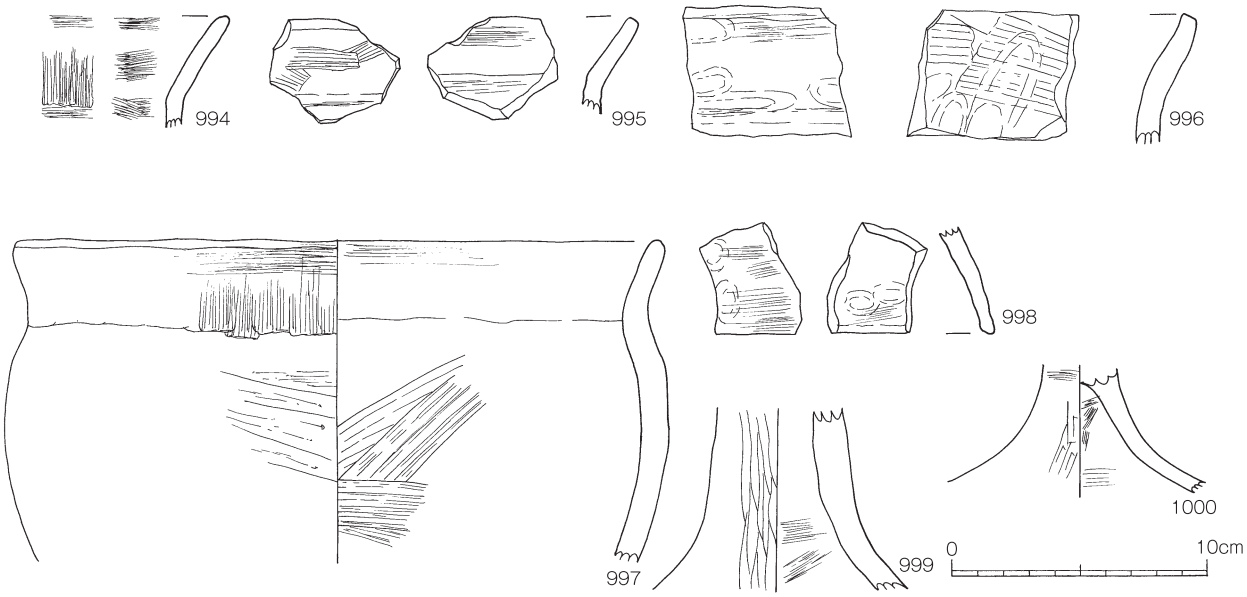
第134図　５号住居跡及び出土土器



第135図　５号住居跡出土土器



第136図　６号住居跡



第137図　６号住居跡出土土器

器の頸部から口縁部，987・988は胴部から口縁部にかけての破片である。いずれも，頸部で緩やかな「く」の字状に外反して口縁部に至るもので，頸部は，ハケによる掻き上げ口縁である。989は，今までの甕形土器とは，器形を異にするものである。口縁部は，欠損するが，球形の胴部から緩やかに外反しながら口縁部へと至るものと考えられる。脚台は,大き目でやや内弯しながら,接地面へと至るものである。

990は脚台部分が欠損したと思われる甕形土器あるいは，鉢形土器である。器壁は厚く，胎土及びその作りは荒い。頸部は内弯した後に外反して口縁へと至る。991は，甕形土器の中空の脚台，992は高坏の裾部である。993は，手捏ね状の鉢形土器の底部と思われる。

６号住居跡（第136図・第137図）

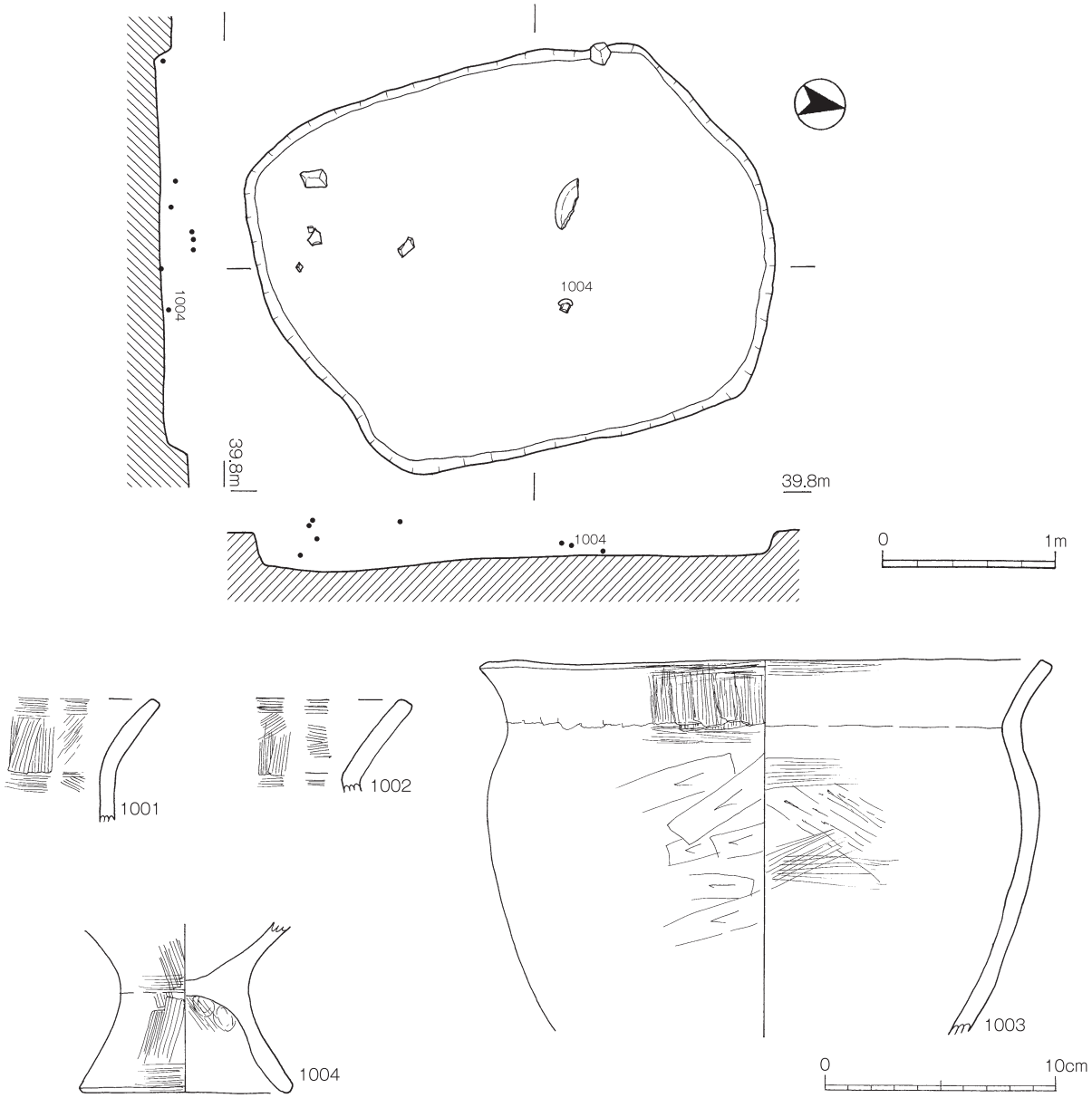
６号住居跡は，11軒の住居跡群の中央よりやや西側に位置する。また，これらの住居跡の中では最大で長辺が4.5m，短辺が3.5mの方形に近い形状である。北東側に炭化物の集中か所が見られた。この炭化物は，検出面でも若干観察されていたもので住居跡が埋まる過程のものである可能性がある。

遺物は，小片や縄文時代等の混入も多く，図化し得たのは数点であった。994～996は，甕形土器の頸部から口縁部，997は，胴部から口縁部にかけての破片である。いずれも，頸部で緩やかに「く」の字状に屈曲し口縁部へ至るものである。998は，甕形土器の中空の脚台であろうか，やや疑問が残る。

999・1000は高坏の裾部で，999の外面は丁寧なヘラミガキである。また，1000は，小さめの高坏と思われるがその作りは丁寧で，裾部は大きく広がるものである。

７号住居跡（第138図）

7号住居跡は，6号住居跡の５ｍほど北東に位置し，隅丸方形よりやや円形を呈するものである。遺物の出土量は少なかった。1001・1002は，甕形土器の頸部から口縁部，1003は，胴部から口縁部にかけての破片である。いずれも，頸部で緩やかに「く」の字状に屈曲し口縁部へ至るもので



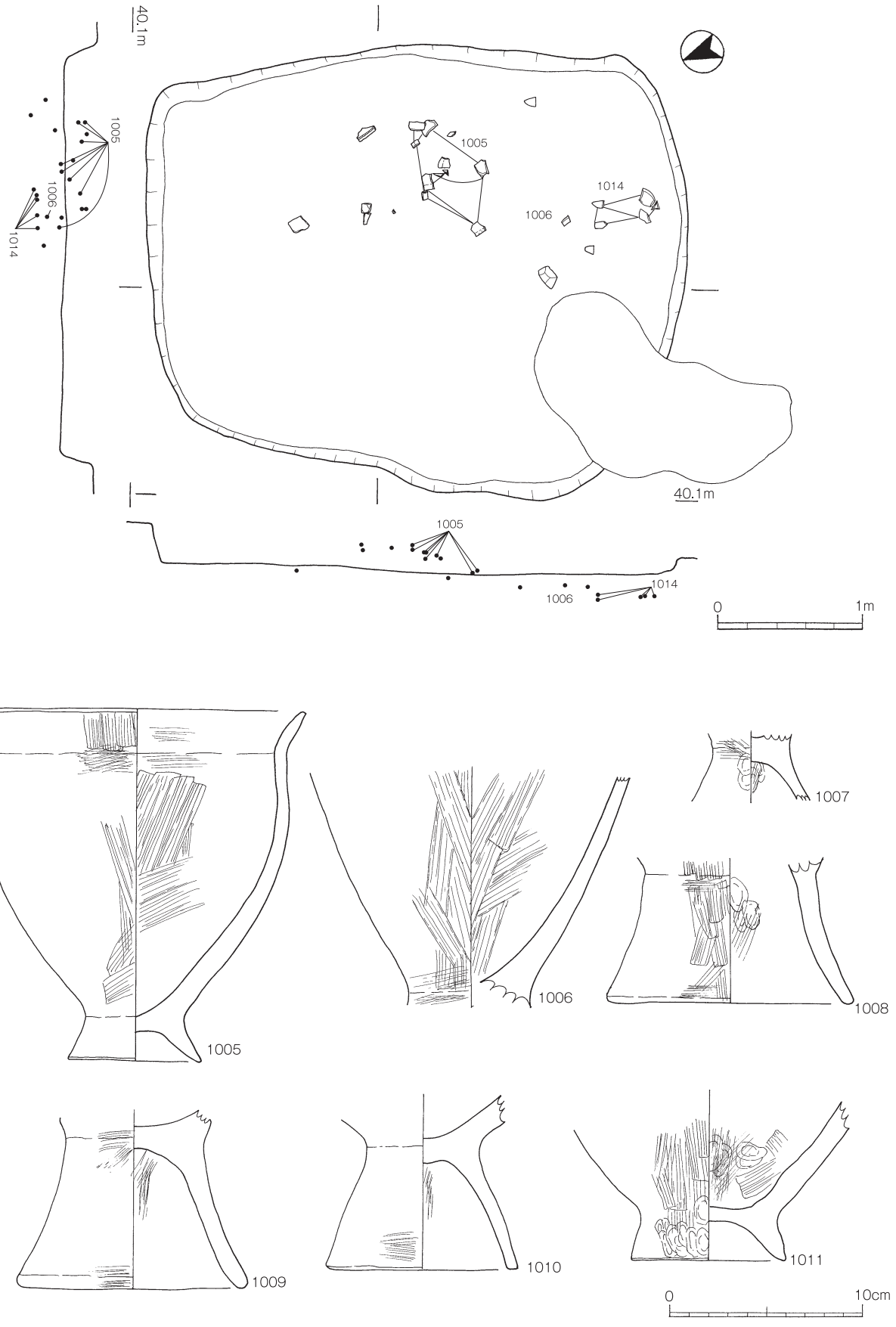
第138図　７号住居跡及び出土土器

ある。いずれも頸部は，ハケによる掻き上げ口縁である。1004は，甕形土器の中空の脚台で，「ハ」の字状に接地面へ至る。

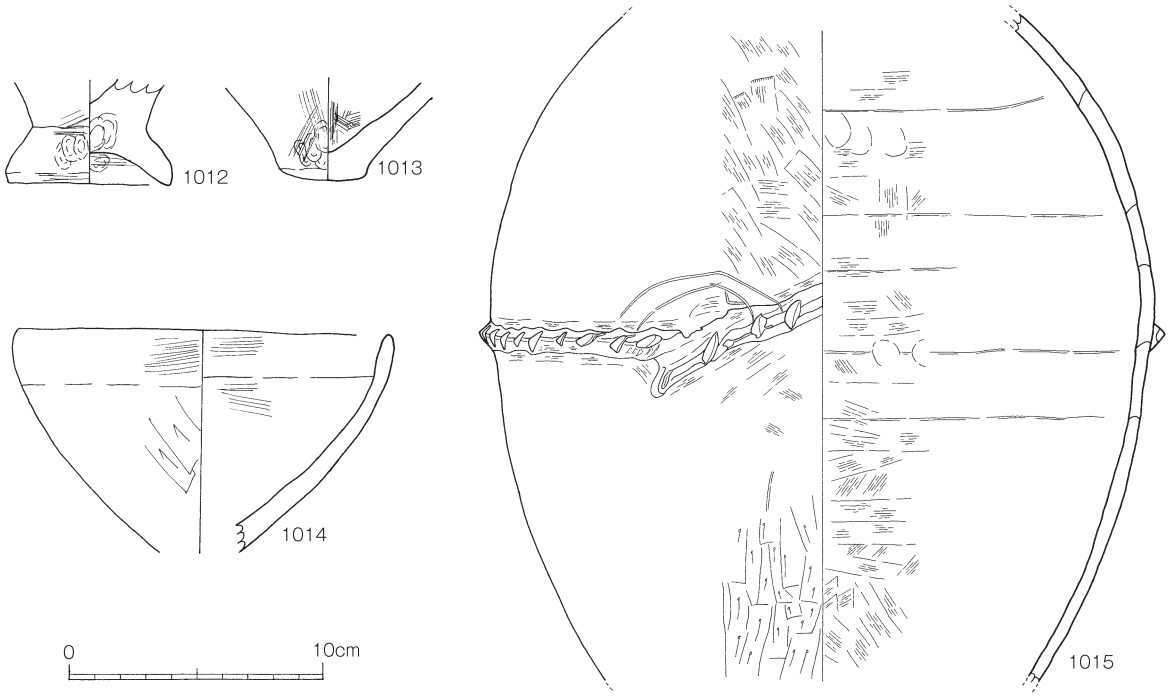
花弁型住居跡の中央よりやや北側から安山岩製の石皿の一部が出土した。縄文時代の石皿の混入か，あるいはその再利用の可能性も考えられるものである。

８号住居跡（第139図・第140図）

８号住居跡は，住居跡群の中では，11号住居と並んで西側に位置し，3.8m×2.8mと他の住居跡と同様に方形に近いものである。南西側に中世の４号炉跡が住居跡を切っている。埋土中には小片の遺物が多かったが，床着に近い状態と思われる土器片1005と1014などが出土している。1005は，ほぼ完全な形で復元できた。口縁端部は，やや尖り気味で口縁部から頸部・胴部にかけては，緩やかな「く」の字状を呈して低めの中空の脚台へと至る。脚台の先端はやや尖り気味で



第139図　８号住居跡及び出土土器



第140図　８号住居跡出土土器

ある。1006は，甕形土器の胴部片である。

1007から1012までは甕形土器の脚台である。1007は，小型の甕形土器であろうか，それに反し，1008～1010は，1005と比しても大型の甕形土器であろうか。1011・1012は，低い脚台を有する鉢形土器あるいは，甕形土器である。胎土・調整など非常に荒いものである。1013は，丸底ぎみの底部から立ち上がる鉢形土器である。1014は，復元口縁径が約15㎝で胴部から緩やかに内弯し，口縁部がやや肥厚する鉢形土器で，口縁部は欠損している。

1015は，壷形土器の胴部で，胴部の上位部分にすれ違う一条の刻目突帯を有するものである。刻みは，棒の工具に繊維を巻きつけたものである。また，すれ違う刻目突帯の下部に幅約２㎜ほどの沈線が［U］字状に施されている。

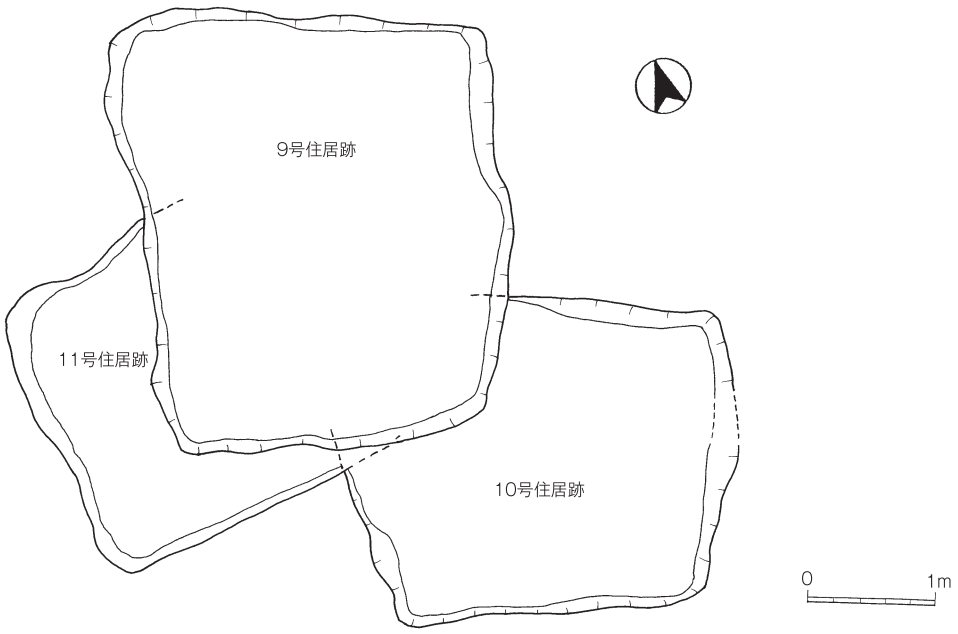
９号・10号・11号住居跡（第141図～第151図）

９号・10号・11号の三軒は，７・８号住居跡の北側において，お互いに切りあった状況で検出された。当初，プランが見え始めた時点では，間仕切り型の住居跡等も想定して慎重に平面プランの検出にあたった結果，３軒の住居跡が切り合い関係にあることが判明した。北側に９号住居跡があり，南西側に11号住居跡，南東側に10号住居跡が検出された。

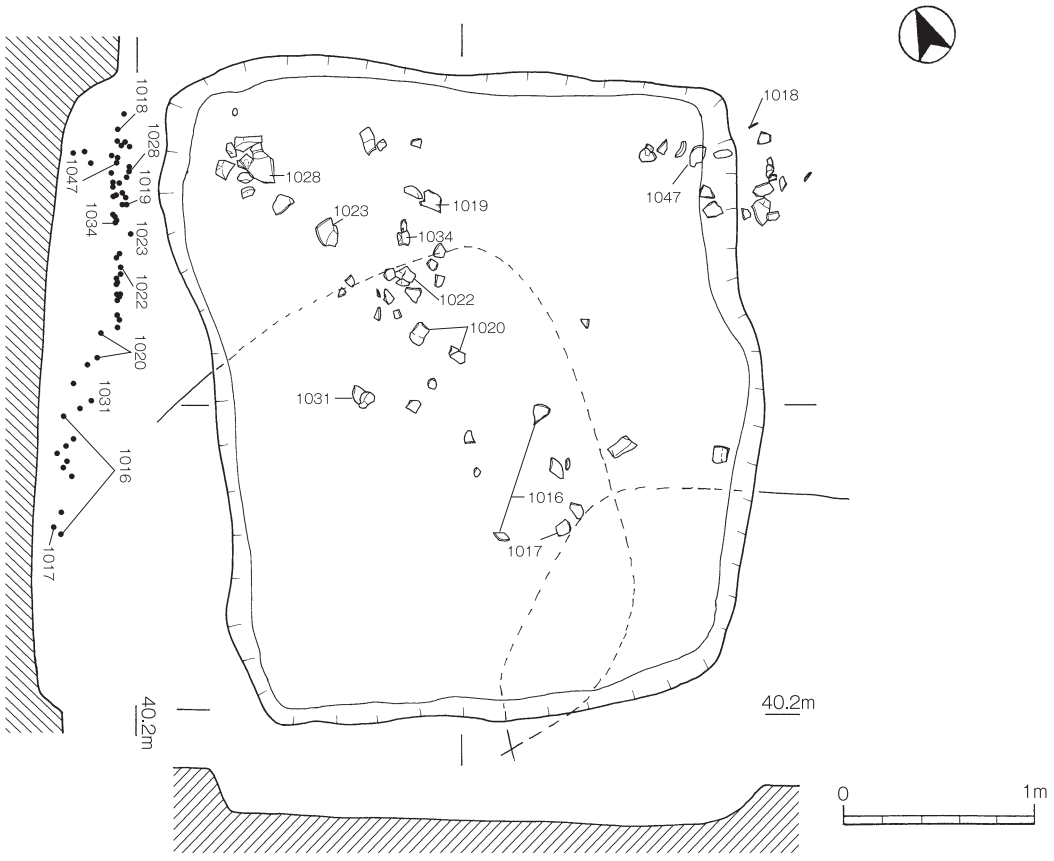
10号住居跡と11号住居跡の新旧関係については，切り合い関係からは，はっきりとしたことはつかめなかった。また，床面のレベル差もほとんどなかったため，遺物については10号住居跡の南側については，混在の可能性もある。

９号住居跡（第142図～第146図）

９号住居跡は，上述のように南西側の11号住居跡，南東側の10号を切る形で検出された。平面プランは，他の住居跡と同様の方形でその規模は3.5m×３m程度である。遺物については，検出面及び西側の掘り込み面部分から多量に検出されている。特に西側の掘り込み面より外側部分は遺物の出土状況等から何らかの施設があることも想定して調査を行ったが，遺構は検出されな



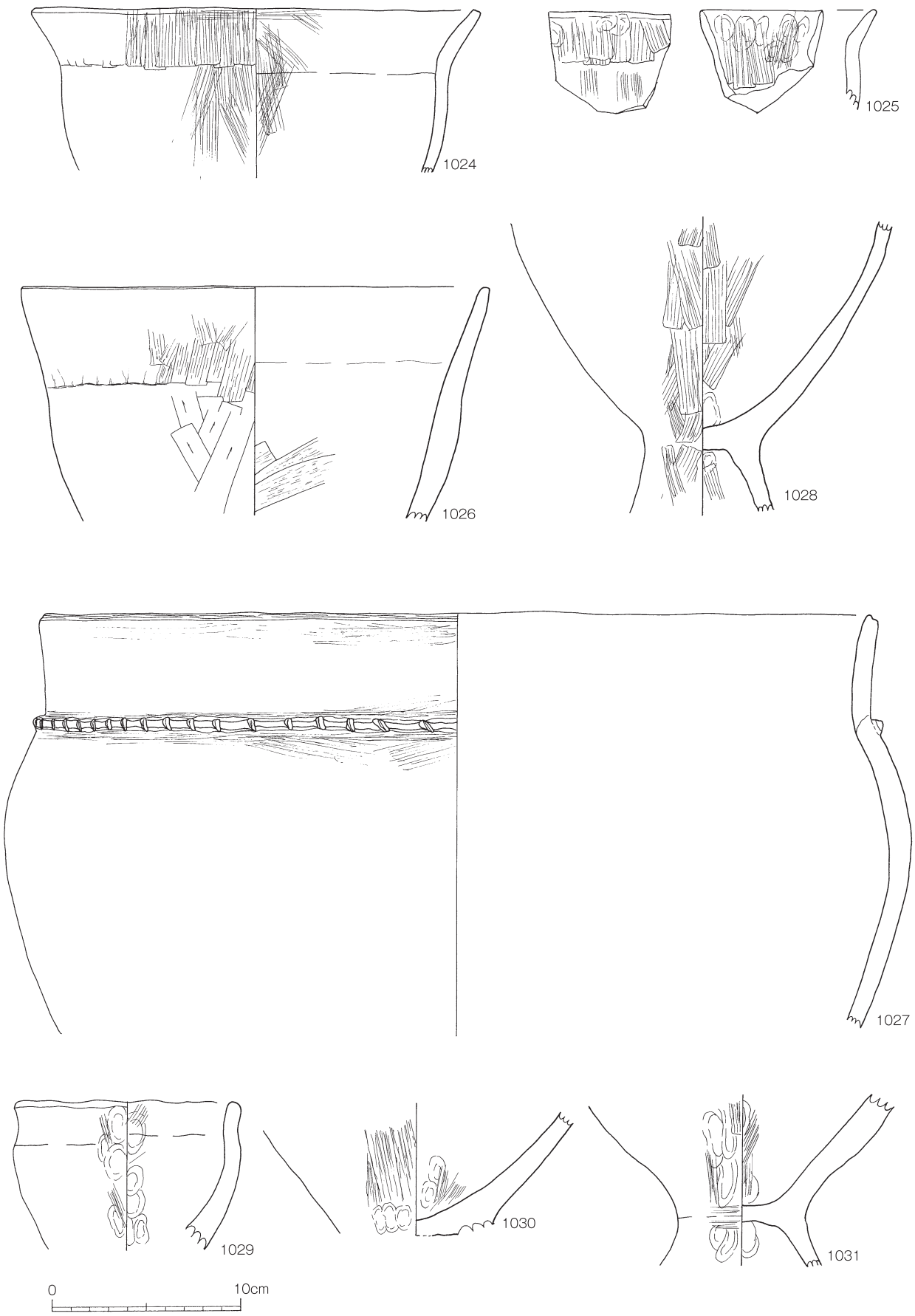
第141図　９・10・11号住居跡位置図



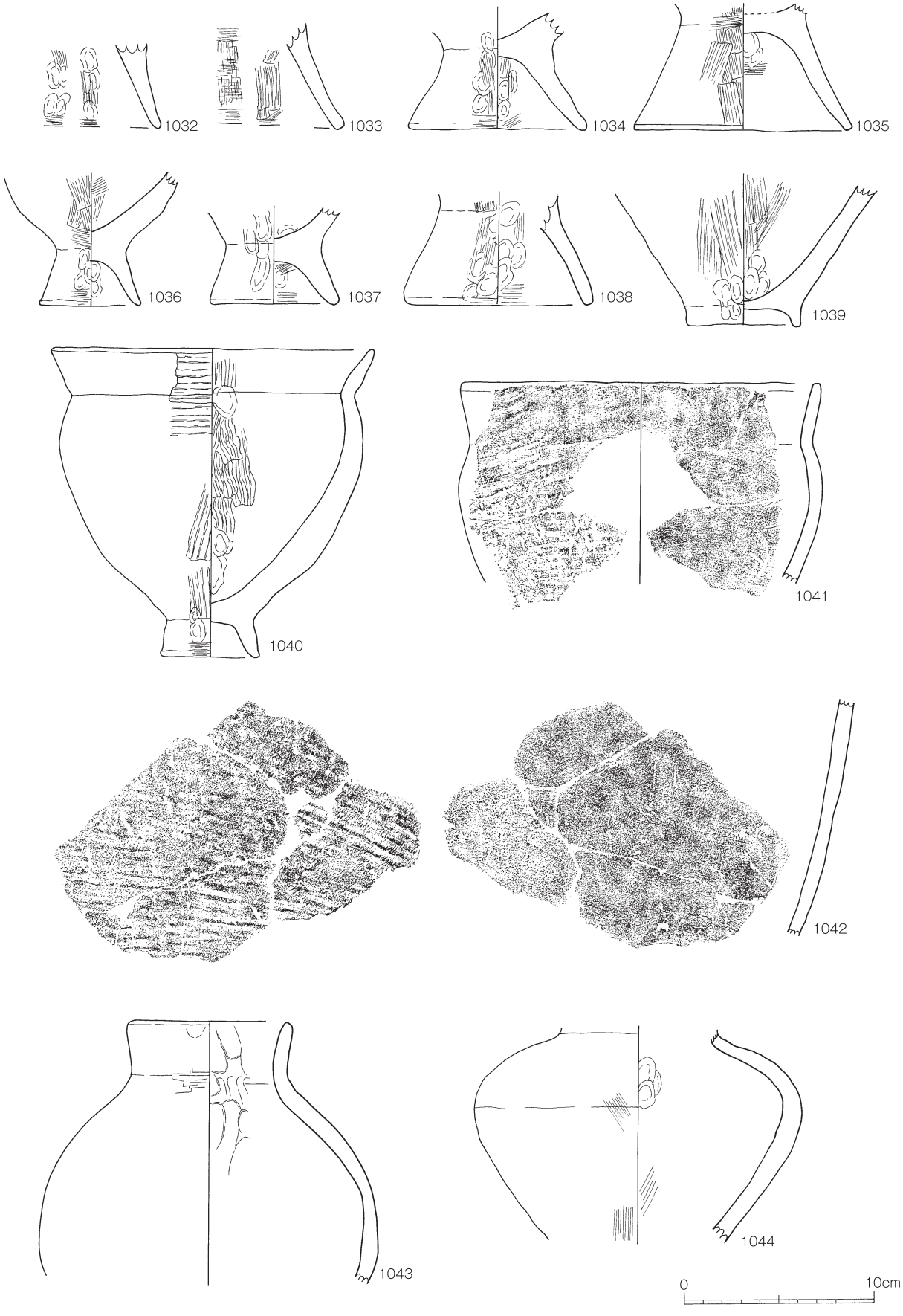
第142図　９号住居跡



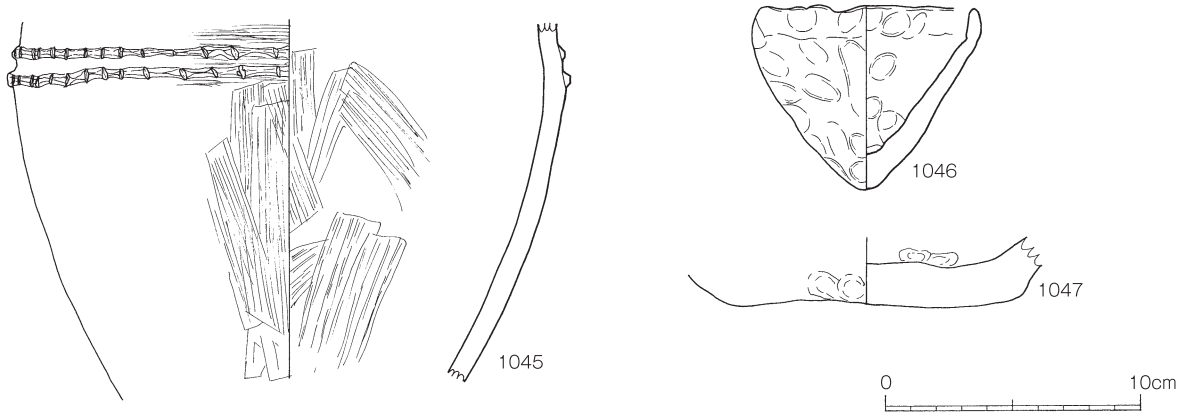
第143図　９号住居跡出土土器（1）



第144図　９号住居跡出土土器（2）



第145図　９号住居跡出土土器（3）



第146図　９号住居跡出土土器（4）

かった。

1016～1025までは，甕形土器の胴部から口縁部に至るものである。頸部で緩やかに「く」の字状に外反するものである。頸部から口縁部にかけての調整は掻き上げ口縁である。また，1017や1021のように頸部内面の稜が明瞭なものもある。1023は，やや小さ目で口縁部に最大径があるもので，器形的には990に近いが，990よりも作りが丁寧である。1025は，小片のため器形その他については定かでない。

1026は，口縁最大径が25cmとやや小さ目で，頸部でやや外反するがほぼ直線状に口縁部へ立ち上がるもので鉢形土器の可能性もある。1029も同様に，鉢形土器の可能性がある。

1027は，この住居跡の中では最も大きな遺物である。最大径が胴部上位にあり，約45cm，口縁部径が約40cmである。大きく張り出した胴部から，頸部で緩やかに「く」の字状にやや屈曲するものの，大きく外反はしない。頸部には，一条の刻目突帯を施す。

1028・1030・1031は，甕形土器の胴部についての破片である。1032～1039は，それらの裾部である。1039は，極端に裾が短いもので鉢形土器の可能性もある。

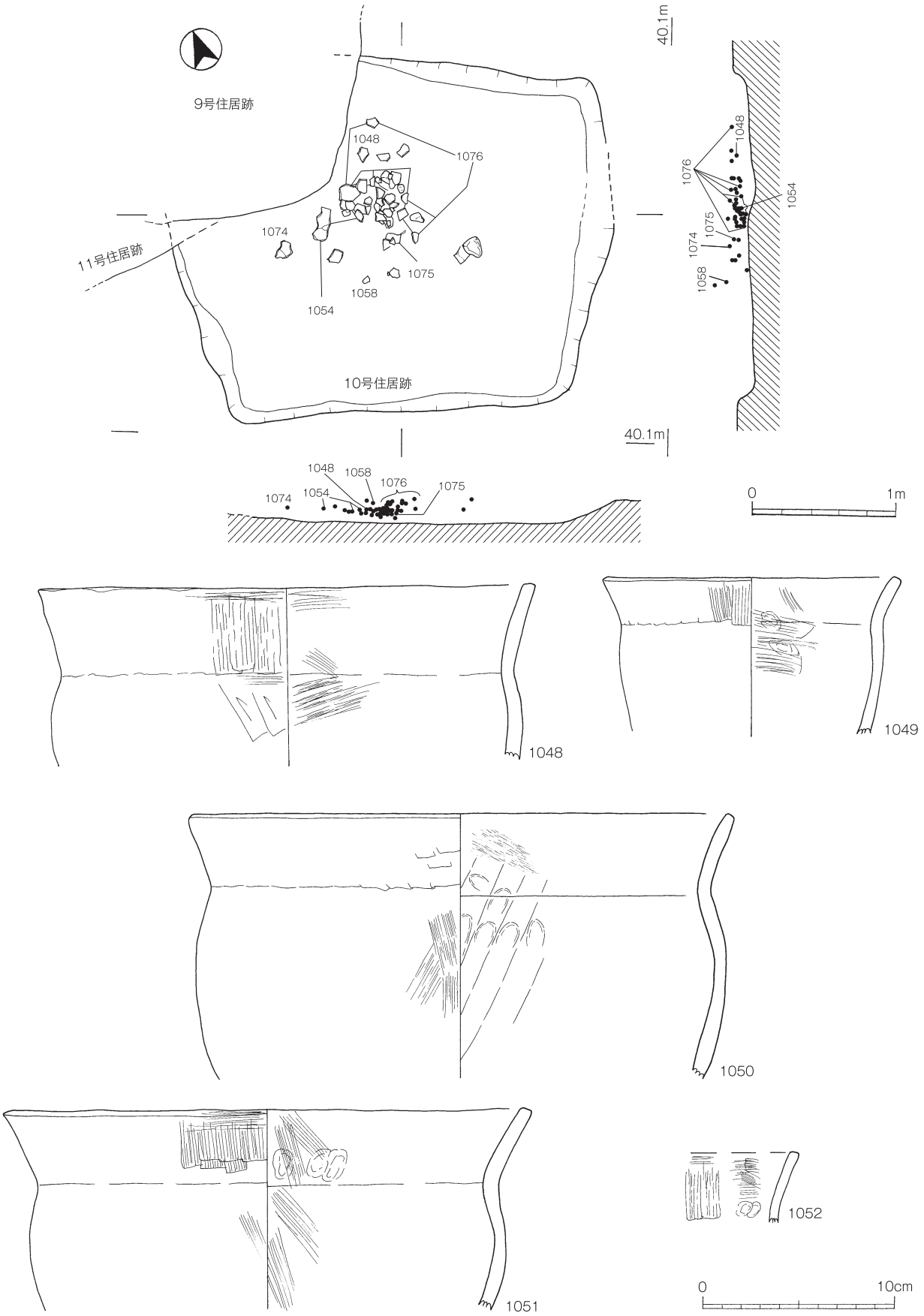
1040・1041は，外面の調整に叩きが施される甕形土器である。また，1042も叩きが施されたもので，内面の調整はナデである。器形については，甕等の大型のものになるものであろうか。ただし，外面に叩きのある遺物は，10号住居跡で数多く出土していることから，10号住居跡の遺物の可能性もある。この叩きのある土器で，完形でその器形が明らかなのは，1040のみである。

1043～1045は，壷形土器である。1043は，胴部中央に最大径があり，頸部から緩やかに口縁部へ立ち上がっていくものであるが，大きく外反はしない。1044は，胴部最大径胴部中央部よりやや上位にあるもので，算盤玉状の器形である。底部と口縁部は，欠損している。1045も1044と同様に底部と口縁部を欠損している。胴部中央よりやや上位に二条の刻目突帯を有する。

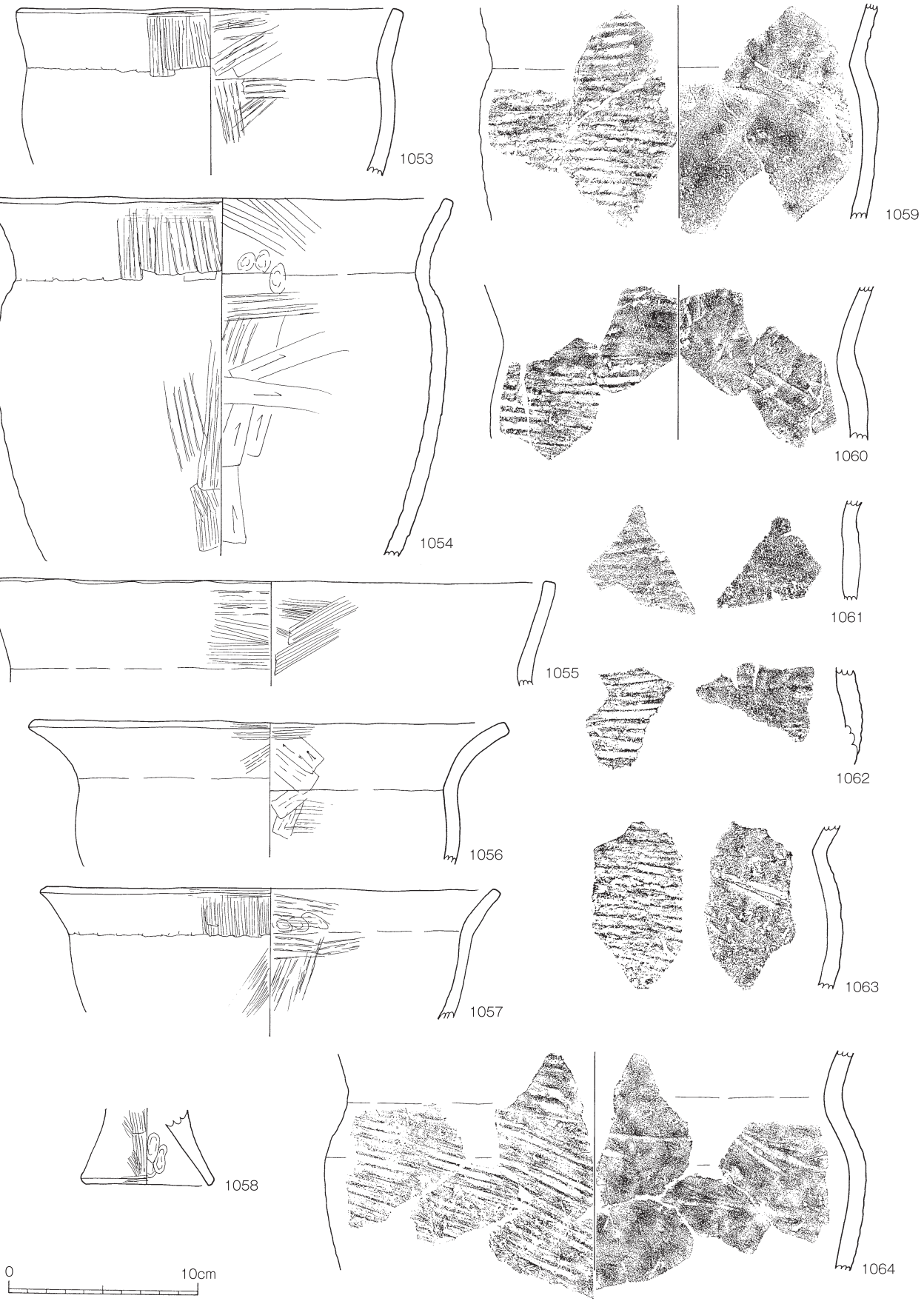
1046は，手捏土器で，逆三角形を呈し，口縁部がやや内弯する。指頭により全体的な調整を行っている。1047は，鉢と思われるが，その他は詳細不明である。

10号住居跡（第147図～第150図）

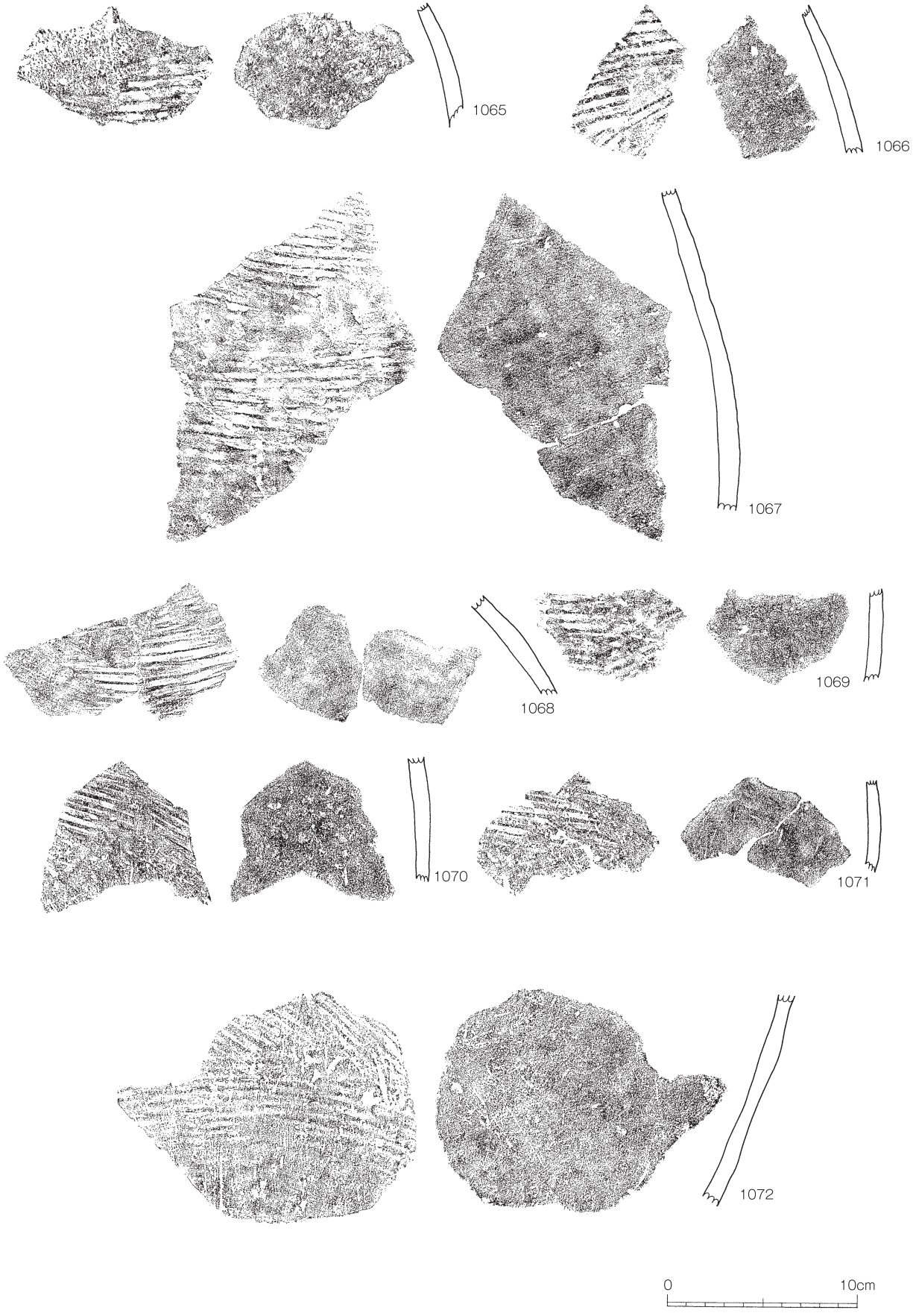
10号住居跡は，９号住居跡に北側を切られた状況で検出された。その規模は3.5m×３m程度の方形であり，他の住居跡と同様に削平が著しく，検出面から床面までは20cm弱であった。しかし，その中央部分では，床着に近い形で大量の遺物が出土した。



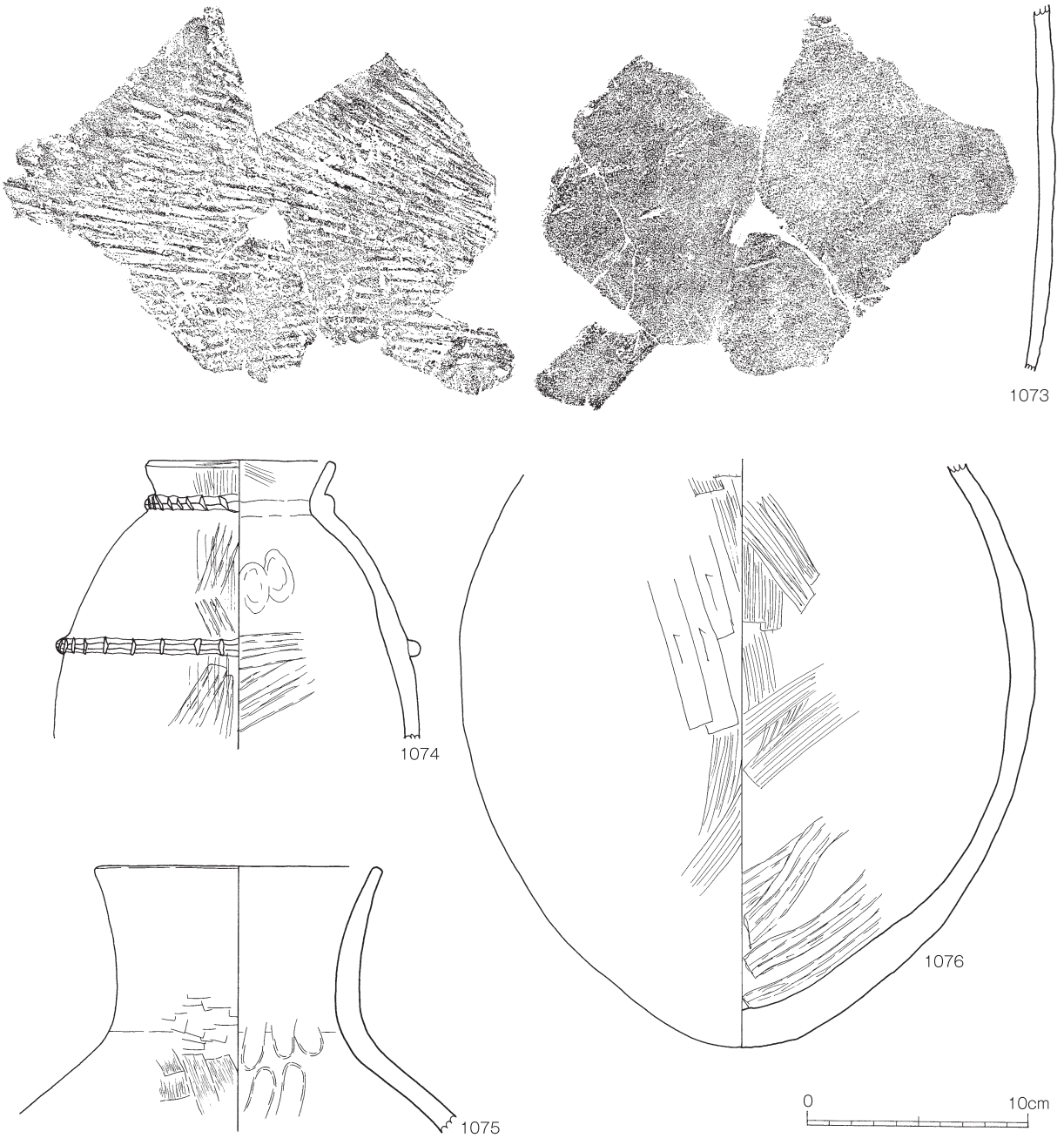
第147図　10号住居跡及び出土土器



第148図　10号住居跡出土土器（1）



第149図　10号住居跡出土土器（2）



第150図　10号住居跡出土土器（3）

1048～1057までは，甕形土器の胴部から口縁部に至るものである。頸部で緩やかに「く」の字状に外反するもので，頸部から口縁部にかけての調整は1055と1056を除きそのほとんどが，掻き上げ口縁である。また，これら二個体は，鉢形土器に近い器形の可能性もある。1058は，これらの甕形土器の中空脚台である。

1059～1073は，９号住居跡でも説明したように，外面の調整が叩きであり，内面の調整は若干の当て具痕が見られるものの，基本的に丁寧なナデである。その器形は1059～1064のように，胴部が張り，頸部で緩やかに「く」の字状に外反して口縁部へ至る甕形土器と，1065～1073は須恵器の甕のように大型になるものもある。ただし，甕形土器については，その叩きは，胴部最大径よりやや下位の部分から口縁部にかけて施されており，脚台部分に叩きがあるものは見当たらない。



第151図　11号住居跡

1074～1076は，壷形土器である。1074は，胴部最大径よりやや上位と短い口縁部へ「く」の字状に外反する頸部に刻目突帯を施すものである。1075は，復元口縁径が約12㎝，緩やかに外反しながら，口縁部へ至るものである。外面の調整はハケ，内面の調整は指頭ナデである。1076は，卵型を呈するもので，頸部下部から口縁部にかけては，欠損している。色調は，黒褐色をし，外面の調整が粗いケズリとハケ，内面が粗いハケである。

11号住居跡

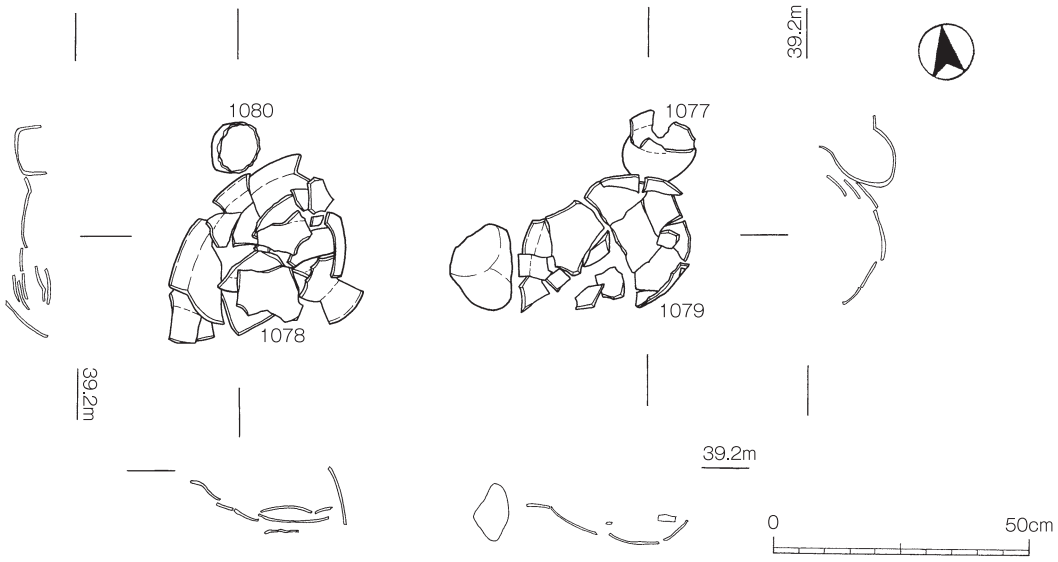
11号住居跡は，９号住居跡に半分以上を切られた状態で検出された。他の住居跡とその規模は同等の３ｍ×３ｍ程度の方形だったと思われる。検出面から床面までは，10㎝程度と浅く，埋土からは小片の土器は出土したが，図化し得るほどのものはなかった。

第２節　遺物

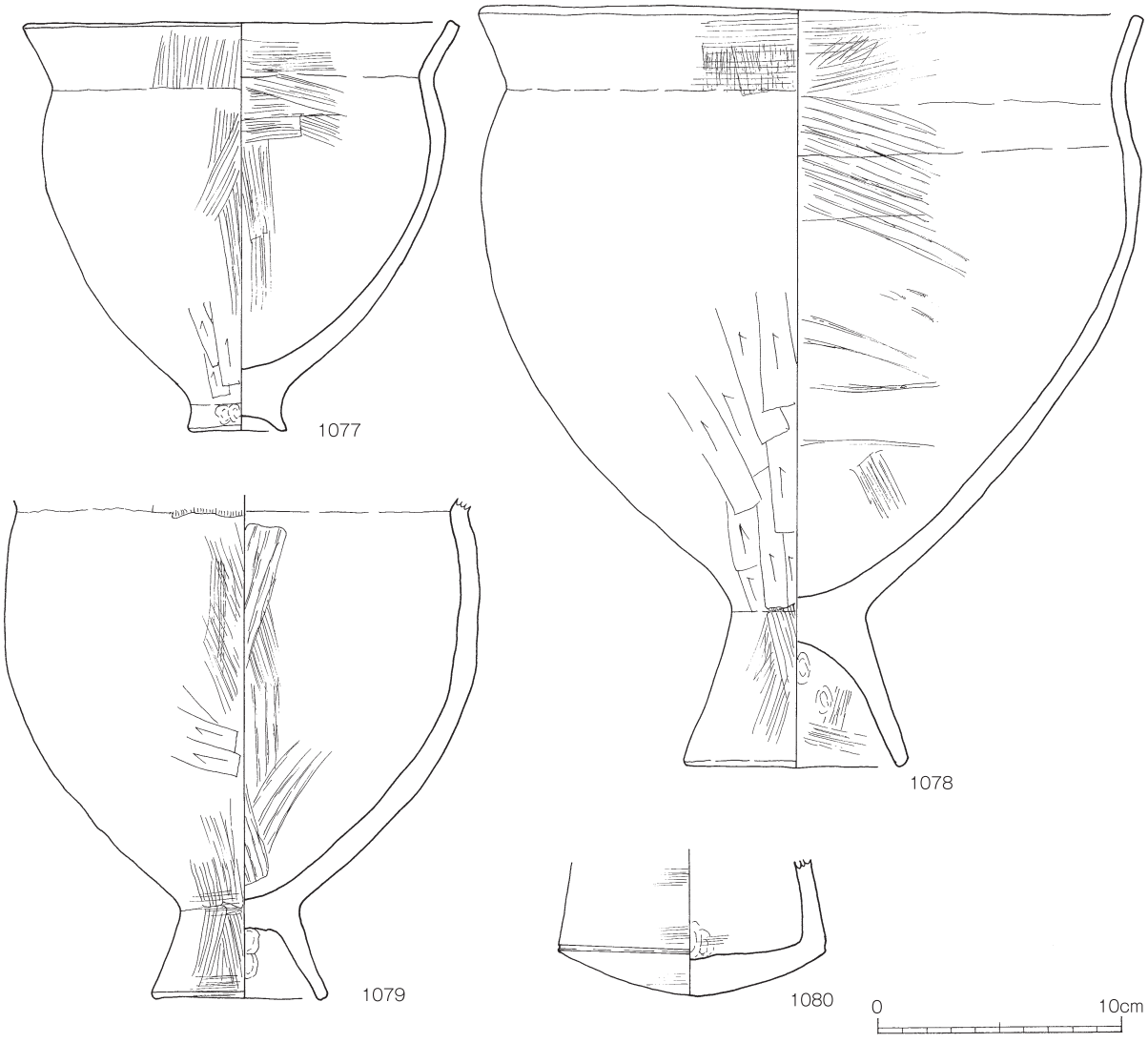
表土や撹乱層からは，多量の土器が出土したが，包含層からの出土は少なかった。なかでも良好な出土状況であったものが，第152図の1077～1080の4点の土器である。1080が上部を削平などにより欠損しているもののほぼ原位置を保っていると思われる。

出土地点は，６号住居跡の南側約２ｍほど南側である。遺物の下に掘り込みなどの遺構の有無についても精査を行ったが，遺構は検出されなかった。

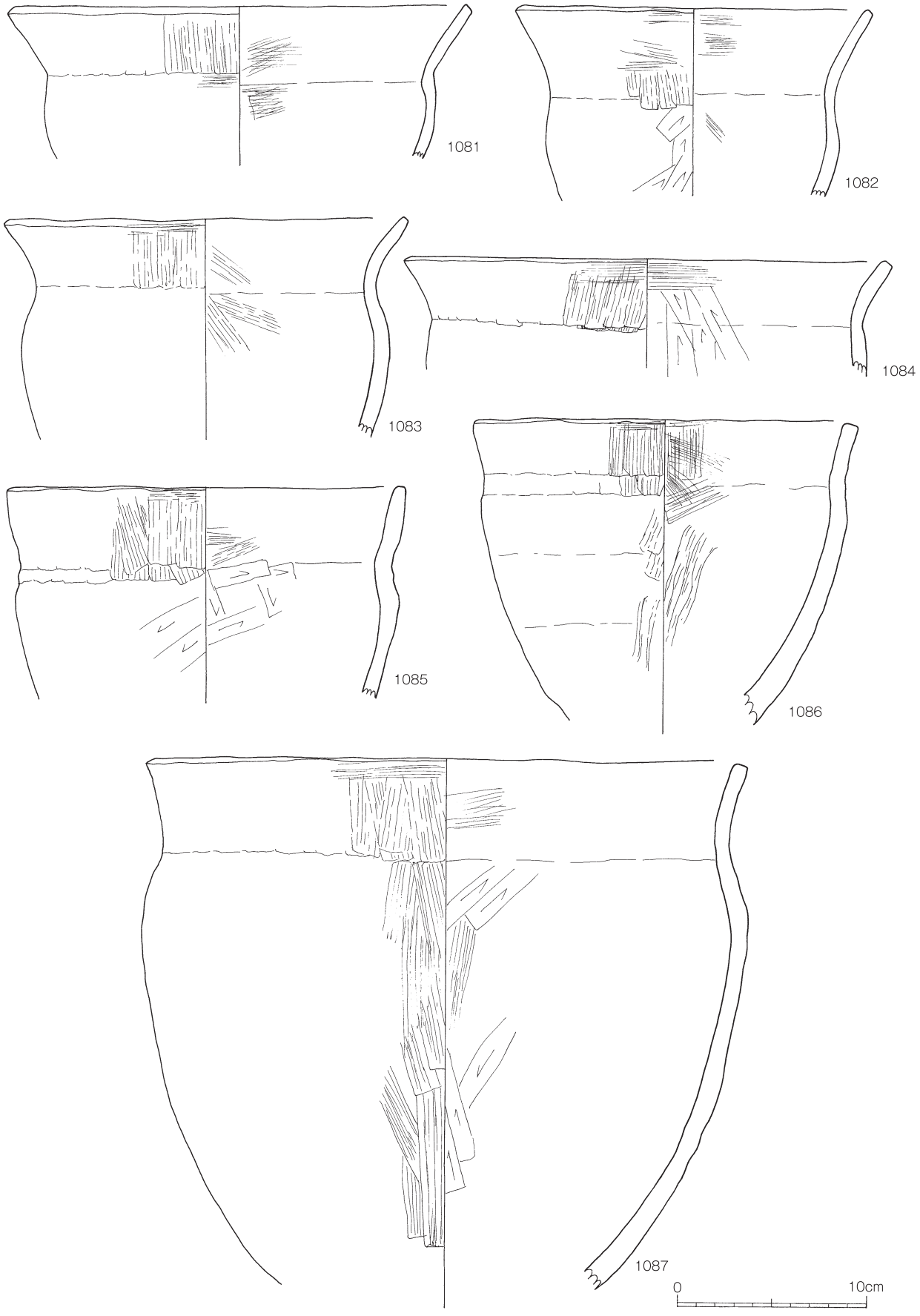
1077は，口縁部がやや欠損するのみで，ほぼ完形で出土した。復元口縁径約17㎝で低い中空の脚台から緩やかに球形に近い形で立ち上がり，頸部で「く」の字状に外反するもので，頸部内面には稜線を残すものである。1078は，大型の甕形土器でスマートな中空の脚台から1077同様に立



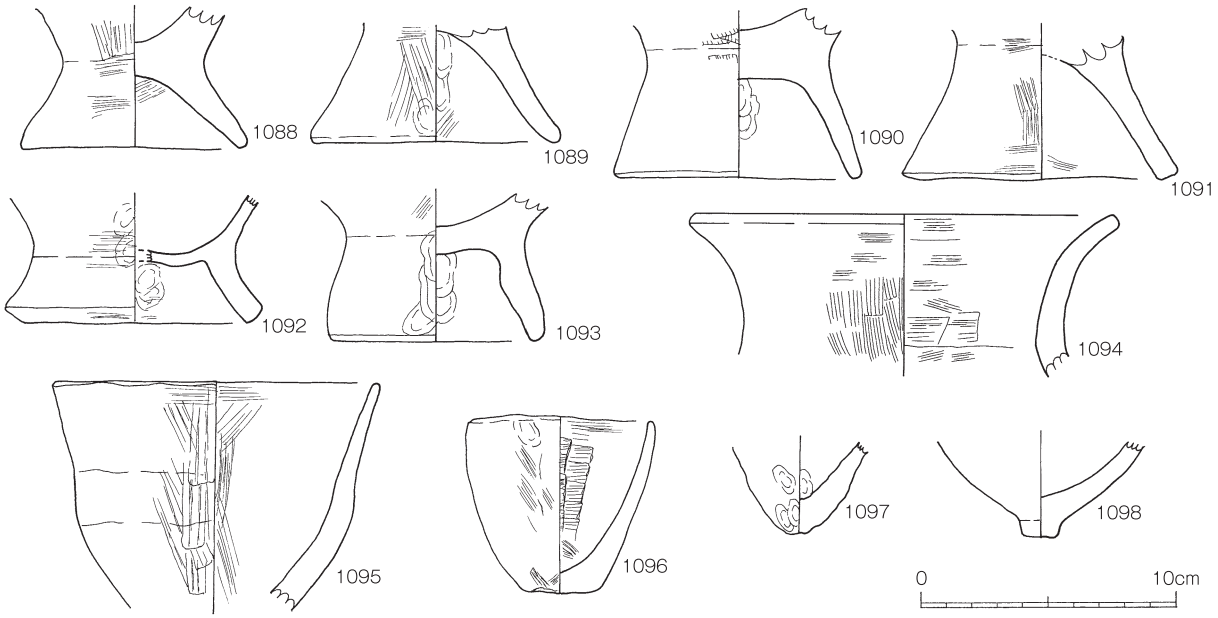
第152図　包含層出土状況



第153図　包含層出土土器（1）



第154図　包含層出土土器（2）



第155図　包含層出土土器（3）

ち上がり口縁部は外反するものである。ただし，頸部内面の稜線はほとんど見られず，曲線的である。1079は，1077と1078の中間的な大きさである。口縁部は欠損するものの，外反するものと考えられる。1080は，坩型土器である。現存最大径が約11cm，底部は丸底で底部から胴部への立ち上がり部分に底部と胴部を区別するかのような細い沈線を施す。上部は欠損しているが，鼓状の器形になると思われる。

1077～1088までは，住居跡の周辺に集中して出土し，遺構の可能性もあるものであったが，以下の包含層及び採集品である。1081～1087までは甕形土器であり，その頸部の調整はほとんどが掻き上げ口縁である。1087以外は，復元口縁径が約20数cm程度であるが，1087は35cm程度とかなり大きい。

1081～1084は，器壁も薄く作りも丁寧である。また，頸部から口縁部にかけての「く」の字状の外反も1081を除いて緩やかである。1085・1086は作りも粗く頸部からの立ち上がりもやや外反するだけである。また，1086は，叩きによる調整の可能性もある。

1088～1093は甕形土器の中空の脚台で，直線的に張り出すもの「ハ」の字状に張り出すもの，1092のように底部は薄く短い脚や，1093などのように非常につくりの粗いものなど様々である。

1094は，壷形土器の口縁部で，復元口縁径が約20cmで作りも比較的に丁寧である。1095は，鉢形土器の底部の欠損したものと思われる。やや胴部が張り，頸部で若干外反し，口縁端部は細く納める。粘土の接合面も外面から観察できる。

1096・1097は，手捏土器で，1096はジョッキ状，1097は，そのまま口縁部へ至るものと考えられる。1098は，坩型土器の底部で精製された粘土を用い丁寧なナデ調整が行われている。

第Ⅶ章　古代の調査

古代の遺構は，中世の曲輪で言うと，曲輪３（E・F-14区とE・F-11区，F・G-11区，G-8・9区，H-8区の２地域）と曲輪１（I-25区，J-25区）の２か所から検出された。つまり，向栴城跡の北端と南端から検出されたことになる。中央部分（曲輪２）からは古代遺物はほとんど出土しなかったことから，中央部分は生活の場として用いられなかったものと思われる。

古代の遺構は，竪穴遺構１基，円形周溝遺構１基，土坑５基が検出された。また，これらの遺構の周りには多数の柱穴が検出されたが，建物跡として認定できるようなものはなかった。

第１節　遺構

１　竪穴遺構

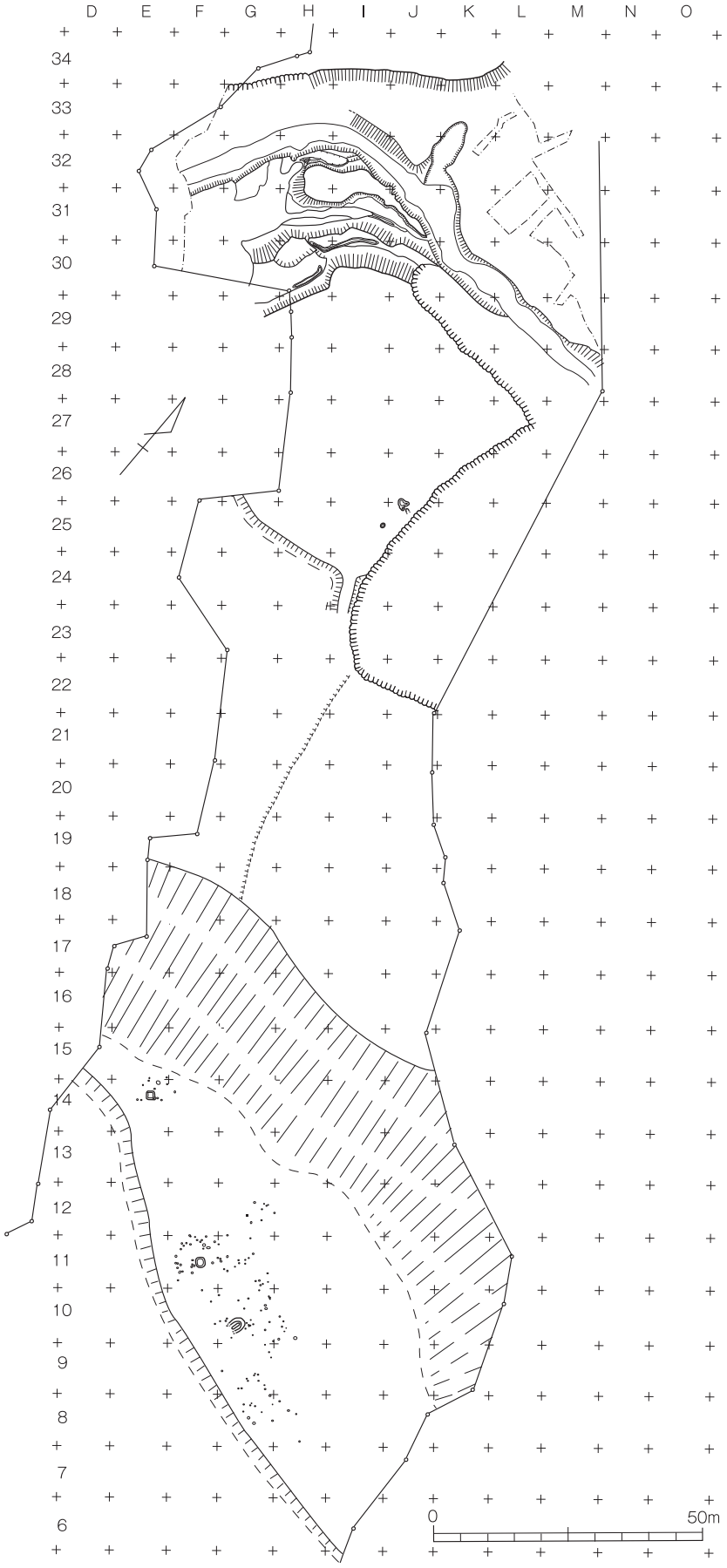
E-14区の中央部から検出された。標高は39.0m～38.8mであり，東から西へ緩やかに傾斜した地形である。掘込は検出面から20cm～23cmの深さがあり，竪穴遺構の西角に土師器の甕がそのまま置かれたような状態で検出された。甕の出土状況が平面プランより若干上面であったため竪穴遺構の本来の掘込み面は，まだ上であったものと考えられる。埋土や出土した土師器の甕から判断して古代のものと思われる。なお，東角の土坑は柔らかな埋土であり，後世に掘られたものである。

この土師器の甕（1099）は図159のような状態で検出された。外面はナデやハケ目が，内面は底部からはケズリが上面に向かい，腹部は左斜め上に向かって施され，また口縁部にはハケ目が施されている。内部の土壌は，埋土とほぼ同じであり，遺物等は検出されなかった。ただし，竪穴遺構の周辺からは，同時期と思われる柱穴が検出されたが，建物，その他の施設としての認定はできなかった。

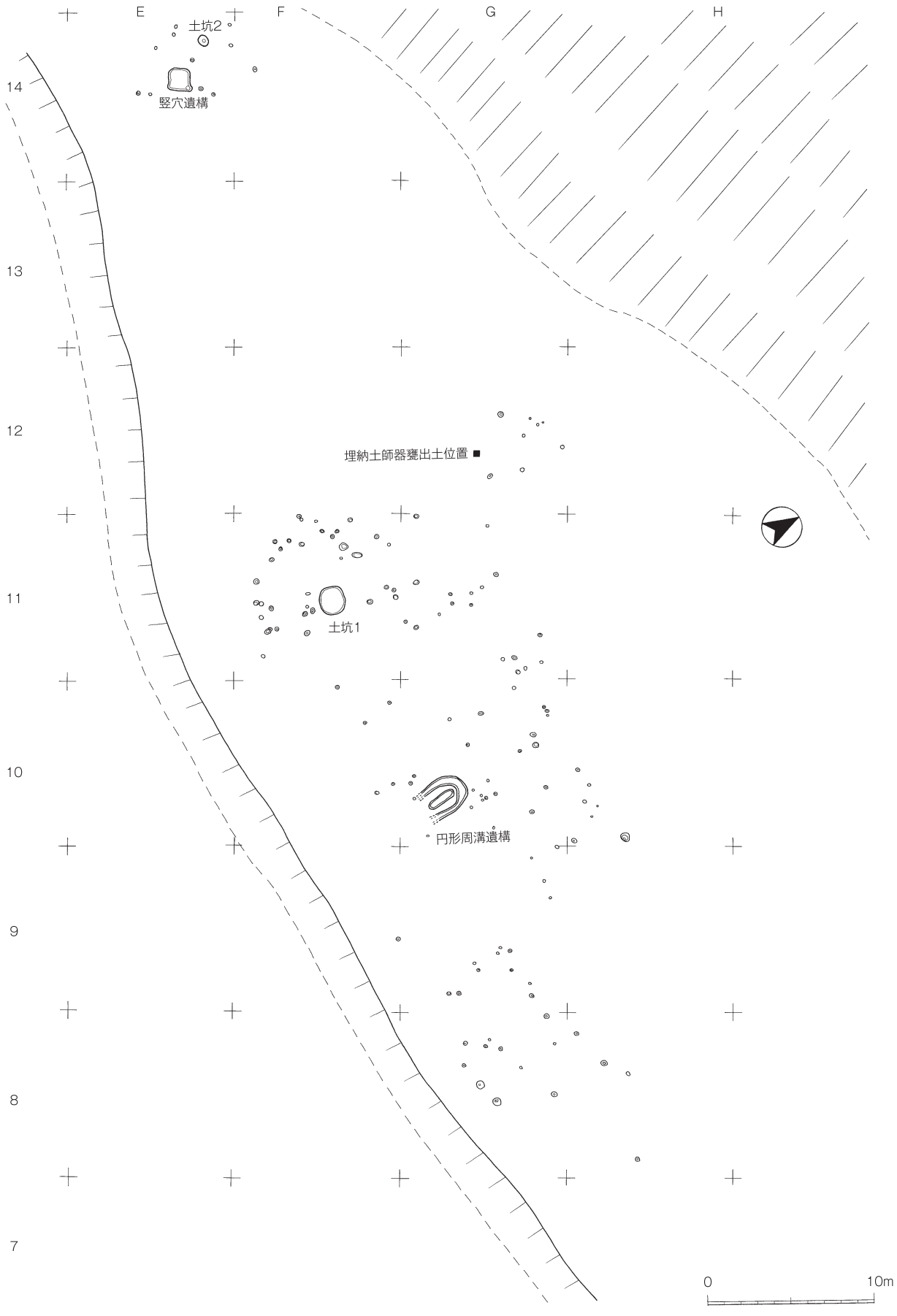
２　円形周溝遺構

いわゆる曲輪３の中央部，G-10区から円形周溝遺構が，標高は39.3m～39.4m，北から南側に傾斜する状態で検出された。遺構の残りは悪く，検出面からその底面まで，深いところでも10cm～20cm前後であり，南端部は，削平されていた。長軸は，ほぼ南北であり，前述のように南側を削平されていることから，遺構は馬蹄形状に見える。土師皿，坏が出土した主体部は，長軸が190cm，短軸は60cm。周溝部を入れると残存状況では，長軸260cm（推定では300cm），短軸は220cmあった。土師皿，坏，埦の４点が主体部の南側に埋納した状態で検出された。人骨あるいは，木棺などの埋葬に関する遺物が検出されなかったため，「円形周溝遺構」とした。溝の埋土は，Ⅲa層が黒く濁ったもので微細の炭化物等が混入していた。なお，周溝部北側の柱穴は，埋土も柔らかくてこの遺構の埋土とは異なっていたことから，同時代のものではないと判断した。

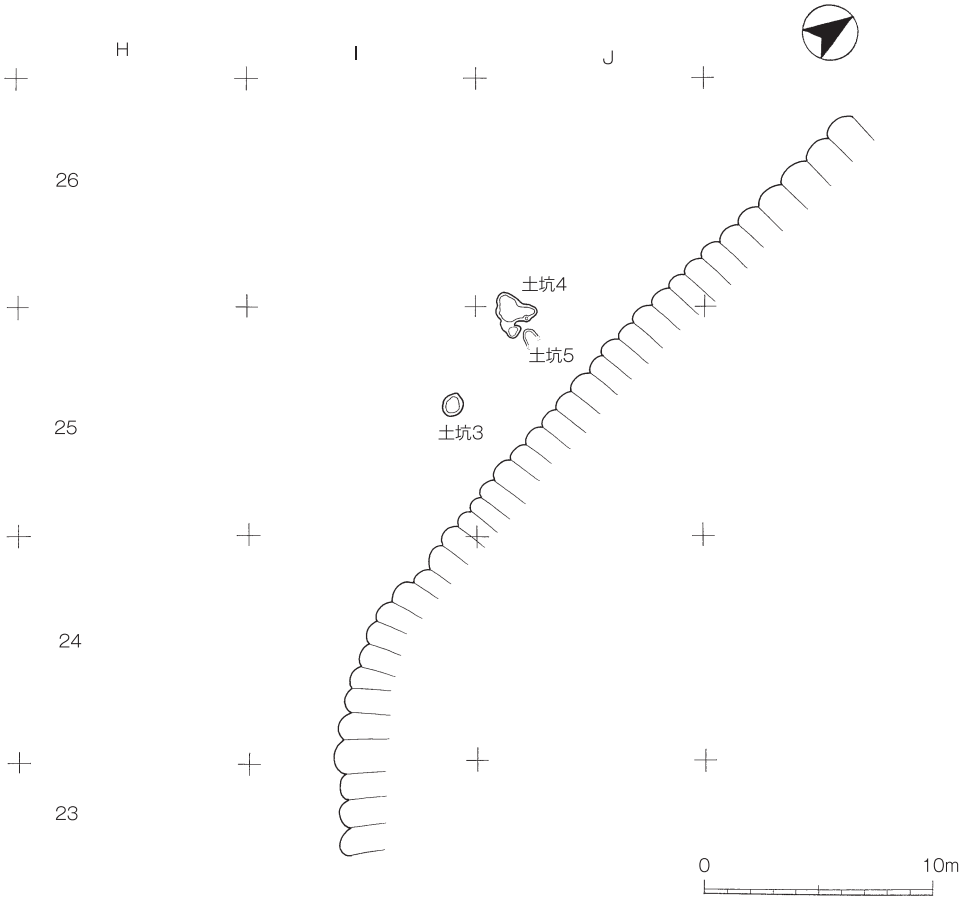
周溝の主体部南側からは，土師器の皿が２点，土師器の坏が２点の計4点が出土した。全て底部の処理はヘラ切り底であり，その後の成形等は若干の板ナデ状のものが観察されるものもある。皿（1100，1101）は２枚重ねの状態で，他の坏（1102，1103）は，その南側に並べてあった。これらの土師器の上下からは，目立った炭化物は検出されなかった。皿については，1100が，径が



第156図　古代全遺構配置図



第157図　古代遺構配置図（1）



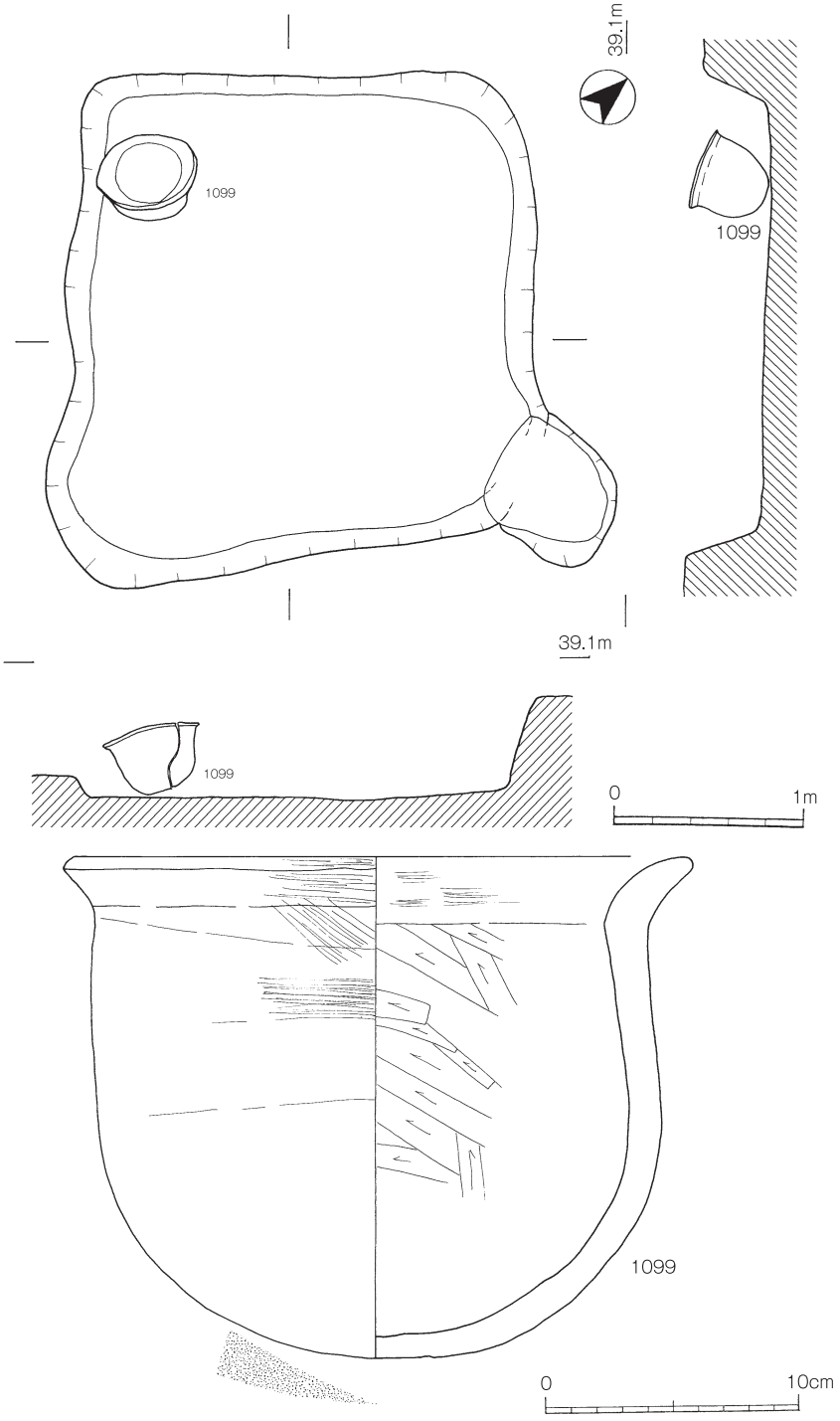
第158図　古代遺構配置図（2）

8.9cm，器高は0.9cm～1.6cm，1101は径が8.9cm，器高は1.8cm～2.0cmと低く，底部の切り離しは粗い。1102は坏である。径は13.6cm，器高は4.1cm，体部は底部からなだらかに内弯して立ち上がり，口唇部はやや端反る。皿に近い形状なし，高台は充実した高台である。皿同様に安定感に欠け作りは粗い。1103は坏である。体部は内弯して立ち上がり，口唇部は端反る。底部の径は約5.8cmあった。板ナデ状の痕跡が若干見受けられるが定かでない。

３　土坑１

Ｆ-11区付近は，土師器の小片が多数出土した部分であり，遺構の上面にもかなりの土師器の小片が出土している。この土坑の埋土は茶褐色でやや硬質な小さな塊を含む土及び，Ⅱ層及びⅢ層の混土と微細の炭化物である。前述のように，土坑周辺にも古代の土師器が多数出土しており，土師器の集中出土域として取り上げている。土坑の平面プランは，ほぼ円形で，遺構からは，土師器の甕等，土師器の小片破片が多数出土した。また，特に1104の下からは多量のカーボンを検出した。中央部に第161図のように２個の石を確認した。土坑の平面プランより若干低い位置に横たわるような状態で軽石が出土し，もう一つは，敲石もしくは凹石の先を床面に向け，破損部を天に向けて直立させた様な状態で出土した。平面プランは標高35.1m～35.0mで，北から南側に傾斜する状態で遺構の端から端の高低差は７cm程度でほぼ水平位置であった。また，土坑１の中央から西へ約40cm～50cm，遺構検出面から約15cm下から，土器と小石の計４点が出土した。

1104は先ほど述べた，軽石である。扁平な楕円形を呈し，長径は60cm，短径は20cmである。1105は石材が安山岩で，古代において縄文時代の敲石，もしくは凹石を転用したものであると思われる。高さは約24cm，長径は約14cm，短径は約９cm程度あった。



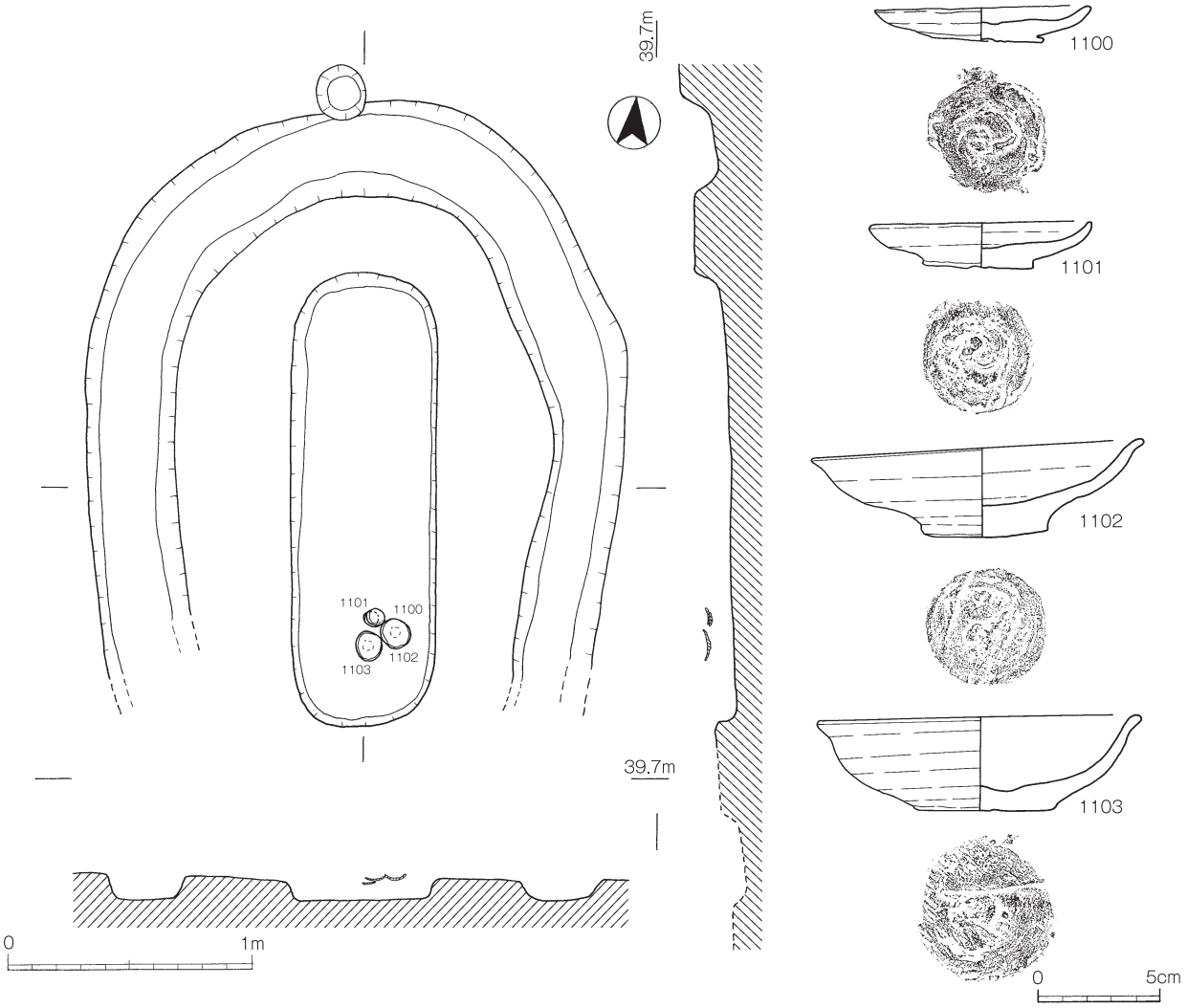
第159図　竪穴遺構及び出土遺物

多数出土した土師器の破片から２点（1106，1107）を図化した。1106，1107は埦の底部である。いずれも，体部から口縁部を欠損する。1106の高台は「ハ」の字状に開き端部は丸くなる。径は6.9cm，脚部の高さは1.7cmある。内外面とも横ナデである。1107の脚部は充実高台である。ヘラ切り底の高台であり，若干成形の痕跡が伺える。径は5.9cm，高さは1.5cmであった。

４　土坑２

E-14区に位置する。南東５mに竪穴遺構から北西５mの位置に土坑２が検出された。平面プランは，ほぼ円形で直径が約１m，その埋土はⅢａ層（濁った色）で，遺構内からは，土師器の埦や甕の破片が多数検出され，微細のカーボンも多く埋土中には含まれていた。その他の遺物としては，縄文時代の石皿，台石等と思われる石器が４つ検出された。なお，この土坑から出土した土師器等については，小片がほとんどであり，図化し得なかった。

出土した石器は，縄文時代の石皿や台石の再利用品と考えられる。元来は，検出された状況から，底面に台石を立てその上に石皿を置いていたなどの状況が想定される。石皿の下からの遺物の出土はなかった。1108は，安山岩で，現存長が27.0cm，幅が37.8cm，厚さは13.0cm，重さは20,200ｇの石皿の半欠品である。図右側の網掛け部分は，擦り面が残存しているが，その左側部分は剥離している。残存している形状から判断して，元来は片面がかなり使い込まれた大型の石皿であったことが伺える。1109は，扁平な凝灰岩で，長さは31.6cm，幅は24.2cm，厚さは7.8cm，重さは6,000ｇある。所々に磨面を確認できる。1110も扁平な凝灰岩で，長さは27.0cm，幅は



第160図　円形周溝遺構及び出土遺物

21.7cm，厚さは7.2cm，重さは4,200ｇある。所々に磨面を確認できる。

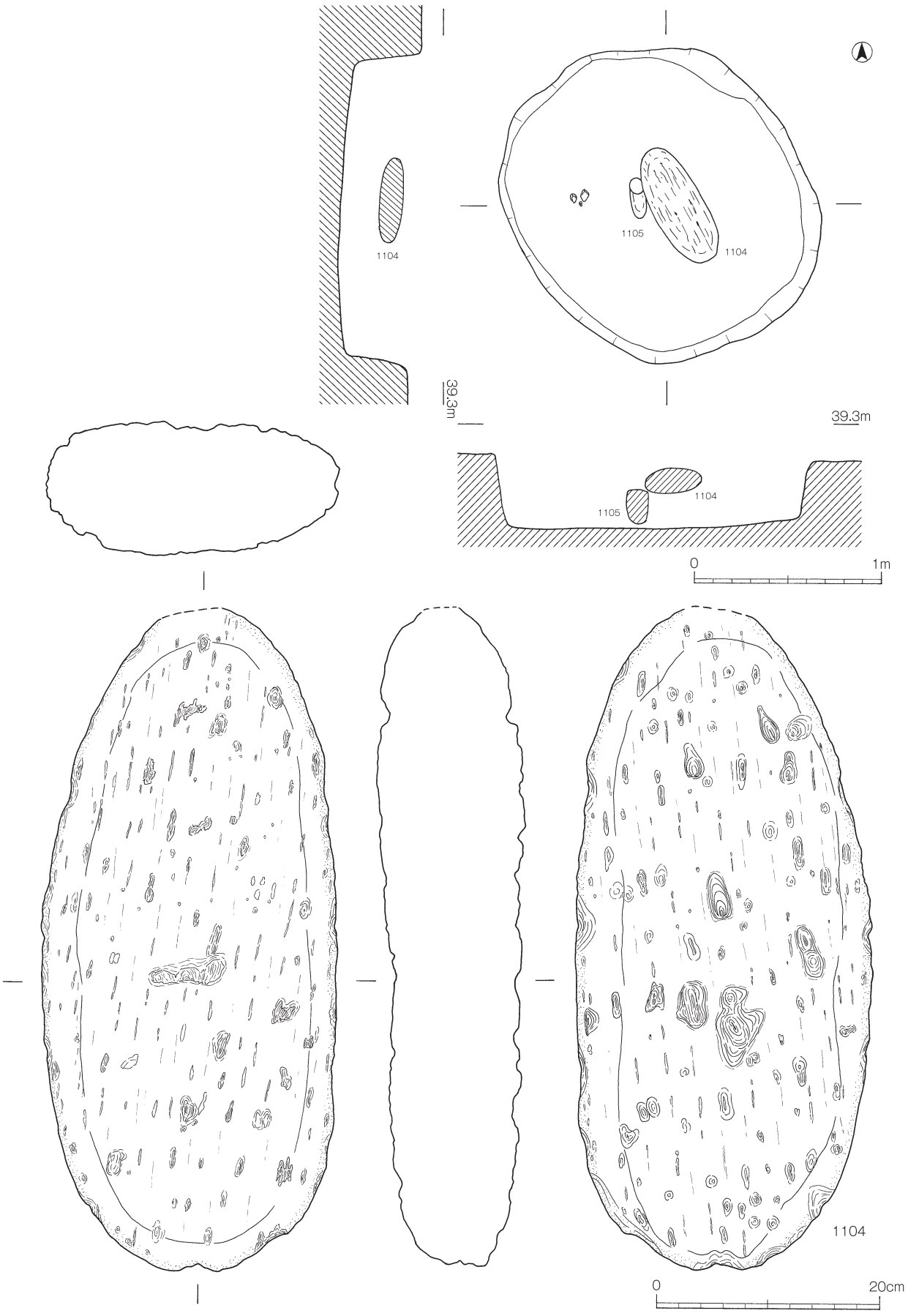
５　土坑３

土坑３・４及び５は，古代の遺物や遺構が多く出土し，この遺跡の古代の中心部であり，いわゆる中世で言う曲輪３付近からは，100ｍ以上北側にある部分から検出された土坑３基である。他には，その数メートル北側から土坑４及び土坑５が検出されたが，それ以外では，古代の遺構が検出されなかったのが，このエリアの特徴であると言える。

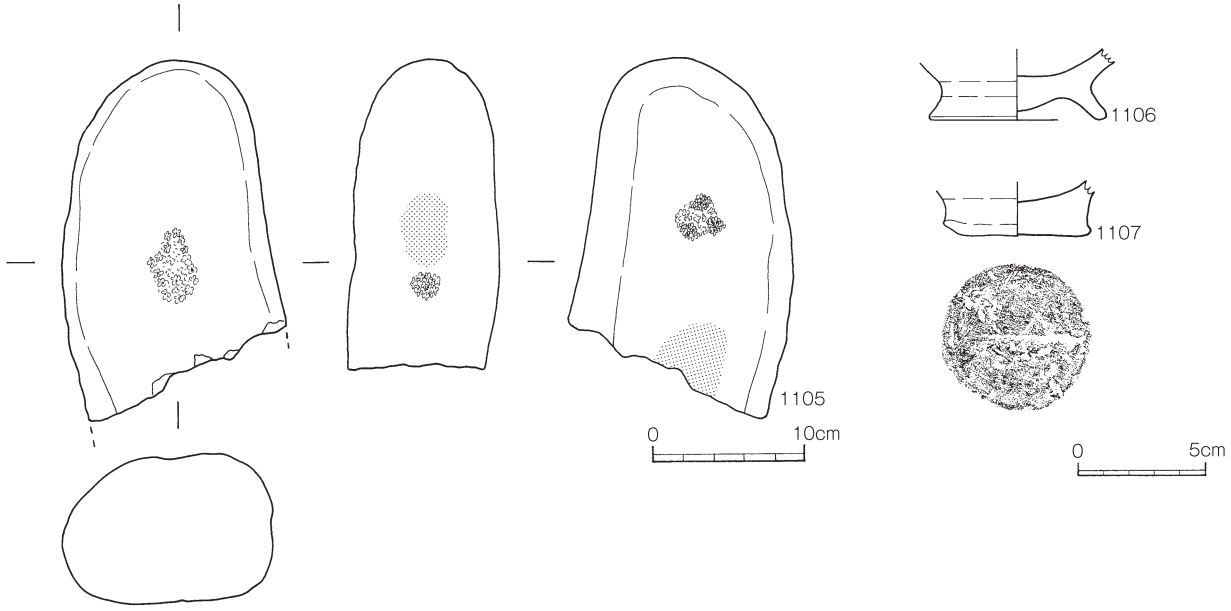
土坑３は，長径が約90cm，短径が約80cmの楕円形の平面プランである。検出面から20cm程度の掘込が確認され，底面は平坦に近い状態であった。埋土中からは，1111の内外黒色土師器の坏が出土した。この坏は，底部がやや丸みを帯び体部中央部付近でやや屈曲して口縁部へと至る。内面はヘラミガキ，外面もヘラミガキを基本とするが，底部から体部への立ち上がりは静止ヘラ削りである。

６　土坑４

土坑４は土坑３において述べたようにいわゆる曲輪３に存在する３個の土坑のうちのひとつである。平面プランは，不定形であり，南西に隣接する土坑５とは一体の施設の可能性もある。西側の土坑と底面の高さが20cm程度高い土坑が連結したような状況で検出された。検出面は，左右



第161図　土坑１及び出土遺物



第162図　土坑１出土遺物

の土坑ともⅣ層に近く，西側が30cm～40cm，東側が20cm程度であった。

埋土中からは銭貨が多数出土したことから，当初は中世の備蓄銭に近い状況とも考えたが，埋土中の遺物のほとんどが古代遺物小片であること，出土銭貨が古代を中心とすることから，古代の土坑と判断した。出土銭貨は，10枚検出された。西側土坑の中央部から1枚，土坑の連結部から重なった状態で２枚，東側の土坑の中央部の床着に近い状態で２枚，南端より重なった状態で５枚が検出された。これらの銭貨の重なって出土したものは，ほとんどが癒着した状態で出土したが，判読不可能なものは２点で，他の８点は判読を行うことができた。ほとんどが11世紀～12世紀の北宋銭であるが，1113のみが唐銭であった。他の銭貨については，第167図の拓本及び180ページの表の通りである。

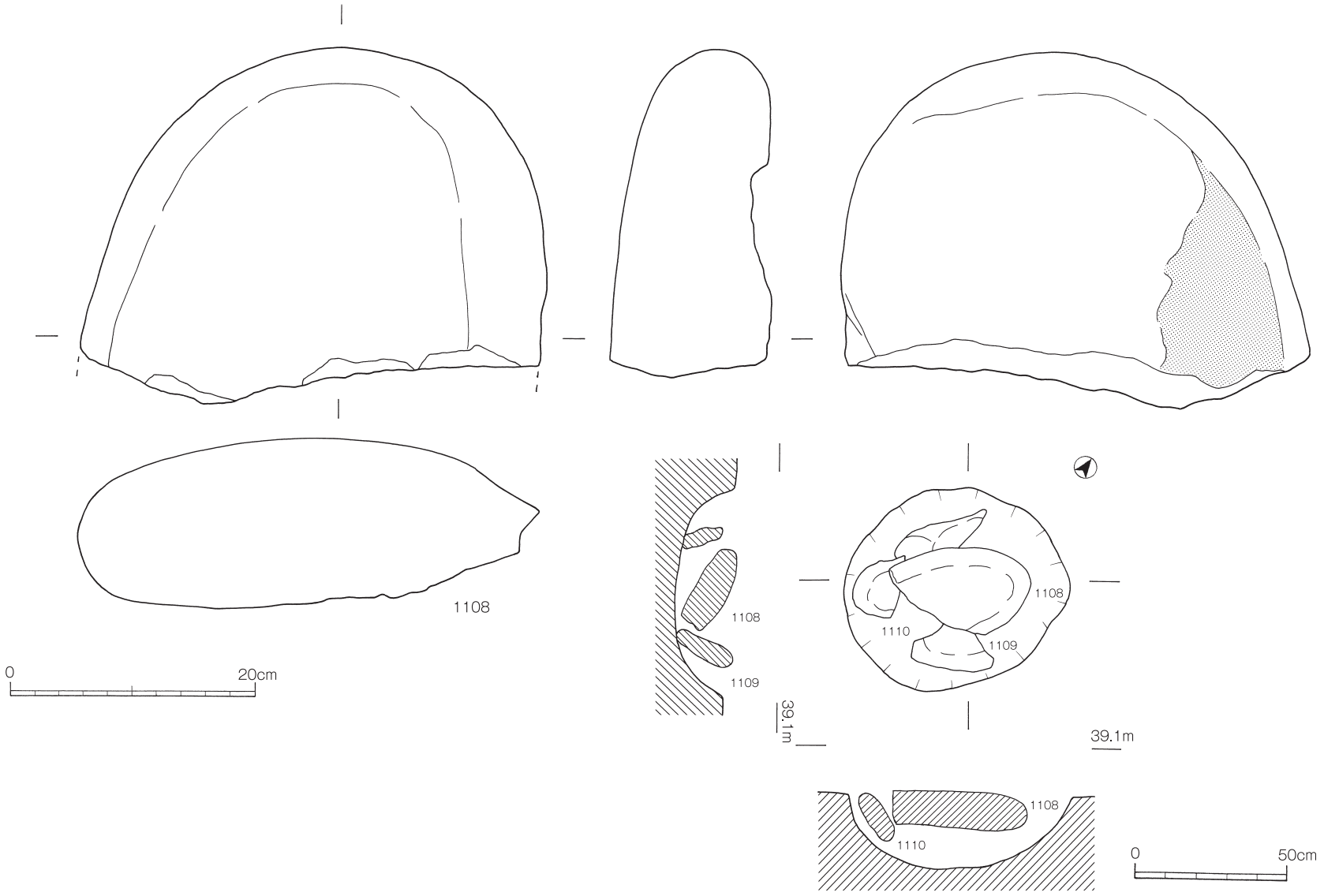
また，他の遺物については，小片が多く，図化し得たのは，1112の内黒土師器のみであった。

７　土坑５

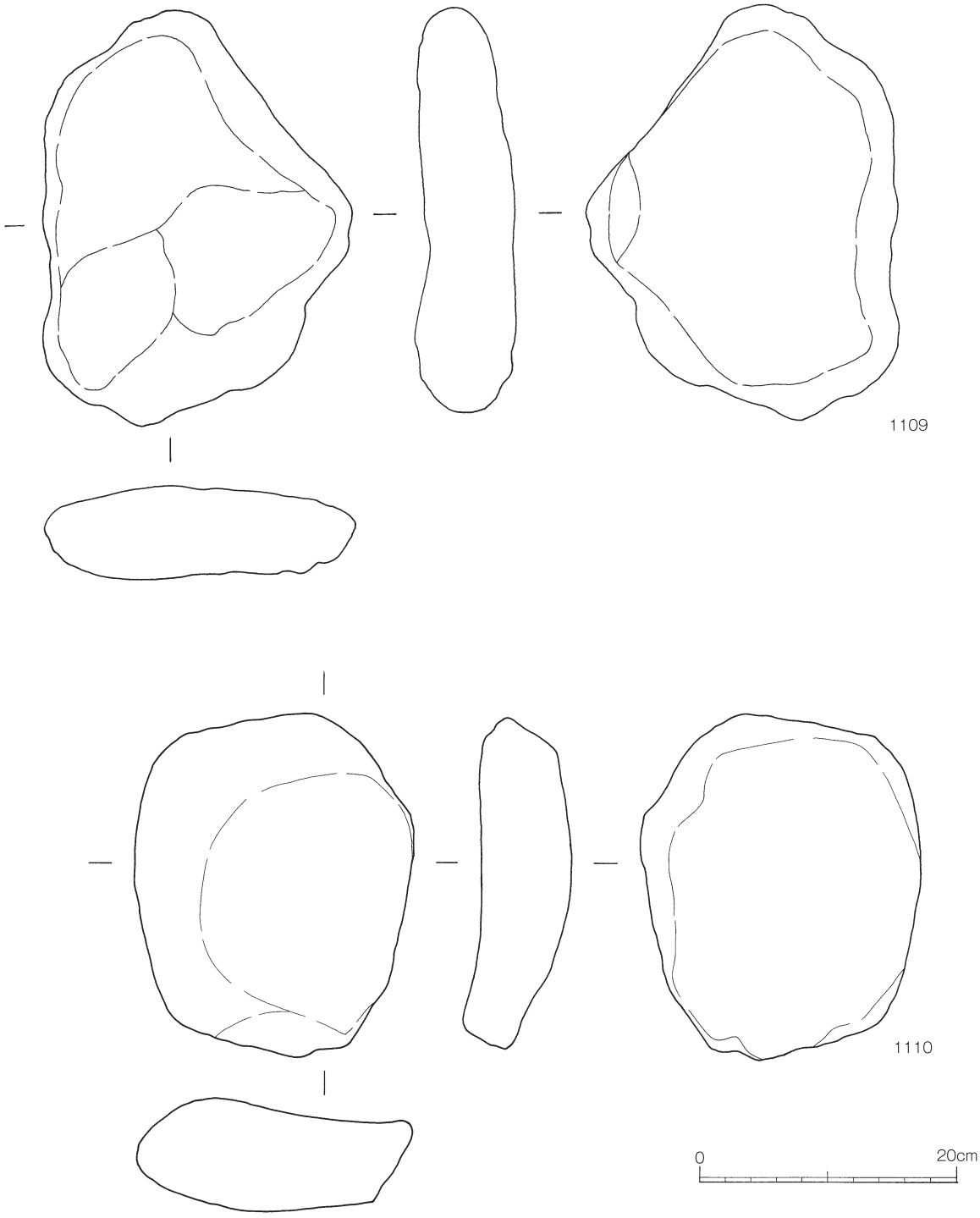
土坑４の南西部に位置し，西側は崖に近く危険を伴うため，半裁して埋土の観察を行って調査を中止した。平面プランは長楕円形と思われ，最大長58cm，検出面からの底部の深さは17cm～20cmであった。埋土の状況が土坑３・４とほぼ同様であることから，古代の土坑と判断した。

８　埋納土師器甕

1123は，G-12区においては単独で検出された土師器の甕形土器である。表土直下で検出のため，その上に蓋など何らかの遺物や施設があったかどうかについては不明である。口縁部は，第169図のような状態で，その周辺に散乱した状態であり，復元したところ，ほぼ完形に近い状態であった。器壁は底部から口縁部までほぼ均一で，調整は外面は胴部から底部にかけてハケ目調整，口縁部付近はナデがなされている。内面はヘラケズリが施されている。内面や底部では横方向のやや左斜め方向に，腹部付近では上ないし右斜め上方向に，口縁部付近になると上ないし左斜め上方向に掻き上げられている。口縁部は，ナデが施されている。底部付近は煮沸に用いられたためと思われる煤の付着が見られた。



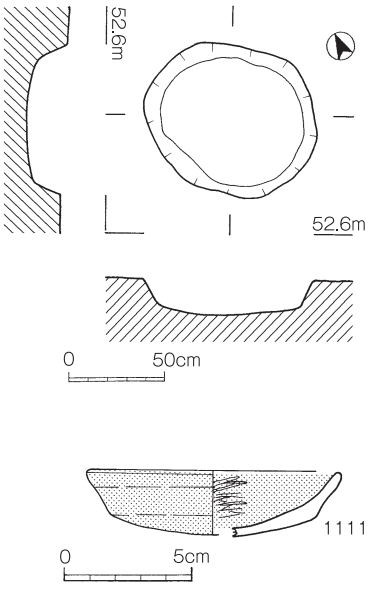
第163図　土坑２及び出土遺物



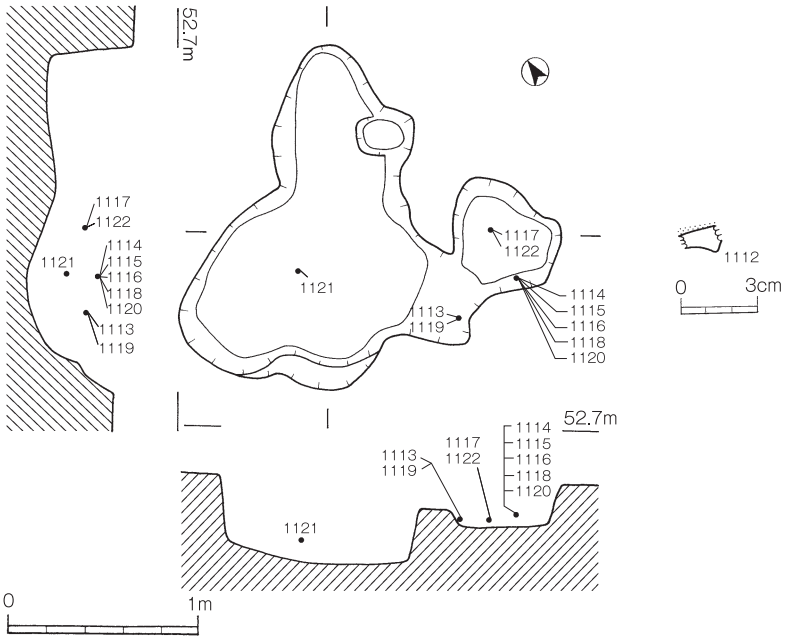
第164図　土坑２出土遺物

土坑４出土銭貨表

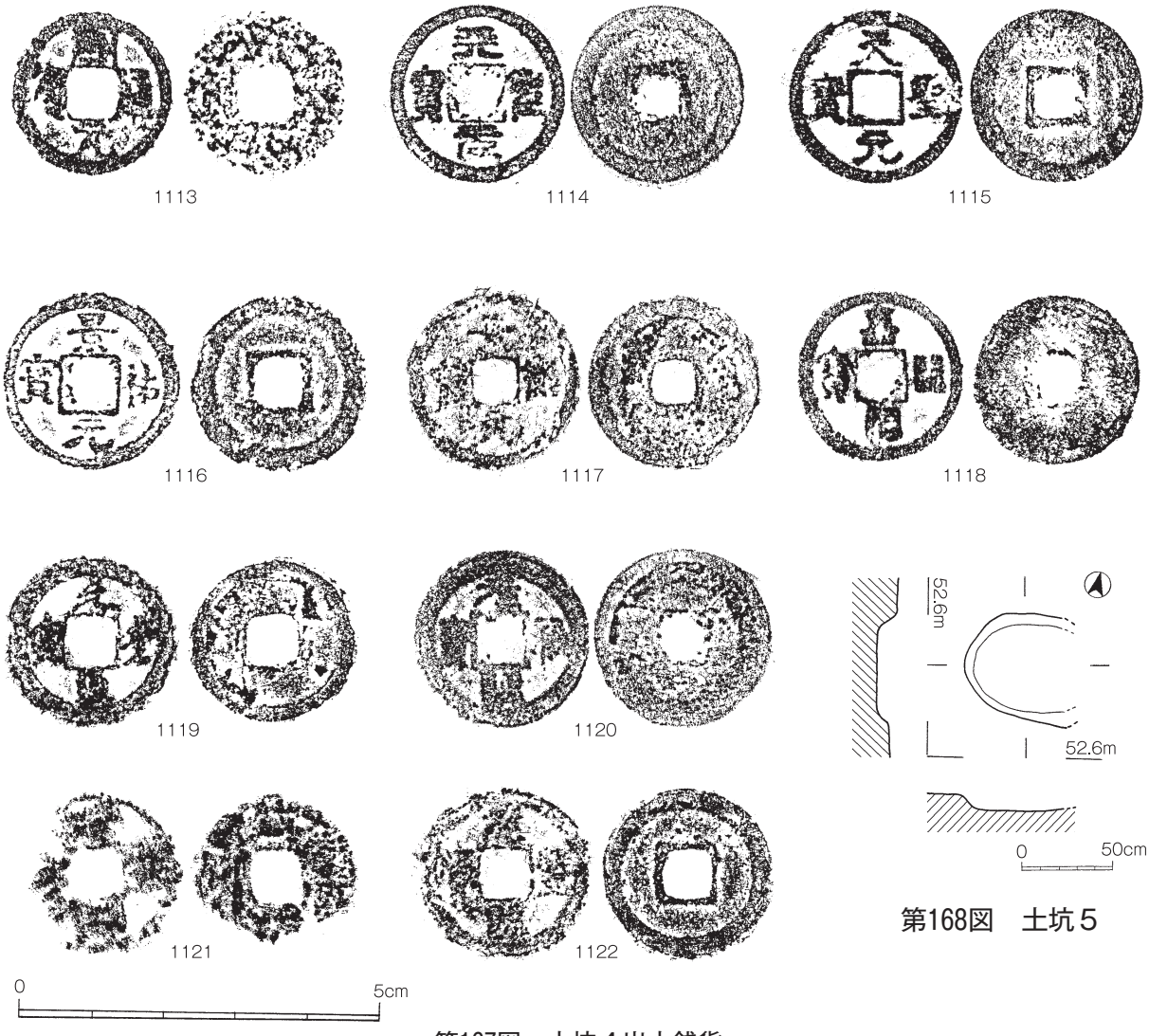
遺物番号	銭貨名	時代	初鋳年	径（cm）	重さ（g）	遺物番号	銭貨名	時代	初鋳年	径（cm）	重さ（g）
1113	開元通寶	唐	621	2.30	1.45	1118	嘉祐通寶	北宋	1034	2.30	3.66
1114	天聖元寶	北宋	1023	2.50	3.39	1119	元豊通寶	北宋	1078	2.30	2.70
1115	天聖元寶	北宋	1023	2.50	3.39	1120	元祐通寶	北宋	1093	2.50	2.70
1116	嘉祐通寶	北宋	1034	2.50	2.79	1121	不　明	—	—	2.40	(1.53)
1117	景祐元寶	北宋	1034	2.40	2.70	1122	不　明	—	—	2.30	2.68



第165図　土坑３及び出土遺物



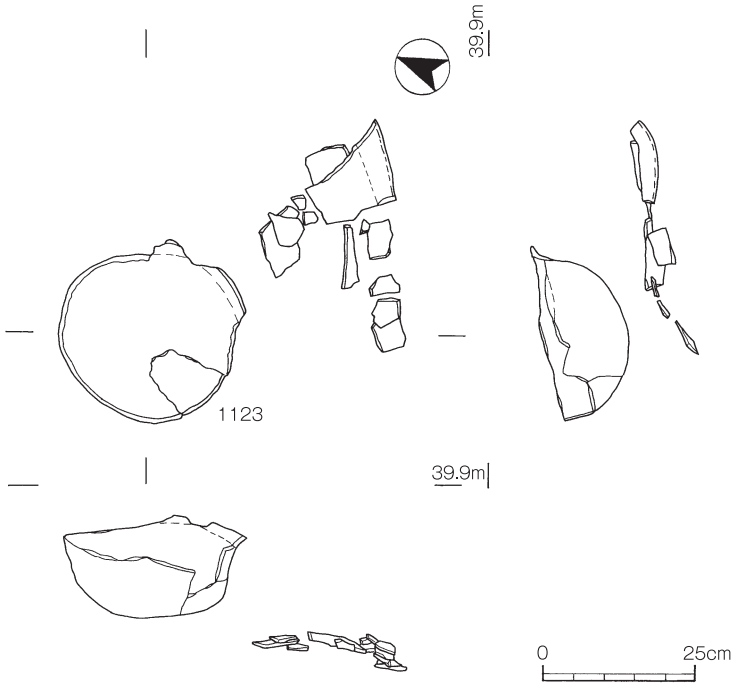
第166図　土坑４及び出土遺物



第167図　土坑４出土銭貨

第168図　土坑５

単独で発見されたことやその状況から，埋納の可能性も考慮し，掘り込み等についても精査を行ったが掘り込み等は確認できなかった。また，遺物内部の土からも遺物などは検出されなかった。ただし，状況等から，埋納の可能性は否めない。



第169図　埋納土師器甕出土状況

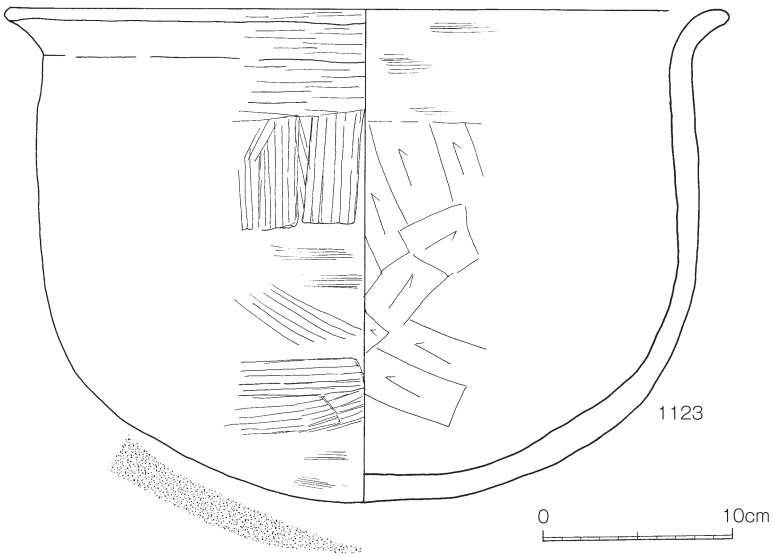
第2節　遺物

1　土師器

器種として甕・坏・埦・皿などある。

・甕（第171図・第172図　1124～1141）

外面がハケナデ・ヘラナデ，内面がヘラケズリで仕上げた甕である。1132のように口縁直径が18cmしかない小型のものから，1128のように31cmある大型のものまである。口縁端近くで外反するものだが，外反する部分が短く逆Ｌ字状になるものと，ゆるやかに外反する「く」の字状のもの，如意状のものとがある。胴部は1130・1138・1141のように長胴形を呈するものと，1128・1140のように鉢形を呈するものがある。底部は丸底になるものと思われる。1141の内面には同心円状当て具の痕跡がみられる。



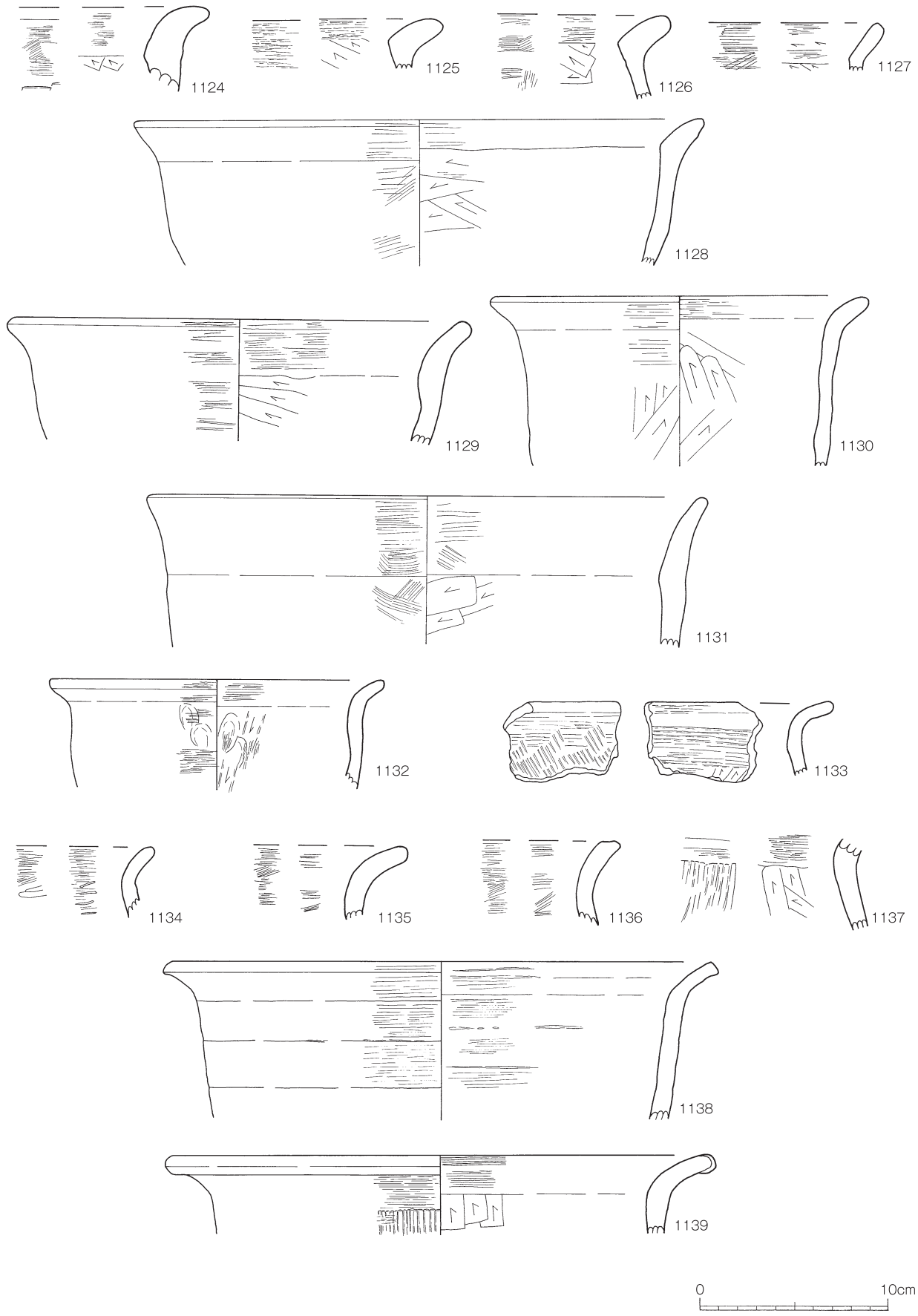
第170図　埋納土師器甕

・坏（第173図　1143～1163）

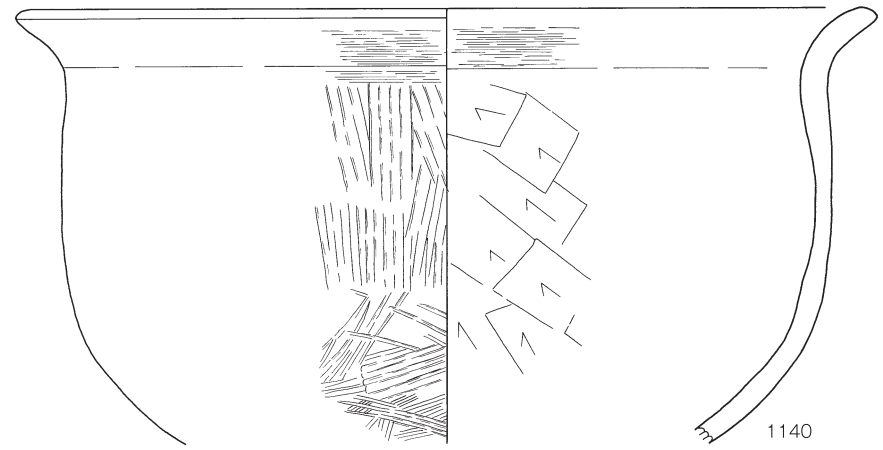
口縁直径が11.6cm～15cm，高さが4.2cm～6.2cm，底部が3.8cm～7.3cmほどの法量をもち，底の切離しはヘラによる。口縁部がやや外へ開いてまっすぐ伸び，丸みをもった底のもの（1143）と，口縁部が外へ開いてまっすぐ伸び，安定した平底のもの（1144～1156），外へやや開いてまっすぐ伸び，充実高台風の厚い平底をもつもの（1157～1161），底部が外へ張り出すもの（1162・1163）などがある。1145の体部外面には「上」の墨書がみられる。1157は口縁直径が13.4cm，高さが6.2cmある深い埦状を呈するもので，底の厚さが分厚い。

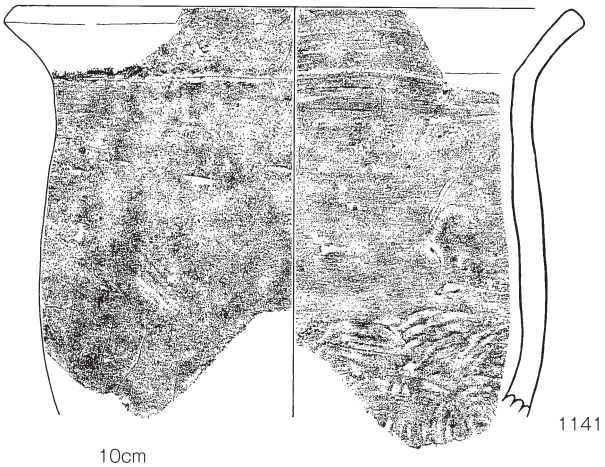
・埦（第174図　1164～1172）

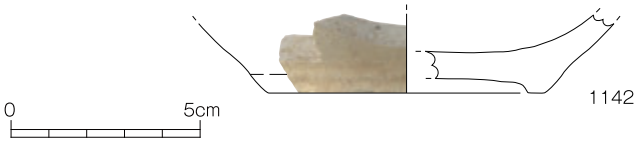
高台付きの埦が出土している。1164は口縁直径が13cm，高さが７cm，高台直径が7.5cmある。



第171図　古代出土遺物（1）







第172図　古代出土遺物（2）

1165は口縁直径が18cmある。1164が丸みをもって立ち上がるのに対して，1165はまっすぐ伸びており，口縁端がやや外反する。高台は「ハ」の字状に踏んばっている。

・皿（第174図　1173～1179）

底部切離しがヘラ切りの小型皿である。口縁はやや内弯ぎみに立ち上がっており，口縁直径が９cm～10cm前後，高さが２cm足らずである。1176は口縁直径が９cmほどの耳皿である。底は体部からすんなり移るものと，体部との間に段を作るものとがある。

２　青磁（第172図　1142）

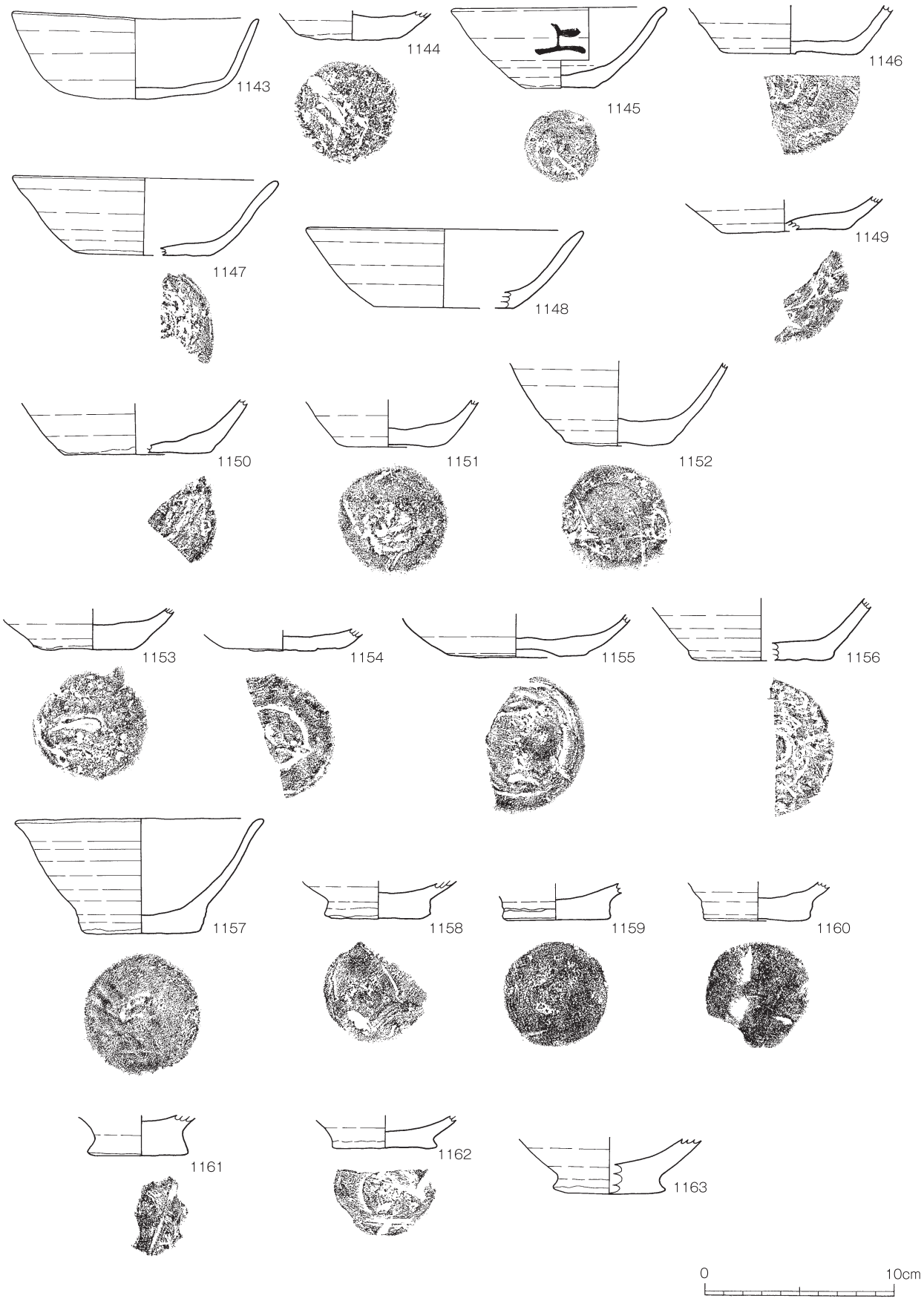
黄緑色を呈する直径が7.5cmの蛇の目高台の青磁碗である。

３　黒色土器

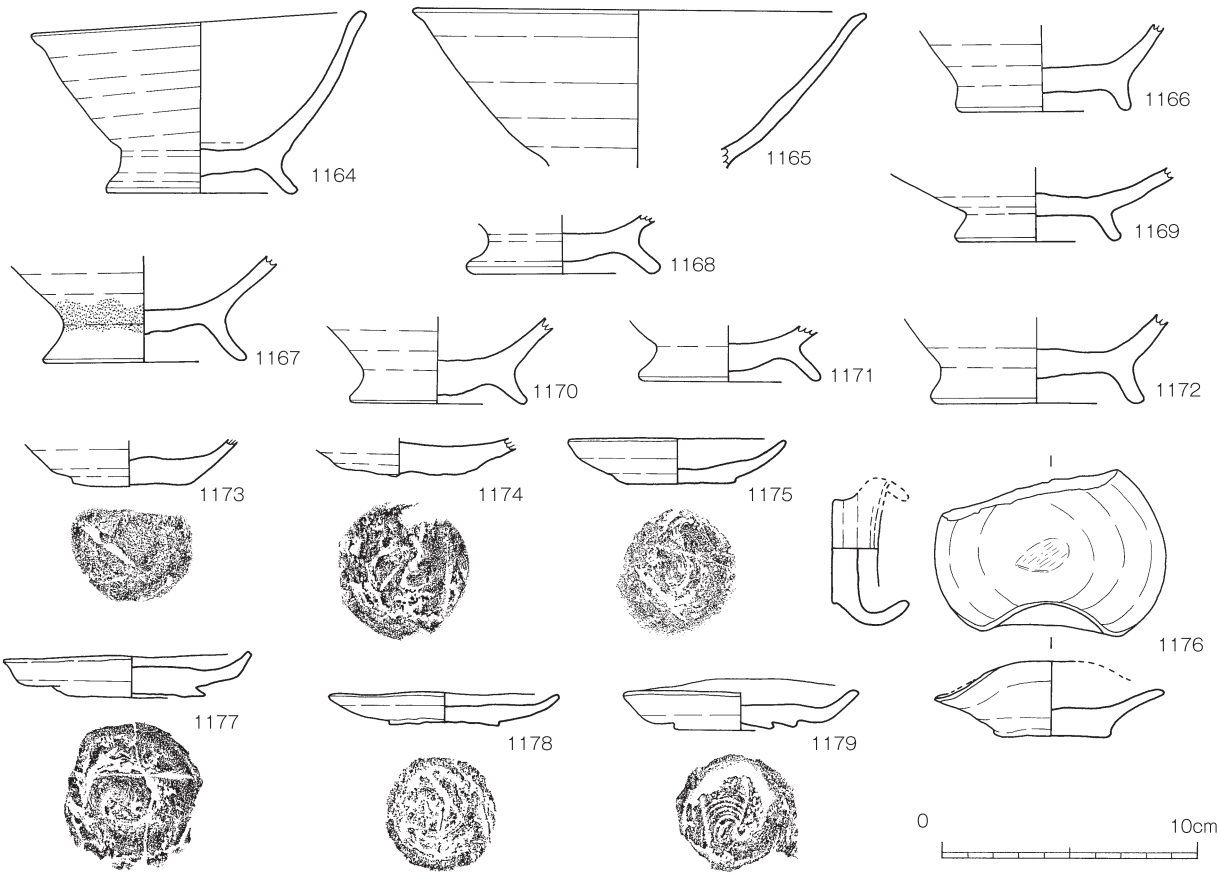
（第175図　1180～1196）

内外とも黒色を呈するもの（1183・1194）と，内側のみ黒いものとがある。1183は口縁直径が17cm，高さが5.7cm，高台直径が７cmある低い埦である。口縁部は端部が外へ反るもので，「ハ」の字状に開き，端部の尖がる低い高台が付いている。1194は外へ開く坏状の器形をしており，「ハ」の字状に開く，端部が丸みをおびた高台が付いている。

内黒土師器には，高台付きの埦と，高台付きの皿，充実高台の埦がある。埦は丸みをもった浅いもので，口縁端部は外反するもの（1182）と，直に立ち上がるもの（1184）とがある。口縁直径は14cmのもの（1182）と，17.5cmのもの（1184）とがある。高台は「ハ」の字状に開いているが，長く伸びる高いものと，低いものとがあり，端部は丸みをもつものと，尖るものとがある。1180の外面には「大」の墨書がみられる。1195は先の尖った直径７cmの低い高台の付く皿である。1196は直径が７cmの円盤貼付の充実高台となる埦で，底は不安定である。底部切離しはヘラ切りである。



第173図　古代出土遺物（3）



第174図　古代出土遺物（4）

4　赤色土器（第176図　1197～1202）

内面のみが赤い内赤土器（1197～1200）と，外面の赤い土器（1201・1202）がある。内赤土器は埦である。直径が小さく，高さの高い器形をし，底から上へ開きながらまっすぐ伸びている。高台は1198や1199のように低いものと，1201のように高いものとがある。1198は端部が丸みをおびており，1199と1201は矩形を呈している。1202は丸みをおびて平たい直径が17cmの底をした鉢で，底から胴部へ向かって開きながらまっすぐ伸びている。

5　土製品（第176図　1203・1204）

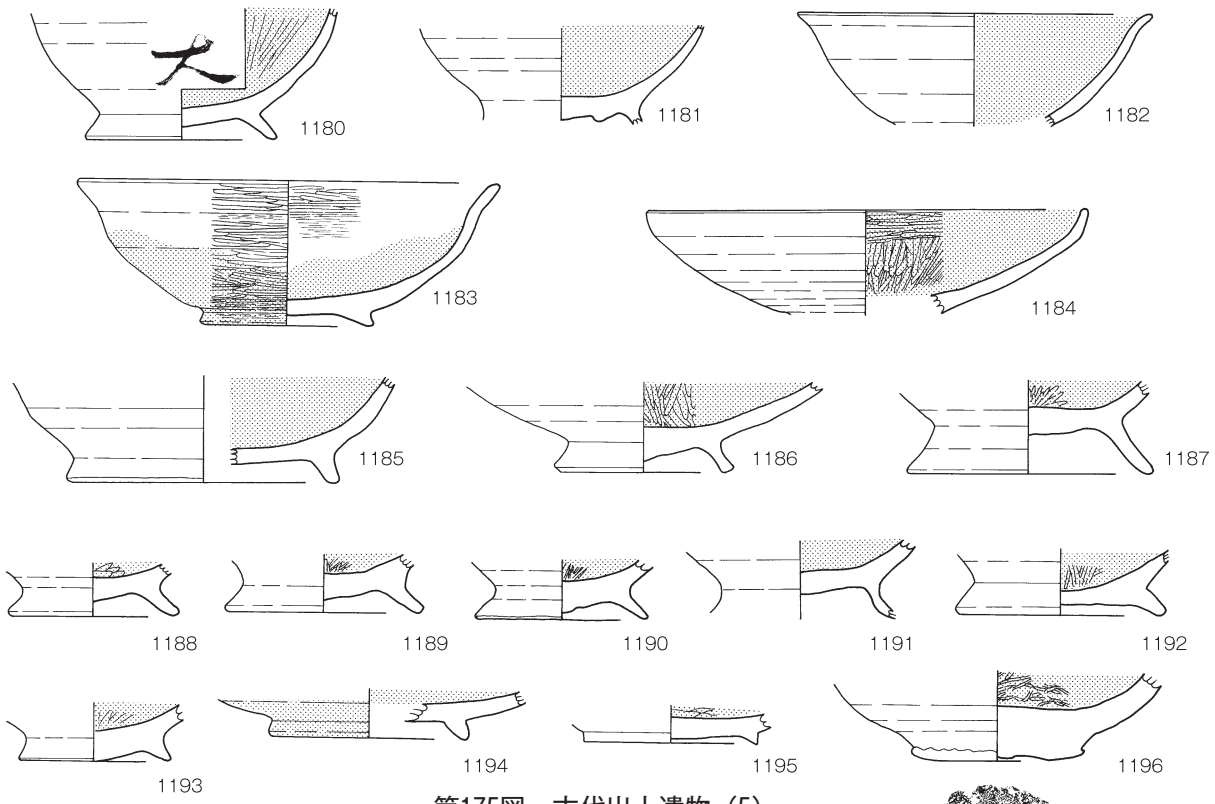
直径が5.5cm，厚さが７㎜ほどの紡錘車が２点出土している。土師質の焼きで，1203は周辺を丁寧に磨いており，中央に直径７㎜の孔が穿たれている。1204は半欠品である。

6　須恵器（第177図～第179図　1205～1253）

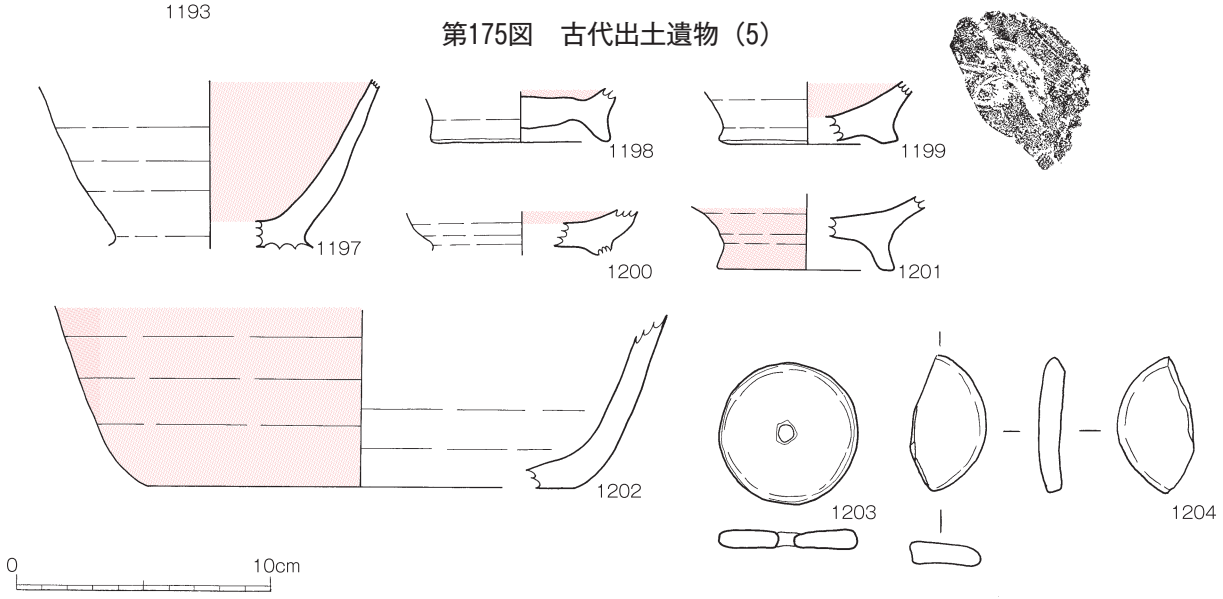
坏蓋・皿・坏身・甕・壷が出ている。

・坏蓋（第177図　1205～1211）

口縁端が一度平たくなって下へ下がる低い蓋（1205）と，端部がすんなり下がるやや高い蓋（1209・1210）がある。1208は直径が18cm，高さが4.8cmある宝珠つまみの蓋で，天井部の厚みは厚い。1209は直径が16cm，高さが２cmの天井部が平らで，口縁部がやや外へ開いてまっすぐ伸びる蓋で，壷の蓋となる可能性もある。1210は直径が18.5cm，高さが4.7cmある断面が矩形を呈するつまみをもつもので，端部は外へふんばるように開いて止まる。



第175図　古代出土遺物（5）



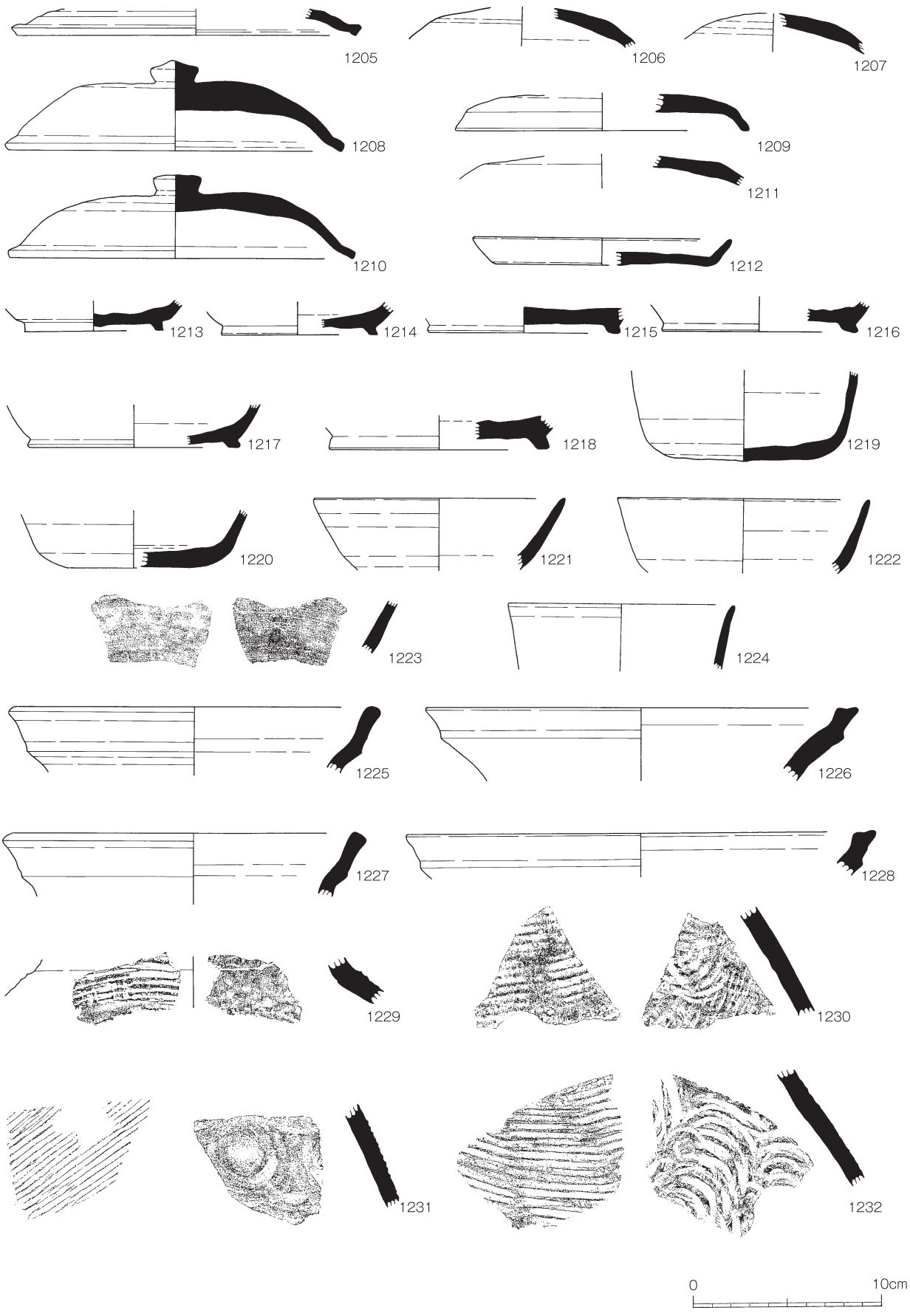
第176図　古代出土遺物（6）

・皿（第177図　1212）

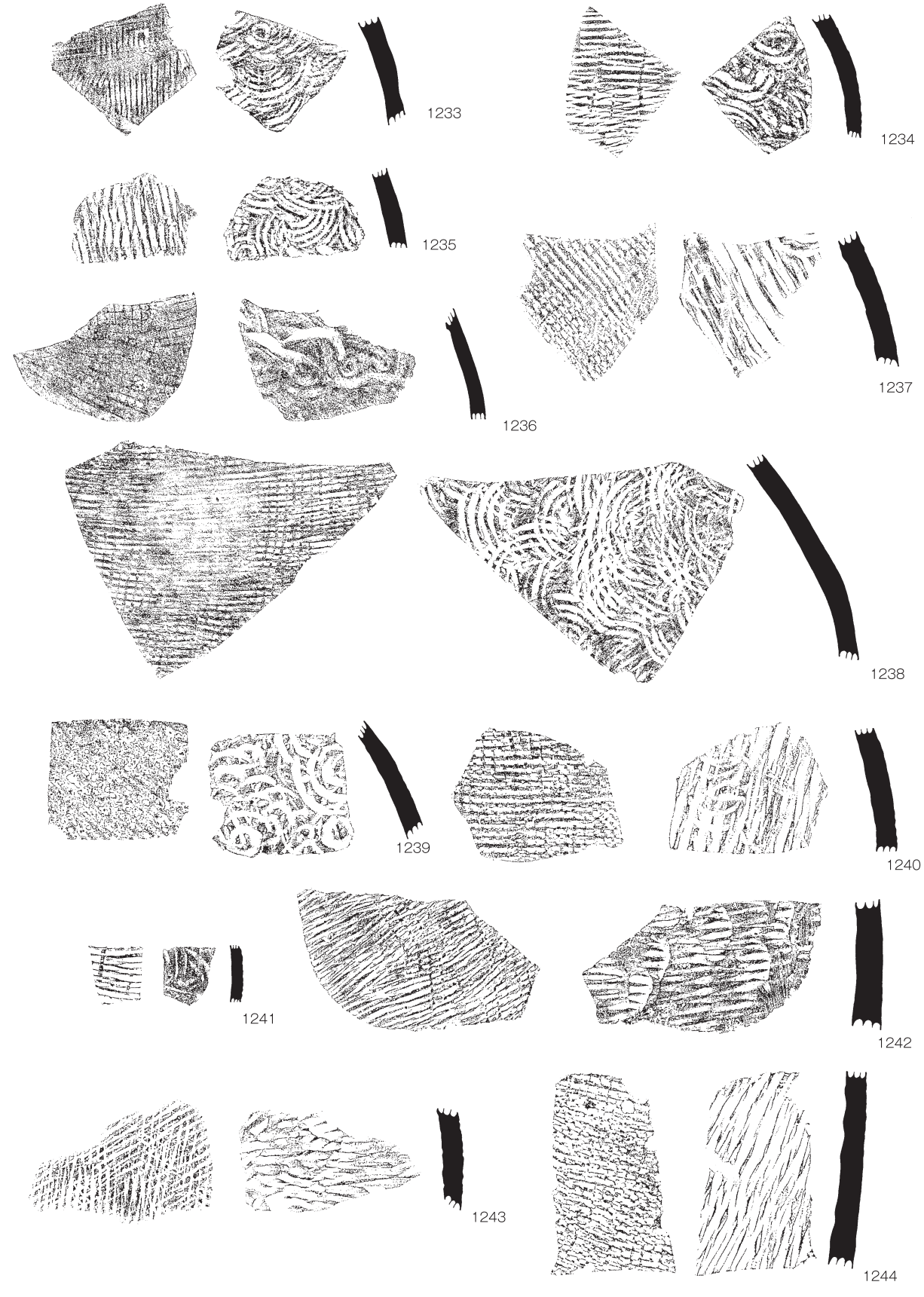
口縁直径が14cm，高さが1.5cm，底部直径が1.5cmの浅い皿で，丸みをもった底から外へ開きながらまっすぐ伸びるものである。

・坏身（第177図　1213～1224）

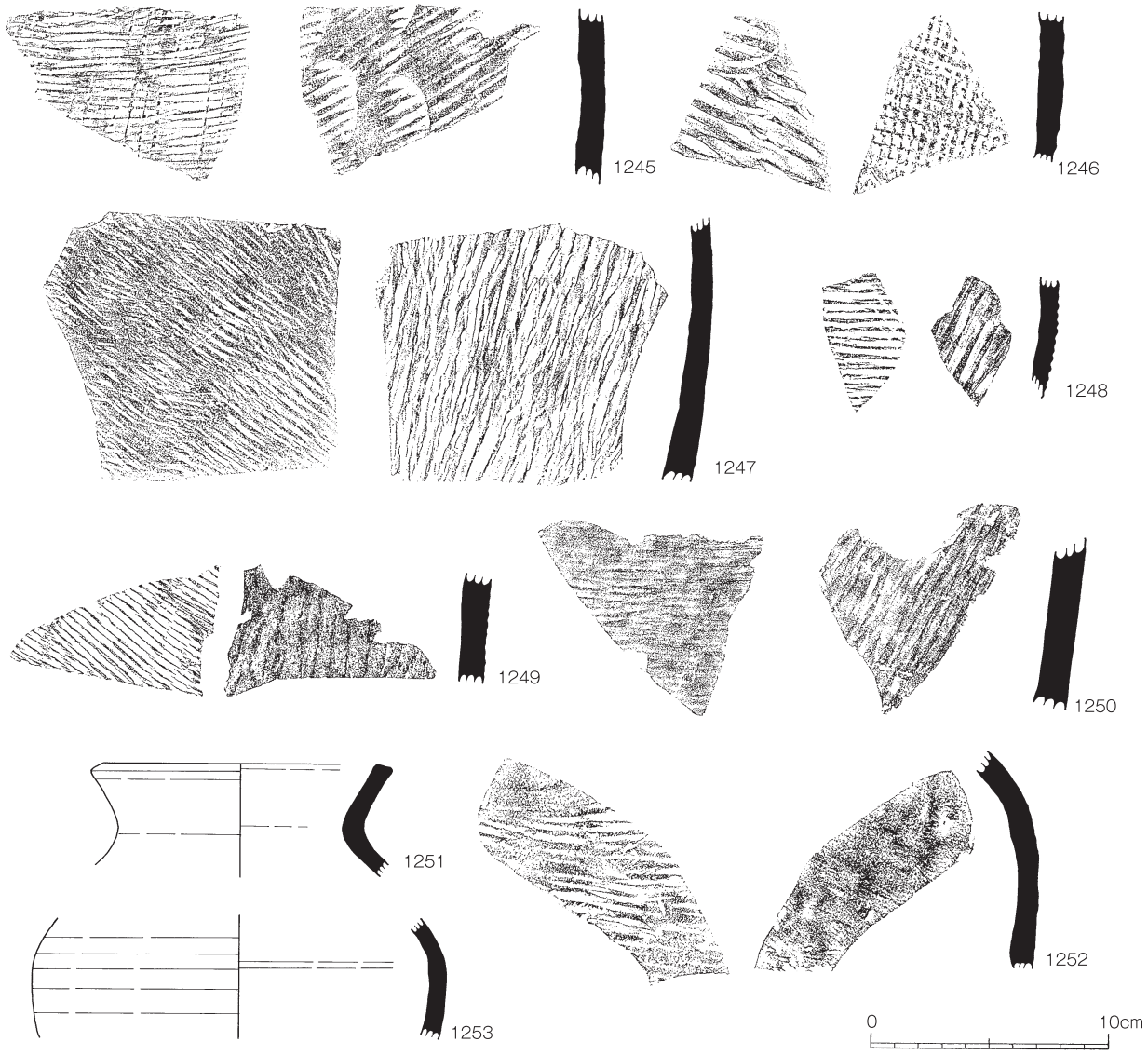
高台付きのもの，丸みをもった底のものとがある。口縁部は丸みをもって直に近く立ち上がるものと外へ開きながらまっすぐ伸びるものとがある。直径は12cmしかないもの（1224）と，14.5cmのもの（1221・1222）とがある。高台は直径が11.5cmほどで，外へふんばり，端部が矩形を呈する。



第177図　古代出土遺物（7）



第178図　古代出土遺物（8）



第179図　古代出土遺物（9）

・**甕**（第177図～第179図　1225～1250）

頸部から外反し，口縁部がさらに外へ反る二重口縁状を呈する。端は丸みをもったもの，矩形を呈するもの，矩形の中央がやや窪むものがあり，直径は18.5cm～25cmある。口縁内面には段をもつ。外面には条痕・長格子・正格子などのタタキがあるが，細かい作りのものが多い。内面には条痕・同心円などの当て具痕があるが，概して細かい。1242・1245の当て具は条痕様のものだが，端は丸みをもっている。1246は一見内外を見間違うようであるが，外面が条痕タタキ，内面の当て具痕が格子である。

・**壷**（第179図　1251～1253）

口縁部は直径が11.5cmあり，頸部から外反するもので，肩部が張り，ややすぼまりながら底部へ移る。外面は条痕タタキを残すものと，ヘラでナデ消したものとがあり，内面は当て具痕をナデ消している。

第Ⅷ章　中世の調査

向椙城跡は，東シナ海を一望できる遠見番山（標高180m）の裾（標高50m前後）に位置し，北側には堂園平遺跡と迫もしくは谷で隔てた所にできた中世の山城である。南東には江口川が隣接して流れ，近隣の人々が『本丸』と呼んでいる曲輪まで約260m，直近では70m程，河口である江口浜まで約1.5㎞ある。向椙城跡からは，東シナ海を望むことができる。このことから海上交通において，重要な要所であったと考える。

北から南方向へ順に，堂園平遺跡との境界側の堀，境界になっている曲輪となる。また北から南へ順に行くと，本書では，向椙城跡の大きな空堀を「空堀１」，その隣の曲輪を「曲輪a」，深く急なＶ字の空堀を「空堀２」，『本丸』の「曲輪１」。その北側にある帯曲輪を「曲輪b」，「曲輪c」。また北から南へ曲輪１から南へ移動していくと，若干低くなった部分を「曲輪２」，幅60m～75m，後世に削平を受けて（以前は曲輪等があったかも知れないが）高さ約10mの崖の下にある曲輪を「曲輪３」と呼称する。

この曲輪３の南から南東の崖部分は，曲輪が延びていたものが後世に削平を受けて現在のように狭くなり絶壁状の崖になったものと思われる。現在は，この部分から３m程度の崖，段々畑，人家，水路，道，田があり，その後，江口川に至る。現在の所どこまで削平を受けたかは明らかではないが，曲輪３から江口川まで70m程である。曲輪３から，南西方向には，東シナ海，江口浜，800m先には伊作田城，振り返れば北東方向800mの所に，鶴丸城が望める。両城を結んだ直線の中央に，向椙城跡が位置する。

現在，向椙城跡の地名は小字で，「上椙」，「中椙」，「下椙」と呼ばれている。中世の発掘状況に当てはめてみると，ちょうど曲輪１が「上椙」，北から南に向かって曲輪２が「中椙」，曲輪３が「下椙」と，重ね合わせることができる。1615年の『一国一城令』の後，近世になって城の役割を終えたと言える。

標高については，調査区内の発掘調査から第181図のようになった。それによると曲輪１・曲輪２ともに53m～51m程，曲輪３は10mほど低く，42m～38.5m程あった。最も高い所でも，曲輪１は53m強，曲輪２は51.5m，曲輪３は41.8mという状況である。

発掘調査は，重機を使って表土剥ぎを行った。人力で包含層の掘り下げ及び遺構の検出を行った。その結果，古代及び中世の包含層であるⅡ層は殆ど残っておらず，Ⅲa層に掘り込まれた遺構の検出を中心に発掘調査を行った。特にⅢa層は，「第Ⅵ章　古墳時代の調査」の中で述べたように，古墳時代，古代，中世の遺構が同一面で検出されるため，その時期区分については苦慮した。

第１節　遺構

遺構については，北側から空堀及び帯曲輪，各曲輪内の施設等について順に述べていくが，土坑，炉跡，中世墓等については，比較検討の観点から，まとめて述べることとする。

（１）曲輪及び空堀（第182図～第184図）

本城の一番大規模な施設が，堂園平遺跡との間にある曲輪と空堀である。発掘調査前の地形が第182図，調査後の地形が第183図・第184図である。

また，帯曲輪及び空堀の断面図が第185図で，その堆積状況とその堆積順については，図中に記した通りである。

帯曲輪及び空堀からは，旧石器から現代にいたるまでの遺物が大量に出土している。そこで，中世に関するもの，縄文の磨石等を再利用したと思われるもの及び時期は異なるものの，採集品としても意味のあるものについて第186図～第192図で掲載した。

・空堀１

断面逆台形で，平均した底面幅は４ｍである。曲輪側の斜面はほぼ垂直で，部分的に縦方向の浅い溝が切られていた。底面は特に造作は見られない。東側は崩落のため斜面の造作はわからない。北側の斜面も特別な造作は確認できなかった。自然地形を利用したものと考えられるが詳細は不明である。曲輪１との比高差は，部分的によってかなりの違いはあるが，Ｈ－30区の部分では，10ｍを越えるものである。

なお，この空堀は現在でも掘り底道として使用されており，第4図のように本城西北側の田園地帯へと続くものであり，中世においても使用されていた可能性もある。

・空堀２

この空堀は，帯曲輪の外側に構築されていた。西側が半分ほど流失している。残存部分を見ると，断面は逆台形で底に平坦面があり，帯曲輪側の縁に浅い溝を切っていたようである。幅は，曲輪側を凹凸させることにより不規則となっており，狭いところで約１ｍ，広いところで約４ｍである。狭いところでは平坦面はほとんどない。空堀１の底面との高低差は1.5m程あり，直接降りられるような造作は全くなかった。投げ弾にでもしたのか，砂岩の円礫が散在していた。

・曲輪ａ

空堀２の外側に構築されたものである。空堀２の底面との高低差は１ｍ程度で，西側が広い。「おたまじゃくし」のような残存形状である。西側は，若干の平坦面があるが細かく抉られた部分が多いため細かい構造は分からないが，空堀１との間に犬走りのような細長い平坦面を２段めぐらせている。曲輪平坦面との高低差は1.6m程度，犬走りと空堀１底面との高低差は1.8m程度である。

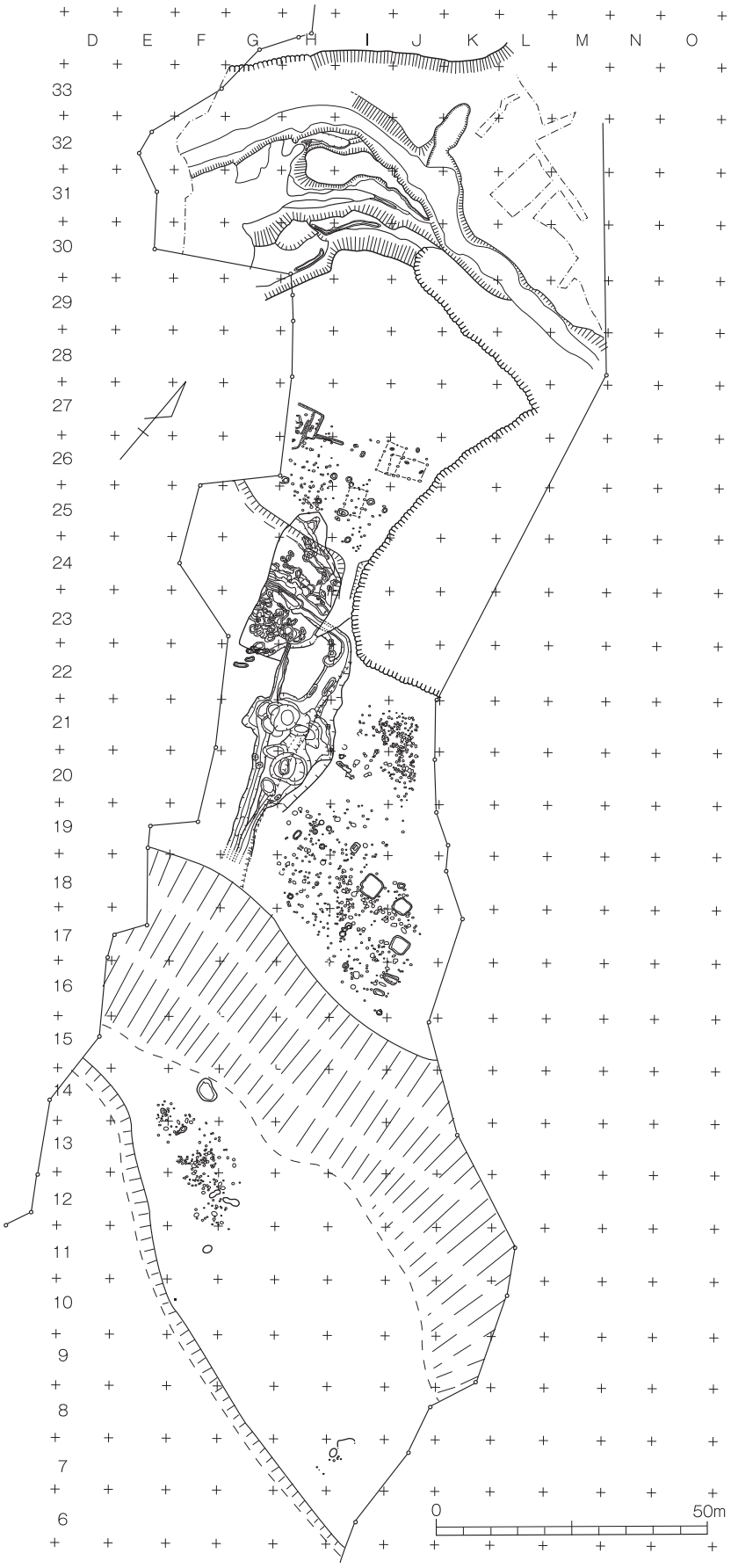
西端はこの犬走りから平坦面に上がれる小路のような造作も見られる。曲輪平坦面で見られる細かい抉れが何らかの遺構であったことも可能性として想定できるが，具体的には明らかにできなかった。東側は平坦面がほとんどなく，断続的に凹凸がある。この部分は内側の空堀２にやや広い平坦面が構築されていることから，この部分については土塁的な機能を想定する方が妥当かもしれない。曲輪上端と空堀１底面との高低差は２ｍを超える。

・曲輪ｂ

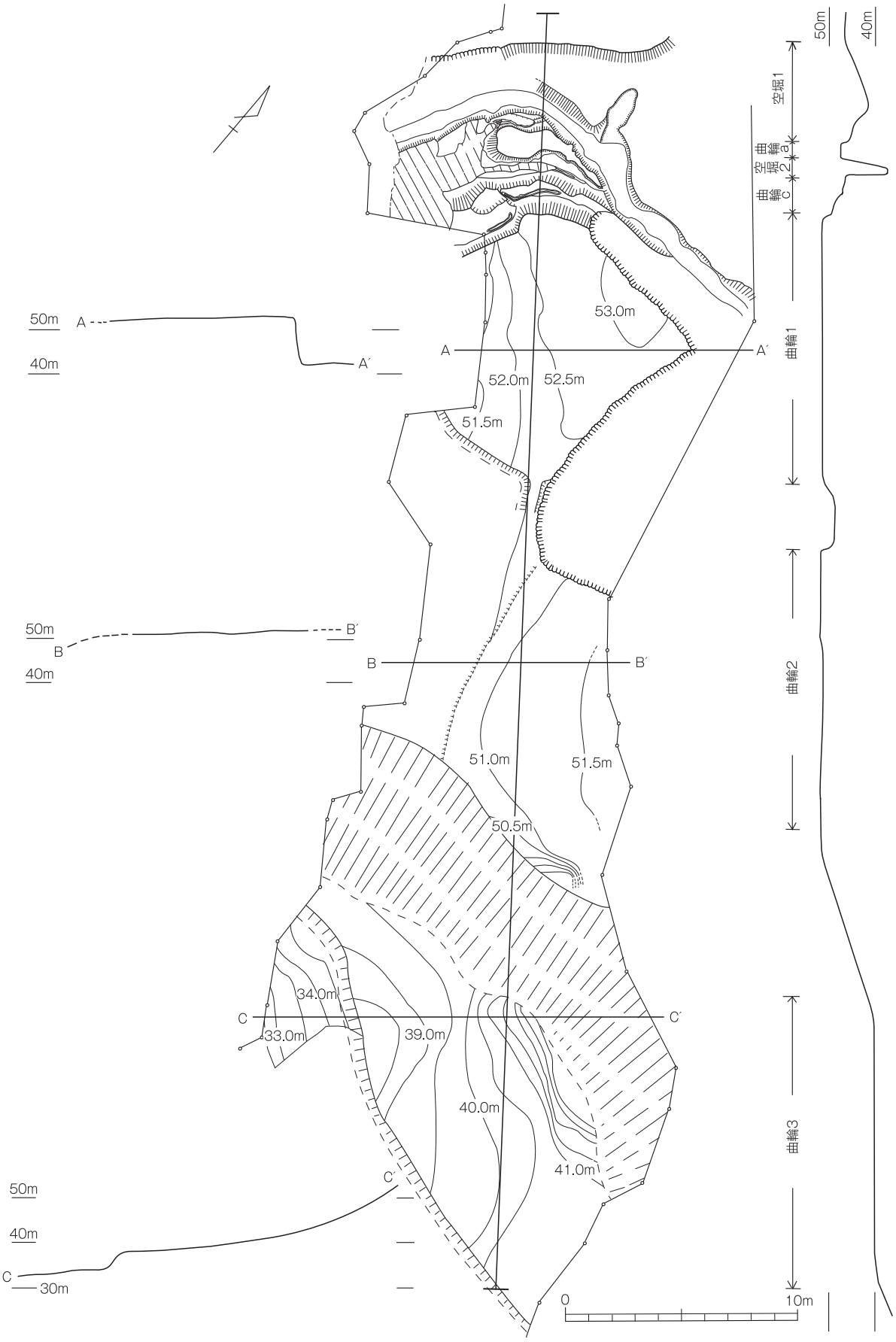
調査区内では，帯曲輪が２段に高さをやや違えて構築されていた。より主郭に近い（より標高の高い）曲輪は幅が６ｍ～７ｍ，若干空堀側に傾斜するがほぼ平坦といえる。主郭側の縁に浅い溝を部分的に設けている。空堀側には何の造作も認めなかった。調査区外に続くと想定される。

・帯曲輪ｃ

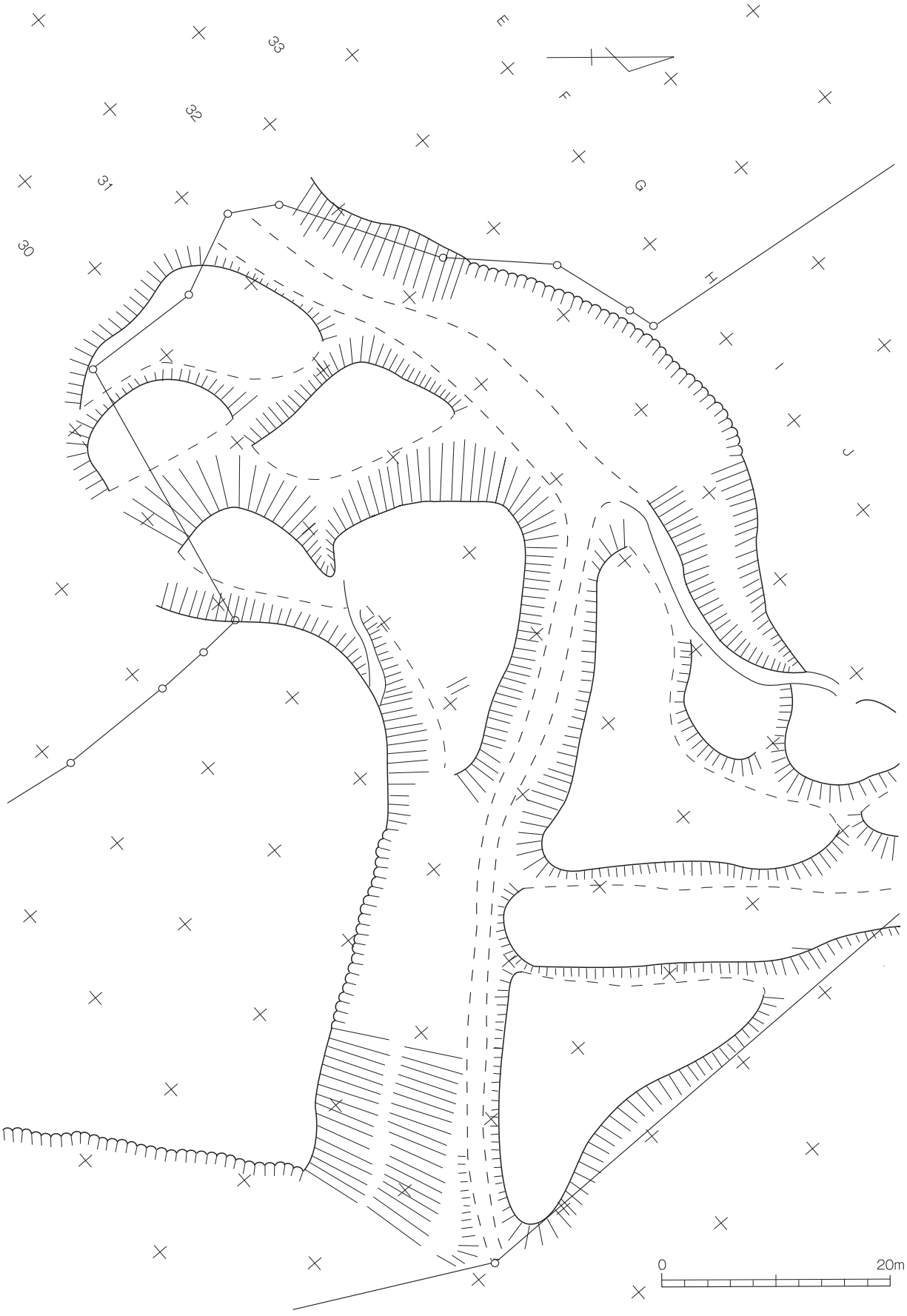
曲輪ｂの下に構築されていた。幅が約３ｍ，曲輪ｂより狭いものの平坦面を有する帯曲輪である。同じく主郭側の縁に浅い溝を設けていて，こちらの方が長く遺っていた。空堀側には造作は



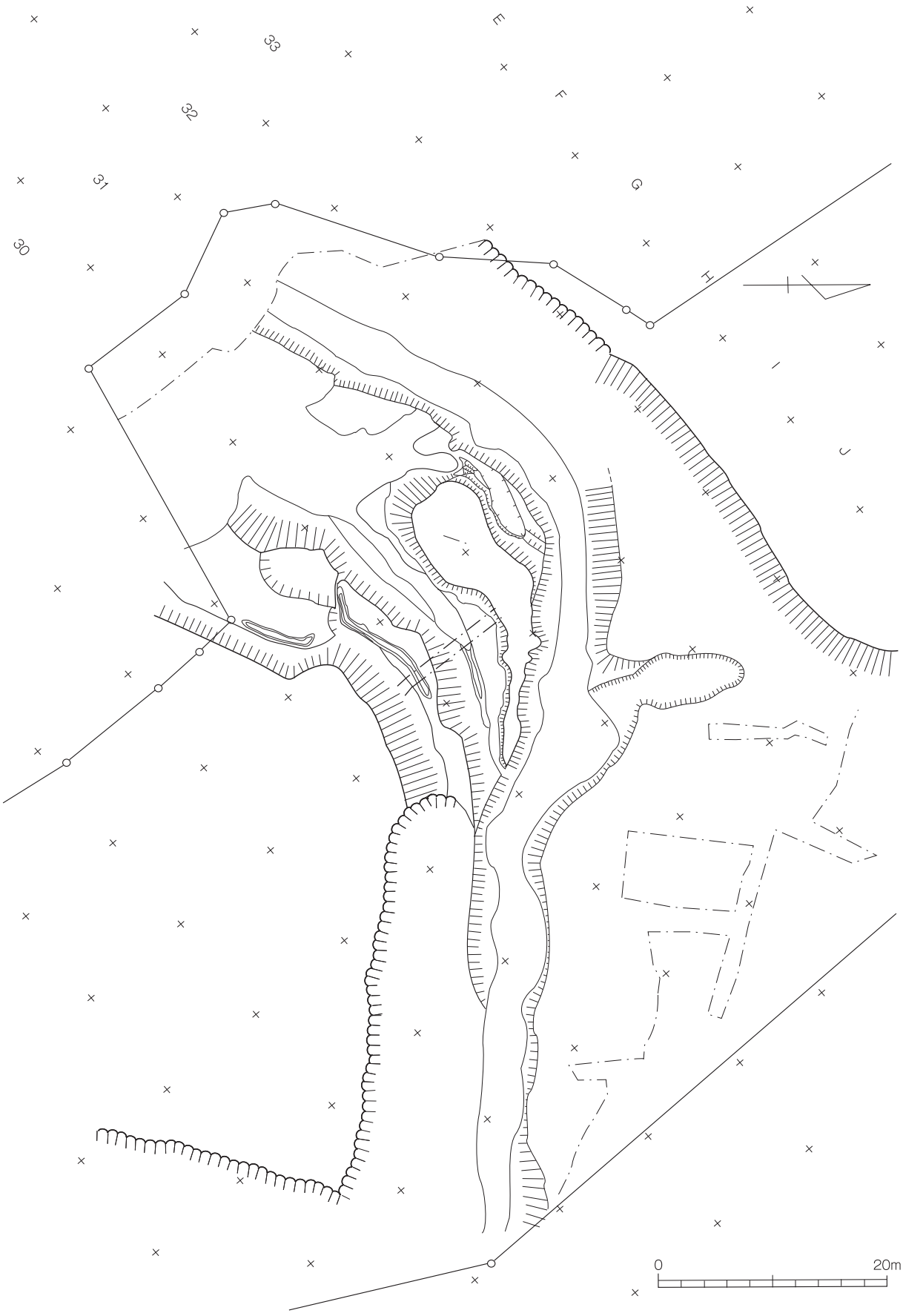
第180図　中世遺構配置図



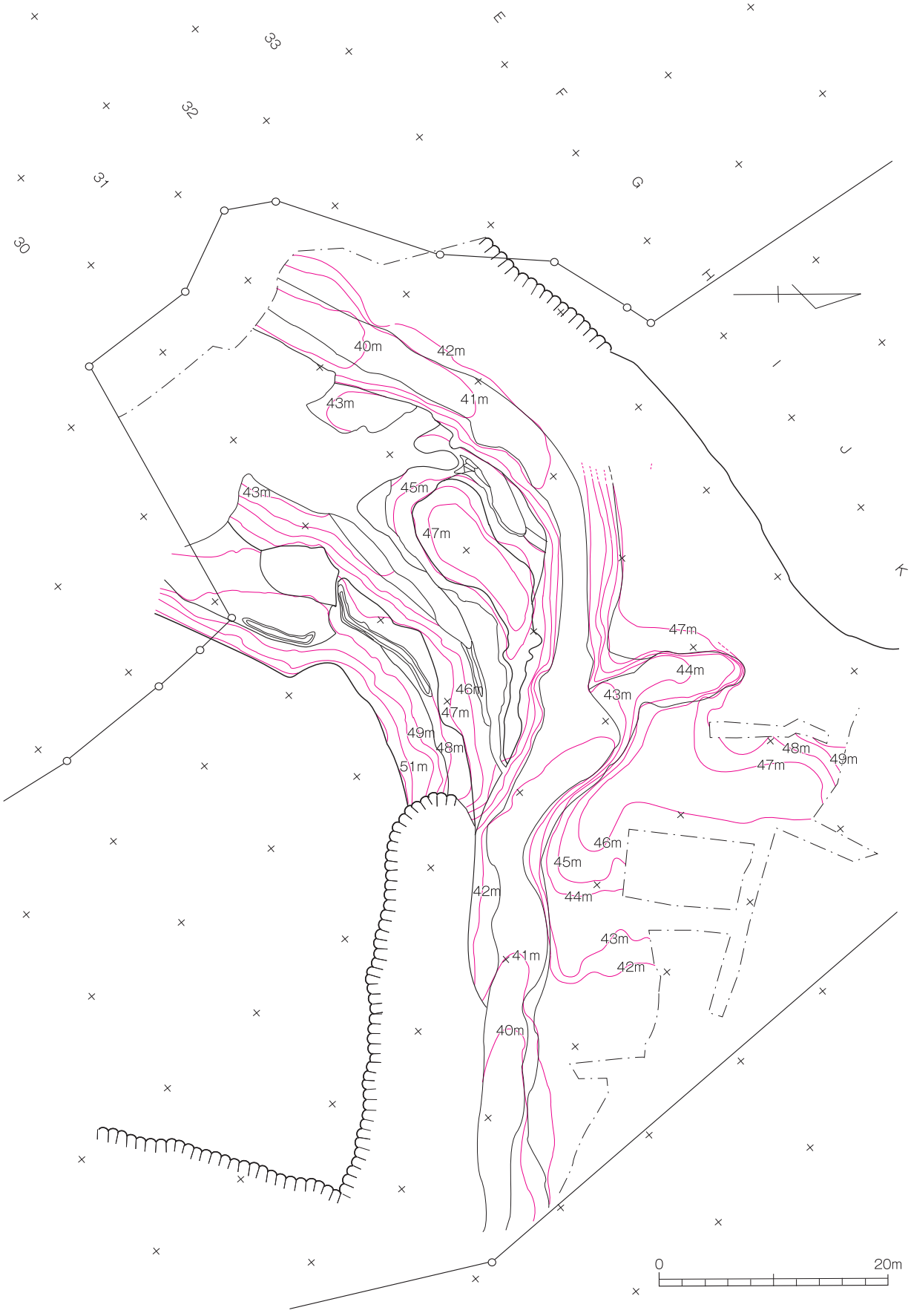
第181図　向栢城跡地形図及び横断・縦断面図



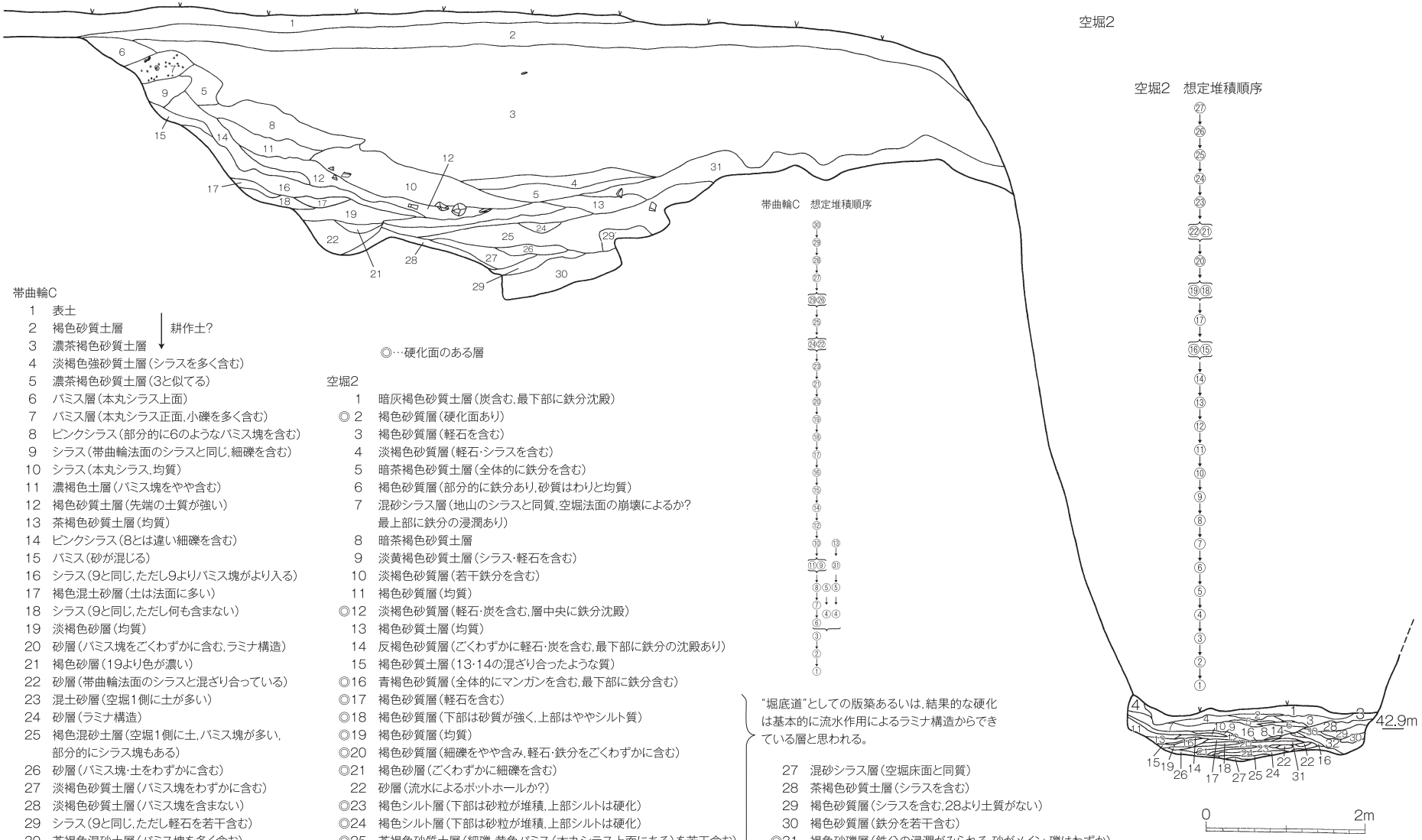
第182図　発掘調査前空堀及び帯曲輪等



第183図　発掘調査後空堀及び帯曲輪等



第184図　発掘調査後空堀及び帯曲輪等コンタ図



帯曲輪C

1 表土
2 褐色砂質土層 ↓ 耕作土?
3 濃茶褐色砂質土層
4 淡褐色強砂質土層(シラスを多く含む)
5 濃茶褐色砂質土層(3と似てる)
6 バミス層(本丸シラス上面)
7 バミス層(本丸シラス正面,小礫を多く含む)
8 ピンクシラス(部分的に6のようなバミス塊を含む)
9 シラス(帯曲輪法面のシラスと同じ,細礫を含む)
10 シラス(本丸シラス,均質)
11 濃褐色土層(バミス塊をやや含む)
12 褐色砂質土層(先端の土質が強い)
13 茶褐色砂質土層(均質)
14 ピンクシラス(8とは違い細礫を含む)
15 バミス(砂が混じる)
16 シラス(9と同じ,ただし9よりバミス塊がより入る)
17 褐色混土砂層(土は法面に多い)
18 シラス(9と同じ,ただし何も含まない)
19 淡褐色砂層(均質)
20 砂層(バミス塊をごくわずかに含む,ラミナ構造)
21 褐色砂層(19より色が濃い)
22 砂層(帯曲輪法面のシラスと混ざり合っている)
23 混土砂層(空堀1側に土が多い)
24 砂層(ラミナ構造)
25 褐色混砂土層(空堀1側に土,バミス塊が多い,部分的にシラス塊もある)
26 砂層(バミス塊・土をわずかに含む)
27 淡褐色砂質土層(バミス塊をわずかに含む)
28 淡褐色砂質土層(バミス塊を含まない)
29 シラス(9と同じ,ただし軽石を若干含む)
30 茶褐色混砂土層(バミス塊を多く含む)
31 シラス(3の浸潤がみられる)

◎…硬化面のある層

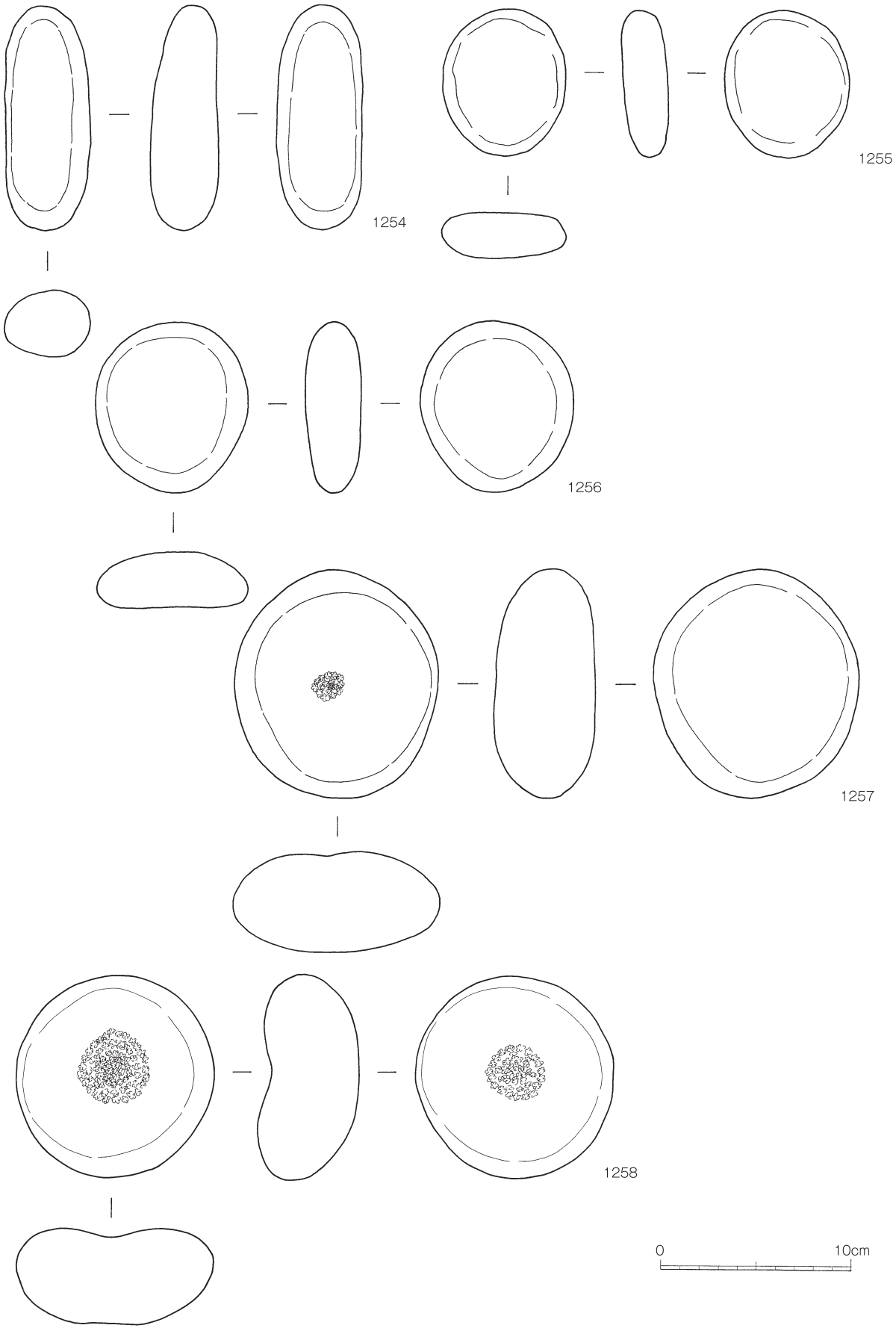
空堀2

1 暗灰褐色砂質土層(炭含む,最下部に鉄分沈殿)
◎2 褐色砂質層(硬化面あり)
3 褐色砂質層(軽石を含む)
4 淡褐色砂質層(軽石・シラスを含む)
5 暗茶褐色砂質土層(全体的に鉄分を含む)
6 褐色砂質層(部分的に鉄分あり,砂質はわりと均質)
7 混砂シラス層(地山のシラスと同質,空堀法面の崩壊によるか?最上部に鉄分の浸潤あり)
8 暗茶褐色砂質土層
9 淡黄褐色砂質土層(シラス・軽石を含む)
10 淡褐色砂質層(若干鉄分を含む)
11 褐色砂質層(均質)
◎12 淡褐色砂質層(軽石・炭を含む,層中央に鉄分沈殿)
13 褐色砂質土層(均質)
14 反褐色砂質層(ごくわずかに軽石・炭を含む,最下部に鉄分の沈殿あり)
15 褐色砂質土層(13・14の混ざり合ったような質)
◎16 青褐色砂質層(全体的にマンガンを含む,最下部に鉄分含む)
◎17 褐色砂質層(軽石を含む)
◎18 褐色砂質層(下部は砂質が強く,上部はややシルト質)
◎19 褐色砂質層(均質)
◎20 褐色砂質層(細礫をやや含み,軽石・鉄分をごくわずかに含む)
◎21 褐色砂層(ごくわずかに細礫を含む)
22 砂層(流水によるポットホールか?)
◎23 褐色シルト層(下部は砂粒が堆積,上部シルトは硬化)
◎24 褐色シルト層(下部は砂粒が堆積,上部シルトは硬化)
◎25 茶褐色砂質土層(細礫・黄色バミス(本丸シラス上面にある)を若干含む)
◎26 褐色シルト層(23・24と同じ,シルト・砂粒の混じりがより強い)

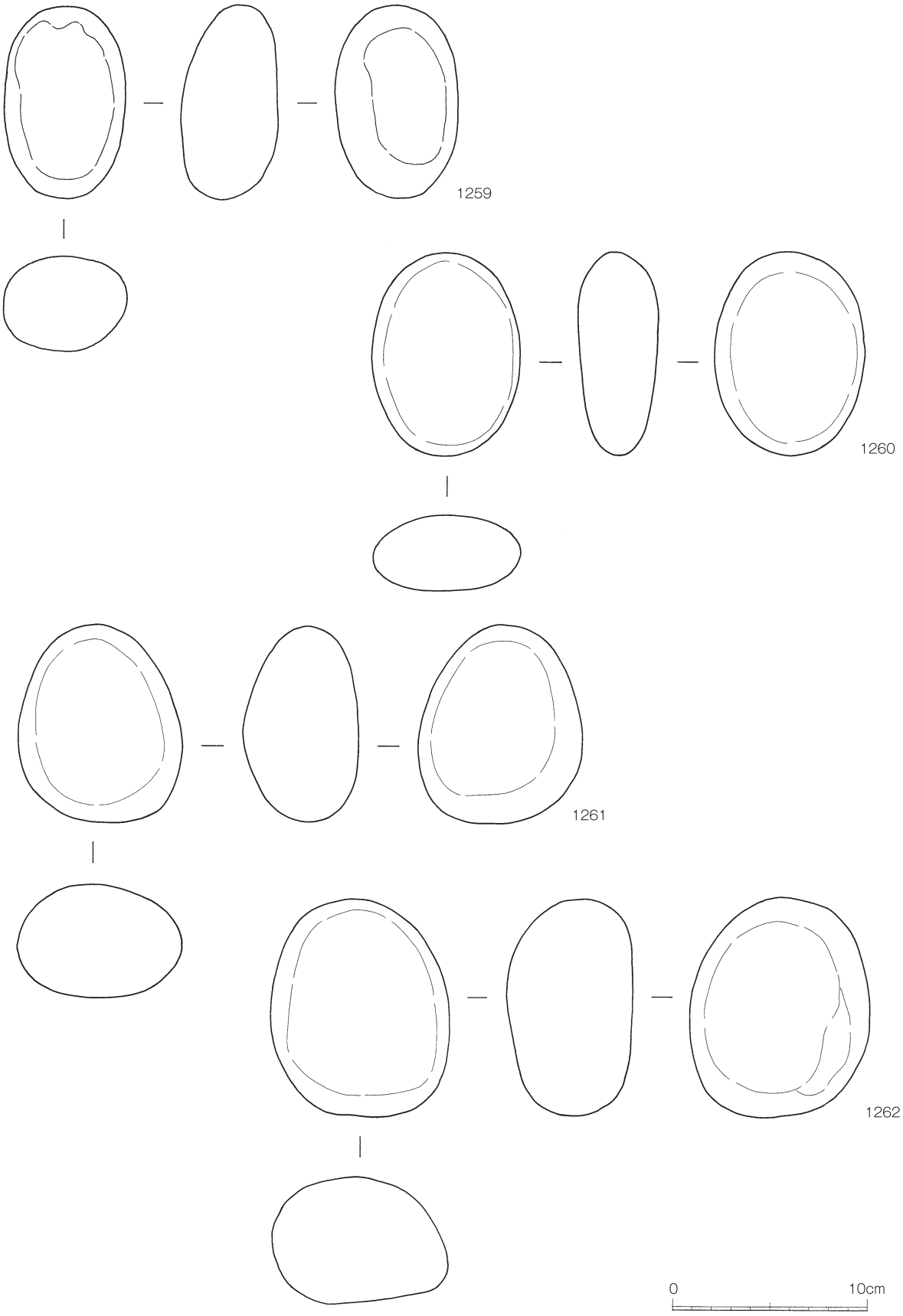
"堀底道"としての版築あるいは,結果的な硬化は基本的に流水作用によるラミナ構造からできている層と思われる。

27 混砂シラス層(空堀床面と同質)
28 茶褐色砂質土層(シラスを含む)
29 褐色砂質層(シラスを含む,28より土質がない)
30 褐色砂質層(鉄分を若干含む)
◎31 褐色砂礫層(鉄分の浸潤がみられる,砂がメイン,礫はわずか)
32 茶褐色砂質土層(均質)

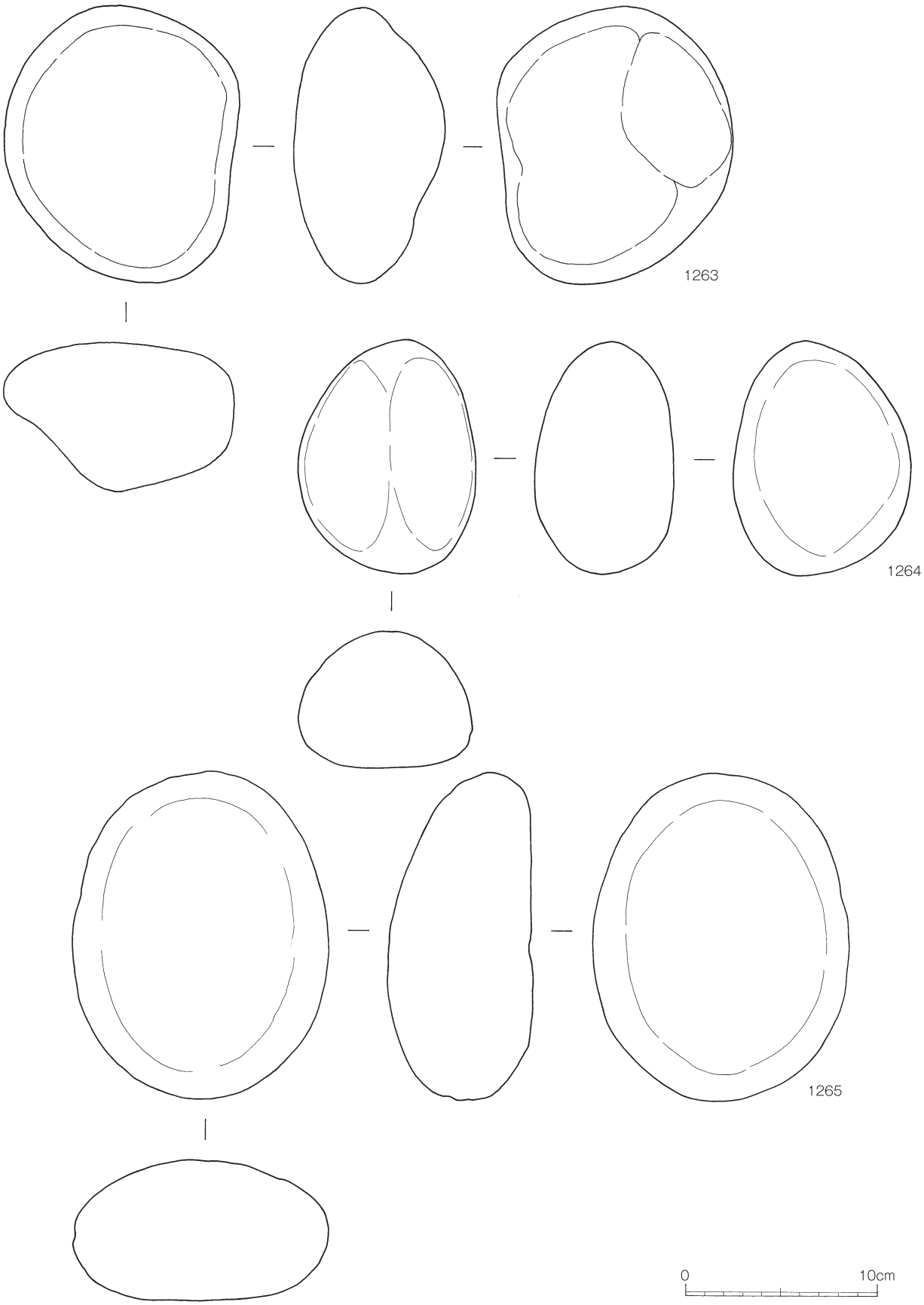
第185図　帯曲輪ｃ及び空堀２断面図



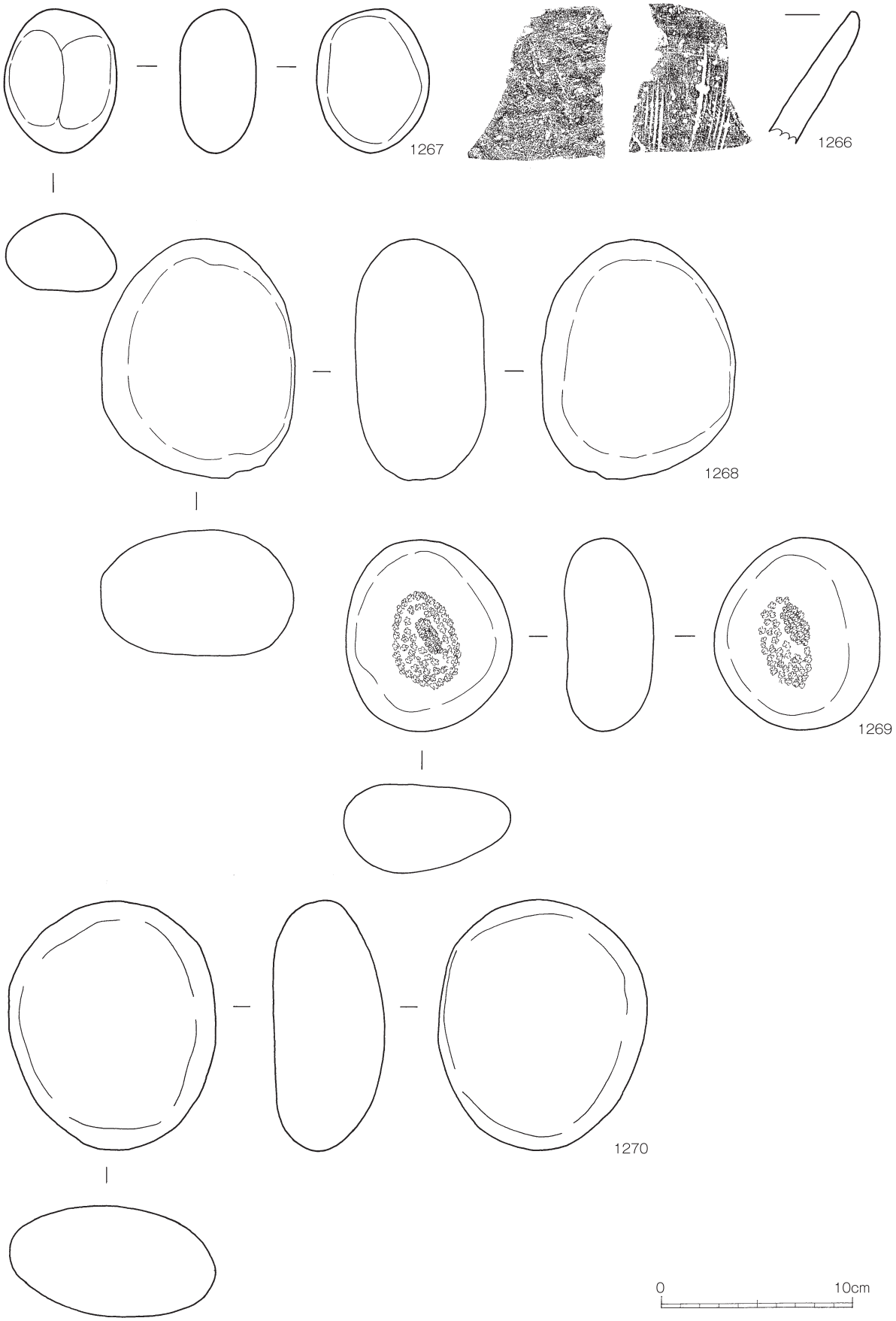
第186図　空堀１出土遺物（1）



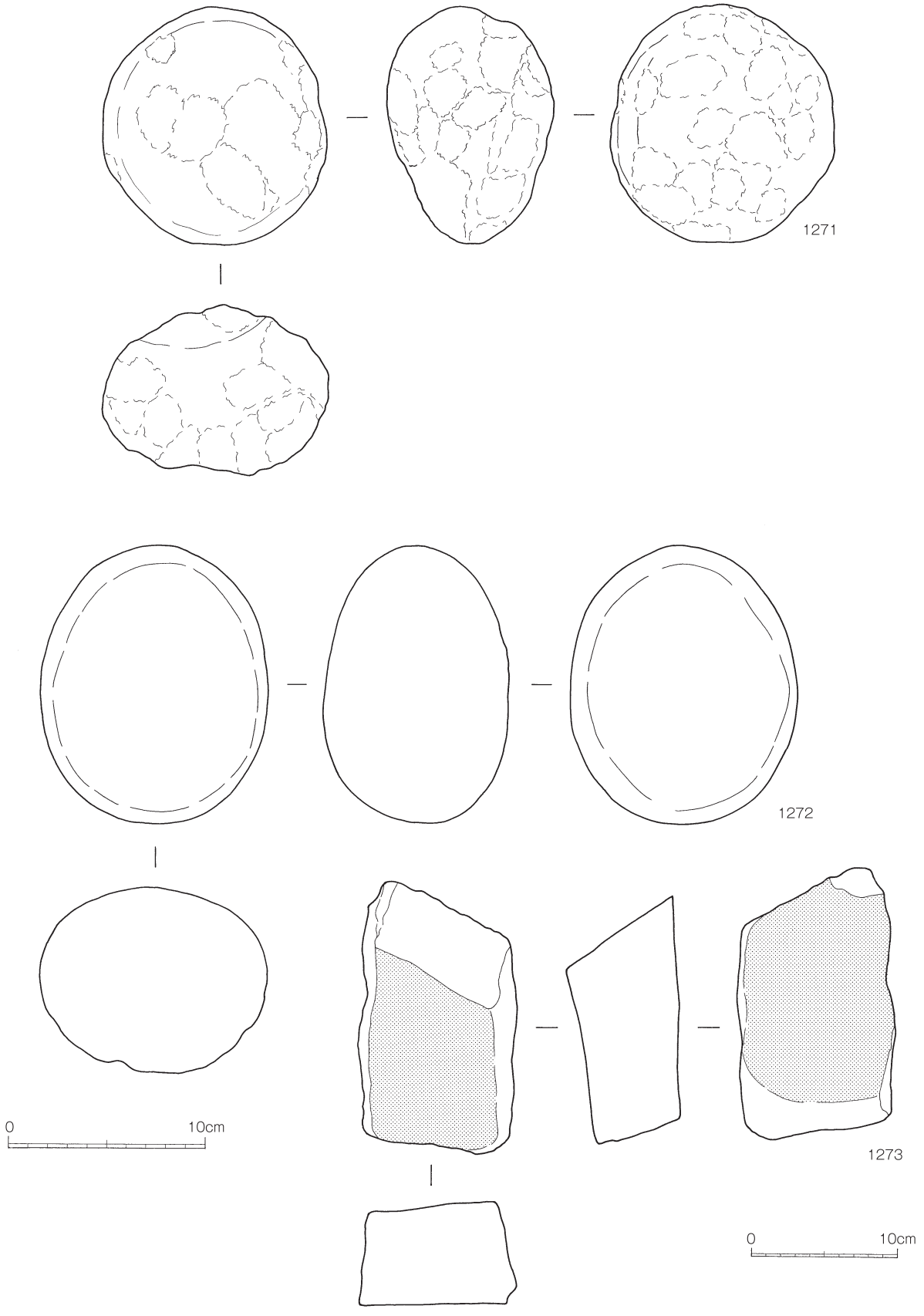
第187図　空堀１出土遺物（2）



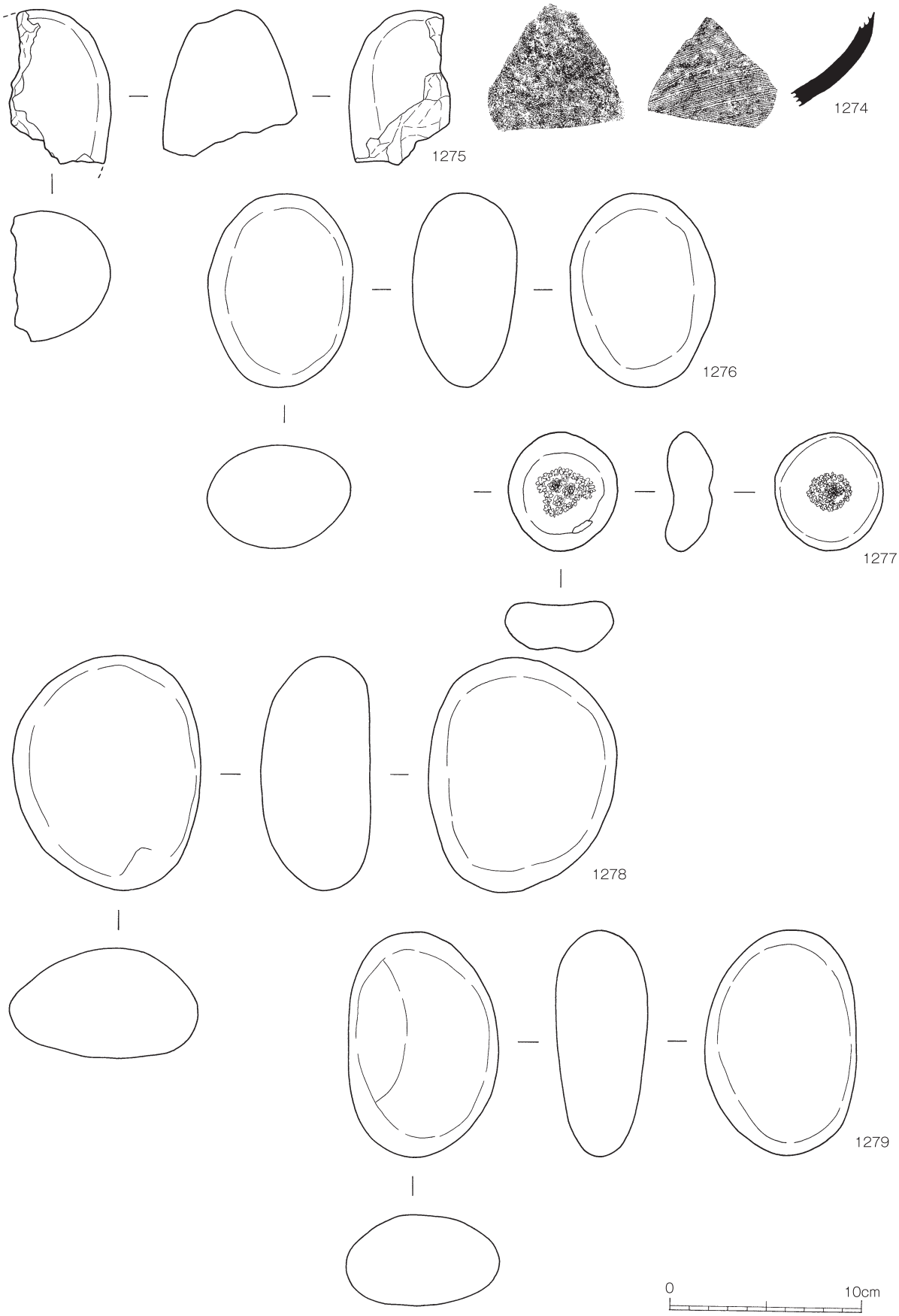
第188図　空堀１出土遺物（3）



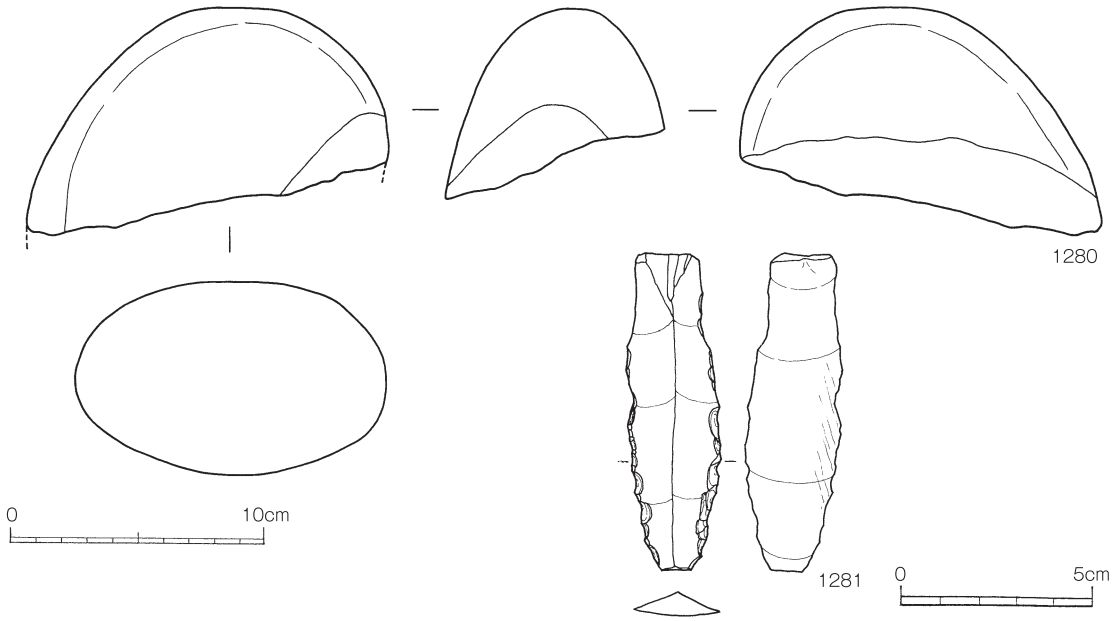
第189図　曲輪a出土遺物（1）



第190図　曲輪a出土遺物（2）



第191図　曲輪b出土遺物



第192図　曲輪C出土遺物

認められなかった。東側は崩落のため，全容はわからない。

・出土遺物（第186図～第192図）

1254～1265は，空堀１から出土したものである。1254～1262は，磨石や凹石などの転用品と考えられる。ただし，転用品だけでなく，流入品も含まれている可能性もある。1263～1265は，その大きさが小児頭大程度のものであり，投弾として使用された可能性の高いものである。

第189図・第190図は，曲輪ａからの出土遺物である。1266は，土師質の擂鉢で，精製された粘土を用い，内面に数条の条線が見られる。1267と1269は，本来縄文の石器であったと思われる，磨石と凹石である。1270～1272は投弾と思われる。1273は，表と裏に擦面が観察されることから，砥石の一部と考えられる。

第191図は，曲輪ｂからの出土遺物である。1275～1277は本来縄文の石器であったと思われる，磨石と凹石である。1278・1279は，その大きさと表面が荒いことから，投弾と考えられる。1274は，中世須恵器で，内面にハケ目を有するものである。

第192図は，曲輪ｃから出土した遺物である。1280は，欠損品であるが残存部分から考えるとかなり大き目の投弾だった可能性が高い。1281は硬質頁岩と思われる石質で，片面は主要剥離面を残し，両側縁部に鋸歯状の調整を施すもので，旧石器時代の遺物であり，桑波田武士氏の提唱している「岩清水型削器」である。

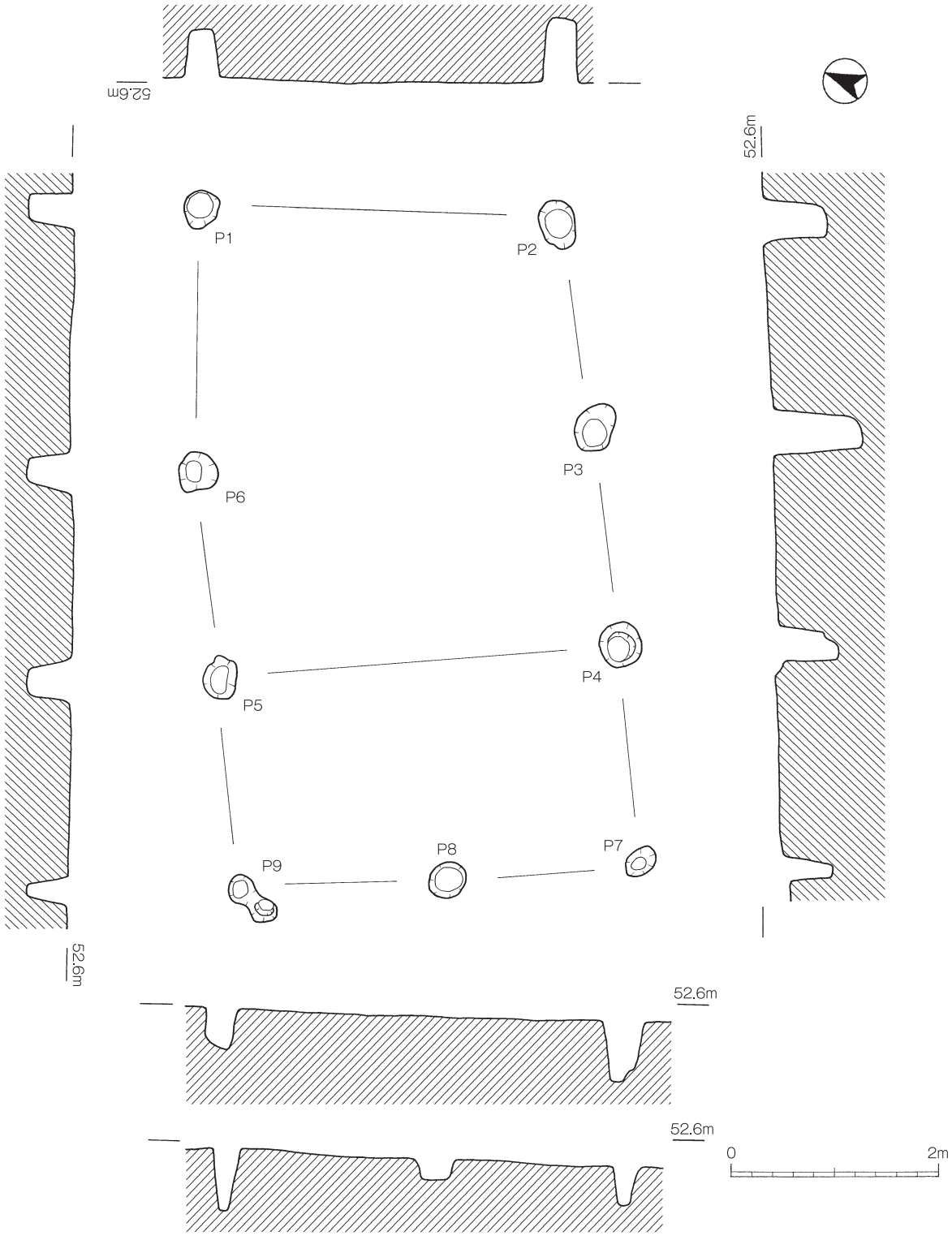
（２）曲輪１（第193図）

曲輪１は，現在でも本丸であったという言い伝えがあった曲輪である。以前，大規模なシラスの採取により西側は消失している。この曲輪１は，中央部分には，遺構が集中するがそれより北側から空堀までの間には，中世と思われる遺構が存在しないことから，近現代において削平されたものと思われる。

曲輪１からは，３軒の掘立柱建物跡と多数のピット及び西側に性格不明な遺構が検出された。また，曲輪１南端から曲輪２にかけて，大規模な土坑群及び空堀等が検出されている。以下，これらの施設及び出土遺物について順に述べていく。



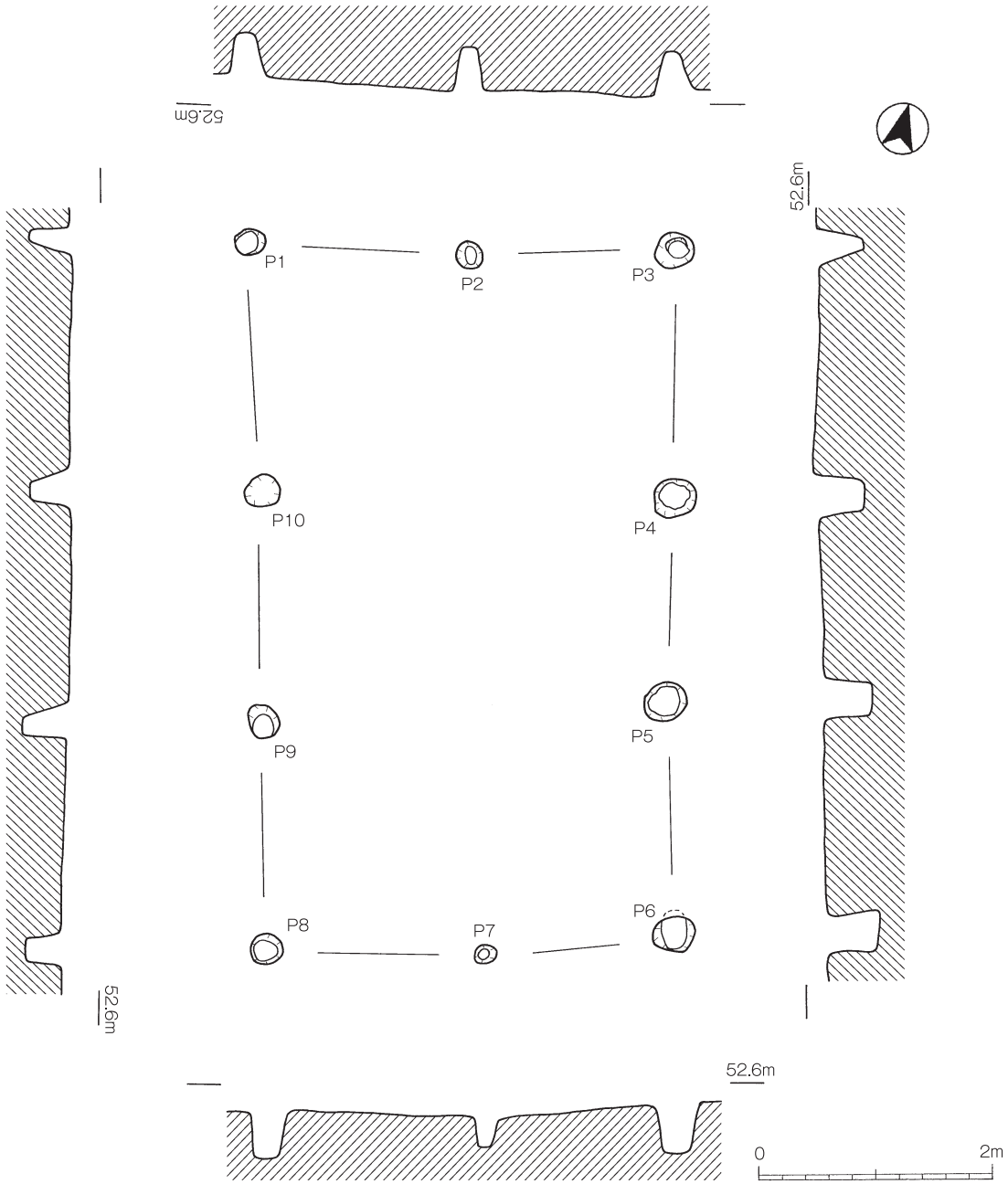
第193図　曲輪１遺構配置図



第194図　掘立柱建物跡１

・掘立柱建物跡

向椿城跡から，中世に属するものとして３棟の掘立柱建物跡が検出された。３棟とも，標高約50mの本丸にあたる曲輪１に位置している。掘立柱建物跡１と掘立柱建物跡２は，遺構の切り合いから時期的差が考えられる。また，掘立柱建物跡１のみは庇を有するものである。各建物の計



第195図　掘立柱建物跡２

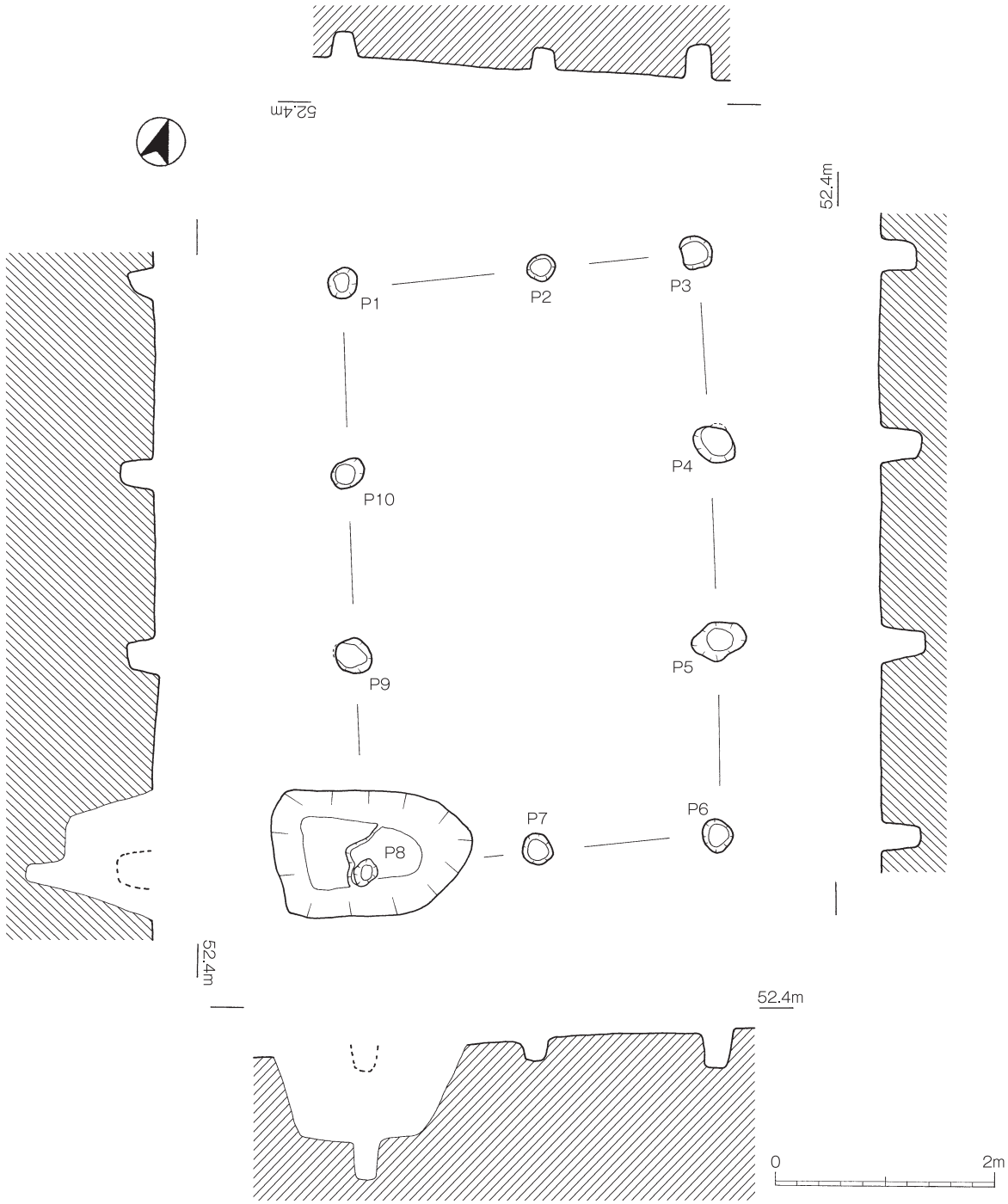
測値は，計測表を参考にされたい。

掘立柱建物跡１（第194図）

本遺構は，Ｊ－26区で検出された。長軸方向をほぼ東西に設定しており，他の２棟とは異なる。また，この遺構のみは西側に庇を設け，１間×２間の建物である。柱穴は３棟の中で最も規模が大きく，深さは約51cmである。Ｐ９のみは１か所に複数の柱穴がある。柱穴の径や，深さが不揃いであるのが特徴である。

掘立柱建物跡２（第195図）

本遺構はＩ・Ｊ－26区で検出された。長軸は南北に設定されており，建物の規模は２間×３間である。床面積は約22㎡であり，内部面積は３棟の中で最も大きいものである。柱穴は比較的規

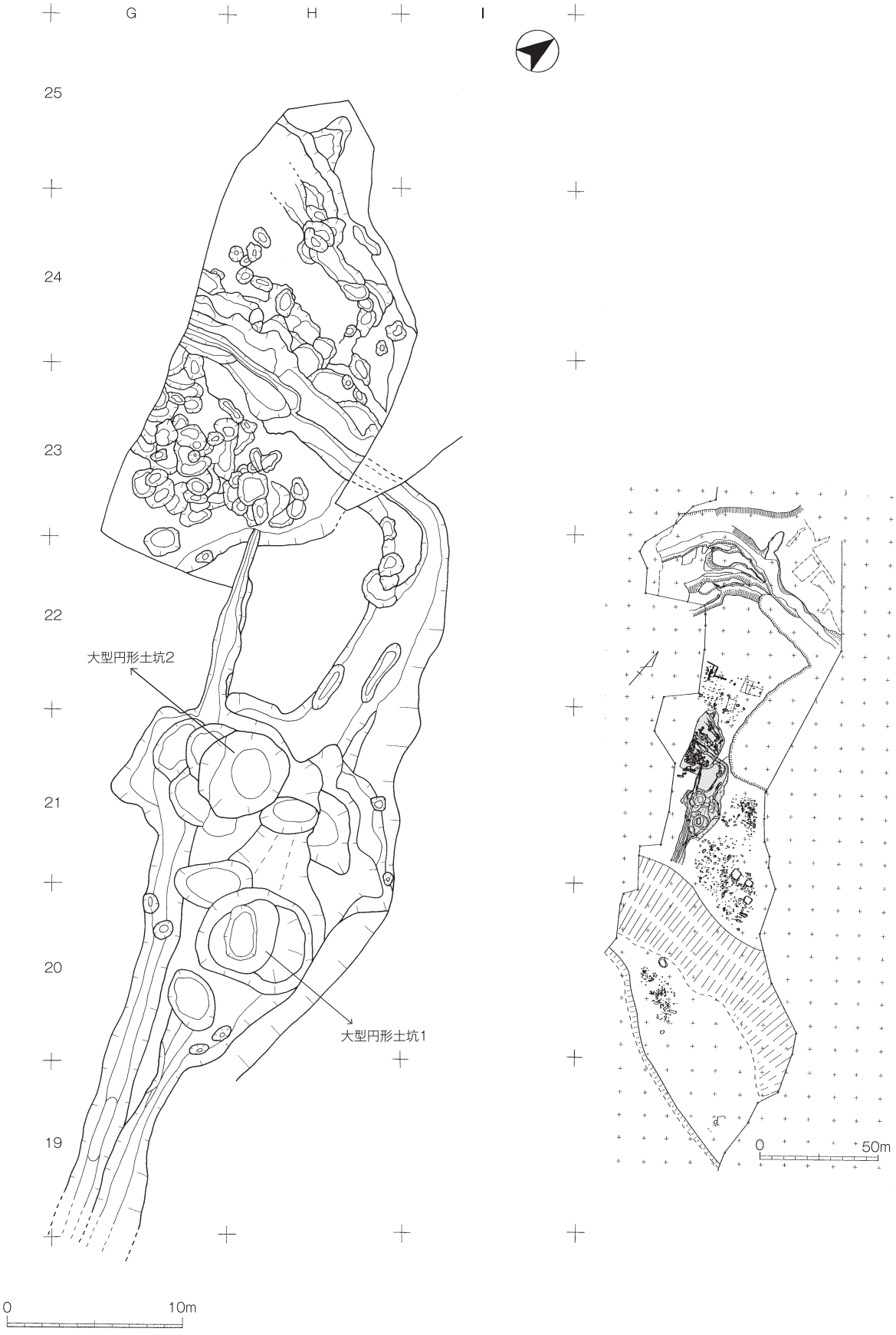


第196図　掘立柱建物跡３

則正しく並ぶ。掘立柱建物跡1との切り合いが確認できるが，使用時期の差は特定できない。

掘立柱建物跡３（第196図）

本遺構は，掘立柱建物跡2の南に位置するⅠ－25区から検出された。長軸は南北で，規模は２間×３間である。柱穴は平均して径が34cm，深さが31cmである。全体的に柱穴の深さが浅いが，これは削平されたためと考えられる。平面プランは楕円形から円形まで様々である。Ｐ８は最大幅1.8mの掘り込みの中にあり，径は25cm程度である。掘り込みと建物との関連は明確ではなかった。



第197図　空堀及び土坑群

掘立柱建物跡１柱穴計測表・柱穴芯芯間計測表

柱穴番号	柱穴　（単位：cm）		
	長径	短径	深さ（細深）
1	38	33	46
2	49	33	62
3	52	36	86
4	45	40	60
5	42	32	44
6	41	38	43
7	36	23	48
8	38	33	20
9	29	25	40(60)
平均	41.11	32.56	51.13

	柱穴番号	梁間柱間（m）	柱穴番号	桁間柱間（m）	桁行間（m）
棟部	Ｐ１～２	3.50	Ｐ２～３	2.10	4.20
	３～６	3.90	３～４	2.12	
	４～５	3.94	５～６	2.05	4.65
			１～６	2.60	
	平均	3.92		2.22	4.43
庇部	Ｐ７～８	1.90			
	８～９	2.10			

掘立柱建物跡2柱穴計測表・柱穴芯芯間計測表

柱穴番号	柱穴　（単位：cm）		
	長径	短径	深さ（細深）
1	27	22	38
2	25	22	39
3	35	30	40
4	40	30	45
5	37	33	40
6	37	30	44
7	20	16	26
8	28	26	30(39)
9	31	25	40
10	31	27	35
平均	31.10	26.10	38.56

柱穴番号	梁間柱間（m）	柱穴番号	桁間柱間（m）	桁行間（m）
Ｐ１～３	3.72	Ｐ３～４	2.15	
４～10	3.58	４～５	1.80	5.95
５～９	3.50	５～６	2.00	
６～８	3.55	８～９	1.95	
		９～10	2.05	6.15
		１～10	2.15	
平均	3.59		2.02	6.05

掘立柱建物跡3柱穴計測表・柱穴芯芯間計測表

柱穴番号	柱穴　（単位：cm）		
	長径	短径	深さ（細深）
1	30	27	24
2	27	23	20
3	33	27	33
4	43	32	39
5	51	36	40
6	32	27	36
7	30	26	21
8	28	22	34
9	36	31	30
10	32	24	30
平均	34.20	27.50	30.70

柱穴番号	梁間柱間（m）	柱穴番号	桁間柱間（m）	桁行間（m）
Ｐ１～３	3.28	Ｐ３～４	1.75	
４～10	3.45	４～５	1.80	5.40
５～９	3.40	５～６	1.80	
６～８	3.28	８～９	2.00	
		９～10	1.68	5.45
		１～10	1.77	
平均	3.35		1.80	5.43

・空堀及び土坑群（第197図）

曲輪１の南端から曲輪２の西側半分ほどにかけて，検出された大規模な遺構である。空堀は数本あるが，基本的には，G-14区から東へ直線的に延びⅠ-23区で直角に曲がってG-19区へ直線的に至る。曲輪２と曲輪３の間の斜面でもその断面が観察できることから，中世にはまだ南へ続いていたものであることがわかる。

G・H-23・24区では，この空堀の両側に小さな土坑が数多く検出されている。また，北側の空堀は，数段の階段状を呈していることから曲輪２からと曲輪１への登り口と思われる。H-24区の北側にも土坑及び溝状の遺構と階段状の遺構があるのはそのためであろうか。

H-20・21区を中心にこの空堀の中央の直径約５ｍほどの大型の土坑が検出された。いくつもの土坑が階段状に掘られているのが特徴である。北側の小さな土坑群とは対照的であり，小土坑群と大型の土坑群を繋ぐように１本の溝状遺構も検出されている。これらの空堀及び土坑群の堆積状況等は第198図・第199図の通りである。また，これらの遺構群中からは，大量の遺物が投げ込まれたような状況で出土した。特に大型円形土坑２からの出土が著しかった。

・大型円形土坑２出土遺物（第200図～第204図）

この土坑からは前述のように，雑多なものが投げ込まれたような状態で出土したため，そのほとんどを一括遺物として取り上げた。

土師器・土製品・陶器（第200図）

1282・1283は，土師器の皿である。内外面ともに煤が付着している。1284は，土師質の捏鉢で内外面ともナデ仕上げである。1285は，底部が直径20cmを超す須恵質の大型の捏鉢か，内面にハケ目調整を施すものである。1286は鞴の羽口であり，図の左側部分は高温にさらされていたために，ガラス化している。

1287～1289は，備前系の擂鉢の口縁部である。1287は口縁部がほぼ直行，他はやや内弯し，いずれも内面に数条の条線が施されている。1290は，瓦質の擂鉢の底部で，条線が放射状に施されている。1291は，常滑焼であるが，部位については定かでない。

瓦質土器（第201図・第202図）

1292～1295は，瓦質の茶釜である。1295以外は鍔より下位に多量の煤が付着していることから，湯釜として大量の湯を沸かすために用いられた可能性が高い。1292は，花型のスタンプ文及び波状の曲線が施され，取っ手が取り付けてあったと思われる。1293は花型及び巴状のスタンプがほどこされている。取っ手については残存していないため定かでないが，1292と比すると，取っ手が取り付けてあった可能性が高い。1296は，これらの蓋である。

投弾等（第202図・第203図）

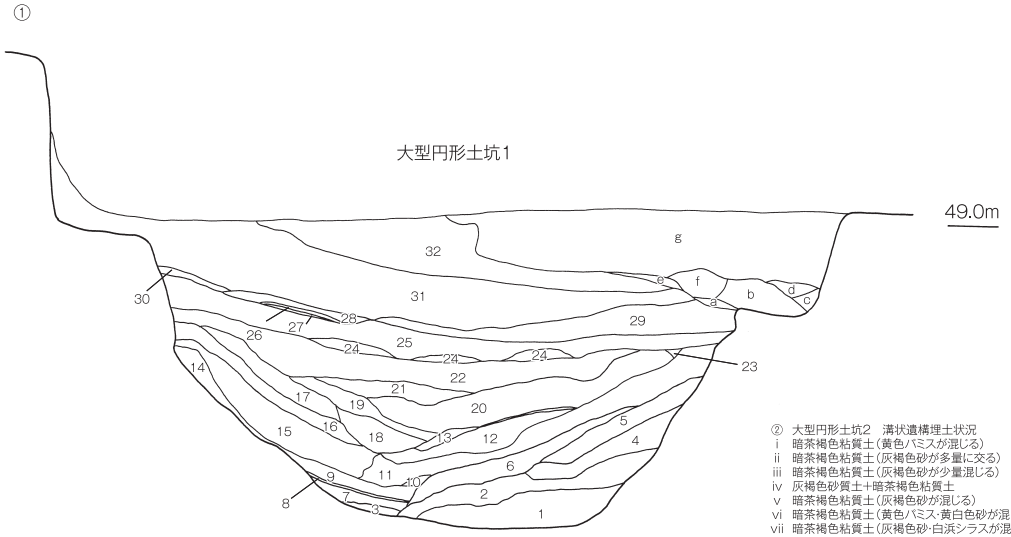
1297～1302は，縄文時代の磨石などが流れ込んだものか，もしくは，投弾としての転用品であろうと考えられるものである。1303の磨製石斧も同様である。この石斧は，両面及び側面を丁寧に研磨しており，刃部は使用による刃こぼれが観察される。

陶磁器（第204図）

1304は，白磁の皿で口縁端部が端反る。1305は，青磁の碗の底部から体部へかけての部分である。焼成が不良で発色も黄色に近く，線描による蓮弁文が施されている。1306も青磁の碗で見込

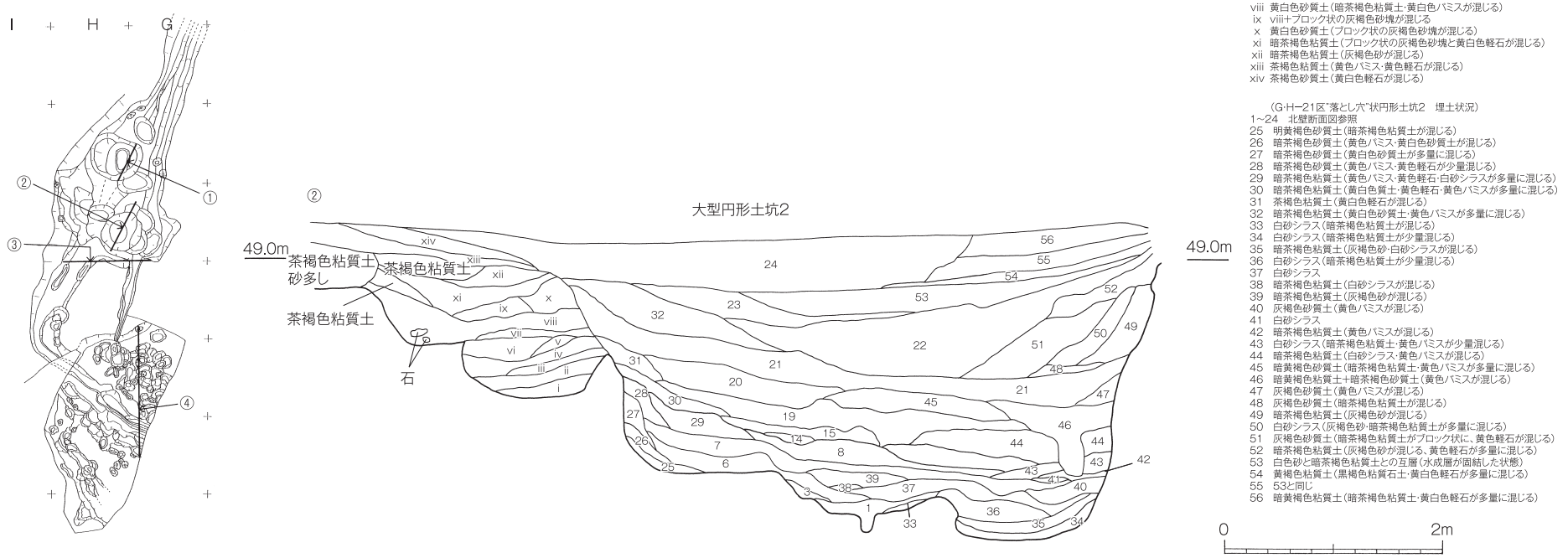
① 大型円形土坑1
1 白砂シラス（暗褐色土が混じる）
2 白砂シラス（ブロック状にピンクシラスと暗褐色が混じる）
3 暗褐色粘質土（白砂が混じる）
4 白砂シラス（黄色パミスが混じる）
5 灰褐色砂（黄色パミス・白砂が混じる）
6 ピンクシラス（黄色パミスが混じる）
7 暗褐色粘質土（暗褐色砂が混じる）
8 暗紫褐色粘質土
9 明黄褐色砂質土
10 2より白砂シラスの割合が少ない
11 灰褐色粘質土（明黄褐色砂が多量に混じる）
12 暗茶褐色粘質土（黄色パミスが混じる）
13 明黄褐色砂質土（灰褐色砂が混じる）
14 明黄褐色砂質土（暗紫褐色粘質土が多混）
15 明黄褐色粘質土（暗紫褐色粘質土がブロック状に多混）
16 茶褐色粘質土
17 茶褐色粘質土（ブロック塊の暗紫褐色土が混じる）
18 ブロック塊の暗紫褐色土
19 明黄褐色砂質土＋灰褐色砂質土
20 明茶褐色粘質土（黄色パミス・灰褐色砂が混じる）
21 灰褐色砂質土（ブロック塊の黄色パミス・暗紫褐色土が混じる）
22 灰褐色砂質土（ピンクシラス・黄色軽石が混じる）
23 灰褐色砂質土（暗紫褐色土が混じる）
24 暗紫褐色砂質土（22が混じる）
25 茶褐色粘質土（明茶褐色土が混じる）
26 白砂シラス
27 灰褐色砂質土（黄色パミスが混じる）
28 暗紫褐色粘質土（灰褐色砂が混じる）
29 灰褐色砂質土（黄色パミス・黄色軽石が混じる）
30 灰褐色砂質土（暗紫褐色土が混じる）
31 暗茶褐色粘質土（茶褐色粘質土がブロック状に混じる）
32 茶褐色粘質土（明茶褐色土がブロック状に混じる）

（a～g）＝溝状遺構埋土
a 茶褐色粘質土
b 灰褐色砂質土（黄色パミスが混じる）
c ピンクシラス＋白色砂（黄色パミスが混じる）
d 暗灰褐色砂質土（黄色軽石が混じる）
e 灰褐色砂質土（黄色軽石が混じる）
f 暗茶褐色粘質土（ブロック塊の暗紫褐色土が混じる）
g 暗灰褐色砂質土（灰褐色砂・黄色軽石がブロック状に混じる）

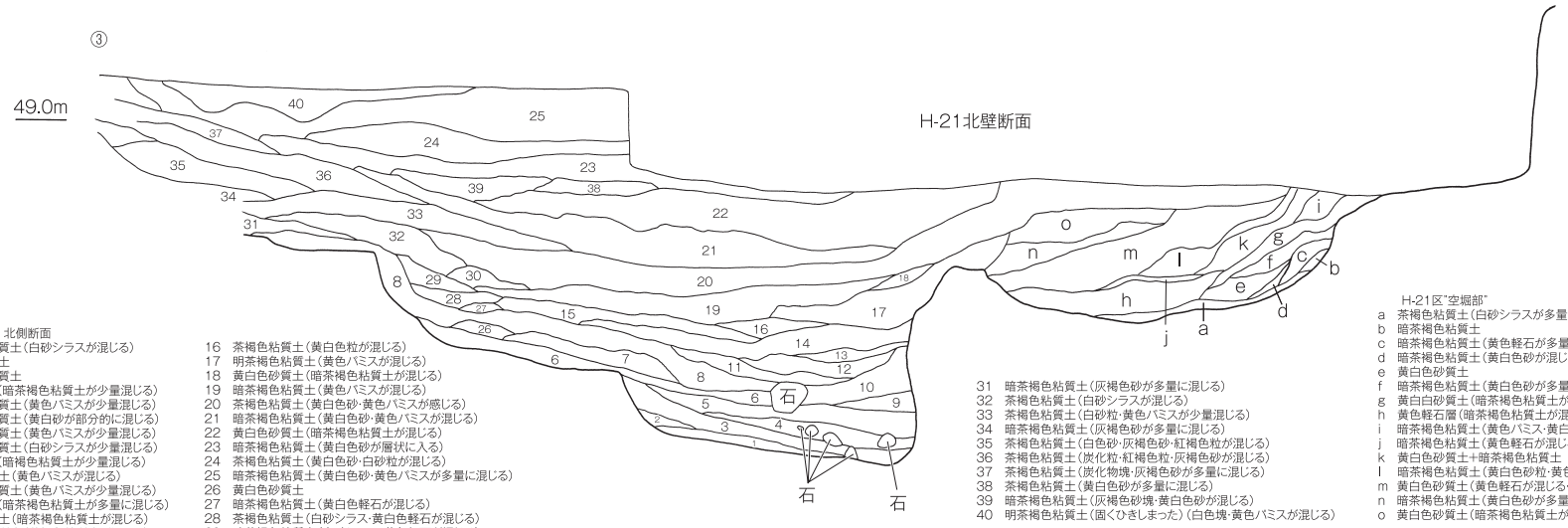


② 大型円形土坑2　溝状遺構埋土状況
i 暗茶褐色粘質土（黄色パミスが混じる）
ii 暗茶褐色粘質土（灰褐色砂が多量に交る）
iii 暗茶褐色粘質土（灰褐色砂が少量混じる）
iv 灰褐色砂質土＋暗茶褐色粘質土
v 暗茶褐色粘質土（灰褐色砂が混じる）
vi 暗茶褐色粘質土（黄色パミス・黄白色砂が混じる）
vii 暗茶褐色粘質土（灰褐色砂・白浜シラスが混じる）
viii 黄白色砂質土（暗茶褐色粘質土・黄白色パミスが混じる）
ix viii＋ブロック状の灰褐色砂塊が混じる
x 黄白色砂質土（ブロック状の灰褐色砂塊が混じる）
xi 暗茶褐色粘質土（ブロック状の灰褐色砂塊と黄白色軽石が混じる）
xii 暗茶褐色粘質土（灰褐色砂が混じる）
xiii 茶褐色粘質土（黄色パミス・黄色軽石が混じる）
xiv 茶褐色砂質土（黄白色軽石が混じる）

（G･H－21区"落とし穴"状円形土坑2　埋土状況）
1～24 北壁断面図参照
25 明黄褐色砂質土（暗茶褐色粘質土が混じる）
26 暗茶褐色砂質土（黄色パミス・黄白色砂質土が混じる）
27 暗茶褐色砂質土（黄白色砂質土が多量に混じる）
28 暗茶褐色砂質土（黄色パミス・黄色軽石が少量混じる）
29 暗茶褐色粘質土（黄色パミス・黄色軽石・白砂シラスが多量に混じる）
30 暗茶褐色粘質土（黄白色質土・黄色軽石・黄色パミスが多量に混じる）
31 茶褐色粘質土（黄白色軽石が混じる）
32 暗茶褐色粘質土（黄白色砂質土・黄色パミスが多量に混じる）
33 白砂シラス（暗茶褐色粘質土が混じる）
34 白砂シラス（暗茶褐色粘質土が少量混じる）
35 暗茶褐色粘質土（灰褐色砂・白砂シラスが混じる）
36 白砂シラス（暗茶褐色粘質土が少量混じる）
37 白砂シラス
38 暗茶褐色粘質土（白砂シラスが混じる）
39 暗茶褐色粘質土（灰褐色砂が混じる）
40 灰褐色砂質土（黄色パミスが混じる）
41 白砂シラス
42 暗茶褐色粘質土（黄色パミスが混じる）
43 白砂シラス（暗茶褐色粘質土・黄色パミスが少量混じる）
44 暗茶褐色粘質土（白砂シラス・黄色パミスが混じる）
45 暗黄褐色砂質土（暗茶褐色粘質土・黄色パミスが多量に混じる）
46 暗黄褐色粘質土＋暗茶褐色砂質土（黄色パミスが混じる）
47 灰褐色砂質土（黄色パミスが混じる）
48 灰褐色砂質土（暗茶褐色粘質土が混じる）
49 暗茶褐色粘質土（灰褐色砂が混じる）
50 白砂シラス（灰褐色砂・暗茶褐色粘質土が多量に混じる）
51 灰褐色砂質土（暗茶褐色粘質土がブロック状に、黄色軽石が混じる）
52 暗茶褐色粘質土（灰褐色砂が混じる、黄色軽石が多量に混じる）
53 白色砂と暗茶褐色粘質土との互層（水成層が固結した状態）
54 黄褐色粘質土（黒褐色粘質石土・黄白色軽石が多量に混じる）
55 53と同じ
56 暗黄褐色粘質土（暗茶褐色粘質土・黄白色軽石が多量に混じる）



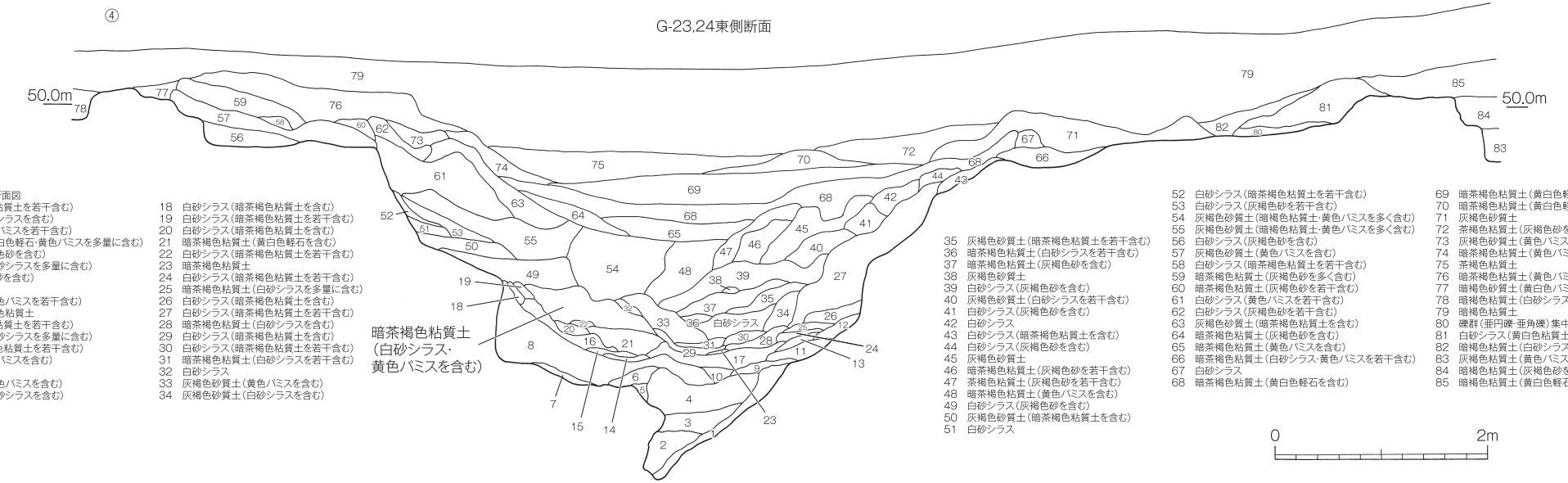
第198図　空堀及び土坑群断面図（1）



③H-21区　北側断面

1 暗茶褐色粘質土(白砂シラスが混じる)
2 灰白色砂質土
3 暗茶褐色粘質土
4 白砂シラス(暗茶褐色粘質土が少量混じる)
5 暗茶褐色粘質土(黄色パミスが少量混じる)
6 暗茶褐色粘質土(黄白砂が部分的に混じる)
7 暗茶褐色粘質土(黄色パミスが少量混じる)
8 暗茶褐色粘質土(白砂シラスが少量混じる)
9 白砂シラス(暗褐色粘質土が少量混じる)
10 茶褐色粘質土(黄色パミスが混じる)
11 暗茶褐色粘質土(黄色パミスが少量混じる)
12 白砂シラス(暗茶褐色粘質土が多量に混じる)
13 茶褐色粘質土(暗茶褐色粘質土が混じる)
14 暗茶褐色粘質土(茶褐色粘質土が混じる)
15 暗茶褐色粘質土(白砂シラスが混じる
16 茶褐色粘質土(黄白色粒が混じる)
17 明茶褐色粘質土(黄色パミスが混じる)
18 黄白色砂質土(暗茶褐色粘質土が混じる)
19 暗茶褐色粘質土(黄色パミスが混じる)
20 茶褐色粘質土(黄白色砂・黄色パミスが感じる)
21 暗茶褐色粘質土(黄白色砂・黄色パミスが混じる)
22 黄白色砂質土(暗茶褐色粘質土が混じる)
23 暗茶褐色粘質土(黄白色砂が層状に入る)
24 茶褐色粘質土(黄白色砂・白砂粒が混じる)
25 暗茶褐色粘質土(黄白色砂・黄色パミスが多量に混じる)
26 黄白色砂質土
27 暗茶褐色粘質土(黄白色軽石が混じる)
28 茶褐色粘質土(白砂シラス・黄白色軽石が混じる)
29 暗茶褐色粘質土(白砂シラス・黄色軽石が混じる)
30 茶褐色粘質土(黄白色軽石が混じる)
31 暗茶褐色粘質土(灰褐色砂が多量に混じる)
32 茶褐色粘質土(白砂シラスが混じる)
33 茶褐色粘質土(白砂粒・黄色パミスが少量混じる)
34 暗茶褐色粘質土(灰褐色砂が多量に混じる)
35 茶褐色粘質土(白色砂・灰褐色砂・紅褐色粒が混じる)
36 茶褐色粘質土(炭化粒・紅褐色粒・灰褐色砂が混じる)
37 茶褐色粘質土(炭化物塊・灰褐色砂が多量に混じる)
38 茶褐色粘質土(黄白色砂が多量に混じる)
39 暗茶褐色粘質土(灰褐色砂塊・黄白色砂が混じる)
40 明茶褐色粘質土(固くひきしまった)(白色塊・黄色パミスが混じる)

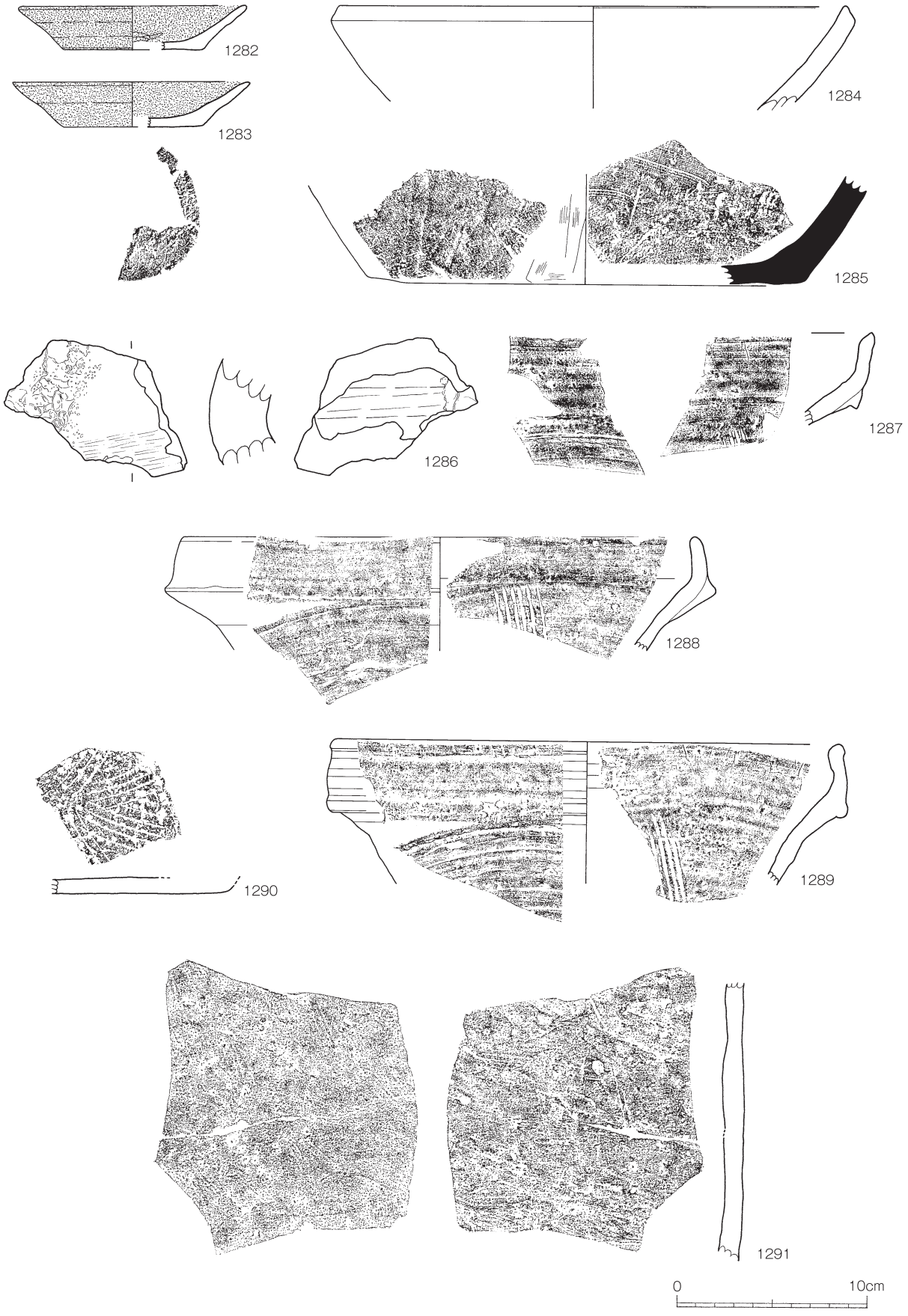
H-21区"空掘部"
a 茶褐色粘質土(白砂シラスが多量に混じる)
b 暗茶褐色粘質土
c 暗茶褐色粘質土(黄色軽石が多量に混じる)
d 暗茶褐色粘質土(黄白色砂が混じる)
e 黄白色砂質土
f 暗茶褐色粘質土(黄白色砂が多量に混じる)
g 黄白白砂質土(暗茶褐色粘質土が少量混じる)
h 黄色軽石層(暗茶褐色粘質土が混じる)
i 暗茶褐色粘質土(黄色パミス・黄白色砂粒が混じる)
j 暗茶褐色粘質土(黄色軽石が混じる)
k 黄白色砂質土+暗茶褐色粘質土
l 暗茶褐色粘質土(黄白色砂粒・黄色パミスが少量混じる)
m 黄白色砂質土(黄色軽石が混じる・茶褐色土が若干混じる)
n 暗茶褐色粘質土(黄白色砂が多量に混じる)
o 黄白色砂質土(暗茶褐色粘質土が混じる)



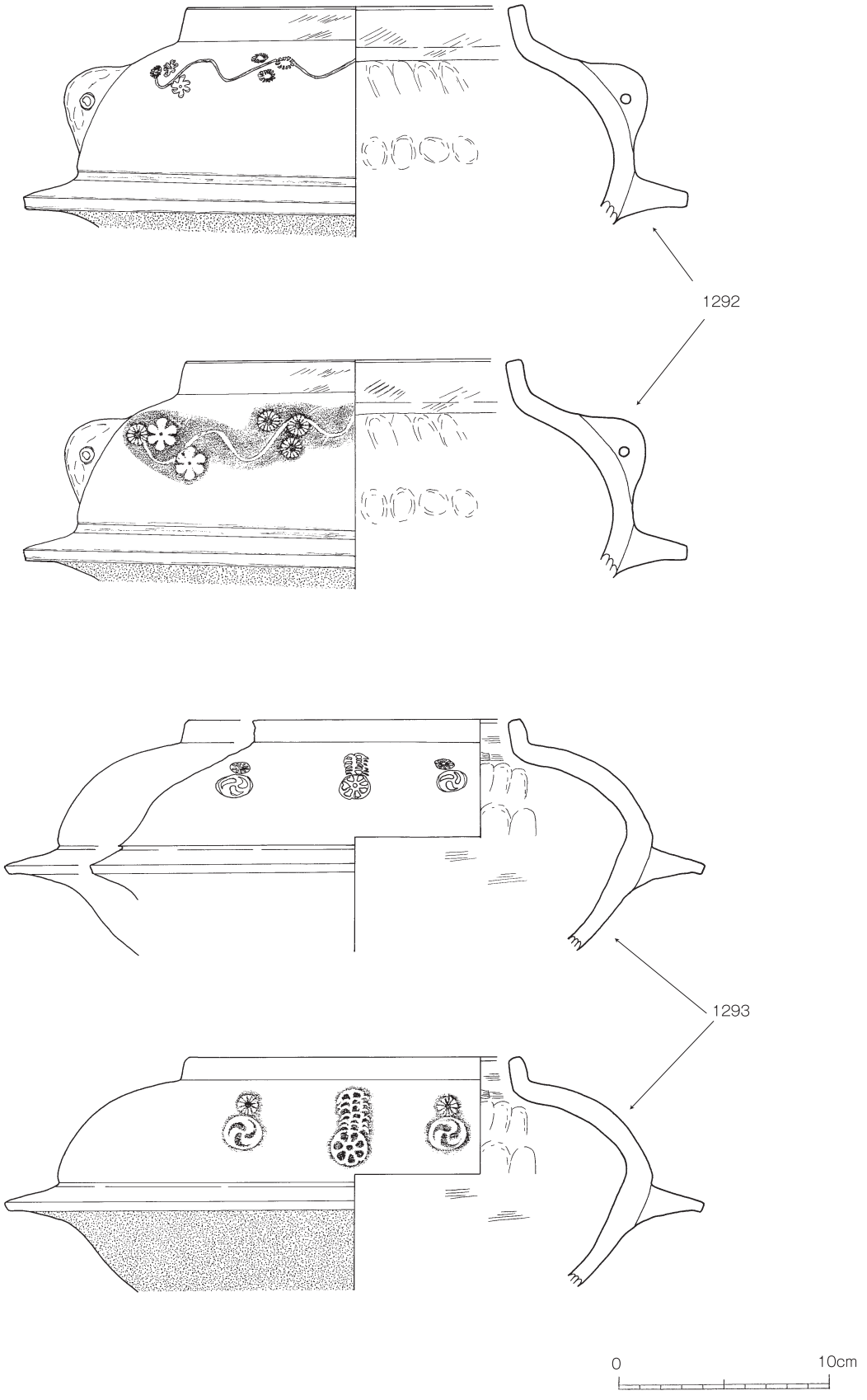
④G-23·24区東側断面図

1 白砂シラス(暗褐色粘質土を若干含む)
2 暗褐色粘質土(白砂シラスを含む)
3 茶褐色粘質土(黄色パミスを若干含む)
4 暗茶褐色粘質土(黄白色軽石·黄色パミスを多量に含む)
5 茶褐色粘質土(灰褐色砂を含む)
6 暗茶褐色粘質土(白砂シラスを多量に含む)
7 白砂シラス(灰褐色砂を含む)
8 白砂シラス
9 暗茶褐色粘質土(黄色パミスを若干含む)
10 強く固結した暗茶褐色粘質土
11 白砂シラス(茶褐色粘質土を若干含む)
12 暗茶褐色粘質土(白砂シラスを多量に含む)
13 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を若干含む)
14 茶褐色粘質土(黄色パミスを含む)
15 白砂シラス
16 暗茶褐色粘質土(黄色パミスを含む)
17 暗茶褐色粘質土(白砂シラスを含む)
18 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を含む)
19 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を若干含む)
20 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を含む)
21 暗茶褐色粘質土(黄白色軽石を含む)
22 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を若干含む)
23 暗茶褐色粘質土
24 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を若干含む)
25 暗茶褐色粘質土(白砂シラスを多量に含む)
26 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を含む)
27 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を若干含む)
28 暗茶褐色粘質土(白砂シラスを含む)
29 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を含む)
30 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を若干含む)
31 暗茶褐色粘質土(白砂シラスを若干含む)
32 白砂シラス
33 灰褐色砂質土(黄色パミスを含む)
34 灰褐色砂質土(白砂シラスを含む)
35 灰褐色砂質土(暗茶褐色粘質土を若干含む)
36 暗茶褐色粘質土(白砂シラスを若干含む)
37 暗茶褐色粘質土(灰褐色砂を含む)
38 灰褐色砂質土
39 白砂シラス(灰褐色砂を含む)
40 灰褐色砂質土(白砂シラスを若干含む)
41 白砂シラス(灰褐色砂を含む)
42 白砂シラス
43 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を含む)
44 白砂シラス(灰褐色砂を含む)
45 灰褐色砂質土
46 暗茶褐色粘質土(灰褐色砂を若干含む)
47 茶褐色粘質土(灰褐色砂を若干含む)
48 暗茶褐色粘質土(黄色パミスを含む)
49 白砂シラス(灰褐色砂を含む)
50 灰褐色砂質土(暗茶褐色粘質土を含む)
51 白砂シラス
52 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を若干含む)
53 白砂シラス(灰褐色砂を若干含む)
54 灰褐色砂質土(暗褐色粘質土·黄色パミスを多く含む)
55 灰褐色砂質土(暗褐色粘質土·黄色パミスを多く含む)
56 白砂シラス(灰褐色砂を含む)
57 灰褐色砂質土(黄色パミスを含む)
58 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を若干含む)
59 暗茶褐色粘質土(灰褐色砂を多く含む)
60 暗茶褐色粘質土(灰褐色砂を若干含む)
61 白砂シラス(黄色パミスを若干含む)
62 白砂シラス(灰褐色砂を若干含む)
63 灰褐色砂質土(暗茶褐色粘質土を含む)
64 白砂シラス(暗茶褐色粘質土を含む)
65 暗茶褐色粘質土(黄色パミスを含む)
66 暗茶褐色粘質土(灰褐色砂を含む)
67 白砂シラス
68 暗茶褐色粘質土(黄白色軽石を含む)
69 暗茶褐色粘質土(黄白色軽石を含む)
70 暗茶褐色粘質土(黄白色軽石を含む)
71 灰褐色砂質土
72 茶褐色粘質土(灰褐色砂を含む)
73 灰褐色砂質土(黄色パミスを含む)
74 暗茶褐色粘質土(黄色パミスを若干含む)
75 茶褐色粘質土
76 暗茶褐色粘質土(黄色パミスを若干含む)
77 暗褐色砂質土(黄白色パミスを含む)
78 白砂シラス(黄白色パミスを含む)
79 暗褐色粘質土
80 礫群(亜円礫·亜角礫)集中部
81 白砂シラス(黄白色粘質土を含む)
82 暗褐色粘質土(白砂シラスを含む)
83 灰褐色粘質土(黄色パミスを含む)
84 暗褐色粘質土(灰褐色砂を含む)
85 暗褐色粘質土(黄白色軽石·黄色パミスを含む)

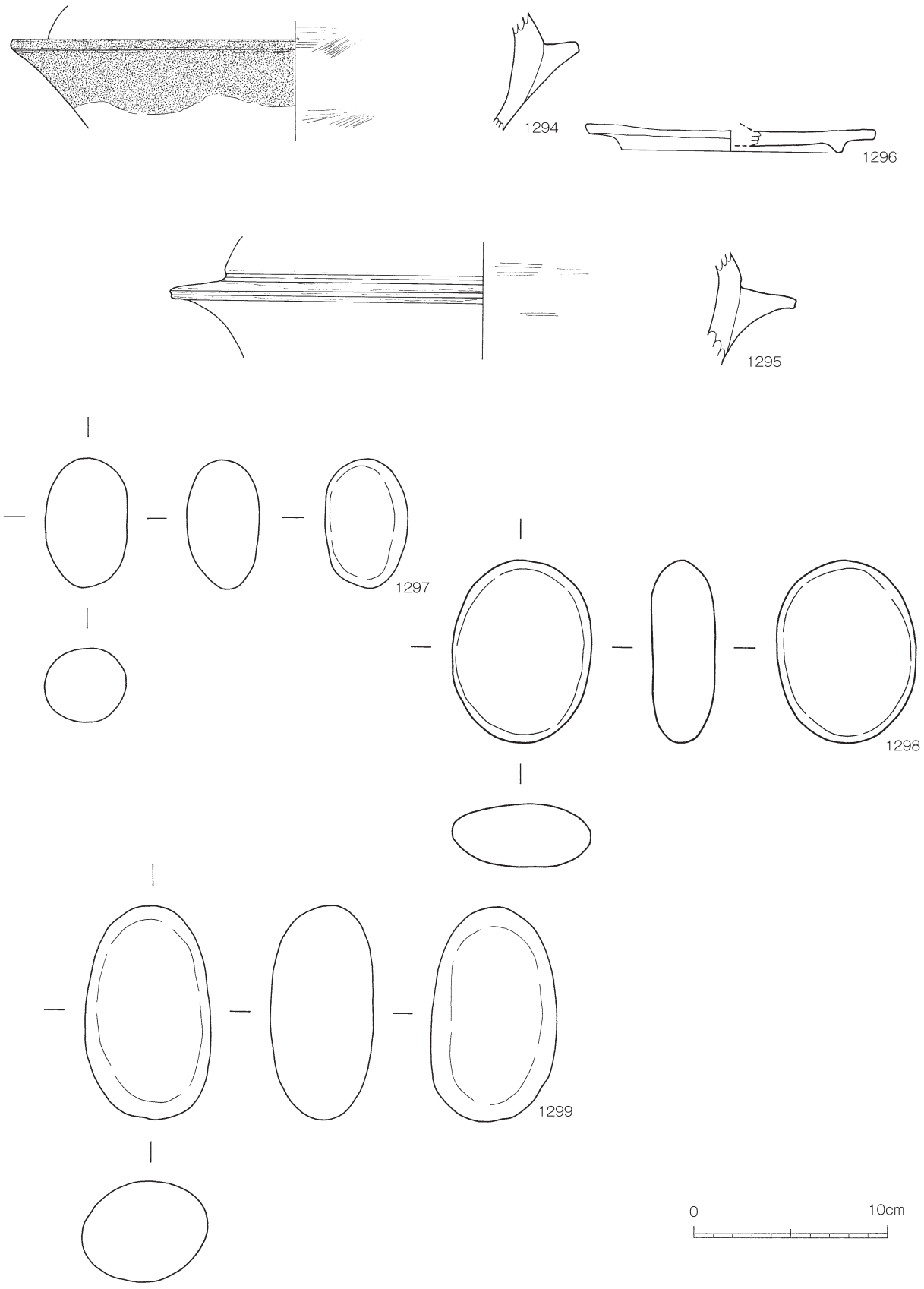
第199図　空堀及び土坑群断面図（2）



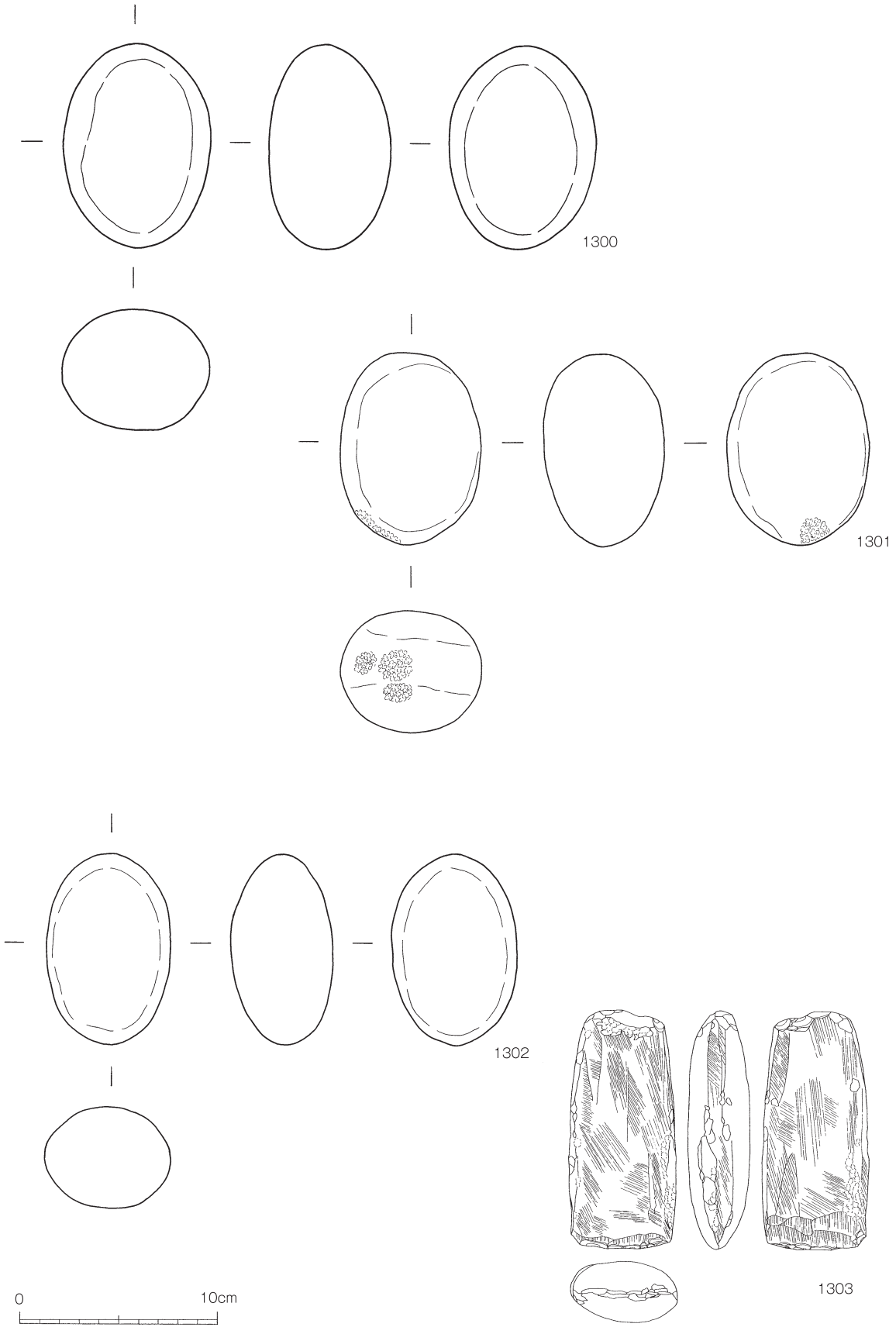
第200図　大型円形土坑２出土遺物（1）



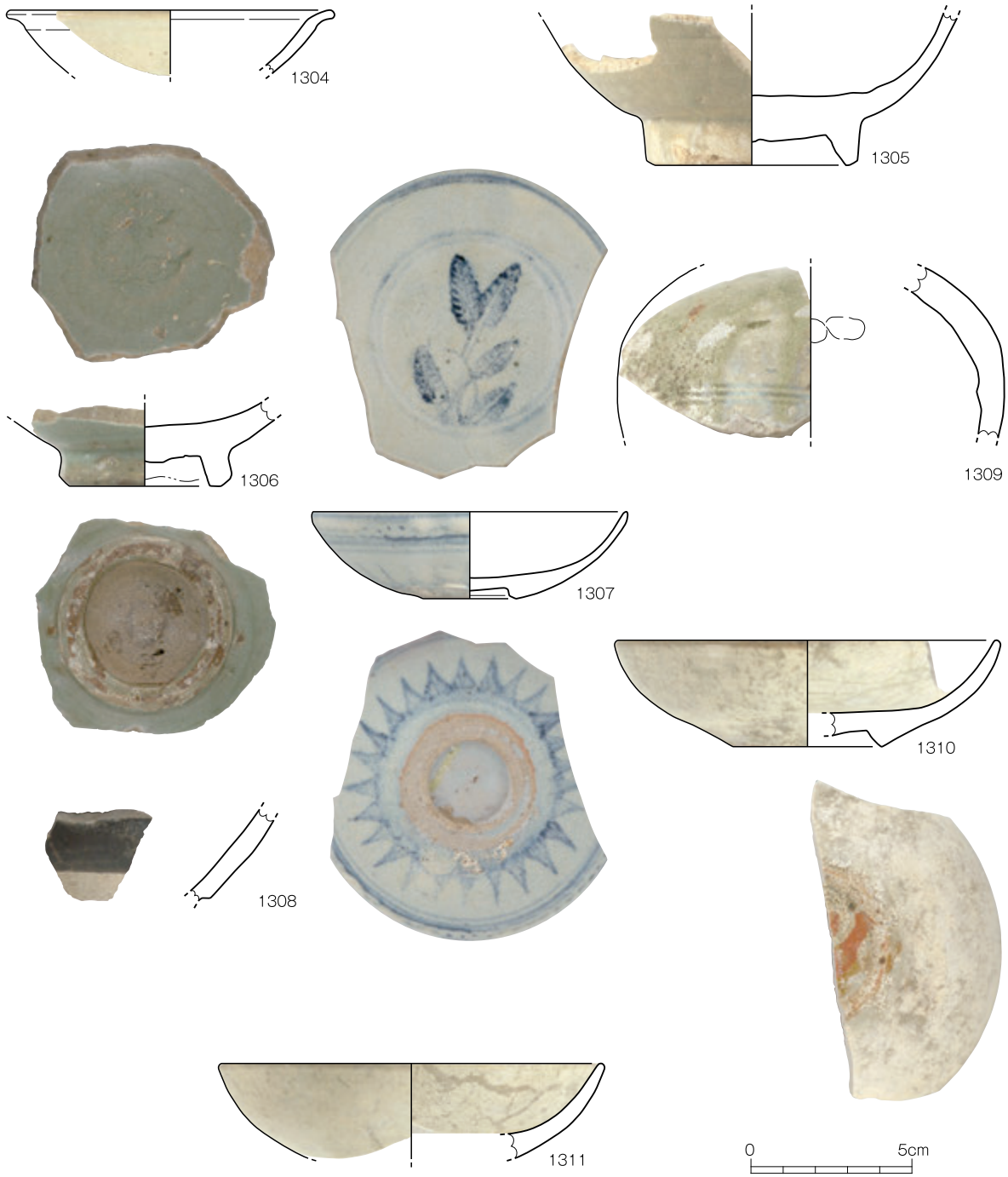
第201図　大型円形土坑２出土遺物（2）



第202図　大型円形土坑２出土遺物（3）



第203図　大型円形土坑２出土遺物（4）



第204図　大型円形土坑２出土遺物（5）

みに印花文を施す。畳付から高台内面は粗い釉掻きによる露胎である。1307は，口縁径約10cmの青花の皿である。見込みに草花を描き外面に芭蕉門を描く。底部は碁笥底を呈している。1308は，美濃系天目碗の体部である。釉掛けは薄く鉄釉の発色は，黒褐色である。1309は，瀬戸系の壷の肩部付近で，肩部径は約15cmで，その下位の部分に２本の沈線を施している。

1310・1311は，白土粉青の青磁で，碁笥底の丸皿である。碁笥底には砂が多く付着し，1310は高台内に「こげ」が観察される。双方は同一個体の可能性もある。

・空堀及び土坑群出土遺物（第205図～第216図）

土師器（第205図）

空堀及び土坑群からは，大型円形土坑２と同様に雑多なものが投げ込まれたような状態で出土したために，そのほとんどを一括遺物として取り上げた。

1312～1319は土師器であり，いずれも糸切底である。1312～1318までは，土師器の皿で1317の口径がやや大き目である以外は，ほとんどが10cm内外の口径である。1312・1313は，底部と体部の境をあまり意識せずに体部へと立ち上がる短い体部で器高も低い皿類である。

1314は，皿としたが小片のため器種についても疑問が残る。1315の体部はやや外反し，端部が尖るもの，逆に，1316～1318は底部と体部の境が明瞭で，体部が直線的あるいは，やや内弯気味のものである。1319は，坏と思われるものである。

土師質・須恵質・瓦質土器等（第205図）

1320は，土師質，1321は須恵質あるいは陶質の擂鉢で，いずれも，内面に条線を施すものである。1322は口縁部が内弯し，平坦な口唇部が内傾する茶褐色の陶器である。備前系の擂鉢であろうか。1323は茶釜，1324は瓦質の火舎あるいは花鉢の脚部である。1323は，1292などと同様に鍔の下位部分には煤が大量に付着していることから，茶釜としての用途よりも，湯釜としても使用されたものと思われる。

銭貨（第205図）

1325は，琉球銭の「大世通寶」で，初鋳年は1454年である。（第44表参照）

陶磁器等（第206図～第209図）

1326～1333は，龍泉系青磁で，13世紀頃から16世紀前半頃までとかなりな時間幅がある。1333が皿でそれ以外が碗である。1326・1327は，蓮弁を施すものである。1328は，外面口縁部に沈線状の細い線を施すもの，1329・1330は，口縁部が端反るものである。1331は線刻文で，やや口縁端部が膨らむ。1332は底部で，施釉は畳付にまで及び，高台内は露胎である。

1334は，白磁の碗で口縁下部がやや窪むようにして端反るものである。

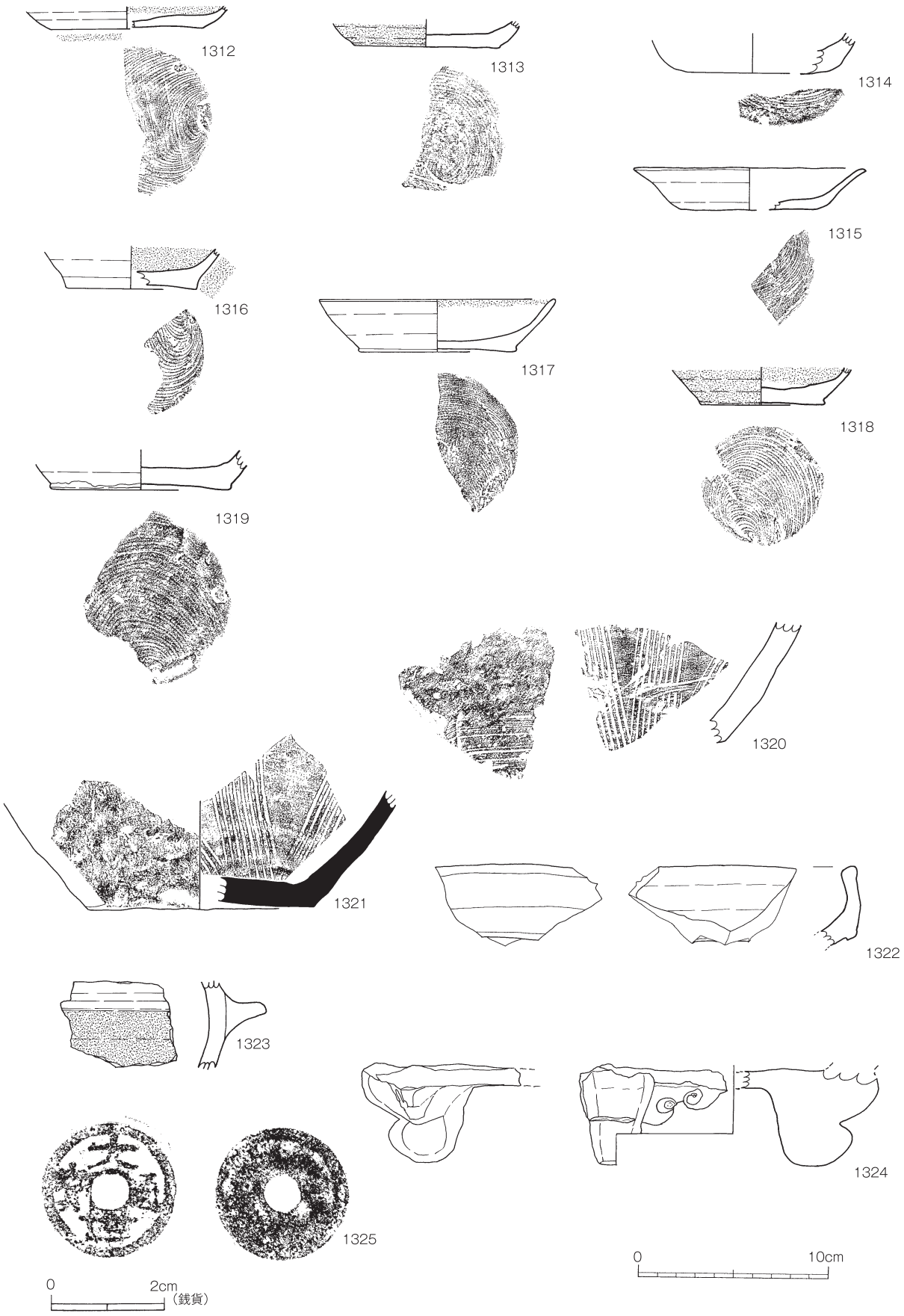
1335・1336は，漳州窯系の青花である。1335は芭蕉文の碗で，高台内にこげあるいは煤が観察され，釉は浅い色である。1336は，碁笥底の丸皿であり，ヒト型の寿の文字を施す。釉は，灰オリーブである

1337～1348（第207図・第208図）は，常滑焼の大甕である。1337が口縁部，1338・1339が頸部近く，1340・1341が胴部近くの屈曲部である。1345には，格子目状の叩きの痕がみられる。これらのほとんどが同一個体と思われるものである。釉掛けは，胴部最大部よりやや下位にまで及んでいるようである。

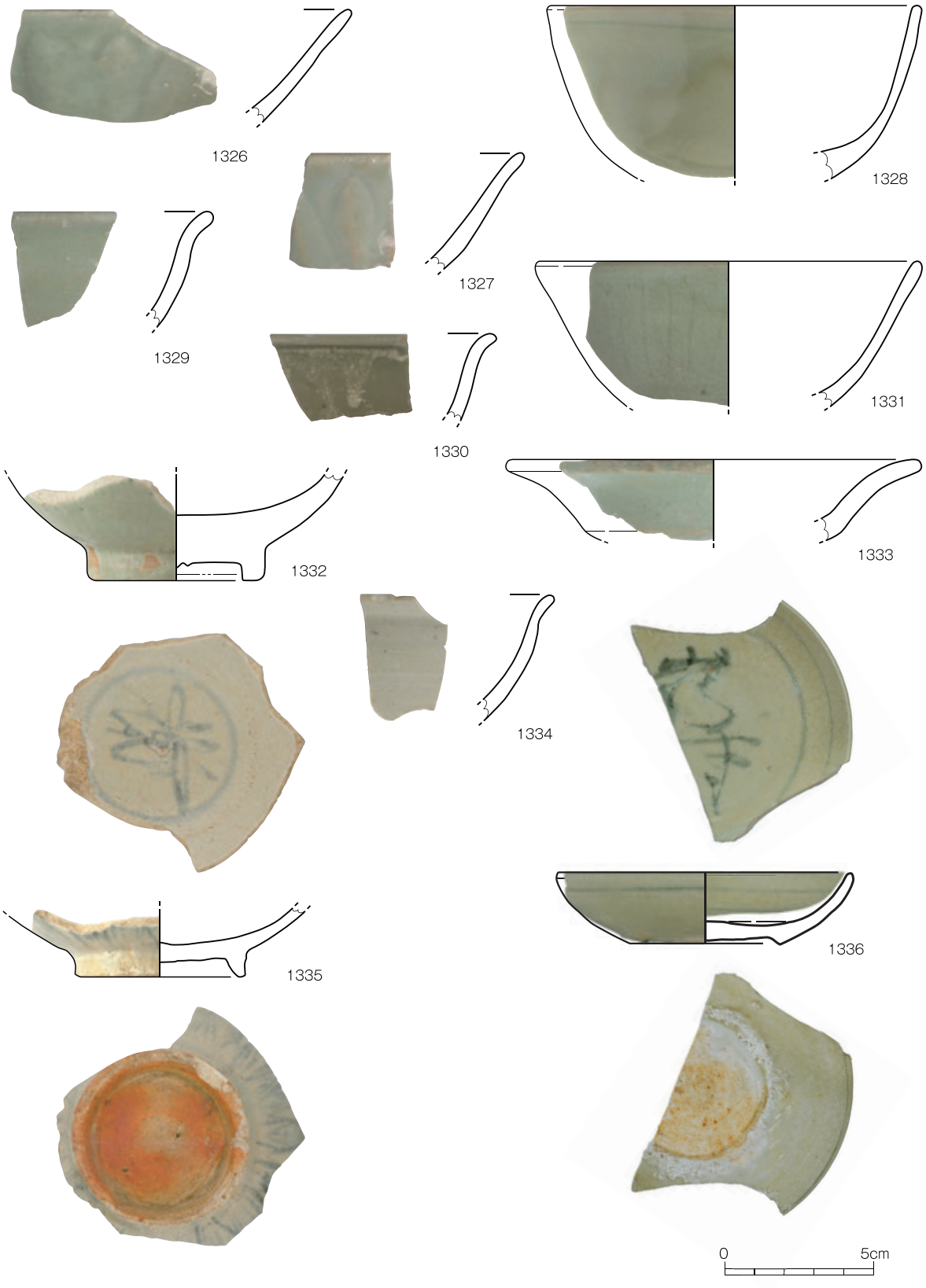
1349（第209図）は，黒色に近い陶器の甕で，胴部最大径が約40cm，胎土はにぶい黄橙色である。

その他（第209図）

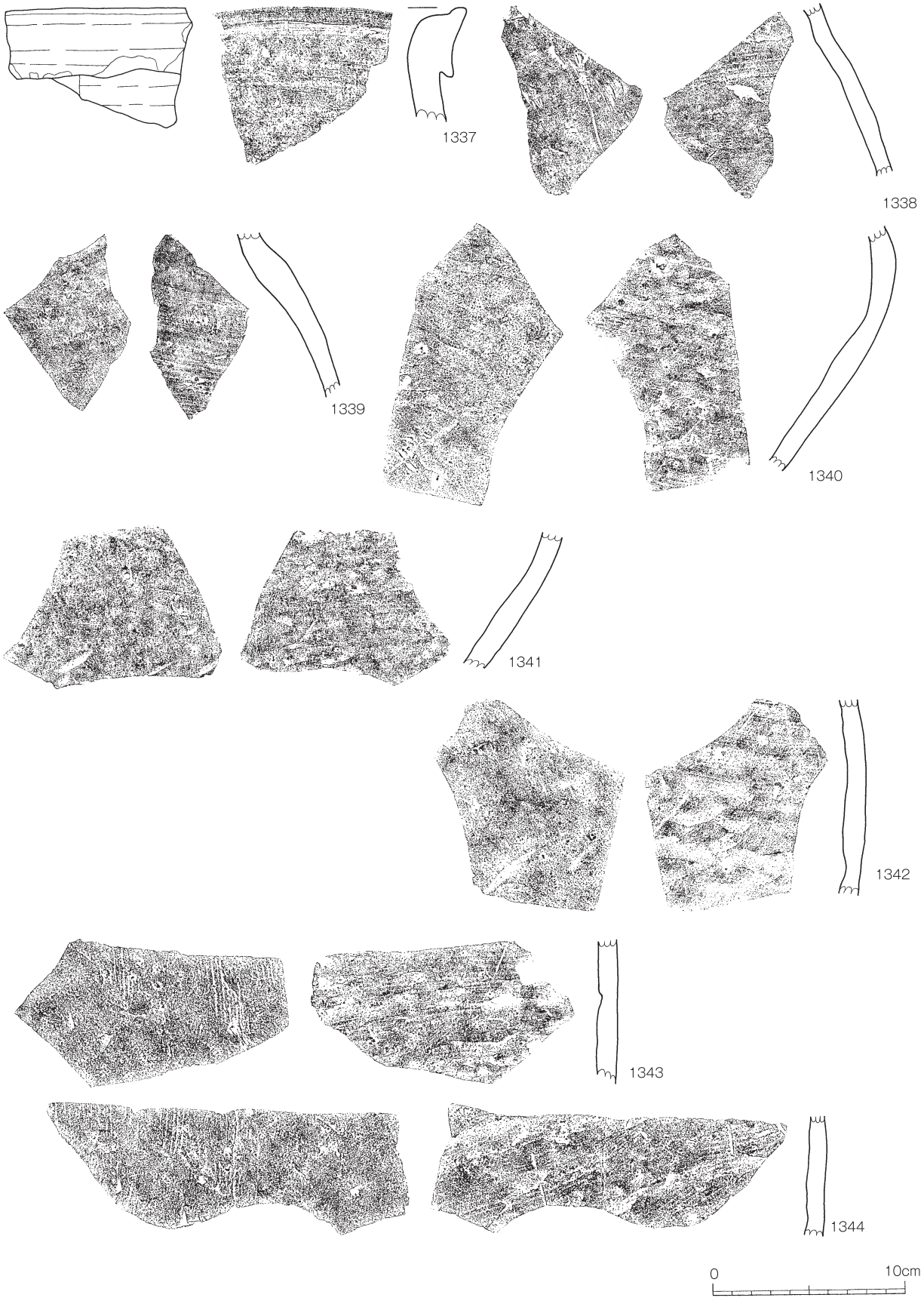
1350～1352（第209図）は，流れ込みと考えられる遺物で，ほとんどが古代以前のものである。1350・1351は須恵器である。1350は，甕の肩部で，外面が平行タタキ，内面のあて具が同心円状であり，1351は，高台付の坏と思われるものの底部片である。



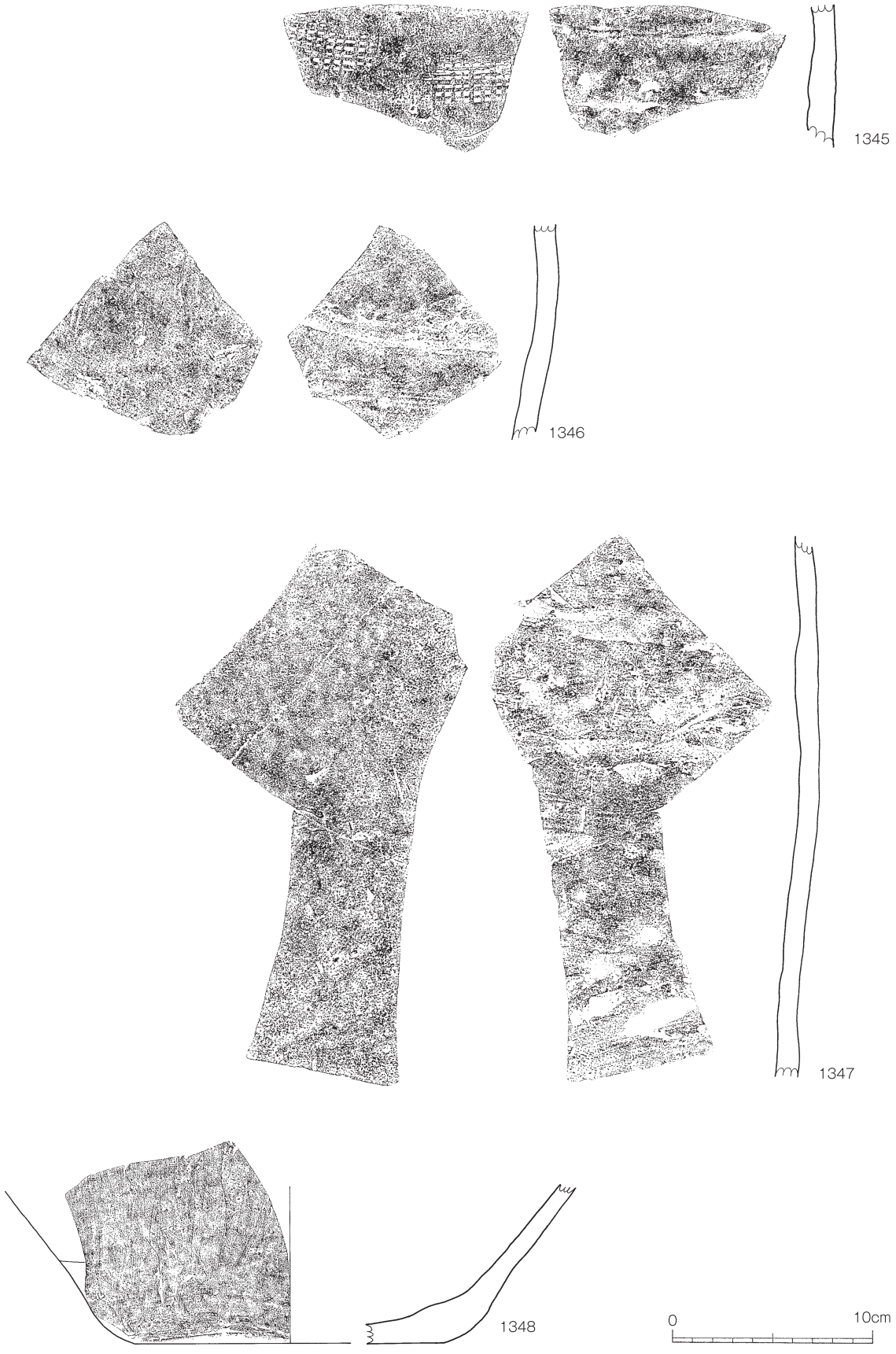
第205図　空堀及び土坑群出土遺物（1）



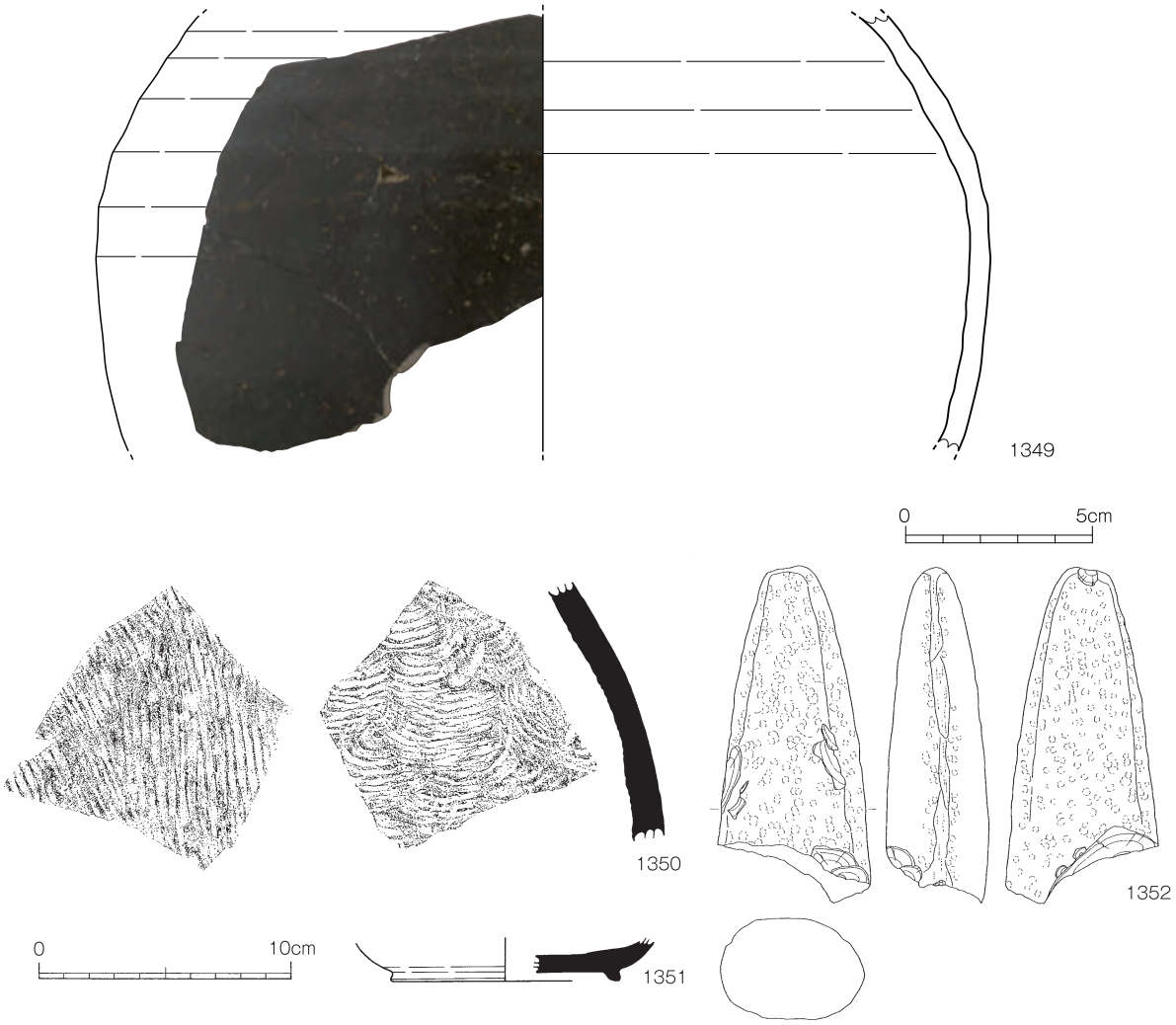
第206図　空堀及び土坑群出土遺物（2）



第207図　空堀及び土坑群出土遺物（3）



第208図　空堀及び土坑群出土遺物（4）



第209図　空堀及び土坑群出土遺物（5）

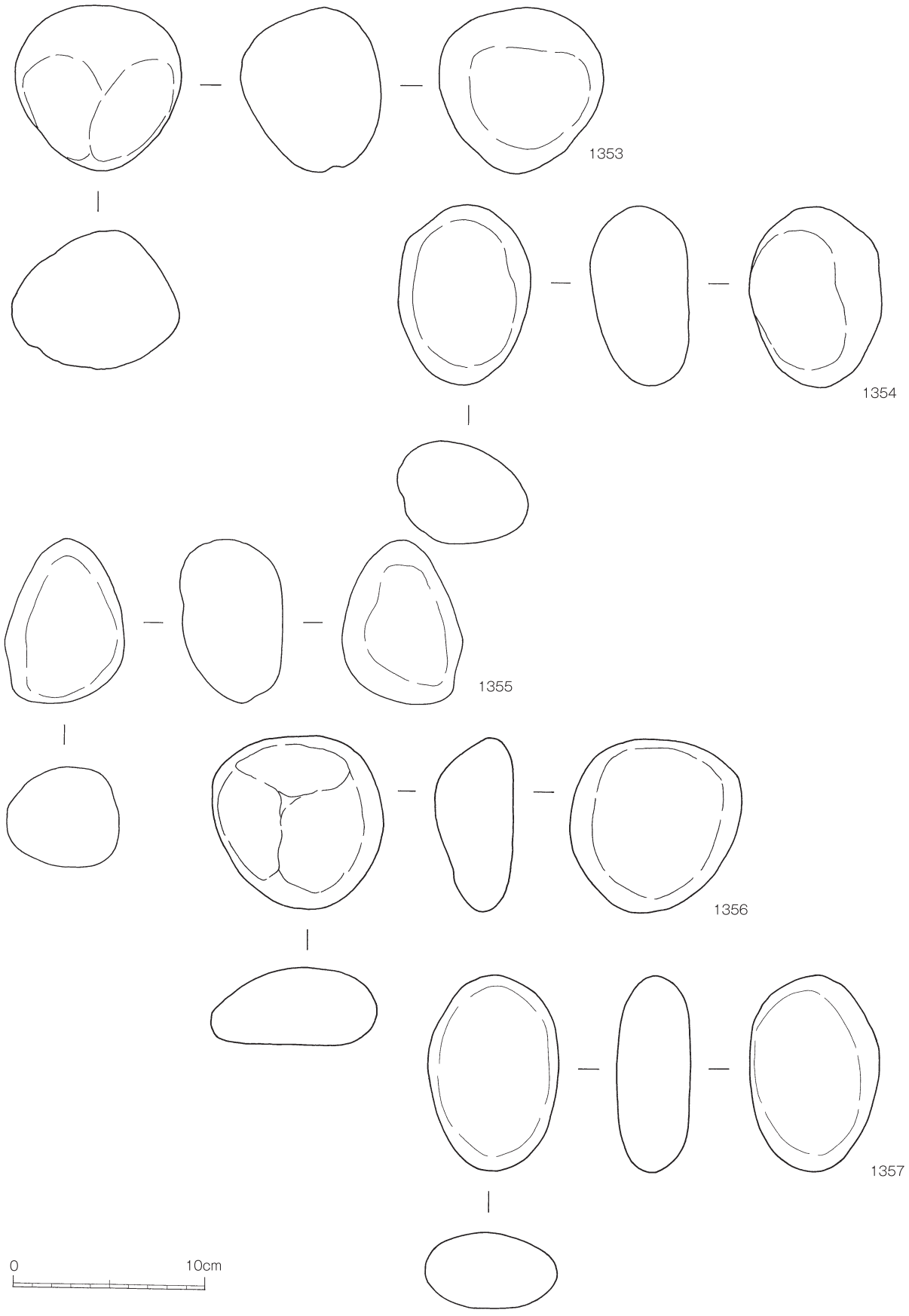
1352は丁寧な敲打成形により成形した石斧であるが，刃部を欠損している。石質は安山岩である。

投弾等（第210図～第216図）

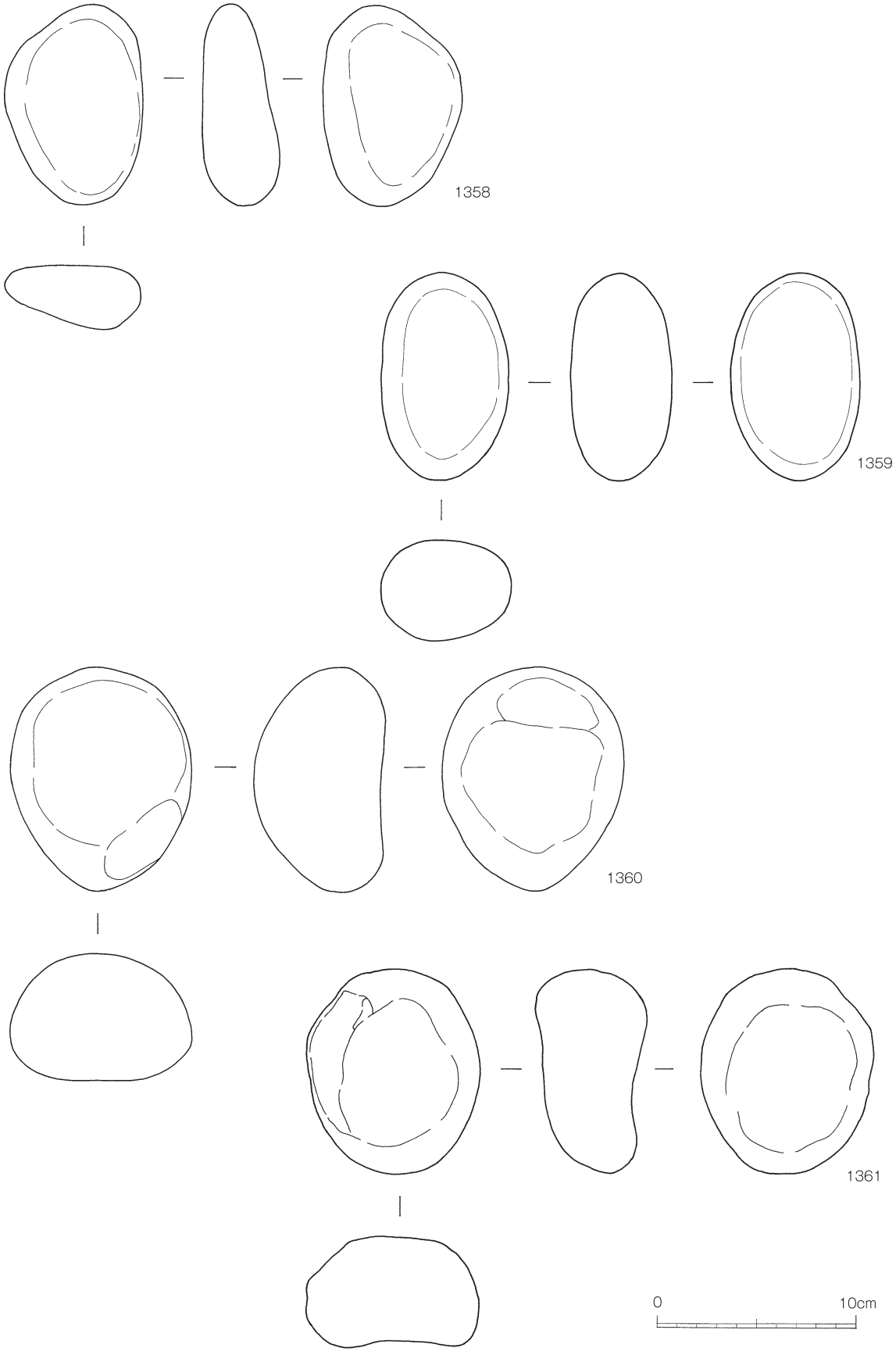
空堀及び土坑群の投弾も大型円形土坑２と同様に縄文時代の磨石・敲石・凹石等及び自然の円礫が出土している。縄文時代の磨石等については，流れ込みか，それらを投弾として転用したかについては，自然礫の出土状況と同様に規則性らしき状況は見られなかったためその判別は不可能であった。縄文時代の磨石等あるいは，それらの転用品と思われるものとして，1357・1359・1365・1369・1372・1375・1378・1379がある。

1357・1359は砂岩製の磨石で，全面が滑らかなものであり，1365は，擦痕が部分的に観察されるものである。1369は，敲打痕のある半欠品である。1372はやや大型の磨石，1375は，長径が10cm以下の小さ目の安山岩製の磨石である。1378は，円形の凹石，1379はやや大型の凹石である。

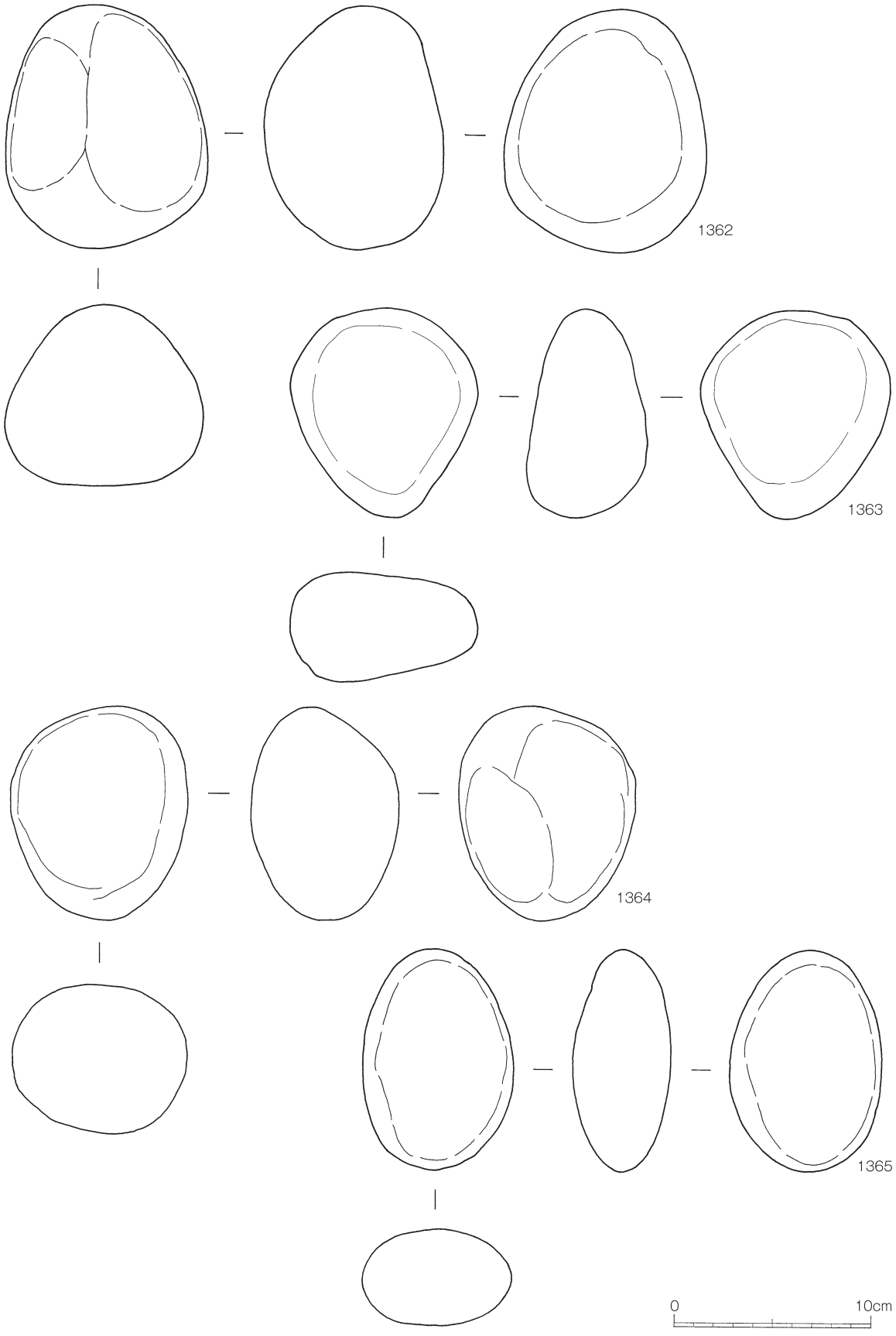
1353～1356，1358，1360～1368，1370・1373は，最大長約10cm程度での自然の円礫であり，石質は安山岩と砂岩のいずれかである。また，1374・1376は，両手で頭上に抱え上げて投げ落としたのでは，と思われるような大きなものもある。特に1376は，半欠品であるが完形であれば４kg以上の重量であったろうと思われる。



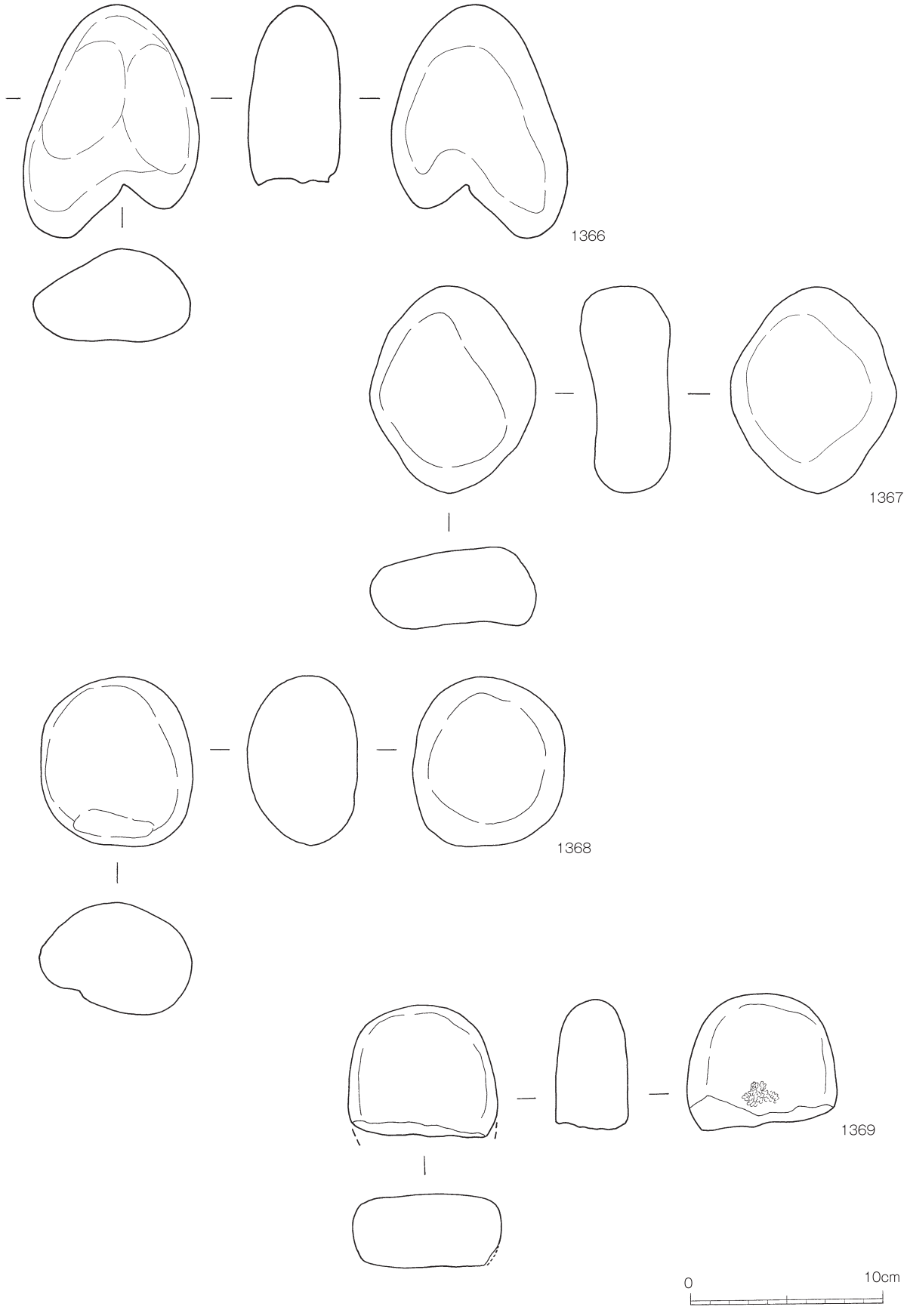
第210図　空堀及び土坑群出土遺物（6）



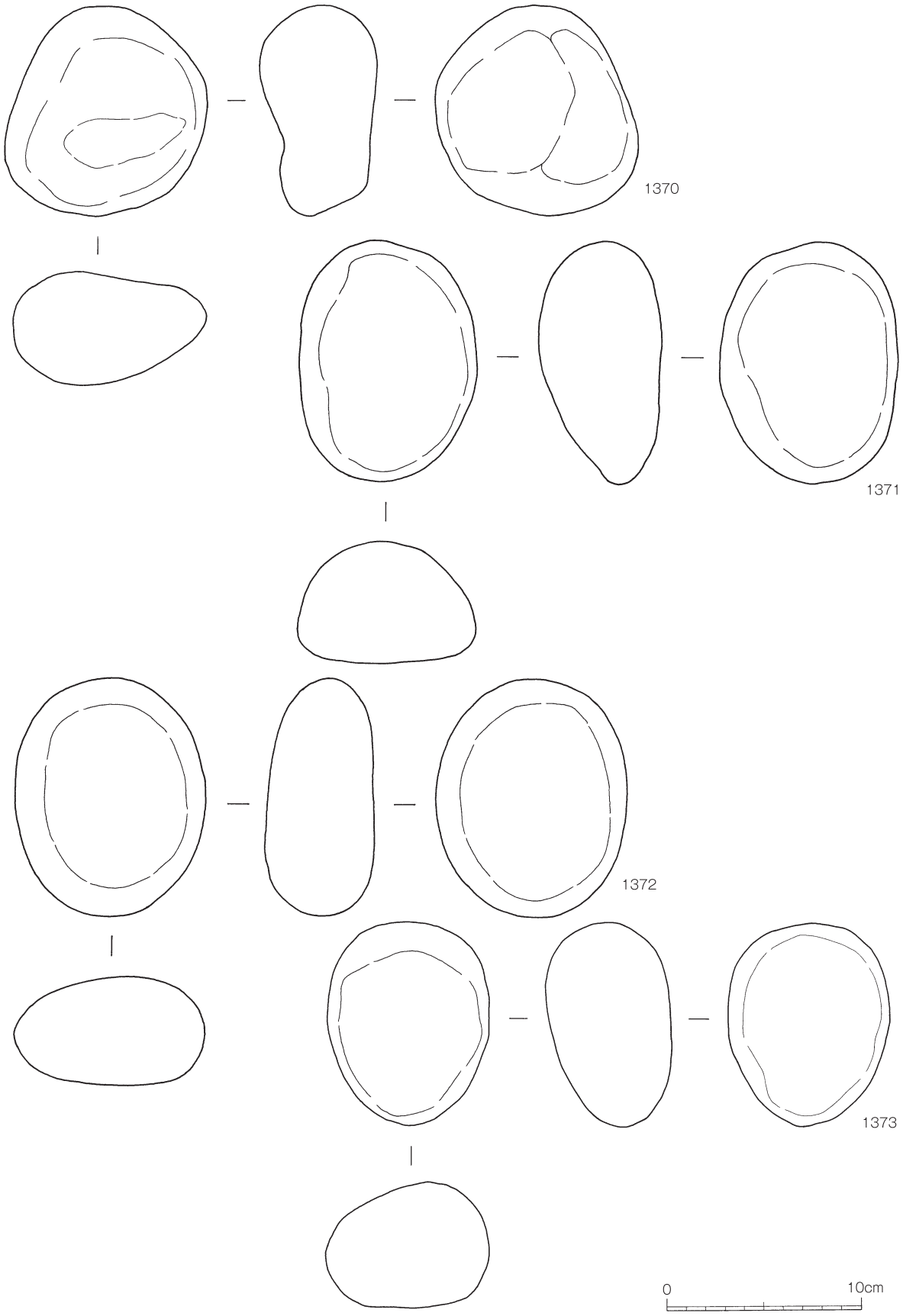
第211図　空堀及び土坑群出土遺物（7）



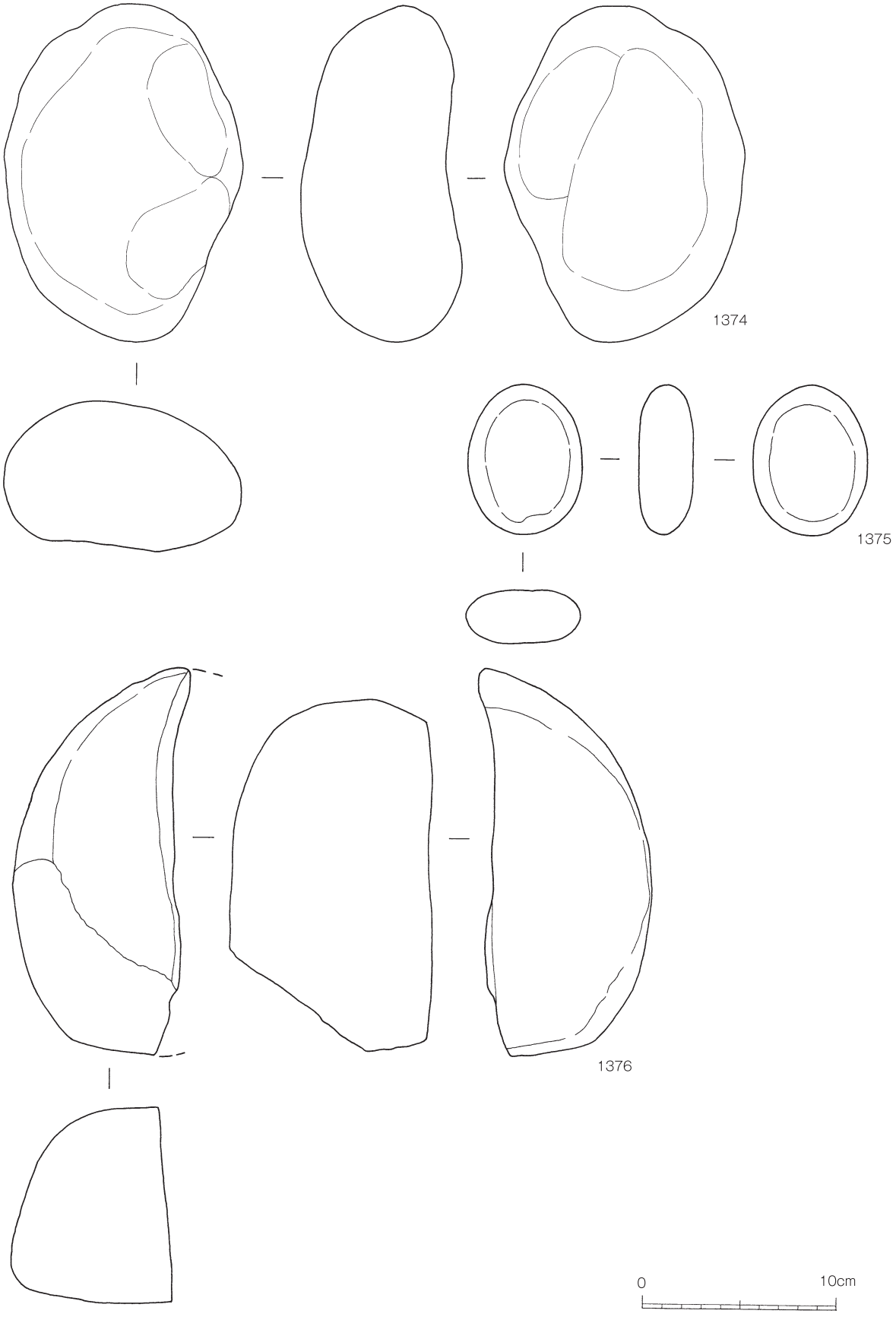
第212図　空堀及び土坑群出土遺物（8）



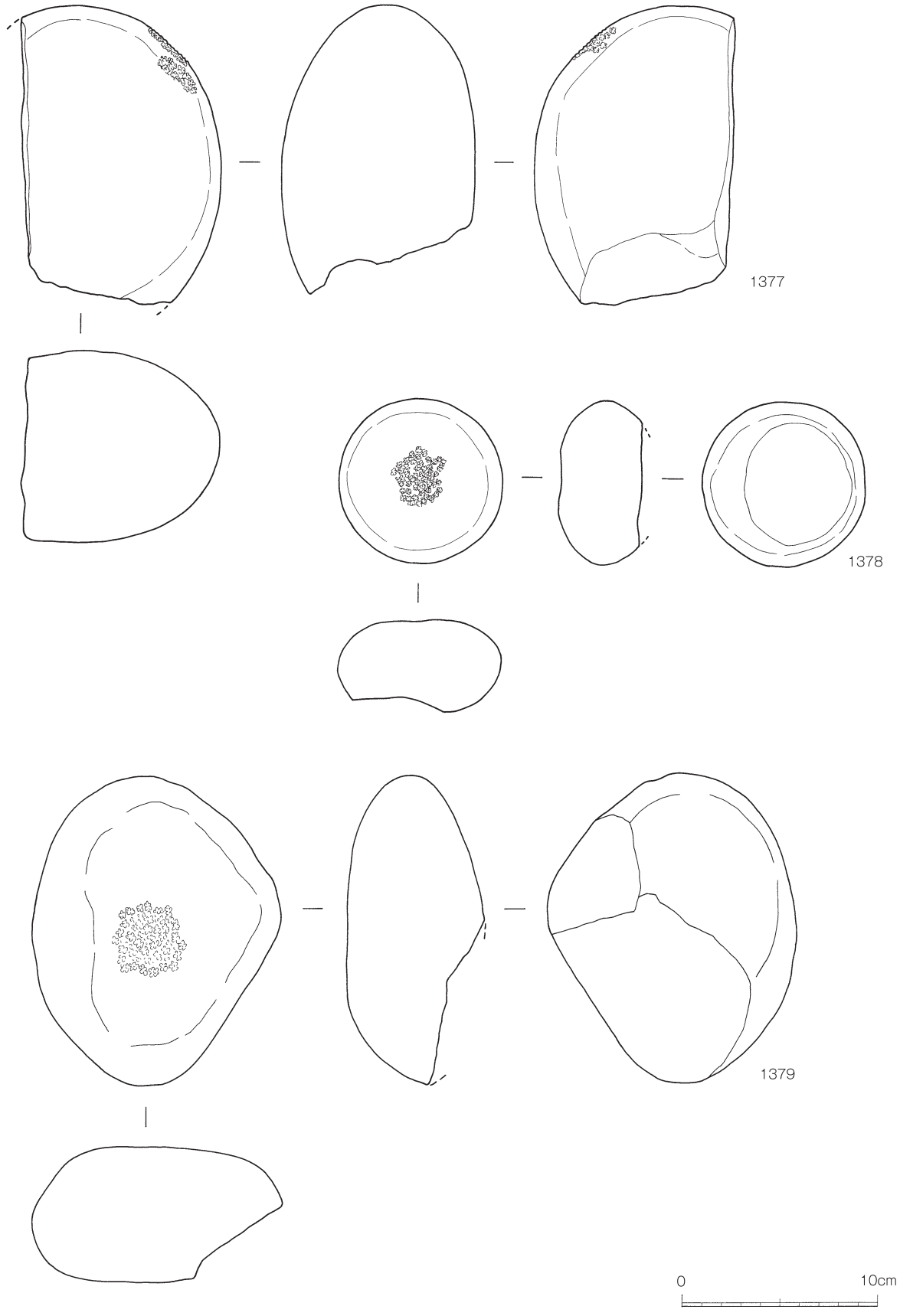
第213図　空堀及び土坑群出土遺物（9）



第214図　空堀及び土坑群出土遺物（10）



第215図　空堀及び土坑群出土遺物（11）



第216図　空堀及び土坑群出土遺物（12）

（3）曲輪２（第217図）

曲輪２は，やや南西に傾斜しているだけで，空堀及び土坑群の部分を除けばほぼ平坦である。この曲輪は，本城の調査区内の曲輪では最も遺構数の多かった曲輪である。遺構としては，曲輪１から伸びる空堀及び土坑群の他に，竪穴遺構３基，炉跡14基（曲輪１との境部分を含む），土坑と認定したもの37基，中世墓３基及び無数の柱穴等である。竪穴遺構以外の遺構は，曲輪３でも検出さていることから，比較検討からも，曲輪３の特徴及び出土遺物の説明の後に，曲輪２・３の中世墓，土坑，炉跡について合わせて順に述べていくものとする。

・竪穴遺構

曲輪２から３基の竪穴遺構が検出された。これら３基は，曲輪２の南東部，Ｉ・Ｊ－17・18区に集中している。遺構内からの遺物の出土は少なく，竪穴遺構３からは中世の遺物が３点出土したのみである。

竪穴遺構１（第218図）

本遺構はＪ－17区から検出されたものである。検出面は，Ⅲ層のアカホヤ面である。平面プランは隅丸方形でその規模は３ｍ×３ｍである。検出面からの深さは側壁部分で約40㎝，中央部で約20㎝と中央部の床面が盛り上がる構造である。南南東側の張り出し部は階段状を呈しており，出入り口の可能性もある。また，側壁に沿った床面は全体的に中央より低いことから，壁帯溝を意識したものであろうか。南側の張り出しについては，そのプランを確認できなかった。なお，中央セクションベルトの堆積状況は，第218図に記した通りである。

竪穴遺構２（第218図）

本遺構はＪ－18区で検出されたものである。検出面は，Ⅲ層のアカホヤ面である。平面プランは隅丸方形を呈し，その規模は2.9m×2.7m，検出面からの深さは平均的な床面までが約20㎝である。西側から東側側壁の床面に沿って逆「Ｌ」字状の幅・深さ共に約15㎝，南南東側壁と南側壁床面に沿って，長さ約１ｍ幅約15㎝，深さ15㎝壁帯溝が検出された。また，これらに沿うような形で，11本の柱穴が確認された。

柱穴の規模はほぼ同じであり，プランは楕円形のものが多い。壁面近くにある土坑は，後世の撹乱である。なお，検出面から床面までが20㎝程度と浅いことから，上面の削平が著しかったものと思われる。

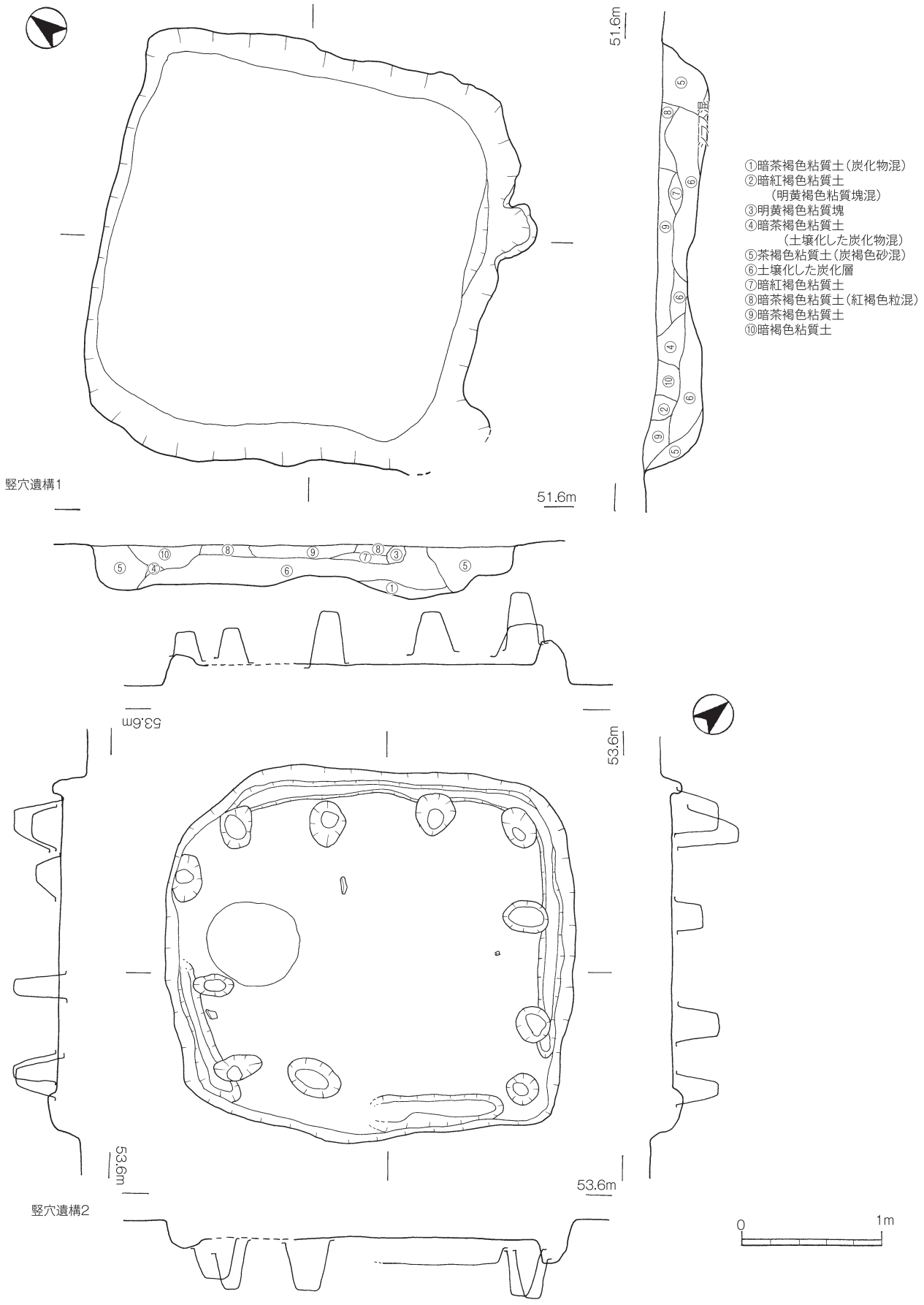
竪穴遺構３（第219図・第220図）

本遺構は，Ｉ－18区で検出された。検出面は，Ⅲ層のアカホヤ面である。平面プランは，長方形を呈し，規模は3.9m×3.5m，深さは約50㎝である。遺構の北東部と北西部の壁に沿って壁帯溝状の溝が検出され，この溝には，炭化物が集中して堆積していた。溝に付随して柱穴が２本確認された。柱穴としたが柱との関連があるかは定かではない。遺構全体の埋土は，主に黒茶褐色土が占めるが，この中からもシラスブロックの他に炭化物が部分的に確認された。

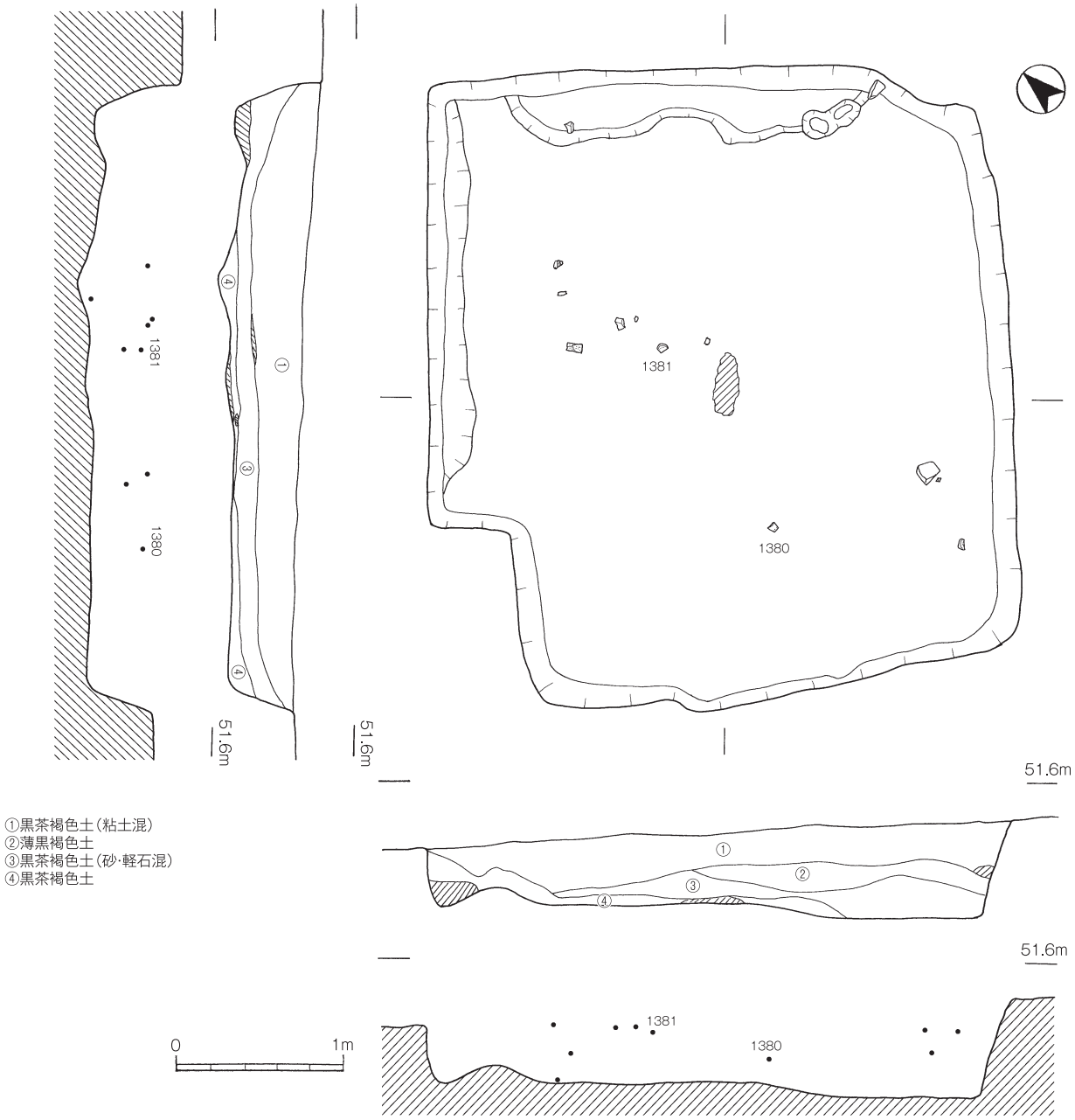
遺物は小片が数点出土した。図化し得たのは，３点であった。1380は瓦器質の擂鉢である。内面に櫛状の条痕が確認できる。1381は土師器の皿である。口径は8.2㎝を測り，底部から直線状に口縁部へ立ち上がるものである。底部切り離しは，糸切りである。1382は龍泉系青磁の14世紀代の端反りの碗である。



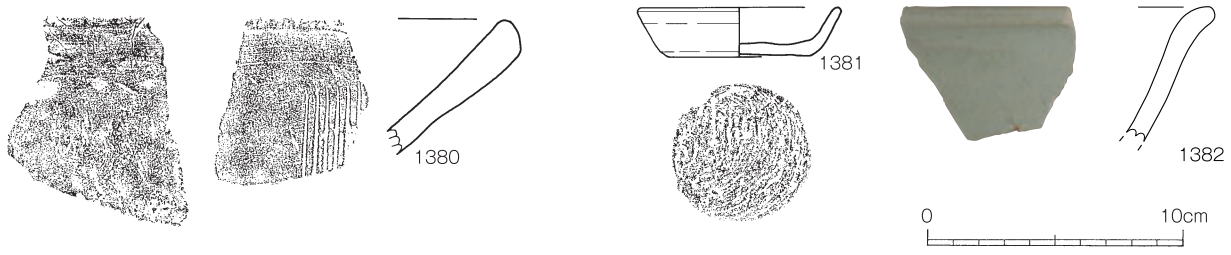
第217図　曲輪２遺構配置図



第218図　竪穴遺構１・２



第219図　竪穴遺構３



第220図　竪穴遺構３出土遺物

（4）曲輪３（第221図）

曲輪３は，発掘範囲の中ではもっとも標高が低く，約40mである。南西へなだらかに傾斜しており，南側は後世に畑地として削平されたものと思われる。この曲輪からは，大き目の投弾，被熱したと思われる黒色化した投弾類，中世墓1基，土坑３基，炉跡５基及び青磁碗と土師器の埋納遺構などが検出されている。

曲輪２の中世墓，土坑や炉跡についても，ここであわせて述べていく。

・投弾等（第222図～第224図）

曲輪３の投弾は，そのほとんどが小児頭大あるいは，それ以上の大きさのものである。重量は２kg～３kgが平均的であるが，1386は，６kgという重量である。どれも自然石であり，石質は砂岩が主である。また，1385・1386は，被熱のために表面が黒色に変色している。空堀や土坑群で出土したような，つぶてのような自然石はほとんどなく，大型のものが多いのが特徴である。なお，Ⅲ層の包含層から出土した石については，縄文時代の磨石，敲石や凹石として第Ⅴ章でとりあつかった。

（5）曲輪２・３共通の遺構

・中世墓１（第225図・第226図）

中世墓１は，曲輪３の中央部であるF-11区から検出された。平面プランは，やや台形に近い隅丸方形で，主軸はほぼ南北である。北壁辺が１m，南壁辺が1.2m，南北の主軸は2.2mである。検出面はⅢ層である。検出面から床面までの深さは，約25cmであることから，現代までにかなり削平されたことが伺える。人骨については，残存していたものの，骨粉状でその詳細は，不明である。

出土遺物は，土師器１点・洪武通寶２点・鉄釘３点でほとんどの遺物が中央部に集中している。土師器は，口縁径約12cm，器高約３cm，底部径約６cmの糸切底である。平坦な底部からやや内弯しながら口縁部へと至る。口縁部の外面には，煤が付着していた。釘３本は，腐食が激しく図化できなかった。土師器よりやや低いレベルで検出された。

洪武通寶２枚が出土した部分は，幅約数cm・長さ10cm程度の緑青の広がりが観察され，わずかではあるが繊維の痕跡も観察された。このことから，洪武通寶は，ある程度の枚数を布状の袋等に入れて供献したものと想像される。

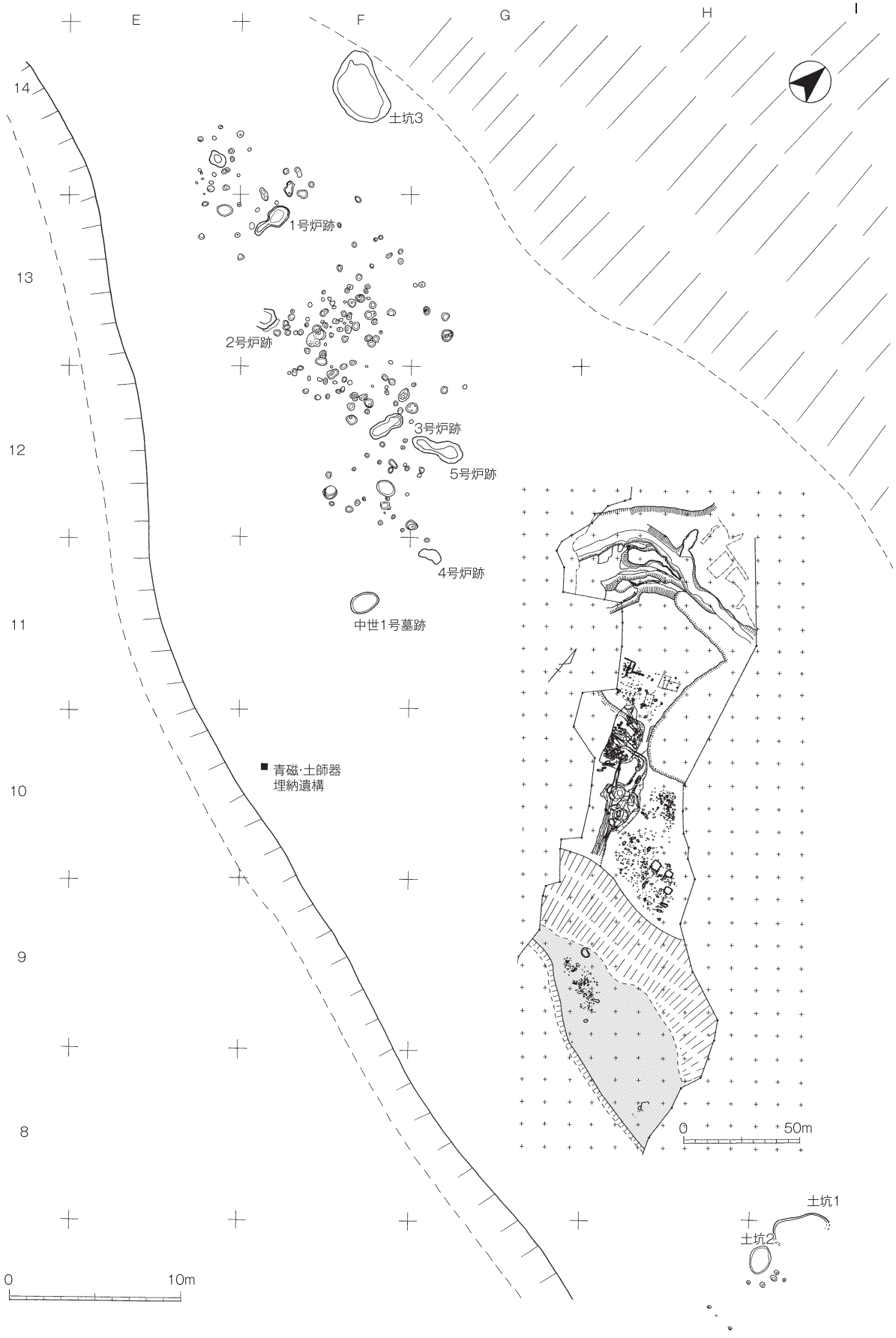
中世１号墓が土坑墓であったか，木棺墓であったかについては，鉄釘が中央部で出土したことしか，客観的な材料がないためにどちらともいえない。

・中世墓２

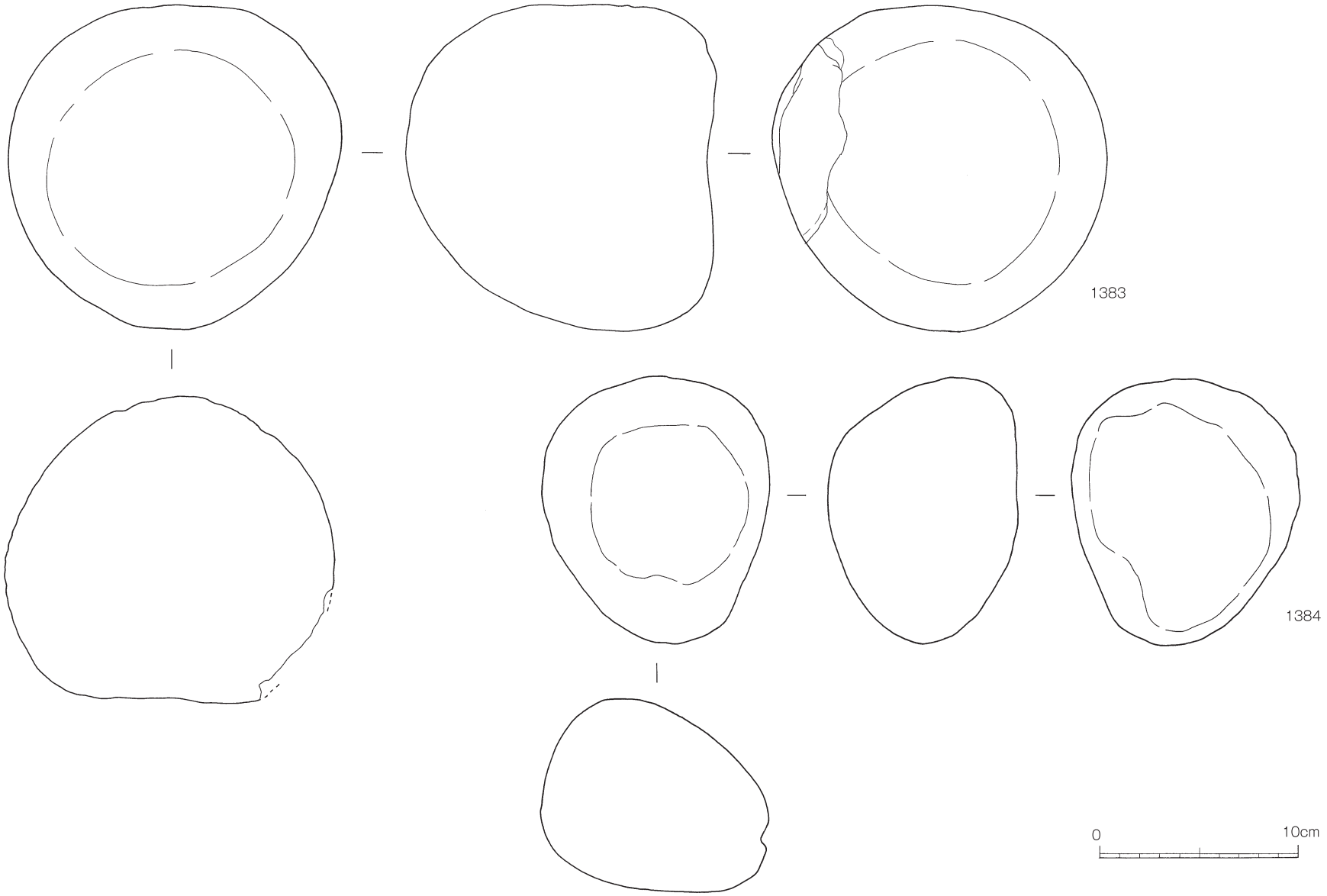
中世墓２は，曲輪２の中央部よりやや西側であるⅠ-19区から検出された。平面プランはほぼ円形で，その直径は80cmである。

この中世墓２からは，人骨は出土しなかったが，鉄釘と思われる小片が埋土より数点出土したこと，南側数mのところに，次に述べる中世墓3が検出されたことや中世墓３とその埋土が全く同一で，遺構の形状も近いことから，中世墓としたものである。

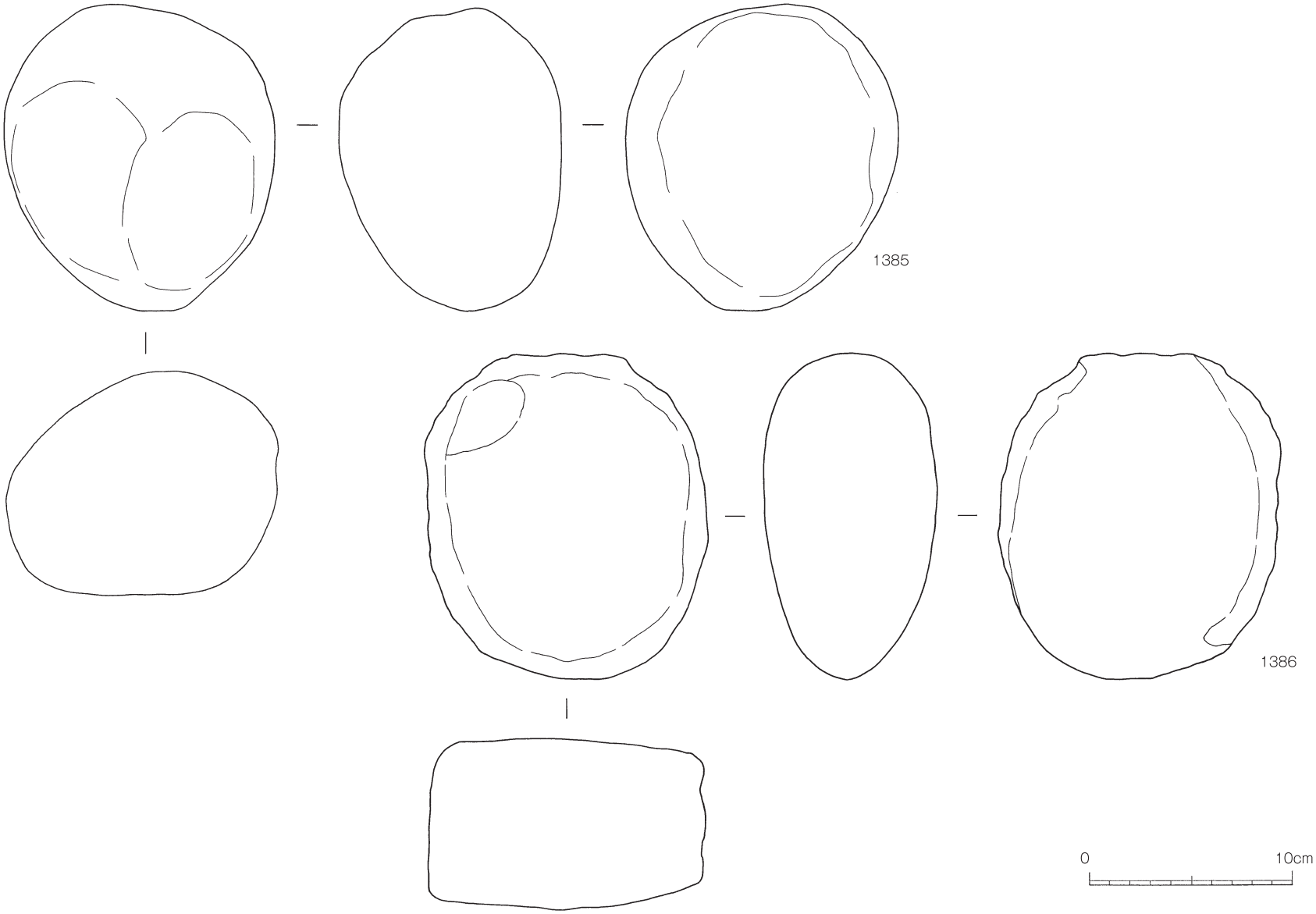
なお，この周辺には中世墓２及び中世墓３に，その埋土や遺構の形状が類似した直径が80cm～１mで円形に近い土坑33～土坑37がある。人骨や遺物等は，出土していないが，これらは，中世



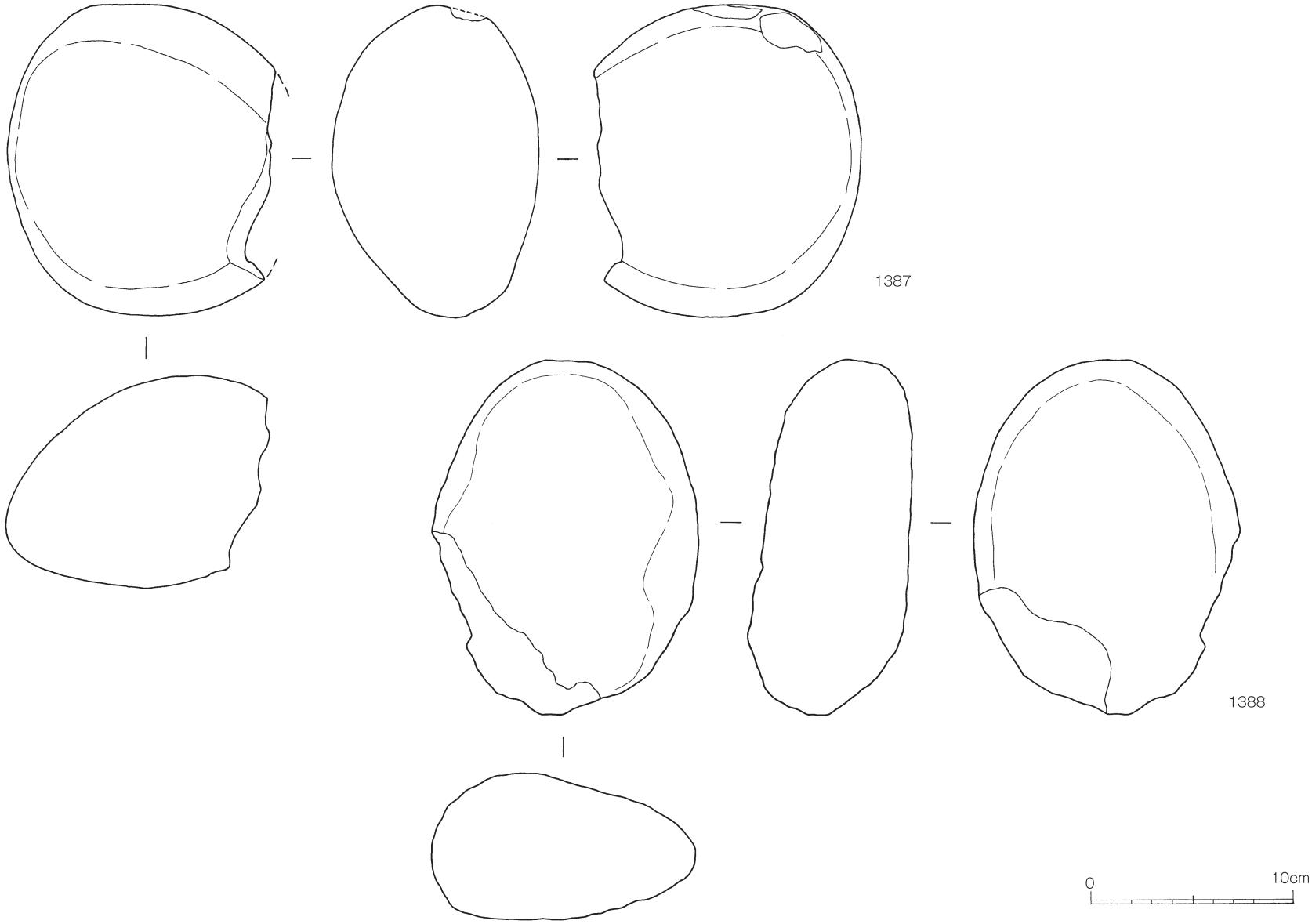
第221図　曲輪３遺構配置図



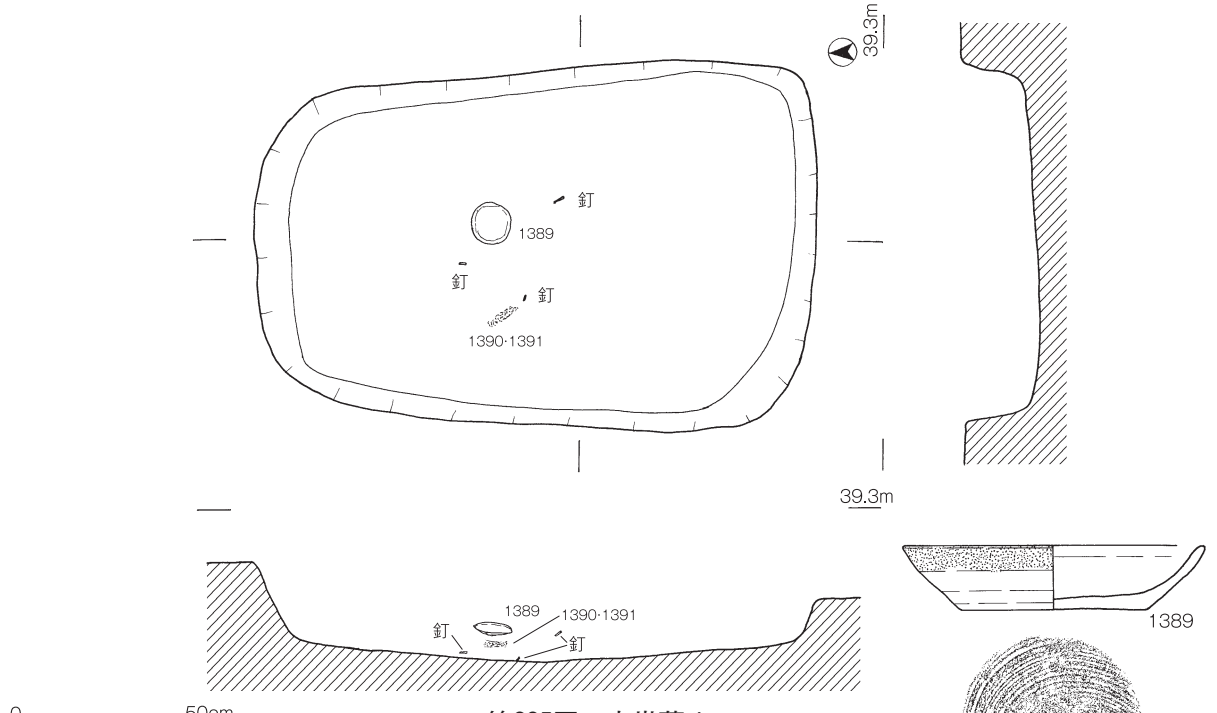
第222図　曲輪３出土遺物（1）



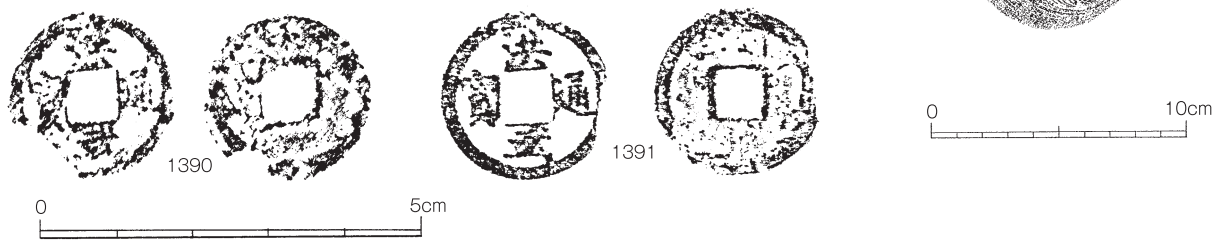
第223図　曲輪３出土遺物（2）



第224図　曲輪３出土遺物（3）



第225図　中世墓１



第226図　中世墓１出土遺物

墓の可能性があるものであると言えよう。

・中世墓３（第228図）

中世墓３は，曲輪２の中央部よりやや西側であるⅠ-19区，中世墓２から南に約数mのところで検出された。平面プランは，ほぼ円形でその直径は，約80㎝である。

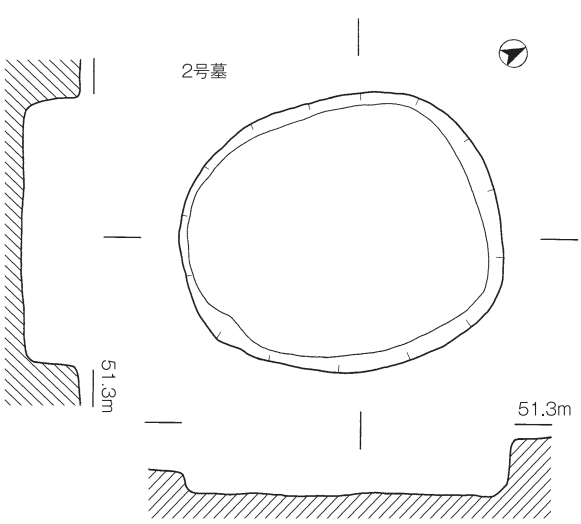
人骨の残りは良好ではなかったが，主な骨について，ご指導をいただいた平成９年度当時の鹿児島大学歯学部の小片教授，竹中助手によると，南側左の大きな骨が前頭骨，その下から南へ伸びるのが左上腕骨，その右側が骨盤であるということであった。

遺物としては，古銭が２枚出土している。1枚は前頭骨のやや上，もう１枚は遺構の中央部で，レベルは2枚ともほぼ同じである。腐食が激しく，銭貨の種類は不明である。

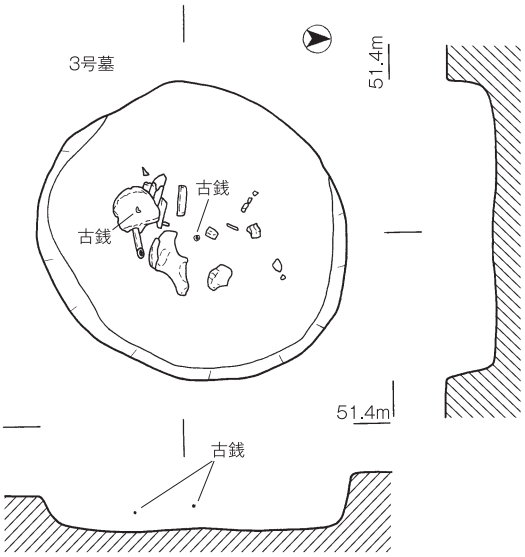
この遺構を中世墓としたのは，周辺に古代や近世の遺構がほとんどないこと，同一グリッド内に洪武通寶が供献された中世墓４が存在していることから，中世墓と認定したものである。

・中世墓４（第229図）

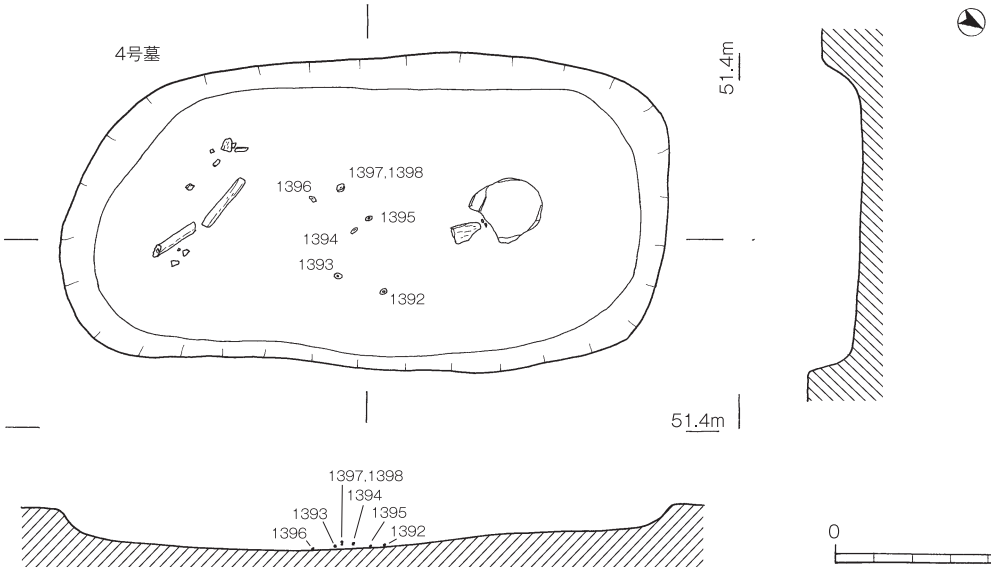
中世墓４は，曲輪２の中央部よりやや西側であるH-19区，中世墓３から南へ８ｍのところで検出された。平面プランは，ややいびつな隅丸方形である。長軸が約1.5m，短軸が80㎝である。主軸は，北北西から南南東にかけてである。人骨の残りは良好ではなかったが，主な骨について，３号墓と同様にご指導をいただいた平成９年度当時，鹿児島大学歯学部の小片教授，竹中助手に

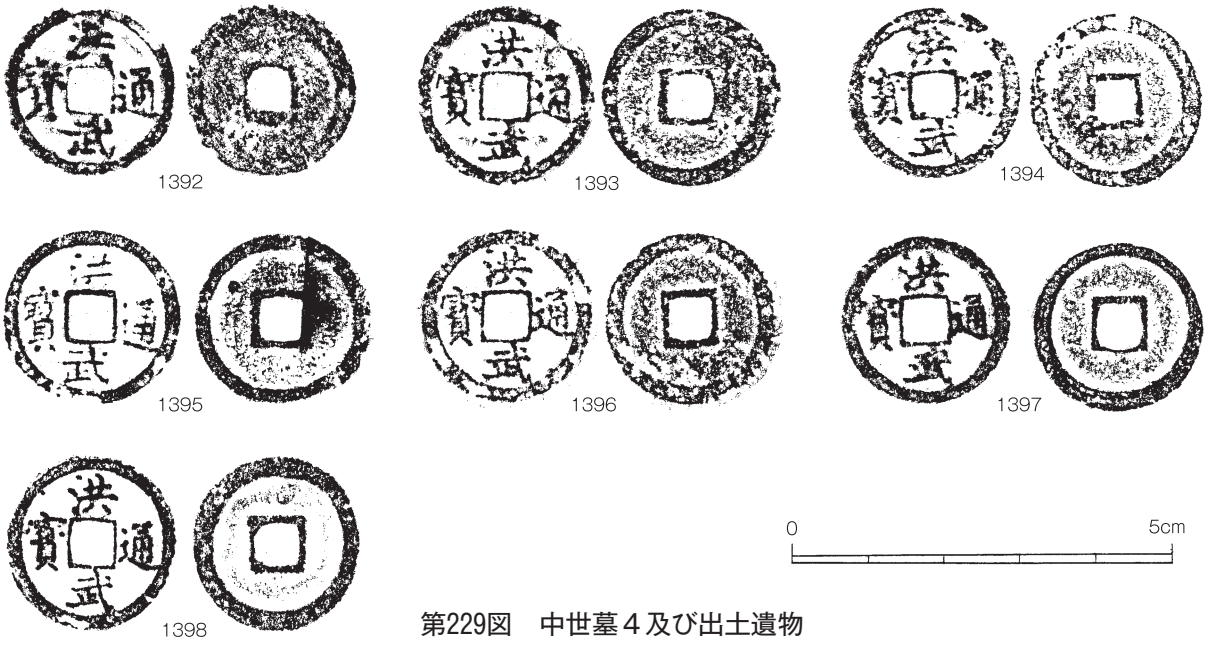


第227図　中世墓２



第228図　中世墓３





第229図　中世墓４及び出土遺物

よると，頭位は北，伸展葬であるが，手・腕・脚の状況は不明，性別・年齢も不明であるということであった。

遺物は，遺構中央部に床着状態で洪武通寶が7枚出土している。

なお，1号墓でも述べたが，検出面から床面までの深さが，どの中世墓も浅いことから，現代までにかなりの削平を受けたことが伺える。

・土坑

分布図（第193図・第217図・第221図）

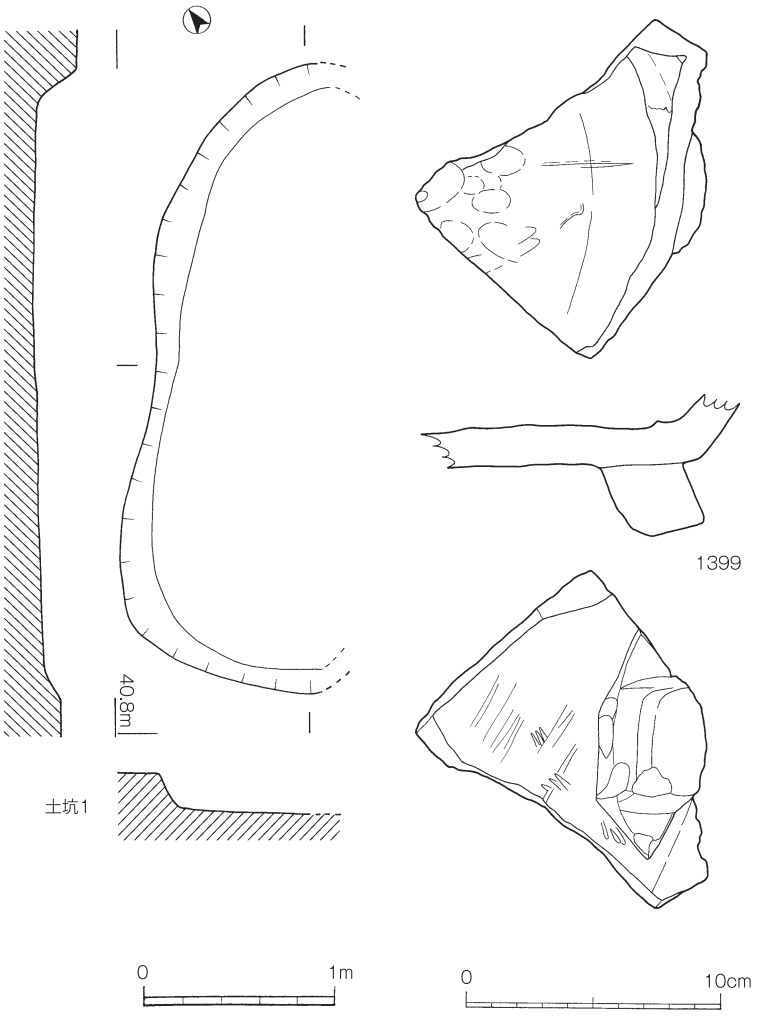
実測図（第230図～第239図）

中世の土坑と認識されるものは，曲輪１～曲輪３で49基検出された。ただし，古代の遺構と重複しているため，古代の土坑の可能性のあるものもある。

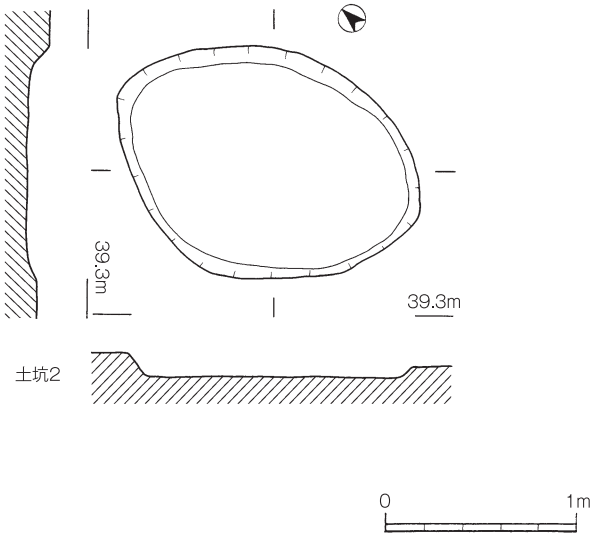
土坑１は，曲輪３の最南東部に土坑２と並ぶよう検出された。長軸が3.3mでやや東へ傾く。東側半分は，撹乱されている。埋土中から土師質の火舎か火鉢の底部で脚付きのものが出土している。

土坑２は，長径1.7m，短径1.2mの楕円形で土坑１の南側数メートルの場所に位置する。出土遺物はなかったが，埋土等から中世と判断した。また，土坑１・土坑２の周辺には数個のピットが確認された。建物とは，認定できなかったが，埋土等から同時期の中世と判断した。

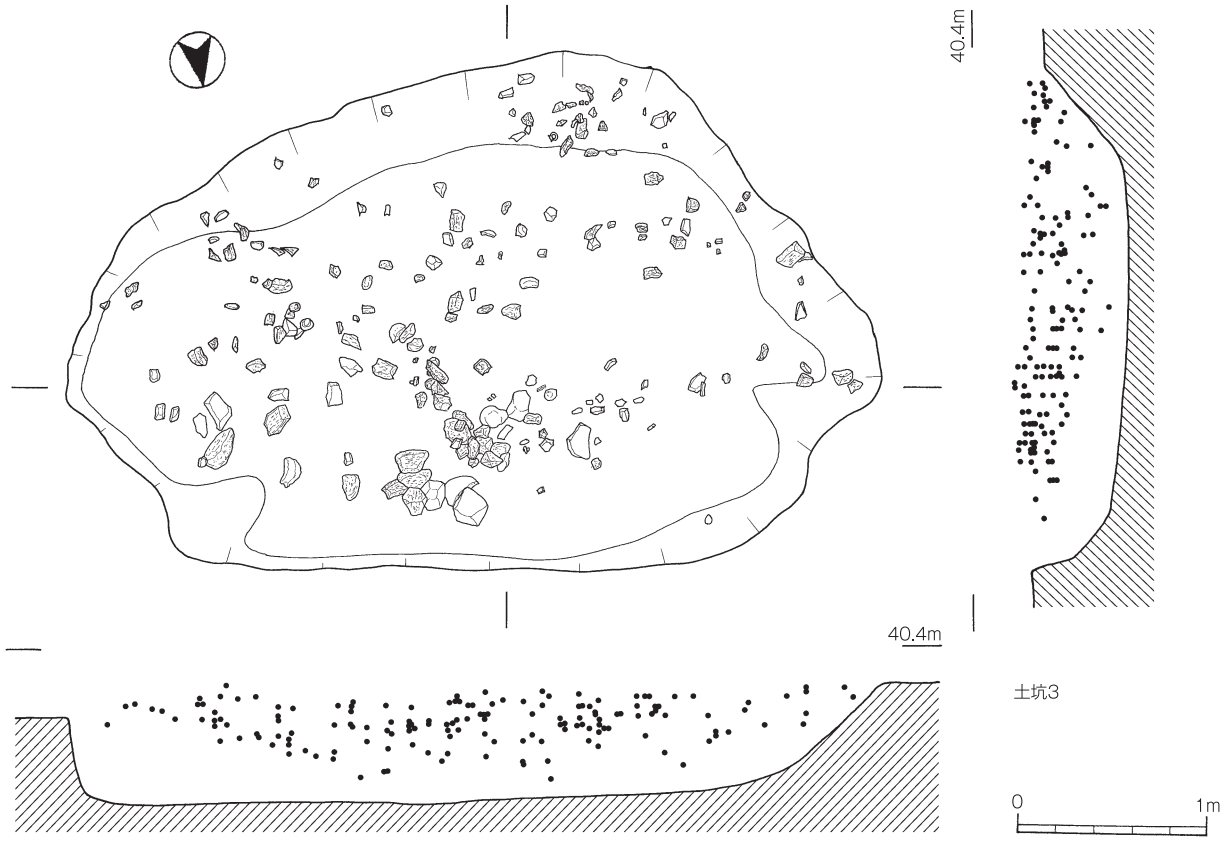
土坑３は，曲輪３の北西部，曲輪２の直下に位置する不定形で大型の土坑である。長径が約４m，短径が約３mである。埋土内の遺物のそのほとんどが軽石であり，断面から観察すると水溜りに軽石が浮いたような状態に感じられる。遺物としては，1400のやや端反りの白磁及び1401の土師質の擂鉢と器種については不明であるが，瓦器質の1402が出土してい



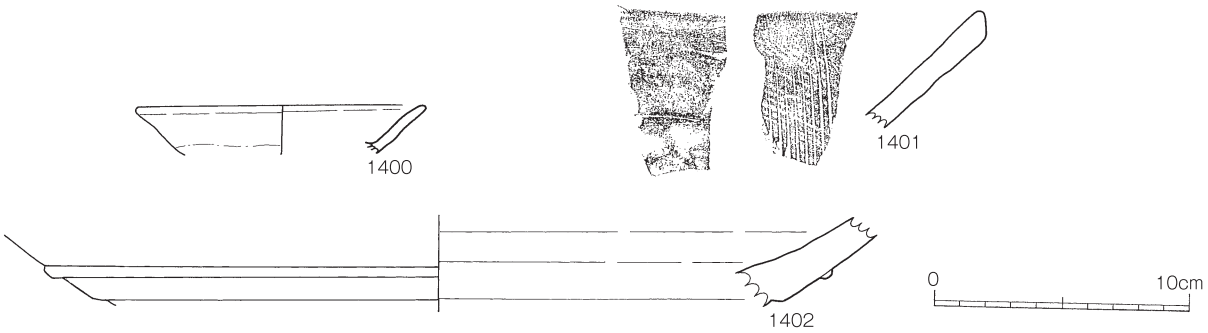
第230図　土坑１及び出土遺物



第231図　土坑２



第232図　土坑３



第233図　土坑３出土遺物

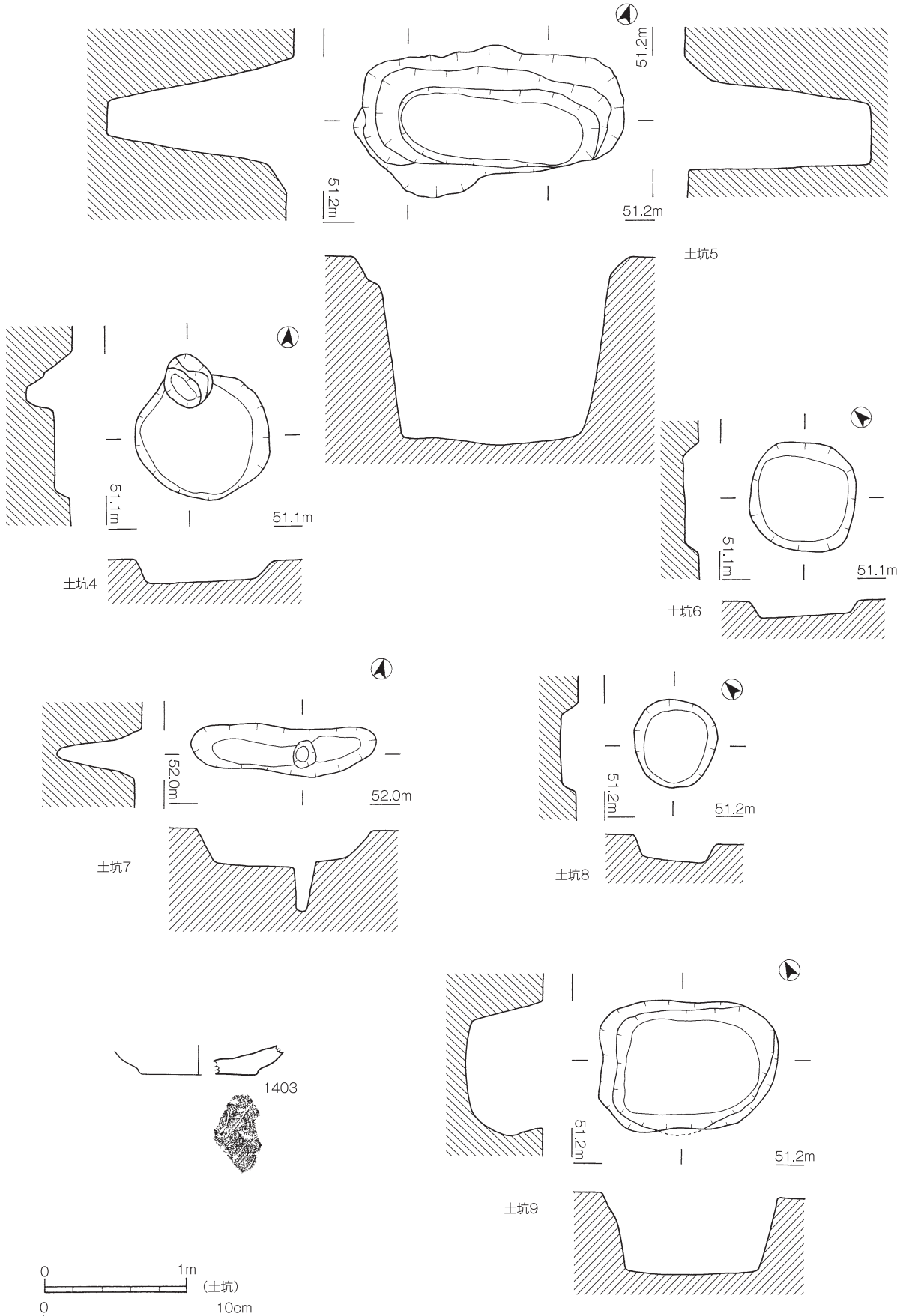
る。現場の状況では，大型の水溜りか，曲輪２から落下した水により穿たれたもののように感じた。

以下の土坑については，タイプ別の分類を試みたがその形状はさまざまであったので特徴のある土坑について述べていくことにする。他については，土坑観察表を参考にされたい。

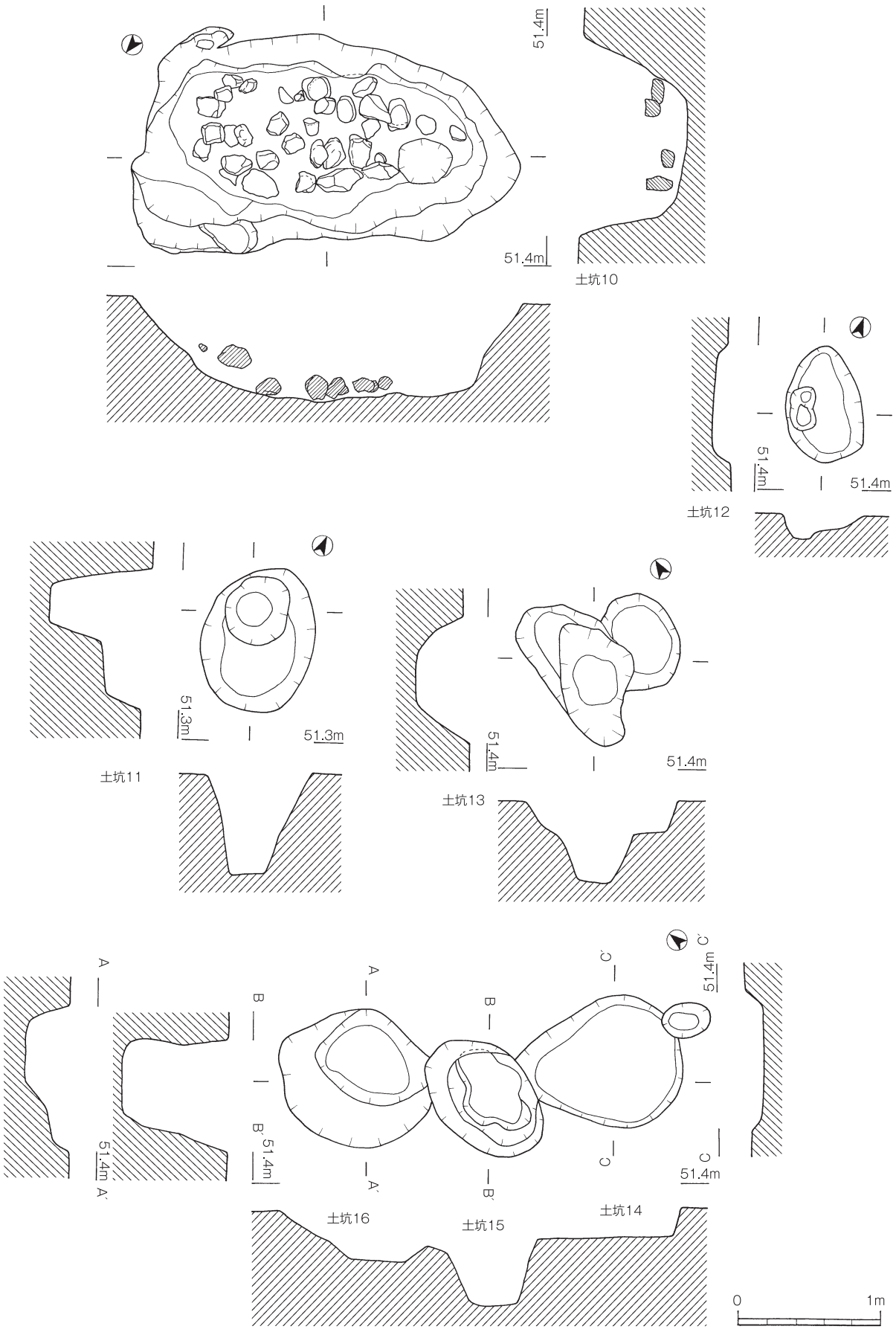
土坑10は，曲輪２の南側の斜面近くに位置し，長軸約３m，短軸約２m，深さ約１mで底面までに階段状の段のある不定形なものである。埋土中からは，底面に近い状態で，投弾と思われる小児頭大の安山岩や砂岩の自然石が観察された。土坑33～土坑37は，中世墓でも述べたが，その形状や周りの中世墓の分布状況から中世の墓孔の可能性がある。

・炉跡（第240図）

本遺跡からは，19基の炉跡が検出された。これらは，全調査区の中で３か所の地点に集中している。



第234図　土坑４～土坑９及び出土遺物



第235図　土坑10～土坑16

第１地点は，曲輪３のＦ・Ｇ－11～14区であり，１号炉跡～５号炉跡が所在している。第２地点は曲輪２のＩ－20・21区であり，６号炉跡～14号炉跡が所在している。第３地点は同じく曲輪２のG－22区であり，15号炉跡～19号炉跡が所在している。

第１地点

１号炉跡（第241図）

本遺構は，Ｆ－13区に位置する。南北方向を軸とし，平面形は楕円形を呈し，全長は約２ｍに及ぶ。壁面は赤褐色の粘土で形成されており，約６㎝の幅で硬く焼けている。焚き口部にも確認でき，残存状態は良い。炉内に数点の拳ほどの礫が確認された。床面までの深さは19㎝である。埋土は主に黄褐色粘土であるが，そのほかに炭化物や壁面と同じ赤褐色粘土塊も含まれていた。灰出し部の南端には炭化物の集中域が確認された。

２号炉跡（第241図）

本遺構は，Ｆ－13区に位置する。炉部の粘土壁が東側から南側にかけて60㎝程残存していた。また，土層断面からわかるように，床面のみの残存である。床面はかなりの火を受けたと考えられる。赤褐色の粘土壁の下部にはかなり多くの炭化物が確認された。赤褐色粘土と，炭化物の混土が東側へ広がりをみせている。炉壁の厚さは12㎝であり，大型の炉であったと考えられる。

３号炉跡（第241図）

本遺構は，Ｆ－12区に位置する。ほぼ南北方向を軸とし，平面形はくびれのある長楕円形を呈す。全長は約２ｍで，床面までの深さは約30㎝程であった。厚さ５㎝程の赤褐色粘土壁が炉部を巡り，焚き口部で一部欠損している。焚き口部の黄白色粘土塊は焚き口部の粘土が崩れたものと考えられる。埋土は主に茶褐色土であるが，一部炭化物や赤褐色の粘土塊を含んでいた。灰出し部の両端には大小２基のピットが確認された。

４号炉跡（第241図）

本遺跡は，G－11区に位置する。この遺構は他の炉跡と違い，粘土等による成形がみられない。形態的には，他の炉跡同類の楕円形もしくは瓢箪形である。床面は焼け，暗褐色土が硬化しているが，南西部は硬化したブロックがあるのみである。また，埋土中には炭化物集中域が確認できた。出土遺物には縄文土器，成川式土器，中世の土師器などの小片がある。

５号炉跡（第242図）

本遺構はG－12区に位置する。トレンチに切られており，平面形が定かではない。部分的に炉壁の赤色粘土が残存する。埋土は主に炭化物を含んだ黄褐色土であり，床面には炭化物の集中域がみられた。炉部の深さが浅くなるのは，削平されたためである。

第２地点

６号炉跡（第242図）

本遺構は，Ｉ－20区に位置する。平面形は円形で，直径約80㎝である。粘土壁は厚さ約10㎝で，明赤褐色を呈している。いたる所で欠損しているため，全体形は明らかではない。焚き口部の粘土壁は，ゲート状に並んでいたと思われる。埋土には，黄白色の粘土が部分的に確認された。

７号炉跡（第242図）

本遺構は，Ⅰ－21区に位置する。平面形は円形で，直径は約85㎝である。粘土壁は厚さ約10㎝で，橙色を呈する。炉の奥壁に付着するように，炭化物の層が確認された。床面は平坦ではなく，最も深いところで26㎝である。

８号炉跡（第242図）

本遺構はⅠ－21区に位置する。炉壁は一部のみの残存であり定かではないが，1号炉跡と同形のものと考えられる。これまでとは違い，焚き口部に炉壁が無く，炉部から灰出し部までが一連の構造である。埋土は主に，土壌化した炭化物の層が占める。

９号炉跡（第242図）

本遺構はⅠ－20区に位置する。ほぼ南北に軸を設定し，全長は1.65ｍである。炉壁は12㎝と厚く，赤褐色を呈する。南側の灰出し部には，若干の灰白化した粘土が堆積していた。焚き口部の炉壁へ覆いかぶさるように堆積している。また，炉部の奥壁下には土坑が確認された。深さは50㎝であり，埋土は黒茶褐色粘質土である。

10号炉跡（第243図）

本遺構はⅠ－20区に位置する。東西に軸を設定する。この遺構はこれまでと違い，円形の炉部が２つ繋がった形で検出された。斜線部で示した部分は暗茶褐色を呈している。明赤褐色の炉壁が，遺構のくびれ部分で繋がっている。使用時期の差も考えられるが，詳しい用途は定かではない。中央の炉部では，下層から炭化物の層が確認された。西側へ続く灰出し部を含めると，全長はおよそ３ｍに及ぶ。

11号炉跡（第243図）

本遺構はⅠ－20区に位置する。平面形は楕円形を呈し，軸はほぼ南北である。炉壁は厚さ15㎝ほどで，一部欠損している。灰出し部には，固結した黄白色の粘土が堆積している。明赤褐色の炉壁とは明らかに色調が異なっており，後から堆積したことがわかる。床面は平坦で，船底状を呈す。深さは28㎝である。

12号炉跡（第243図）

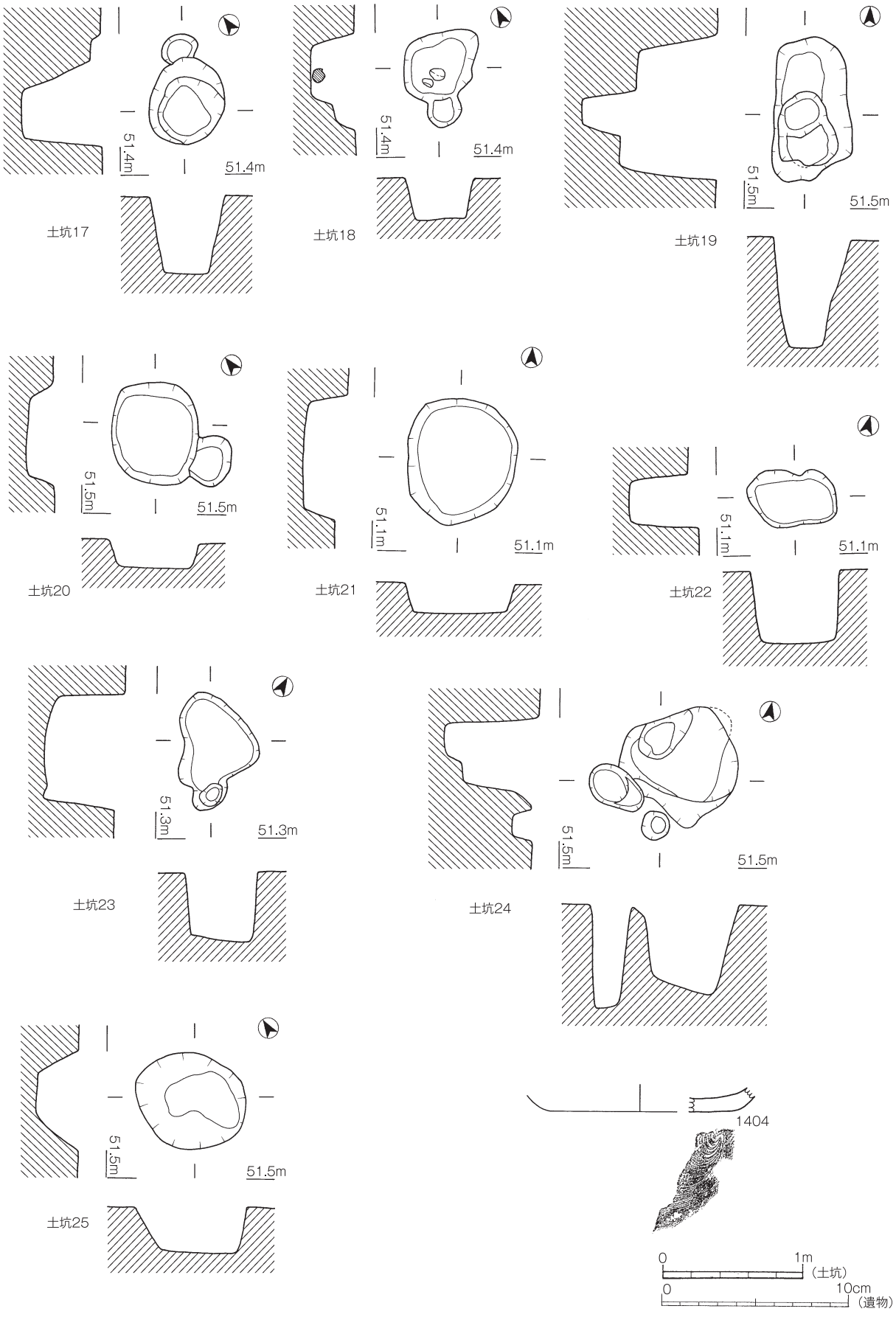
本遺構はⅠ－20区に位置する。この遺構は９号・11号炉跡と同じく，灰出し部には後から堆積した黄白色の粘土が確認された。黒褐色の埋土が灰出し部へ続いており，全長は1.2ｍを越える。床面はわりと平坦であり，深さは18㎝である。

13号炉跡（第243図）

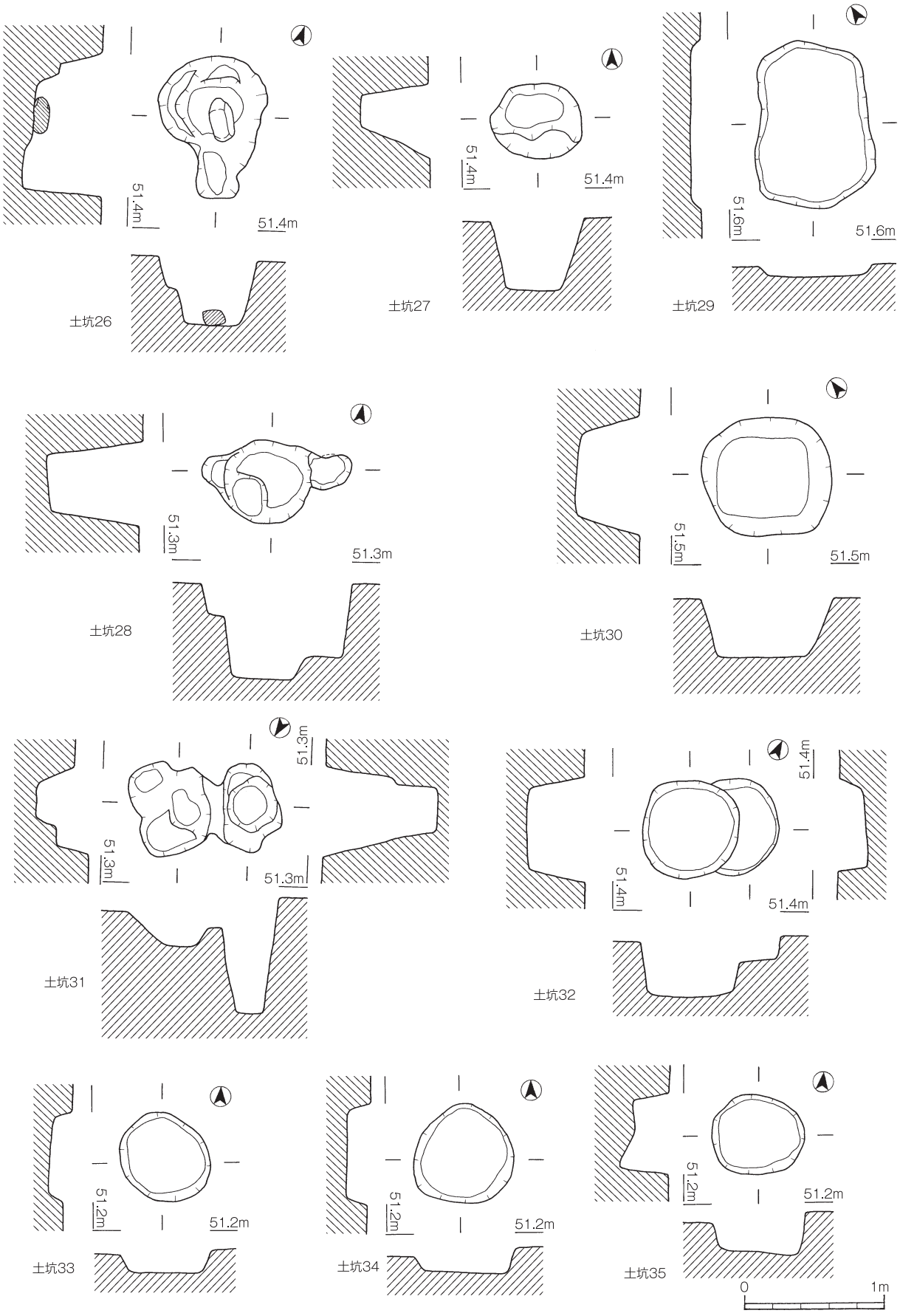
本遺構はⅠ－20区に位置する。この遺構も９号・11号炉跡と同形で，灰出し部に固結した明黄褐色の粘土が堆積していた。炉壁の内面には炭化物が付着している部分があり，残存状態は良くない。炉部の埋土は5層に分けられ，最下層の暗褐色粘質土は灰出し部へ続いている。床面は平坦で，深さは28㎝である。

14号炉跡（第243図）

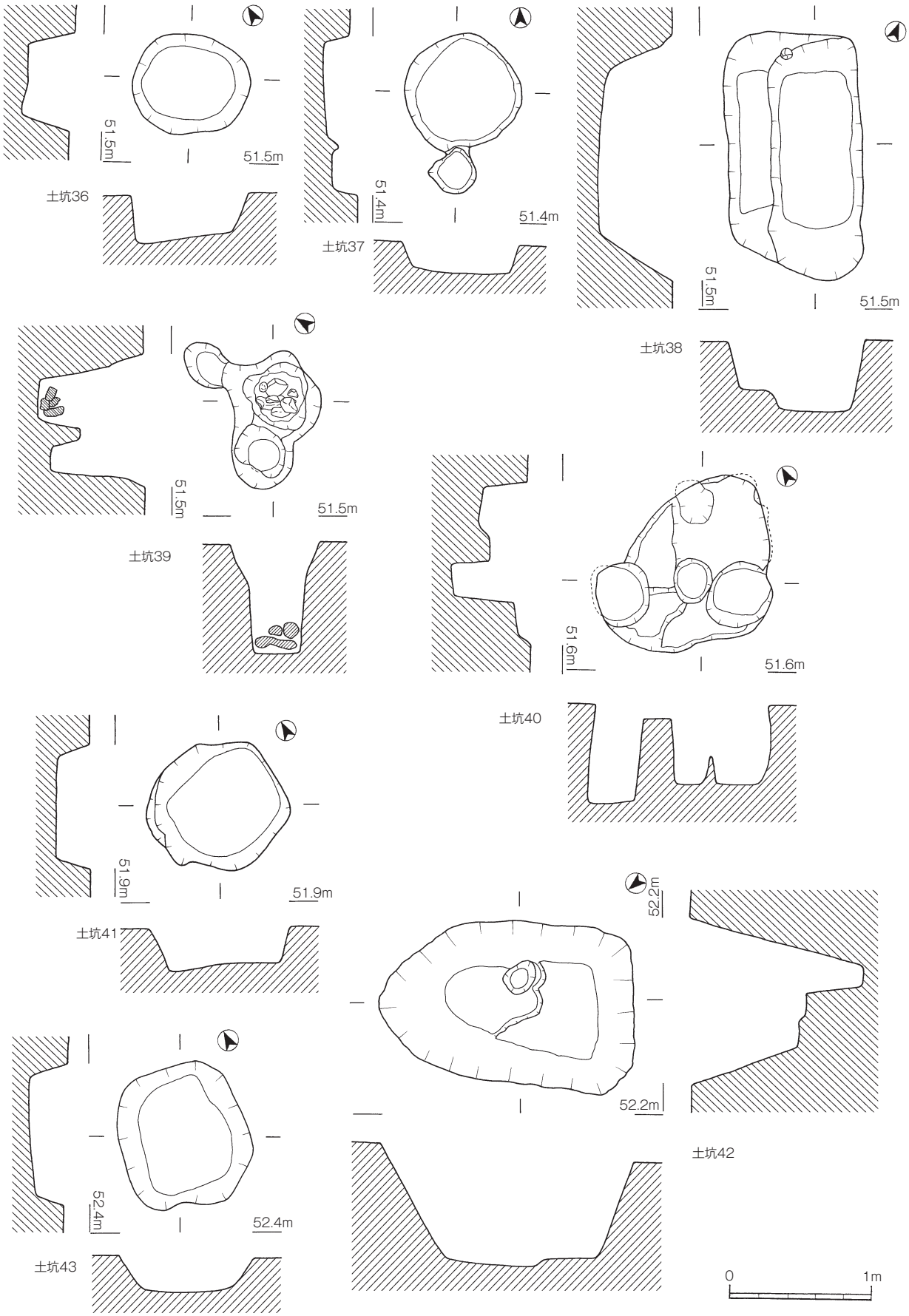
本遺構はⅠ－20区に位置する。円形炉であるが，やや南側へ膨らむ形をしている。また，遺構の南側には，にぶい黄橙色の粘土塊が散在していた。遺構との関連性が考えられるが，用途は明らかではない。埋土は4層から成り，深さは36㎝である。



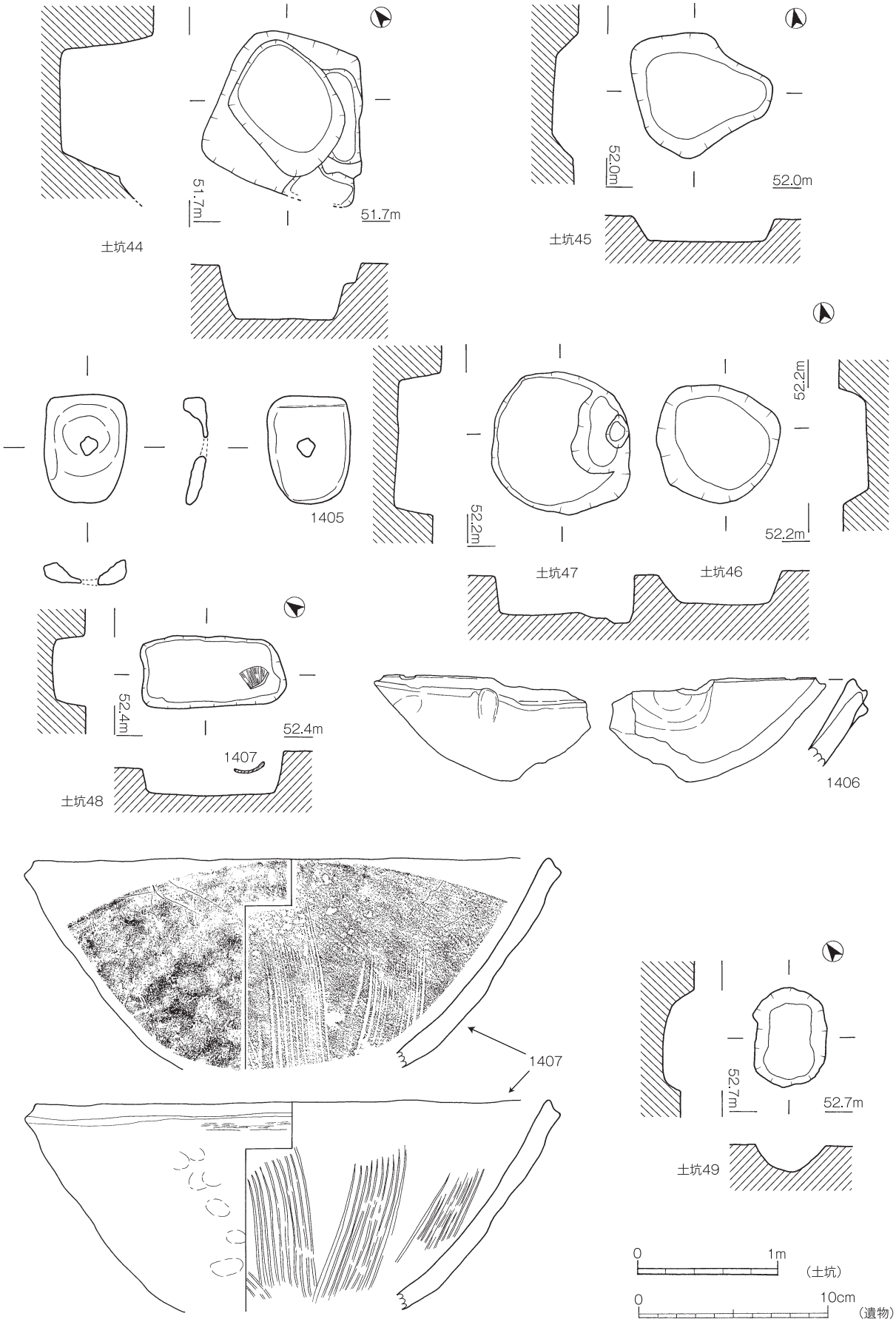
第236図　土坑17～土坑25及び出土遺物



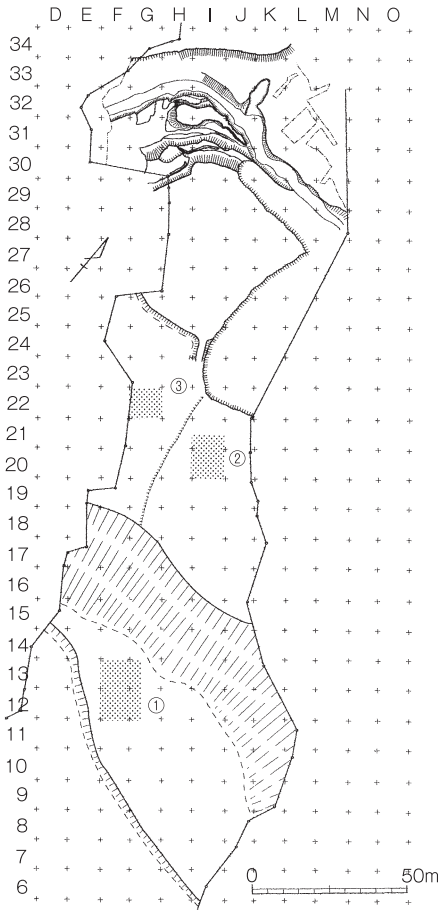
第237図　土坑26～土坑35

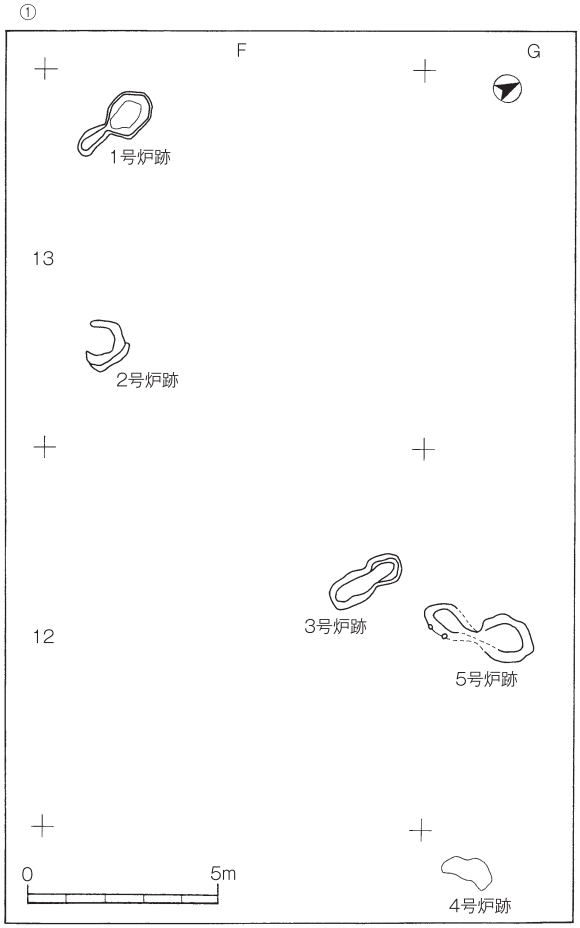


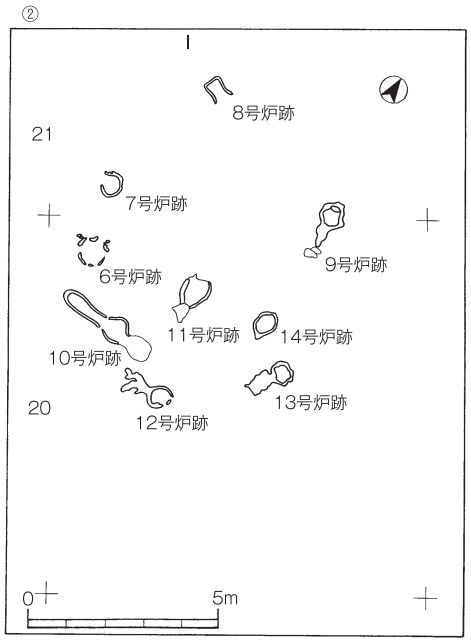
第238図　土坑36～土坑43

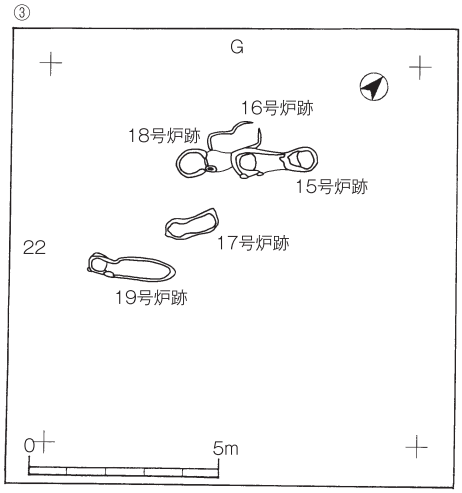


第239図　土坑44～土坑49及び出土遺物

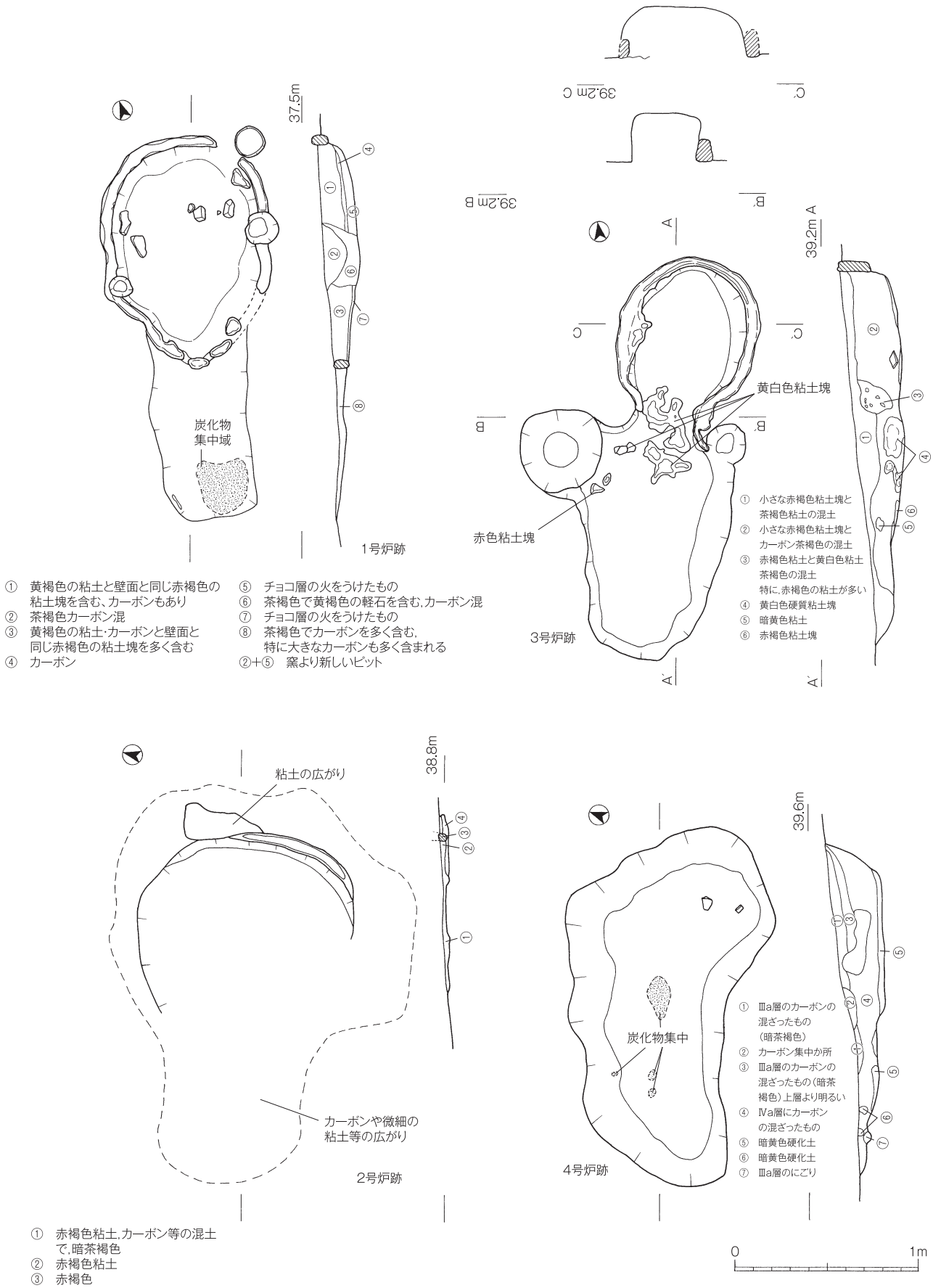

D E F G H I J K L M N O
34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6
③
②
①
0
50m


①
F
G
1号炉跡
13
2号炉跡
3号炉跡
12
5号炉跡
4号炉跡
0
5m

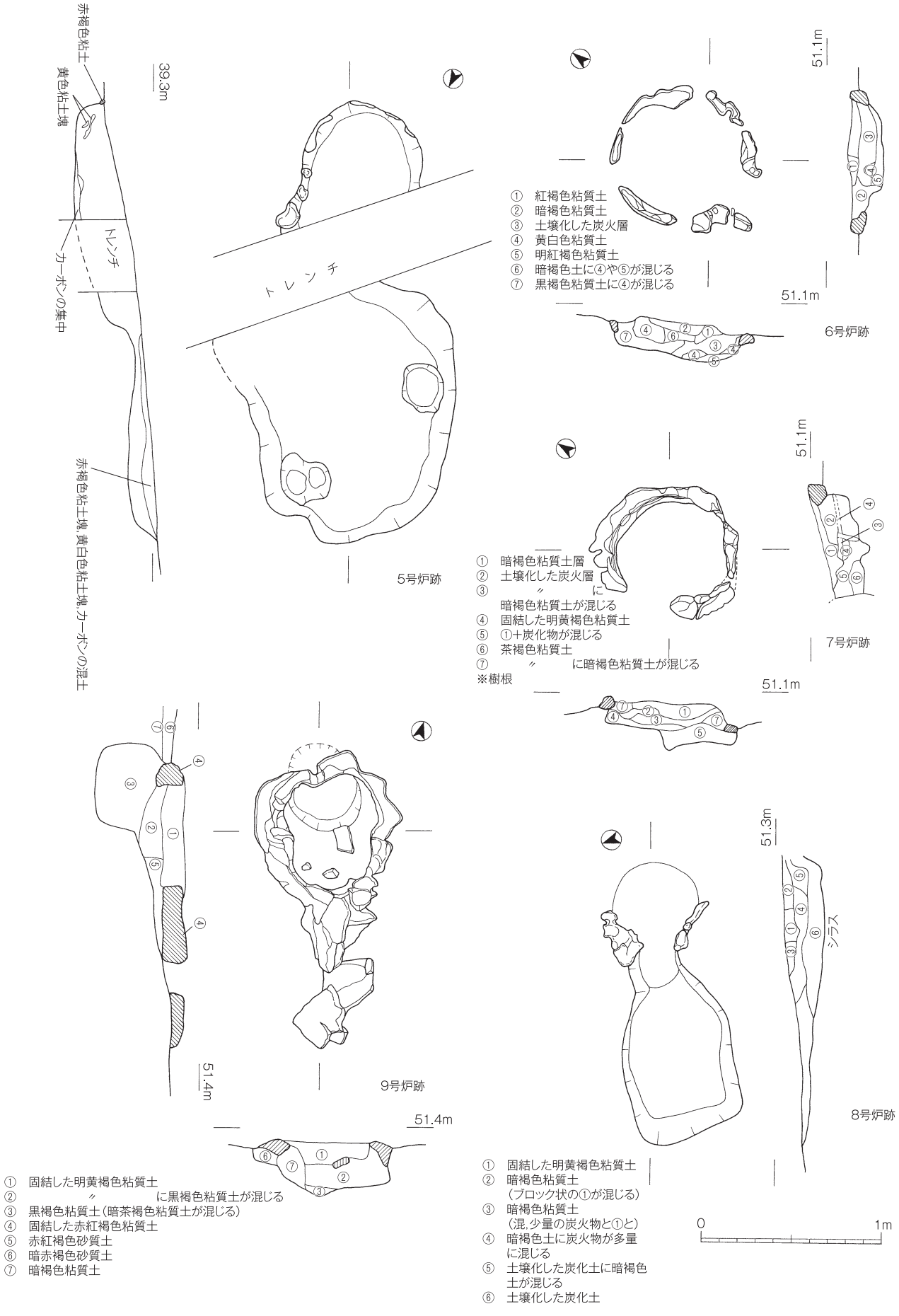

②
I
8号炉跡
21
7号炉跡
9号炉跡
6号炉跡
11号炉跡
14号炉跡
10号炉跡
13号炉跡
20
12号炉跡
0
5m


③
G
16号炉跡
18号炉跡
15号炉跡
17号炉跡
22
19号炉跡
0
5m

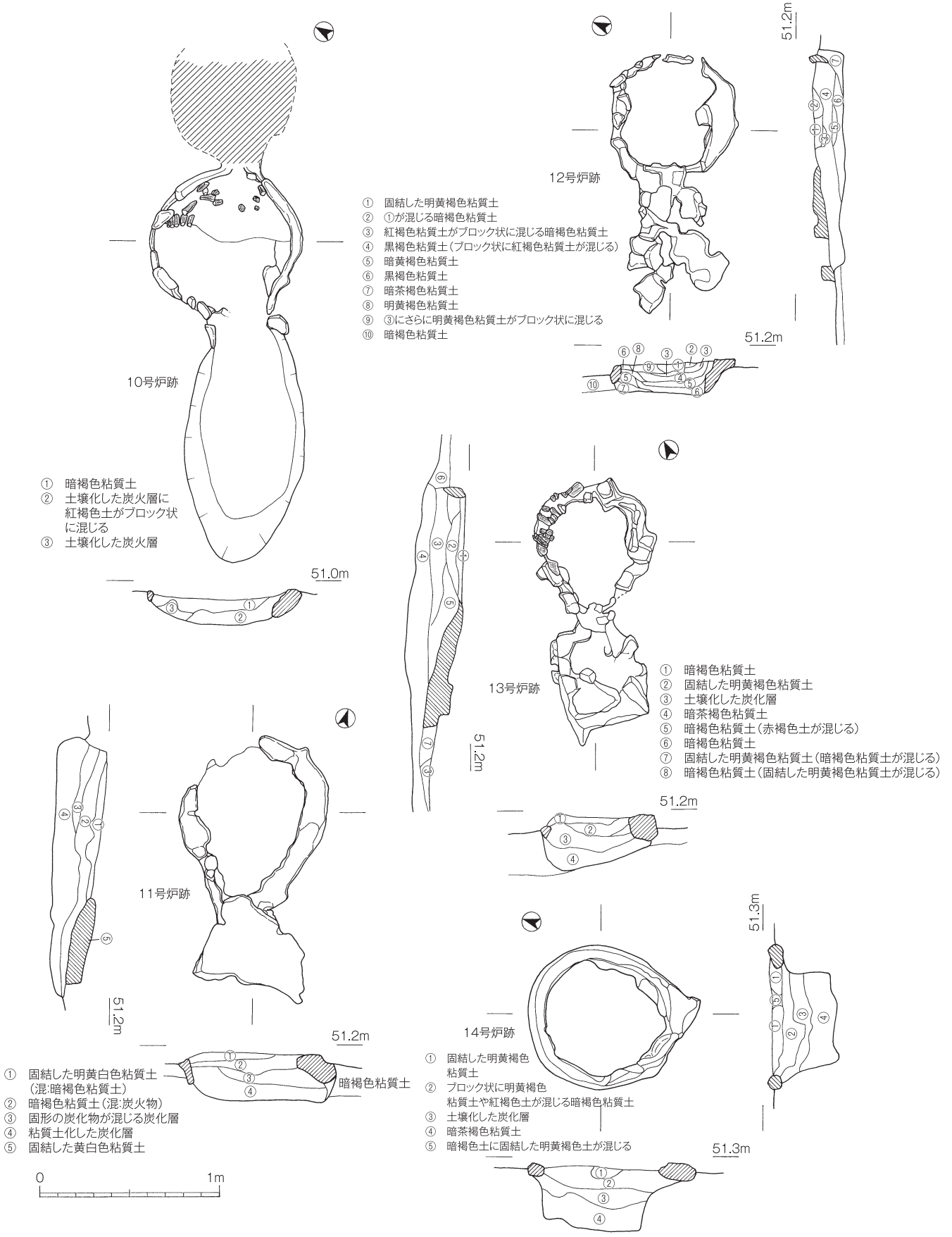
第240図　炉跡位置図



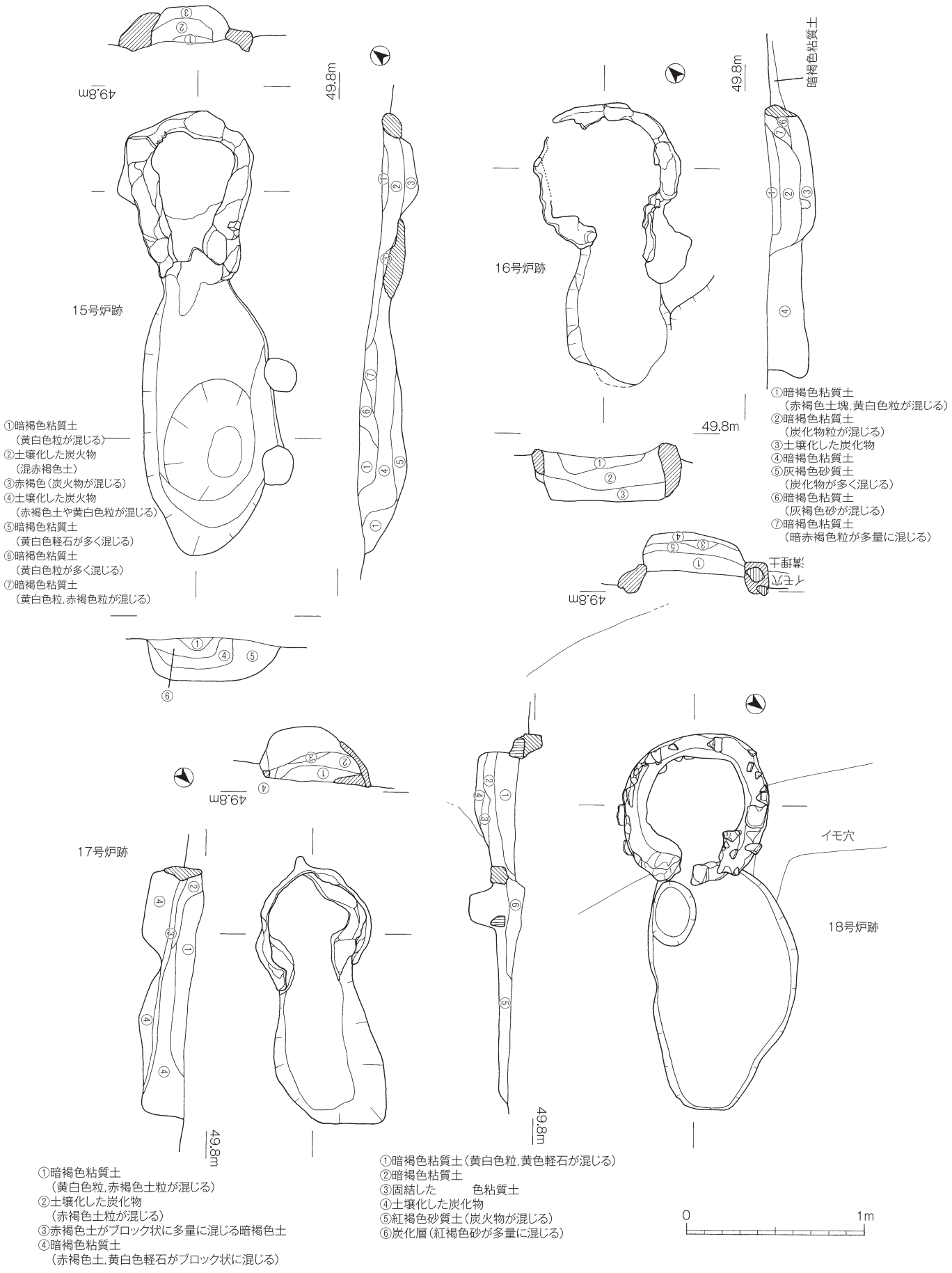
第241図　1号炉跡～4号炉跡



第242図　５号炉跡～９号炉跡



第243図　10号炉跡～14号炉跡



第244図　15号炉跡～18号炉跡

第３地点

15号炉跡（第244図）

第３地点に集中する５基の遺構は，Ｇ－22区に位置する。５基とも，軸を北東から南西に設定している。本遺構は全長2.5m，炉部の深さは20cmである。炉壁の残存状態が良く，焚き口部にも確認できる。灰出し部は５層の埋土から成り，深さ28cmと深い。16号炉跡，及び18号炉跡が隣接している。

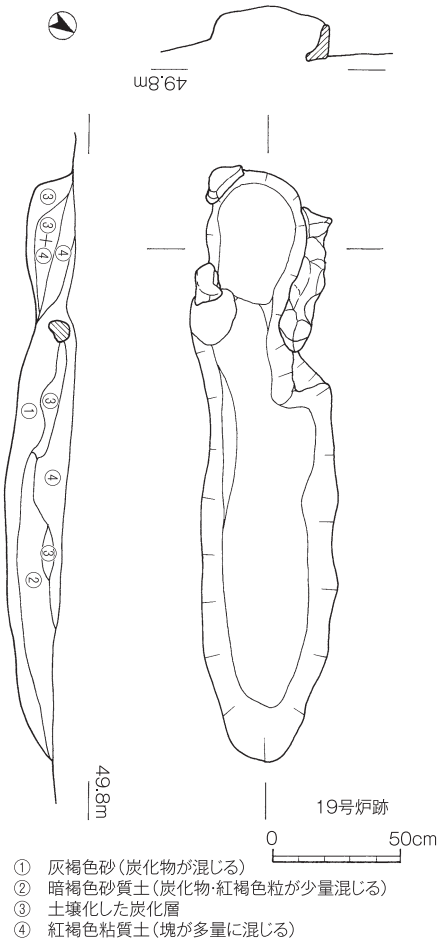
16号炉跡（第244図）

本遺構は全長1.5m，炉部の深さは25cmである。平面形はくびれのある楕円形を呈する。焚き口部に炉壁は残存していないが，床面には僅かに段を有する。灰出し部の埋土は暗茶褐色粘質土で，深さは約25cmである。炉壁は良く焼けており，明赤褐色を呈する。北側の炉壁は薄く，残存状態が良くない。埋土には灰白色の粘土粒が混じっている。

17号炉跡（第244図）

本遺構は溝状遺構に切り合う形で検出された。全長1.45m，炉部の深さは32cmである。平面形はくびれのある楕円形で16号と同形である。床面には段があり，炉部と灰出し部に分かれる。

４層から成る埋土は，炉部から灰出し部まで一連に堆積している。炉部の表土には，一部赤褐色の粘土塊が確認できた。これは粘土壁が崩れたものと考えられる。



第245図　19号炉跡

18号炉跡（第244図）

本遺構は溝状遺構といも穴に切り合う形で検出された。全長2.1m，炉部の深さは23cmである。灰出し部を持つ円形炉である。厚さ15cmの炉壁が垂直に立つ。赤褐色を呈し，一部灰白の粘土塊が混じる。この炉壁は焚き口部にも確認された。また，遺構内には１基のピットが検出されたが，用途は明らかではない。

19号炉跡（第245図）

本遺構は全長約2.3mで，長楕円形を呈す。炉壁内面は，炭化物が付着して黒褐色を呈していた。焚き口部には炉壁が無く，炉は蹄鉄形を成している。床面は平坦で，灰出し部が長い。検出面は全体的に赤褐色を呈しているが，炉部のみ黒褐色であった。

（６）埋納遺構及び不明遺構

・埋納遺構（第246図）

埋納遺構は，曲輪３のＦ-10区，南側の落ち際で検出された。青磁碗が口縁を上にしてほぼ正位置に置かれ，1408の体部の下に1411が，1408と1409の間に1410の土師器が立ったような状態で，1412が1409のやや南側に口縁を上に向けて置かれていた。掘り込みやその他の施設がないか精査を行ったが確認には及ばなかった。しかし，状況から埋納遺構の可能性があるものと判断した。



第246図　青磁及び土師器埋納遺構

1408・1409は，龍泉系の青磁碗である。両方とも見込みには櫛描が描かれ，畳付から高台内は，露胎であり，高台は削りだし高台である。

1410～1412は土師器の皿で，３点とも糸切底，底面径約６cm，器高１cm～２cm前後で，比較的に造りは粗いものである。その時期は，並んで出土した青磁から判断すると，２枚とも龍泉系初期の13世紀頃と言えよう。

・不明遺構（第247図）

この性格不明の遺構は，曲輪１の西側，H・I－26・27区を中心に検出された遺構で，半分は調査区外へ伸びている。約５mの方形になるであろうと思われる浅い掘り込みに，南東端から幅80cmの浅い直線状の溝が西へ向かって５mほど延びる。

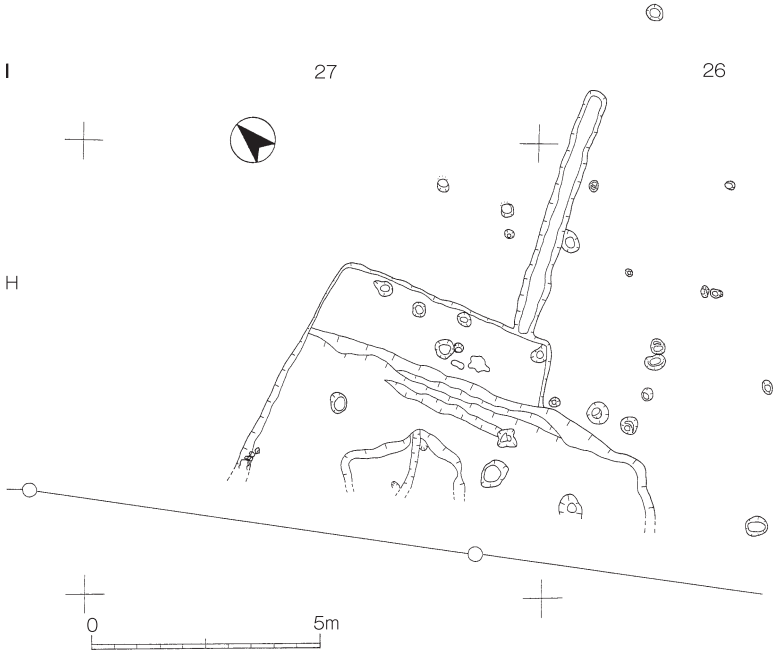
この遺構の一部か，あるいは，この遺構を切るようにH－27区から26区への南北の線を一辺とする浅い階段状の遺構で，南側は26区で西側へ折れる。そして，周辺にはたくさんの柱穴が散在している。非常に浅く，表土直下の遺構であり，いろいろな埋土の混入もあったため，時期判定には苦慮し，現在でも疑問は残るが，中世の遺物が多量に出土したことから，中世の章で報告することにした。

1413～1415は，土師器の糸切底の坏，1416は，やや肉厚の皿で，内底面を中心にススの付着が著しい。1417は，土師質，1419は須恵質の擂鉢，1418は土師質の捏鉢である。1420～1428は，外面が格子目叩き，内面にハケ目のある樺万丈系の中世須恵器と思われる。

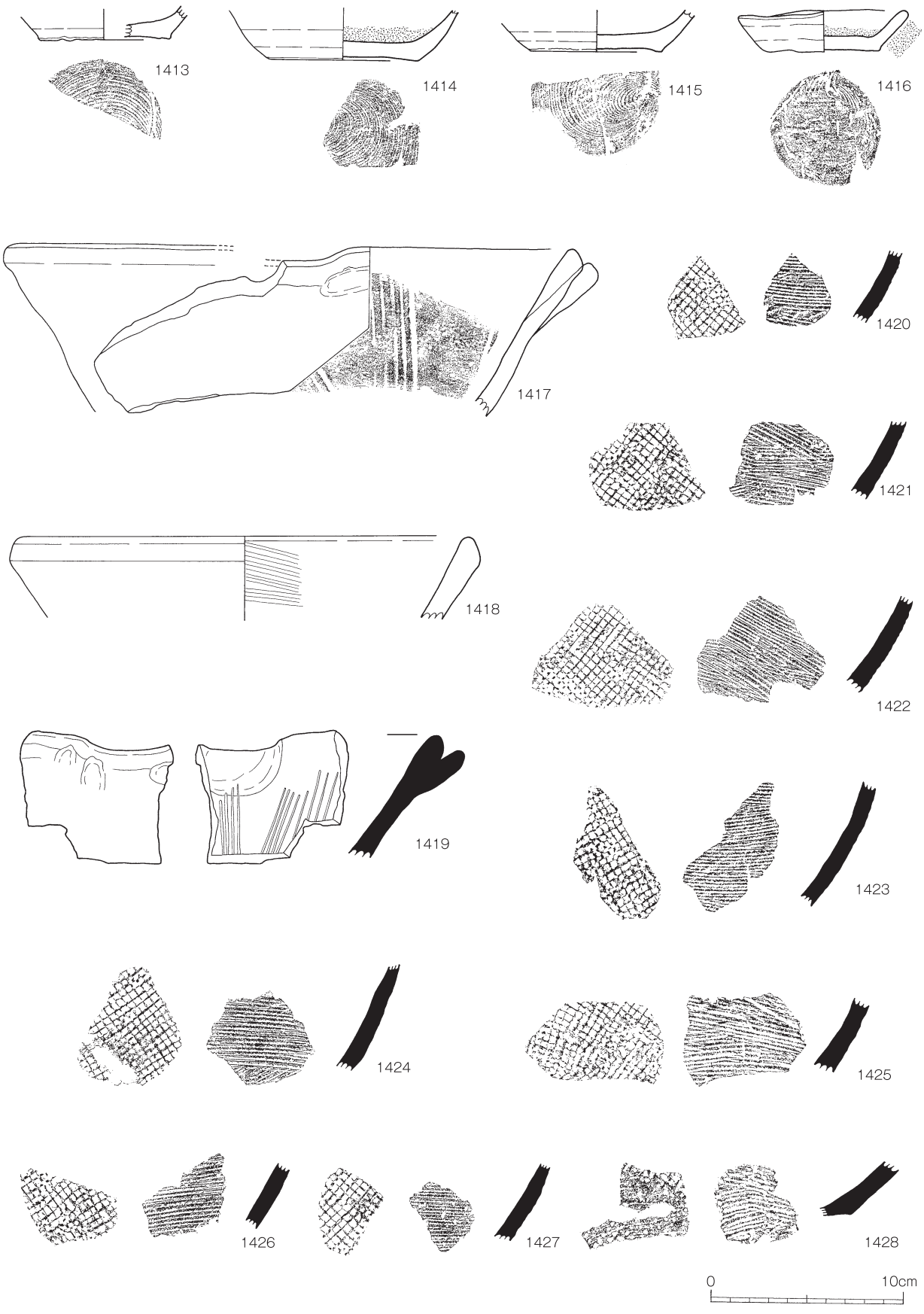
1429～1438は，龍泉系の青磁である。1436は，蓮弁文の小型の盤あるいは皿であり，それ以外は碗である。1434は，二次焼成を受けたような痕跡がある。1435は，高台内兜巾であり，1437は，見込みに印花文を施す。

この性格不明の遺構は，上述のような青磁出土の中心であり，その時期は14世紀～15世紀を中心とするものであることが特徴である。

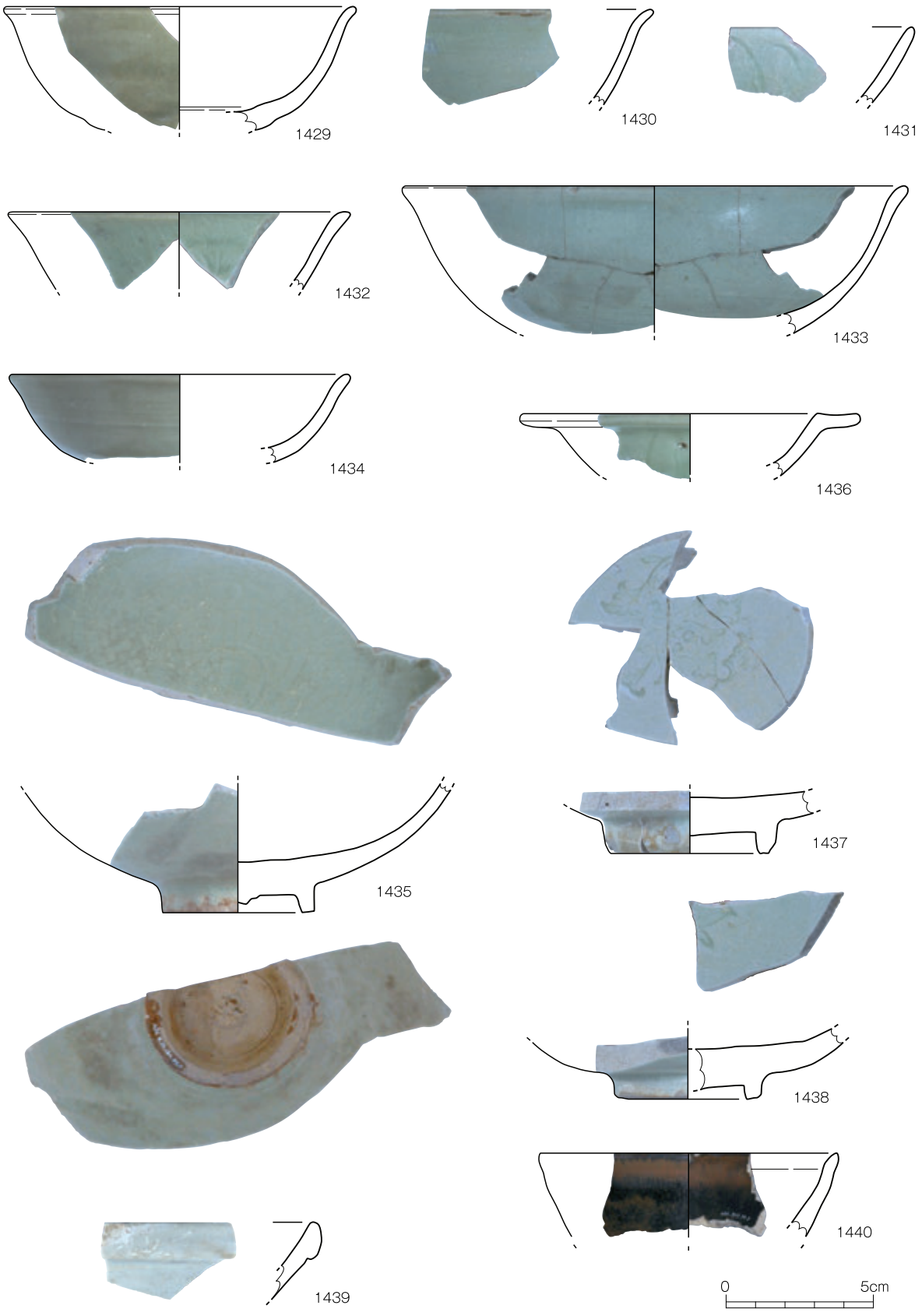
他の遺物としては，1439が白磁の玉縁口縁の碗，1440は美濃茶碗で，色調は内外とも基本的には黒褐色を呈するが，口縁部付近は茶褐色である。



第247図　不明遺構



第248図　不明遺構出土遺物（1）



第249図　不明遺構出土遺物（2）

第２節　遺物

出土した遺物には土師器・須恵器・須恵質陶器・瓦質土器・土師質土器・土製品・滑石製石鍋・青磁・白磁・青花・陶器・天目・宋銭がある。

土師器（第250図）

器種には坏と皿がある。

坏（1441～1454）はいずれも糸切り底のものである。内弯するものと，外へまっすぐ開きながら伸びるものとがある。1441は口縁直径が14cm，高さが3.7cm，底部直径が9.2cmの内弯する大型の坏で，口縁端は丸みをもっておわる。底に数条の棒状押圧痕がみられる。1446と1448は底からまっすぐ外へ開きながら伸びる器形をしている。

1446は口縁端が丸みをおびて厚く，作りも雑で，1448は細くて口縁端が尖がっている。口縁直径は1446が11cm，1448が12cmで，底部直径は共に9.5cmほどであるが，高さは1446が3.1cmと高いのに対し，1448は2.1cmと低い。1450・1453・1454は外へ強く広がってまっすぐ伸びる器形をし，口縁直径が11cm～12.8cm，底部直径が７cm～８cmで，高さは2.2cm～3.2cmある。底部は，1442のように丸みをもって立ち上がるもの，1444や1445のように段をもって外へ開くもの，1447のように底から外開きで立ち上がるものとがある。概して軟質だが，1452は硬質に焼けている。

皿（1455～1461）は，いずれも口縁直径が7.5cm～９cmの小皿であるが，1455や1456のように高さが１cm足らずの低いものと，1458のように２cmを越す高いものとがある。器形は，1455のように丸みをもって外へまっすぐ開くもの，1456・1457・1460・1461のように丸みをもってやや内弯ぎみに立ち上がるもの，1459のようにやや外反ぎみだが，底からまっすぐ外へ開いて伸びるものとがある。

1458はやや内弯ぎみだが，胴部途中でやや内側へ屈曲して立ち上がっている。底部から体部への変わり部分に段をもっているために，削り出し高台状となっている。底は丸みをもって立ち上がるもの，段をもって立ち上がるもの，まっすぐ立ち上がるものとがある。

糸切り離しはほとんどが一方に片寄るものだが，1442・1443などはそのあとナデを施し，1446はやや粗く切っている。1452はヘラ引き様に引いており，1461は糸切り離しが外面体部にまで及んでいる。

1443・1444・1448・1457は内側に油痕跡がみられ，灯明皿用に使われたものと思われる。1448は外面にも一部に油の痕跡がみられる。

須恵器（第251図）

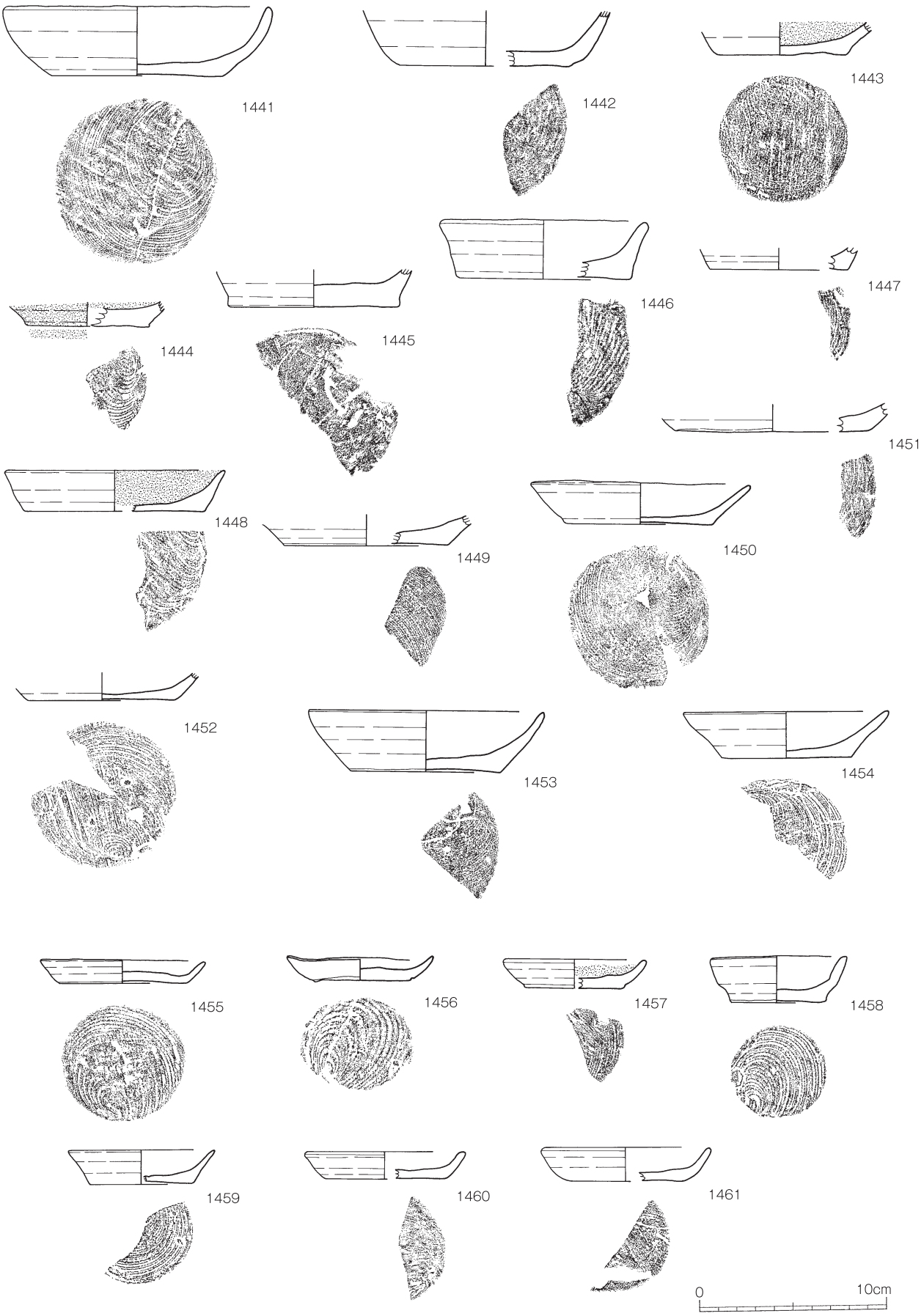
同一個体と思われる甕の破片が２点ある。口縁部は外へ強く反るもので，端部は矩形を呈している。断面の内側は赤褐色を呈している。1463は肩部で，外面が正格子タタキで，内面には同心円当て具痕がみられる。８㎜近くの礫もある粗い土を用い，粒子が外へ出ている。

須恵質陶器（第251図・第252図・第254図）

器種には甕と擂鉢，壷がある。

1464は甕の胴部で，外面はこまかい正格子タタキ痕がみられ，内面はヘラナデで仕上げている。

擂鉢は平底で，まっすぐ開きながら伸びる器形をし，かき目はいずれも幅が広く，下から上へかき上げている。口縁部は矩形を呈するが，1474のようにややくぼむもの，1466や1468・1471の



第250図　出土遺物（土師器）

ように丸みをおびたものもある。

1465・1472は注ぎ口である。底から上へまっすぐ伸びているが，1476はやや丸みをおびている。1466は口縁直径が33cm，高さが10cm，底部直径が14.5cmある。外面はハケナデのあとヘラナデ仕上げであるが，内面は横あるいは斜方向のハケナデ仕上げである。

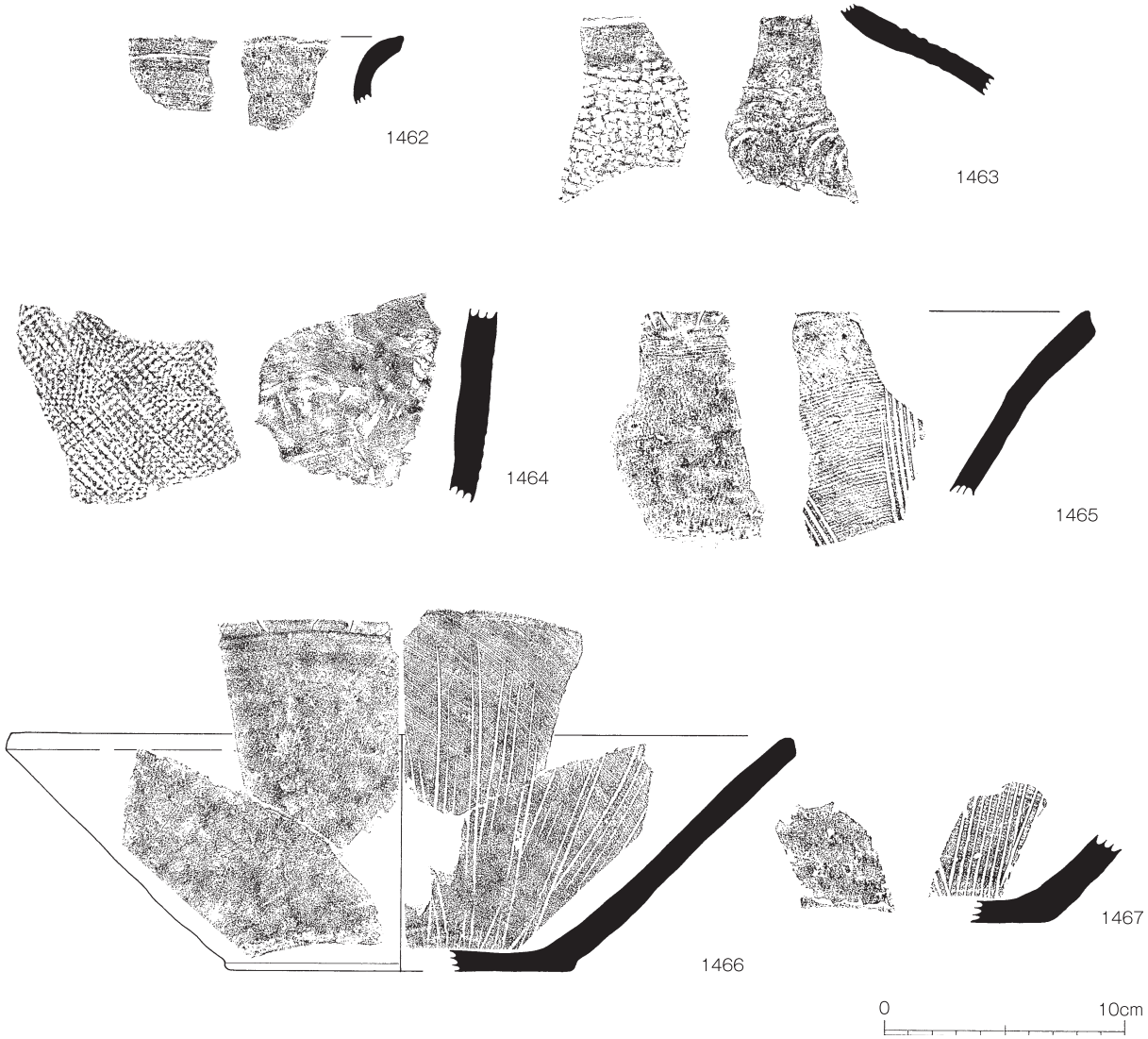
1493は口縁部が直径14cmある直口壷で，肩が張るが，そこから底へ向かってまっすぐおりている。口縁端は丸みをおびている。内外とも横方向のヘラナデで仕上げており，いくらか軟質に焼けている。白灰色を呈しているが，外面は茶色がかり，部分的に黒みがある。

瓦質土器（第253図・第254図）

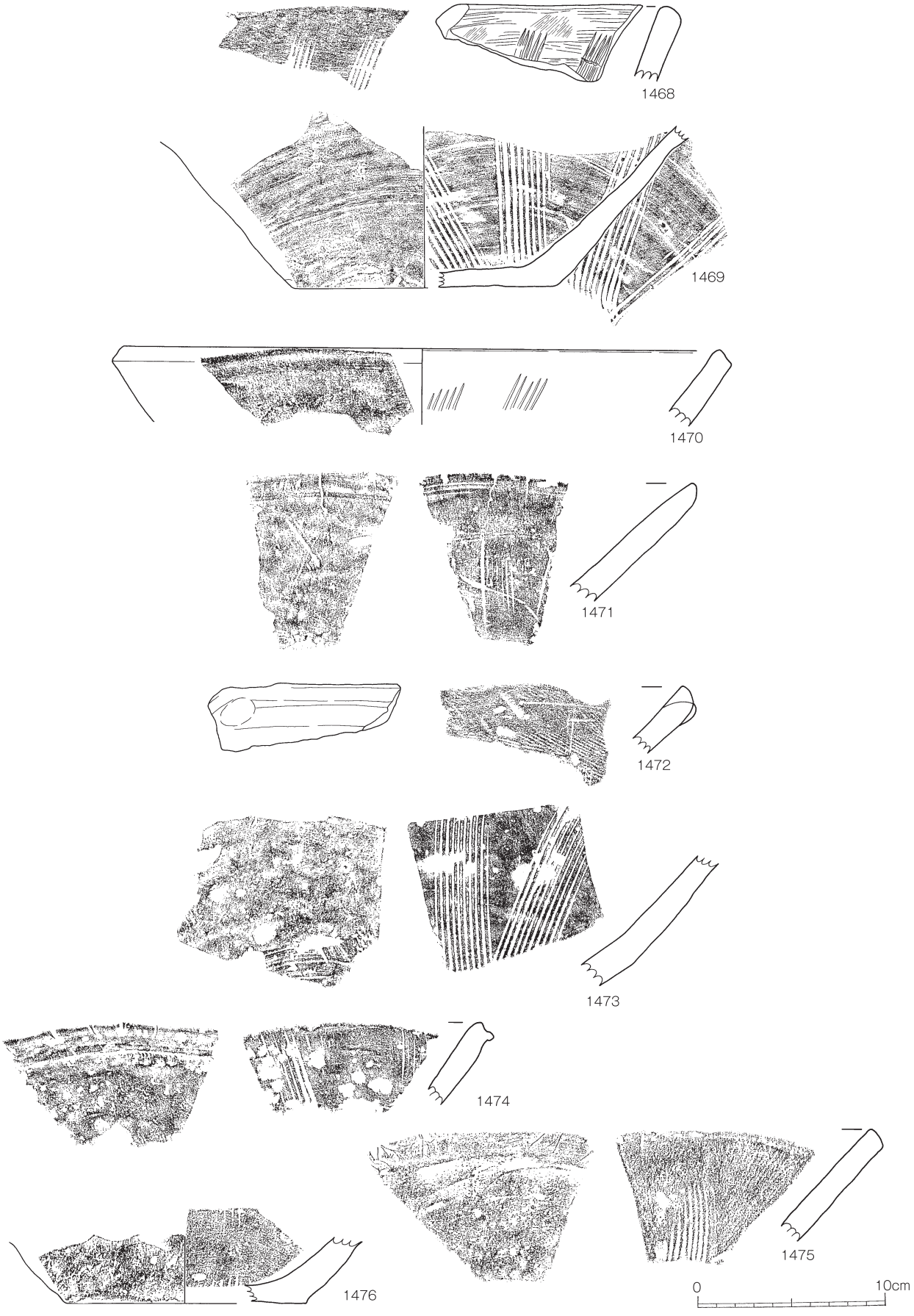
器種には茶釜・花舎・直口壷などがある。

茶釜（1477～1480）は，胴部をつばが巡るものである。胴部は丸みをもっており，1477の最大直径は28.5cmある。つばは断面形が長方形状のものと，台形状のものとがあり，水平になるものと，上を向くものとがある。つばの下にはススが付着している。

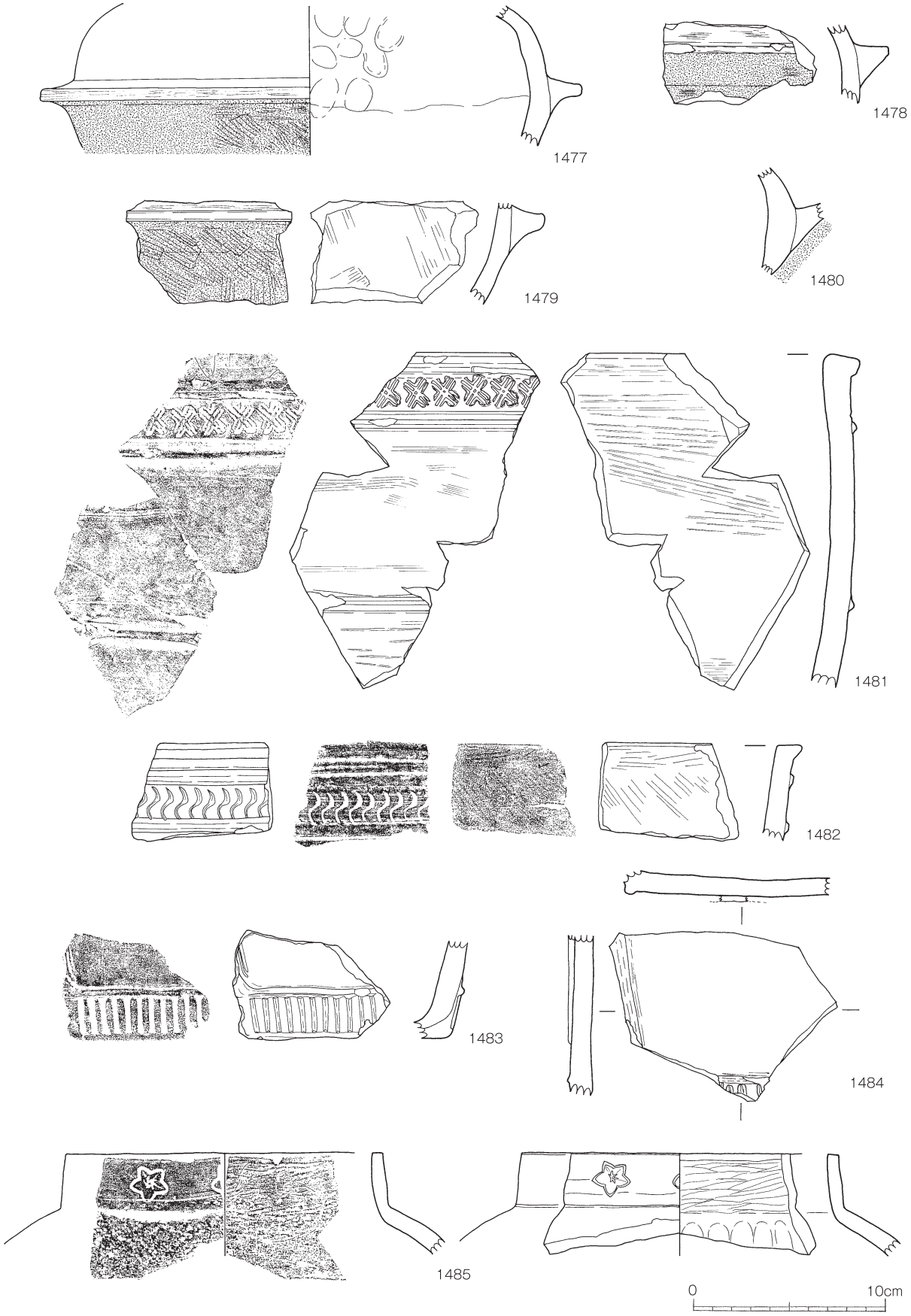
火舎（1481～1484）は口縁部が逆Ｌ字状に肥厚し，胴部に突帯がある。1481は口縁部外面に断



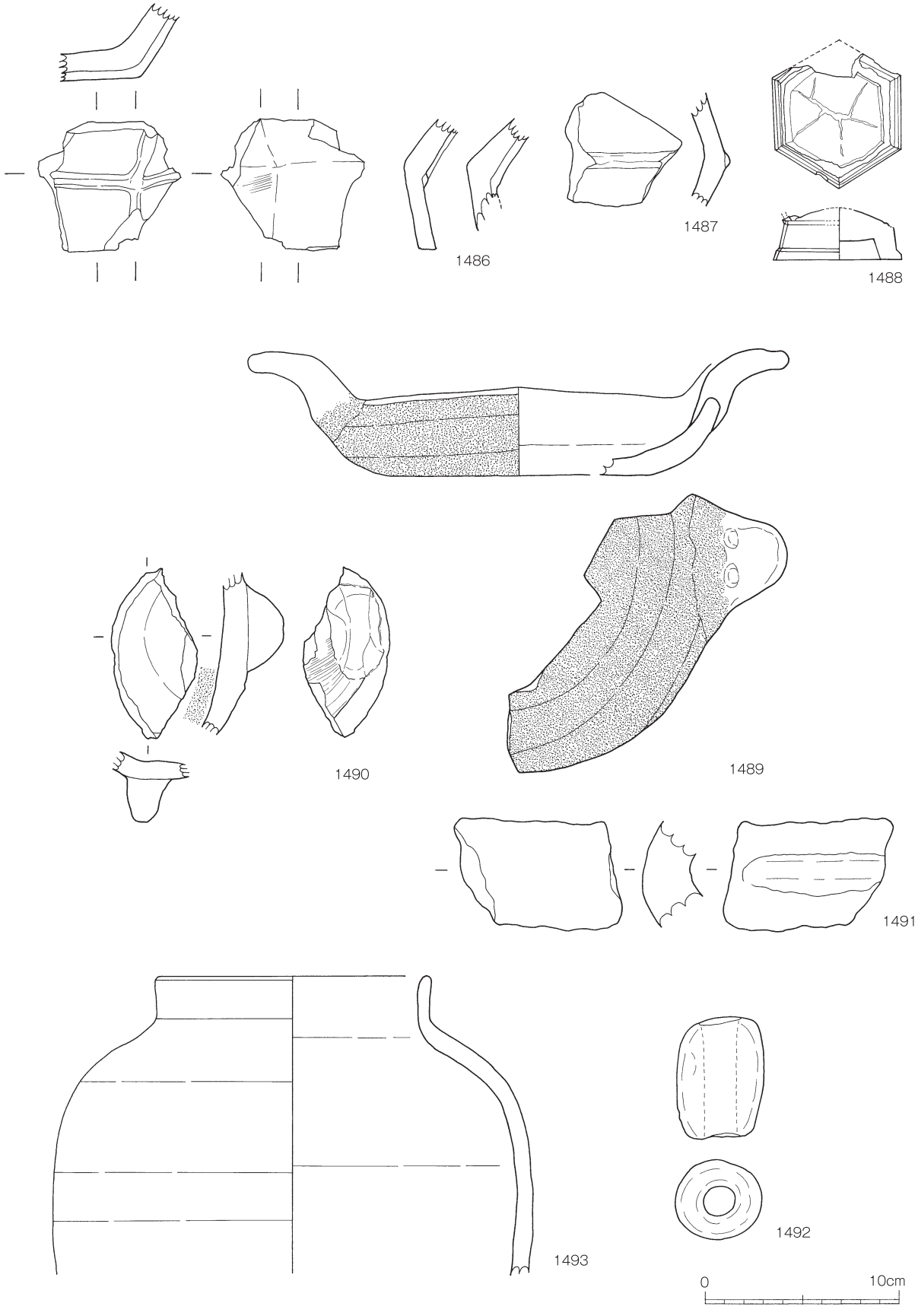
第251図　出土遺物（須恵器・擂鉢等）



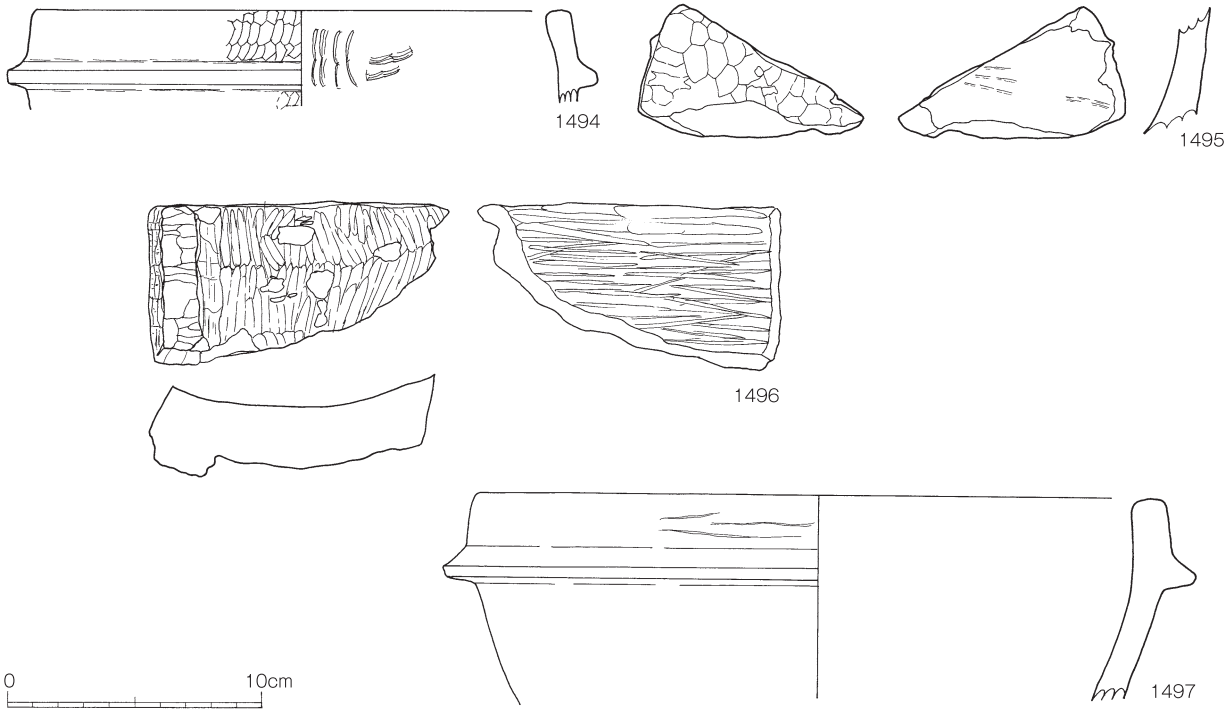
第252図　出土遺物（擂鉢）



第253図　出土遺物（瓦質土器）



第254図　出土遺物（瓦質・土師質土器等）



第255図　出土遺物（石鍋）

面矩形の突帯が貼り付けられ，胴部に二条の小さい三角突帯が貼り付けられる。口縁下に×印のスタンプが連続して横方向に押される。内外ともていねいなヘラナデで仕上げている。1482は口縁端が外に三角状に突出し，その下に幅をおいて二条の小さい突帯が巡っている。この突帯の間に逆Ｓ字状のスタンプが連続して横方向に押されている。1483は平底で，底近くに小さい三角突帯が横方向に貼り付けられ，突帯と底の間に縦方向のＩ字状スタンプが押されている。またこの三角突帯と交叉して，縦方向の突帯もみられる。1484も1483と同一個体の破片と思われる。

直口壷（1485）は直径が16.8cmのやや内傾する口縁をもつ壷で，頸部から外へ強く開いて肩部へ至る。口縁外面に花文のスタンプがある。

1486・1487は同一個体で，口縁部が多角形となる。口縁はやや内傾して立ち上がる。角と頸部に丸みのある突帯が貼り付けられている。1487はやや丸みをおびており，横方向の貼付突帯がある。外面は光沢をおびている。

1488は水簸したこまかい白色粘土を用い，焼きのいい六角形を呈する脚台である。内底部はドーム状となり，畳付部の立ち上がりは，矩形を呈しやや外へ広がる。脚台の内部，底部，畳付部ともていねいにナデている。底からはやや外へ広がって立ち上がり，脚台との境には小さい突帯が巡っている。外面や底には黒色釉がかかっているが，見込みにも部分的に釉がかかっている。

脚台外面や内底部には赤茶褐色を呈するものが付着しており，脚台外面は文様のようにもみえるが，はっきりしない。立ち上がり部分は厚さが３㎜ほどしかない。内底部にはヒビがはいっている。香炉の可能性があるが，はっきりしない。

土師質土器（第254図）

1489は両方に把手のある浅い鍋である。把手はあとで貼り付けてあり，把手外面には２か所に



第256図　出土遺物（青磁１）

強く押した痕跡がある。底にはススが付着し，内底中央部にはこげの跡が付いている。1490は低いこぶが台に貼り付けられた鉢である。底は糸切り離しにより平らとなり，三か所にこぶが貼り付けられているものと思われる。

土製品（第254図）

1491は粗い土を用いたふいごの羽口である。茶褐色を呈しているが，外面の一部は火を受けて，やや黒色化しているものである。

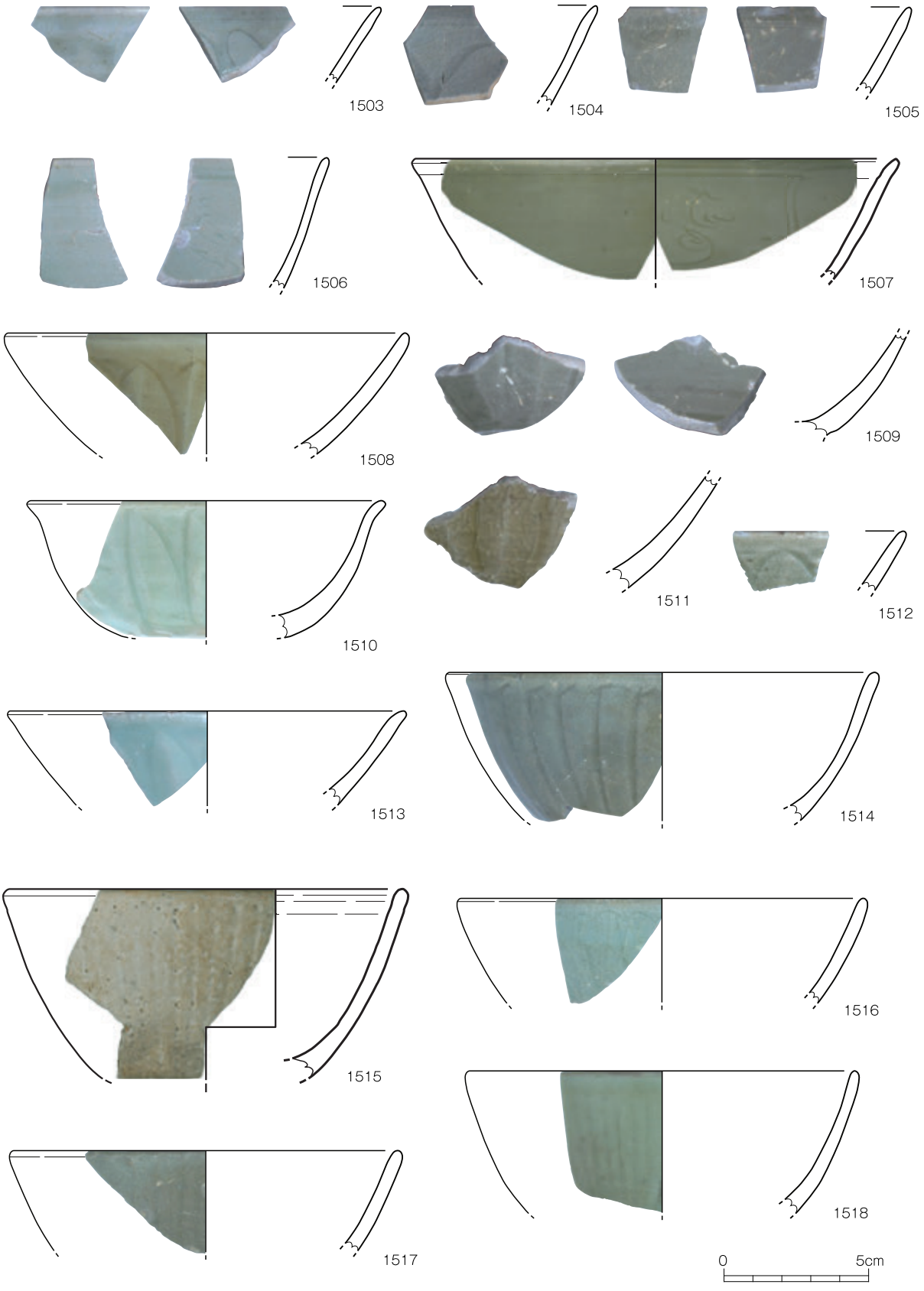
1492は円筒形の土錘で，長さ6.5cm，直径4.5cm，孔径1.5cmある。時期については，疑問が残るものである。

滑石製石鍋（第255図）

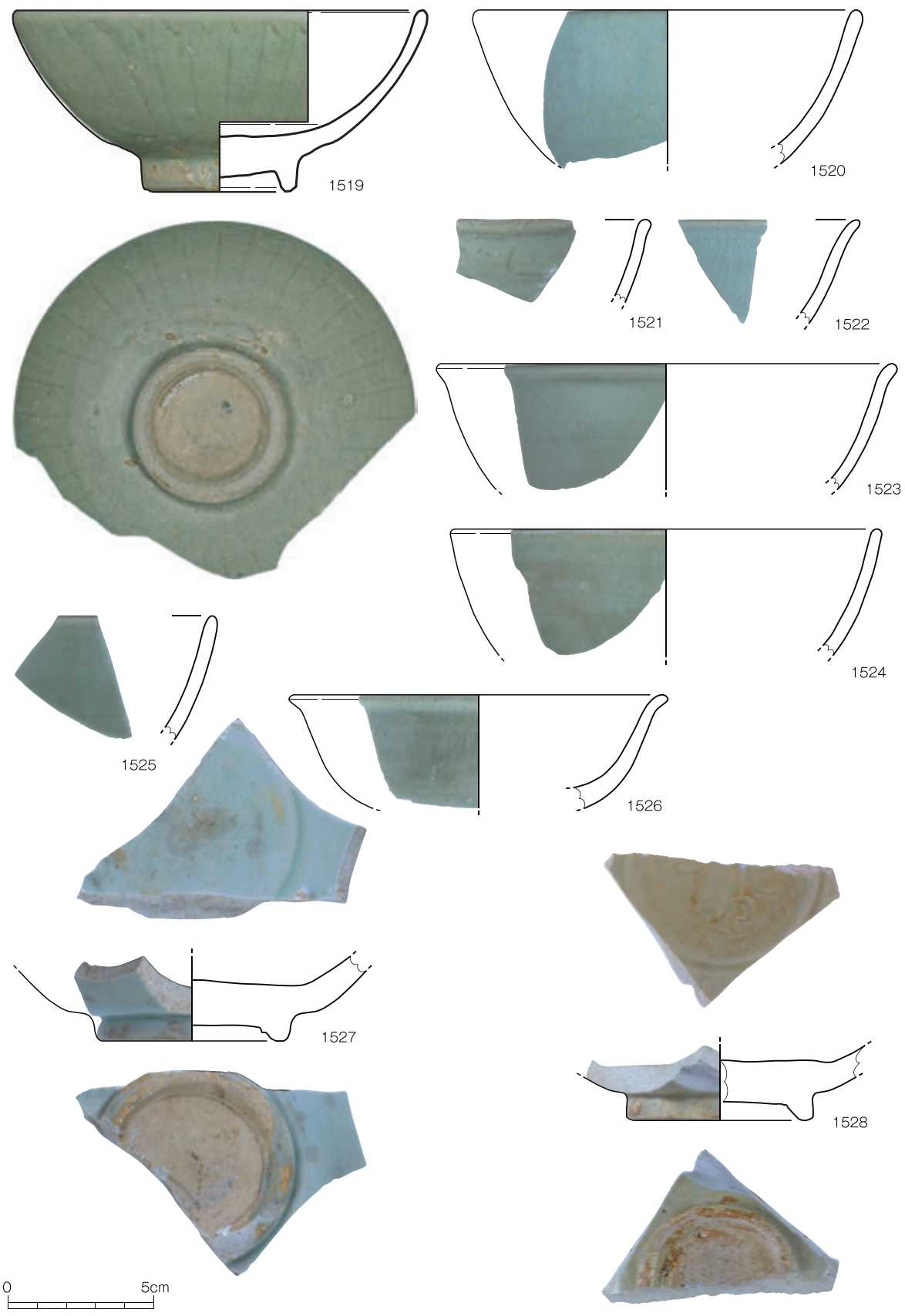
つば付きのものと，縦耳付きのものとがある。どの滑石製石鍋も製作時の加工のための工具痕を残している。

1494と1497はつば付きのものだが，1494は口縁直径が21cmと小さく，強く内傾するのに対して，1497は口縁直径が27cmで，ゆるく内傾している。

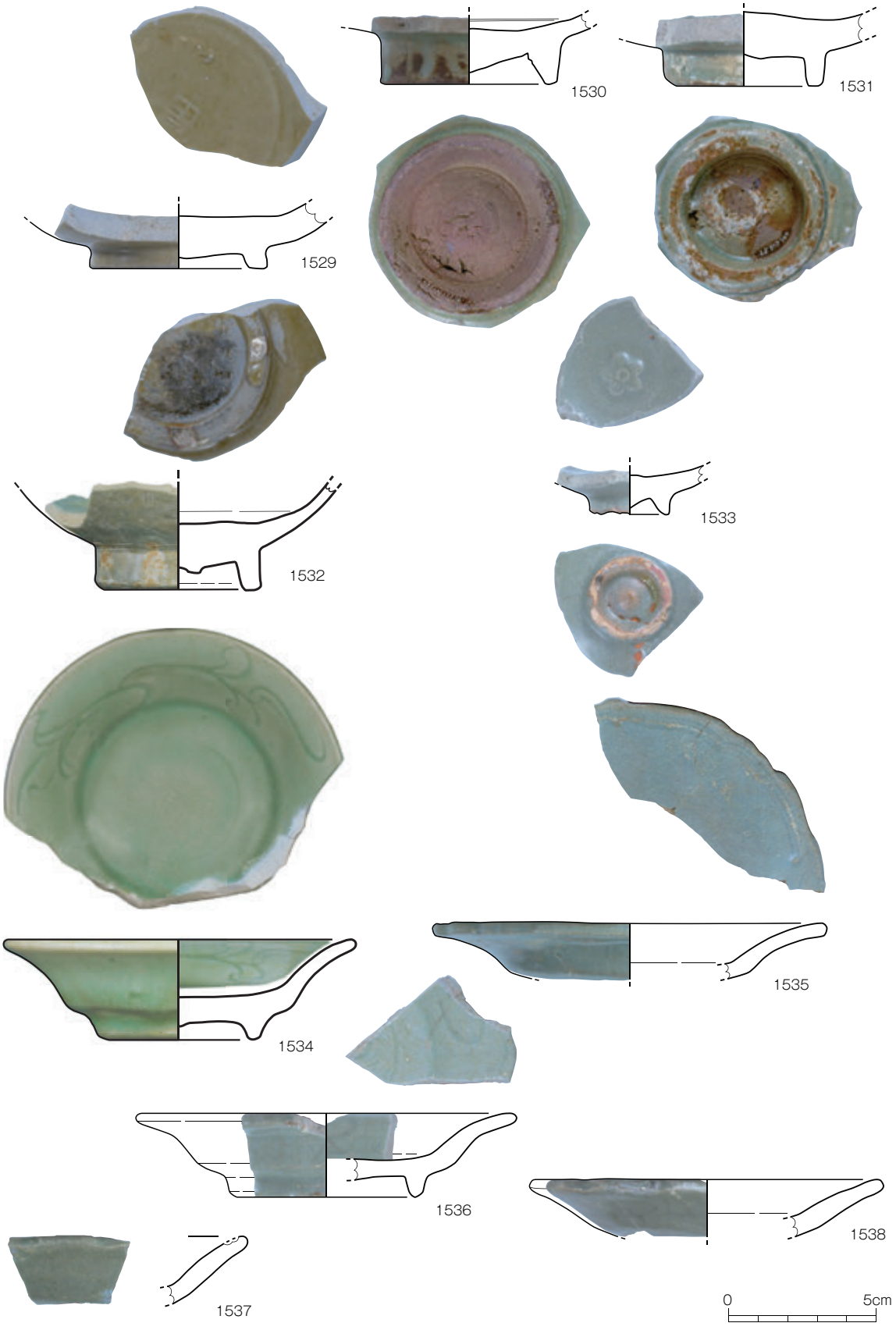
1496は口縁部に長さ６cmの縦耳が付くもので，外面は縦方向，内面は横方向に削っている。つ



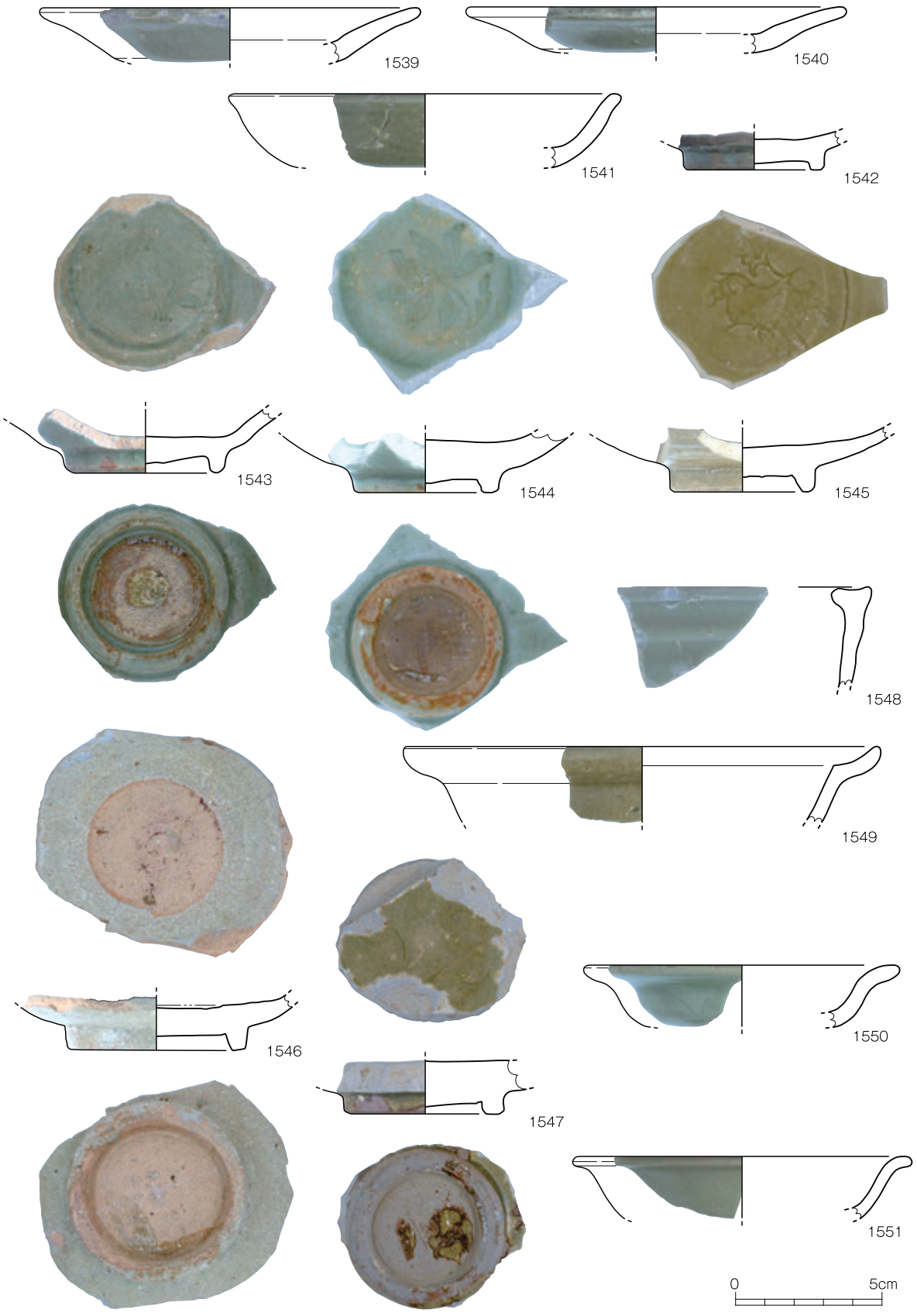
第257図　出土遺物（青磁２）



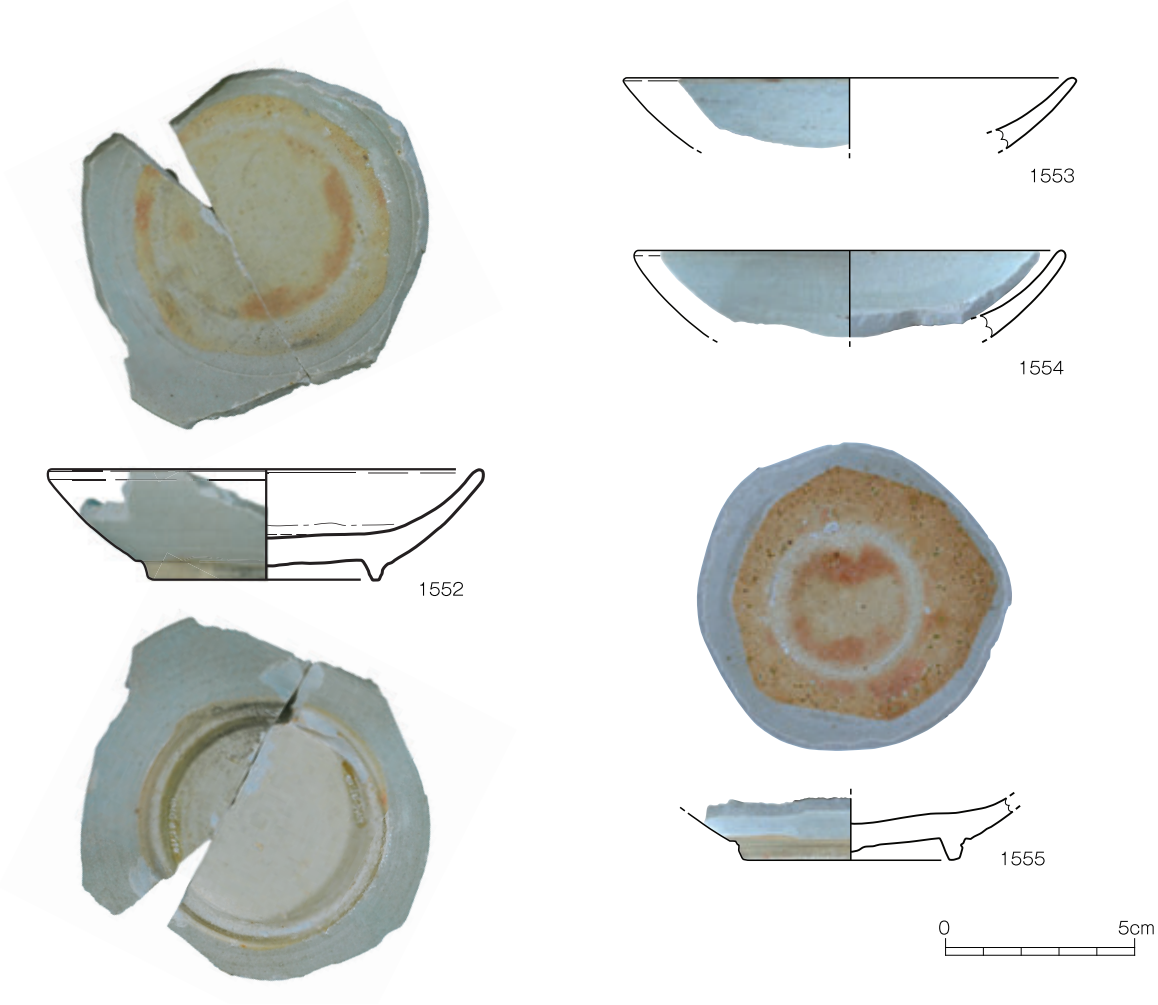
第258図　出土遺物（青磁３）



第259図　出土遺物（青磁４）



第260図　出土遺物（青磁５）



第261図　出土遺物（青磁６）

ば付きのものに比べて分厚い作りで，図の左側は縦に切ったあと横に粗くすっており，破損後，二次的に加工して再利用しようとした痕跡がみられる。

つば付きのものと，耳付きのものとは石材が異なるようであり，使用によるススの付着は全てに観察される。

青磁（第256図～第261図）

高麗青磁・同安窯系青磁・龍泉窯系青磁がある。

1498は緑灰色の釉がかかった高麗系青磁碗である。口縁直径18.5cm，高さ６cm，高台直径5.3cmのもので，断面形が矩形の低い高台が付く。外面の中央付近に二条の凹線がみられる。内面は口縁付近に三条の凹線があり，底部近くには二条の凹線があって，その上に羯磨文が巡っている。見込みには，如意頭文など，それぞれに白色粘土を埋めて象嵌を施している。高台内には砂目がみられる。

1499～1502は同安窯系青磁皿で，底部はややあげ底となり，外面の釉がかき取られている。内底部に櫛描きによる鋸歯状文がみられる。

1503～1555は龍泉窯系青磁で，器種に碗・皿・盤などがあるが，それぞれの製作時期が長期にわたるため，形態・文様とも多様である。

1503～1507は外面が無文で，内面に雲文･蓮花文などの片彫り文のある碗である。口縁に向かっ

て広がりながらまっすぐ伸びる器形をし，1507は口縁直径が16.5ｃｍある。比較的に，龍泉窯系初期のものであろう。

1508～1519は外面が蓮弁文の碗である。1508・1509・1511・1513は鎬蓮弁文，1510・1512は幅の狭い鎬蓮弁文である。

1508・1513が外へまっすぐ伸びるのに対して，1510は口縁端近くで外反する。1514～1519は線描き蓮弁文である。口縁部はやや内弯する器形をし，口縁直径が13cm～15cmである。縦線とその上に波状文を描く組み合わせだが，縦線のあとに雑に鋸歯状・波状文を描き，剣頭が蓮弁の単位を意識していない。1515は，焼成温度が低かったためであろうか，本来の青磁の深緑色ではなく，乳白色に近く，胎土も明茶褐色である。1519は口縁直径が14cm，高さが6.2cm，高台直径が5.2cmある。畳付部は茶褐色を呈し，露胎である。貫入が目立つ。

1520～1526は無文の碗である。1520・1524・1525は内弯する器形で，口縁直径は1520が13cm，1524が14cmある。1521～1523，1526は口縁が外反する器形で，口縁直径は1523が15cm，1526が12cmある。

1527～1532は碗の高台近くの破片である。底部は概して厚く，外へ丸みをもって立ち上がっている。1527は，高台から腰部へ至る部分に平坦面があり，見込みの特徴等から1503～1507などに付く底部と思われる。1530と1532の体部はやや薄い。高台も概してどっしりしているが，1527のように丸みをもったもの，1528･1530のように台形様のもの，1529のように矩形で低いもの，1531･1532のように矩形で高いものがある。高台直径は５cm～６cmで，高台貼り付け部はていねいに段をもつように切り，底部はヘラで切っている。1532の見込みは円形の櫛歯文が巡り，中央に浅いスタンプがみられる。

1533は小碗の高台部で，直径は2.6cmある。高台端は先端が尖がった三角形状を呈し，内底部に花文がある。

1534～1543は皿である。平らな底から長く外反して口縁へ至り，高台の付く器形をしているが，1541は丸みをもった器形で，口縁が短く外反している。1534は口縁直径が11.8cm，高さが3.4cm，高台直径が５cmある。胴部内面に唐草文がある。見込みには蓮花文が描かれ，内外とも厚く釉がかかっている。底だけが露台だが，ここには重ねに用いた窯道具の痕跡がみられる。1535～1540は稜花皿で，口縁直径は12cm前後である。1536は口縁直径が12.4cm，高さが2.8cm，高台直径が６cmあり，内面には唐草文がある。

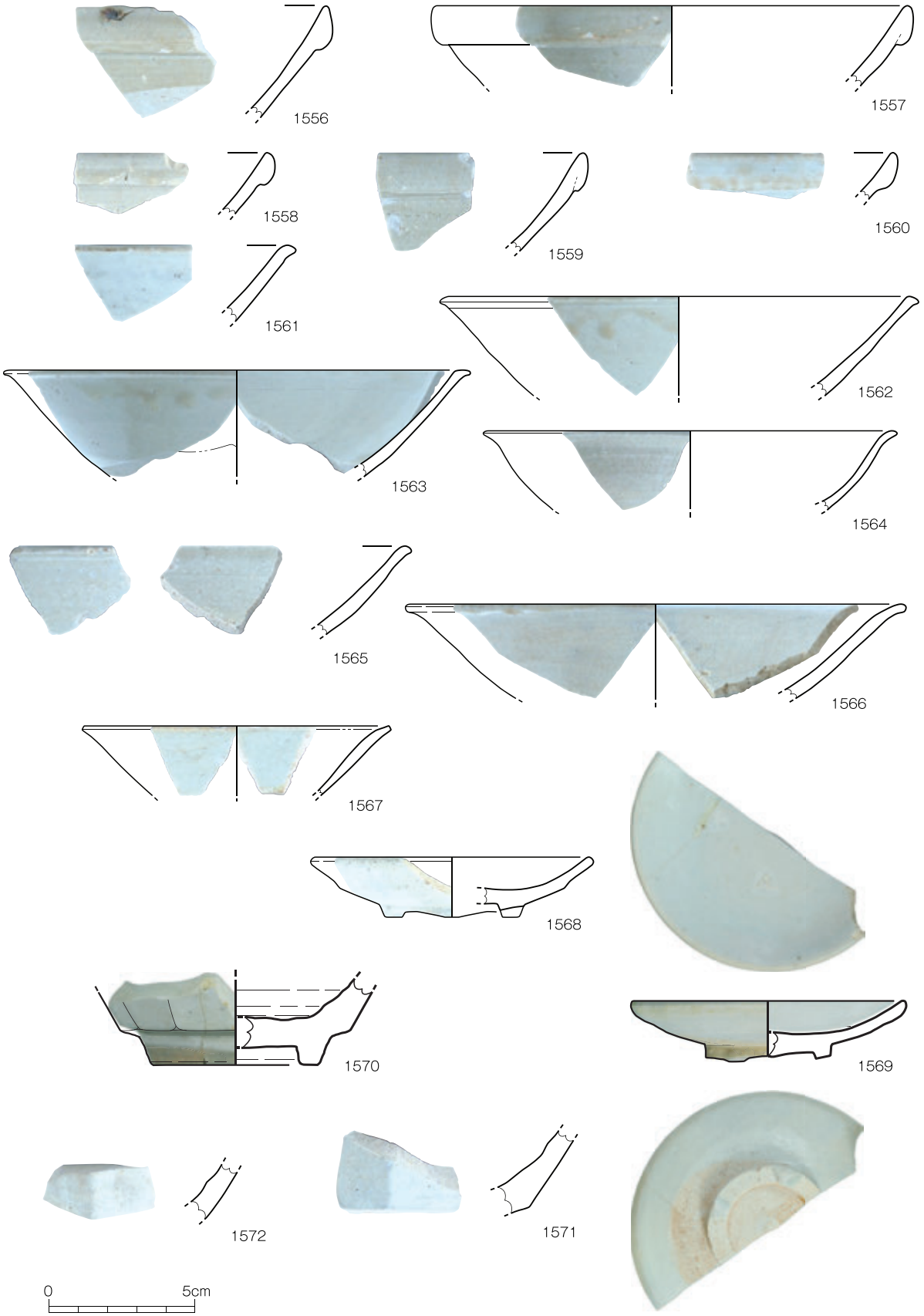
1544～1547は見込みに花文のある碗の高台部分である。

1548は口縁端が内外に張り出すＴ字状を呈するが，特に内側へ強く張り出す香炉である。

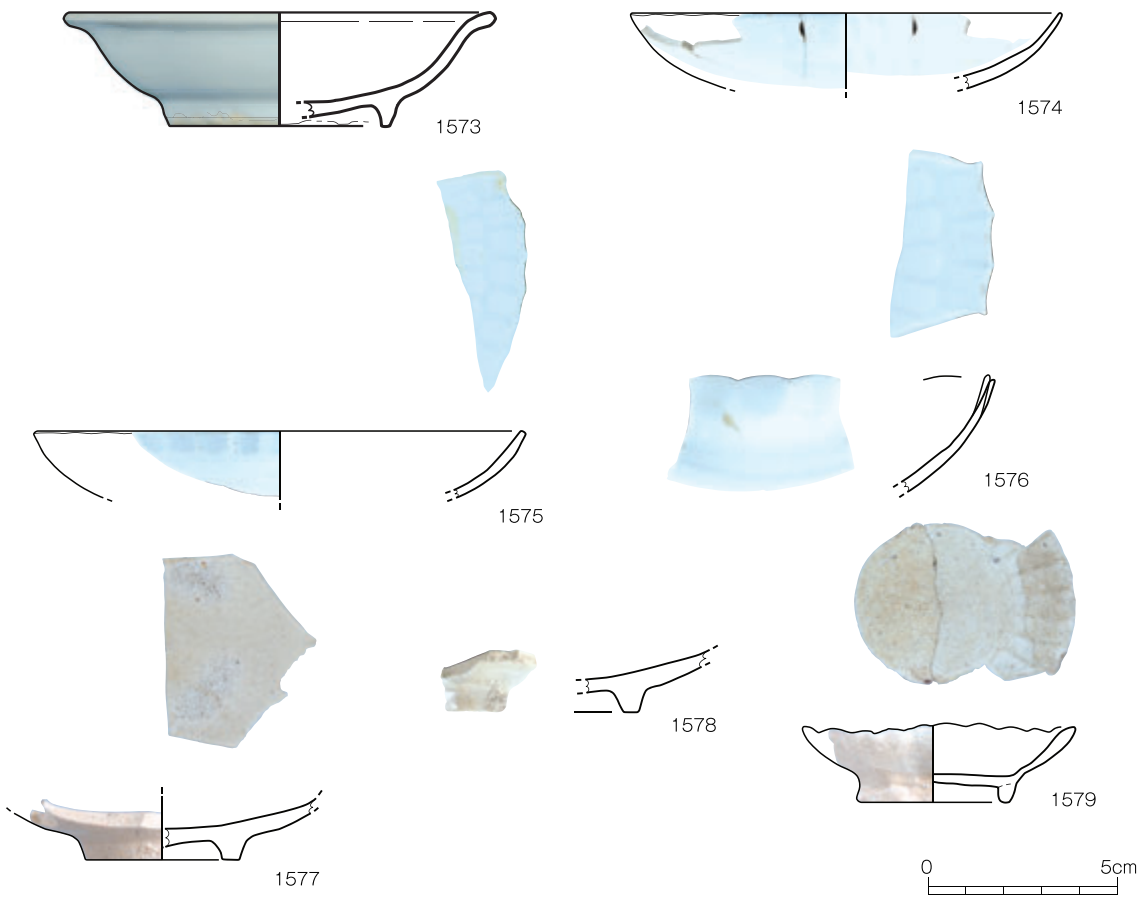
1549は口縁部を「く」の字状に折り曲げ，さらに端を上へゆるやかに引きあげた盤である。

1550・1551は口縁部が強く外反する皿で，内外とも無文である。口縁直径は10cm余りである。

1552～1555は口縁部がゆるやかに内弯する皿であり，断面が矩形の小さな高台が付く。口縁直径は11cmほどで，高台外面は筋状に切っている。1552は口縁直径11.6cm，高さ３cm，高台直径６cmである。灰色がかった釉がかかり，高台内面・見込み部分は露胎となっている。ただし，1552・1555は，明灰色であり，胎土も他の青磁とやや異なることなど，白磁の可能性もある。



第262図　出土遺物（白磁１）



第263図　出土遺物（白磁２）

白磁（第262図・第263図）

碗と皿の器種があり，それぞれに器形の違いがある。

1556～1560は幅の広い玉縁口縁となる碗である。内面あるいは，外面に釉垂れのあるものが多い傾向にある。

1556の外面の釉は上部のみで，体部下半は無釉となっている。1557は口縁直径が15.6cmある。

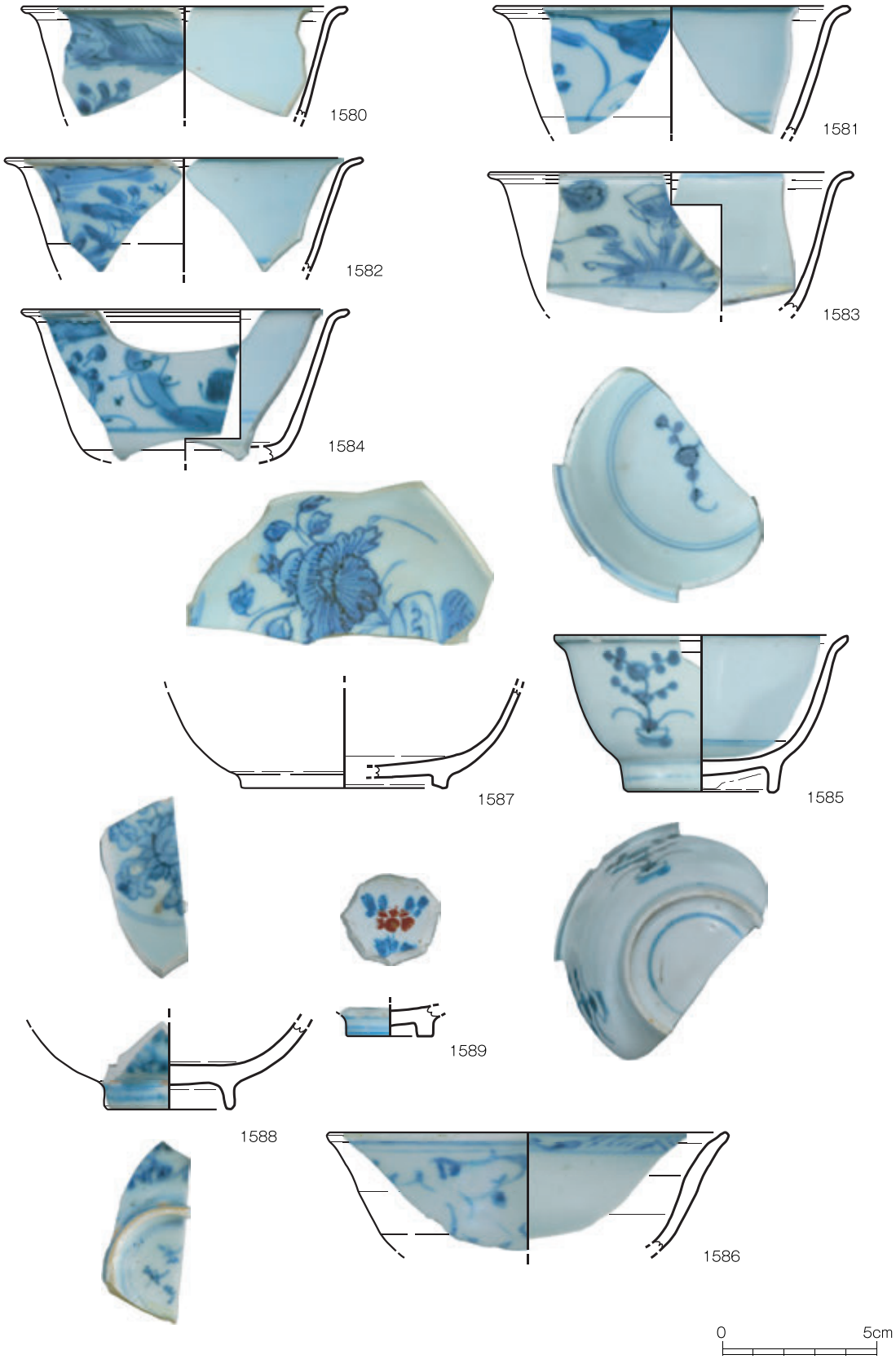
1561～1563は端反り口縁の碗で，口縁直径はともに16cm足らずである。1563の外面下部は無釉となっている。釉は内外ともきれいにかかっているが，外面の一部に貫入がみられる。

1564～1566は口縁が外反する碗で，1564が丸みをおびた体部から口縁へ外反して立ち上がるのに対して，1565と1566は割とまっすぐ口縁へ向かい外反している。1566の内面には細い唐草文がみられる。

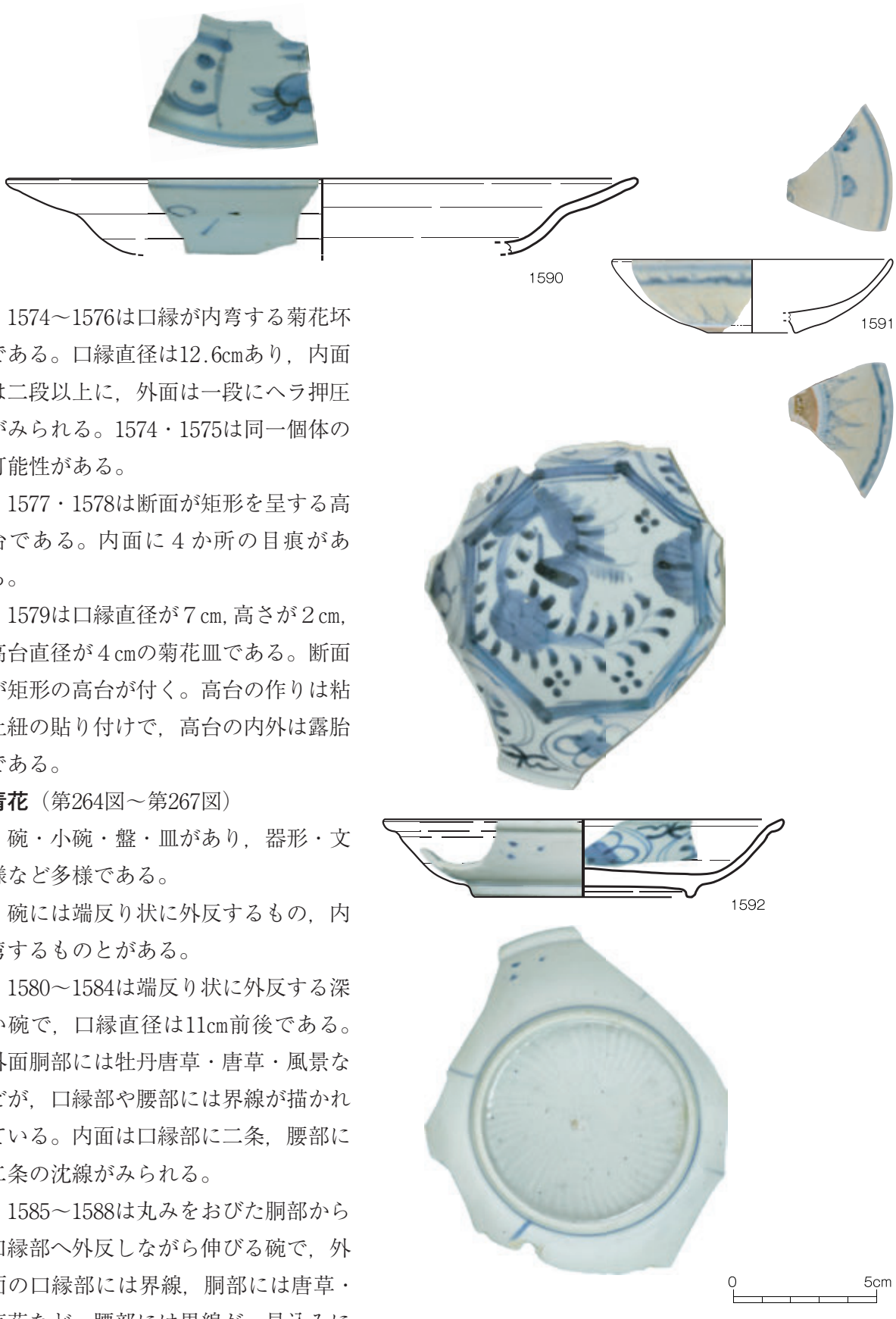
1567は口縁端が断面矩形となる口はげの坏である。

1568～1578は釉が灰白色あるいは青色味をおびる小碗・皿である。1568～1572は多角となる皿・小碗である。1568・1569は高台が多角となる皿である。1568は口縁直径が9.2cm，高さが2.2cmの皿で，内外とも釉がかかっている。見込みの４か所には重ね焼き痕が残る。1569は口縁直径9.4cm，高さ２cmの皿で，外面の体部下半から高台部分は無釉である。1570～1572はこの種の小碗では分厚い作りのもので，同一個体である。高台より内側は露胎である。

1573は口縁部が外反する坏で，口縁直径が11cm，高さが３cm，高台直径が６cmある。



第264図　出土遺物（青花１）



第265図　出土遺物（青花２）

1574～1576は口縁が内弯する菊花坏である。口縁直径は12.6cmあり，内面は二段以上に，外面は一段にヘラ押圧がみられる。1574・1575は同一個体の可能性がある。

1577・1578は断面が矩形を呈する高台である。内面に４か所の目痕がある。

1579は口縁直径が７cm，高さが２cm，高台直径が４cmの菊花皿である。断面が矩形の高台が付く。高台の作りは粘土紐の貼り付けで，高台の内外は露胎である。

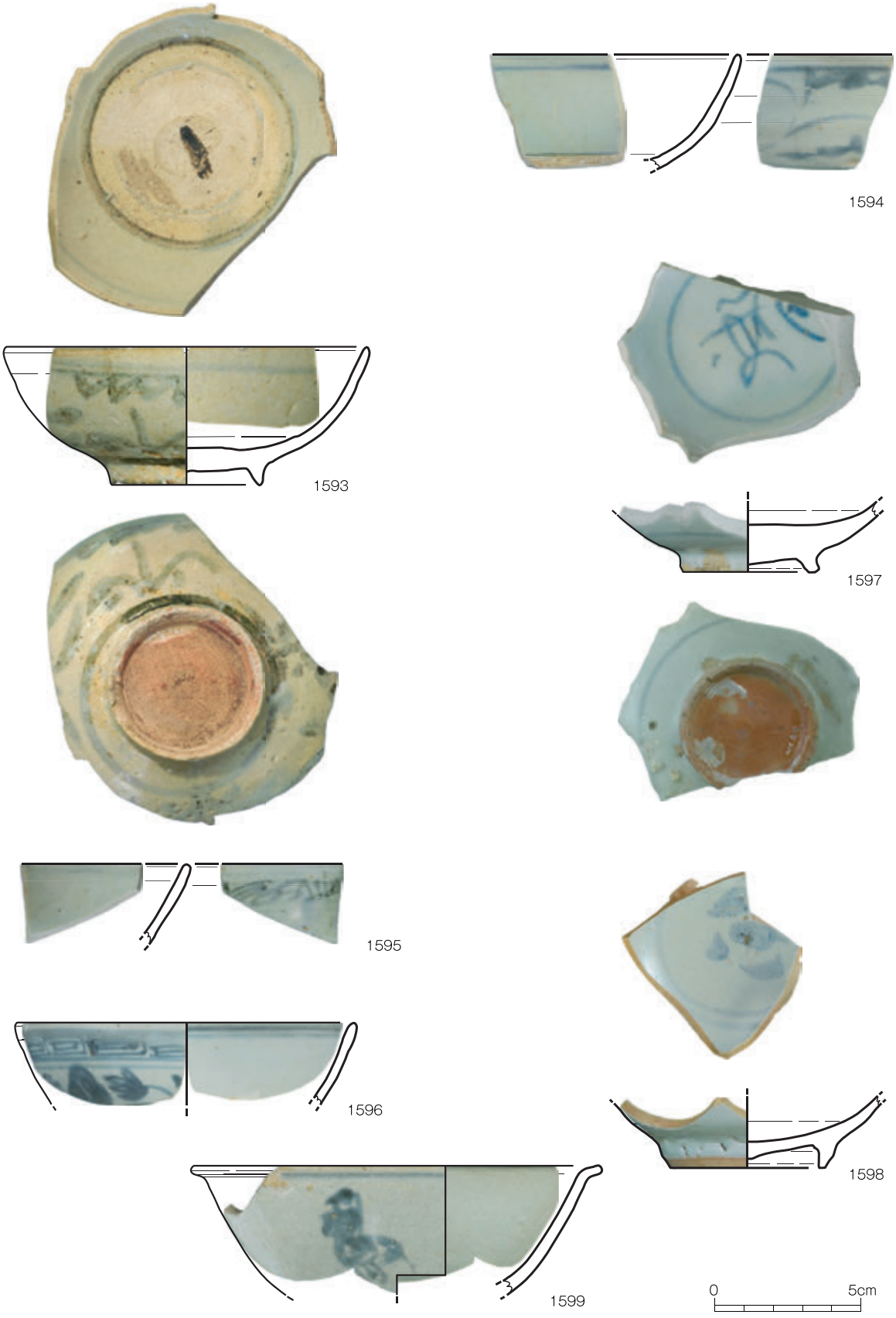
青花（第264図～第267図）

碗・小碗・盤・皿があり，器形・文様など多様である。

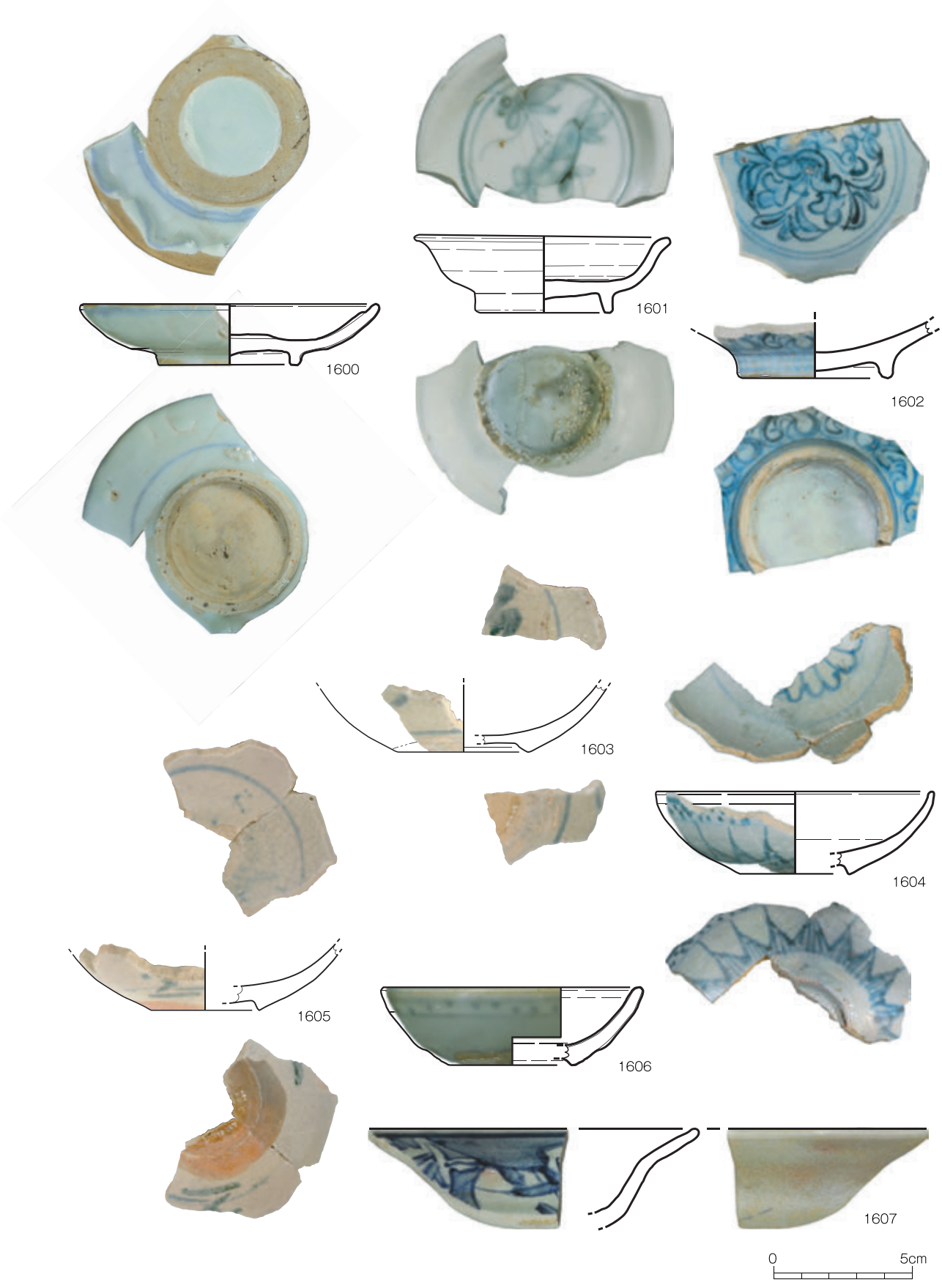
碗には端反り状に外反するもの，内弯するものとがある。

1580～1584は端反り状に外反する深い碗で，口縁直径は11cm前後である。外面胴部には牡丹唐草・唐草・風景などが，口縁部や腰部には界線が描かれている。内面は口縁部に二条，腰部に二条の沈線がみられる。

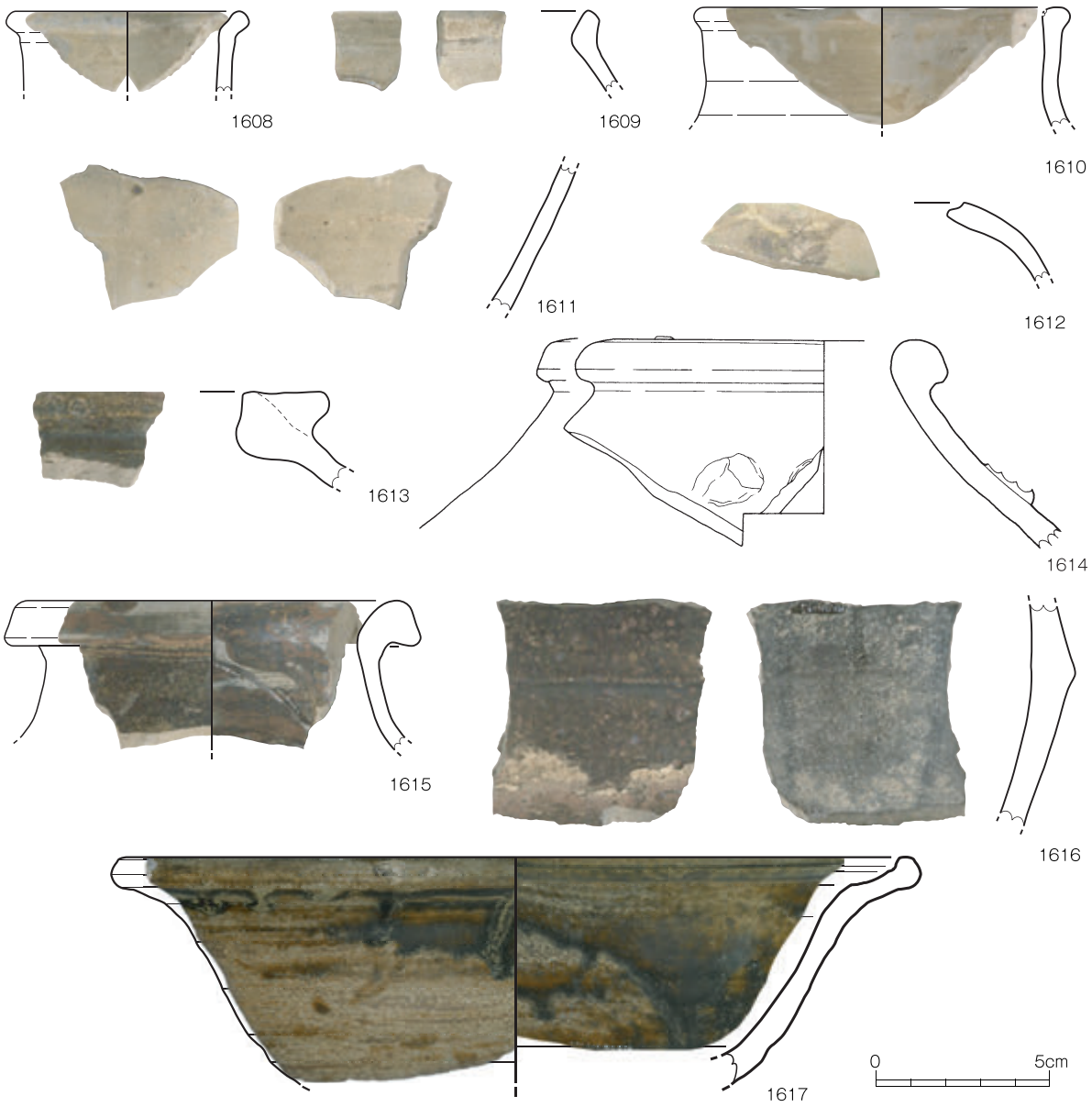
1585～1588は丸みをおびた胴部から口縁部へ外反しながら伸びる碗で，外面の口縁部には界線，胴部には唐草・草花など，腰部には界線が，見込みには界線が巡り，草花・牡丹などが描か



第266図　出土遺物（青花３）



第267図　出土遺物（青花４）



第268図　出土遺物（陶器１）

れる。1586の内面口縁部には火襷文が巡っている。1587の高台から底部にかけては無釉である。1588の高台内には永久長春の字款が書かれている。

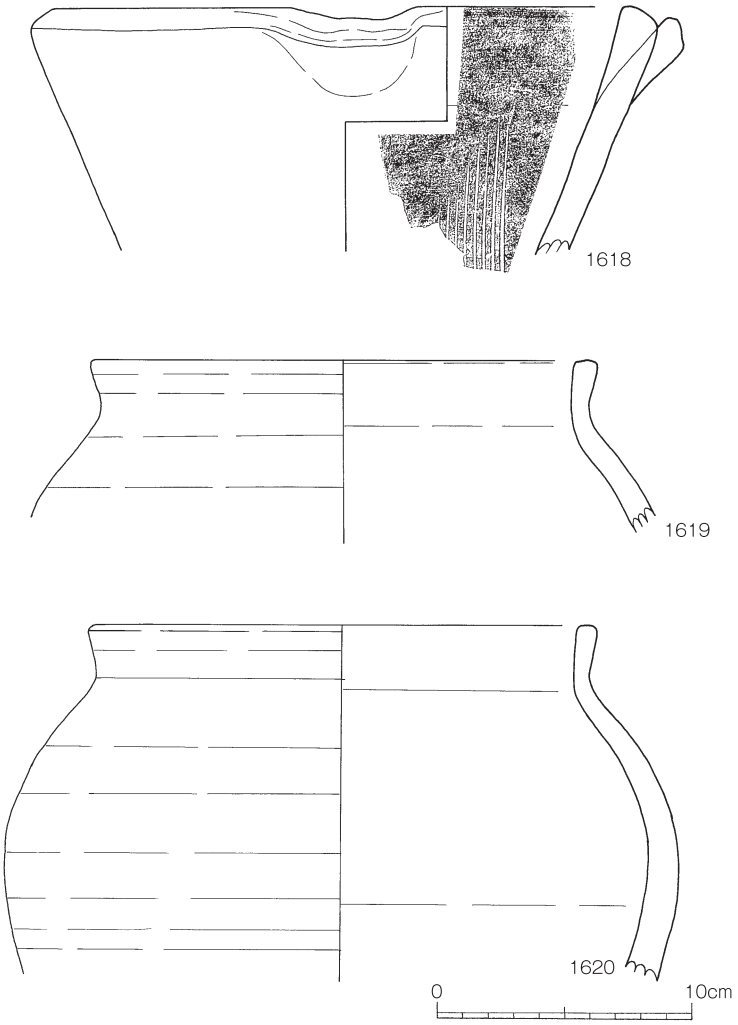
1589は矩形のどっしりした高台の付く小碗で，外面には界線，見込みに赤色を呈した花弁と青色の葉が描かれている。

1590は直径が22cmある盤である。丸みをおびた胴部から口縁部が「く」の字状に屈曲して外へ広がる。外面は口縁に界線が，胴部に唐草が描かれ，内面は口縁に界線が，胴部に牡丹唐草が，腰部に界線が描かれている。1607も同様の形状をしており，内面の口縁から胴部にかけて太い界線と風景画・花文らしきものが描かれている。

1590は白っぽいが，1607はやや黄みがかっている。1591・1603～1606は口縁がかるく内弯し，碁笥底となる皿である。1591は口縁直径が9.5cm，高さが３cm,底部直径が３cmあり，外面は口縁に波濤文帯，胴部に芭蕉葉文，腰部に界線が，内面は口縁部に界線が，胴部や見込みにも文様・界線が描かれている。1604の外面は胴部の芭蕉葉文と腰部の界線は1591と同じだが，口縁部は界

線に挟まれた連続した丸文である。見込みには界線と蓮弁文がみられる。これも口縁直径10cm，高さ３cm，底部直径４cmと，1591に近い。1606の外面は口縁部に界線に挟まれた連続丸文がある。この類は他の破片も同じような文様が描かれる。1591が青白色を呈するのに対して，そのほかは黄色っぽく，底部は1604が総釉で，他は無釉である。

1592は口縁直径が14cm，高さが2.8cm，高台直径が7.5cmの皿である。外面は口縁部と腰部に界線が巡り，胴部は縦線で４つに区切り，その中に丸を３つ結合した文様がある。内面に唐草文が，見込みには八角形の画線に囲まれた牡丹唐草文がみられる。



第269図　出土遺物（陶器２）

1593～1598は内弯する口縁の碗である。1593は口縁直径が12.5cm，高さが4.7cm，高台直径が５cmあり，外面は口縁部と腰部に太線の界線があり，その間に太い草花文がある。内面は口縁に界線があり，身込みは重ね焼きにより釉がとれ，界線と縦筋が描かれ，高台端はとがっている。1594は碗の小片で見込み部は，無釉である。1595は，外面口縁に唐草文状の曲線が描かれているものである。1596の外面は口縁部に雷文帯が巡り，胴部に牡丹唐草が描かれている。内面は口縁に界線がみられる。

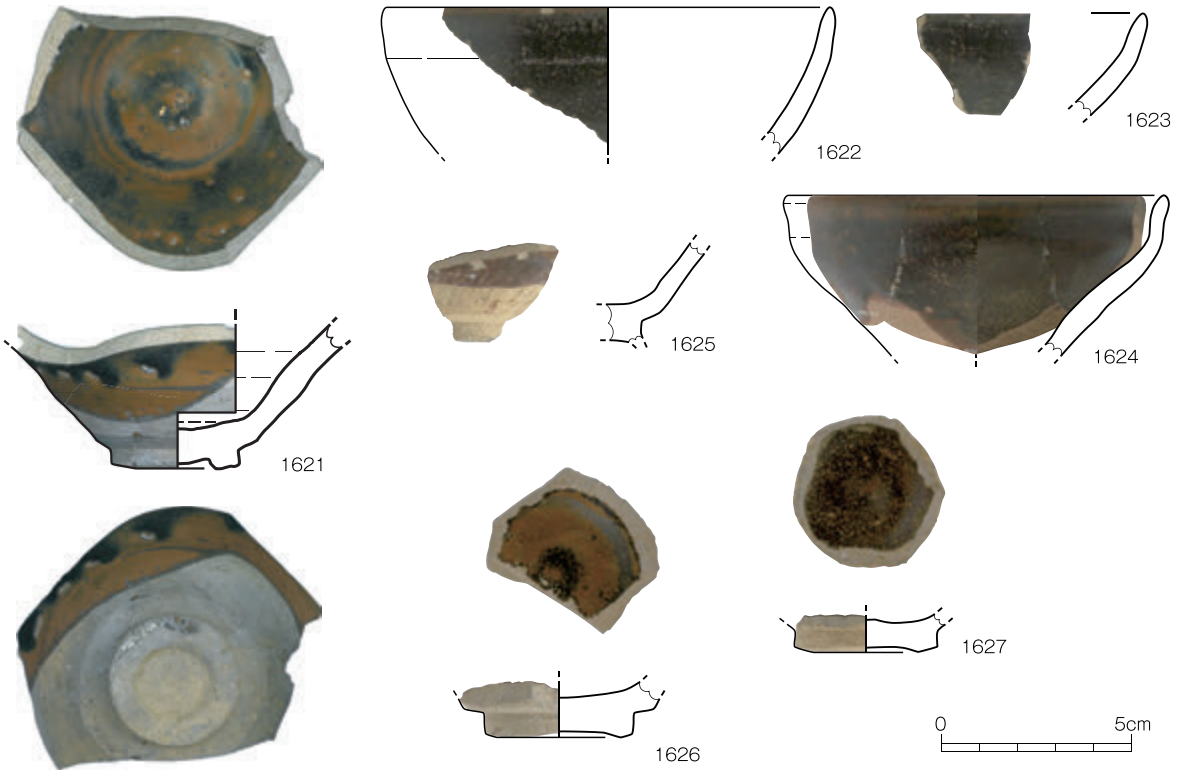
1600は口縁が内弯する皿で，外面・内面とも口縁と腰部に界線があるが，内面は釉が垂れている。1601は外反する小皿で，見込みに花文と界線が描かれている。1602は，内外面に草花文が描かれる皿であるが，碗の可能性もある。1603～1606は碁笥底の皿である。1603～1605は草花文・芭蕉文などの文様が描かれている。1593～1607までは，漳州窯系である。

三彩（第268図）

緑・黄・茶の三色からなる無頸壷である。口縁部に外向きの二重蓮弁文が描かれ，内面は無釉の水差しで，熊本県の浜の館などからの出土例があるものである。

陶器（第268図・第269図）

1608・1609は口縁端近くで強く外反する口縁直径6.5cmの小型壷である。1610は口縁直径10cmの直口壷で，口縁端はやや肥厚する。1611は胴部である。灰色がかった釉がかかっている。13世紀代の四耳壷・壷・水注などの破片であると思われる。



第270図　出土遺物（天目茶碗）

1613は口縁端が上下，特に下に肥厚する肩の張る黒釉壷である。玉縁状口縁の外側に帯を貼り付けている。

1614は口縁直径が10.5cmあり，肩部に横耳痕跡がある呂宋壷である。口縁端は玉縁状にふくらみ，肩部が外に張る。口縁から外面にかけて黒釉がかかっているが，口唇部から内面は無釉である。1615も似ているが，頸部がやや長く，内面の頸部まで釉がかかっている。

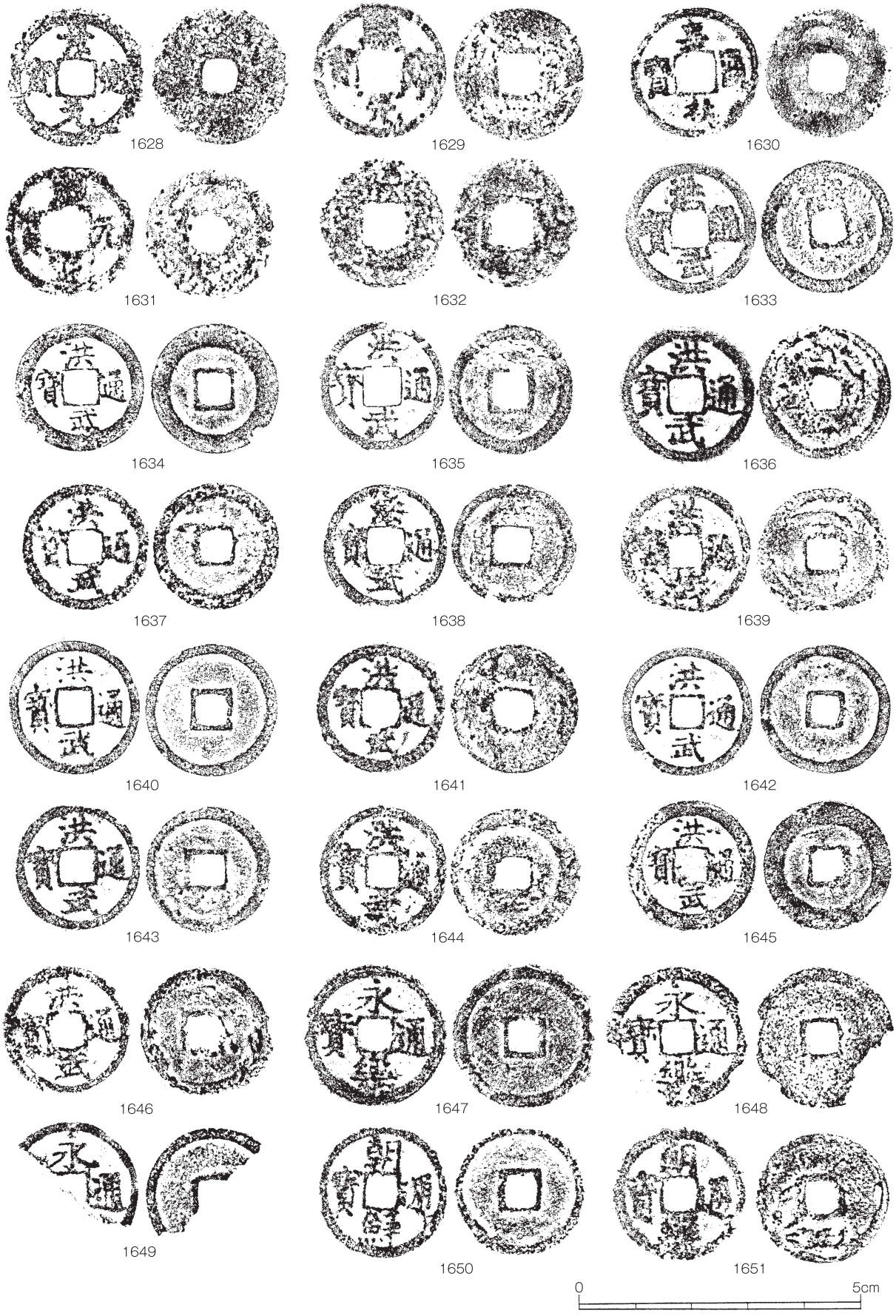
1616は肩が張り，ここで稜をもつ甕の破片だが，肩部（第268図では下）に重ね焼き痕跡がみられる。外面には黒釉がかかっているが，内面は無釉である。

1617は丸みをもって立ち上がり，口縁部でゆるやかに外反し，端部近くで直に立ち上がる口縁直径23cmの黄色っぽい飴釉鉢である。口縁内部は直に立ち上がり，頸部内面も稜をもって屈曲している。内外とも総釉で，外面は釉が垂れている。

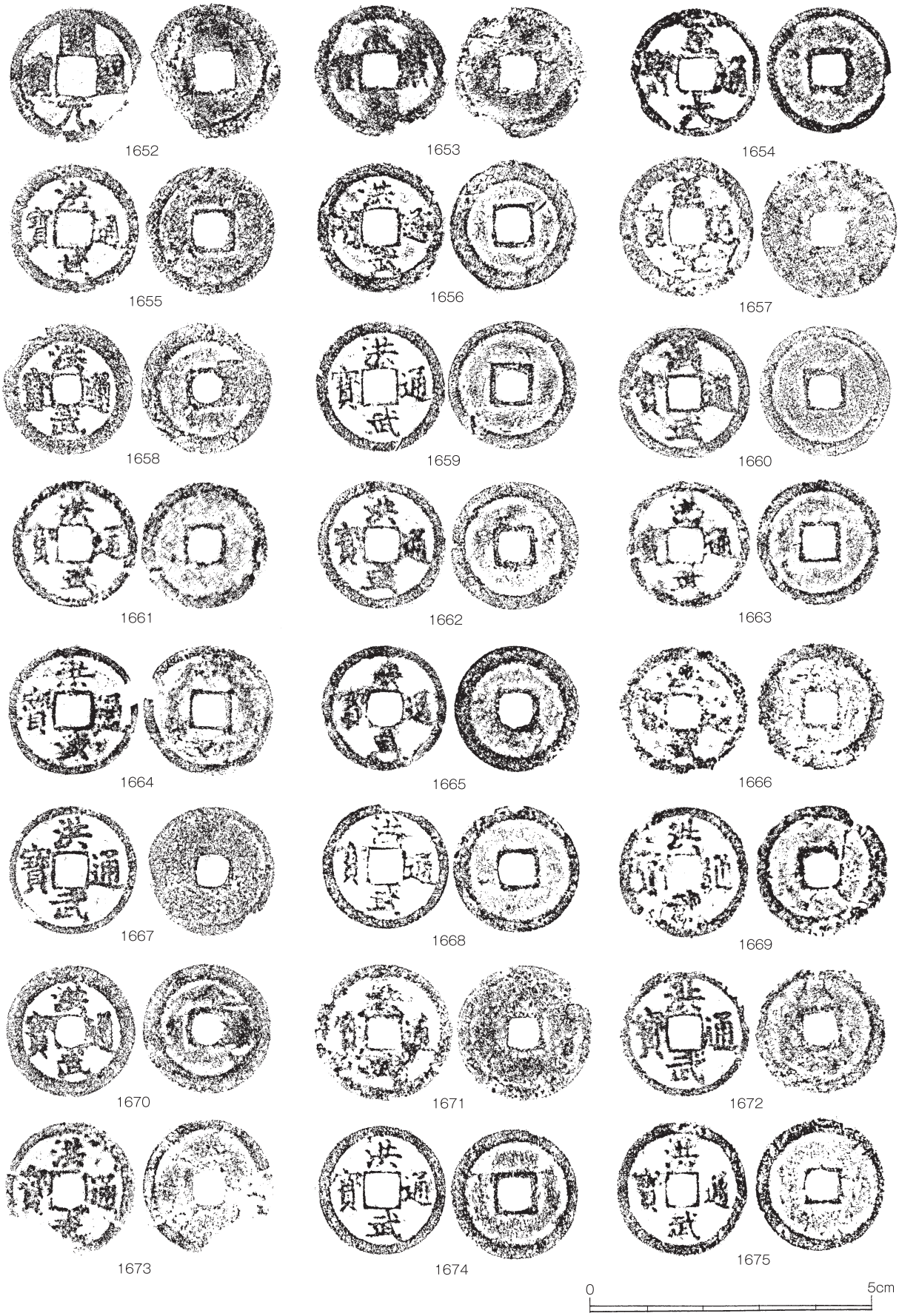
1618は口縁部へまっすぐ伸び，端が外へ下がる擂鉢である。内面かき目は幅が広い。注ぎ口を有している。 1619・1620は広口の直口壷である。口縁直径はいずれも19.8cmある。1620は，灰色であり，軟質あるいは須恵質に近いものである。

天目（第270図）

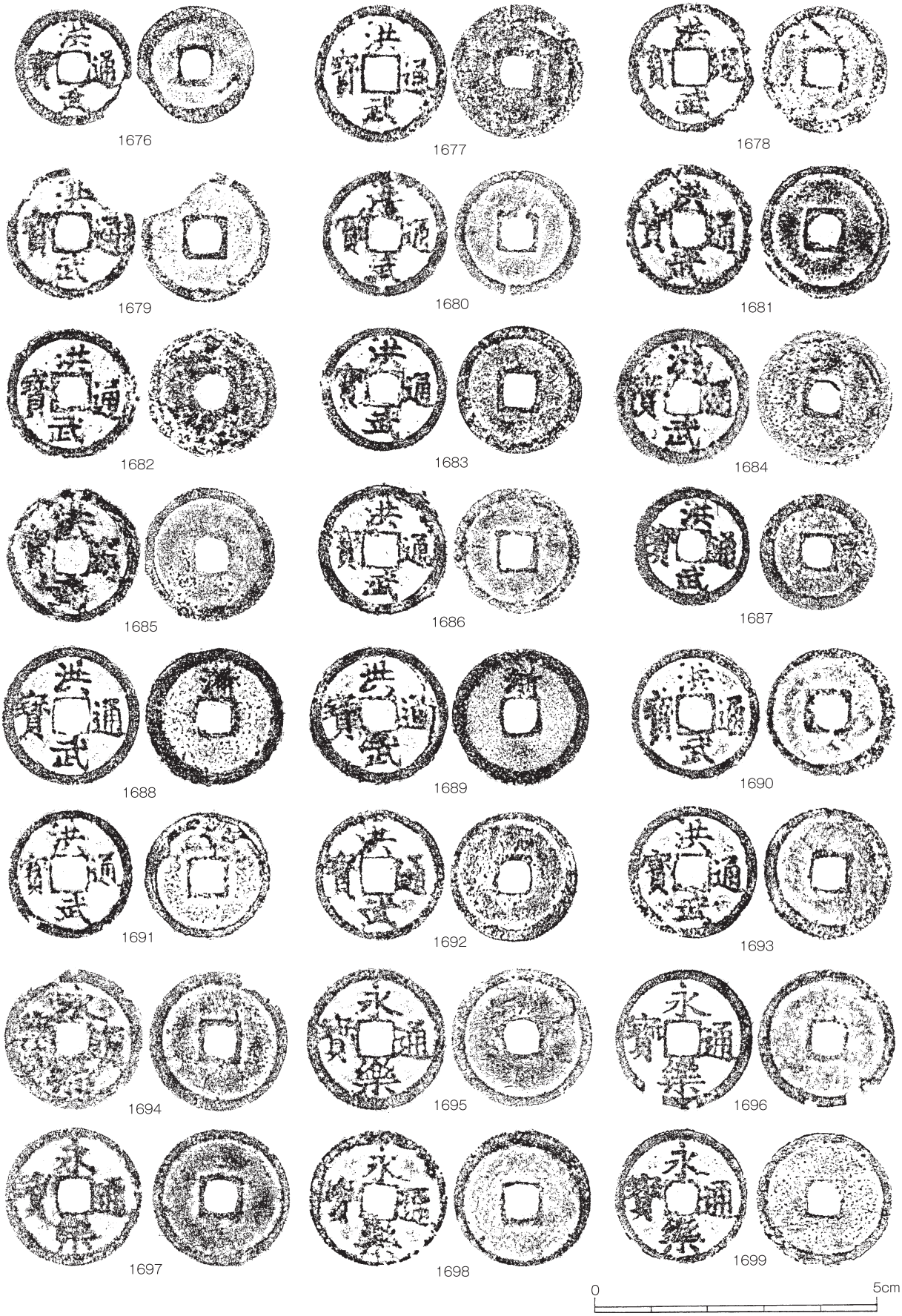
いずれも茶碗だが，底部から外へ広がり，口縁近くで屈曲し直に立ち上がるもの（1621・1624）と内弯するもの（1622・1623）とがある。底は幅が広く低い高台が付くもの（1621・1625）と，あげ底状となるもの（1626・1627）とがある。腰部と高台の境はしっかりした曲点をもっており，腰部から底にかけては露胎となっている。1621は，釉掛けも厚く釉の断面にガラス質の光沢もあり，中国産の可能性がある。他は美濃を中心とする国内産である。



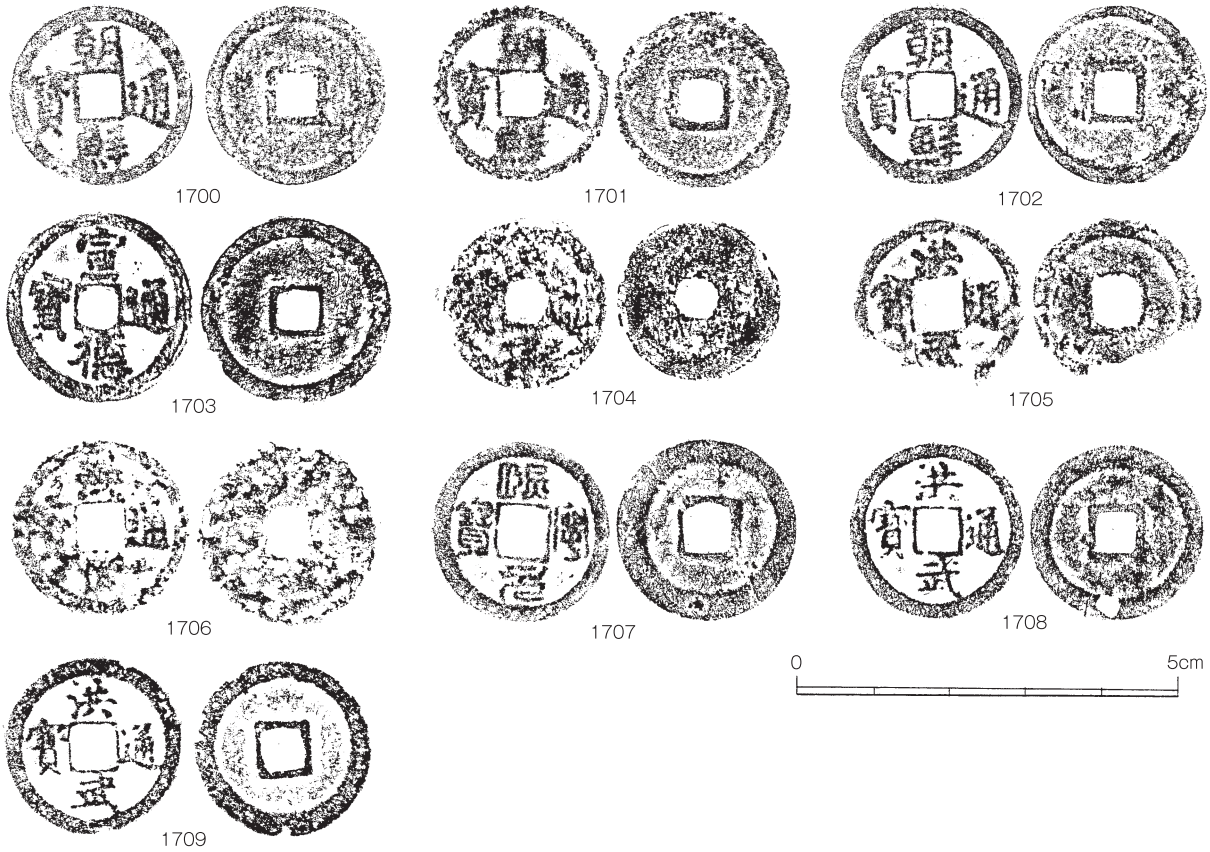
第271図　出土遺物（銭貨１）



第272図　出土遺物（銭貨２）



第273図　出土遺物（銭貨３）



第274図　出土遺物（銭貨４）

銭貨（第271図～第274図）

古代のものも含まれているが，古代土坑４及び中世墓等の一括遺構の銭貨を除く，82枚の拓影を掲載した。

出土区は，Ｈ－27が2枚，Ｊ－17が3枚，Ｇ－14が19枚，Ｇ－13が53枚と，Ｇ－13が，圧倒的に多い。銭貨の種類別では，開元通寶が１枚，景佑元寶が１枚，嘉寧元寶１枚，熙寧元寶１枚，元符通寶１枚，慶元通寶１枚，至大通寶１枚，洪武通寶57枚，永楽通寶９枚，朝鮮通寶５枚，宣徳通寶１枚，不明３枚である。

初鋳年代を見ると，古代以前が５枚であり，残りは全て中世である。中でも，洪武通寶が圧倒的に多く，Ｇ－13区に出土も集中している。ただし，ほとんどがⅠ層の出土であるために，詳細は不明である。出土区の周辺で，銭貨に関する何らかの営みがあったことであろうとしか言えない。

第Ⅸ章　近世の調査

近世の遺構は，第275図のように，Ｈ－18区いわゆる曲輪２の南端部から掘立柱建物跡とＤ－13区を中心とする曲輪３より一段低い部分から，薩摩焼を中心とする陶磁器類と建物跡には復元できなかったが，数軒程度の柱穴群が検出された。

第１節　遺構

・掘立柱建物跡（第276図・第277図）

掘立柱建物跡は，桁行方向がほぼ東西で1間×４間の規模のものである。桁行間は平均で8.8m，梁間柱間は平均で3.74m，桁行間は平均で2.02ｍである。柱穴は平均で長径が75㎝，短径が67.3㎝，深さは75.9㎝である。柱穴の平面プランはほぼ円形である。

この建物の特徴は，根石を持つことと，柱の高さ調整のために，根石の下に粘土質の土を敷いてあることである。柱穴９以外の柱穴では，柱穴に根石が置かれており，その石質のほとんどが安山岩であった。

根石の下には，柱の調整のために敷かれた埋土は柱穴１，３，５，６，10では，根石の下と上で埋土の土色に違いが確認できた。土色・土質は，茶褐色の粘質土もしくは砂礫であった。他の柱穴でも柱痕や根石の状況から考えると根石の下には２㎝～45㎝の埋土があった。

また，柱穴５，６，10を除き柱痕が確認できた。長径は18㎝～35㎝で，平均で23.86㎝ある。柱穴５，８は切り合いが確認できる。柱を複数回建て直したものと思われる。

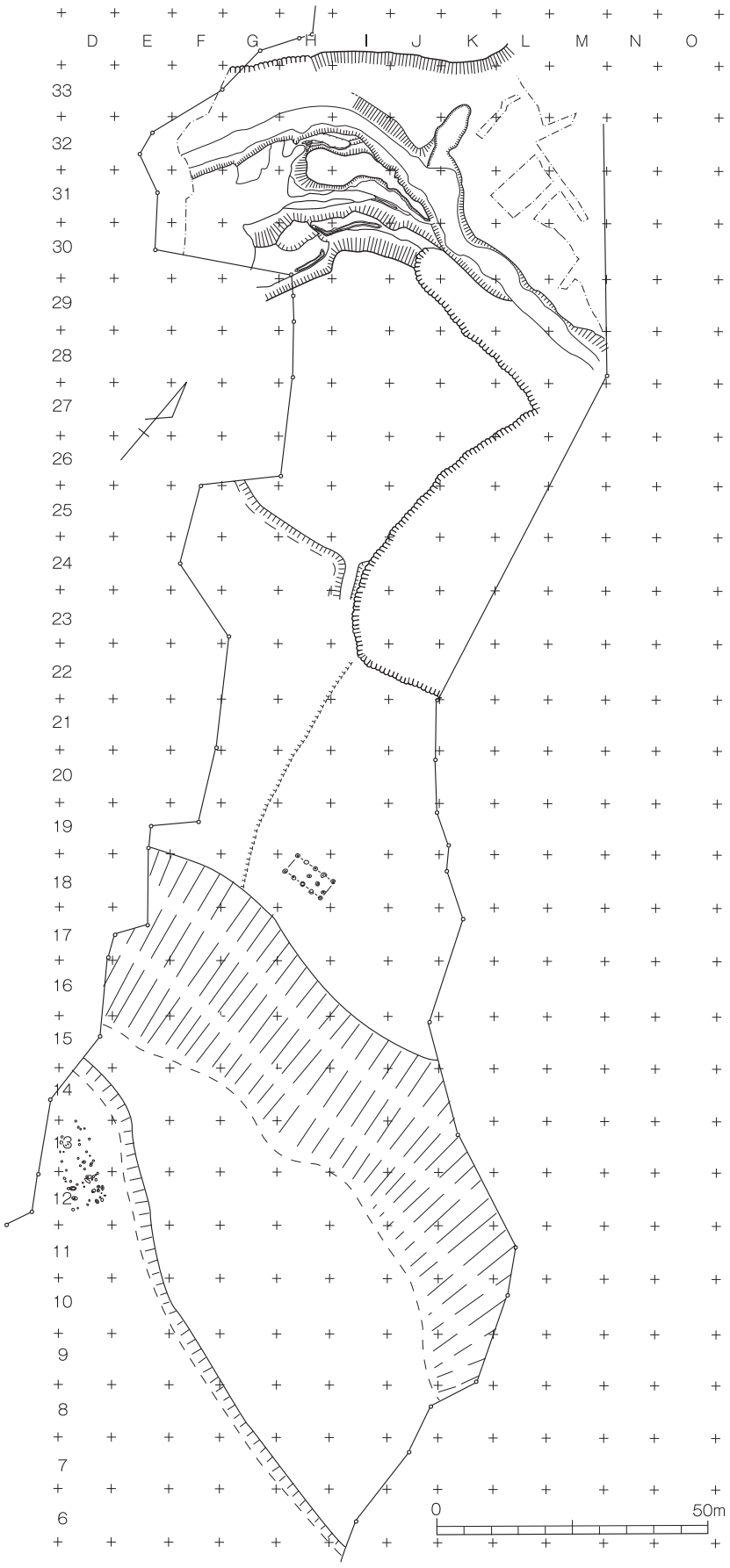
この建物の検出面は標高51.3m～51.0mであり，その高さが一定なことから，人為的に水平に造成された地面に建てられたものと考えられる。

建物の規模としては，約８ｍ×４ｍとかなり大規模なものであったと考えられる。

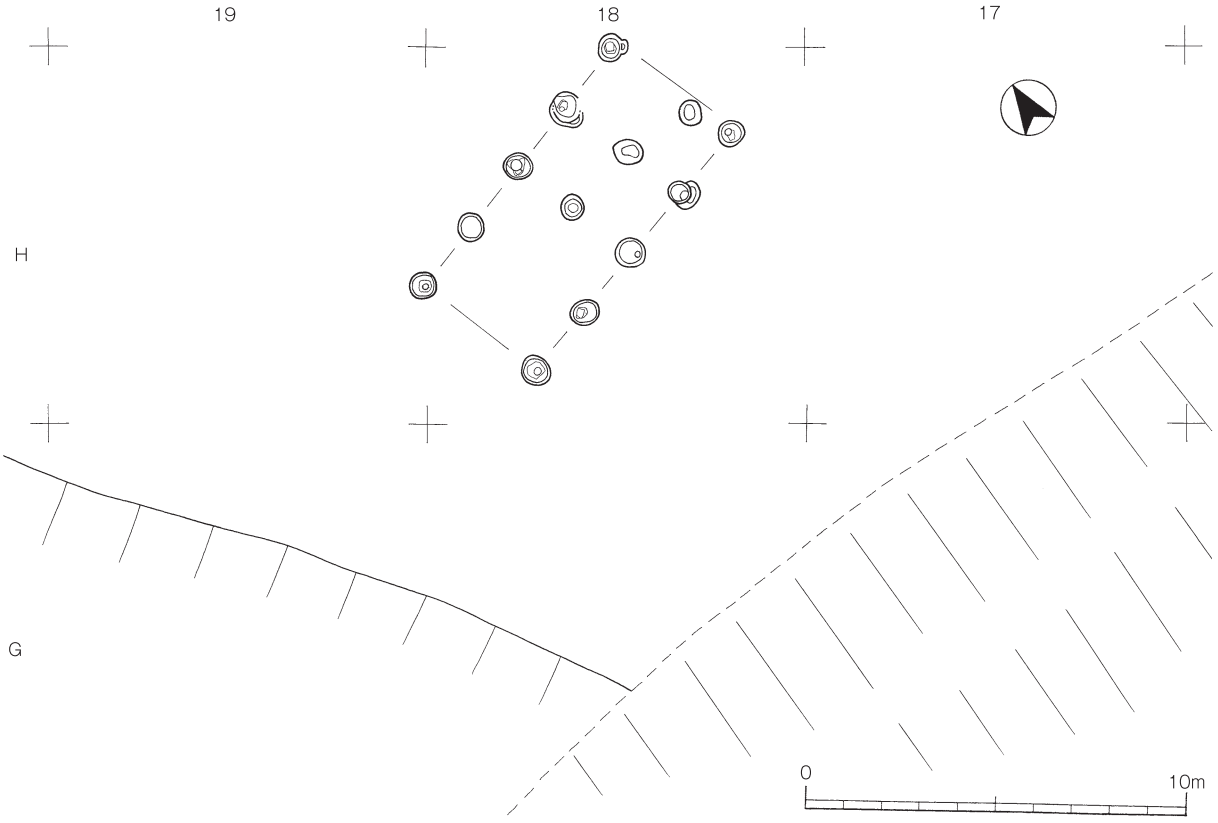
なお周辺には，柱穴が多数確認できたが，第276図の10基の柱穴以外で建造物を特定できないが，同等に径が大きく，深い柱穴が柱穴４と９，柱穴５と８，柱穴６と７の間に，柱穴７～２に向かって桁間を斜方向に柱穴が，梁間上に３基確認できた。おそらく，掘立柱建物跡が建っていた期間や前後に，この周辺に方位，大きさ，場所が異なった建造物が存在したものと考えられる。

江戸１号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱穴芯間計測表

柱穴番号	柱穴　（単位：㎝）			柱穴番号	梁間柱間（m）	柱穴番号	桁間柱間	桁行間
	長径	短径	深さ（細深）	Ｐ１～２	3.75	Ｐ２～３	2.00	
1	75	68	70	Ｐ３～10	3.60	Ｐ３～４	2.00	8.00
2	73	69	70	Ｐ４～９	3.75	Ｐ４～５	2.00	
3	76	65	74	Ｐ５～８	3.75	Ｐ５～６	2.00	
4	76	68	80	Ｐ６～７	3.85	Ｐ７～８	2.05	
5	98	85	90			Ｐ８～９	2.10	8.15
6	66	62	60			Ｐ９～10	2.00	
7	68	64	80			Ｐ１～10	2.00	
8	65	58	88	平均	3.74		2.02	8.08
9	78	71	85					
10	75	63	62					
平均	75.0	67.3	75.9					



第275図　近世遺構配置図



第276図　掘立柱建物跡位置図

柱穴内からの遺物の出土は若干で，中世末から近世にかけてと思われる青花の小片が数点出土したのみであった。また，この建物の周辺からは，近世の遺物の出土はみられなかった。

・柱穴群（第278図・第279図）

本城の縄張の南端と思われる緩やかな傾斜面を水平に削って造成したと思われる部分で，江戸期の柱穴群と多量の薩摩焼や肥前系の陶磁器が出土した。

遺構の検出面は造成面，つまりシラス面である。包含層は曲輪から流れ込んだⅡ層～Ⅶ層とシラスの混土（純粋の包含層と言えるかどうかは問題であるが，便宜上，包含層と呼ぶこととする。）であり，遺構の埋土もほぼ同じような状況であった。また，上方の曲輪から流れ込んだと思われる古代や中世の遺物も表土や包含層に混じっていた。これら，古い時代のものについては，各時代の遺物の項で扱っている。

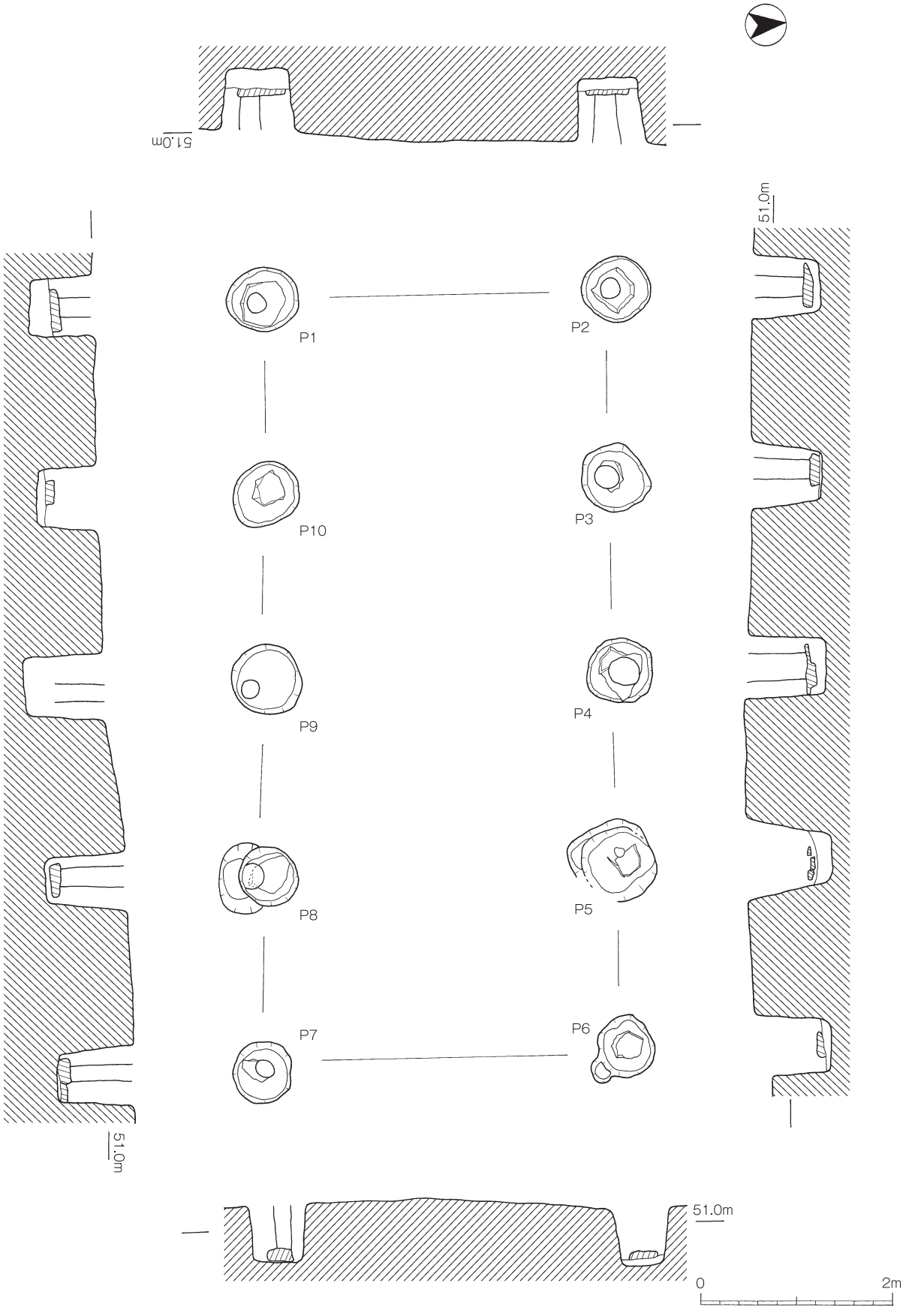
柱穴は，大小合わせて約60個程度である。その分布及び形状には，例外はあるもののいくつかの傾向がみられるようである。

①基本的に直径約30cm～60cmの柱穴の平面プランの基本パターンは円形であり，掘方も垂直である。

②約60cm以上の規模の柱穴は，平面プランが楕円形のものが多い。また，その断面については，ハイヒール型，つまり，二段構造のものが多い。

③小さな柱穴には，根石はない。掘方は垂直である。

④ハイヒール型のものは，根石がないものが多い。



第277図　掘立柱建物跡

⑤　ハイヒール型でＰ５，Ｐ８には根石があるが，Ｐ５のみがヒール部に根石が位置している。

⑥　根石に用いられている石は，安山岩が多く，円形の柱穴の場合は，板石が多いようである。

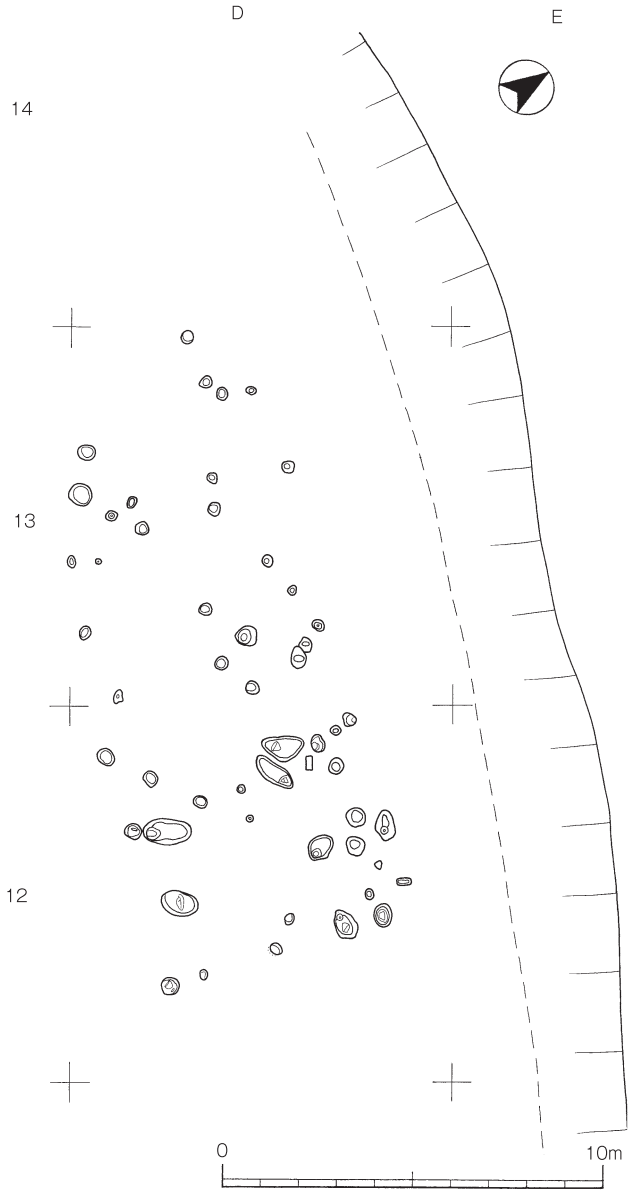
⑦　調査区の北側の柱穴は，ほとんどが円形で直径が約30cm～60cm程度のものが多く，根石は全くない。

⑧　それに反し，調査区南側には，平面プランが楕円形で根石を持つものやハイヒール型のものが多い。

⑨　掘りなおしたり，建て替えたような柱穴はほとんどない。

⑩　遺物の出土は，Ｄ－13が中心である。

などの特徴があるようである。



第278図　柱穴群位置図

柱穴の形状その他については，以上のような傾向が見られるが，建物として復元はできなかったが，東西に長く柱穴が分布している。つまり，南側に向いた建物があったことが想像できる。

具体的な建物の構造や資料不足ではあるために断言はできないが，①～⑩を総合すると，東側の楕円形や根石のある柱穴部分が母屋であり，西側の円形の柱穴群の部分は，母屋に付属する建物であったのではなかろうか。生活用の雑器がこの部分に多いことからすると，最も考えられるのが，普段における生活場，すなわち，台所と農作業におけるその内業にかかわる場であったとの想定ができる。

第２節　遺物（第280図～第289図）

・磁器（第280図・第281図　1710～1720）

1710～1714は肥前系の染付碗である。

1710は外面に幅の狭い一重網目文が描かれた丸碗で，高台が高く削り出される。釉はぎされた畳付には，白色砂粒が付着する。1711は薄手の丸碗で，花文と思われる文様が描かれる。1712はやや深みのある碗で，器壁・高台ともに薄手である。見込みには二重圏線が廻り，外面は扇文が描かれる。1713は外面に丸文が描かれた丸碗で，波佐見焼である。胎土は灰色を帯びた色調で，


D-13
D-12
E-13
E-12
33.6m
P10
P9
P8
33.4m
P3
P4
P7
P11
P2
P6
P5
34.6m
P1
0
3m

第279図　柱穴群

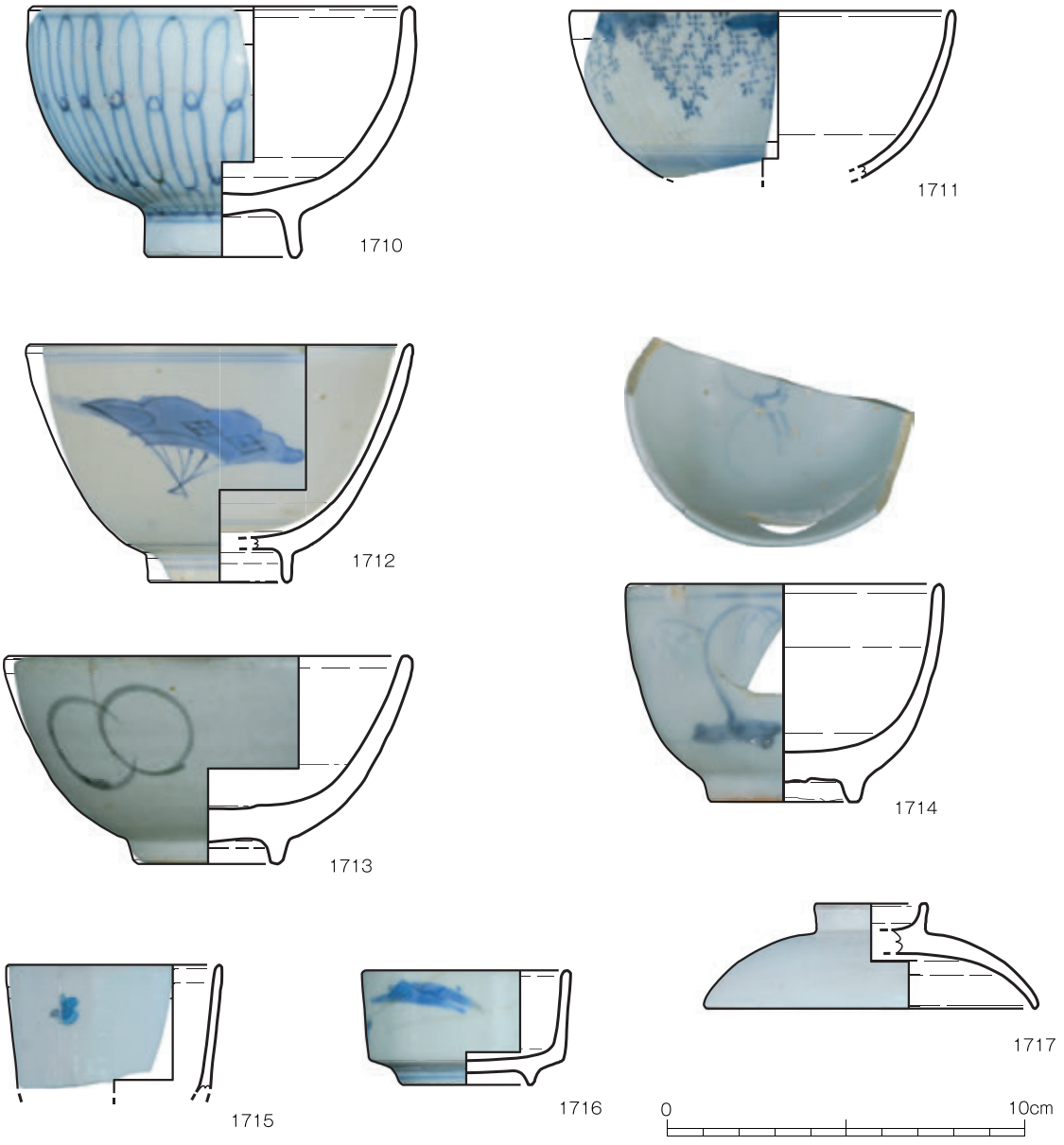
見込みは幅広の蛇ノ目釉剥ぎが施される。1714は外面に草来文が描かれた深小丸碗で，波佐見焼である。見込みにも文様が描かれるが，詳細は不明である。胎土は灰色を帯び，釉はやや青みがかる。高台内および畳付には白色砂粒が付着する。

1715・1716は小坏である。1715は口唇部に鉄錆を塗った口紅装飾が施され，外面には鳥文が描かれる。1716は低い筒形を呈するもので，山水文が描かれる。

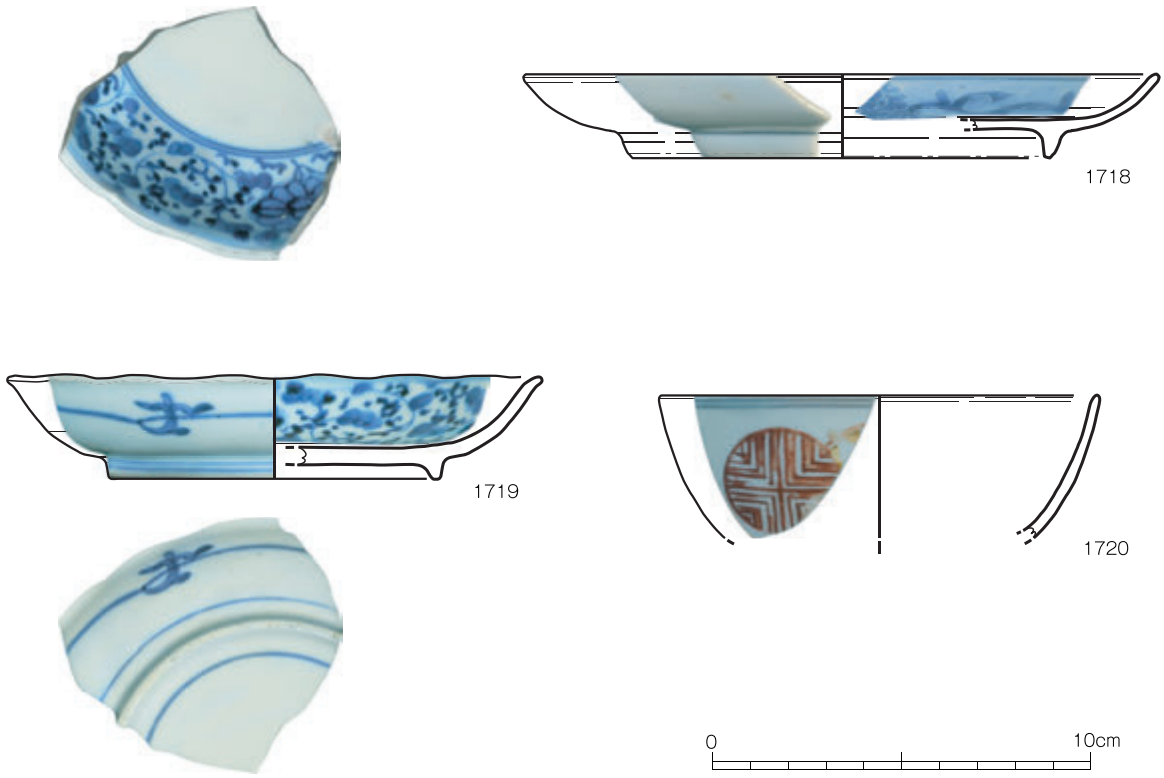
1717は白磁の蓋である。口唇部および，つまみ外と頂部の境には口紅装飾が施される。

1718・1719は染付皿である。1718は内面に唐草文が，1719は内面に牡丹唐草文，裏文様に唐草文が描かれた皿で，1719の口縁部は輪花となる。

1720は色絵の丸碗である。器壁が薄く，外面に丸文が描かれる。



第280図　磁器（1）



第281図　磁器（2）

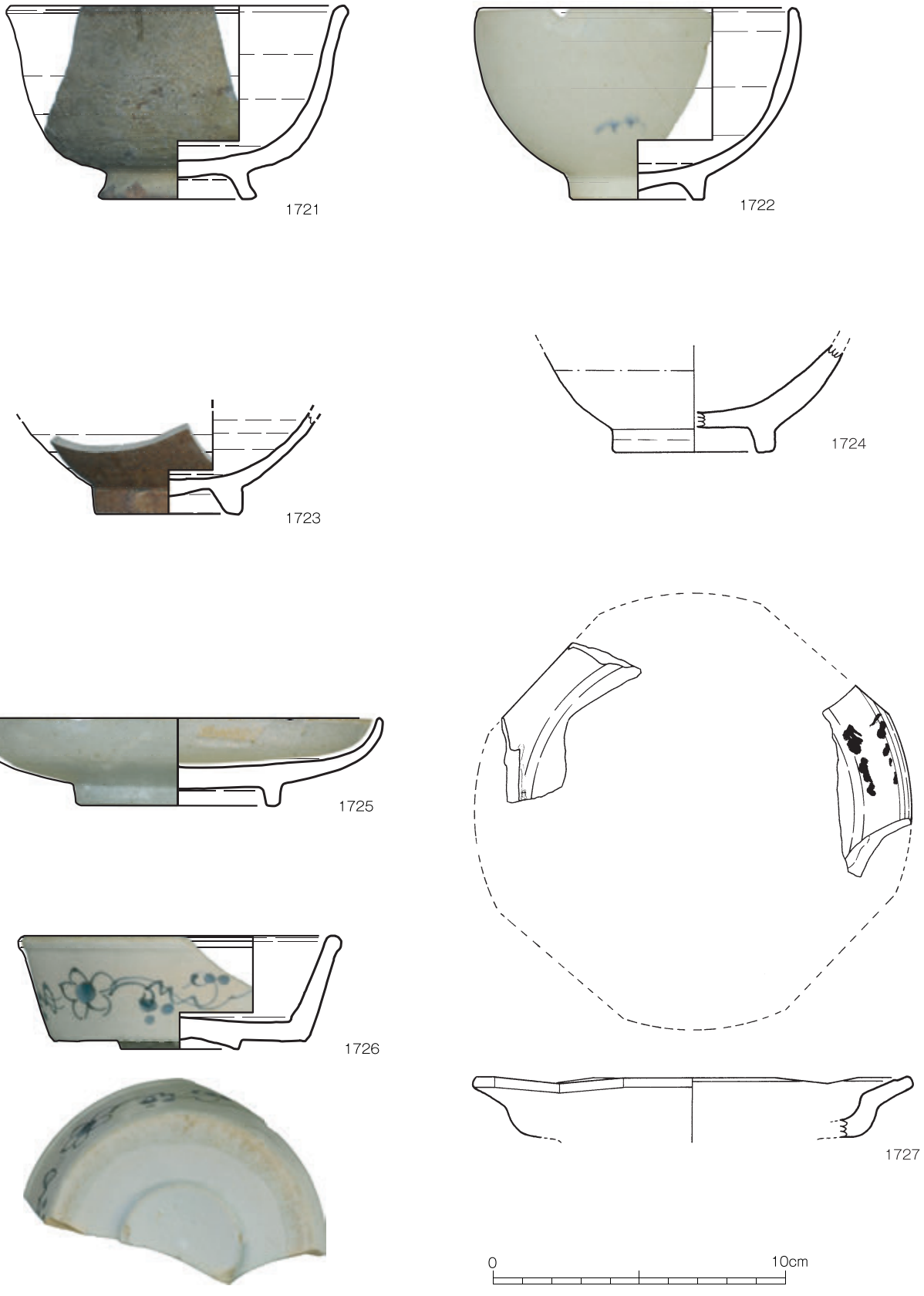
・**陶器**（第282図～第289図）

1721～1757は薩摩焼である。

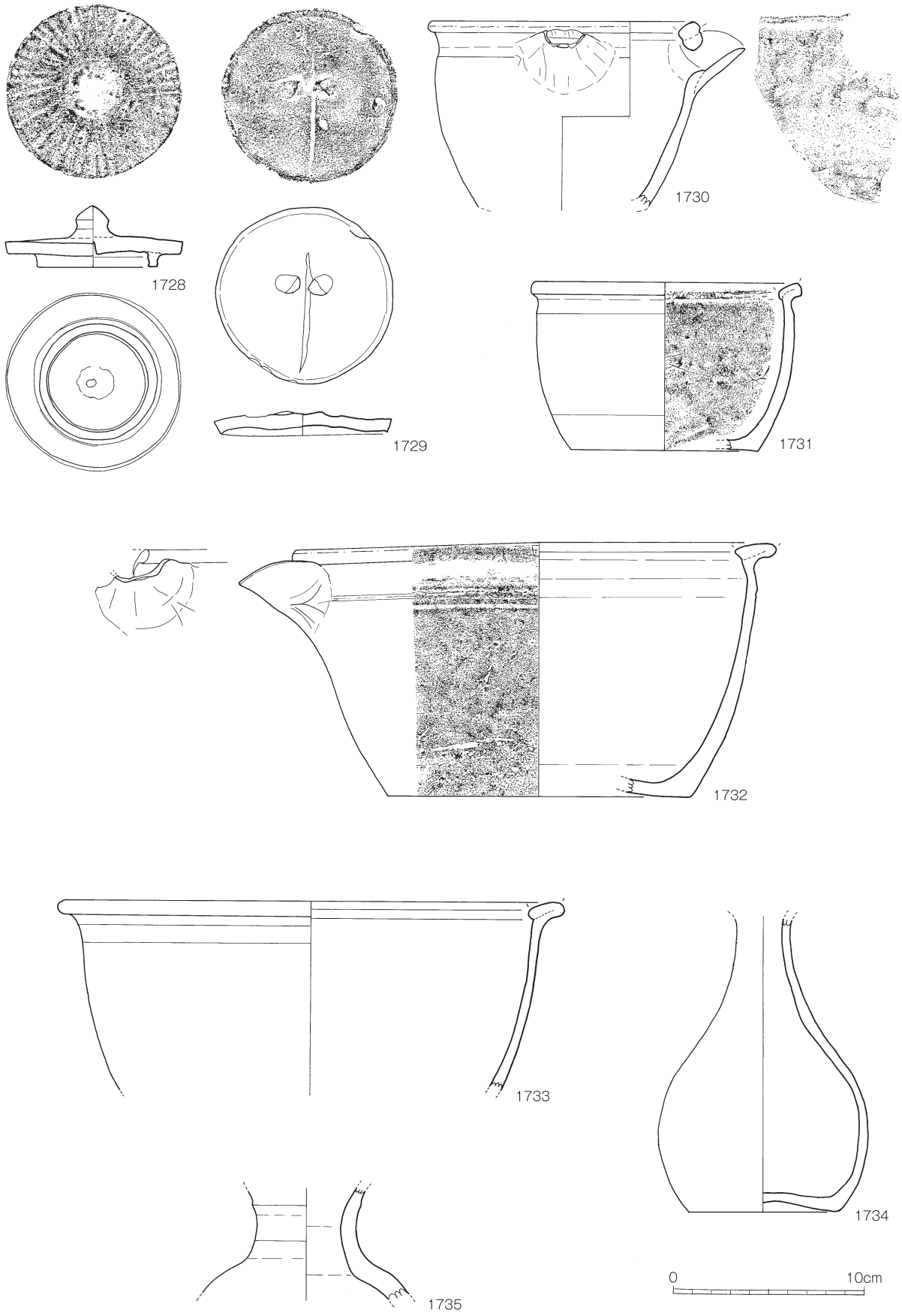
1721は腰部が張り，口縁部がわずかに外反する形状の碗である。高台は付け高台でバチ状を呈する。釉は，灰緑色の灰釉が口唇部を除き施釉される。1722は一般に「白薩摩」と呼ばれる白色陶胎の碗である。黄色味を帯びた灰白色の胎土に透明釉が畳付を除きかけられる。外面には呉須で笹文がえがかれるが，欠損部が多いため全体の図柄の詳細は不明である。高台の形状は兜巾高台である。1723は黄白色の胎土に褐色の飴釉が，畳付を除きかかる碗である。見込みには胎土目の痕跡が４か所残る。1724は黒褐色の褐釉が，腰部から高台内面を除いてかかる碗である。1725は皿である。灰色の胎土に，わずかに黄緑色がかった透明釉がかかるもので，畳付は無釉である。

1726は「白薩摩」と呼ばれる白色陶胎の皿としたが，器種，産地ともに異なる可能性も考えられる。外面には呉須により花文が描かれる。底部はゆるやかな上げ底で，中心は兜巾状につくられる。強く屈曲した腰部の下面には，幅１cm程度の釉はぎが環状に施される。1727は白色陶胎の白薩摩の皿である。体部の形状は腰部で強く屈曲し，口縁部で折れ縁となる。上面からの形状は，円形につくられた口縁部の４か所を直線的に切り取り，隅丸方形に仕上げる。図上復元のため詳細は不明であるが，折れ縁の口縁部には数か所鉄絵が描かれるものと思われる。

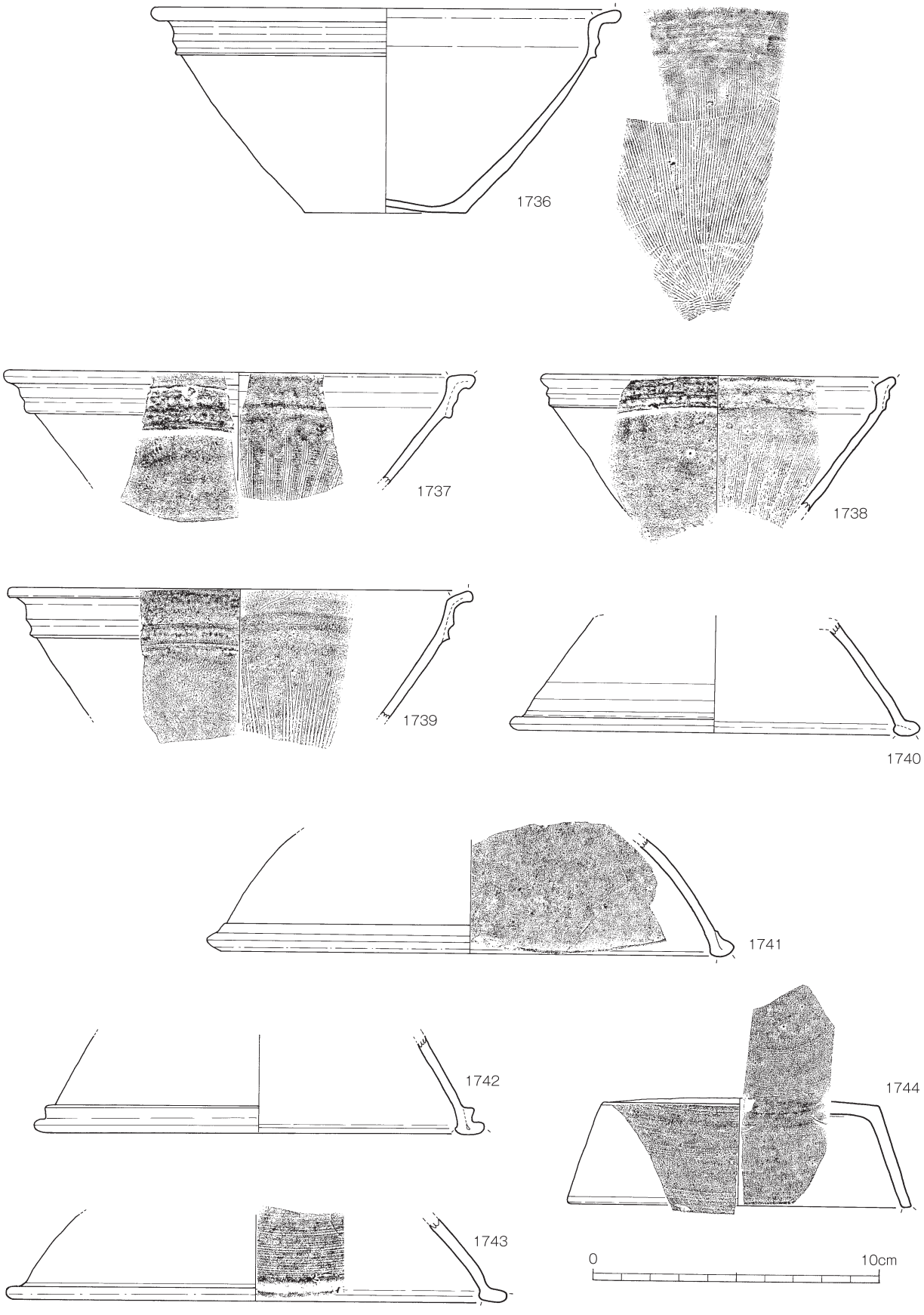
1728・1729は上面からの形状が円形をした無釉の蓋である。水注等の蓋として使用されたものと思われる。ロクロ上で工具を使用して粘土を平らにし，先端が鋭利な工具で円形に切り取るため，端部はシャープなつくりとなっている。1728は上面に，工具で粘土を平らにした際のタタキ



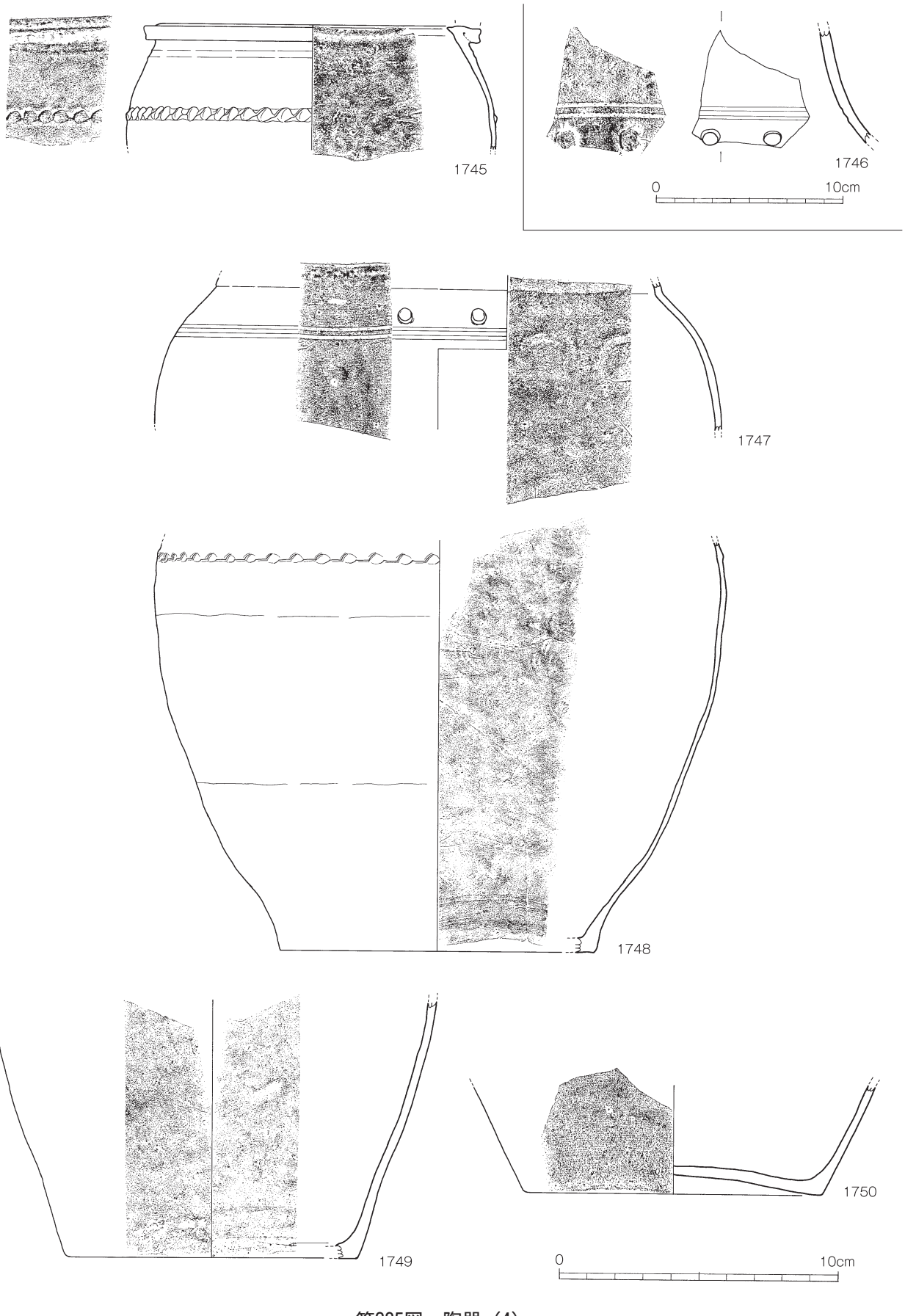
第282図　陶器（1）



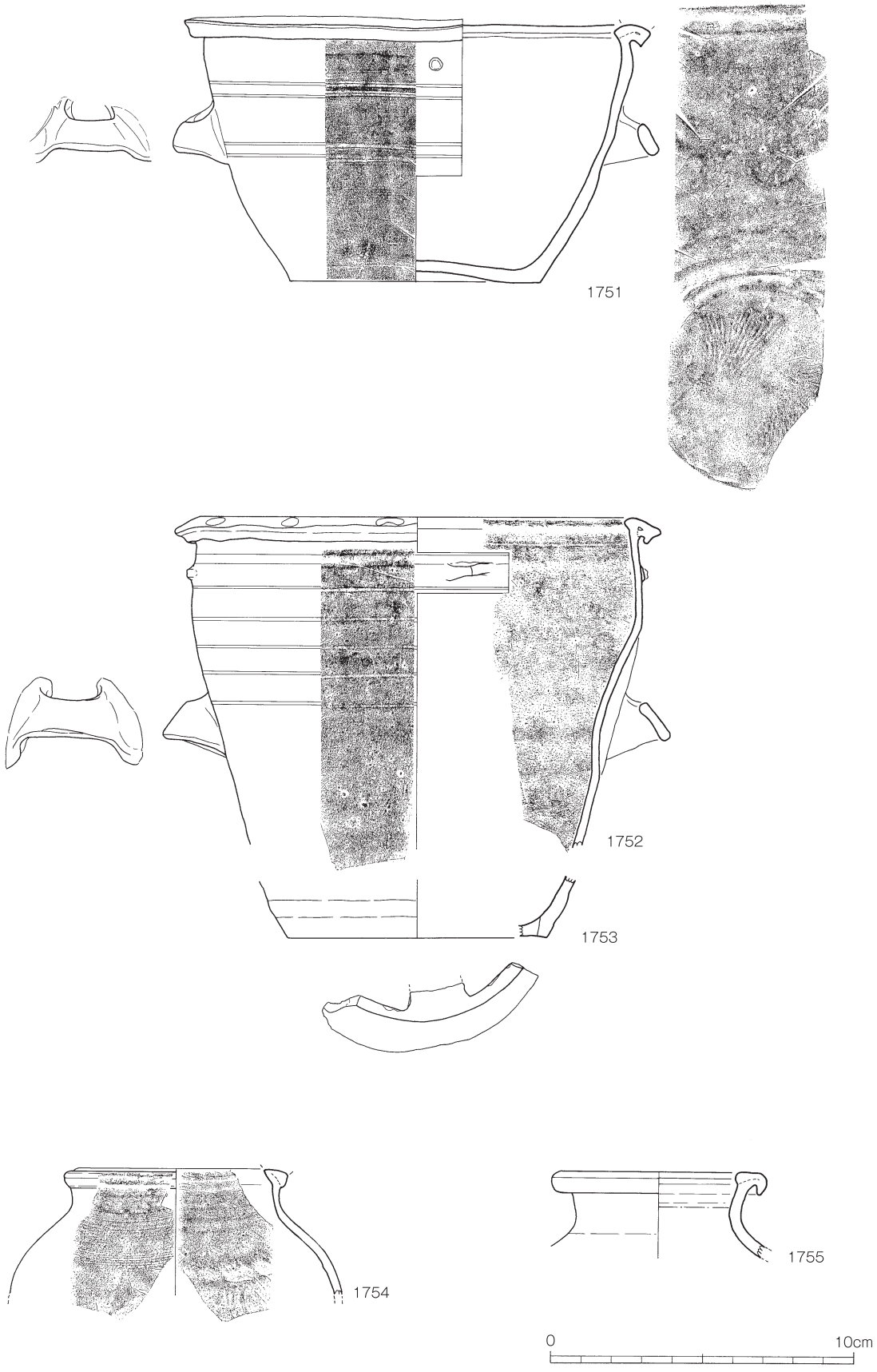
第283図　陶器（2）



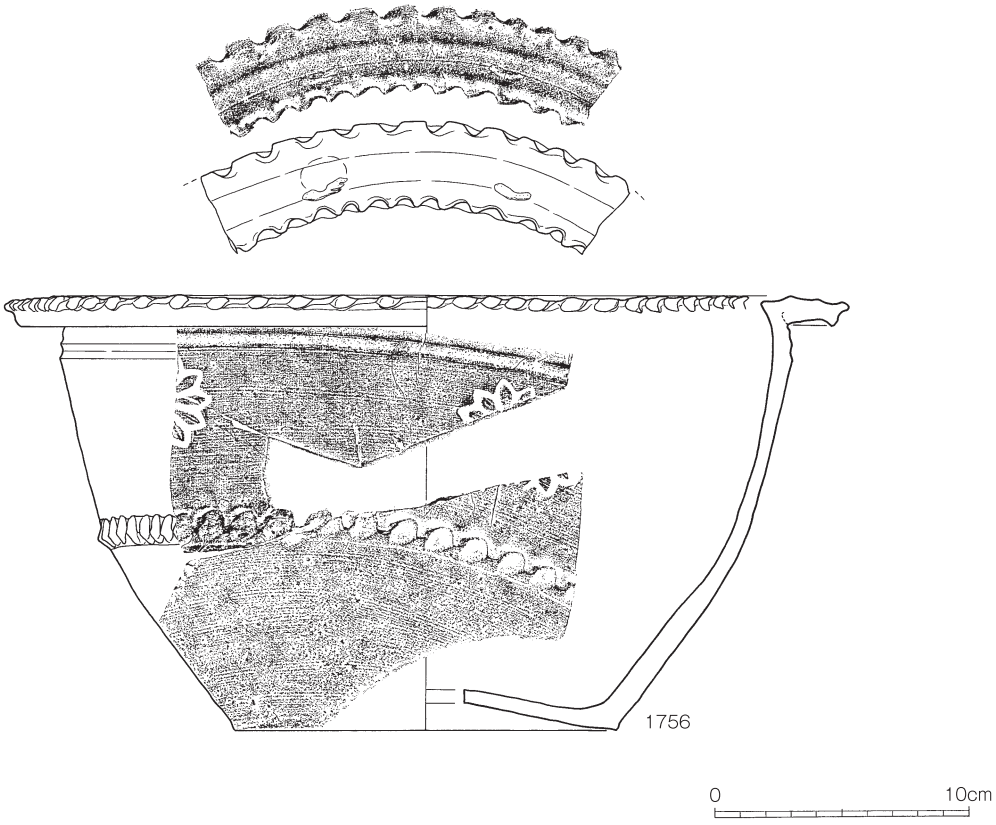
第284図　陶器（3）



第285図　陶器（4）



第286図　陶器（5）



第287図　陶器（6）

目が放射状に残り，中央には宝珠状のつまみが付く。また下面には粘土紐を輪状に貼り付ける。1729はつまみ部が欠損しているが，アーチ状のつまみが付くものと思われる。

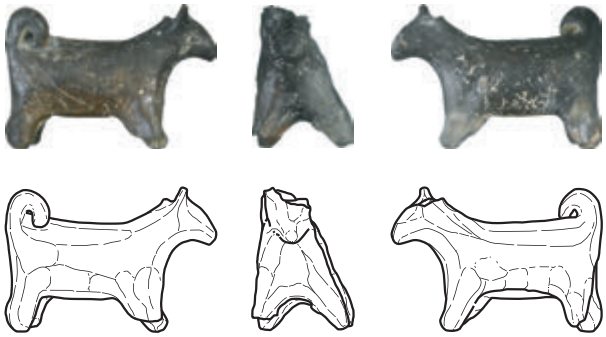
1730～1733は片口である。口縁部は内側に折り返して丸くつくられる。1731・1733は片口部が欠損しており，1730・1732の片口部は注ぎ口を口縁部下位に貼り付け，ヘラ等の工具でなでつけて胴部に密着させる。さらに内側から切り込みを入れ，上部は外側に折り返し，下部は注ぎ口になでつける。1730・1741は内面にタタキ成形時のあて具の痕跡が同心円状に残る。

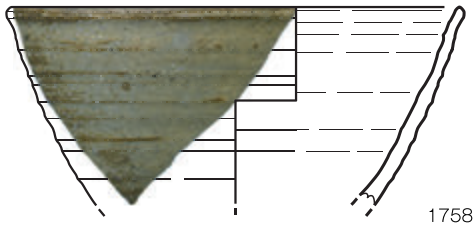
1734・1735は徳利である。1734は同一個体である頸部と胴部から底部の陶片を図上復元したものである。小形の徳利で，頸部は細長く鶴首状につくられる。1735は徳利の頸部である。器壁は厚く，釉も無釉である。

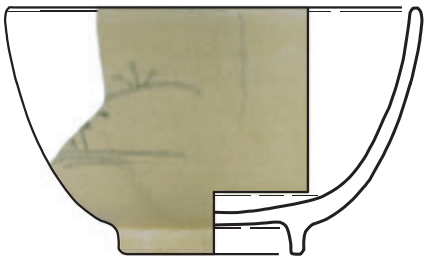
1736～1739は擂鉢である。体部は，底部から口縁部にかけて「逆ハ」の字形に開く形状を呈し，口縁部は外側に折り返して肥厚させ，２条の突帯をつくる。擂り目は細くシャープで，口縁部下位に紆余白を残す。1739を除き口唇部には貝目が残る。

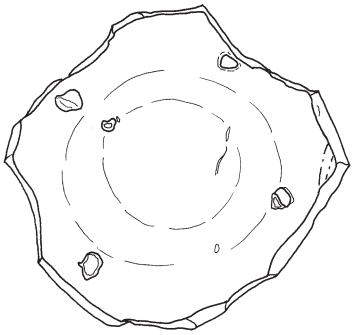
1740～1744は浅鉢形の形状を呈する蓋である。甕等の蓋として使用されたものと思われる。口唇部の釉は拭い取られており，1744を除き貝目が残る。1740・1743は，口縁部を内側に折り返してつくり，1741・1742は外側に折り返して肥厚させてつくる。1744は洗面器状の形状を呈する蓋である。口唇部は折り返さず，平坦におさめる。釉は口唇部を除き施釉される。

1745～1748は甕である。1745は肩部が膨らみ，縄状の突帯を有するものである。口縁部は外側に折り返し，さらに内側に折り返して，先端は胴部に接するようにしておさめる。口唇部は外側

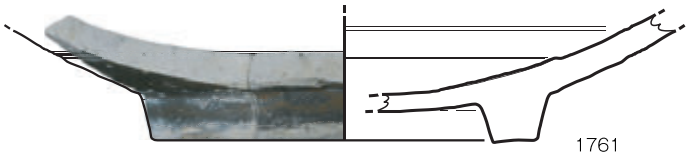


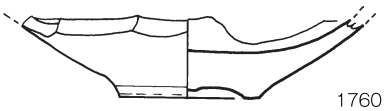




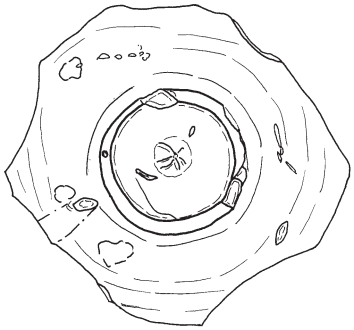




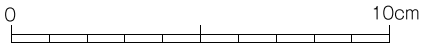












第288図　陶器（7）

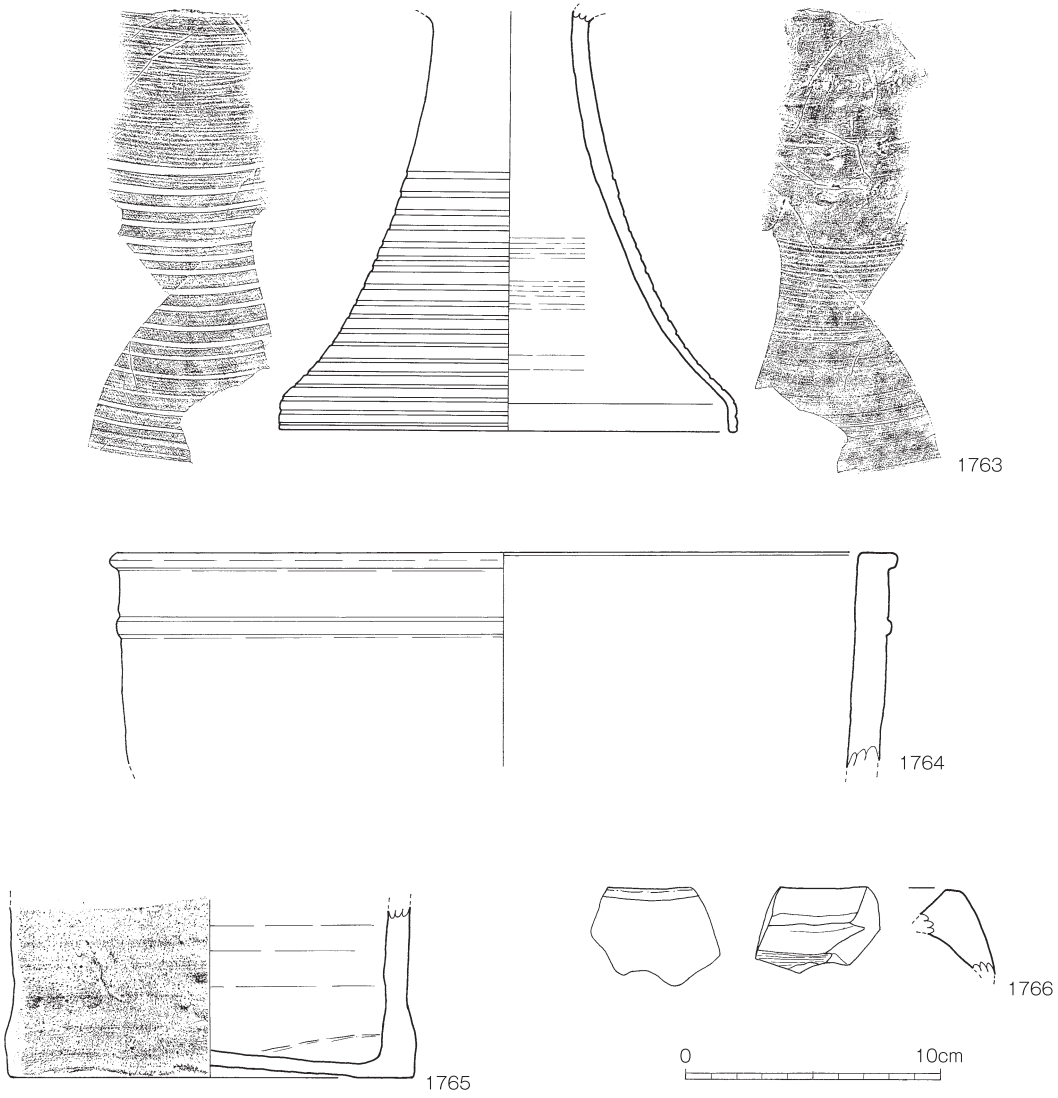
が溝縁状につくられる。1746・1747は肩部に，円形でボタン状の突起が２か所付くものである。金属器等の留め具等を模造したと思われる。1748は肩部に縄状の突帯が廻る。

1749・1750は甕または壷の底部である。外底面には貝目が残る。

1751は把手付甕である。鉢形の形状で，胴部中位に下側が広いアーチ状の把手が２か所付く。口縁部は外側に「コ」の字状に折り返しておさめる。また外面口縁部下位には丸いボタン状の突起が付き，胴部には４条の沈線が廻る。内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残り，内底面には放射状に残る。

1752・1753は甑である。接合はできなかったが同一個体になるものと思われたため，図上復元をおこなった。バケツ形の形状で，口縁部下位に山状の突起が付き，胴部には沈線が５条廻る。底部は数か所切り抜いて，穴をあけるものと思われる。内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。口唇部には貝目が残る。

1754・1755は壷である。どちらも口唇部には貝目が残る。1754は口縁部を外側に折り断面三角形につくる。外面肩部から頸部には，ヘラ状工具による横方向の筋状の調整が施される。1755は



第289図　陶器（8）

口縁部を外側に折り，さらに内側に折り返しておさめ，端部を下方に垂れる形状につくる。

1756は植木鉢である。釉はかけられず，焼き締めである。底部中央には直径３㎝の円形の穴が穿たれる。口唇部の両端には波状の装飾を施し，外面は胴部全体にヘラ状工具によるナデ調整を施した後，口縁部下位に花文をスタンプし，胴部中位に縄状の突帯を廻らす。また，内面は同心円状のタタキ成形の痕跡が残る箇所も見られるが，ナデ調整によりナデ消されている。

1757は動物形土製品である。犬を形取ったものと思われ，全面に褐色の鉄釉が欠けられる。

1758～1761は肥前系陶器である。1758は碗である。口縁部の先端がわずかに外反し，胴部にはロクロ成形による筋状の痕跡が残る。1759は黄白色の胎土に透明釉が畳付を除きかけられた碗である。外面には呉須で文様が描かれる。1760は皿である。腰部から高台内面は無釉で，高台内面の中央は兜巾となる。また，見込みと腰部には胎土目が観察される。1761は白土象嵌で文様を施した三島手の大皿もしくは盤である。畳付と高台内面は無釉である。見込みには砂目が観察される。

1762～1766は産地不明の陶器である。1762は備前焼の小形擂鉢である。小鳥の餌擂鉢と思われる。

1763は高坏の脚部と思われるものである。緻密な胎土で，外面には17条の沈線が廻る。内面にはヘラ状工具による丁寧な調整痕が見られる。産地は不明である。1764は瓦質の火鉢である。1765はサヤ鉢であるが，内面に煤が付着していることから，他の用途に転用していたものと思われる。1766は甕もしくは壷と思われるものである。口縁部は内弯し，蓋受け部を有する。釉は黒色の鉄釉が，蓋受け部を除きかかる。産地不明である。

第Ⅹ章　科学分析

＜放射性炭素年代測定結果　その１＞

放射性炭素年代測定結果報告書
（AMS測定）
向椏城跡

㈱加速器分析研究所

（１）遺跡の位置

向椏城跡は，鹿児島県日置市東市来町伊作田に所在する。

（２）測定の意義

土器が使用された年代と炭化材の年代を明らかにする。

（３）測定対象試料

測定対象試料は，Ⅳ層から出土した土器付着炭化物No.1（1：IAAA-62917）とNo.2（2：IAAA-62918），炭化材No.9（3：IAAA-62919），合計３点である。

（４）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅１gと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

（5）測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

（6）算出方法

1）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

2）BP年代値は，過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3）付記した誤差は，次のように算出した。
複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）δ^{13}Cの値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。
δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで，　$^{14}A_S$：**試料炭素の^{14}C濃度**：$(^{14}C/^{12}C)_S$**または**$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：**標準現代炭素の^{14}C濃度**：$(^{14}C/^{12}C)_R$**または**$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}C は，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/{}^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に^{13}C/^{12}C を測定し，標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，Δ^{14}Cは，試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の^{14}C濃度を，δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2 \quad (^{14}A_S\text{として}{}^{14}C/{}^{12}C\text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000)) \quad (^{14}A_S\text{として}{}^{14}C/{}^{13}C\text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭

酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC（percent Modern　Carbon）がよく使われており，Δ^{14}Cとの関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000 \quad (‰)$$

$$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより，このΔ^{14}CあるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}C/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (pMC/100)$$

5）^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey，van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

（7）測定結果

Ⅳ層から出土した土器付着炭化物No.1とNo.2の^{14}C年代は，それぞれ9480±50yrBP（1：IAAA-62917），4490±40yrBP（2：IAAA-62918），炭化材No.9の^{14}C年代は450±30yrBP（3：IAAA-62919）である。暦年較正年代（1σ）は，土器付着炭化物No.1が9120～9080BC（7.4%）・9050～9020BC（5.3%）・8840～8700BC（52.6%）・8670～8650BC（3.0%）であり，縄文時代早期初頭に相当する。土器付着炭化物No.2は3340～3210BC（42.8%）・3190～3150BC（12.6%）・3140～3090BC（12.9%）であり，縄文時代中期前葉に相当する。炭化材No.9は1425～1465AD（68.2%）であり，室町時代前半に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H. A. (1977) Discussion:Reporting of 14C data. *Radiocarbon*, 19 : 355-363

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37 (2) 425-430

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43 (2A) 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates , *Radiocarbon*, 43 (2A) 381-389

Reimer, P. J. et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-62917	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町伊作田向椈城跡 試　料　形　態：炭化物 試料名（番号）：1	Libby Age (yrBP)　：9,480±50 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-25.74±0.81 Δ^{14}C（‰）＝-692.9±1.9 pMC（%）＝30.71±0.19
#1686-1	（参考）　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）＝-693.3±1.9 pMC（%）＝30.67±0.19 Age (yrBP)　：9,500±50
IAAA-62918	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町伊作田向椈城跡 試　料　形　態：炭化物 試料名（番号）：2	Libby Age (yrBP)　：4,490±40 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-28.97±0.69 Δ^{14}C（‰）＝-427.9±2.9 pMC（%）＝57.21±0.29
#1686-2	（参考）　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）＝-432.6±2.7 pMC（%）＝56.74±0.27 Age (yrBP)　：4,550±40
IAAA-62919	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町伊作田向椈城跡 試　料　形　態：木炭 試料名（番号）：3	Libby Age (yrBP)　：450±30 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-26.73±0.69 Δ^{14}C（‰）＝-54.0±3.9 pMC（%）＝94.60±0.39
#1686-3	（参考）　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）＝-57.3±3.6 pMC（%）＝94.27±0.36 Age (yrBP)　：470±30

参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age（yrBP）
IAAA-62917	1	9483 ± 50
IAAA-62918	2	4486 ± 40
IAAA-62919	3	445 ± 33

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

＜放射性炭素年代測定結果　その２＞

放射性炭素年代測定結果報告書
（AMS測定）
向栫城跡

㈱加速器分析研究所

（１）遺跡の位置

向栫城跡は，鹿児島県日置市東市来町字伊作田（北緯31°39′，東経130°20′）に所在する。

（２）測定の目的

遺構と土器の年代を明らかにする。

（３）測定対象試料

I-18区の竪穴遺構の床に近い埋土から出土した木炭（10：IAAA-70711），I-25区のⅢ層から出土した土器に付着した炭化物（11：IAAA-70712），合計２点である。

（４）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅１gと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で2時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

（５）測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュ

ウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により$^{13}C/^{12}C$の測定も同時に行う。

（6）算出方法

1）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

2）BP年代値は，過去において大気中の^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る^{14}C年代である。

3）付記した誤差は，次のように算出した。
複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）$\delta^{13}C$の値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定される$\delta^{13}C$の値を用いることもある。
$\delta^{13}C$補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで，　$^{14}A_S$：**試料炭素の^{14}C濃度**：$(^{14}C/^{12}C)_S$**または**$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：**標準現代炭素の^{14}C濃度**：$(^{14}C/^{12}C)_R$**または**$(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$ は，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/{}^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し，標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，$\Delta^{14}C$は，試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の^{14}C濃度を，$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))^2 \quad (^{14}A_S\text{として}{}^{14}C/{}^{12}C\text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000)) \quad (^{14}A_S\text{として}{}^{14}C/{}^{13}C\text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \text{（‰）}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のも

のと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC （percent Modern Carbon）がよく使われており，Δ^{14}Cとの関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000 \text{（‰）}$$

$$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100 \text{（%）}$$

国際的な取り決めにより，このΔ^{14}CあるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(pMC/100)$$

５）^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

６）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey，van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

（７）測定結果

I-18区の竪穴遺構から出土した木炭（10：IAAA-70711）の^{14}C年代が640±30yrBP，I-25区のⅢ層から出土した土器に付着した炭化物（11：IAAA-70712）の^{14}C年代が4570±40yrBPである。暦年較正年代（1σ＝68.2%）は，10が1290～1315AD（27.9%）・1350～1390AD（40.3%）であり鎌倉時代後半，11が3490～3470BC（3.5%）・3370～3330BC（33.3%）・3220～3180BC（16.5%）・3160～3120BC（14.9%）であり縄文時代中期初頭に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H. A. 1977 Discussion : Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-70711	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町字伊作田向椿城跡 試　料　形　態：木炭 試料名（番号）：10	Libby Age (yrBP)　：　640 ± 30 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-27.78 ± 0.95 Δ^{14}C（‰）　＝ -76.8 ± 3.7 pMC（%）　＝ 92.32 ± 0.37
#1827-1	（参考）　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）　＝ -82.0 ± 3.2 pMC（%）　＝ 91.80 ± 0.32 Age (yrBP)　：　690 ± 30
IAAA-70712	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町字伊作田向椿城跡 試　料　形　態：炭化物 試料名（番号）：11	Libby Age (yrBP)　：　4,570 ± 40 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-24.24 ± 0.97 Δ^{14}C（‰）　＝-433.8 ± 2.6 pMC（%）　＝ 56.62 ± 0.26
#1827-2	（参考）　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）　＝-433.0 ± 2.3 pMC（%）　＝ 56.70 ± 0.23 Age (yrBP)　：　4,560 ± 30

参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age（yrBP）
IAAA-70711	10	641　±　32
IAAA-70712	11	4569　±　36

ここに記載するLibby　Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

＜放射性炭素年代測定結果　その３＞

放射性炭素年代測定結果報告書
（AMS測定）
向椏城跡

㈱加速器分析研究所

（１）遺跡の位置

向椏城跡は，鹿児島県日置市東市来町伊作田に所在する。

（２）測定の意義

土器が使用された年代と炭化材の年代を明らかにする。

（３）測定対象試料

測定対象試料は，Ⅶ層から出土した土器付着炭化物（1：IAAA-62920），H-18区から出土した土器No.48付近の炭化物（2：IAAA-62921），６号炉出土の炭化物（３：IAAA-62922），７号炉出土の炭化物（４：IAAA-62923），７号炉床面出土の炭化物（５：IAAA-62924），８号炉出土の炭化物（６：IAAA-62925），11号炉出土の炭化物（７：IAAA-62926），合計７点である。

（４）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅１gと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

（５）測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

（6）算出方法

1）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

2）BP年代値は，過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3）付記した誤差は，次のように算出した。
複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）$\delta^{13}C$の値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定される$\delta^{13}C$の値を用いることもある。
$\delta^{13}C$補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで，　$^{14}A_S$：**試料炭素の^{14}C濃度**：$(^{14}C/^{12}C)_S$**または**　$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：**標準現代炭素の^{14}C濃度**：$(^{14}C/^{12}C)_R$**または**　$(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$ は，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/{}^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し，標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，$\Delta^{14}C$は，試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（１）式の^{14}C濃度を，$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))^2$$ （$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）

または

$$= {}^{14}AS \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))$$ （$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \text{（‰）}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC（percent Modern　Carbon）

がよく使われており，$\Delta^{14}C$との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000 \ (‰)$$

$$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100 \ (\%)$$

国際的な取り決めにより，この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}C/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (pMC/100)$$

５）^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

６）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey，van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

（７）測定結果

測定された^{14}C年代は，Ⅶ層から出土した土器付着炭化物（１：IAAA-62920）が1950±30yrBP，H-18区から出土した土器No.48付近の炭化物（２：IAAA-62921）が650±30yrBP，６号炉出土炭化物（３：IAAA-62922）が400±30yrBP，７号炉出土炭化物（4：IAAA-62923）が430±30yrBP，７号炉床面出土の炭化物（５：IAAA-62924）が330±30yrBP，８号炉出土の炭化物（６：IAAA-62925）が580±30yrBP，11号炉出土の炭化物（７：IAAA-62926）が380±30yrBPである。

暦年較正年代（1σ）は，1が5AD～85AD（68.2%）であり弥生時代後期，２が1285AD～1310AD（30.1%）・1355AD～1390AD（38.1%）であり鎌倉時代後半，３が1440AD～1500AD（60.6%）・1600AD～1620AD（7.6%）であり室町時代後半から江戸時代初頭，４が1430AD～1470AD（68.2%）であり室町時代中頃，５が1510AD～1600AD（55.8%）・1610AD～1640AD（12.4%）であり室町時代後半から江戸時代初頭，６が1315AD～1355AD（45.9%）・1385AD～1410AD（22.3%）であり鎌倉時代後半から室町時代初頭・７が1440AD～1520AD（55.3%）・1600AD～1620AD（12.9%）であり室町時代後半から江戸時代初頭に相当する。

化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H. A. (1977) Discussion : Reporting of 14C data. *Radiocarbon*,19 : 355-363

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37 (2) 425-430

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43 (2A) 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 43 (2A) 381-389

Reimer, P. J. et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-62920	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町伊作田向椙城跡 試　料　形　態：炭化物 試料名（番号）：1	Libby Age (yrBP)　：1,950±30 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-30.42±0.57 Δ^{14}C（‰）＝-215.4±3.2 pMC（%）＝78.46±0.32
#1686-1	（参考）　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）＝-224.1±3.0 pMC（%）＝77.59±0.30 Age (yrBP)　：2,040±30
IAAA-62921	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町伊作田向椙城跡 試　料　形　態：炭化物 試料名（番号）：2	Libby Age (yrBP)　：650±30 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-26.32±0.64 Δ^{14}C（‰）＝-77.9±3.6 pMC（%）＝92.21±0.36
#1687-2	（参考）　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）＝-80.4±3.4 pMC（%）＝91.96±0.34 Age (yrBP)　：670±30
IAAA-62922	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町伊作田向椙城跡 試　料　形　態：木炭 試料名（番号）：3	Libby Age (yrBP)　：400±30 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-26.39±0.68 Δ^{14}C（‰）＝-48.9±3.7 pMC（%）＝95.11±0.37
#1687-3	（参考）　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）＝-51.6±3.5 pMC（%）＝94.84±0.35 Age (yrBP)　：430±30
IAAA-62923	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町伊作田向椙城跡 試　料　形　態：炭化物 試料名（番号）：4	Libby Age (yrBP)　：430±30 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-25.78±0.60 Δ^{14}C（‰）＝-52.4±3.6 pMC（%）＝94.76±0.36
#1687-4	（参考）　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）＝-53.9±3.3 pMC（%）＝94.61±0.33 Age (yrBP)　：450±30
IAAA-62924	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町伊作田向椙城跡 試　料　形　態：木炭 試料名（番号）：5	Libby Age (yrBP)　：330±30 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-24.30±0.58 Δ^{14}C（‰）＝-39.7±3.6 pMC（%）＝96.03±0.36
#1687-5	（参考）　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）＝-38.3±3.4 pMC（%）＝96.17±0.34 Age (yrBP)　：310±30

IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-62925	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町伊作田向椿城跡 試　料　形　態：炭化物 試料名（番号）：6	Libby Age (yrBP)　：　580±　30 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-29.06±　0.71 Δ^{14}C（‰）　＝ -69.7±　3.7 pMC（%）　＝ 93.03±　0.37
#1687-6	（参考）　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）　＝ -77.4±　3.4 pMC（%）　＝ 92.26±　0.34 Age (yrBP)　：　650±　30
IAAA-62926	試料採取場所：鹿児島県日置市東市来町伊作田向椿城跡 試　料　形　態：木炭 試料名（番号）：7	Libby Age (yrBP)　：　380±　30 δ^{13}C（‰）、（加速器）＝-26.19±　0.77 Δ^{14}C（‰）　＝ -46.7±　3.7 pMC（%）　＝ 95.33±　0.37
#1687-7	（参考）　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C（‰）　＝ -49.0±　3.4 pMC（%）　＝ 95.10±　0.34 Age (yrBP)　：　400±　30

参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age（yrBP）
IAAA-62920	1	1948　±　32
IAAA-62921	2	651　±　31
IAAA-62922	3	402　±　31
IAAA-62923	4	432　±　30
IAAA-62924	5	325　±　29
IAAA-62925	6	580　±　31
IAAA-62926	7	384　±　31

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

＜樹種同定調査結果＞

樹種同定調査結果報告書
向栫城跡

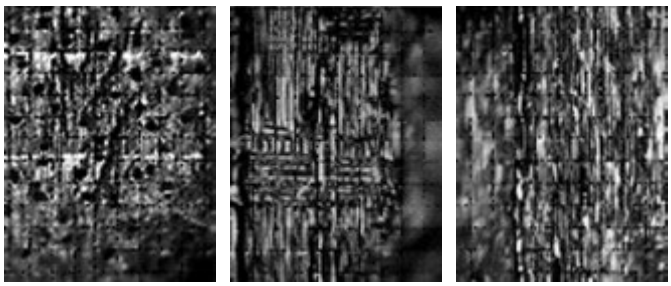
㈱加速器分析研究所

出土した炭化材の試料はステンレス剃刀で横断面,放射断面,接線断面の3方向の断面を割取り,プレパラートに固定して反射照明型顕微鏡で観察，同定をおこなった。以下に同定された分類群を示し，木材解剖学的記載を行う。

No.10（I-18区遺構内） クスノキ科

クスノキ科（Lauraceae）：年輪内にほぼ単独の中程度の道管が均一に散在する散孔材で，晩材部で柔組織が緻密になるので年輪界は明瞭である。道管の穿孔板は単一と階段状の2種類あり,放射組織は異性で2細胞幅で6,7細胞高程度，道管内にはらせん肥厚がある。本試料では，高木になるクスノキ科に見られるような油細胞が確認できないため，ダンコウバイやシロモジなどの中低木の可能性が高い。

※）本測定は，当社協力会社・古代の森研究舎にて実施した。



1C　　1R　　1T

向栫城跡出土炭化材の顕微鏡写真
1 ：クスノキ科（№10　Ⅰ-18区遺構内）
C：横断面，R：放射断面，接線断面

＜自然化学分析（放射性炭素年代測定・地磁気年代推定）＞

鹿児島県，向栫城跡における自然化学分析

株式会社　古環境研究所
島根大学総合　理工学部
時江　克安

Ⅰ．向栫城跡における放射性炭素年代測定

1．試料と方法

試料名	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	炉跡７	炭化物	酸-アルカリー酸，酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.2	炉跡10	炭化物	酸-アルカリー酸，酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.3	炉跡11	炭化物	酸-アルカリー酸，酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.4	炉跡13	炭化物	酸-アルカリー酸，酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定No.(Beta－)
No.1	360±40	－26.0	340±40	交点：AD1520，1570，1630 １σ：AD1485～1640 ２σ：AD1455～1655	126802
No.2	380±40	－26.1	360±40	交点：AD1505，1595，1620 １σ：AD1470～1535，1545～1635 ２σ：AD1455～1650	126803
No.3	450±40	－26.3	430±40	交点：AD1450 １σ：AD1435～1475 ２σ：AD1425～1515,1585～1625	126804
No.4	390±30	－28.7	330±30	交点：AD1525，1560，1630 １σ：AD1505～1595,1620～1640 ２σ：AD1475～1650	126805

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から，単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期，5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦

年代値を意味する。

1σ（68%確率）・2σ（95%確率）は，補正^{14}C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の交点が表記される場合や，複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

Ⅱ．向柊城跡の炉跡（遺構と資料，測定結果）

株式会社古環境研究所

（1）遺構と試料

遺構はシラス台地の平坦面に穿たれた楕円形の浅い穴（長径～70㎝）であり，穴の壁は外側に膨らんだ袋状になっている。穴の縁の部分は全体に赤変し，一部が須恵色を呈する遺構もあるなど，被熱の履歴が歴然と示されている。しかし，縁以外の部分には被熱の形跡はない。また，穴の底には炭が敷かれていた。これらの炉跡は，焼き締まりが不十分なシラス土壌にあり，壁面が外側に膨らんでいるために，オーバーハングした縁の部分は最終焼成後に変形した可能性が大きいと考えられた。試料採取の対象として，構造の比較的しっかりとした７号炉と９号炉を選び，縁に沿って被熱で変色した部分から，７号炉では20個，９号炉では17個の定方位試料を採取した。

（2）測定結果

図４（a），(b）は向柊城跡の７号炉と９号炉の自然残留磁気の方向を示す。どちらの炉についても，残留磁気の方向は大きく分散している。図5,6は７号炉と９号炉の自然残留磁気の強度分布を示す。７号炉の小数の試料は10^{-3}emu/g の強値を示すが，両炉のほとんどの試料は10^{-5} emu/gという弱値を示し，焼土の低焼成度が反映されている。このように，両炉の残留磁気について，強度が弱く，方向が分散しているために，意味のある地磁気年代を求めることはできない。残留磁気の方向分散の主因は最終焼成時以後に生じた遺構の変形と考えられる。

第５表　旧石器時代石器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	取上番号	器種	石材	区	層	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考
第12図	1	11262	ナイフ形石器	頁岩	G-9	Ⅶ	2.9	1.1	0.6	1.9	
	2	386	ナイフ形石器	頁岩	G-8	Ⅶ	1.0	2.4	0.3	1.0	
	3	128	ナイフ形石器	頁岩	G-8	Ⅶ	3.5	1.6	0.5	2.5	
	4	2771	ナイフ形石器	頁岩	G-8	Ⅶb	6.2	3.2	1.0	18.4	
	5	7385	ナイフ形石器	頁岩	G-8	Ⅶb	7.2	4.1	1.4	40.0	
	6	6560	ナイフ形石器	砂岩	G-11	Ⅶ	3.7	2.8	0.6	4.2	
	7	4542	ナイフ形石器	黒曜石上牛鼻	F-11	Ⅶ	1.0	0.9	0.4	0.5	
	8	7022	台形石器	黒曜石桑ノ木津留	F-11	Ⅶ	1.3	1.5	0.5	1.3	
	9	1735	台形石器	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	1.0	1.3	0.4	0.6	
	10	3352	台形石器	黒曜石上牛鼻	G-8	Ⅶ	1.3	1.2	0.3	0.5	
	11	5506	台形石器	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.0	0.9	0.1	0.2	
	12	2948	台形石器	玉髄	G-9	Ⅶ	2.1	2.4	0.6	4.1	
	13	9923	台形石器	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	2.0	1.5	1.7	1.8	
	14	1844	台形石器	黒曜石三船	G-9	Ⅶ	1.7	2.0	0.7	2.1	
第13図	15	7388	剥片尖頭器	頁岩	G-8	Ⅶb	11.7	3.6	1.4	55.8	
	16	7389	剥片尖頭器	頁岩	G-8	Ⅶb	2.2	1.8	0.8	4.3	未製品
	17	10041	剥片尖頭器	頁岩	G-10	Ⅶb	7.2	3.3	1.0	23.8	
	18	7386	剥片尖頭器	粘板岩	G-8	Ⅶb	8.1	2.6	0.8	17.0	
	19	6376	尖頭器	瑪瑙	G-10	Ⅶ	3.8	1.7	0.8	5.0	
	20	3375	尖頭器	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	1.0	0.8	0.4	0.2	先端部
	21	4478	三稜尖頭器	黒曜石上牛鼻	F-10	Ⅶ	2.1	1.5	1.1	3.0	
第14図	22	771	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	3.8	2.7	1.2	13.6	
	23	1258	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	3.5	3.0	1.3	15.3	
	24	2171	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	4.0	3.0	0.9	8.5	
	25	2557	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	G-8	Ⅶ	3.1	2.2	0.8	5.8	
	26	4737	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	G-8	Ⅶ下	3.2	1.0	0.6	0.9	
	27	8179	スクレイパー	黒曜石腰岳	F-11	Ⅶ	1.5	1.6	0.5	0.9	
	28	4865	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	2.4	2.1	0.5	2.8	
	29	2331	スクレイパー	黒曜石三船	G-9	Ⅶ下	1.8	1.7	0.6	2.2	
	30	580	スクレイパー	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	4.6	4.0	1.5	26.4	
	31	232	スクレイパー	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	3.1	3.0	0.3	13.9	
	32	1356	スクレイパー	黒曜石三船	G-10	Ⅶ	3.6	3.8	1.6	21.1	
	33	2777	スクレイパー	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	3.0	3.5	0.9	9.8	
第15図	34	3822	スクレイパー	黒曜石三船	G-9	Ⅶ	4.0	2.9	1.1	11.2	
	35	4907	スクレイパー	黒曜石三船	H-10	Ⅶ	4.1	2.5	0.6	6.7	
	36	5191	スクレイパー	黒曜石三船	G-10	Ⅶ	2.4	2.2	0.7	3.3	
	37	5295	スクレイパー	黒曜石三船	G-10	Ⅶ	2.3	1.8	0.7	2.7	
	38	5517	スクレイパー	黒曜石三船	G-10	Ⅶ	3.7	2.4	1.1	13.2	
	39	6515	スクレイパー	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	2.0	2.8	0.7	3.8	
	40	6748	スクレイパー	黒曜石三船	G-10	Ⅶ	2.8	2.0	1.3	8.3	
	41	7714	スクレイパー	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	2.5	2.2	1.0	4.5	
	42	8704	スクレイパー	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	2.9	1.8	0.7	4.0	
	43	8709	スクレイパー	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	3.4	2.0	1.2	7.5	
	44	9729	スクレイパー	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	1.9	2.8	1.0	3.5	
	45	10046	スクレイパー	黒曜石三船	H-10	Ⅶ	2.5	2.4	1.1	8.6	
	46	10379	スクレイパー	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	1.6	1.1	0.8	1.4	
	47	10527	スクレイパー	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	2.2	1.5	0.5	1.7	
	48	5031	スクレイパー	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.8	1.4	0.5	0.8	
	49	7082	スクレイパー	チャート	F-11	Ⅶ	2.6	2.3	0.8	5.9	
第16図	50	1759	スクレイパー	瑪瑙	G-9	Ⅶ	4.8	5.5	2.0	4.8	
	51	6393	スクレイパー	鉄石英	G-10	Ⅶ	4.6	3.0	0.8	12.8	
	52	9274	スクレイパー	硬質頁岩	F-11	Ⅶ	3.3	1.8	1.2	6.5	
	53	3937	スクレイパー	頁岩	G-10	Ⅶ	5.2	3.5	0.7	14.9	
	54	2876	スクレイパー	頁岩	G-8	Ⅶ	4.7	4.3	1.1	26.8	
	55	195	スクレイパー	灰色安山岩	G-8	Ⅶ	5.9	4.0	1.4	29.8	
	56	185	スクレイパー	安山岩	G-8	Ⅶ	2.1	1.9	0.9	3.2	

第６表　旧石器時代石器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	取上番号	器種	石材	区	層	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考
第16図	57	343	スクレイパー	安山岩	G-8	Ⅶ	5.3	4.5	1.8	16.4	
	58	3213	スクレイパー	安山岩	G-8	Ⅶ下	3.2	4.9	0.5	8.5	
第17図	59	7513	スクレイパー	安山岩	F-11	Ⅶ	3.2	3.2	0.5	7.0	
	60	7796	スクレイパー	安山岩	F-11	Ⅶ	2.9	3.8	1.2	12.4	
	61	8200	スクレイパー	安山岩	F-11	Ⅶ	4.7	3.1	1.5	21.2	
	62	8773	スクレイパー	安山岩	F-11	Ⅶ	4.0	2.2	1.4	9.8	
	63	211	スクレイパー	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.5	0.9	0.6	0.8	
	64	207	二次加工剥片	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	2.5	2.8	0.6	5.0	
	65	668	二次加工剥片	黒曜石桑ノ木津留	G-8	Ⅶ	2.1	0.8	0.8	0.8	
	66	1156	二次加工剥片	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	1.7	3.0	1.4	7.2	
	67	2815	二次加工剥片	黒曜石上牛鼻	G-8	Ⅶ	1.5	1.3	0.5	1.0	
	68	2854	二次加工剥片	黒曜石上牛鼻	G-8	Ⅶ	1.9	1.2	0.7	1.0	
	69	409	二次加工剥片	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	1.7	1.3	0.4	0.7	
	70	2891	二次加工剥片	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	1.9	1.6	0.5	1.9	
	71	7297	二次加工剥片	黒曜石三船	G-10	Ⅶ	2.0	0.8	0.6	0.6	
	72	2344	二次加工剥片	凝灰岩Ａ	G-10	Ⅶ	3.1	2.1	1.0	3.8	
	73	3187	二次加工剥片	鉄石英	G-9	Ⅶ	1.9	1.2	0.9	1.4	
	74	99	二次加工剥片	安山岩	G-8	Ⅶ	2.3	2.9	0.9	5.7	
	75	2455	二次加工剥片	安山岩	G-8	Ⅶ	1.2	1.2	0.3	0.5	
第18図	76	3317	二次加工剥片	安山岩	G-8	Ⅶ	6.0	1.5	1.6	10.9	
	77	3329	二次加工剥片	安山岩	G-8	Ⅶ下	4.9	2.1	1.3	8.4	
	78	4028	二次加工剥片	安山岩	G-8	Ⅶ	1.9	1.6	0.4	1.1	
	79	8815	二次加工剥片	安山岩	F-11	Ⅶ	2.1	1.7	0.5	1.5	
	80	9781	二次加工剥片	安山岩	G-11	Ⅶ	2.3	1.2	0.7	1.2	
	81	11270	二次加工剥片	安山岩	G-8	Ⅶ	1.0	1.2	0.2	0.2	
第19図	82	242	楔形石器	黒曜石上牛鼻	G-8	Ⅶ	3.9	2.9	0.8	9.5	
	83	10177	楔形石器	黒曜石上牛鼻	F-11	Ⅶ	1.8	1.5	1.7	1.8	
	84	3163	楔形石器	黒曜石三船	G-9	Ⅶ	1.9	1.3	0.6	1.4	
	85	1192	楔形石器	安山岩	G-9	Ⅶ	2.0	2.4	1.7	2.6	
	86	2275	楔形石器	安山岩	G-10	Ⅶ	2.6	2.3	0.9	4.8	
	87	2516	楔形石器	安山岩	G-8	Ⅶ	4.6	3.0	1.8	12.8	
	88	2892	楔形石器	安山岩	G-8	Ⅶ	2.5	2.1	1.0	5.0	
	89	3364	楔形石器	安山岩	G-8	Ⅶ	1.9	3.8	0.8	5.4	
	90	4740	楔形石器	安山岩	G-8	Ⅶ	5.5	4.0	2.1	37.0	
	91	5844	楔形石器	安山岩	F-11	Ⅶ	2.3	1.3	0.6	2.2	
	92	5873	楔形石器	安山岩	F-11	Ⅶ	2.0	2.0	0.6	2.2	
第20図	93	6535	楔形石器	安山岩	G-8	Ⅶ	1.9	2.2	0.8	3.6	
	94	6537	楔形石器	安山岩	G-8	Ⅶ	2.9	2.8	1.6	8.7	
	95	7426	楔形石器	安山岩	F-11	Ⅶ	2.5	2.1	1.1	4.3	
	96	9005	楔形石器	安山岩	G-8	Ⅶ	2.5	1.8	0.7	3.0	
	97	9751	楔形石器	安山岩	F-11	Ⅶ	3.8	1.2	0.9	2.7	
	98	10195	楔形石器	安山岩	F-11	Ⅶ	2.1	0.9	1.7	1.1	
	99	11271	楔形石器	安山岩	G-8	Ⅶ	3.0	2.3	0.9	5.1	
第21図	100	2474	石錐	安山岩	G-8	Ⅶ	0.3	1.7	0.5	2.1	
	101	2971	石錐	安山岩	G-9	Ⅶ	1.7	0.8	0.3	0.4	
	102	10738	石錐	安山岩灰色	F-11	Ⅶ	4.2	3.0	1.0	9.7	
	103	7387	縦長剥片	砂岩	G-8	Ⅶb	6.2	3.3	1.6	34.3	
	104		縦長剥片	頁岩	－	－	8.9	4.7	1.5	61.4	
	105	2485	使用痕剥片	黒曜石上牛鼻	G-8	Ⅶ	3.2	2.1	0.7	4.4	
	106	165	使用痕剥片	黒曜石三船	G-8	Ⅶ下	1.2	1.2	0.9	1.3	
	107	237	使用痕剥片	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	4.5	2.8	1.5	14.0	
	108	498	使用痕剥片	黒曜石三船	G-8	Ⅶ下	2.5	2.5	0.6	3.5	
	109	2828	使用痕剥片	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	1.7	1.6	0.4	1.0	
	110	2877	使用痕剥片	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	1.9	1.6	0.6	1.9	
第23図	111	2144	細石刃（完形）	黒曜石腰岳	G-10	Ⅶ	1.2	0.9	0.1	0.2	
	112	201	細石刃（完形）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	3.2	0.7	0.3	0.7	

第７表　旧石器時代石器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	取上番号	器種	石材	区	層	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考
第23図	113	3079	細石刃（完形）	黒曜石針尾	G-9	Ⅶ	2.4	0.7	0.2	0.3	
	114	7931	細石刃（完形）	黒曜石上牛鼻	F-11	Ⅶ	1.0	0.6	0.1	0.1	
	115	5930	細石刃（完形）	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	1.1	0.4	0.1	0.1	
	116	8978	細石刃（完形）	安山岩	G-8	Ⅶ	1.1	0.6	0.1	0.1	
	117	4454	細石刃（完形）	安山岩	F-10	Ⅶ	2.3	0.8	0.2	0.4	
	118	8197	細石刃（完形）	安山岩	F-11	Ⅶ	0.9	0.6	0.1	0.1	
	119	8425	細石刃（完形）	安山岩	G-11	Ⅶ	1.6	0.5	0.2	0.2	
	120	1227	細石刃（頭）	黒曜石腰岳	G-9	Ⅶ	0.8	0.7	0.2	0.1	
	121	7626	細石刃（頭）	黒曜石腰岳	G-11	Ⅶ	0.6	0.4	0.1	0.1	
	122	9457	細石刃（頭）	黒曜石桑ノ木津留	F-11	Ⅶ	0.7	0.4	0.1	0.1	
	123	1836	細石刃（頭）	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	0.6	0.4	0.1	0.1	
	124	2994	細石刃（頭）	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	0.9	0.6	0.1	0.1	
	125	4219	細石刃（頭）	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	0.7	0.5	0.1	0.1	
	126	3171	細石刃（頭）	黒曜石三船	G-9	Ⅶ	0.7	0.6	0.1	0.1	
	127	6904	細石刃（頭）	凝灰岩Ａ	G-10	Ⅶ	0.6	0.5	0.1	0.1	
	128	11229	細石刃（頭）	凝灰岩Ａ	G-11	Ⅶ	1.1	0.8	0.2	0.1	
	129	3190	細石刃（頭）	凝灰岩Ａ	G-9	Ⅶ	0.8	0.7	0.2	0.1	
	130	3563	細石刃（頭）	凝灰岩Ａ	G-9	Ⅶ	0.7	0.5	0.2	0.1	
	131	3596	細石刃（頭）	凝灰岩Ａ	G-9	Ⅶ	0.7	0.5	0.1	0.1	
	132	8881	細石刃（頭）	頁岩	G-11	Ⅶ	0.7	0.5	0.1	0.1	
	133	8090	細石刃（頭）	安山岩	G-11	Ⅶ	0.8	0.8	0.1	0.1	
	134	9554	細石刃（頭）	安山岩	F-11	Ⅶ	0.5	0.6	0.1	0.1	
	135	2593	細石刃（頭・中）	黒曜石腰岳	G-9	Ⅶ	1.1	0.8	0.2	0.1	
	136	3540	細石刃（頭・中）	黒曜石腰岳	G-9	Ⅶ	1.1	0.5	0.2	0.1	
	137	8325	細石刃（頭・中）	黒曜石腰岳	F-11	Ⅶ	1.1	0.5	0.1	0.1	
	138	1459	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	F-10	Ⅶ	0.7	0.6	0.1	0.1	
	139	4812	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	F-10	Ⅶ	1.3	0.8	0.1	0.1	
	140	4811	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	F-9	Ⅶ	0.9	0.4	0.2	0.1	
	141	2041	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	G-10	Ⅶ	1.5	0.6	0.1	0.1	
	142	86	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	G-７	Ⅶ	1.7	0.6	0.2	0.2	
	143	187	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.7	0.5	0.1	0.2	
	144	203	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.4	0.6	0.1	0.2	
	145	573	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.8	0.8	0.1	0.3	
	146	612	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.6	0.6	0.1	0.2	
	147	1723	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.4	0.4	0.1	0.1	
	148	3223	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	G-9	Ⅶ	1.4	0.5	0.1	0.1	
	149	3789	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	G-9	Ⅶ	1.5	0.7	0.2	0.2	
	150	8764	細石刃（頭・中）	黒曜石針尾	F-11	Ⅶ	1.3	0.8	0.1	0.2	
	151	487	細石刃（頭・中）	黒曜石桑ノ木津留	G-8	Ⅶ下	1.0	0.7	0.1	0.1	
	152	244	細石刃（頭・中）	黒曜石上牛鼻	G-8	Ⅶ	1.3	0.7	0.2	0.2	
	153	334	細石刃（頭・中）	黒曜石上牛鼻	G-8	Ⅶ	1.4	0.3	0.1	0.1	
	154	3939	細石刃（頭・中）	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	1.3	0.4	0.1	0.1	
	155	4209	細石刃（頭・中）	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	0.7	0.4	0.1	0.1	
	156	4440	細石刃（中・尾）	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	1.2	0.6	0.2	0.1	
	157	6765	細石刃（頭・中）	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	1.2	0.4	0.1	0.1	
	158	8165	細石刃（頭・中）	黒曜石上牛鼻	F-11	Ⅶ	1.3	0.6	0.1	0.1	
	159	6077	細石刃（頭・中）	黒曜石上牛鼻	G-11	Ⅶ	1.2	0.6	0.1	0.1	
	160	9776	細石刃（頭・中）	黒曜石上牛鼻	G-11	Ⅶ	1.1	0.3	0.1	0.1	
	161	64	細石刃（頭・中）	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	0.8	0.6	0.1	0.1	
	162	124	細石刃（頭・中）	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	1.0	0.6	0.2	0.1	
	163	723	細石刃（頭・中）	黒曜石三船	G-9	Ⅶ下	1.4	0.7	0.3	0.3	
	164	7769	細石刃（頭・中）	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	1.4	0.4	0.1	0.1	
	165	8713	細石刃（頭・中）	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	1.1	0.5	0.1	0.1	
	166	10947	細石刃（頭・中）	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	1.3	0.7	0.2	0.2	
	167	10857	細石刃（頭・中）	黒曜石三船	G-11	Ⅶ	1.0	0.4	0.1	0.1	
	168	4766	細石刃（頭・中）	瑪瑙	H-9	Ⅶ	0.9	0.5	0.2	0.1	摩耗あり

第８表　旧石器時代石器観察表(4)

挿図番号	遺物番号	取上番号	器種	石材	区	層	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考
第23図	169	5129	細石刃（頭・中）	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.6	0.5	0.2	0.1	
	170	5157	細石刃（頭・中）	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	0.9	0.7	0.2	0.1	
	171	6044	細石刃（頭・中）	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.2	0.7	0.2	0.1	
第24図	172	7281	細石刃（頭・中）	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	0.7	0.4	0.1	0.1	
	173	5280	細石刃（頭・中）	凝灰岩A	G-11	Ⅶ	1.1	0.4	0.1	0.1	
	174	5627	細石刃（頭・中）	凝灰岩A	G-11	Ⅶ	1.9	0.5	0.2	0.1	
	175	9808	細石刃（頭・中）	凝灰岩A	G-11	Ⅶ	1.0	0.5	0.1	0.1	
	176	11114	細石刃（頭・中）	凝灰岩A	G-11	Ⅶ	0.9	0.5	0.1	0.1	
	177	11157	細石刃（頭・中）	凝灰岩A	G-11	Ⅶ	1.1	0.5	0.1	0.1	
	178	8784	細石刃（頭・中）	珪質頁岩	F-11	Ⅶ	1.0	0.5	0.1	0.1	
	179	2818	細石刃（頭・中）	安山岩	G-8	Ⅶ	0.8	0.4	0.1	0.1	
	180	5698	細石刃（頭・中）	安山岩	F-10	Ⅶ	2.2	0.8	0.3	0.7	
	181	721	細石刃（中）	黒曜石腰岳	G-9	Ⅶ下	0.9	0.7	0.1	0.1	
	182	799	細石刃（中）	黒曜石腰岳	G-9	Ⅶ	1.1	0.5	0.1	0.1	
	183	1231	細石刃（中）	黒曜石腰岳	G-9	Ⅶ	1.1	0.7	0.1	0.1	
	184	1632	細石刃（中）	黒曜石腰岳	F-10	Ⅶ	1.0	0.5	0.1	0.1	
	185	3532	細石刃（中）	黒曜石腰岳	G-9	Ⅶ	0.6	0.8	0.1	0.1	
	186	2063	細石刃（中）	黒曜石腰岳	G-10	Ⅶ	2.2	0.7	0.1	0.1	
	187	3790	細石刃（中）	黒曜石腰岳	G-9	Ⅶ	0.7	0.5	0.1	0.1	
	188	156	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ下	1.0	0.4	0.1	0.1	
	189	188	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	0.8	0.7	0.1	0.1	
	190	205	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.3	0.5	0.1	0.1	
	191	210	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	0.9	0.3	0.2	0.2	
	192	213	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	0.6	0.3	0.1	0.1	
	193	235	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	0.9	0.5	0.3	0.4	
	194	565	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.2	0.4	0.1	0.1	
	195	608	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	0.9	0.5	0.1	0.1	
	196	614	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	0.7	0.3	0.2	0.1	
	197	706	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ下	1.9	0.7	0.3	0.4	
	198	664	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	2.2	0.7	0.1	0.1	
	199	1038	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ下	0.9	0.3	0.2	0.3	
	200	1081	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.0	0.7	0.1	0.1	
	201	2589	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-9	Ⅶ	0.9	0.6	0.1	0.1	
	202	2862	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.1	0.4	0.1	0.1	
	203	3450	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.0	0.5	0.1	0.1	
	204	4010	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-9	Ⅶ下	0.9	0.5	0.1	0.1	
	205	9075	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.1	0.7	0.1	0.1	
	206	3445	細石刃（中）	黒曜石針尾	G-9	Ⅶ	0.5	0.7	0.2	0.1	
	207	1959	細石刃（中）	黒曜石桑ノ木津留	G-9	Ⅶ	1.0	0.5	0.1	0.1	
	208	5767	細石刃（中）	黒曜石桑ノ木津留	G-10	Ⅶ	0.7	0.5	0.2	0.1	
	209	4921	細石刃（中）	黒曜石上牛鼻	H-10	Ⅶ	0.9	0.7	0.1	0.1	
	210	1639	細石刃（中）	黒曜石上牛鼻	F-10	Ⅶ下	0.8	0.5	0.1	0.1	
	211	1832	細石刃（中）	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	1.2	0.6	0.1	0.1	
	212	6544	細石刃（中）	黒曜石上牛鼻	G-8	Ⅶ	1.0	0.6	0.1	0.1	
	213	11283	細石刃（中）	黒曜石上牛鼻	F-11	Ⅶ	0.8	0.5	0.1	0.1	
	214	719	細石刃（中）	黒曜石三船	G-9	Ⅶ	0.8	0.9	0.1	0.1	
	215	2652	細石刃（中）	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	0.6	0.3	0.1	0.2	
	216	943	細石刃（中）	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.0	0.6	0.1	0.1	
	217	3638	細石刃（中）	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	0.8	0.7	0.1	0.1	
	218	3878	細石刃（中）	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.0	0.5	0.1	0.1	
	219	6295	細石刃（中）	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.1	0.5	0.2	0.1	
	220	3537	細石刃（中）	凝灰岩A	G-9	Ⅶ	0.4	0.5	0.1	0.1	
	221	7279	細石刃（中）	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.0	0.5	0.2	0.1	
	222	7858	細石刃（中）	凝灰岩A	F-11	Ⅶ	0.8	0.5	0.1	0.1	
	223	8032	細石刃（中）	凝灰岩A	G-11	Ⅶ	1.0	0.7	0.1	0.1	
	224	8060	細石刃（中）	凝灰岩A	G-11	Ⅶ	1.3	0.8	0.3	0.1	

第９表　旧石器時代石器観察表(5)

挿図番号	遺物番号	取上番号	器種	石材	区	層	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考
第24図	225	10628	細石刃（中）	凝灰岩Ａ	F-10	Ⅶ	0.7	0.5	0.1	0.1	
	226	11077	細石刃（中）	凝灰岩Ａ	G-9	Ⅶ	1.4	0.6	0.1	0.1	接合
	227	10985	細石刃（中）	安山岩	G-10	Ⅶ	1.3	0.6	0.2	0.1	
	228	9784	細石刃（中）	安山岩	G-11	Ⅶ	0.9	0.6	0.1	0.1	
	229	3378	細石刃（中・尾）	黒曜石腰岳	G-8	Ⅶ下	1.2	0.4	0.1	0.1	
	230	632	細石刃（中・尾）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	0.9	0.5	0.1	0.1	
	231	1052	細石刃（中・尾）	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.0	0.6	0.1	0.1	
	232	281	細石刃（中・尾）	黒曜石桑ノ木津留	G-7	Ⅶ	0.8	0.5	0.1	0.1	
	233	6347	細石刃（中・尾）	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	1.2	0.4	0.1	0.1	
	234	363	細石刃（中・尾）	黒曜石上牛鼻	G-8	Ⅶ	0.9	0.4	0.1	0.1	
	235	3107	細石刃（中・尾）	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ下	1.3	0.7	0.1	0.1	
	236	4912	細石刃（中・尾）	黒曜石上牛鼻	H-10	Ⅶ	0.9	0.4	0.1	0.1	
	237	27	細石刃（中・尾）	黒曜石三船	G-7	Ⅶ	1.1	0.6	0.2	0.1	
	238	2367	細石刃（中・尾）	凝灰岩Ａ	G-10	Ⅵb	1.0	0.4	0.2	0.1	
	239	8891	細石刃（中・尾）	凝灰岩Ａ	G-11	Ⅶ	2.7	0.7	0.2	0.3	
	240	10464	細石刃（尾）	黒曜石腰岳	G-11	Ⅶ	0.6	0.7	0.1	0.1	
	241	3034	細石刃（尾）	黒曜石腰岳	G-9	Ⅶ	1.0	0.6	0.1	0.1	
	242	4003	細石刃（尾）	黒曜石針尾	G-9	Ⅶ	1.1	0.5	0.1	0.1	
	243	1689	細石刃（尾）	黒曜石上牛鼻	F-10	Ⅶ	0.9	0.5	0.1	0.1	
	244	3085	細石刃（尾）	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	1.2	0.7	0.1	0.1	
第25図	245	127	調整剥片	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.6	0.5	0.1	0.1	
	246	2675	調整剥片	黒曜石針尾	G-8	Ⅶ	1.3	0.7	0.2	0.1	
	247	236	調整剥片	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	1.8	1.3	0.3	0.1	
	248	2070	調整剥片	凝灰岩Ａ	G-10	Ⅶ	1.1	0.6	0.2	0.2	
	249	3889	調整剥片	凝灰岩Ａ	G-10	Ⅶ	2.6	1.1	0.4	1.3	
	250	3724	調整剥片	安山岩	G-8	Ⅶ	2.1	0.9	0.4	0.9	
	251	7928	調整剥片	安山岩	F-11	Ⅶ	1.7	0.6	0.2	0.4	
第26図	252	1256	細石刃核	黒曜石針尾	G-9	Ⅶ	2.5	1.3	1.3	3.6	
	253	740	細石刃核	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	1.5	1.1	1.4	4.0	
	254	754	細石刃核	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	1.6	1.1	1.5	3.9	
	255	1196	細石刃核	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	2.1	1.8	2.0	8.0	
	256	1930	細石刃核	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	1.3	1.6	2.0	4.6	
	257	2287	細石刃核	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	1.6	1.5	2.1	6.6	
	258	3550	細石刃核	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	1.6	1.5	2.2	6.4	
	259	3913	細石刃核	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	1.3	1.7	1.9	5.7	
	260	3989	細石刃核	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	2.8	1.8	1.1	5.7	
	261	4425	細石刃核	黒曜石上牛鼻	F-10	Ⅶ	2.1	2.6	2.1	8.5	
	262	4790	細石刃核	黒曜石上牛鼻	H-8	Ⅶ	1.3	1.5	2.0	5.4	
	263	5360	細石刃核	黒曜石上牛鼻	F-9	Ⅶ	1.7	1.7	1.4	5.0	
	264	5422	細石刃核	黒曜石上牛鼻	F-10	Ⅶ	2.0	2.7	1.7	6.3	
	265	7376	細石刃核	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	1.8	2.0	2.0	7.7	
	266	105	細石刃核	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	1.5	2.0	2.8	10.8	
	267	385	細石刃核	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	2.1	2.0	1.1	4.2	
	268	893	細石刃核	黒曜石三船	G-10	Ⅶ	2.7	1.2	1.8	5.0	
	269	1253	細石刃核	黒曜石三船	G-9	Ⅶ	2.3	1.2	1.9	6.2	
	270	1279	細石刃核	黒曜石三船	F-10	Ⅶ	3.6	1.5	1.8	7.6	
第27図	271	4439	細石刃核	黒曜石三船	F-10	Ⅶ	2.2	2.0	1.9	7.2	
	272	4768	細石刃核	黒曜石三船	H-9	Ⅶ	2.2	2.4	2.5	17.2	
	273	10486	細石刃核	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	3.5	2.5	2.0	15.4	
	274	106	細石刃核	黒曜石？	G-8	Ⅶ	1.8	2.8	1.0	4.0	
	275	258	細石刃核	凝灰岩Ａ	G-7	Ⅶ	1.5	1.1	1.6	1.3	
	276	283	細石刃核	凝灰岩Ａ	G-8	Ⅶ	1.7	1.5	1.5	1.2	
	277	433	細石刃核	凝灰岩Ａ	G-9	Ⅶ	2.0	1.9	1.2	3.1	
	278	1164	細石刃核	凝灰岩Ａ	G-10	Ⅶ	3.1	1.3	1.9	5.0	
	279	1443	細石刃核	凝灰岩Ａ	F-10	Ⅶ	1.5	1.1	1.8	1.6	
	280	1460	細石刃核	凝灰岩Ａ	G-10	Ⅶ	2.9	1.2	2.5	5.1	

第10表　旧石器時代石器観察表(6)

挿図番号	遺物番号	取上番号	器種	石材	区	層	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考
第27図	281	1495	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.9	1.6	0.9	1.4	
	282	1503	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.6	0.9	1.8	2.5	
	283	1624	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.9	2.1	1.6	1.7	
	284	2189	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.0	1.2	1.4	1.8	
	285	2278	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.8	2.2	1.1	2.6	
	286	2360	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅵb	2.1	1.3	1.6	2.2	
	287	2368	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅵb	2.5	1.5	1.6	2.2	
第28図	288	2521	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.7	1.8	1.1	2.2	
	289	2530	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.2	1.9	1.4	4.9	
	290	2540	細石刃核	凝灰岩A	G-9	Ⅶ	2.6	1.3	0.9	1.0	
	291	2649	細石刃核	凝灰岩A	G-8	Ⅶ	1.8	1.6	1.6	1.5	
	292	4110	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.2	1.2	1.6	2.7	
	293	4115	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.2	1.9	1.4	0.6	
	294	4131	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.8	1.2	1.7	4.3	
	295	4157	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.7	2.0	1.8	1.4	
	296	4320	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	3.5	2.0	1.0	3.3	
	297	5071	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.1	1.8	1.4	1.6	
	298	5076	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.8	2.1	0.8	2.3	
	299	5102	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.3	0.9	1.3	1.3	
	300	5134	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	3.0	1.8	2.3	6.6	
	301	5231	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.2	1.9	1.5	6.5	
	302	5548	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.6	1.0	1.1	1.2	
	303	5574	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	3.4	1.2	1.5	2.3	
	304	5578	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.8	1.9	0.6	3.2	
	305	5586	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.5	0.8	2.3	1.8	
	306	5591	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	3.2	1.8	1.1	2.8	
第29図	307	5753	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.6	1.1	2.3	2.7	
	308	6046	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.5	1.3	1.0	0.6	
	309	6136	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.2	1.7	1.4	2.2	
	310	6185	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.5	1.1	1.6	2.1	
	311	6268	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	3.0	2.5	1.6	4.4	
	312	6667	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.2	1.5	1.4	1.6	
	313	6710	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	2.0	1.4	1.6	3.2	
	314	7986	細石刃核	凝灰岩A	G-11	Ⅶ	1.3	1.5	1.4	0.8	
	315	9719	細石刃核	凝灰岩A	F-11	Ⅶ	2.0	1.4	1.9	4.0	
	316	9811	細石刃核	凝灰岩A	G-11	Ⅶ	1.9	1.3	1.7	2.5	
	317	10239	細石刃核	凝灰岩A	F-11	Ⅶ	2.3	2.2	1.6	3.6	
	318	10469	細石刃核	凝灰岩A	G-10	Ⅶ	1.6	1.4	1.5	3.6	
	319	10948	細石刃核	凝灰岩A	F-11	Ⅶ	2.0	1.0	1.1	1.0	
第30図	320	1166	ブランク	黒曜石上牛鼻	G-9	Ⅶ	1.4	2.5	3.5	12.6	
	321	4428	ブランク	黒曜石上牛鼻	F-10	Ⅶ	1.3	1.3	2.0	4.7	
	322	5317	ブランク	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	−	−	−	−	
	323	964	ブランク	黒曜石三船	G-10	Ⅶ	1.6	2.0	2.9	11.6	
	324	1635	ブランク	黒曜石三船	F-10	Ⅶ	−	−	−	−	
	325	2978	ブランク	黒曜石三船	G-9	Ⅶ	1.2	1.8	1.2	7.7	
	326	5234	ブランク	黒曜石三船	G-10	Ⅶ	1.6	1.8	2.0	7.3	
	327	8821	ブランク	黒曜石三船	F-11	Ⅶ	3.0	2.6	2.2	10.8	
	328	884	ブランク	黒曜石？	G-10	Ⅶ	2.0	2.3	1.6	7.3	
	329	1736	ブランク	凝灰岩A	G-9	Ⅶ	2.3	1.1	2.3	1.7	
第33図	330	8027	石鏃	鉄石英	G-11	Ⅶ	2.1	(1.8)	0.5	1.1	
	331	4147	石鏃	頁岩	G-10	Ⅶ	2.2	0.9	0.3	0.9	
	332	6596	石鏃	黒曜石針尾	F-11	Ⅶ	1.3	1.4	0.2	0.3	
	333	9277	石鏃	黒曜石針尾	F-11	Ⅶ	(0.8)	1.8	0.1	0.6	
	334	3492	石鏃	黒曜石灰色	F-9	Ⅶ	2.3	1.4	0.6	1.7	
	335	8054	石鏃	黒曜石灰色	G-11	Ⅶ	(1.3)	1.7	0.4	0.8	
	336	2683	石鏃	チャート	G-8	Ⅶ	1.2	1.3	0.2	0.2	

第11表　旧石器時代石器観察表(7)

挿図番号	遺物番号	取上番号	器種	石材	区	層	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考
第33図	337	6999	石鏃	硬質頁岩	F-11	Ⅶ	2.1	1.7	0.3	1.1	
	338	2476	石鏃	黒曜石桑ノ木津留	G-8	Ⅶ	1.7	1.3	0.4	0.7	
	339	7100	石鏃	黒曜石針尾	F-11	Ⅶ	(1.5)	1.2	0.2	0.6	
	340	3045	石鏃	黒曜石桑ノ木津留	G-9	Ⅶ	1.1	0.8	0.3	0.2	
	341	227	石鏃	黒曜石桑ノ木津留	G-8	Ⅶ	1.5	0.9	0.5	0.4	
	342	2480	石鏃	黒曜石桑ノ木津留	G-8	Ⅶ	1.3	1.0	0.3	0.3	
	343	1286	石鏃	黒曜石上牛鼻	F-10	Ⅶ	1.7	1.1	0.3	0.6	
	344	7183	石鏃	黒曜石上牛鼻	G-11	Ⅶ	1.9	(1.5)	0.4	1.0	
	345	5410	石鏃	黒曜石灰色	F-10	Ⅶ	1.9	1.4	0.3	0.7	
	346	4713	石鏃	黒曜石針尾	G-11	Ⅶ	1.6	1.1	0.4	0.4	
	347	8867	石鏃	頁岩	G-11	Ⅶ	(1.5)	1.4	0.1	0.7	
	348	346	石鏃	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	1.2	0.7	0.4	0.2	
	349	783	石鏃	頁岩	G-9	Ⅶ	2.6	1.3	0.6	1.8	
	350	7584	石鏃	硬質頁岩	G-11	Ⅶ	2.3	1.6	0.6	0.7	
	351	4676	石鏃	黒曜石針尾	G-11	Ⅶ	(1.4)	1.6	0.3	0.6	
	352	11284	石鏃	黒曜石上牛鼻	F-11	Ⅶ	1.7	1.1	0.3	0.5	
	353	314	石鏃	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	(1.3)	(0.7)	0.2	0.3	
	354	407	石鏃	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	0.8	1.0	0.5	0.3	
	355	9372	石鏃	黒曜石灰色	F-11	Ⅶ	1.3	1.9	0.4	1.1	
	356	8594	石鏃	チャート	F-12	Ⅶ	1.3	1.7	0.5	0.9	
第34図	357	2524	石鏃	安山岩	G-8	Ⅶ	1.0	0.6	0.2	0.1	
	358	2680	石鏃	ハリ質安山岩	G-8	Ⅶ	1.6	1.3	0.3	0.4	
	359	3027	石鏃	ハリ質安山岩	G-9	Ⅶ	1.7	1.2	0.5	0.6	
	360	7442	石鏃	ハリ質安山岩	F-11	Ⅶ	2.2	(1.5)	0.4	1.0	
	361	81	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(1.9)	1.9	0.3	1.7	
	362	226	石鏃	安山岩	G-8	Ⅶ	1.6	1.2	0.5	0.7	
	363	649	石鏃	安山岩	G-8	Ⅶ	2.3	1.3	0.3	0.7	
	364	1006	石鏃	安山岩	G-10	Ⅶ	2.3	1.5	0.5	1.1	
	365	1696	石鏃	安山岩	F-10	Ⅶ	1.4	1.1	0.5	0.5	
	366	2598	石鏃	安山岩	G-9	Ⅶ	1.9	1.2	0.3	0.7	
	367	3443	石鏃	安山岩	G-8	Ⅶ下	2.3	1.1	0.4	0.7	
	368	7060	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	1.8	(1.4)	0.3	0.7	
	369	7479	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	2.7	(1.5)	0.3	1.4	
	370	7482	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	0.7	(1.3)	(1.2)	0.5	
	371	8312	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(1.2)	(1.5)	0.4	0.6	
	372	8752	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(1.4)	1.5	0.2	0.9	
	373	9343	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(2.1)	(1.6)	0.4	1.0	
	374	9472	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	1.5	1.4	0.4	0.6	
	375	7682	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	2.3	1.7	0.3	0.9	
	376	9716	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	2.3	(1.7)	0.4	0.8	
	377	10697	石鏃	安山岩	G-10	Ⅶ	(1.6)	1.8	0.4	1.1	
	378	11297	石鏃	安山岩	−	Ⅶ	1.3	1.1	0.2	0.3	
	379	7831	石鏃	安山岩灰色	F-11	Ⅶ	(1.8)	1.8	0.3	1.0	
	380	10030	石鏃	ハリ質安山岩	F-11	Ⅶ	(1.7)	1.5	0.2	0.9	
	381	1475	石鏃	安山岩	G-10	Ⅶ	(2.1)	2.4	0.5	2.7	
	382	4422	石鏃	安山岩	F-10	Ⅶ	1.7	1.7	0.4	0.8	
	383	4692	石鏃	安山岩	G-11	Ⅶ	1.4	1.5	0.3	0.6	
	384	5898	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	1.6	1.4	0.2	0.6	
	385	6459	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(1.9)	2.2	0.3	14.4	
	386	6613	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	2.1	(0.6)	0.2	0.4	
	387	7088	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(2.0)	(2.7)	0.1	0.9	
	388	7966	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	2.1	1.1	0.3	0.6	
第35図	389	8399	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(1.7)	1.8	0.3	1.7	
	390	10871	石鏃	安山岩	G-11	Ⅶ	1.8	1.4	0.2	0.9	
	391	10955	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(1.5)	2.2	0.3	1.4	
	392	11078	石鏃	ハリ質安山岩	G-9	Ⅶ	1.8	(0.8)	0.2	0.6	

第12表　旧石器時代石器観察表(8)

挿図番号	遺物番号	取上番号	器種	石材	区	層	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考
第35図	393	1441	石鏃	安山岩	F-10	Ⅶ	2.6	(1.9)	0.5	1.7	
	394	4249	石鏃	安山岩	G-10	Ⅶ	2.1	(1.7)	0.4	1.1	
	395	11245	石鏃	安山岩	F-9	Ⅶ	2.5	1.7	0.4	1.3	
	396	8074	石鏃	ハリ質安山岩	G-11	Ⅶ	(0.9)	1.5	0.1	0.4	
	397	2477	石鏃	安山岩	G-8	Ⅶ	2.0	1.1	0.4	0.8	
	398	3404	石鏃	安山岩	G-8	Ⅶ下	2.2	1.5	0.8	1.6	
	399	3647	石鏃	安山岩	G-9	Ⅶ	1.8	1.4	0.4	1.1	
	400	3782	石鏃	安山岩	G-9	Ⅶ	1.5	0.9	0.2	0.5	
	401	4012	石鏃	安山岩	G-9	Ⅶ	1.6	1.0	0.3	0.4	
	402	5463	石鏃	安山岩	F-10	Ⅶ	(1.5)	(1.4)	0.5	0.7	
	403	6538	石鏃	安山岩	G-8	Ⅶ	2.0	1.5	0.5	1.0	
	404	6933	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	1.5	1.1	0.4	0.4	
	405	6980	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	1.5	0.9	0.4	0.4	
	406	7723	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	2.8	1.8	0.8	3.1	
	407	8016	石鏃	安山岩	G-11	Ⅶ	2.0	(1.4)	0.4	1.9	
	408	9314	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	1.7	1.7	0.5	1.6	
	409	10535	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	2.4	1.6	0.6	1.7	
	410	8481	石鏃	安山岩	G-11	Ⅶ	1.6	1.2	0.1	0.6	
	411	8385	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(1.2)	1.0	0.2	0.5	
	412	9174	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(0.7)	(0.9)	0.2	0.1	
	413	9518	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	1.4	0.9	0.3	0.4	
	414	2968	石鏃	ハリ質安山岩	G-9	Ⅶ	1.4	0.7	0.4	0.3	
	415	3838	石鏃	ハリ質安山岩	G-9	Ⅶ	1.4	1.4	0.4	0.7	
	416	531	石鏃	安山岩	G-8	Ⅶ下	1.5	1.3	0.5	0.6	
	417	3834	石鏃	安山岩	G-9	Ⅶ	1.7	1.2	0.3	1.0	
	418	7952	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	2.8	(1.8)	0.6	2.8	
第36図	419	8085	石鏃	安山岩	G-11	Ⅶ	1.8	1.5	0.3	0.7	
	420	9011	石鏃	安山岩	G-8	Ⅶ	1.5	(1.2)	0.3	0.5	
	421	8932	石鏃	安山岩	G-11	Ⅶ	1.7	2.0	0.6	1.9	
	422	7458	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(1.5)	(0.8)	0.2	0.5	
	423	8374	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	2.3	1.3	0.4	1.2	
	424	8402	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	2.2	2.4	1.0	4.6	
	425	10806	石鏃	安山岩	F-11	Ⅶ	(1.8)	1.2	0.3	0.7	
	426	7804	石鏃	安山岩灰色	F-11	Ⅶ	(1.7)	2.0	0.5	1.7	
第37図	427	5334	石核	黒曜石上牛鼻	G-10	Ⅶ	2.0	1.8	1.8	11.6	
	428	10761	石核	黒曜石上牛鼻	F-11	Ⅶ	4.0	4.1	1.5	20.2	
	429	768	石核	黒曜石三船	G-9	Ⅶ	3.0	2.8	2.2	24.1	
	430	8964	石核	黒曜石三船	G-8	Ⅶ	3.8	3.0	2.1	28.1	
第38図	431	1146	凹石	砂岩	G-9	Ⅶ	15.6	11.3	5.5	1245.0	
	432	1144	敲石	砂岩	G-9	Ⅶ	5.7	4.5	3.1	102.5	
	433	1071	敲石	砂岩	G-20	Ⅶ	3.8	2.7	2.2	21.6	
	434	3499	敲石	安山岩	G-9	Ⅶ	8.5	5.2	6.3	390.0	
	435	1244	敲石	安山岩	G-8	Ⅶ	6.7	5.7	4.5	218.8	
	436	3531	敲石	砂岩	G-9	Ⅶ	5.4	4.0	1.5	43.8	
	437	1330	敲石	砂岩	G-9	Ⅶ	6.9	5.2	2.3	117.6	
	438	1030	敲石	砂岩	G-8	Ⅶ	4.4	4.1	3.2	77.0	
	439	2711	敲石	砂岩	G-8	Ⅶ	4.4	3.5	1.4	30.0	
	440	2692	敲石	砂岩	G-8	Ⅶ	10.8	4.8	3.3	244.6	
	441	1716	敲石	砂岩	F-10	Ⅶ	8.2	6.4	5.8	365.0	
第39図	442	10408	敲石	砂岩	F-11	Ⅶ	3.4	3.4	2.6	35.8	
	443	1242	磨石	砂岩	G-9	Ⅶ	7.6	3.6	3.1	118.5	
	444	1715	磨石	砂岩	F-10	Ⅶ	4.8	5.8	2.4	74.3	
	445	10698	台石	安山岩	G-10	Ⅶ	14.9	11.2	6.7	1600.0	

第13表　縄文時代土器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	層位·遺構	出土区	器種	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第49図	446	ob集積	J-26	深鉢	胴部	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	ナデ	ナデ	突帯
第51図	450	Ⅶ	G-8	深鉢	口縁部	明褐	橙	○			白赤粒	脆い	ナデ	ナデ・指頭痕	刻目突帯・含砂礫
	451	Ⅶ	G-8	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	橙	○	○	○	白赤粒	脆い	ナデ	ナデ・工具痕	刻目突帯・外面に煤痕・外面剥離
	452	Ⅶ	F-9	深鉢	口縁部	明褐	にぶい黄褐	○				脆い	ナデ	ナデ	刻目突帯（貝殻圧痕か？）
	453	Ⅶ	G-10	深鉢	口縁部	黄褐	にぶい黄褐	○	○		白粒	脆い	ハケメ後ナデ	ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ・ﾍﾗﾅﾃﾞ・指頭痕	刻目突帯・含砂礫
	454	－	G-8	深鉢	口縁部~胴部	橙	黒褐	○		○	白粒	脆い	ナデ	ナデ	突帯
	455	Ⅶ	G-8	深鉢	口縁部~胴部	褐	黒褐	○			白赤粒	脆い	ナデ・ハケメ	ナデ	刻目突帯・含砂礫
	456	Ⅶ	G-9	深鉢	口縁部~胴部	にぶい橙	灰黄褐	○		○	白赤粒	脆い	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	刻目突帯
	457	Ⅶ	G-8	深鉢	口縁部~胴部	にぶい褐	にぶい黄褐	○		○	白粒	脆い	ナデ	ナデ・指頭痕	刻目突帯
	458	Ⅶ	G-8	深鉢	口縁部~胴部	褐	暗灰黄	○		○	白赤粒	脆い	－	ナデ	刻目突帯・外面剥離・含砂礫
	459	Ⅶ	G-9	深鉢	胴部	褐	にぶい黄褐	○			白赤粒	脆い	ナデ	ナデ	刻目突帯
	460	Ⅶ	G-8	深鉢	口縁部~胴部	明黄褐	黒褐	○			白粒	脆い	ナデ？	ナデ？	内面・外面ともに剥離・突帯
	461	Ⅶ	G-9	深鉢	口縁部~胴部	黄橙	にぶい黄橙	○			白粒	脆い	ﾍﾗﾅﾃﾞ・指頭痕	ﾍﾗﾅﾃﾞ・指頭痕	突帯・含砂礫
	462	Ⅶ	F-11	深鉢	口縁部~胴部	にぶい黄橙	灰黄褐	○		○	白赤粒	脆い	ハケメ後ナデ	指頭痕・ハケメ	刻目突帯・含砂礫
	463	Ⅶ	G-8	深鉢	胴部	灰黄褐	にぶい黄橙				白粒	脆い	ナデ	ナデ	刻目突帯（貝殻圧痕）・含砂礫
	464	Ⅶ	G-8	深鉢	胴部	黄褐	にぶい褐				白赤粒	脆い	ハケメ後ナデ	ハケメ	刻目突帯（貝殻圧痕）・含砂礫
	465	Ⅶ	G-8	深鉢	胴部	灰黄褐	黒褐	○			白粒	脆い	ハケメ後ナデ	ハケメ	刻目突帯（工具1.5㎜幅）
	466	Ⅶ	G-8	深鉢	胴部	黒褐	灰褐	○			白赤粒	脆い	ハケメ後ナデ	ナデ	
第52図	467	Ⅳ	J-27	円筒	口縁部	灰黄	にぶい赤褐	○	○			良	条痕	ナデ	
	468	カクラン	F-16	円筒	口縁部	にぶい黄橙	にぶい赤褐	○	○			良	条痕	ナデ	
	469	Ⅲb	H-18	円筒	口縁部	茶褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	条痕	ナデ	
	470	表採	J-29	円筒	口縁部	にぶい黄橙	にぶい赤褐	○	○			良	条痕？	ケズリ	
	471	Ⅲa	F-11	円筒	口縁部~胴部	灰黄	にぶい黄	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	口径13.0cm
	472	Ⅳ	J-26	円筒	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○		砂粒	良	条痕	ケズリ後ナデ	
	473	Ⅰ	H-18	円筒	口縁部	にぶい橙	赤褐	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
	474	Ⅱ	H-20	角筒	口縁部	にぶい褐	にぶい橙	○	○			良	条痕	ケズリ	
	475	Ⅱ	G-20	角筒	口縁部	にぶい褐	にぶい橙	○				良	条痕	ケズリ	
	476	表採	H-18	角筒	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	条痕	ケズリ後ナデ	
	477	Ⅲa	J-26	円筒	胴部	にぶい橙	橙	○	○			良	条痕	ケズリ	
第53図	478	Ⅲa	H-8	円筒	胴部	にぶい黄橙	褐灰	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
	479	Ⅱ	H-20	角筒	胴部	橙	黒褐	○				良	条痕	ケズリ後ナデ	
	480	カクラン	H-18	角筒	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	条痕	ケズリ	
	481	Ⅱ	H-19	角筒	胴部	灰褐	灰褐	○	○		砂礫	良	条痕	ケズリ	胎土が粗い
	482	Ⅳ	H-14	角筒	胴部	明褐	褐	○	○			良	条痕	ケズリ	
	483	表採	H-17	角筒	胴部	黒褐	褐灰	○	○			良	条痕	ケズリ	
	484	カクラン	H-18	角筒	胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
	485	Ⅲb	H-18	角筒	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ケズリ	
	486	Ⅲ	F-10	角筒	胴部	黒褐	黄灰	○	○			良	条痕	ケズリ	
	487	表採	－	角筒	胴部	にぶい褐	にぶい橙	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
第54図	488	Ⅱ	H-20	角筒	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○		白粒	良	条痕	ケズリ後ナデ	
	489	Ⅲb	H-18	角筒	胴部	黒褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条痕	ケズリ？	
	490	Ⅲa	J-26	角筒	胴部	にぶい褐	黒褐	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
	491	Ⅲa	G-12	角筒	胴部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	条痕	ケズリ	
	492	Ⅴ	H-18	角筒	胴部	橙	黒褐	○	○	○		良	条痕	－	
	493	Ⅰ	H-25	角筒	胴部	褐	褐	○	○		砂礫	良	条痕	条痕	
	494	Ⅲa	E-10	角筒	胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
	495	カクラン	G-11	角筒	胴部	にぶい橙	にぶい褐	○	○			良	条痕	ナデ	
第55図	496	表採	H-19	角筒	胴部	褐	褐	○				良	条痕	ケズリ後ナデ	
	497	カクラン	－	円筒	胴部	橙	褐灰	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
	498	Ⅲa	F-11	円筒	胴部	橙	褐	○	○			良	条痕	ケズリ	
	499	Ⅲa	F-11	円筒	胴部	橙	黒褐	○	○			良	条痕	ナデ	
	500	表採	H-17	角筒	胴部	褐	褐	○	○			良	条痕	ナデ	
	501	Ⅲa	F-11	角筒	胴部	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
	502	Ⅲa	F-11	角筒	胴部	橙	暗褐	○		○		良	条痕	ケズリ	
	503	Ⅳ	I-26	角筒	胴部	橙	にぶい褐	○	○			良	条痕	ケズリ	
	504	Ⅳ	I-26	角筒	胴部	明赤褐	明褐	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
	505	カクラン	F-11	角筒	胴部	にぶい橙	にぶい褐	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
	506	Ⅲa	F-10	角筒	胴部	灰黄褐	灰黄褐	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	

第14表　縄文時代土器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	層位·遺構	出土区	器種	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第56図	507	カクラン	−	角筒	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○			良	条痕	ケズリ	
	508	Ⅲa	F-10	角筒	胴部	灰黄	にぶい黄	○	○			良	条痕	ケズリ	
	509	Ⅲa	F-11	角筒	胴部	黒褐	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ケズリ	
	510	Ⅲa	F-10	角筒	胴部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ケズリ	
	511	Ⅲa	F-10	角筒	胴部	黒褐	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ケズリ	
	512	カクラン	J-27	角筒	底部	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○		雲母	良	条痕	ナデ	
	513	Ⅲa	F-19	角筒	底部	にぶい褐	明褐	○	○			良	条痕	ナデ	
	514	Ⅰ	H-17	角筒	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	条痕	ナデ	
	515	カクラン	I-18	角筒	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	条痕	ナデ	
	516	カクラン	H-18	角筒	底部	橙	橙	○	○	○		良	条痕	ケズリ後ナデ	
	517	Ⅲa	H-18	角筒	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ナデ	
	518	Ⅲa	H-9	角筒	底部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ナデ	
	519	カクラン	G-8	角筒	底部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ナデ	
	520	Ⅲa	F-11	円筒	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
	521	Ⅲb	J-26	円筒	口縁部	灰黄褐	褐	○	○	○		良	条痕	ケズリ後ナデ	
第57図	522	カクラン	F-9	円筒	胴部	明褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	条痕	ナデ	
	523	Ⅲb	H-18	円筒	胴部	明褐	にぶい橙	○	○			良	条痕	ナデ	
	524	カクラン	H-18	円筒	胴部	にぶい黄褐	黒褐	○	○			良	条痕	ケズリ後ナデ	
	525	カクラン	H-17	円筒	胴部	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ナデ	
	526	Ⅲb	J-26	円筒	胴部	橙	にぶい褐	○	○			良	条痕	ナデ	
	527	Ⅴ	H-18	円筒	胴部	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○			良	条痕	ナデ	
	528	Ⅲb	I-26	円筒	胴部	黒褐	にぶい黄褐	○	○			良	条痕	ナデ	
	529	カクラン	I-18	円筒	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	条痕	ケズリ後ナデ	
	530	Ⅲ	H-17	円筒	口縁部	黒褐	黒褐	○	○			良	条痕	ナデ	
第58図	531	Ⅴ	I-26	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	532	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	533	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○			良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	534	Ⅴ	I-26	深鉢	口縁部	褐灰	褐灰	○	○			良	山形押型文	山形押型文	
	535	Ⅳ	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○		○		良	山形押型文	ナデ	
	536	Ⅳ	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄橙	褐灰	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	537	Ⅲa	F-10	深鉢	胴部	橙	黒褐	○		○		良	山形押型文	指頭ナデ	
	538	Ⅴ	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	539	Ⅲb	I-26	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○			良	山形押型文	ナデ	
	540	カクラン	I-26	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○		○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	541	Ⅴ	I-26	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	指頭ナデ	
	542	Ⅲa	H-25	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	山形押型文	指頭ナデ	
	543	Ⅴ	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	褐灰	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	544	Ⅳ	I-25	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	545	Ⅴ	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	546	Ⅳ	I-25	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	山形押型文	ナデ	
	547	Ⅴ	I-26	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	548	Ⅲa	I-25	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	指頭ナデ	
	549	Ⅳ	I-25	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	指頭ナデ	
	550	Ⅳ	I-25	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
第59図	551	Ⅳ	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	552	Ⅳ	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	褐灰	○	○	○		良	山形押型文	指頭ナデ	
	553	Ⅲa	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	554	Ⅲb	I-26	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	555	Ⅲb	I-26	深鉢	胴部	黒褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	556	Ⅴ	I-26	深鉢	胴部	褐灰	褐灰	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	557	Ⅴ	I-25	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	558	Ⅳ	I-25	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	山形押型文	ナデ	
	559	カクラン	I-24	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	山形文と楕円文	指頭ナデ	
	560	Ⅲb	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	楕円文	ナデ	
	561	Ⅳ	I-25	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	楕円文	ケズリ後ナデ	
	562	Ⅲa	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	山形文	ケズリ後ナデ	
	563	Ⅲb	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○		○		良	山形文	ナデ	
	564	Ⅳ	I-26	深鉢	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	山形文	ナデ	

第15表　縄文時代土器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	層位·遺構	出土区	器種	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第60図	565	Ⅳ	J-26	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	褐灰	○		○		良	条線押型文	ナデ	
	566	Ⅳ	J-26	深鉢	口縁部	褐灰	にぶい黄橙	○		○		良	条線押型文	ナデ	
	567	Ⅳ	J-26	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	ナデ	
	568	Ⅳ	J-26	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	ケズリ後ナデ	
	569	Ⅳ	J-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	ケズリ後ナデ	
	570	Ⅳ	J-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	条線押型文	ナデ	
	571	Ⅳ	J-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	ナデ	
第61図	572	Ⅳ	J-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	ナデ	
	573	Ⅳ	J-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	ケズリ後ナデ	
	574	Ⅳ	J-26	深鉢	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	ナデ	
	575	Ⅳ	J-26	深鉢	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	指頭ナデ	
	576	Ⅳ	J-26	深鉢	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	ケズリ後ナデ	
第62図	577	Ⅲa	J-27	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	ナデ	
	578	Ⅲa	J-27	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	ナデ	
	579	Ⅳ	J-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	ナデ	
	580	Ⅳ	J-26	深鉢	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条線押型文	指頭ナデ	
	582	Ⅲa	I-25	深鉢	口縁部	橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	沈線	丁寧なナデ	
第63図	581	Ⅳ	I-26	深鉢	口縁部~胴部	明褐	黄褐	○	○			良	押型文	ナデ	口径21.7cm
	583	Ⅳ	I-25	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	黄褐	○	○	○		良	沈線	ナデ	口径30.0cm
	584	Ⅲa	I-25	深鉢	口縁部	橙	黄褐	○	○	○		良	沈線	ナデ	
	585	カクラン	I-25	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	黄褐	○	○	○		良	沈線	ナデ	
第64図	586	Ⅴ	I-25	深鉢	口縁部	橙	黄褐	○	○			良	沈線	ナデ	
	587	Ⅳ	H-25	深鉢	胴部	明褐	黒褐	○	○			良	網目撚糸文	ナデ	
	588	Ⅲa	H-25	深鉢	胴部	褐	にぶい黄褐	○	○			良	網目撚糸文	ナデ	
	589	Ⅳ	H-25	深鉢	胴部	明赤褐	にぶい黄褐	○	○			良	沈線	ナデ	
	590	Ⅳ	H-25	深鉢	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	網目撚糸文	ナデ	
	591	カクラン	H-26	深鉢	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		良	沈線	ナデ	
	592	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○		良	撚糸文	ナデ	
	593	Ⅲa	H-26	深鉢	口縁部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○			良	撚糸文	ナデ	
	594	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○		良	撚糸文	ナデ	
第65図	595	Ⅲa	H-26	深鉢	口縁部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○			良	撚糸文	ナデ	
	596	Ⅲa	H-26	深鉢	口縁部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○			良	撚糸文	ナデ	
	597	Ⅳ	I-25	深鉢	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	撚糸文	ナデ	
	598	Ⅲb	I-25	深鉢	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	撚糸文	ナデ	
	599	Ⅳ	I-25	深鉢	胴部	明赤褐	にぶい黄橙	○	○			良	撚糸文	ナデ	
	600	Ⅲa	I-25	深鉢	胴部	明赤褐	にぶい黄橙	○	○			良	撚糸文	ナデ	
第67図	605	Ⅲa	I-24	深鉢	口縁部~胴部	褐灰	褐灰	○	○	○		良	条痕・連点	条痕	
	606	Ⅲb	I-20	深鉢	口縁部	褐灰	褐灰	○	○	○		良	条痕・連点	条痕	
	607	Ⅲa	F-10·11	深鉢	胴部	黒褐	にぶい褐	○	○	○		良	連点	ナデ	
	608	Ⅲb	I-24	深鉢	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	連点	条痕	
	609	Ⅲa	F-10	深鉢	胴部	にぶい褐	橙	○	○	○		良	連点	ナデ	
	610	Ⅲa	F-11	深鉢	胴部	にぶい褐	橙	○	○	○		良	連点	ナデ	
	611	カクラン	F-11	深鉢	胴部	明褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	連点	ナデ	
	612	P2	H-26	深鉢	胴部	橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	微隆帯・ナデ	ケズリ	
	613	－	I-27	深鉢	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	細い沈線	ケズリ	
	614	Ⅲb	I-25	深鉢	胴部	橙	褐灰	○	○	○		良	沈線・刺突文	ナデ	
	615	Ⅲa	I-25	深鉢	胴部	橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	微隆帯	ナデ	
第68図	616	Ⅱ	G-20	深鉢	胴部	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○		良	沈線	ナデ	
	617	Ⅰ	H-26	深鉢	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	沈線	ナデ	
	618	Ⅲb	I-25	深鉢	胴部	にぶい黄褐	褐灰	○	○			良	微隆帯・工具ナデ	ケズリ	
	619	Ⅲb	J-26	深鉢	口縁部	褐灰	にぶい黄褐	○				良	微隆帯	ナデ	
	620	Ⅲb	I-26	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○		○		良	微隆帯	ナデ・ケズリ	
	621	Ⅲb	I-25	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○			良	微隆帯	ナデ・ケズリ	
	622	Ⅲa	I-25	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○			良	微隆帯	工具ナデ・ケズリ	
	623	Ⅲa	I-25	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○			良	微隆帯	ナデ	
	624	Ⅲb	I-25	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ・ケズリ	
	625	Ⅲa	I-25	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ・沈線	ケズリ	
	626	Ⅲa	F-11	深鉢	胴部	褐灰	にぶい赤褐	○	○			良	条痕	ナデ	

第16表　縄文時代土器観察表(4)

挿図番号	遺物番号	層位·遺構	出土区	器種	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第68図	627	Ⅲb	I-25	深鉢	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○	○		良	微隆帯・沈線	ケズリ	
第69図	628	Ⅲb	J-26	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	微隆帯・沈線	ケズリ	
	629	Ⅲb	I-26	深鉢	胴部	褐灰	褐灰	○	○			良	相交弧文	ナデ	
	630	Ⅲb	I-26	深鉢	胴部	褐灰	褐灰	○	○			良	相交弧文	ナデ	
	631	Ⅲb	I-26	深鉢	胴部	褐灰	褐灰	○	○			良	押引文	条痕・ナデ	
	632	Ⅳ	I-26	深鉢	胴部	褐灰	褐灰	○	○			良	相交弧文	ケズリ後ナデ	
	633	－	G-10	深鉢	胴部	褐灰	褐灰	○	○	○		良	押引文？	ケズリ後ナデ	
	634	Ⅲa	F-11	深鉢	胴部	褐灰	にぶい赤褐	○	○	○		良	二叉状刺突文	ナデ	
	635	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	褐灰	褐灰	○	○			良	二叉状刺突文	ナデ	
	636	Ⅲa	F·G-10	深鉢	口縁部	褐灰	褐灰	○	○			良	縄文	ナデ	
	637	Ⅲa	－	深鉢	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	二叉状刺突文	ナデ	
	638	Ⅲa	G-10	深鉢	胴部	褐灰	褐灰	○	○		雲母	良	縄文	ナデ	
	639	－	F-10	深鉢	胴部	褐灰	褐灰	○	○		雲母	良	縄文	ナデ	
	640	－	－	深鉢	口縁部	にぶい褐	にぶい褐			○		良	ナデ	ナデ	
	641	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	明褐	明褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
第70図	642	Ⅲa	F-19	深鉢	口縁部	褐	褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
	643	Ⅲa	F-19	深鉢	口縁部	褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
第71図	644	Ⅳa	F-11	深鉢	口縁部	暗褐	暗褐	○		○		良	ケズリ後ナデ	条痕	
	645	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	暗褐	褐	○				良	ケズリ	ケズリ後ナデ	
	646	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	黒褐	明褐	○		○		良	ナデ	条痕後ナデ	
	647	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○				良	ナデ	ナデ	
	648	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	褐	褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
	649	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ・ミガキ	
第72図	650	Ⅲa	F-11	深鉢or鉢	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	条痕後ナデ	口径34.6cm
第73図	651	Ⅲa	I-26	深鉢	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	ナデ	ケズリ後ナデ	口径28.2cm
	652	Ⅲa	I-26	深鉢	口縁部	明褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ・ケズリ	ナデ	
	653	－	－	深鉢	口縁部	黒褐	褐	○		○		良	ケズリ後ナデ	条痕後ナデ	
	654	Ⅲa	G-9	深鉢	口縁部	褐	褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
第74図	655	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	656	Ⅰ	F-10	深鉢	口縁部	褐	褐	○	○			良	ナデ	ナデ	
	657	表採	－	深鉢	口縁部	明褐	黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ・ミガキ	
	658	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	暗褐	褐	○		○		良	ナデ・ケズリ	条痕後ナデ	
	659	－	F-10	深鉢	口縁部	暗褐	褐	○		○		良	ナデ・ケズリ	ナデ	
	660	Ⅲa	G-12	深鉢	口縁部	暗褐	褐	○		○		良	ナデ	粗なナデ	
	661	Ⅲa	G-9	深鉢	口縁部	赤褐	赤褐	○		○		良	ナデ・ケズリ	ケズリ後ナデ	
第75図	662	－	－	深鉢or鉢	口縁部	暗褐	褐	○	○	○		良	ナデ・ケズリ	ナデ	
	663	Ⅲa	G-10	深鉢or鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ・ケズリ	ナデ	
	664	Ⅲa	F-9	深鉢or鉢	口縁部	暗褐	褐	○	○	○		良	ナデ	粗なミガキ	
	665	Ⅱ	F-10	深鉢or鉢	口縁部	明褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ミガキ・ナデ	
	666	Ⅲa	G-10	深鉢	口縁部	黒褐	褐	○	○			良	ナデ	条痕後ナデ	
	667	Ⅲa	G-7	深鉢or鉢	胴部	明褐	褐	○	○	○		良	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	
	668	カクラン	G-8	深鉢or鉢	口縁部	暗褐	明褐	○	○			良	ナデ	ナデ・ミガキ	
第76図	669	Ⅲa	F-10	深鉢or鉢	口縁部	明褐	明褐		○			良	ミガキ	ナデ	
	670	Ⅲa	F-11	深鉢or鉢	口縁部	明赤褐	明褐	○	○			良	ケズリ	ケズリ後ナデ	
	671	－	G-10	深鉢or鉢	口縁部	明褐	にぶい褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
	672	Ⅲa	G-10	深鉢or鉢	口縁部	明赤褐	明赤褐					良	ナデ	ナデ	
第77図	673	Ⅲa	G-12	深鉢or鉢	胴部	暗褐	にぶい褐	○	○			良	ナデ・ミガキ	ミガキ	
	674	Ⅲa	G-9	深鉢or鉢	口縁部	明黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	
	675	Ⅲa	H-9	深鉢or鉢	口縁部	明赤褐	明褐					良	ナデ・ミガキ	ナデ	
	676	カクラン	F-10	深鉢or鉢	口縁部	明褐	褐	○		○		良	ナデ	ミガキ・ナデ	
	677	－	F-9	深鉢or鉢	口縁部	明黄褐	褐	○		○		良	ナデ	ミガキ・ナデ	
	678	Ⅲa	G-10	深鉢or鉢	口縁部	明黄褐	明黄褐	○				良	ナデ	ナデ	
	679	Ⅲa	F-10	深鉢or鉢	口縁部	褐	明黄褐	○		○		良	ナデ・ケズリ	ケズリ後ナデ	口径29.5cm
	680	Ⅲa	F-10・11	深鉢or鉢	口縁部	明赤褐	明褐	○		○		良	ナデ・ミガキ	ミガキ	
	681	Ⅲa	F-10	深鉢or鉢	胴部	明褐	褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
第78図	682	Ⅲa	F-11	深鉢or鉢	口縁部	明赤褐	明赤褐		○			良	ナデ	ナデ	
	683	Ⅲa	－	深鉢or鉢	口縁部	にぶい赤褐	赤褐	○	○	○		良	ナデ・ミガキ	ナデ	
	684	Ⅰ	－	深鉢	口縁部	暗赤褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	

第17表　縄文時代土器観察表(5)

挿図番号	遺物番号	層位·遺構	出土区	器種	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第78図	685	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	明褐	褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
	686	Ⅲa	G-8	深鉢	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	687	－	F-10	深鉢	口縁部	明褐	明褐	○		○		良	ミガキ・ナデ	ナデ	
	688	表採	－	深鉢	口縁部	明赤褐	明赤褐	○				良	ナデ	ナデ	
	689	Ⅲa	G-9	深鉢	口縁部	明赤褐	明赤褐	○				良	ナデ	ケズリ後ナデ	
第79図	690	Ⅲa	H-9	深鉢	胴部	にぶい褐	褐	○				良	ケズリ	条痕後ナデ	
	691	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	褐	明褐	○				良	ナデ	ナデ	
	692	Ⅱ	F-10	深鉢	口縁部	褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	693	－	－	深鉢	口縁部	黒褐	明褐	○	○	○		良	ナデ・ミガキ	ナデ	
	694	表採	－	深鉢or鉢	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	ケズリ	ケズリ後ナデ	
第80図	695	Ⅲa	G-9	深鉢	口縁部	明褐	褐	○	○			良	ケズリ	ケズリ後ナデ	
	696	Ⅲa	G-11	深鉢	口縁部	明褐	褐	○		○		良	ケズリ後ナデ	ナデ	
	697	－	－	深鉢	口縁部	褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ナデ	
	698	表採	H-18	深鉢	口縁部	明褐	暗褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
	699	Ⅲa	G-12	深鉢	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	700	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	褐	褐	○	○	○		良	条痕	条痕	
	701	－	G-10	深鉢	口縁部	黒褐	明褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	条痕	
	702	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	褐	暗褐	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ナデ	
	703	Ⅲ	G-9	深鉢	口縁部	暗褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	704	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	黄褐	○	○	○		良	ナデ	条痕後ナデ	
第81図	705	Ⅳa	F-11	深鉢	口縁部	褐	暗褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	条痕後ナデ	
	706	Ⅲ	G-10	深鉢	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	707	Ⅰ	H-9	深鉢	口縁部	暗褐	褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	ナデ	
	708	Ⅲ	－	深鉢	口縁部	明褐	暗褐	○	○			良	条痕後ナデ	ナデ	
	709	－	－	深鉢	口縁部	暗褐	褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	ナデ	
	710	Ⅲa	H-18	深鉢	口縁部	明褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	711	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	明褐	暗褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	ケズリ後ナデ	
	712	－	D-13	深鉢	口縁部	暗褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
第82図	713	Ⅰ	F-12	深鉢	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	ナデ	
	714	Ⅲa	F-11	深鉢	胴部	暗褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	715	Ⅰ	E-13	深鉢	口縁部	明褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ケズリ後ナデ	口径19.5cm
	716	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ	条痕後ナデ	
	717	Ⅲa	F-9	深鉢	口縁部	暗褐	褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	ナデ	
	718	Ⅲa	G-12	深鉢	口縁部	褐	黄褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
	719	－	－	深鉢	口縁部	褐	褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
	720	－	－	深鉢	口縁部	明黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
第83図	721	Ⅲ	G-8	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	722	Ⅲa	G-10	深鉢	口縁部	褐	暗褐	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	口径20.8cm
	723	Ⅲa	G-10	深鉢	口縁部	暗褐	褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	条痕後ナデ	
	724	Ⅲa	G-9	深鉢	口縁部	暗褐	明褐	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
第84図	725	－	－	深鉢	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ナデ	
	726	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	暗褐	褐	○		○		良	ケズリ後ナデ	ナデ	
	727	－	H-8・9	深鉢	口縁部	灰褐	明褐	○		○		良	ナデ	条痕後ナデ	
	728	Ⅲa	G-9	深鉢	口縁部	暗褐	明褐	○	○			良	ミガキ	ナデ	
	729	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	褐	褐	○	○	○		良	ナデ	条痕後ナデ	
	730	Ⅳa	F-11	深鉢	口縁部	灰黄褐	黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	731	Ⅲa	G-9	深鉢	胴部	明褐	明褐	○	○			良	ナデ	条痕後ナデ	
第85図	732	Ⅲa	G-10	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	733	Ⅰ	F-12	深鉢	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	条痕	
	734	Ⅲa	F-11	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	条痕	条痕後ナデ	
	735	Ⅰ	E-14	深鉢	口縁部	褐	明褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
第86図	736	Ⅲa	F-11	深鉢	完形	黒褐	黒褐	○				良	ケズリ	条痕	口径15.5cm　器高18.1cm　底部5.8cm
第87図	737	Ⅲa	G-11	深鉢	口縁部~胴部	明褐	褐	○	○	○		良	条痕	条痕	口径16.6cm
	738	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	褐	暗褐	○	○			良	ケズリ後ナデ	条痕後ナデ	口径23.6cm
	739	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	褐	褐	○	○			良	ケズリ後ナデ	条痕後ナデ	
第88図	740	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部~胴部	褐	褐	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	条痕後ナデ	口径21.4cm
	741	Ⅲa	F-10	深鉢	胴部	暗褐	褐	○	○	○		良	不明	不明	
第89図	742	Ⅲa	I-26	鉢	口縁部	黒褐	暗褐	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	

第18表　縄文時代土器観察表(6)

挿図番号	遺物番号	層位·遺構	出土区	器種	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第89図	743	−	−	鉢	口縁部	褐	黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	744	Ⅲa	G-9	鉢	口縁部	褐灰	褐灰	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	
	745	−	G-12	鉢	口縁部	暗褐	褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
	746	Ⅲa	I-26	鉢	口縁部	明褐	暗褐	○		○		良	ナデ・ミガキ	ミガキ	
	747	−	−	鉢	口縁部	明黄褐	明黄褐	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ・ナデ	
	748	−	−	鉢	口縁部	黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
	749	Ⅳa	F·G-10	鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ミガキ	ナデ	
	750	−	D-13	鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ	ケズリ後ナデ	
第90図	751	Ⅲa	G-12	鉢	口縁部	褐	明褐	○	○	○		良	不明	ミガキ・ナデ	
	752	Ⅲa	G-11	鉢	胴部	明褐	明褐	○	○			良	ミガキ・ナデ	ナデ	
	753	Ⅲa	H-9	鉢	胴部	明褐	明褐	○	○			良	ミガキ	条痕	
	754	Ⅰ	F-10	鉢	口縁部	明褐	暗褐	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	
	755	Ⅲa	H-9	鉢	胴部	明褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	756	Ⅲa	−	鉢	胴部	黒褐	褐	○	○	○		良	ナデ	条痕後ナデ	
	757	Ⅱ	E-13	鉢	胴部	黒褐	黒褐	○	○	○		良	ミガキ・ナデ	ミガキ	
	758	Ⅰ	I-11	鉢	胴部	暗褐	褐	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	
第91·92図	759	Ⅰ	E-13	鉢	胴部～底部	茶褐	茶褐	○	○			良	ヘラミガキ	ミガキ	底径6.8cm
第93図	760	−	H-8·9	深鉢	底部	褐	褐	○		○		良	ミガキ・ナデ	ナデ	底径15.2cm
	761	Ⅲa	F-11	深鉢	底部	にぶい黄褐	暗褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	底径12.0cm
	762	Ⅲa	G-9	深鉢or鉢	底部	にぶい黄褐	明赤褐	○			砂粒	良	ミガキ	ナデ	底径9.0cm
	763	Ⅲa	F-10	深鉢or鉢	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	ナデ	ナデ	底径12.4cm
	764	−	H-10	深鉢or鉢	底部	にぶい黄褐	褐	○		○		良	ミガキ	ナデ	底径16.0cm
	765	Ⅲa	F-10	深鉢or鉢	底部	明褐	褐	○		○		良	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	底径12.6cm
	766	Ⅳ	I-26	深鉢or鉢	底部	暗褐	暗褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	底径11.2cm
	767	−	G-10	深鉢or鉢	底部	灰黄褐	暗褐	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ナデ	底径13.8cm
	768	Ⅲa	G-11	深鉢or鉢	底部	にぶい黄褐	明褐	○	○	○		良	ケズリ	ナデ	底径11.6cm
	769	Ⅲa	G-9	深鉢or鉢	底部	明褐	暗褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	底径8.6cm
	770	Ⅲa	G-11	深鉢or鉢	底部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	ナデ	底径12.2cm
	771	表採	I-26	深鉢or鉢	底部	褐	褐	○	○			良	ナデ	ナデ	底径6.2cm
第94図	772	Ⅰ	H-11	深鉢or鉢	底部	褐	褐	○	○			良	ケズリ	ケズリ後ナデ	底径11.0cm
	773	Ⅲa	F-10	深鉢or鉢	底部	にぶい褐	褐	○	○			良	ナデ	工具ナデ	底径10.6cm
	774	Ⅲ	G-9	深鉢or鉢	底部	明褐	暗褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	ナデ	底径13.0cm
	775	表採	−	深鉢or鉢	底部	にぶい褐	明褐	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ナデ	底径8.8cm
	776	Ⅲa	F-11	深鉢or鉢	底部	にぶい褐	褐	○	○			良	網代底	ナデ	底径8.4cm
	777	Ⅲa	F-11	深鉢or鉢	底部	暗褐	暗褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
第95図	778	Ⅲa	G-12	台付皿	皿	褐	明褐	○	○			良	ナデ後ミガキ	ミガキ	口径18.4cm
	779	Ⅲa	G-11	台付皿	皿	明黄褐	明黄褐	○	○			良	ケズリ後ナデ	ナデ	
	780	−	−	台付皿	皿	明褐	明褐	○	○	○		良	ミガキ	ナデ	深鉢の可能性有り
第96図	781	−	D-13	台付皿	皿	褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ・ミガキ	ナデ	
	782	Ⅲa	G-12	台付皿	皿	明褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ケズリ後ナデ	
第97図	783	Ⅲa	G-12	台付皿	皿	明褐	褐	○	○			良	ナデ	ナデ	
	784	Ⅲ	F-11	台付皿	皿	暗褐	褐	○	○			良	ケズリ後ナデ	ナデ	
第98図	785	Ⅲa	H-9	台付皿	皿	暗褐	明褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	深鉢の可能性有り
	786	−	−	台付皿	皿	明褐	暗褐	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	条痕後ナデ	深鉢の可能性有り
第99図	787	Ⅰ	I-12	台付皿	脚部	明褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	底径10.0cm
	788	Ⅲa	F-10	台付皿	脚部	褐	明褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
	789	Ⅰ	J-12	台付皿	脚部	褐	褐	○	○	○		良	ミガキ	ナデ	
	790	Ⅲa	G-10	台付皿	脚部	褐	にぶい褐	○	○			良	ナデ	ナデ・ケズリ	
	791	Ⅲa	I-26	台付皿	脚部	褐	明褐	○	○	○		良	ナデ	粗なミガキ	
	792	−	H-9	台付皿	脚部	褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
第100図	793	Ⅲa	F-10	深鉢	口縁部	黒褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	沈線	ナデ	
	794	Ⅲa	F-11	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	褐	○	○	○		良	条痕	条痕後ナデ	
	795	Ⅰ	F-12	深鉢	口縁部	暗褐	にぶい黄褐	○		○		良	条痕	条痕後ナデ	
	796	表採	−	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	暗褐	○	○			良	沈線	ミガキ	
	797	Ⅲa	F-9	深鉢	口縁部	暗褐	にぶい黄褐	○	○			良	沈線	ミガキ	
	798	Ⅲa	G-10	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	条痕	ナデ	
	799	Ⅲ	G-10	深鉢	口縁部	にぶい黄褐	暗褐	○	○	○		良	条痕	条痕後ナデ	
	800	6号住居	F-11	深鉢	胴部	暗褐	明黄褐	○	○			良	条痕後ナデ	ナデ	

第19表　縄文時代土器観察表(7)

挿図番号	遺物番号	層位·遺構	出土区	器種	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第100図	801	Ⅰ	D-12	深鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	
	802	Ⅲa	F-19	深鉢	胴部	褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	ケズリ後ナデ	
第101図	803	Ⅲa	F-11	深鉢	胴部	暗褐	にぶい黄橙	○		○		良	条痕後ナデ	条痕後ナデ	
	804	Ⅲa	F-11	深鉢	胴部	暗褐	にぶい黄褐	○	○			良	条痕	条痕後ナデ	
	805	Ⅲa	F-10	深鉢	胴部	黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	条痕後ナデ	粗な条痕	
第102図	806	Ⅲa	G-11	深鉢	口縁部~胴部	暗褐	褐	○	○	○		良	条痕・ケズリ	条痕・ナデ	口径42.4cm
	807	Ⅲa	G-10	深鉢	口縁部~胴部	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	条痕	条痕後ミガキ	
第103図	808	8号住居	G-11	深鉢	胴部	暗褐	褐	○	○			良	条痕	条痕	
	809	Ⅲa	F-10	深鉢	胴部	黄褐	暗褐	○	○			良	条痕	ナデ	
	810	Ⅲa	F-11	深鉢	底部	暗褐	にぶい黄褐	○	○			良	ケズリ	ケズリ	
第104図	811	カクラン	F-9	浅鉢	口縁部	黒褐	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	口径31.0cm
	812	Ⅲa	F-10	浅鉢	口縁部	黒褐	黒褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
	813	－	H-9	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
	814	－	－	浅鉢	口縁部	褐灰	褐灰	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	815	1号住居	H-8	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	ミガキ	ミガキ	
	816	カクラン	F-11	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐	黒褐	○				良	ミガキ	ミガキ	
	817	Ⅱ	F-11	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	ミガキ	ミガキ	
	818	Ⅲa	F-11	浅鉢	口縁部	暗褐	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	819	Ⅳa	F-11	浅鉢	口縁部	暗褐	黒褐	○				良	ミガキ	ミガキ	
	820	Ⅲa	F-10	浅鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ケズリ	ミガキ	
	821	Ⅲa	G-10	浅鉢	胴部	黒褐	黒褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	822	Ⅰ	G-9	浅鉢	胴部	にぶい黄褐	黒褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
	823	Ⅲa	F-10	浅鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
	824	Ⅲa	G-11	浅鉢	胴部	にぶい黄褐	黒褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
第105図	825	6号住居	F-11	浅鉢	胴部	黒褐	黒褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
	826	Ⅲa	G-10	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	口径18.0cm
	827	Ⅲa	G-10	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	828	Ⅲa	G-10	浅鉢	口縁部	褐灰	褐灰	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
	829	5号住居	F·G-9	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	
	830	Ⅲ	G-8	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	
	831	Ⅲ	G-10	浅鉢	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
第106図	832	Ⅲa	G-9	浅鉢	口縁部	黒	黒	○				良	ミガキ	ミガキ	
	833	Ⅲa	G-11	浅鉢	口縁部	暗灰黄	黒褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	口径30.0cm
	834	Ⅰ	F-8	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐	黄褐	○				良	ミガキ	ミガキ	口径25.8cm
	835	Ⅰ	F-12	浅鉢	胴部	黄褐	黄褐	○				良	ミガキ	ミガキ	
	836	Ⅲa	G-10	浅鉢	口縁部	暗灰黄	暗灰黄	○				良	ミガキ	ミガキ	口径26.8cm
	837	Ⅲa	G-10	浅鉢	口縁部	黒褐	黒褐	○				良	ミガキ	ミガキ	口径32.4cm
	838	Ⅲa	F-11	浅鉢	口縁部~胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	口径14.8cm
第107図	839	－	H-8·9	めんこ	－	褐	にぶい褐	○		○		良	条痕後ナデ	ナデ	
	840	－	G-9	めんこ	－	黒褐	にぶい褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	841	－	H-8·9	めんこ	－	褐	暗褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	842	－	H-11	めんこ	－	明褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	843	－	－	めんこ	－	明褐	にぶい褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	844	－	－	めんこ	－	にぶい黄褐	暗褐	○	○	○		良	ナデ	条痕後ナデ	
	845	－	－	めんこ	－	灰黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
	846	Ⅲa	G-9	めんこ	－	明褐	明褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	847	Ⅲa	G-9	めんこ	－	褐	明褐	○	○	○		良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	848	Ⅰ	H-11	めんこ	－	褐	褐	○	○	○		良	ミガキ	ナデ	
	849	Ⅳa	F-11	めんこ	－	暗褐	暗褐	○	○	○		良	粗なナデ	条痕後ナデ	
	850	Ⅲa	G-12	めんこ	－	明褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	851	Ⅲa	G-10	めんこ	－	褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	852	Ⅲa	F-10	めんこ	－	褐	褐	○	○	○		良	ミガキ	ナデ	
	853	Ⅲb	J-16	めんこ	－	暗褐	褐	○	○	○		良	不明	ナデ	
第108図	854	Ⅲa	I-26	めんこ	－	明褐	明褐	○	○	○		良	条痕後ナデ	条痕後ナデ	
	855	－	G-10	めんこ	－	褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	856	Ⅲa	H-11	めんこ	－	褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	

第20表　縄文時代石器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層位・遺構	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第49図	447	−	J-26	ob集積	黒曜石（上牛鼻）	3.0	5.7	3.0	57.08	
	448	−	J-26	ob集積	黒曜石（上牛鼻）	4.5	4.6	3.2	73.43	
	449	スクレイパー	J-26	Ⅲb	黒曜石（日東）	6.6	8.5	2.8	150.00	
第66図	601	石鏃	I-26	Ⅴ	安山岩	2.9	2.0	0.6	3.07	
	602	スクレイパー	H-25	Ⅳ	鉄石英	6.7	5.6	1.0	43.55	
	603	磨石	I-26	Ⅳ	砂岩	5.5	4.5	2.3	77.84	
	604	磨石	J-20	Ⅴ	砂岩	4.5	3.4	2.5	49.22	
第109図	857	石鏃	J-26	Ⅲb	頁岩	2.1	1.2	0.5	1.24	
	858	石鏃	H-26	Ⅲb	安山岩	1.9	1.9	0.4	0.97	
	859	石鏃	F-12	Ⅲa	安山岩	2.3	2.0	0.4	1.55	
	860	石鏃	H-18	Ⅲa	頁岩	2.0	1.9	0.4	0.94	
	861	石匙	I-26	Ⅲa	鉄石英	2.4	4.2	0.8	6.38	
	862	石匙	H-25	Ⅲb	頁岩	2.9	5.5	1.0	14.07	
	863	石匙	I-26	Ⅲa	鉄石英	3.1	5.2	0.6	9.40	
	864	調整剥片	I-26	Ⅲb	黒曜石（上牛鼻）	5.2	2.6	1.4	20.77	
	865	石匙	J-26	Ⅲb	安山岩	4.4	2.4	0.7	6.94	
第110図	866	使用痕剥片	−	−	めのう	3.9	3.1	0.7	8.75	
	867	スクレイパー	−	−	チャート	4.2	2.7	0.8	9.95	
第111図	868	磨製石斧	D-13	Ⅰ	砂岩	7.0	6.1	3.1	212.26	
	869	磨製石斧	H-26	Ⅲ	安山岩	10.9	7.3	3.4	404.63	
	870	打製石斧	E-14	Ⅰ	砂岩	(7.7)	(5.8)	(2.0)	114.76	
	871	打製石斧	F-9	Ⅲa	頁岩	10.6	5.9	2.3	184.99	
	872	磨製石斧	F-8	Ⅱ	砂岩	13.9	4.3	1.8	149.15	
第112図	873	磨製石斧	D-13	Ⅰ	砂岩	(9.5)	5.2	4.0	340.77	
	874	磨製石斧	J-26	Ⅲb	硬質砂岩	7.4	6.9	3.9	271.06	
	875	磨製石斧	F-10	Ⅲa	蛇紋岩	4.3	6.6	1.5	62.71	
	876	磨製石斧	G-9	Ⅲa	砂岩	7.4	7.2	3.8	220.15	
	877	磨製石斧	H-8	Ⅲa	砂岩	8.1	7.1	3.2	290.75	
	878	磨製石斧	I-25	Ⅲa	頁岩	15.4	6.8	3.6	448.00	
	879	磨製石斧	G-10	Ⅲa	砂岩	11.7	5.9	2.3	274.66	
	880	磨製石斧	G-9	Ⅲa	頁岩	11.3	7.3	2.9	360.00	
	881	磨製石斧	H-9	Ⅲa	頁岩	7.4	4.7	3.0	160.01	
第113図	882	磨製石斧	F-9	Ⅲa	頁岩	9.4	5.4	3.3	230.73	
	883	磨製石斧	G-10	Ⅲa	頁岩	12.8	6.3	3.1	271.76	
第114図	884	磨石	F-10	Ⅲa	砂岩	6.0	4.0	1.2	42.91	
	885	磨石	F-10	Ⅲa	砂岩	6.9	3.5	1.3	53.00	
	886	磨石	F-10	Ⅲa	砂岩	7.3	5.1	2.2	118.74	
	887	磨石	G-9	Ⅲa	安山岩	7.8	5.7	3.6	243.17	
	888	磨石	F-11	Ⅲa	砂岩	8.0	6.3	3.6	306.97	
	889	磨石	H-10	Ⅲa	砂岩	7.4	5.0	3.9	230.54	
	890	磨石	G-8	Ⅲ	砂岩	9.1	4.5	2.9	157.65	
	891	磨石	F-11	Ⅲa	砂岩	9.0	5.6	1.8	137.40	
第115図	892	磨石	G-9	Ⅲa	頁岩	3.2	3.0	2.5	34.27	
	893	磨石	F-11	Ⅲa	砂岩	5.1	4.6	1.6	58.97	
	894	磨石	H-10	Ⅲa	砂岩	4.1	4.0	1.8	40.18	
	895	磨石	I-25	Ⅲa	砂岩	6.1	5.4	3.4	148.29	
	896	磨石	H-11	Ⅲa	砂岩	5.1	4.8	1.6	57.52	
	897	磨石	G-10	Ⅲa	安山岩	6.1	5.7	3.8	193.93	
	898	磨石	F-11	Ⅲa	砂岩	5.4	5.2	2.6	114.46	
	899	磨石	F-11	Ⅲa	砂岩	5.9	5.5	4.7	209.39	

第21表　縄文時代石器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層位·遺構	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第115図	900	磨石	G-9	Ⅲa	砂岩	5.5	4.8	4.4	163.16	
	901	磨石	F-11	Ⅲa	砂岩	5.7	5.2	2.2	96.82	
第116図	902	磨石	G-11	Ⅲa	砂岩	(6.5)	6.5	3.4	210.92	
	903	磨石	G-8	Ⅲa	砂岩	10.1	5.0	2.8	271.75	
	904	磨石	H-25	Ⅲa	砂岩	10.8	8.3	4.4	600.00	
	905	磨石	−	Ⅲa	砂岩	10.7	4.7	2.3	167.60	
	906	磨石	F-10·11	Ⅲa	砂岩	13.0	8.0	3.7	605.00	
	907	磨石	F-11	Ⅲa	安山岩	10.4	7.4	3.3	390.00	
第117図	908	磨石	G-8	Ⅲa	砂岩	9.8	8.6	5.9	720.00	
	909	磨石	F-6	Ⅲa	安山岩	10.5	8.0	6.6	760.00	
	910	磨石	−	Ⅲa	砂岩	11.9	(4.0)	4.6	327.08	
	911	磨石	I-25	Ⅲb	安山岩	11.5	7.4	4.6	580.00	
	912	磨石	G-11	Ⅲa	砂岩	12.0	8.6	3.1	550.00	
第118図	913	磨石	O-27	Ⅲa	砂岩	9.7	9.0	2.9	380.00	
	914	磨石	G-27	Ⅲa	安山岩	9.8	8.8	4.1	510.00	
	915	磨石	F-10	Ⅲa	安山岩	10.1	7.3	4.2	530.00	
	916	投弾	I-26	Ⅲ	安山岩	13.5	11.7	7.1	1495.00	
第119図	917	磨石	F-10	Ⅲa	安山岩	16.0	11.0	6.1	1710.00	
	918	磨石	H-8	Ⅲa	砂岩	14.9	8.6	7.7	1380.00	
	919	磨石	F-10	Ⅲa	砂岩	13.2	11.2	5.6	1220.00	
第120図	920	磨石	F-8	Ⅲa	安山岩	11.1	7.1	4.9	540.00	
	921	磨石	−	Ⅲa	砂岩	9.7	3.3	2.9	171.25	
	922	磨石	H-9	Ⅲa	砂岩	11.2	6.1	3.0	272.97	
	923	磨石	F-11	Ⅲa	安山岩	(6.2)	(5.4)	4.5	235.24	
	924	磨石	G-10	Ⅲa	砂岩	8.0	(4.1)	5.0	242.78	
	925	磨石	F-8	Ⅲa	砂岩	11.5	6.2	3.0	324.43	
	926	磨石（タタキ）	I-8	Ⅲa	安山岩	4.9	3.4	2.2	72.34	
第121図	927	敲石	H-26	Ⅲa	石英	8.2	7.6	5.0	420.00	
	928	磨石	G-10	Ⅲ	砂岩	5.9	5.4	2.2	108.76	
	929	磨石（タタキ）	F-11	Ⅲa	砂岩	7.7	6.3	3.7	261.15	
	930	磨石	F-11	Ⅲa	安山岩	8.2	(5.5)	4.5	278.89	
	931	磨石（タタキ）	F-10	Ⅲa	砂岩	8.5	6.9	2.3	191.35	
	932	磨石（タタキ）	F-10	Ⅲa	砂岩	6.6	5.0	3.8	171.04	
第122図	933	磨石（タタキ）	G-9	Ⅲa	砂岩	9.5	7.9	4.4	545.00	
	934	磨石（タタキ）	T-10	Ⅲa	砂岩	7.9	3.8	3.1	138.37	
	935	磨石（タタキ）	F-11	Ⅲa	砂岩	11.9	4.4	2.8	253.84	
	936	磨石（タタキ）	G-12	Ⅲa	砂岩	13.0	4.8	4.0	333.97	
	937	磨石	I-25	Ⅲa	砂岩	11.3	6.9	3.2	350.00	
	938	磨石・凹石	G-11	Ⅲa	砂岩	9.4	7.4	3.4	340.04	
第123図	939	磨石・凹石	H-26	Ⅲa	安山岩	8.7	7.8	4.3	460.00	
	940	磨石・凹石	G-12	Ⅲa	砂岩	8.9	10.4	4.1	540.00	
	941	磨石・凹石	F-11	Ⅲa	砂岩	9.9	8.4	4.5	560.00	
	942	磨石・凹石	F-10	Ⅲa	砂岩	14.7	13.3	5.7	1675.00	
第124図	943	磨石・凹石	J-26	Ⅲa	砂岩	8.0	9.4	5.5	610.00	
	944	磨石（タタキ）	H-8	Ⅲ	砂岩	13.7	7.9	7.0	1240.00	
	945	石錘	T-11	Ⅲa	安山岩	(4.7)	4.6	1.1	32.72	
	946	軽石加工品	G-10	Ⅲ	軽石	4.6	4.5	1.8	10.35	
	947	軽石加工品	F-10	Ⅲa	軽石	9.6	9.1	3.0	68.92	中央に穿孔
第125図	948	石皿	J-26	Ⅲb	安山岩	(23.2)	(17.8)	7.7	4000.00	
	949	石皿	F-11	Ⅲa	安山岩	(17.2)	22.0	6.7	3600.00	

第22表　古墳時代破鏡観察表

挿図番号	遺物番号	層位・遺構	出土区	器種	部位	色調		最大長 cm	最大幅 cm	重量 g	備考
						外面	内面				
第128図	950	1号住居	H-8	鏡	－	深緑	深緑	2.7	2.6	6.06	破鏡（穿孔）

第23表　古墳時代土器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	層位･遺構	出土区	器種	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第128図	951	1号住居	H-8	甕	口縁部~胴部	橙	明黄褐	○	○	○		良	ケズリ・ナデ	ハケ・指頭ナデ	
	952	1号住居	H-8	甕	脚台	橙	橙	○	○			良	ハケ・ナデ	ナデ	
	953	1号住居	H-8	甕	脚台	明赤褐	橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	
第129図	954	2号住居	H-8	甕	脚台	黄橙	橙	○	○	○		良	ハケ	ナデ	
	955	2号住居	H-8	甕	脚台	黄橙	橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	956	2号住居	H-8	高坏	裾部	黄橙	橙	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ナデ	
	957	2号住居	H-8	手づくね土器	完形	明黄褐	明黄褐	○		○		良	ナデ・指頭ナデ	ナデ・指頭ナデ	
	958	2号住居	H-8	手づくね土器	胴部~底部	橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ	指頭ナデ	
第131図	959	3号住居	G-9	甕	口縁部	浅黄	明黄褐	○	○	○		良	ハケ	ハケ後ナデ	
	960	3号住居	G-9	甕	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
	961	3号住居	G-9	甕	口縁部	黒褐	橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
	962	3号住居	G-9	甕	口縁部	橙	赤褐	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	
	963	3号住居	G-9	甕	口縁部~胴部	にぶい黄	灰	○				良	ハケ・ナデ	ナデ	
	964	3号住居	G-9	甕	口縁部	にぶい黒褐	橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ハケ後ナデ	
	965	3号住居	G-9	甕	口縁部~胴部	黒褐	明黄褐	○				良	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	
	966	3号住居	G-9	甕	口縁部~胴部	橙	明赤褐	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ・ヘラケズリ	
	967	3号住居	G-9	甕	口縁部~脚部	橙	橙	○				良	ハケ・ナデ	ミガキ・ハケ・ナデ	
	968	3号住居	G-9	甕	脚台	橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	ナデ・指頭ナデ	ケズリ・指頭ナデ	
	969	3号住居	G-9	甕	脚台	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ・指頭ナデ	
	970	3号住居	G-9	甕	脚台	明黄褐	黄褐	○	○	○		良	ナデ・指頭ナデ	ナデ・指頭ナデ	
	971	3号住居	G-9	甕	脚台	橙	オリーブ黒	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
第132図	972	3号住居	G-9	甕	脚台	橙	暗灰黄	○	○			良	ナデ	ナデ	
	973	3号住居	G-9	甕	胴部~底部	橙・黒褐	橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ・指頭ナデ	
	974	3号住居	G-9	甕	底部	橙	橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	975	3号住居	G-9	手づくね土器	胴部~底部	橙	橙	○		○		良	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	
	976	3号住居	G-9	壷	胴部	浅黄	明黄褐	○	○	○		良	ミガキ・ナデ	ケズリ・ナデ	
	977	3号住居	G-9	甕	口縁部	橙	明黄褐	○	○			良	粗なハケ	ナデ	
第133図	978	4号住居	G-8	甕	口縁部	橙	浅黄橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
	979	4号住居	G-8	甕	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
	980	4号住居	G-8	甕	口縁部~胴部	橙	橙	○	○	○	砂粒	良	ハケ	ヘラケズリ後ナデ	
	981	4号住居	G-8	甕	口縁部~胴部	明黄褐	にぶい黄橙	○	○	○	砂粒	良	ハケ	ナデ	
	982	4号住居	G-8	甕	脚台	橙	橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	983	4号住居	G-8	甕	脚台	にぶい黄	にぶい黄橙	○				良	ハケ・ナデ	ハケ・指頭ナデ	
第134図	984	5号住居	F･G-9	甕	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
	985	5号住居	F･G-9	甕	口縁部	橙	明赤褐	○	○	○		良	ハケ	ナデ	
	986	5号住居	F･G-9	甕	口縁部	にぶい橙	にぶい黄褐	○		○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
	987	5号住居	F･G-9	甕	口縁部	黄橙	橙	○				良	ハケ	ハケ・ナデ	
	988	5号住居	F･G-9	甕	口縁部~胴部	明赤褐	橙	○		○		良	ハケ	ハケ・ナデ	
	989	5号住居	F･G-9	甕	口縁部~底部	橙	明赤褐	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ナデ	
第135図	990	5号住居	F･G-9	甕	口縁部~胴部	明黄褐	明黄褐	○	○	○		良	ハケ・指頭ナデ	ナデ・指頭ナデ	
	991	5号住居	F･G-9	甕	脚台	明黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	ハケ後ナデ	ナデ	
	992	5号住居	F･G-9	高坏	裾部	にぶい黄橙	浅黄橙	○				良	ナデ・ケズリ	ハケ・ナデ	
	993	5号住居	F･G-9	鉢？	底部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	○		良	ハケ・指頭ナデ	ナデ・指頭ナデ	

第24表　古墳時代土器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	層位·遺構	出土区	器種	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第137図	994	6号住居	F-11	甕	口縁部	黄灰	黄褐	○	○			良	ハケ・ナデ	ナデ	
	995	6号住居	F-11	甕	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	板ナデ・ナデ	ナデ	
	996	6号住居	F-11	甕	口縁部	橙	にぶい黄褐		○	○		良	指頭ナデ	ハケ・指頭ナデ	
	997	6号住居	F-11	甕	口縁部~胴部	橙	にぶい赤褐	○	○	○		良	ハケ・ケズリ	ハケ・ナデ	
	998	6号住居	F-11	甕	脚台	明赤褐	橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	999	6号住居	F-11	高坏	裾部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	ミガキ	ナデ	
	1000	6号住居	F-11	高坏	裾部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				良	丁寧なケズリ・ナデ	ハケ・ナデ	
第138図	1001	7号住居	G-11	甕	口縁部	橙	明褐	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
	1002	7号住居	G-11	甕	口縁部	橙	にぶい褐	○		○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
	1003	7号住居	G-11	甕	口縁部~胴部	黄褐	明褐	○	○			良	ヘラケズリ・ナデ	ケズリ後ナデ	
	1004	7号住居	G-11	甕	脚台	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ・指頭ナデ	
第139図	1005	8号住居	G-11	甕	口縁部~底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	
	1006	8号住居	G-11	甕	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	粗なハケ	粗なハケ・ナデ	
	1007	8号住居	G-11	甕	脚台	褐灰	褐灰	○	○	○		良	ナデ・指頭ナデ	ナデ・指頭ナデ	
	1008	8号住居	G-11	甕	脚台	灰黄褐	にぶい橙	○	○	○		良	ハケ後ナデ	ナデ・指頭ナデ	
	1009	8号住居	G-11	甕	脚台	にぶい橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	1010	8号住居	G-11	甕	脚台	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	煤付着
	1011	8号住居	G-11	甕	胴部~脚台	にぶい黄橙	橙	○	○			良	ハケ・指頭ナデ	ハケ・指頭ナデ	
第140図	1012	8号住居	G-11	甕	脚台	褐灰	褐灰	○	○	○		良	ナデ・指頭ナデ	ナデ・指頭ナデ	
	1013	8号住居	G-11	鉢	底部	褐灰	褐灰	○	○	○		良	ナデ・指頭痕	板ナデ・ナデ	
	1014	8号住居	G-11	台付鉢	口縁部~胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		良	ケズリ・ナデ	ナデ	
	1015	8号住居	G-11	壷	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		良	粗なケズリ・ナデ	ナデ	
第143図	1016	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~胴部	明黄褐	橙	○	○	○		良	ハケ	ハケ	
	1017	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	ヘラケズリ・ハケ・ナデ	ヘラケズリ	
	1018	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~胴部	明赤褐	赤褐	○	○	○		良	粗なハケ	粗なハケ・ナデ	
	1019	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~胴部	明赤褐	橙	○	○			良	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	
	1020	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~胴部	橙	明赤褐	○	○	○		良	ハケ・ナデ	粗なハケ後ナデ	
	1021	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~胴部	橙	橙	○	○			良	ハケ	ハケ後ナデ	
	1022	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~胴部	橙	橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ケズリ・ハケ・ナデ	
	1023	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~胴部	明黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ・指頭ナデ	
第144図	1024	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~胴部	黒褐	明赤褐	○	○			良	ハケ後ナデ	ハケ	
	1025	9号住居	G·H-11	甕	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	ハケ・指頭ナデ	ハケ・指頭ナデ	
	1026	9号住居	G·H-11	鉢	口縁部~胴部	橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	ハケ・ケズリ	ナデ	
	1027	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~胴部	橙	橙	○	○	○		良	ケズリ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ	突帯あり
	1028	9号住居	G·H-11	甕	胴部~底部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○		良	ハケ	ハケ・指頭ナデ	煤付着
	1029	9号住居	G·H-11	鉢or甕	口縁部~胴部	橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	
	1030	9号住居	G·H-11	甕	胴部~底部	橙	橙	○	○	○		良	粗なハケ	ハケ後ナデ	
	1031	9号住居	G·H-11	甕	胴部~脚台	にぶい橙	にぶい橙	○	○			良	ナデ・指頭痕	指頭痕	
第145図	1032	9号住居	G·H-11	甕	脚台	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○			良	ナデ	ナデ	
	1033	9号住居	G·H-11	甕	脚台	にぶい橙	明赤褐	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	
	1034	9号住居	G·H-11	甕	脚台	にぶい黄橙	橙	○	○			良	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	
	1035	9号住居	G·H-11	甕	脚台	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	ハケ	ナデ・指頭痕	
	1036	9号住居	G·H-11	甕	脚台	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	
	1037	9号住居	G·H-11	甕	脚台	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	
	1038	9号住居	G·H-11	甕	脚台	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	
	1039	9号住居	G·H-11	鉢	胴部~底部	橙	橙	○	○			良	粗なハケ・ナデ	ハケ・指頭ナデ	
	1040	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~底部	明赤褐	橙	○	○			良	タタキ・指頭痕	ケズリ・指頭痕	
	1041	9号住居	G·H-11	甕	口縁部~胴部	にぶい橙	黒褐	○	○			良	粗なハケ・ナデ	ハケ・ナデ	
	1042	9号住居	G·H-11	甕	胴部	橙	橙	○	○	○		良	タタキ後ナデ	ナデ	
	1043	9号住居	G·H-11	壷	口縁部~胴部	明黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	ハケ	指頭ナデ	
	1044	9号住居	G·H-11	壷	胴部	橙	橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
第146図	1045	9号住居	G·H-11	壷	胴部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	やや粗なハケ	やや粗なハケ	
	1046	9号住居	G·H-11	手づくね土器	口縁部~底部	橙	橙	○	○			良	指頭痕・指頭ナデ	指頭ナデ	
	1047	9号住居	G·H-11	鉢	底部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○				良	指頭痕	指頭痕	

第25表　古墳時代土器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	層位·遺構	出土区	器種	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第147図	1048	10号住居	G-11	甕	口縁部~胴部	明黄褐	橙	○	○			良	ケズリ・ハケ・ナデ	粗なハケ・ナデ	
	1049	10号住居	G-11	甕	口縁部~胴部	橙	橙	○				良	ハケ	ハケ・ナデ	
	1050	10号住居	G-11	甕	口縁部~胴部	明黄褐	橙	○	○	○		良	ハケ	ハケ後指頭ナデ	
	1051	10号住居	G-11	甕	口縁部~胴部	橙	にぶい黄橙	○	○			良	ハケ	ハケ・ナデ・指頭痕	
	1052	10号住居	G-11	甕	口縁部	灰黄褐	橙	○	○			良	ハケ	ナデ	
第148図	1053	10号住居	G-11	甕	口縁部	にぶい黄褐	黄褐	○	○			良	ハケ	粗なハケ	
	1054	10号住居	G-11	甕	口縁部~胴部	明赤褐	橙	○				良	粗なハケ・ナデ	粗なハケ・ナデ	
	1055	10号住居	G-11	甕	口縁部	橙	橙	○				良	ヘラ・ナデ	ハケ	
	1056	10号住居	G-11	甕	口縁部	浅黄	明黄褐	○	○			良	ナデ	ヘラケズリ・ナデ	
	1057	10号住居	G-11	甕	口縁部~胴部	暗褐	橙	○	○			良	ハケ・ナデ	粗なハケ・ナデ	
	1058	10号住居	G-11	甕	脚台	明黄褐	橙	○	○			良	ハケ・ナデ	指頭痕	
	1059	10号住居	G-11	甕	胴部	明黄褐	橙	○	○			良	タタキ	ナデ	あて具痕有り
	1060	10号住居	G-11	甕	胴部	明黄褐	橙	○	○			良	タタキ	ナデ	
	1061	10号住居	G-11	甕	胴部	黄橙	橙	○				良	タタキ	ナデ	
	1062	10号住居	G-11	甕	胴部	明黄褐	橙	○				良	タタキ	ナデ	
	1063	10号住居	G-11	甕	胴部	明黄褐	黒褐	○	○			良	タタキ	ナデ	あて具痕有り
	1064	10号住居	G-11	甕	胴部	明褐	橙	○	○	○		良	タタキ	ナデ	
第149図	1065	10号住居	G-11	甕	胴部	黄橙	橙	○				良	タタキ	ナデ	
	1066	10号住居	G-11	甕	胴部	橙	橙	○				良	タタキ	ナデ	
	1067	10号住居	G-11	甕	胴部	明黄褐	橙	○	○	○		良	タタキ	ナデ	
	1068	10号住居	G-11	甕	胴部	黒褐	橙	○				良	タタキ	ナデ	
	1069	10号住居	G-11	甕	胴部	明黄褐	黄橙	○	○			良	タタキ	ナデ	
	1070	10号住居	G-11	甕	胴部	褐	橙	○				良	タタキ	ナデ	
	1071	10号住居	G-11	甕	胴部	明赤褐	橙	○				良	タタキ・ナデ	ナデ	
	1072	10号住居	G-11	甕	胴部	橙	橙	○	○	○		良	タタキ後ナデ	ケズリ後ナデ	
第150図	1073	10号住居	G-11	甕	胴部	明黄褐	黄橙	○	○	○		良	タタキ・ナデ	ナデ	
	1074	10号住居	G-11	壷	口縁部~胴部	橙	橙	○	○			良	粗なハケ・ナデ	粗なハケ・ナデ	
	1075	10号住居	G-11	壷	口縁部~肩部	橙	明黄褐	○	○			良	ハケ	指頭ナデ	
	1076	10号住居	G-11	壷	胴部~底部	浅黄	にぶい黄褐	○	○	○		良	ケズリ・ハケ・ナデ	ハケ・粗なハケ	
第153図	1077	Ⅲa	F·G-10	甕	口縁部~底部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○			良	ケズリ後ナデ	ハケ・ナデ	
	1078	2号住居	H-8	甕	口縁部~底部	明黄褐	橙					良	ナデ・ケズリ・ハケ	ハケ・ナデ	
	1079	Ⅲa	F·G-10	甕	頸部~底部	橙	黄橙	○	○			良	ハケ・ケズリ	粗なハケ・ナデ・指頭痕	
	1080	Ⅲa	F-10	坩	底部	明黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	ナデ	ナデ	
第154図	1081	Ⅲa	F-11	甕	口縁部	明黄褐	橙	○				良	ハケ後ナデ	ナデ	
	1082	Ⅲa	G-9	甕	口縁部~胴部	明赤褐	橙	○	○	○		良	ハケ・ケズリ	ナデ	
	1083	Ⅲa	−	甕	口縁部~胴部	明黄褐	橙	○				良	ハケ後ナデ	ナデ	
	1084	Ⅲa	F-11	甕	口縁部	褐	橙	○	○			良	ハケ	ケズリ・ナデ	
	1085	Ⅲa	I-8	甕	口縁部~胴部	橙	明赤褐	○				良	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	
	1086	Ⅱ	G-10	甕	口縁部~胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	
	1087	Ⅲa	F·G-10	甕	口縁部~胴部	暗オリーブ褐	黄褐	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ	
第155図	1088	Ⅲa	F-11	甕	脚台	橙	橙	○	○			良	ハケ・ナデ	ナデ	
	1089	Ⅲa	G-8	甕	脚台	橙	明黄褐	○	○			良	ハケ	指頭痕・ナデ	
	1090	Ⅲa	G-13	甕	脚台	淡黄	橙	○	○			良	ハケ	指頭ナデ	
	1091	Ⅲa	G-8	甕	脚台	にぶい黄橙	橙	○	○			良	ナデ	ナデ	
	1092	Ⅲa	F-14	甕	脚台	橙	黄橙	○	○	○		良	ナデ	ハケ	
	1093	Ⅲa	G-9	甕	脚台	黄褐	暗灰黄	○	○	○		良	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	
	1094	Ⅲa	G-11	壷	口縁部	橙	明黄褐	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
	1095	Ⅲa	F·G-10	鉢	口縁部~胴部	明黄褐	橙	○	○			良	粗なハケ	ハケ・ナデ	
	1096	Ⅲa	G-8	手づくね土器	完形	明黄褐	にぶい黄橙	○				良	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	
	1097	Ⅲa	H-9	手づくね土器	尖底	にぶい黄橙	橙	○	○			良	指頭痕	指頭痕	
	1098	Ⅲa	G-9	坩	底部	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○			良	ナデ	ナデ	

第26表　古代土師器・須恵器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	層位・遺構	出土区	種類	器種	部位	色調	胎土	口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整		備考
												外面・底部	内面	
第159図	1099	竪穴	L-32	土師器	甕	完形	橙	精製	25.0	－	20.0	横ナデ	ケズリ	底面に煤付着
第160図	1100	円形周溝	G-10	土師器	Ⅲ	完形	浅黄橙	精製	8.8	4.5	1.6	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1101	円形周溝	G-10	土師器	Ⅲ	完形	浅黄橙	精製	9.0	4.6	2.0	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1102	円形周溝	G-10	土師器	坏	完形	浅黄橙	精製	13.6	5.2	4.1	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	高台付
	1103	円形周溝	G-10	土師器	坏	完形	浅黄橙	精製	13.3	5.8	4.0	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
第162図	1106	土坑1	F-11	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	7.0	－	横ナデ	横ナデ	
	1107	土坑1	F-11	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	5.9	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	充実高台
第165図	1111	土坑3	I-25	土師器	坏	口縁部～底部	オリーブ黒	精製	10.0	－	2.5	ミガキ	ミガキ	両黒
第166図	1112	土坑4	J-25・26	土師器	埦	底部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	横ナデ	ミガキ	内黒
第170図	1123	－	G-12	土師器	甕	完形	にぶい橙	精製	28.6	－	19.5	ハケ後ナデ	粗なケズリ	底面に煤付着
第171図	1124	Ⅲ	G-10	土師器	甕	口縁部	明赤褐	精製	－	－	－	ナデ	ケズリ・ナデ	
	1125	Ⅲa	F-9	土師器	甕	口縁部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	ナデ	ケズリ・ナデ	
	1126	Ⅰ	F-10	土師器	甕	口縁部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	
	1127	－	G-10	土師器	甕	口縁部	にぶい褐	精製	－	－	－	ナデ	ケズリ・ナデ	
	1128	Ⅰ	E-12	土師器	甕	口縁部	黒	精製	30.4	－	－	ナデ	ケズリ	
	1129	Ⅲa	G-11	土師器	甕	口縁部	浅黄橙	精製	24.8	－	－	横ナデ	ケズリ・横ナデ	
	1130	Ⅱ	F-11	土師器	甕	口縁部～体部	にぶい赤褐	精製	20.0	－	－	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	
	1131	Ⅰ	E-14	土師器	甕	口縁部	にぶい褐	精製	29.8	－	－	ナデ	ケズリ・ナデ	
	1132	Ⅱ	G-10	土師器	甕	口縁部～体部	明赤褐	精製	17.7	－	－	ナデ・指頭痕	ケズリ・指頭痕・ナデ	
	1133	Ⅲa	G-11	土師器	甕	口縁部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	ハケ・ナデ	ハケ・ケズリ	
	1134	Ⅲ	G-10	土師器	甕	口縁部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1135	7号住居	G-11	土師器	甕	口縁部	にぶい橙	精製	－	－	－	横ナデ	ハケ・横ナデ	
	1136	表採	G-10	土師器	甕	口縁部	明黄褐	精製	－	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1137	Ⅲa	F-11	土師器	甕	頸部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	ハケ後ナデ	ケズリ・ナデ	
	1138	Ⅰ	H-7	土師器	甕	口縁部	にぶい黄橙	精製	29.6	－	－	ナデ	ナデ	
	1139	Ⅲa	G-11	土師器	甕	口縁部	にぶい黄橙	精製	29.3	－	－	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	
第172図	1140	－	G-12	土師器	甕	口縁部～胴部	橙	精製	34.0	－	－	ハケ後ナデ	ケズリ・ナデ	
	1141	Ⅲa	－	須恵器	甕	口縁部～胴部	明黄褐	精緻	22.8	－	－	タタキ後ナデ	ヘラケズリ・あて具痕	
第173図	1143	Ⅰ	E-13	土師器	坏	完形	浅黄橙	精製	13.0	8.2	4.3	横ナデ	横ナデ	
	1144	Ⅱ	G-10	土師器	坏	体部～底部	にぶい黄橙	精製	－	5.4	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1145	－	G-10	土師器	坏	口縁部～底部	浅黄橙	精製	11.1	3.6	4.3	横ナデ・ヘラ切り	横ナデ	墨書
	1146	Ⅲa	G-12	土師器	坏	底部	浅黄橙	精製	－	7.2	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1147	Ⅲa	G-11	土師器	坏	口縁部～底部	浅黄橙	精製	14.0	7.2	4.1	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1148	Ⅲa	F-11	土師器	坏	口縁部～底部	浅黄橙	精製	14.6	7.4	4.2	横ナデ	横ナデ	
	1149	Ⅲa	G-11	土師器	坏	体部～底部	淡黄	精製	－	6.6	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1150	Ⅲa	F-9	土師器	坏	体部～底部	浅黄橙	精製	－	7.8	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1151	Ⅲa	F-11	土師器	坏	底部	浅黄橙	精製	－	5.7	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1152	－	7T	土師器	坏	体部～底部	浅黄橙	精製	－	5.6	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	充実高台
	1153	Ⅲa	F-10	土師器	坏	底部	にぶい黄橙	精製	－	5.7	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1154	Ⅰ	D-14	土師器	坏？	底部	浅黄橙	精製	－	6.6	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	

第27表　古代土師器・須恵器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	層位・遺構	出土区	種類	器種	部位	色調	胎土	口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整		備考
												外面・底部	内面	
第173図	1155	－	G-10	土師器	坏	体部～底部	にぶい橙	精製	－	7.4	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1156	Ⅲa	F-12	土師器	坏	底部	にぶい黄橙	精製	－	7.2	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1157	－	G-10	土師器	坏	口縁部～底部	浅黄橙	精製	13.2	6.4	6.1	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	充実高台
	1158	Ⅲa	H-11	土師器	坏	底部	浅黄橙	精製	－	5.6	－	横ナデ	横ナデ	充実高台
	1159	Ⅱ	G-10	土師器	坏	底部	にぶい黄橙	精製	－	5.7	－	横ナデ・ヘラ切り	横ナデ	充実高台
	1160	Ⅰ	H-8	土師器	坏	底部	浅黄橙	精製	－	5.6	－	横ナデ	横ナデ	充実高台
	1161	表採	H-10	土師器	坏	底部	にぶい黄橙	精製	－	5.4	－	横ナデ	横ナデ	充実高台
	1162	Ⅰ	I-12	土師器	坏	体部～底部	浅黄橙	精製	－	5.6	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1163	Ⅲa	F-10	土師器	坏	体部～底部	浅黄橙	精製	－	5.9	－	横ナデ	横ナデ	充実高台
第174図	1164	Ⅱ	G-10	土師器	埦	完形	橙	精製	13.2	7.5	7.2	横ナデ	横ナデ	
	1165	Ⅲa	F-11	土師器	埦	口縁部～体部	浅黄橙	精製	17.6	－	－	横ナデ	横ナデ	墨書
	1166	Ⅰ	G-10	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	6.8	－	横ナデ	横ナデ	
	1167	Ⅱ	F-11	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	8.0	－	横ナデ	磨耗	外面体部に煤付着
	1168	－	G-10	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	6.6	－	横ナデ	横ナデ	
	1169	Ⅰ	D-13	土師器	埦	体部～底部	浅黄橙	精製	－	6.5	－	横ナデ	横ナデ	
	1170	Ⅲ	G-10	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	7.0	－	横ナデ	横ナデ	
	1171	Ⅱ	F-11	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	7.2	－	横ナデ	横ナデ	
	1172	－	G-10	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	8.4	－	横ナデ	横ナデ	
	1173	Ⅰ	D-13	土師器	皿	底部	にぶい黄橙	精製	－	4.8	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1174	Ⅲ	G-10	土師器	皿	底部	にぶい黄橙	精製	－	5.0	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1175	Ⅲa	G-10	土師器	皿	口縁部～底部	浅黄橙	精製	－	－	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1176	Ⅲa	F-10	土師器	耳皿	口縁部～底部	灰白	精製	9.0	4.4	3.0	横ナデ・ナデ	横ナデ・指頭痕	
	1177	表採	G-10	土師器	皿	口縁部～底部	浅黄橙	精製	9.6	5.5	1.9	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1178	Ⅲa	G-10	土師器	皿	口縁部～底部	にぶい黄橙	精製	9.0	4.4	1.3	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1179	－	－	土師器	皿	完形	にぶい黄橙	精製	9.2	4.8	1.6	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
第175図	1180	Ⅲa	F-11	土師器	埦	体部～底部	浅黄橙	精製	－	7.5	－	横ナデ	ヘラミガキ	墨書・内黒
	1181	Ⅱ	F-11	土師器	埦	体部～底部	浅黄橙	精製	－	－	－	横ナデ	横ナデ	内黒
	1182	Ⅲa	F-11	土師器	埦	口縁部～体部	浅黄橙	精製	13.9	－	－	横ナデ	ミガキ	内黒
	1183	Ⅲa	H-25	土師器	埦	口縁部～底部	淡黄	精製	16.6	6.8	5.7	ミガキ	ミガキ	両黒
	1184	Ⅱ	F-11	土師器	埦	口縁部～体部	浅黄橙	精製	17.3	－	－	横ナデ・ミガキ	横ナデ・ミガキ	内黒
	1185	Ⅲa	G-12	土師器	埦	体部～底部	浅黄橙	精製	－	10.8	－	ミガキ後ナデ	ヘラミガキ	内黒
	1186	Ⅲa	F-11	土師器	埦	体部～底部	浅黄橙	精製	－	6.3	－	横ナデ	ヘラミガキ	内黒
	1187	Ⅰ	G-10	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	9.7	－	横ナデ	ミガキ	内黒
	1188	表採	G-10	土師器	埦	底部	橙	精製	－	6.8	－	横ナデ	ミガキ	内黒
	1189	Ⅰ	G-10	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	7.8	－	横ナデ	ヘラミガキ	内黒
	1190	Ⅲa	H-11	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	6.8	－	横ナデ	ヘラミガキ	内黒
	1191	Ⅱ	G-11	土師器	埦	底部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	横ナデ	ヘラミガキ	内黒
	1192	Ⅲa	F-11	土師器	埦	底部	にぶい黄橙	精製	－	8.2	－	横ナデ	ヘラミガキ	内黒
	1193	Ⅲa	F-10	土師器	埦	底部	灰白	精製	－	6.0	－	横ナデ	ヘラミガキ	内黒

第28表　古代土師器・須恵器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	層位・遺構	出土区	種類	器種	部位	色調	胎土	口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整		備考
												外面・底部	内面	
第175図	1194	Ⅲa	F-11	土師器	皿	胴部～底部	黒褐	精製	－	7.8	－	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	両黒
	1195	Ⅰ	F-10	土師器	皿	底部	浅黄	精製	－	6.8	－	ミガキ・横ナデ	ミガキ	内黒
	1196	Ⅲa	G-12	土師器	坏	底部	にぶい黄橙	精製	－	6.8	－	横ナデ・回転ヘラ切り	ミガキ	充実高台・内黒
第176図	1197	Ⅰ	G-10	土師器	埦	体部～底部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	横ナデ	横ナデ	内朱
	1198	Ⅲa	F-11	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	7.1	－	横ナデ	横ナデ	内朱
	1199	Ⅲa	F-11	土師器	埦	底部	浅黄橙	精製	－	7.1	－	横ナデ	横ナデ	内朱
	1200	表採	D-13	土師器	埦	体部～底部	浅黄橙	精製	－	－	－	横ナデ	横ナデ	内朱
	1201	Ⅲa	G-11	土師器	埦	体部～底部	浅黄橙	精製	－	7.0	－	横ナデ	横ナデ	外朱
	1202	Ⅲ	G-10	土師器	鉢	胴部～底部	浅黄橙	精製	－	16.8	－	横ナデ	横ナデ	外朱
	1203	Ⅰ	G-8	土師器	紡錘車	完形	浅黄橙	精製	－	－	－	ナデ	ナデ	外径5.5cm 内径0.7cm 厚さ0.8cm
	1204	Ⅲa	F-9	土師器	紡錘車	－	にぶい黄橙	精製	－	－	－	ナデ	ナデ	厚さ0.9cm
第177図	1205	P3	F-12	須恵器	蓋	天井部～口縁部	灰白	精緻	19.6	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1206	Ⅰ	G-10	須恵器	蓋	天井部	灰	精緻	－	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1207	－	C-13	須恵器	蓋	天井部～口縁部	灰	精緻	－	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1208	－	－	須恵器	蓋	完形	灰白	精緻	17.6	－	4.9	横ナデ 指頭痕 指頭ナデ	横ナデ 指頭ナデ	
	1209	Ⅰ	G-13	須恵器	蓋	天井部～口縁部	灰白	精緻	15.6	－	－	横ナデ	ナデ	
	1210	－	－	須恵器	蓋	完形	灰白	精緻	19.0	－	4.4	横ナデ	ナデ	
	1211	Ⅲa	G-11	須恵器	蓋	天井部	灰	精緻	－	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1212	Ⅰ	G-10	須恵器	皿	口縁部～底部	灰	精緻	13.8	11.2	1.5	横ナデ	横ナデ・ナデ	
	1213	溝	D-14	須恵器	坏	底部	灰	精緻	－	7.4	－	横ナデ	横ナデ・ナデ	
	1214	－	7T	須恵器	坏	底部	灰	精緻	－	8.4	－	横ナデ	横ナデ	高台付
	1215	Ⅰ	F-11	須恵器	坏	底部	淡黄	精緻	－	10.2	－	横ナデ	横ナデ	高台付
	1216	カクラン	F-10	須恵器	坏	底部	灰白	精緻	－	10.4	－	横ナデ	横ナデ	
	1217	表採	G-10	須恵器	坏	体部～底部	灰	精緻	－	11.2	－	横ナデ	横ナデ・指頭ナデ	高台付
	1218	表採	G-10	須恵器	坏	底部	灰	精緻	－	11.8	－	横ナデ	横ナデ	高台付
	1219	－	－	須恵器	坏	胴部～底部	灰	精緻	－	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1220	Ⅰ	G-10	須恵器	坏	体部～底部	灰	精緻	－	7.0	－	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	
	1221	表採	G-10	須恵器	坏	口縁部～体部	灰白	精緻	13.4	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1222	Ⅰ	E-14	須恵器	坏	口縁部～体部	灰白	精緻	13.4	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1223	Ⅰ	G-10	須恵器	坏	体部	灰	精緻	－	－	－	横ナデ	横ナデ・ナデ	
	1224	Ⅲa	F-10	須恵器	坏	高台部	灰	精緻	－	7.6	－	横ナデ	横ナデ	高台付
	1225	Ⅲa	G-12	須恵器	甕	口縁部	灰	精緻	19.8	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1226	Ⅲa	F-11	須恵器	甕	口縁部	黒	精緻	23.0	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1227	Ⅲa	G-10・11	須恵器	甕	口縁部	灰	精緻	18.4	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1228	表採	G-10	須恵器	甕	口縁部	黒褐	精緻	25.0	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1229	Ⅰ	F-14	須恵器	甕	肩部	灰白	精緻	－	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1230	Ⅰ	G-8	須恵器	甕	肩部	灰	精緻	－	－	－	平行タタキ	同心円・平行タタキ	
	1231	Ⅰ	F-10	須恵器	甕	肩部	にぶい黄褐	精緻	－	－	－	平行タタキ	同心円タタキ	
	1232	表採	G-10	須恵器	甕	肩部	浅黄	精緻	－	－	－	平行タタキ	同心円タタキ	

第29表　古代土師器・須恵器観察表(4)

挿図番号	遺物番号	層位・遺構	出土区	種類	器種	部位	色調	胎土	口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整		備考
												外面・底部	内面	
第178図	1233	表採	−	須恵器	甕	胴部	にぶい褐	精緻	−	−	−	平行タタキ	同心円タタキ	
	1234	表採	G-10	須恵器	甕	胴部	灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	同心円タタキ	
	1235	Ⅰ	D-12	須恵器	甕	胴部	灰	精緻	−	−	−	平行タタキ	同心円タタキ	
	1236	Ⅰ	G-10	須恵器	甕	胴部	灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	同心円タタキ	
	1237	Ⅰ	G-13	須恵器	甕	肩部	黒褐	精緻	−	−	−	格子目タタキ	同心円タタキ	
	1238	Ⅲa	G-11	須恵器	甕	胴部	灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	同心円タタキ	
	1239	Ⅲa	F-12	須恵器	甕	肩部	灰オリーブ	精緻	−	−	−	格子目タタキ	同心円タタキ	
	1240	Ⅰ	F-12	須恵器	甕	胴部	褐灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	平行・同心円タタキ	
	1241	表採	G-10	須恵器	甕	胴部	灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	同心円タタキ	
	1242	Ⅰ	G-10	須恵器	甕	胴部	にぶい黄褐	精緻	−	−	−	平行タタキ	平行タタキ	
	1243	Ⅲa	G-11	須恵器	甕	胴部	黄灰	精緻	−	−	−	平行タタキ	平行タタキ	
	1244	Ⅰ	F-12	須恵器	甕	胴部	暗赤灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	平行タタキ	
第179図	1245	Ⅰ	G-10	須恵器	甕	胴部	黒褐	精緻	−	−	−	格子目タタキ	平行タタキ	
	1246	Ⅲa	G-11	須恵器	甕	胴部	オリーブ褐	精緻	−	−	−	平行タタキ	格子目タタキ	
	1247	Ⅱ	F-11	須恵器	甕	胴部	にぶい黄	精緻	−	−	−	平行タタキ	平行タタキ	
	1248	Ⅲa	G-12	須恵器	甕	胴部	灰白	精緻	−	−	−	平行タタキ	平行タタキ	
	1249	Ⅲa	G-12	須恵器	甕	胴部	黒褐	精緻	−	−	−	平行タタキ	平行タタキ	
	1250	Ⅲa	H-11	須恵器	甕	胴部	灰オリーブ	精緻	−	−	−	平行タタキ	平行タタキ	
	1251	Ⅰ	D-13	須恵器	壷	口縁部	灰	精緻	12.8	−	−	横ナデ	同心円タタキ・横ナデ	
	1252	Ⅰ	G-14	須恵器	壷	胴部	灰白	精緻	−	−	−	平行タタキ	ナデ・指頭痕	
	1253	Ⅰ	G-10	須恵器	壷	胴部	灰	精緻	−	−	−	横ナデ	横ナデ	

第30表　古代陶磁器観察表

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区	層位遺構	胎土	釉(薬)	露胎	焼成	生産地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第172図	1142	青磁	碗	F-11	Ⅲa	灰 含白色粒	灰黄	無	不	越	−	(7.3)	(2.1)	越州

第31表　古代石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層位・遺構	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第161図	1104	軽石加工品	F-11	土坑１	軽石	59.7	26.7	13.2	5800.00	
第162図	1105	−	F-11	土坑１	安山岩	(20.6)	14.0	9.6	4800.00	
第163図	1108	石皿	E-14	土坑２	安山岩	(27.0)	37.8	13.0	20200.00	
第164図	1109	−	E-14	土坑２	凝灰岩	31.6	24.2	7.8	6000.00	
	1110	−	E-14	土坑２	凝灰岩	27.0	21.7	7.2	4200.00	

第32表　古代土坑観察表

挿図番号	土坑番号	時代	区	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	遺物	備考
第161図	1	古代	F-11	244.0	200.0	50.0	土師器（埦）・(充実高台・坏)	
第163図	2	古代	E-14	150.0	120.0	50.0	石皿	
第165図	3	古代	I-25	94.0	86.0	20.0	両黒土師器（坏）	
第166図	4	古代	J-25･26	200.0	60.0	46.0	内黒土師器・古銭10枚	
第168図	5	古代	J-25	70.0	60.0	8.0	−	

第33表　中世土師器・須恵器・瓦質土器等観察表(1)

挿図番号	遺物番号	層位・遺構	出土区	種類	器種	部位	色調	胎土	口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整		備考
												外面・底部	内面	
第189図	1266	曲輪a	I-31	土師質	擂鉢	口縁部	浅黄	精製	－	－	－	ナデ・指頭痕	ナデ	
第191図	1274	曲輪b	H-31	須恵器	甕	胴部	灰	精緻	－	－	－	ナデ・指頭痕	ハケ	樺万丈系
第200図	1282	大型円形土坑２	H-21	土師器	皿	口縁部～底部	橙	精製	12.0	7.4	2.3	横ナデ・糸切り	横ナデ	内面と外面に煤付着
	1283	大型円形土坑２	H-21	土師器	皿	口縁部～底部	橙	精製	12.4	7.2	2.4	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1284	大型円形土坑２	H-21	土師質	捏鉢	口縁部	浅黄橙	精製	27.6	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1285	大型円形土坑２	H-21	須恵質	擂鉢	底部	黄灰	精緻	－	23.0	－	ヘラナデ	ケズリ・ハケ	
	1286	大型円形土坑２	H-21	土製品	鞴の羽口	－	褐灰	粗(砂粒混)	－	－	－	ナデ	ナデ	
	1290	大型円形土坑２	H-21	瓦質土器	擂鉢	底部	黒褐	精製	－	－	－	磨耗	磨耗	
第201図	1292	大型円形土坑２	H-21	瓦質土器	茶釜	口縁部～胴部	灰	精製	16.2	－	－	ナデ	ナデ・指頭痕	外面鍔下位下に煤付着・最大径32.0cm
	1293	大型円形土坑２	H-21	瓦質土器	茶釜	口縁部～胴部	にぶい黄橙	精製	16.0	－	－	ナデ	ナデ・指頭痕	外面鍔下位下に煤付着・最大径33.6cm
第202図	1294	大型円形土坑２	H-21	瓦質土器	羽釜	胴部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	ナデ	ハケ・ナデ	外面鍔下位下に煤付着・最大径29.6cm
	1295	大型円形土坑２	H-21	瓦質土器	羽釜	胴部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	ナデ	ナデ	最大径27.5cm
	1296	大型円形土坑２	H-21	瓦質土器	蓋	口縁部	灰	精製	15.0	－	1.2	ナデ	横ナデ	
第205図	1312	竪穴及び土坑群	G-20	土師器	皿	体部～底部	橙	精製	－	8.0	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	底部と内面一部に煤付着
	1313	竪穴及び土坑群	H-20	土師器	皿	底部	黄橙	精製	－	7.6	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	外面に煤付着
	1314	竪穴及び土坑群	H-20	土師器	皿	底部	明赤褐	精製	－	8.4	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1315	竪穴及び土坑群	H-20	土師器	皿	口縁部～底部	にぶい黄橙	精製	12.2	7.2	2.2	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1316	竪穴及び土坑群	G-20	土師器	皿	底部	にぶい黄橙	精製	－	6.8	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	内面と外面に煤付着
	1317	竪穴及び土坑群	H-20	土師器	皿	口縁部～底部	灰黄褐	精製	12.4	8.2	2.8	横ナデ・糸切り後板ナデ	横ナデ	内面と口縁部に煤付着
	1318	竪穴及び土坑群	G-20	土師器	皿	底部	橙	精製	－	6.6	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	内面一部と外面に煤付着
	1319	竪穴及び土坑群	G-20	土師器	坏	底部	にぶい橙	精製	－	9.6	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1320	竪穴及び土坑群	G-20	土師質	擂鉢	胴部	浅黄橙	精製	－	－	－	板ナデ・指頭痕	ナデ	
	1321	竪穴及び土坑群	G-24	須恵質	擂鉢	胴部～底部	灰黄	精緻	－	11.9	－	ナデ・指頭痕	ナデ	
	1323	竪穴及び土坑群	G-20	瓦質土器	茶釜	胴部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	ナデ・指頭痕	ナデ	外面鍔下位下に煤付着
	1324	竪穴及び土坑群	G-19	瓦質土器	不明	脚部	灰	精製	－	－	－	ナデ	ケズリ・横ナデ	
第209図	1350	竪穴及び土坑群	G-20	須恵器	甕	胴部	灰	精緻	－	－	－	格子目タタキ	同心円タタキ	
	1351	竪穴及び土坑群	G-19	須恵器	塊	底部	灰	精緻	－	9.2	－	横ナデ	横ナデ・指頭ナデ	
第220図	1380	竪穴３	I-18	瓦質土器	擂鉢	口縁部	灰	精製	－	－	－	ナデ・指頭痕	ナデ	
	1381	竪穴３	I-18	土師器	皿	口縁部～底部	にぶい橙	精製	8.0	5.6	2.0	横ナデ・糸切り	横ナデ	

第34表　中世土師器・須恵器・瓦質土器等観察表(2)

挿図番号	遺物番号	層位・遺構	出土区	種類	器種	部位	色調	胎土	口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整		備考
												外面・底部	内面	
第225図	1389	1号墓	F-11	土師器	皿	完形	浅黄橙	精製	11.8	7.4	2.6	横ナデ・糸切り	横ナデ	外面に煤付着
第230図	1399	土坑1	I-7	土師質	花鉢?火舎?	底部	橙	精製	−	−	−	ケズリ・ハケ・ミガキ	横ナデ	
第233図	1401	土坑3	F-14	土師質	擂鉢	口縁部	明褐灰	精製	−	−	−	ナデ・指頭痕	ハケ後ナデ	
	1402	土坑3	F-14	瓦質土器	不明	底部	にぶい黄橙	精製	−	27.0	−	ナデ	横ナデ	
第234図	1403	土坑9	I-16	土師器	坏	底部	橙	精製	−	6.0	−	横ナデ・糸切り	横ナデ	
第236図	1404	土坑24	H-18	土師器	坏	底部	橙	精製	−	9.4	−	横ナデ・糸切り	横ナデ	
第239図	1406	土坑48	I-26	土師質	擂鉢	口縁部（注口）	明赤褐	精製	−	−	−	横ナデ・指頭痕	横ナデ・ナデ・指頭痕	
	1407	土坑48	I-26	土師質	擂鉢	口縁部～胴部	浅黄橙	精製	28.6	−	−	横ナデ・指頭痕	ナデ	
第246図	1410	−	F-10	土師器	皿	完形	にぶい黄橙	精製	8.8	6.3	1.4	横ナデ・糸切リ後板ナデ	横ナデ	
	1411	−	F-10	土師器	皿	完形	浅黄橙	精製	9.4	6.6	1.1	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1412	−	F-10	土師器	皿	完形	浅黄橙	精製	8.8	6.6	1.5	横ナデ・糸切リ後板ナデ	横ナデ	
第248図	1413	不明遺構	H-27	土師器	坏	底部	橙	精製	−	6.8	−	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1414	不明遺構	H-27	土師器	坏	体部～底部	にぶい黄橙	精製	−	7.8	−	横ナデ・糸切り	横ナデ	内面一部に煤付着
	1415	不明遺構	H-27	土師器	坏	底部	橙	精製	−	7.0	−	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1416	不明遺構	H-27	土師器	皿	完形	浅黄橙	精製	8.9	7.8	2.2	横ナデ・糸切リ後板ナデ	横ナデ	外面と内面一部に煤付着
	1417	不明遺構	H-27	土師質	擂鉢	口縁部（注口）	浅黄橙	精製	30.3	−	−	横ナデ・指頭痕	ハケ	
	1418	不明遺構	H-27	土師質	捏鉢	口縁部	淡橙	精製	23.4	−	−	ナデ	ハケ	
	1419	不明遺構	H-27	須恵器	擂鉢	口縁部（注口）	灰	精緻	−	−	−	ナデ・指頭痕	ハケ・ナデ	
	1420	不明遺構	H-27	須恵器	甕	胴部	灰白	精緻	−	−	−	格子目タタキ	ハケ	樺万丈系
	1421	不明遺構	H-27	須恵器	甕	胴部	黄灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	ハケ	樺万丈系
	1422	不明遺構	H-27	須恵器	甕	胴部	黄灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	ハケ	樺万丈系
	1423	不明遺構	H-27	須恵器	甕	胴部	黄灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	ハケ	樺万丈系
	1424	不明遺構	H-27	須恵器	甕	胴部	黄灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	ハケ	樺万丈系
	1425	不明遺構	H-27	須恵器	甕	胴部	灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	ハケ	樺万丈系
	1426	不明遺構	H-27	須恵器	甕	胴部	黄灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	ハケ	樺万丈系
	1427	不明遺構	H-27	須恵器	甕	胴部	黄灰	精緻	−	−	−	格子目タタキ	ハケ	樺万丈系
	1428	不明遺構	H-27	須恵器	甕	胴部	黄灰	精緻	−	−	−	ナデ	ハケ	樺万丈系

第35表　中世土師器・須恵器・瓦質土器等観察表(3)

挿図番号	遺物番号	層位・遺構	出土区	種類	器種	部位	色調	胎土	口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整		備考
												外面・底部	内面	
第250図	1441	Ⅲa	G-11	土師器	坏	口縁部～底部	にぶい橙	精製	14.4	9.2	3.7	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1442	－	F-14	土師器	坏	体部～底部	にぶい黄橙	精製	－	9.0	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1443	Ⅰ	G-13	土師器	坏	底部	にぶい黄橙	精製	－	7.0	－	横ナデ・糸切り後板ナデ	横ナデ	内面に煤付着
	1444	－	3T	土師器	坏	底部	浅黄	精製	－	6.6	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	内面と外面に煤付着
	1445	Ⅰ	H-28	土師器	坏	底部	淡黄	精製	－	9.2	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1446	－	H-18	土師器	坏	口縁部～底部	灰白	精製	11.2	9.2	3.2	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1447	－	H-28	土師器	坏	底部	にぶい黄橙	精製	－	7.4	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	両朱
	1448	Ⅰ	G-13	土師器	坏	口縁部～底部	浅黄橙	精製	11.8	9.6	2.2	横ナデ・糸切り	横ナデ	内面に煤付着
	1449	Ⅲa	G-8	土師器	坏	底部	にぶい黄橙	精製	－	8.8	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1450	Ⅰ	8T	土師器	坏	口縁部～底部	橙	精製	11.6	7.8	2.2	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1451	－	G-8	土師器	坏	体部～底部	浅黄橙	精製	－	10.4	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	外朱
	1452	Ⅰ	8T	土師器	坏	底部	浅黄橙	精製	－	7.8	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1453	Ⅲa	G-11	土師器	坏	口縁部～底部	にぶい黄橙	精製	12.6	10.0	3.3	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1454	Ⅰ	J-14	土師器	坏	口縁部～底部	浅黄橙	精製	11.0	7.0	2.5	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1455	－	F-10	土師器	皿	完形	浅黄橙	精製	8.8	6.8	1.3	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1456	Ⅲa	G-11	土師器	皿	口縁部～底部	橙	精製	7.8	5.3	1.3	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1457	－	G-8･9	土師器	皿	口縁部～底部	にぶい橙	精製	7.6	5.4	1.6	横ナデ・糸切り後板ナデ	横ナデ	見込みに煤付着
	1458	Ⅰ	G-13	土師器	皿	完形	橙	精製	7.3	5.2	2.5	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1459	Ⅰ	8T	土師器	皿	口縁部～底部	にぶい黄橙	精製	7.8	5.6	1.9	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1460	Ⅲa	G-9	土師器	皿	口縁部～底部	にぶい黄橙	精製	8.6	6.3	1.5	横ナデ・糸切り	横ナデ	
	1461	Ⅲ	G-10	土師器	皿	口縁部～底部	浅黄橙	精製	9.1	5.8	1.8	横ナデ・糸切り	横ナデ	
第251図	1462	－	G-11	カムイ焼	甕	口縁部	オリーブ黒	精製	－	－	－	横ナデ	横ナデ	
	1463	Ⅲa	F-11	須恵器	甕	胴部	オリーブ黒	精緻	－	－	－	格子目タタキ・指頭痕	タタキ	
	1464	Ⅰ	G-10	須恵器	甕	胴部	灰白	精緻	－	－	－	格子目タタキ	ナデ	
	1465	－	4T	須恵質	擂鉢	口縁部（注口）	灰黄	精緻	－	－	－	ハケ後ナデ	ハケ・ナデ	
	1466	Ⅰ	D-13	須恵質	擂鉢	口縁部～底部	灰白	精緻	33.0	14.6	9.9	ハケ後ナデ・指頭痕	ハケ	
	1467	Ⅰ	H-18	須恵器	擂鉢	底部	灰	精緻	－	－	－	ナデ・指頭痕	ハケ	

第36表　中世土師器・須恵器・瓦質土器等観察表(4)

挿図番号	遺物番号	層位・遺構	出土区	種類	器種	部位	色調	胎土	口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整		備考
												外面・底部	内面	
第252図	1468	I	G-14	土師質	擂鉢	口縁部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	ナデ	ハケ後ナデ	
	1470	表採	G-9	瓦質土器	擂鉢	口縁部	灰黄	精製	32.0	－	－	ナデ	ナデ	
	1471	I	J-28	瓦質土器	擂鉢	口縁部	灰黄	精製	－	－	－	ナデ・指頭痕	ナデ	
	1472	I	H-28	瓦質土器	擂鉢	口縁部	灰白	精製	－	－	－	ナデ・指頭痕	ハケ	
	1473	I	J-20	瓦質土器	擂鉢	胴部	浅黄	精製	－	－	－	ナデ・指頭痕	ナデ	
	1474	I	D-13	瓦質土器	擂鉢	口縁部	黄灰	精製	－	－	－	ケズリ後ナデ・指頭痕	ナデ	
	1475	－	G-13	瓦質土器	擂鉢	口縁部	灰白	精製	－	－	－	ケズリ後ナデ・指頭痕	ナデ	
	1476	表採	－	瓦質土器	擂鉢	底部	浅黄	精製	－	13.0	－	ナデ・指頭痕	ナデ	
第253図	1477	－	G-13	瓦質土器	茶釜	胴部	オリーブ黒	精製	－	－	－	ハケ	ナデ・指頭痕	外面鍔下位下に煤付着・最大径28.4cm
	1478	表採	－	瓦質土器	茶釜	胴部	灰黄	精製	－	－	－	ハケ	ハケ	外面鍔下位下に煤付着
	1479	I	G-14	瓦質土器	茶釜	胴部	灰黄褐	精製	－	－	－	ハケ	ハケ後ナデ	外面鍔下位下に煤付着
	1480	I	J-20	瓦質土器	羽釜	胴部	暗灰黄	精製	－	－	－	ナデ	ハケ・ナデ	外面鍔下位下に煤付着
	1481	I	G-14	瓦質土器	火舎	口縁部～胴部	にぶい黄橙	精製	－	－	－	ナデ・ハケ状のナデ	ナデ・ハケ状のナデ	
	1482	I	G-14	瓦質土器	火舎	口縁部	浅黄	精製	－	－	－	ナデ	ミガキ後ナデ	突帯Ｓ字状沈線
	1483	I	G-14	瓦質土器	火舎	底部	灰	精製	－	－	－	ミガキ後ナデ	ナデ	
	1484	I	G-14	瓦質土器	火舎	口縁部	黄灰	精製	－	－	－	ミガキ後ナデ	ナデ	
	1485	I	G-13	瓦質土器	壷	口縁部	灰	精製	16.6	－	－	ナデ	ヘラミガキ	
第254図	1486	I	G-14	瓦質土器	不明	脚部	オリーブ黒	精製	－	－	－	ミガキ・ナデ	ケズリ	
	1487	I	G-14	瓦質土器	不明	胴部	黄灰	精製	－	－	－	ミガキ後ナデ	ナデ	
	1488	表採	D-13	瓦質土器	不明	不明	黒褐	精製	－	6.5	－	不明	不明	
	1489	－	D-12	土師器	土鍋	口縁部～底部	浅黄橙	精製	28.0	13.6	6.5	横ナデ	横ナデ	中世末
	1490	表採	D-14	土師質	鉢	底部	浅黄橙	精製	－	－	－	横ナデ・糸切り	横ナデ	内面に煤付着
	1491	－	G-10	土製品	鞴の羽口	－	にぶい黄褐	含砂粒	－	－	－	ナデ・指頭痕	ナデ	最大長7.9cm最大幅5.6cm厚さ2.5cm
	1492	曲輪a	H-31	土製品	土錘	完形	浅黄橙	精製	－	－	－	ナデ	ナデ	最大長6.3cm外径4.2cm内径1.6cm
	1493	－	－	陶質	壷	口縁部～胴部	灰白	精製	14.0	－	－	横ナデ	横ナデ	

第37表　中世陶磁器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区	層位・遺構	胎土	釉（薬）	焼成	生産地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第200図	1287	陶器	擂鉢	H-21	大型円形土坑２	茶褐	灰赤	良	備前	－	－	－	
	1288	陶器	擂鉢	H-21	大型円形土坑２	茶褐	灰赤	良	備前	(27.0)	－	－	
	1289	陶器	擂鉢	H-21	大型円形土坑２	茶褐	暗赤褐	良	備前	(27.0)	－	－	
	1291	陶器	甕	H-21	大型円形土坑２	暗灰・含黒色粒	暗赤褐	良	常滑	－	－	－	
第204図	1304	白磁	皿	H-21	大型円形土坑２	淡黄・含白色粒	灰白	良	中国	(10.2)	－	(2.0)	
	1305	青磁	碗	H-21	大型円形土坑２	浅黄橙・含白色粒	浅黄	やや良	龍泉系	－	6.6	(4.8)	
	1306	青磁	碗	H-21	大型円形土坑２	黄灰・含黒色粒	緑灰	良	龍泉系	－	5.4	(2.6)	
	1307	青花	皿	H-21	大型円形土坑２	灰白・含黒・白色粒	明青灰	良	景徳鎮	(9.8)	2.9	2.7	
	1308	陶器	天目碗	H-21	大型円形土坑２	灰・含白色粒	黒褐	良	美濃	－	－	(2.9)	
	1309	陶器	壺	H-21	大型円形土坑２	灰白・含白色粒	灰白	良	瀬戸	－	－	(5.3)	
	1310	青磁	皿	H-21	大型円形土坑２	灰白・含黒・白色粒	灰白	良	朝鮮王朝	(12.0)	(4.6)	3.3	
	1311	青磁	皿	H-21	大型円形土坑２	灰白・含黒・白色粒	灰白	良	朝鮮王朝	(12.0)	－	(3.0)	
第206図	1322	陶器	擂鉢	G-20	空堀及び土坑群	にぶい赤褐	灰黄褐	良	備前	－	－	－	
	1326	青磁	碗	G-20	空堀及び土坑群	灰白・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	－	－	(3.8)	
	1328	青磁	碗	I-22	空堀及び土坑群	灰白	オリーブ灰	良	龍泉系	(12.6)	－	(5.8)	
	1329	青磁	碗	H-20	空堀及び土坑群	灰白	オリーブ灰	良	龍泉系	－	－	(3.9)	
	1330	青磁	碗	G-20	空堀及び土坑群	灰白・含黒色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	－	－	(2.9)	
	1331	青磁	碗	G-20	空堀及び土坑群	灰白・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	(13.0)	－	(4.9)	
	1332	青磁	碗	I-22	空堀及び土坑群	灰白・含黒色粒	明オリーブ灰	良	龍泉系	－	6.0	(3.6)	
	1333	青磁	皿	H-20	空堀及び土坑群	灰白・含黒・白色粒	明オリーブ灰	良	龍泉系	(14.0)	－	(2.7)	
	1334	白磁	碗	G-20	空堀及び土坑群	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	－	－	(4.2)	
	1335	青花	皿	H-20	空堀及び土坑群	浅黄橙・含白・黒色粒	浅黄	やや不	漳州	－	5.7	(2.3)	
	1336	青花	皿	G-20	空堀及び土坑群	灰・含黒色粒	灰オリーブ	良	漳州	(9.8)	(5.1)	(2.4)	
第207図	1337	陶器	甕	G-20	空堀及び土坑群	暗灰・含黒色粒	暗赤褐	良	常滑	－	－	－	
	1338	陶器	甕	G-20	空堀及び土坑群	暗灰・含黒色粒	にぶい赤褐	良	常滑	－	－	－	
	1339	陶器	甕	G-20	空堀及び土坑群	暗灰・含黒色粒	灰黄褐	良	常滑	－	－	－	
	1340	陶器	甕	G-20	空堀及び土坑群	暗灰・含黒色粒	灰褐	良	常滑	－	－	－	
	1341	陶器	甕	G-19	空堀及び土坑群	暗灰・含黒色粒	褐	良	常滑	－	－	－	
	1342	陶器	甕	G-20	空堀及び土坑群	暗灰・含黒色粒	暗赤褐	良	常滑	－	－	－	
	1343	陶器	甕	G-20	空堀及び土坑群	暗灰・含黒色粒	にぶい赤褐	良	常滑	－	－	－	
	1344	陶器	甕	G-19	空堀及び土坑群	暗灰・含黒色粒	赤褐	良	常滑	－	－	－	
第208図	1345	陶器	甕	G-20	空堀及び土坑群	暗灰・含黒色粒	オリーブ黒	良	常滑	－	－	－	
	1346	陶器	甕	G-20	空堀及び土坑群	暗灰・含黒色粒	暗赤褐	良	常滑	－	－	－	
	1347	陶器	甕	G-20	空堀及び土坑群	暗灰・含黒色粒	オリーブ黄	良	常滑	－	－	－	
	1348	陶器	大甕	G-20	空堀及び土坑群	褐灰	無	良	常滑	－	22.0	－	
第209図	1349	陶器	甕	I-21･22	空堀及び土坑群	にぶい黄橙・含白・黒・赤褐色粒	黒	良	中国南部	－	－	(11.7)	
第220図	1382	青磁	碗	I-18	竪穴３	灰白・含黒・白色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	－	－	(3.0)	
第233図	1400	白磁	皿	F-14	土坑３	淡黄	黄灰白	良	中国	11.4	－	－	

第38表　中世陶磁器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区	層位・遺構	胎土	釉（薬）	焼成	生産地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第246図	1408	青磁	碗	F-10	−	灰	灰オリーブ	良	龍泉系	15.8	5.7	6.6	
	1409	青磁	碗	F-10	−	灰	緑灰	良	龍泉系	15.9	5.7	6.7	
第249図	1429	青磁	碗	H-27	不明遺構	灰白・含黒・白色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	(12.0)	−	(4.2)	
	1430	青磁	碗	H-27	不明遺構	灰・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	−	−	(3.2)	
	1432	青磁	碗	H-27	不明遺構	灰白・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	(11.6)	−	(2.6)	
	1433	青磁	碗	H-27	不明遺構	灰白・含黒・白色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	(17.2)	−	(5.0)	
	1434	青磁	碗	H-27	不明遺構	灰白・含黒色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	(11.6)	−	(3.0)	
	1435	青磁	碗	H-27	不明遺構	灰白・含黒・白色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	−	5.2	(4.4)	
	1436	青磁	小型盤	H-27	不明遺構	灰白・含黒色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	(11.6)	−	(2.1)	
	1437	青磁	碗	H-27	不明遺構	灰白・含黒・白色粒	灰白	良	龍泉系	−	5.8	(2.1)	
	1438	青磁	碗	H-27	不明遺構	灰白・含黒・白色粒	明緑灰	良	龍泉系	−	(5.0)	(2.4)	
	1439	白磁	碗	H-27	不明遺構	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	−	−	(2.6)	
	1440	陶器	碗	H-27	不明遺構	灰白・灰黄・微細黒色粒	黒褐	良	美濃	(10.2)	−	(2.9)	
第252図	1469	陶器	擂鉢	J-20	P4	赤褐・含白色粒	赤灰	良	備前	−	(14.0)	−	
第256図	1498	青磁	碗	5T	−	灰・含白色粒	灰	良	朝鮮	(18.2)	5.0	5.9	
	1499	青磁	Ⅲ	D-13	表採	灰白・含黒色粒	灰オリーブ	良	同安系	−	(4.3)	(1.1)	
	1500	青磁	Ⅲ	H-8	Ⅱ	灰白・含白・黒色粒	灰白	良	同安系	−	(5.7)	(0.9)	
	1501	青磁	Ⅲ	H-7	Ⅰ	灰白・微細黒色粒	灰白	良	同安系	−	−	(2.6)	
	1502	青磁	Ⅲ	G-8	−	灰	灰オリーブ	良	同安系	−	(4.5)	(1.3)	
第257図	1503	青磁	碗	G-11	Ⅲa	灰白・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	−	−	(2.7)	
	1504	青磁	碗	G-10	Ⅲa	灰黄	オリーブ灰	良	龍泉系	−	−	(3.5)	
	1505	青磁	碗	F-16	Ⅰ	灰色	灰オリーブ	良	龍泉系	−	−	(3.0)	
	1506	青磁	碗	E-13	Ⅰ	灰白・含黒色・白色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	−	−	(4.5)	
	1507	青磁	碗	F-14	Ⅰ	灰・含白色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	(16.6)	−	(4.2)	
	1508	青磁	碗	F-11	P32	灰白・含黒色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	(14.0)	−	(4.2)	
	1509	青磁	碗	G-13	−	灰白・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	−	−	(3.5)	
	1510	青磁	碗	−	曲輪a	灰白	明オリーブ灰	良	龍泉系	(12.4)	−	(4.7)	
	1511	青磁	碗	E-12	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	−	−	(3.8)	
	1512	青磁	碗	D-13	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	−	−	(2.1)	
	1513	青磁	碗	−	表採	灰白・含黒色粒	明緑灰	良	龍泉系	(13.8)	−	(3.3)	
	1514	青磁	碗	−	表採	灰白・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	(15.0)	−	(5.1)	
	1515	青磁	碗	G-13	Ⅰ	褐・含白色粒	灰白	不	龍泉系	(13.7)	−	(6.6)	
	1516	青磁	碗	8T	Ⅰ	灰白	オリーブ灰	良	龍泉系	(14.2)	−	(3.6)	
	1517	青磁	碗	−	表採	灰黄	オリーブ灰	良	龍泉系	(13.6)	−	(3.4)	
	1518	青磁	碗	F-16	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	(13.6)	−	(4.9)	
第258図	1519	青磁	碗	G-13	Ⅰ	灰・含白色粒	灰白	良	龍泉系	(14.0)	4.7	6.2	
	1520	青磁	碗	J-21	P4	灰黄・含白色粒	明オリーブ灰	良	龍泉系	(13.4)	−	(5.3)	
	1521	青磁	碗	G-13	Ⅰ	灰・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	−	−	(2.8)	

第39表　中世陶磁器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区	層位・遺構	胎土	釉（薬）	焼成	生産地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第258図	1522	青磁	碗	F-12	Ⅰ	灰白・含白色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	－	－	(3.6)	
	1523	青磁	碗	I-18	Ⅰ	灰白・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	(15.8)	－	(4.3)	
	1524	青磁	碗	F-12	Ⅰ	灰白・含黒・白色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	(14.8)	－	(4.3)	
	1525	青磁	碗	F-14	土坑３	灰白・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	－	－	(4.2)	
	1526	青磁	碗	－	曲輪a	灰・含黒・白色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	(13.0)	－	(3.9)	
	1527	青磁	碗	－	表採	灰白・含黒・白色粒	明緑灰	良	龍泉系	－	(6.5)	(2.9)	
	1528	青磁	碗	H-11	Ⅲa	灰白・含黒・白色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	－	(6.4)	(2.6)	
第259図	1529	青磁	碗	G-8	Ⅰ	灰白・含黒・白色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	－	(6.0)	(2.2)	
	1530	青磁	碗	I-21	Ⅰ	灰白・含黒・白色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	－	6.0	(2.4)	
	1531	青磁	碗	D-13	Ｐ１	灰白・含白色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	－	5.3	(2.6)	
	1532	青磁	碗	G-13	－	やや褐色・含白・赤・黒色粒	緑灰	良	龍泉系	－	(5.0)	(3.7)	
	1533	青磁	碗	H-26	－	灰白・含黒・白色粒	灰	良	龍泉系	－	2.7	(1.7)	
	1534	青磁	Ⅲ	－	表採	灰・含黒色粒	緑灰	良	龍泉系	(11.6)	4.9	3.4	
	1535	青磁	Ⅲ	G-13	Ⅰ	灰黄・含黒・白色粒	緑灰	やや不	龍泉系	(13.4)	－	(1.9)	
	1536	青磁	Ⅲ	－	表採	灰白・含黒・白色粒	明オリーブ灰	良	龍泉系	(12.8)	(6.6)	2.8	
	1537	青磁	Ⅲ	G-12	Ⅰ	灰白・含黒・白色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	－	－	(2.3)	
	1538	青磁	Ⅲ	G-12	Ⅲa	灰白・含黒・白色粒	オリーブ灰	やや良	龍泉系	(12.0)	－	(2.0)	
第260図	1539	青磁	Ⅲ	G･F-12	Ⅲ	灰白・含黒・白色粒	オリーブ灰	やや良	龍泉系	(13.0)	－	(1.8)	
	1540	青磁	Ⅲ	G-12	Ⅰ	灰白・含黒・白色粒	オリーブ灰	やや不	龍泉系	(13.0)	－	(15.5)	
	1541	青磁	Ⅲ	G-9	表採	灰白・含黒・白色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	(13.4)	－	(2.5)	
	1542	青磁	Ⅲ	E-13	Ⅰ	浅黄橙・含黒・白色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	－	(4.8)	(1.3)	
	1543	青磁	Ⅲ	－	空堀１	浅黄・含黒色粒	緑灰	良	龍泉系	－	5.4	(2.2)	
	1544	青磁	碗	H-18	Ⅲa	灰白・含黒色粒	緑灰	良	龍泉系	－	5.0	(2.0)	
	1545	青磁	碗	－	表採	灰白・含赤褐色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	－	5.0	(2.2)	
	1546	青磁	碗	G-13	－	浅黄橙・灰白・含白色粒	灰白	やや良	龍泉系	－	6.1	(1.9)	
	1547	青磁	碗	D-14	表採	灰白・含白色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	－	5.5	(1.9)	
	1548	青磁	大型香炉	G-13	Ⅰ	灰白・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	－	－	(3.5)	
	1549	青磁	盤	3T	－	灰白・含黒色粒	オリーブ	良	龍泉系	(16.2)	－	(2.6)	
	1550	青磁	Ⅲ	F-12	Ⅰ	灰白・含黒色粒	オリーブ灰	良	龍泉系	(10.8)	－	(2.1)	
	1551	青磁	Ⅲ	H-19	Ⅲa	灰白・含黒色粒	灰オリーブ	良	龍泉系	(11.6)	－	(2.1)	
第261図	1552	青磁	Ⅲ	G-13	Ⅰ	灰・含黒色粒	灰白	良	中国	(11.3)	(6.1)	(2.9)	
	1553	青磁	Ⅲ	F-12	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰	良	龍泉系	(12.0)	－	(1.9)	
	1554	青磁	Ⅲ	G-13	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰	良	龍泉系	(11.4)	－	(2.8)	
	1555	青磁	Ⅲ	D-13	P5	灰色・含黒色粒	灰	良	龍泉系	－	5.8	(1.7)	
第262図	1556	白磁	碗	G-8	Ⅲa	灰色・含黒色粒	灰白	良	中国	－	－	(3.8)	
	1557	白磁	碗	K-28	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	(16.4)	－	(2.8)	
	1558	白磁	碗	F-17	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	－	－	(2.1)	
	1559	白磁	碗	H-26	－	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	－	－	(3.3)	

第40表　中世陶磁器観察表(4)

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区	層位・遺構	胎土	釉（薬）	焼成	生産地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第262図	1560	白磁	碗	3T	－	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	－	－	(1.6)	
	1561	白磁	碗	7T	－	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	－	－	(2.6)	
	1562	白磁	碗	F-10	Ⅲa	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	(16.4)	－	(3.4)	
	1563	白磁	碗	H-8	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	(16.0)	－	(3.7)	
	1564	白磁	碗	D-13	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	(14.2)	－	(2.7)	
	1565	白磁	碗	G-11	Ⅲ	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	－	－	(3.5)	
	1566	白磁	碗	H-8	Ⅲa	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	(17.2)	－	(3.2)	
	1567	白磁	坏	3T	－	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	(10.6)	－	(2.4)	
	1568	白磁	Ⅲ	－	表採	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	(9.7)	(4.6)	2.1	多角
	1569	白磁	Ⅲ	G-13	Ⅰ	灰白・含褐色粒	灰白	良	中国	(9.3)	(4.3)	(2.1)	多角
	1570	白磁	小碗	D-13	Ⅰ	灰・含黒色粒	灰白	良	中国	－	(5.6)	(2.9)	多角
	1571	白磁	小碗	D-13	－	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	－	－	(2.8)	多角
	1572	白磁	小碗	D-13	－	灰白・含黒色粒	灰白	良	不明	－	－	(1.9)	多角
第263図	1573	白磁	坏	D-12	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰白	良	中国	(11.2)	(5.8)	(3.1)	
	1574	白磁	坏	8T	－	灰白・含黒色粒	灰白	良	景徳鎮	(11.4)	－	(2.0)	
	1575	白磁	坏	9T	－	灰白・含黒色粒	灰白	良	景徳鎮	(13.0)	－	(1.8)	
	1576	白磁	坏	D-12	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰白	良	景徳鎮	－	－	(3.1)	
	1577	白磁	Ⅲ	D-13	Ⅰ	灰白・含黒色粒	灰白	良	不明	－	(4.1)	(1.7)	
	1578	白磁	碗	D-13	Ⅰ	浅黄橙・含黒色粒	灰白	良	不明	－	－	(1.6)	
	1579	白磁	菊花Ⅲ	D-13	Ⅰ	灰白・含微砂粒	灰白	不	志野	(7.2)	(4.0)	(2.1)	
第264図	1580	青花	碗	D-13	－	灰白	灰白	良	景徳鎮	(10.4)	－	(3.6)	
	1581	青花	碗	D-13	－	灰白・含黒色粒	灰白	良	景徳鎮	(11.4)	－	(4.2)	
	1582	青花	碗	D-13	－	灰白	灰白	良	景徳鎮	(11.5)	－	(3.7)	
	1583	青花	碗	D-13	Ⅰ	灰白	灰白	良	景徳鎮	(11.7)	－	(4.5)	
	1584	青花	碗	D-13	－	灰白	灰白	良	景徳鎮	(10.4)	－	(4.9)	
	1585	青花	碗	D-13	－	灰白・含黒色粒	灰白	良	波佐見	(9.5)	(4.7)	(5.1)	
	1586	青花	碗	H-13	Ⅰ	灰白	灰白	良	景徳鎮	(12.8)	－	(3.8)	
	1587	青花	Ⅲ	8T	－	灰白	明青灰	良	不明	－	(6.7)	(3.2)	
	1588	青花	碗	F-12	Ⅰ	灰白	明緑灰	良	景徳鎮	－	(4.0)	(2.8)	
	1589	青花	碗	9T	－	灰白	灰白	良	景徳鎮	－	(2.8)	(1.0)	
第265図	1590	青花	盤	8T	Ⅰ	灰白	灰白	良	景徳鎮	(21.8)	－	(2.6)	
	1591	青花	Ⅲ	3T	－	灰白	灰白	やや良	景徳鎮	(9.8)	(3.1)	2.6	
	1592	青花	Ⅲ	E-13	Ⅰ	灰白	灰白	良	景徳鎮	(13.8)	(7.6)	(2.7)	
第266図	1593	青花	碗	－	表採	褐色・含白色粒	淡黄	良	漳州	(12.3)	(5.1)	(4.7)	
	1594	青花	碗	F-12	Ⅰ	灰白・含白・赤色粒	灰白	良	漳州	－	－	(3.9)	
	1595	染付	碗	8T	－	灰白	灰白	良	漳州	－	－	(2.7)	
	1596	青花	碗	F-12	Ⅰ	灰色・含赤色粒	灰白	良	漳州	(11.5)	－	(2.8)	
	1597	青花	碗	－	表採	灰・含黒色粒	明緑灰	良	漳州	－	(4.5)	(2.4)	
	1598	青花	碗	F-12	Ⅰ	褐	灰白	良	漳州	－	(5.3)	(2.4)	

第41表　中世陶磁器観察表(5)

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区	層位・遺構	胎土	釉（薬）	焼成	生産地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第267図	1600	青花	Ⅲ	F-12	I	灰色	明緑灰	良	漳州	(10.5)	(5.0)	(2.2)	
	1601	青花	Ⅲ	D-12	P6	灰	灰白	良	漳州	(8.9)	(4.7)	(2.8)	
	1602	青花	碗	－	表採	灰	明緑灰	良	漳州	－	(5.2)	(2.0)	
	1603	青花	Ⅲ	F-12･13	I	浅黄橙・含黒色粒	灰白	やや良	漳州	－	(4.7)	(2.4)	
	1604	青花	Ⅲ	F-12	I	灰褐色・含黒色粒	灰	良	漳州	(10.0)	(4.0)	(3.0)	
	1605	青花	Ⅲ	9T	I	浅黄橙・含白色粒	灰白	やや良	漳州	－	(3.9)	(2.1)	
	1606	青花	Ⅲ	I-20	－	灰・含黒色粒	灰オリーブ	良	漳州	(9.3)	(4.6)	(2.8)	
	1607	青花	Ⅲ	D-13	I	灰白	灰白	良	漳州	－	－	(3.6)	
第268図	1608	陶器	壷	F-9	Ⅲa	灰・含白・黒色粒	灰白	やや不	中国南部	(7.0)	－	(2.3)	
	1609	陶器	壷	G-9	Ⅲa	灰・含白・黒色粒	灰オリーブ	やや不	中国南部	－	－	(2.3)	
	1610	陶器	壷	F-11	Ⅲa	灰・含白色粒	オリーブ黄	良	中国南部	(10.9)	－	(3.4)	
	1611	陶器	壷	F-8	I	灰・白・浅黄・含白色粒	灰オリーブ	やや不	中国南部	－	－	(4.2)	
	1612	陶器	水注	8T	I	灰黄・含褐・黒色粒	淡黄	良	中国南部	－	－	(2.3)	
	1613	陶器	壷	8T	I	黄灰・含白・黒色粒	黒褐	良	中国南部	－	－	(2.8)	
	1614	陶器	壷	－	柱穴	黄灰・含白・黒色粒	暗赤褐	良	中国南部	(11.6)	－	－	
	1615	陶器	壷	8T	I	灰白・含白色粒	黒褐	良	中国南部	(12.0)	－	(4.3)	
	1616	陶器	甕	8T	I	灰・含白色粒	黒褐	良	中国南部	－	－	(6.4)	
	1617	陶器	鉢	I-27	－	灰褐・含白色粒	黄褐	良	中国南部	(22.0)	－	(6.5)	
第269図	1618	陶器	擂鉢	J-17	P1	暗灰	暗紫灰	良	東播系	(24.6)	－	－	
	1619	陶質	壷	E-13	I	灰白・含黒色粒	灰	良	－	(19.8)	－	－	
	1620	陶質	壷	E-13	I	灰白	灰白	良	不明	(19.8)	－	－	
第270図	1621	陶器	天目碗	F-10	－	暗灰褐色・含白色粒	黒・褐	良	中国	－	(3.3)	(3.8)	
	1622	陶器	天目碗	H-29	I	浅黄・含白・黒色粒	黒褐	良	美濃	(12.0)	－	(3.9)	
	1623	陶器	天目碗	－	表採	灰黄・含黒色粒	黒褐	良	美濃	－	－	(2.7)	
	1624	陶器	天目碗	G･H-10	I	にぶい黄橙・含白・黒色粒	黒褐	良	美濃	(10.2)	－	(4.3)	
	1625	陶器	天目碗	－	表採	灰・含白・黒色粒	灰褐	良	美濃	－	－	(2.6)	
	1626	陶器	天目碗	H-18	I	灰・含白・黒色粒	にぶい褐	良	美濃	－	(3.9)	(1.5)	
	1627	陶器	天目碗	－	表採	灰・含白色粒	暗褐	良	美濃	－	3.8	(1.0)	

第42表　中世石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層位・遺構	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第186図	1254	磨石	－	竪堀１	砂岩	11.8	4.4	3.6	304.35	
	1255	石皿	－	竪堀１	砂岩	7.8	6.5	2.4	182.50	
	1256	磨石	－	竪堀１	砂岩	9.0	8.0	2.9	317.06	
	1257	磨石・凹石	－	竪堀１	砂岩	12.1	10.8	5.3	1035.00	
	1258	凹石	－	竪堀１	砂岩	10.8	10.5	5.1	860.00	
第187図	1259	磨石	－	竪堀１	安山岩	9.9	6.2	4.9	430.00	
	1260	磨石	－	竪堀１	砂岩	10.6	7.6	4.2	585.00	
	1261	磨石	－	竪堀１	砂岩	10.2	8.5	5.9	720.00	
	1262	磨石	－	竪堀１	砂岩	11.2	9.1	6.5	980.00	
第188図	1263	投弾	－	竪堀１	砂岩	14.4	12.0	7.8	1800.00	
	1264	磨石	－	竪堀１	砂岩	12.3	9.2	7.2	1120.00	
	1265	投弾	－	竪堀１	安山岩	17.2	13.4	7.5	2400.00	
第189図	1267	磨石	－	曲輪a	砂岩	7.5	5.8	4.0	259.83	
	1268	投弾	－	曲輪a	砂岩	12.5	10.1	6.7	1140.00	
	1269	磨石	－	曲輪a	砂岩	10.1	8.7	4.5	595.00	
	1270	投弾	－	曲輪a	安山岩	13.1	10.8	5.8	1260.00	
第190図	1271	投弾	－	曲輪a	安山岩	12.2	11.3	8.4	1610.00	
	1272	投弾	－	曲輪a	安山岩	14.2	11.6	9.4	2200.00	
	1273	石皿	－	曲輪a	砂岩	(17.7)	(10.7)	7.6	2000.00	
第191図	1275	投弾	－	曲輪b	安山岩	(8.1)	(5.2)	6.9	324.99	
	1276	磨石	－	曲輪b	砂岩	10.1	7.5	5.4	570.00	
	1277	凹石	－	曲輪b	砂岩	6.2	5.7	2.2	137.36	
	1278	投弾	－	曲輪b	安山岩	12.3	9.7	5.7	990.00	
	1279	磨石	－	曲輪b	砂岩	11.8	7.9	4.6	570.00	
第192図	1280	投弾	－	曲輪c	砂岩	(7.5)	13.4	8.0	980.00	
	1281	スクレイパー	－	曲輪c	頁岩	8.3	2.4	6.5	16.79	
第202図	1297	磨石	H-21	大型円形土坑２	砂岩	6.7	4.2	3.8	153.26	
	1298	磨石	H-21	大型円形土坑２	砂岩	9.5	7.2	3.3	345.00	
	1299	磨石	H-21	大型円形土坑２	安山岩	11.1	6.5	5.3	580.00	
第203図	1300	磨石	H-21	大型円形土坑２	砂岩	10.4	7.5	6.2	670.00	
	1301	磨石	H-21	大型円形土坑２	砂岩	9.3	7.2	6.2	635.00	
	1302	磨石	H-21	大型円形土坑２	砂岩	9.7	6.3	5.2	440.00	
	1303	磨製石斧	H-21	大型円形土坑２	砂岩	12.1	5.4	3.1	340.11	
第209図	1352	磨製石斧	G-20	竪堀および土坑群	安山岩	13.3	6.1	4.0	399.10	
第210図	1353	投弾	G-20	竪堀および土坑群	砂岩	8.6	8.6	7.2	680.00	
	1354	投弾	G-20	竪堀および土坑群	砂岩	9.4	6.8	5.0	465.00	
	1355	投弾	G-20	竪堀および土坑群	安山岩	8.5	6.3	5.2	400.00	
	1356	投弾	G-20	竪堀および土坑群	安山岩	9.1	8.7	4.1	470.00	
	1357	磨石	G-20	竪堀および土坑群	砂岩	10.2	6.8	3.9	400.00	
第211図	1358	投弾	H-20	竪堀および土坑群	砂岩	10.1	7.0	3.7	350.00	
	1359	磨石	H-21	竪堀および土坑群	砂岩	10.5	6.5	5.0	498.00	
	1360	投弾	G-20	竪堀および土坑群	砂岩	11.2	9.1	6.4	915.00	
	1361	投弾	G-20	竪堀および土坑群	安山岩	10.3	8.7	5.5	800.00	
第212図	1362	投弾	F-21	竪堀および土坑群	砂岩	12.4	10.1	9.1	1485.00	
	1363	投弾	H-20	竪堀および土坑群	安山岩	10.6	9.5	6.0	840.00	
	1364	投弾	G-20	竪堀および土坑群	砂岩	10.8	9.1	7.5	1020.00	
	1365	投弾	H-20	竪堀および土坑群	砂岩	11.2	7.2	4.9	595.00	
第213図	1366	磨石	I-22	竪堀および土坑群	砂岩	10.8	9.0	4.8	695.00	
	1367	投弾	G-20	竪堀および土坑群	安山岩	10.8	8.6	4.6	620.00	
	1368	投弾	G-20	竪堀および土坑群	砂岩	8.8	7.8	5.7	590.00	
	1369	敲石	G-20	竪堀および土坑群	安山岩	(6.9)	7.8	3.2	350.00	
第214図	1370	投弾	G-20	竪堀および土坑群	砂岩	10.9	9.9	6.0	880.00	
	1371	投弾	G-20	竪堀および土坑群	安山岩	12.5	9.1	6.3	980.00	
	1372	磨石	F-21	竪堀および土坑群	砂岩	12.3	9.8	5.7	1040.00	
	1373	投弾	G-20	竪堀および土坑群	安山岩	10.5	8.3	6.4	810.00	
第215図	1374	投弾	G-20	竪堀および土坑群	安山岩	17.5	12.4	8.1	2600.00	
	1375	磨石	F-21	竪堀および土坑群	安山岩	7.8	5.9	2.7	204.56	
	1376	投弾	I-22	竪堀および土坑群	砂岩	20.0	(8.3)	10.5	2600.00	
第216図	1377	投弾	G-20	竪堀および土坑群	砂岩	(14.7)	(10.1)	9.9	2200.00	
	1378	凹石	F-21	竪堀および土坑群	砂岩	8.5	8.4	(4.1)	480.00	
	1379	凹石	－	竪堀１	砂岩	15.9	12.8	7.1	1785.00	
第222図	1383	投弾	H-10	曲輪３	安山岩	16.5	16.8	15.3	6000.00	
	1384	投弾	－	曲輪３	安山岩	13.5	11.4	9.6	2000.00	
第223図	1385	投弾	H-9	曲輪３	砂岩	15.0	13.4	11.0	3000.00	煤付着
	1386	投弾	H-9	曲輪３	砂岩	16.1	13.8	8.5	3000.00	煤付着
第224図	1387	投弾	H-9	曲輪３	安山岩	15.3	12.8	10.1	2800.00	
	1388	投弾	－	曲輪３	安山岩	17.4	13.0	7.5	2200.00	
第239図	1405	軽石加工品	I-26	土坑47	滑石	－	－	0.9	42.39	
第255図	1494	石鍋	G-10	Ⅲa	滑石	－	－	1.0	108.58	口径21.0cm
	1495	石鍋	－	４号住居	滑石	－	－	1.3	87.80	
	1496	石鍋	G-19	Ⅱ	滑石	－	－	2.1	339.72	
	1497	石鍋	G-11	Ⅲa	滑石	－	－	1.5	187.30	口径27.2cm

第43表　中世土坑観察表

挿図番号	番号	区	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	遺物	備考
第230図	1	I-7	330.0	80.0	22.0	花鉢？火舎？	
第231図	2	I-7	170.0	120.0	16.0	−	
第232図	3	F-14	430.0	240.0	50.0	瓦質・土師質（擂鉢）	
第234図	4	I-16	106.0	86.0	36.0	−	
	5	I-16	190.0	80.0	130.0	−	
	6	I-16	84.0	74.0	12.0	−	
	7	I-16	130.0	32.0	60.0	−	
	8	I-16	64.0	56.0	20.0	−	
	9	I-16	130.0	90.0	56.0	土師器（坏）	
第235図	10	I-16	280.0	140.0	80.0	−	
	11	I-16	106.0	80.0	70.0	−	
	12	I-17	84.0	54.0	18.0	−	
	13	I-17	114.0	70.0	60.0	−	
	14	I-17	120.0	90.0	20.0	−	
	15	I-17	100.0	66.0	50.0	−	
	16	I-17	114.0	100.0	68.0	−	
第236図	17	I-17	80.0	24.0	58.0	−	
	18	I-17	68.0	24.0	30.0	−	
	19	I-17	106.0	50.0	96.0	−	
	20	J-17	96.0	36.0	20.0	−	
	21	H-18	90.0	80.0	30.0	−	
	22	H-18	64.0	34.0	50.0	−	
	23	H-18	84.0	24.0	60.0	−	
	24	H-18	106.0	30.0	74.0	土師器（坏）	
	25	H-18	82.0	70.0	30.0	−	
第237図	26	I-18	120.0	50.0	56.0	−	
	27	I-18	68.0	54.0	50.0	−	
	28	I-18	108.0	24.0	70.0	−	
	29	J-18	120.0	76.0	80.0	−	
	30	H-19	96.0	84.0	46.0	−	
	31	H-19	112.0	50.0	84.0	−	
	32	H-19	100.0	70.0	40.0	−	
	33	H-19	68.0	58.0	18.0	−	
	34	H-19	74.0	70.0	20.0	−	
	35	H-19	66.0	58.0	34.0	−	
第238図	36	H-19	84.0	70.0	34.0	−	
	37	H-19	114.0	34.0	22.0	−	
	38	I-19	184.0	94.0	50.0	−	
	39	I-21	106.0	44.0	80.0	−	
	40	I-21	144.0	90.0	70.0	−	
	41	H-25	100.0	84.0	30.0	−	
	42	I-25	180.0	118.0	120.0	−	
	43	I-25	110.0	90.0	26.0	−	
第239図	44	H-26	140.0	90.0	66.0	−	
	45	H-26	106.0	66.0	20.0	−	
	46	I-26	90.0	80.0	24.0	−	
	47	I-26	110.0	100.0	34.0	滑石加工品	
	48	I-26	106.0	50.0	30.0	土師質（擂鉢）	
	49	J-26	70.0	50.0	20.0	−	

第44表　古代・中世出土銭貨観察表(1)

挿図番号	遺物番号	出土区	層位遺構	銭貨名	時代	初鋳年	径 cm	重さ g	備考
第167図	1113	J-25･26	土坑４	開元通寶	唐	621	2.30	1.45	or845年？
	1114	J-25･26	土坑４	天聖元寶	北宋	1023	2.50	3.39	
	1115	J-25･26	土坑４	天聖元寶	北宋	1023	2.40	3.29	
	1116	J-25･26	土坑４	嘉祐通寶	北宋	1034	2.50	2.79	
	1117	J-25･26	土坑４	景祐元寶	北宋	1034	2.40	2.70	
	1118	J-25･26	土坑４	嘉祐通寶	北宋	1056	2.30	3.66	
	1119	J-25･26	土坑４	元豊通寶	北宋	1078	2.30	2.70	
	1120	J-25･26	土坑４	元祐通寶	北宋	1093	2.50	3.67	
	1121	J-25･26	土坑４	不明	－	－	2.40	(1.53)	
	1122	J-25･26	土坑４	不明	－	－	2.30	2.68	
第205図	1325	H-20	窪穴および土坑群	大世通寶	琉球	1454	2.40	2.79	
第226図	1390	F-11	１号墓	洪武通寶	明	1368	2.20	(1.56)	
	1391	F-11	１号墓	洪武通寶	明	1368	2.20	(2.19)	
第229図	1392	H-19	４号墓	洪武通寶	明	1368	2.30	2.94	
	1393	H-19	４号墓	洪武通寶	明	1368	2.30	2.58	
	1394	H-19	４号墓	洪武通寶	明	1368	2.30	3.51	
	1395	H-19	４号墓	洪武通寶	明	1368	2.30	3.02	
	1396	H-19	４号墓	洪武通寶	明	1368	2.20	2.63	
	1397	H-19	４号墓	洪武通寶	明	1368	2.20	2.96	
	1398	H-19	４号墓	洪武通寶	明	1368	2.30	2.44	
第271図	1628	H-27	不明遺構	景祐元寶	北宋	1034	2.50	(2.44)	
	1629	H-27	不明遺構	不明	－	－	2.30	1.92	
	1630	J-17	Ⅰ	嘉祐元寶	北宋	1056	2.30	2.60	
	1631	J-17	Ⅰ	慶元通寶？	南宋	1195	2.30	2.84	
	1632	J-17	Ⅰ	不明	－	－	2.30	(1.69)	
	1633	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.74	背上文字？
	1634	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.50	
	1635	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	(1.88)	
	1636	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.40	3.28	
	1637	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.34	
	1638	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.30	
	1639	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.00	
	1640	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.40	2.83	
	1641	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.12	
	1642	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.20	2.12	
	1643	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	3.34	
	1644	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	3.86	
	1645	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	3.11	
	1646	G-14	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.58	
	1647	G-14	Ⅰ	永楽通寶	明	1408	2.50	2.13	
	1648	G-14	Ⅰ	永楽通寶	明	1408	2.00	(1.77)	
	1649	G-14	Ⅰ	永楽通寶	明	1408	－	(0.99)	
	1650	G-14	Ⅰ	朝鮮通寶	朝鮮	1423	2.30	2.03	
	1651	G-14	Ⅰ	朝鮮通寶	朝鮮	1423	2.40	3.95	
第272図	1652	G-13	Ⅰ	開元通寶	唐	621	2.40	(2.32)	or845年？
	1653	G-13	Ⅰ	元符通寶？	北宋	1098	2.40	(3.70)	
	1654	G-13	Ⅰ	至大通寶	元	1310	2.30	3.74	
	1655	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.20	2.41	
	1656	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.20	2.21	
	1657	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.50	2.35	
	1658	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.40	(3.37)	背右文字？
	1659	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	3.23	
	1660	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.40	2.68	
	1661	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.40	(1.93)	
	1662	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.35	2.87	
	1663	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.20	2.76	

第45表　古代・中世出土銭貨観察表(2)

挿図番号	遺物番号	出土区	層位遺構	銭貨名	時代	初鋳年	径 cm	重さ g	備考
第272図	1664	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	(2.23)	
	1665	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.20	2.45	
	1666	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.20	2.35	
	1667	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.20	2.07	
	1668	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	(2.38)	
	1669	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	(1.98)	
	1670	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.83	背右一銭
	1671	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.40	(1.87)	
	1672	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	(2.31)	
	1673	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	(2.16)	
	1674	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	(2.61)	
	1675	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	3.37	
第273図	1676	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.10	2.29	
	1677	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.40	(2.57)	
	1678	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	(2.23)	
	1679	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	(2.03)	
	1680	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.20	2.47	
	1681	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.10	2.77	
	1682	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	3.74	
	1683	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.20	3.20	
	1684	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.40	3.15	
	1685	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.19	
	1686	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.60	
	1687	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.49	背右文字？
	1688	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.40	3.48	背上浙
	1689	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.40	2.80	背上浙
	1690	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	3.39	
	1691	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.20	3.25	
	1692	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	3.85	
	1693	G-13	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.87	
	1694	G-13	Ⅰ	永楽通寶	明	1408	2.10	(2.20)	
	1695	G-13	Ⅰ	永楽通寶	明	1408	2.60	2.75	
	1696	G-13	Ⅰ	永楽通寶	明	1408	2.40	(2.38)	
	1697	G-13	Ⅰ	永楽通寶	明	1408	2.40	2.74	
	1698	G-13	Ⅰ	永楽通寶	明	1408	2.40	3.38	
	1699	G-13	Ⅰ	永楽通寶	明	1408	2.40	3.62	
第274図	1700	G-13	Ⅰ	朝鮮通寶	朝鮮	1423	2.50	3.22	
	1701	G-13	Ⅰ	朝鮮通寶	朝鮮	1423	2.30	2.70	
	1702	G-13	Ⅰ	朝鮮通寶	朝鮮	1423	2.40	3.62	
	1703	G-13	Ⅰ	宣徳通寶	明	1433	2.50	3.28	
	1704	G-13	Ⅰ	不明	－	－	2.20	2.23	
	1705	F-12	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.20	(1.80)	
	1706	D-12	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.54	
	1707	－	－	熙寧元寶	北宋	1068	2.40	2.37	
	1708	－	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.30	2.80	
	1709	－	Ⅰ	洪武通寶	明	1368	2.40	2.59	
拓本不能		F-11	１号墓	不明	－	－	－	(0.11)	
		F-11	１号墓	○武○○	不明	－	2.10	(0.66)	
		F-11	１号墓	洪武通寶	明	1368	2.10	(1.32)	
		F-11	１号墓	洪武通寶	明	1368	2.10	(0.64)	
		F-11	１号墓	不明	－	－	－	(0.39)	
		F-11	１号墓	不明	－	－	2.20	(1.01)	
		F-11	１号墓	洪武通寶	明	1368	2.20	1.62	
		I-19	２号墓	不明	－	－	－	(1.41)	
		I-19	２号墓	不明	－	－	－	(2.08)	
		H-18	近世建物	不明	－	－	－	(0.84)	

第46表　近世陶磁器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区	層位遺構	胎土	釉（薬）	露胎	焼成	生産地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第280図	1710	磁器　染付	碗	D-12	表	白色	透明釉	畳付	良	肥前	10.5	4.2	7.0	一網目文
	1711	磁器　染付	碗	D-13	表	白色	透明釉（貫入）	－	良	肥前？	10.7	－	4.7	
	1712	磁器　染付	碗	D-12	表	白色	透明釉	畳付	良	肥前	10.6	3.8	6.6	扇文
	1713	磁器　染付	碗	F-17	表	白色	透明釉	畳付	良	肥前系（波佐見）	11.2	3.9	5.8	丸文
	1714	磁器　染付	碗	E-12	表	白色	透明釉	畳付	良	肥前系（波佐見）	8.6	4.1	6.1	柳文
	1715	磁器　染付	小坏	D-13	表	白色	透明釉	畳付	良	肥前系	5.9	－	3.5	鳥文
	1716	磁器　染付	小坏	D-13	表	白色	透明釉	畳付	良	肥前系	5.6	3.6	3.2	山水文
	1717	磁器　染付	蓋	D-13	表	白色	透明釉	畳付	良	－	9.2	3.1	2.9	
第281図	1718	磁器　染付	皿	D-13	表	白色	透明釉	畳付	良		16.6	11.0	2.2	
	1719	磁器　染付	皿	D-13	表	白色	透明釉	畳付	良	肥前	14.0	8.6	2.7	丸文
	1720	磁器　染付	碗	D-13	表	白色	透明釉	－	良	肥前	11.5	－	3.8	内面牡丹唐草文 裏文唐草文
第282図	1721	陶器	碗	D-12	表	暗灰色	透明釉	口縁端部・畳付	良	苗代川系堂平窯	11.4	5.1	6.6	
	1722	陶器	碗	D-13	表	褐色	透明釉	高台畳付	良	竪野冷水窯	10.6	4.4	－	
	1723	陶器	碗	D-13	表	白色	透明釉	畳付	良	薩摩焼山元窯	－	4.8	3.5	
	1724	陶器	碗	C-13	表	灰白色	鉄釉　黒	腰部～高台内面	良	龍門司焼	－	15.5	－	
	1725	陶質時期	皿	D-12	表	灰色	透明釉	－	良	薩摩焼山元窯	13.8	6.6	3.0	
	1726	陶器	皿	D-13	表	褐色	透明釉	口縁端部一部	良	竪野系？	10.6	4.0	3.9	呉須の花文
	1727	陶器	皿	E-13 D-13 トレンチ	表	淡黄色	透明釉	腰部～高台内面	良	竪野系冷水窯	15.0	－	－	鉄絵
第283図	1728	陶器	蓋	トレンチ１	表	褐灰色	無釉	－	良	苗代川系堂平窯	7.1	庇径9.3	つまみ径1.3	上面にタタキ目
	1729	陶器	蓋	D-13	表	灰色	無釉	－	良	苗代川系堂平窯	上径9.3	下径8.7	－	
	1730	陶器	片口	D-13	表	灰褐色	灰釉 灰緑褐色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	12.6	7.8	10.0	内面に同心円状のタタキ目
	1731	陶器	片口	D-13	表	黄灰色	灰釉 浅黄色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	14.2	9.8	9.8	内面に同心円状のタタキ目
	1732	陶器	片口	D-13	表	橙色	灰釉 にぶい黄褐色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	13.4	15.8	13.4	口唇部・外底面に貝目外面に同心円状のタタキ目
	1733	陶器	片口	D-13	表	黄灰色	鉄釉 黒	口唇部	良	苗代川系堂平窯	26.6	－	－	口唇部に貝目
	1734	陶器	徳利	D-13 ピット17	表	褐灰色	灰釉 灰オリーブ色	内面	良	苗代川系堂平窯	－	7.8	－	
	1735	陶器	徳利	D-13 ピット17	表	灰色	灰釉 灰黄色	内面	良	苗代川系堂平窯	－	－	－	
第284図	1736	陶器	擂鉢	D-13	表	橙色	灰釉 灰オリーブ	口唇部	良	苗代川系堂平窯	32.8	11.4	15.8	口唇部・外底面に貝目
	1737	陶器	擂鉢	D-12 トレンチ８	表	にぶい赤褐色	鉄釉 黄褐色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	33.0	－	－	口唇部に貝目
	1738	陶器	擂鉢	D-13	表	赤褐色	鉄釉 黄褐色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	25.0	－	－	

第47表　近世陶磁器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区	層位遺構	胎土	釉（薬）	露胎	焼成	生産地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第284図	1739	陶器	擂鉢	D-13	表	にぶい赤褐色	鉄釉 黄褐色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	22.6	－	－	口唇部に貝目
	1740	陶器	蓋	D-12	表	にぶい灰褐色	灰釉 緑灰色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	28.8	－	－	口唇部に貝目
	1741	陶器	蓋	D-13	表	にぶい橙色	鉄釉 にぶい赤褐色	良		苗代川系堂平窯	37.0	－	－	口唇部に貝目
	1742	陶器	蓋	D-12 トレンチ８	表	にぶい赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	31.6	－	－	口唇部に貝目
	1743	陶器	蓋	D-13	表	にぶい赤褐色	灰釉 灰褐色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	25.2	－	－	口唇部に貝目
	1744	陶器	蓋	D-13	表	にぶい橙色	灰釉 緑褐色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	24.2	上径 19.4	7.5	
第285図	1745	陶器	甕	D-13	表	褐灰色	灰釉 緑灰色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	24.2	－	－	縄目状の突帯，口唇部に(イタヤガイ？)
	1746	陶器	甕	D-13	表	褐灰色	灰釉 灰緑褐色	口唇部	長	苗代川系堂平窯	－	－	－	
	1747	陶器	甕	D-13	表	灰褐色	灰釉 黄灰色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	－	－	－	肩部にボタン状の装飾
	1748	陶器	甕	D-12 トレンチ８	表	黄灰色	灰釉 黄灰色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	17.8	－	－	口唇部に貝目
	1749	陶器	甕 または壷	D-13	表	褐色	鉄釉 黒褐色	－	良	苗代川系堂平窯	－	21.0	－	外底面に貝目
	1750	陶器	甕 または壷	D-13	表	灰褐色	灰釉 灰緑色	－	良	苗代川系堂平窯	－	21.6	－	外底面に貝目
第286図	1751	陶器	把手付甕	D-13	表	灰赤色	灰釉 暗灰黄色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	31.6	16.5	17.5	口唇部・外底面に貝目，口縁部直下にボタン状の突起付着
	1752	陶器	甑	D-13	表	灰褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	32.0	－	－	口唇部に貝目
	1753	陶器	甑	D-13	表	灰褐色	鉄釉 黒褐色	－	良	苗代川系堂平窯	－	17.0	－	外底面に貝目
	1754	陶器	壷	D-12 トレンチ８	状	黄灰色	灰釉 灰黄色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	14.8	－	－	口唇部に貝目
	1755	陶器	壷	D-13	表	灰褐色	鉄釉 緑黒色	口唇部	良	苗代川系堂平窯	14.2	－	－	口唇部に貝目
第287図	1756	陶器	植木鉢	D-13	Ⅱ	黄灰色	無釉	－	良	苗代川系堂平窯	33.4	15.0	17.1	口縁部と口唇部に装飾，胴部に花文のスタンプ・縄状の突帯，底部に円形の穿孔
第288図	1757	陶器	動物形土製品	D-13	表	暗灰色	鉄釉 褐色	－	良	苗代川系堂平窯	幅5.6	－	高さ 3.8	犬形
	1758	陶器	碗	D-13	表	暗灰色	透明釉	－	良	肥前	11.8	－	5.2	
	1759	陶器	碗	D-12	表	黄白色	透明釉	畳付	良	肥前系	10.8	4.6	6.4	京焼風陶器　山水文
	1760	陶器	皿	－	表採	にぶい 黄橙色	灰釉 灰黄褐色	腰部～ 高台内面	良	肥前	－	3.7	－	内面に高台痕と胎土目痕4か所，外面に胎土目痕3か所
	1761	陶器	大皿 もしくは盤	D-13	表	灰色	透明釉	畳付	良	肥前	－	10.0	－	内面３ヶ所砂目跡あり 象嵌技法による三島手
	1762	陶器	餌擂鉢	D-13	表	赤褐色	透明釉？	内面	良	備前	10.4	3.3	3.0	
第289図	1763	陶器	高坏？	D-13	表	灰褐色	無釉	－	良	？	－	17.8	－	
	1764	瓦質土器	火鉢	D-13	表	にぶい黄橙色	－	無釉	良	？	31.0	－	－	
	1765	陶器	サヤ鉢	D-13	表	褐灰色	－	無釉	良	苗代川系堂平窯	－	15.9	－	内面に煤付着
	1766	陶器	甕？	E-13	表	にぶい橙色	鉄釉 黒色	口唇部	良	？	－	－	－	

第Ⅺ章　発掘調査のまとめ

１　旧石器時代

向椿城跡のⅦ層出土からは，旧石器時代ナイフ形石器文化・細石刃文化・縄文時代草創期の遺構・遺物が発見された。ナイフ形石器文化では，ナイフ形石器７点，台形石器７点，剥片尖頭器４点，尖頭器２点，三稜尖頭器１点，スクレイパー42点，二次加工剥片19点，楔形石器18点，石錐３点，剥片類８点，その他，細石刃文化の細石刃150点，細石刃核68点，ブランク９点が出土した。また，細石刃文化から縄文時代草創期にかけての石鏃97点，凹石・敲石・磨石も多数出土した。

遺物はⅦ層から出土したが，これらの遺物には時間差があり共伴遺物として捉えるには問題がある。また，出土状況であるが，第９・10図のようにブロック状にみられたが境界ラインが不鮮明で，一括して取り上げた。ただ，細石刃・細石刃核で多く利用された凝灰岩のブロックはＧ－10・11区に集中していた。ナイフ形石器は片側縁にブランティングが施されたもので，頁岩を石材に用いたものが主であった。台形石器は小型のもので，剥片尖頭器とは時間差があるものと考える。宮田栄二氏が「小原野型尖頭器」と呼んでいる両側縁を腹面側からの急角度でブランティングを施し，打面付近に基部調整を施した尖頭器も出土した。

細石刃・細石刃核の石材については特徴があり，細石刃は黒曜石が多く，133点の石材割合をだすと黒曜石67％（針尾28％，上牛鼻19％，腰岳12％，三船８％），凝灰岩20％，安山岩７％，細石刃核は68点中，凝灰岩66％，上牛鼻産20％，三船12％を示し，石材の相違があることがこの遺跡の特徴である。

遺構については，集石２基と配石遺構が検出された。配石遺構は一部後世の遺構等により破壊されていたが，県内の縄文時代草創期に検出される舟形配石炉と考えられる。

草創期の遺物については，土器と石鏃の共伴関係がある。石鏃は石材に特徴があり，安山岩製が多く97点中70点（72％），黒曜石19点（20％），その他８％となっている。（文責：牛ノ濵　修）

２　縄文時代

縄文時代は，中世から現代までの間の削平により，多量の遺物は出土したものの，包含層からの出土は少なかった。安定して出土したのは，Ⅶ層の草創期が主であった。特徴としては，調査区の南東端の部分のみからの出土であること，配石遺構が１基検出され，その形状は舟型配石炉に近いものであった。遺物は，石鏃が約80個程度と多量であったことである。また，土器は約350ほどの破片が出土した。その特徴は，風化は著しいが，隆帯上の刻目については２種に分けられる。刻目が細く深いものはヘラ状の施文具で，刻目が幅広く浅いものは貝殻の肋頂部の押圧痕を施すタイプであると言える。

他の縄文時代の時期では，早期，前期，中期，後期，晩期とほとんどの時期の遺物が出土している。量的には，南福寺式土器及び市来式土器が他の土器に比べて多いが，いずれも破片のみである。完形に図上で復元できたのは，縄文後期と思われる形式不明の無文土器が２点（736・737）のみであった。

遺構は，集石遺構数基と黒曜石原石の集積遺構1基（第48図）が検出された。これらの遺構は，中世で言う曲輪１と曲輪２の間の部分でほとんどが検出されたことから，たまたま削平をのがれ，残存し得たものであると言えよう。中世の遺構中から多量の石器が出土することからもこのことが伺える。また，前述の黒曜石の集積は，上牛鼻産の黒曜石で構成されており，遺構中から深浦式が１点出土し，その周辺からも深浦式の土器が出土したことから，この黒曜石原石集積遺構は，深浦式の時期に近いものと考えられる。（文責：木之下悦朗）

３　古墳時代

古墳時代は，11軒の住居跡が縄文時代草創期の遺物が出土した位置とほぼ同じ，調査区の南東部から検出された。これら11軒以外に表土からは，多量の成川式が出土したこと，住居跡も検出面から床面までが20㎝前後であることを考えると，かなりの数の住居跡が存在していたことが考えられる。

住居跡のプランは，ほとんどが方形であり，切り合いはあるものの，検出された遺物の甕形土器で考えると，ほとんどがゆるやかな「く」の字状に外反するものばかりであり，成川式土器のなかでも，中津野式から東原式の時期にかけてのものと考えられる。

また，遺物として特徴的なものは，１号住居跡床着の破鏡（950）と10号住居跡を中心として出土したタタキのある土器である。破鏡は，表裏面とも非常に滑らかで深緑色の光沢があるものである。ただし，それ以上の特徴がないため，鋳造時期や出自については明らかにし得なかった。

タタキのある土器については，平行タタキがほとんどであり，作りは粗くいびつなものが多いが，内面のナデは丁寧であり，当て具が観察できるものはあまりない。器形については，1040のように成川式土器の甕形土器を意識したものと，1067や1068などの破片からすると，須恵器の甕のような大型のものも存在していたのではないかと考えられる。また，この土器は，現在までのところ旧東町の山門野遺跡，旧川内市の麦之浦貝塚及び現在整理中の旧金峰町の上水流遺跡などだけであり，それも東シナ海沿岸の遺跡のみだけである。今後の，資料の増加に期待したい。（文責：鶴田靜彦）

４　古代

古代の遺構・遺物は旧石器時代，縄文時代草創期，古墳時代の遺物・遺構が検出された調査区南東部，いわゆる曲輪３が中心で曲輪１から土坑数基が検出されている。その間の曲輪２の部分からは，全く古代に関連する遺物・遺構はみられなかった。後世の削平については，他の時期と同様で著しく，表土からは多量の土師器が採集された。

古代においては，竪穴遺構１基，円形周溝遺構１基，土坑５基が検出された。曲輪３では，竪穴遺構１基，円形周溝遺構１基，土坑２基が検出された。竪穴遺構については，遺構内出土の土師器甕は，外面はナデやハケ目が，内面は底部からはケズリが上面に向かい，腹部は左斜め上に向かって施され，また口縁部にはハケ目が施されている。器面調整や器形から判断すると，大島遺跡では甕２類，高篠遺跡では，甕８類・時期はⅢ期に類似することから，９世紀～10世紀のものと考える。

円形周溝遺構については，南東側１/３部は削平により消滅していた。周溝の主体部南側から，土師器の皿２枚と坏２枚の計４枚の土師器を検出している。全て底部の処理はヘラ切り底であり，その後の成形等は若干の板ナデ状のものが観察される。調整や器形から判断すると，皿は大島遺跡の皿３類，高篠遺跡では，法量が小型，形態はⅢ類，時期はⅢ期に，坏は大島遺跡の坏10類，高篠遺跡では，坏６類，法量は大型，形態はⅢ型，時期はⅢ期に類似するものである。これらのことから，この円形周溝遺構も，遺物から９世紀～10世紀の遺構と言えよう。

また，特殊な遺構として，土坑１と土坑２がある。いずれも縄文時代の大型の石器を転用したものと思われ，これらの上面や周辺には，カーボンや土師器の小片が大量に散乱していた。何らかの特殊な土坑として，作られたものと思われる。

遺物としては，Ｆ－11区において１点ではあるが，越州窯系青磁の碗の底部（1142）が出土している。黄緑色を呈する蛇の目高台の青磁碗で10世紀頃のものであると思われる。

曲輪１では，３基の土坑が検出された。土坑４では，銅銭10枚が出土している。銅銭から11世紀～12世紀前半（P180の表参照）の遺構と考えられる。なお，この遺構の東側は，大規模なシラス採取がおこなわれたことから，東側にも遺構が存在していた可能性は，中世を含めてきわめて大きいものと言える。（文責：木之下悦朗）

５　中世

（１）中世の東市来

現在の日置市東市来町は古代の律令制下では日置郡にあたる。やがて当地は市来院と呼ばれるようになり，郡司である市来氏が治めていた。市来氏は宝亀年間（770年～780年）に薩摩国に下向した大蔵姓市来政房を祖とする。やがて大蔵姓市来氏は鎌倉時代前期，家房の時に嗣子がなく，薩摩郡の土豪である惟宗姓国分友成の子政家が継いで，以後惟宗姓となった。元寇の際，惟宗姓市来政家は島津久経に従って博多に出陣している。

南北朝時代になると，島津氏５代貞久は北朝側の足利尊氏から市来院地頭に任ぜられた。そのため南朝方の市来院郡司市来氏と激しく対立し，市来（鶴丸）城（長里地区）を中心にしばしば合戦が行われた。特に建武４（1337）年～暦応３（1340）年には２代資家・３代時家が，南朝の三条泰季に属して，河上家久や伊集院忠国らと共に島津貞久勢と激しく戦った。その結果，興国２（1341）年に市来城は落城し，市来氏は降伏した。しかし，それ以後も市来城は市来氏によって領有された。争いは続き，文和２（1353）年，４代氏家が南朝方の伊作田兵部丞（伊作田城主）と共に挙兵し，貞久の居城木牟礼城（出水市高尾野）を攻めている。

15世紀に入り，島津家の内部抗争はあるものの，当地は市来氏による領有が続いた。やがて，７代久家は守護島津忠国と激しく対立した。そして，寛政３（1462）年に忠国の世子10代立久が市来城を落城させ，市来氏は滅亡した。久家は追放となり，替わって文明６（1474）年からは島津家重臣の高橋高幸と曾木某が配された。滅亡後の市来院は，薩州島津家による支配となる。

16世紀に入り，守護島津勝久，薩州家島津実久，相州家島津忠良・貴久父子の対立が激化するが，市来勢は薩州家出水島津家に与している。天文８（1539）年，実久は市来院地頭に新納忠苗を任じ，島津忠房と共に市来城を守らせていたが，貴久率いる薩州勢に攻められ落城した。それ

以後は，貴久の武将，新納康久が城番となった。その間当城には，天文19（1550）年にフランシスコ・ザビエル，永禄４（1561）年にはルイス・アルメイダが滞在し，布教を行っている。

藩政時代には旧市来町を含め市来郷と呼ばれ，藩の直轄領となった。市来城はその役目を終え，自然廃城となり，城山を中心として武士の居住する麓が形成された。地頭仮屋は初め当地に置かれていたが，やがていちき串木野市湊町に移った。現在，長里地区の麓には「カンヤドンイド（仮屋の井戸）」と呼ばれる古井戸が残っている。

最後に向椈城の所在する伊作田地区について述べる。向椈城の南側には広大な伊作田水田が開け，江口川を挟んで椈城，伊作田城が対峙している。伊作田城は南北朝時代に伊作田氏が築き居城していた。伊作田道材は市来氏と共に南朝に属していたが，伊作島津家に敗れ，当地で処刑された。当地には７基の宝塔・五輪塔があり，これらは伊作田道材と家臣の墓と伝えられている。また，無形民俗文化財に指定されている伊作田踊りはこの道材の慰霊が主になっている。向椈城の居城者が誰であったかは定かではないが，伊作田惣地頭であった伊作田氏の管理下にあった可能性は否定できない。藩政時代には，向椈城に隣接する弁財天岳（遠見番山）には，異国船の監視にあたる遠見番が置かれた。向椈城も海を臨み，展望のできる場所にあり，得仏城・市来城・平之城などの一連した城群の出城的な機能に適していると考えられる。向椈城からは，12世紀から17世紀前半に至るまでの遺物が出土していることから，17世紀の一国一城令が出される時期までは城館として機能していたことは明らかである。（文責：松元佑輔）

（２）向椈城について

・遺構

空堀・曲輪等

大きな意味で、防御として向椈城跡の遺構をとらえると，堂園平遺跡との間には，南九州特有のシラスの開析谷という自然地形を利用した空堀，そして空堀の中にも曲輪を作っている。また，その周辺には，小さな空堀を分岐させて作り，本体の曲輪の斜面には，いくつにも帯曲輪を廻らすなど空堀の機能を強化させている。

曲輪１の南西側から曲輪２の西側にかけては，「空堀及び土坑群」，「大型円形土坑」と便宜上呼称したが，堀や溝と土坑を巧みに組み合わせて西側からの寄せ手に備えているように思える。また，路線外ではあるが，東側には，土塁と空堀状の谷が存在している。曲輪２の南側に立ち伊作田城及び東シナ海を眺めると何もさえぎるものはなく，「眺望」が大きな防御施設であると言えよう。

掘立柱建物跡

曲輪１のＩ・Ｊ－25・26区から３棟検出した。標高約50ｍに位置し，南側に曲輪２を臨むことができる。掘立柱建物跡２と掘立柱建物跡３は軸を同じくし，掘立柱建物跡１は掘立柱建物跡２と切り合っていることから，使用時期が２期に分かれる。遺物は出土していないが，同じく曲輪１の不明遺構（Ｈ－27区）からは中世の遺物が出土していることから，同時期の遺構であると考えられる。

竪穴遺構

曲輪２のＩ・Ｊ－17・18区で３基検出した。３基とも平面形は方形で，東西方向にやや長い軸

を持つ。なお，竪穴遺構３から採取された２点のサンプルは科学分析の結果，床面近くの木炭は鎌倉時代後期，埋土中の炭化材は室町時代前半期の値を示した。この結果は遺構の使用または廃棄の時期を考える上で重要な資料となった。埋土中からも当該期に近い時期の遺物が出土していることからも，時期設定は妥当なものであろうと考える。

堂込秀人氏は，中世山城における竪穴遺構について，掘立柱建物跡の周辺に位置し，鍛冶場などの鉄関連施設や皮革製品の加工工房としての機能を持つものとしている（堂込1999年）。県内の中世城館での検出例には，阿久根市中之城跡，薩摩川内市上野城跡などがある。

中之城では竪穴遺構と考えられる方形土坑が４基確認されているが，遺跡からは向椎城跡の炉跡に類似する焼土遺構も４基確認されている。上野城跡では方形竪穴遺構5基に伴って中世掘立柱建物跡が32棟確認された。本遺跡の曲輪２では竪穴遺構の北側にあたるⅠ－20・21区から，９基の炉跡が検出されている。また，掘立柱建物跡は３棟とも曲輪１で検出されているため，明らかに曲輪ごとに遺構の機能を分けていた可能性がある。

本遺跡の炉跡が鉄関連の施設として使用されたかは定かではないが，竪穴遺構との何らかの関わりがあったことは確かである。

炉跡

向椎城は３か所の曲輪からなる中世城館である。全19基の炉跡は曲輪１の第１地点と曲輪２の第２地点・第３地点において集中して検出された。県内の類似する遺構には，炉，炉状遺構，竈（カマド），カマド状遺構，焼土を伴う土坑などが挙げられる。また，中では鉄関係の炉としての機能が注目され，カマド状遺構が鍛冶炉に転用されたという事例もある。本遺跡からはＧ－10区で鞴の羽口が１点出土したものの，鉄滓や鍛造剥片といった鉄生産関係の遺物は出土しておらず，鍛冶炉としての断定は難しかった。しかし，遺物が出土していないだけで，鍛冶炉として使用された可能性も考えられる。そのため本報告書では炉跡とした。内部構造の詳細についてはすでに述べたが，これらの炉跡は形状からして大きく３種類に分けられることがわかった。以下，分類をもとに地点ごとに説明を行なう。遺構の位置については，**第240図**の炉跡位置図を参照していただきたい。

Ⅰ類：平面形は楕円形（長楕円形），あるいは瓢箪形を呈している。炉部・焚き口部・灰出し部にはっきりと区分できるもので，炉部は半円形又は馬蹄形のものがある。底部の床面は船底のように平坦である。全19基の炉跡の大半を占める。**１・２・３・４・５・８・10・15・16・17・18・19号炉跡**がそれにあたる。

Ⅱ類：形態はⅠ類に似ているが，灰出し部がⅠ類ほど明確に区別できない。また，灰出し部の上面に粘土が厚く堆積している。この粘土は，炉壁とは明らかに色調を異にしており，白みを帯びている。Ⅰ類に比べて炉壁の残存状態が良い。第２地点（曲輪２）で検出された。**９・11・12・13号炉跡**がそれにあたる。

Ⅲ類：円形の炉部のみで，焚き口部と灰出し部は確認されない。３基のみであり，第２地点（曲輪２）で検出された。**６・７・14号炉跡**がそれにあたる。

第１地点（曲輪１）では１号炉跡から５号炉跡までの５基が検出されている。２号炉跡及び，４号炉跡は残存状態が悪いため類別が困難であったが，ここではⅠ類とした。１・３・５号炉は

Ⅰ類にあたる。使用時期の差を明らかにすることはできなかった。ただ，炉跡の集中しているＦ・Ｇ－12・13区からは中世後半期の青花が出土している。また曲輪１全体をみると，明代の古銭や中世墓といった中世の遺物や遺構が確認されていることからも，同時期の遺構であると考えられる。

第２地点（曲輪２）では６号炉跡から14号炉跡までの９基が検出された。６・７・８・11号炉跡からは炭化材が採取された。鎌倉時代後半から江戸時代初頭にかけて使用された炉跡群であることが判明した。Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類は同時期に使用されていることから，これらは機能に違いがあったと考えられる。また，Ⅱ類の灰出し部に堆積していた粘土は，色調も黄白色であり，炉壁とは明らかに異質なものと考えられた。しかし，色調の違いは被火の具合によるもので，単に炉壁の上部が崩れて堆積した可能性も考えられる。ここではⅠ類とⅡ類を区分したが，本来同類の遺構であるかもしれない。この第２地点は最も炉跡数が多く，遺構の南部には竪穴遺構が３基集中している。曲輪ごとに分業を行なっていた可能性が高い。

第３地点（曲輪２）からは，15号炉跡～19号炉跡までの５基が検出された。すべてⅠ類であり，長軸も同一方向に設定されている。曲輪２は第３地点と第２地点との間に空堀及び土坑群が所在している。中世の陶磁器が多く出土していることから，中世の遺構と考えられる。

中世の炉跡について県内の事例をみてみると，出口浩氏は川上城跡において平面形からＡ（円形）とＢの（長楕円形）の2タイプに分類している（鹿児島市教委1994年）。Ａタイプは小ぶりな礫を半円形ないし馬蹄形に並べるものである。炉壁の高さや，灰出し部が明確に確認できないもので，臨時的又は短期的に利用された簡易的な炉とした。鹿児島市川上城跡の他に霧島市横川城，日置市一宇治城，鹿児島市谷山弓場城等で出土している。鹿児島市油須木城跡でＡタイプとされている炉跡は，礫ではなく粘土で炉壁が形成されていた。本遺跡の炉跡も，炉壁はすべて粘土で形成されており，礫を使用したものは確認されなかった。このタイプは本遺跡のⅢ類と類似している。

Ｂタイプは炉部・焚き口部・灰出し部などが区別できるもので，比較的精巧に作られるものである。炉壁等は凝灰岩礫を含む粘土でしっかりと焼き締められ，床面には焼土・灰の堆積が多くみられる。地域の拠点となる山城・城館や中心郭などにみられるもので，長期間に多くの人々が使用したものとされた。川上城，横川城，一宇治城の他に，鹿児島市油須木城，大口市平泉城，さつま町松尾城及び宗功寺跡，加世田市上加世田遺跡－１第Ⅱ地点等で出土している。中世の炉跡で最も検出例が多く，本遺跡のⅠ類に類似している。また，大崎町金丸城跡で検出された炉跡は，焚き出し部で軽石がゲート状に並ぶものであった。こうしてみると，炉跡は主に２つに分類できるが，これらは一様に同じ遺構とは言えず，在地によって多様性があることがわかった。それらは遺跡の立地や環境，又は機能の違いよるものと考えられる。（文責：松元佑輔）

・遺物その１

さて，この城の築城から廃城までの足取りは，その遺物などからある程度伺える。なかでも陶磁器の出土が多いため，これらを参考に本城の変遷について考えてみたい。

曲輪３で出土した青磁及び土師器の埋納一括資料は，龍泉系初期のものである。また，玉縁口縁の白磁碗も多数出土していることからも，この城の築城は12世紀末から13世紀に始まったと言

える。

次に多いのが蓮弁文系等の青磁碗である。日本の歴史の中に位置付けると，南北朝の動乱期にあたり，前述の「中世の東市来」とも符合する。空堀や土坑等からも当該期の遺物が多量に出土している。何回もの城の造成と幾多の攻防があり，築城当時からの城の形もこの時期に大きく変わったと考えられる。また、この時期が最も活発に城が機能していた時期と言えよう。

その後は，線描蓮弁文型や白磁皿などの出土の時期であり，戦国時代にあたると言えよう。これら以外に，目立つのが，漳州窯系の遺物である。この漳州窯は1585年から1615年ごろまでの間と言う短い間だけ機能していたと言われている窯である。この窯産と思われる遺物が非常に多く，図化したのは1593～1607だけであるが，その何倍以上もの量が出土している。この漳州窯系の青花が山城としては，中世最後の出土遺物と言える。

・遺物その２

ここでは，特異な遺物について触れておく。1462は，最近本土でも最近散見するようになってきた徳之島産のカムィヤキである。1608～1610は，福建広東窯系の褐釉壷でその時期は，13世紀代と思われる。1498は，見込みには如意頭文，外面には線象嵌を施す高麗青磁で高麗末から朝鮮王朝初期のものである。

1292・1293は，普通茶釜として用いられ，茶室で木炭で安定した温度に保っておくため，大きな火力は必要としない。ところが，本城出土のものは鍔から下はススで真っ黒なことから，大量の湯の必要性があったと考えられる。1310・1311は，朝鮮王朝白土粉青の青磁の丸皿で，忠清南道保寧「龍水里窯」産で，時期は14世紀末であろうと，「龍水里窯」を発掘された韓国の羅善華先生からご教示いただいた。1579は，粘土紐を貼り付けて高台とし，菊花文を型押ししたもので，志野白釉輪花小皿で，日常食器ではないものと思われ，その時期は，16世紀末～17世紀初頭である。1612は，熊本県の浜の館で，対で出土したことで知られる緑釉陰刻牡丹文水注である。時期は，浜の館では15世紀末としている。1621～1627は，天目碗で，1621はガラス質の厚い釉掛，胎土等から中国産と思われる。他は，美濃産である。

1580～1584・1586・1588～1592は，景徳鎮系の青花である。特に，1589は，メンコとして用いたような加工の跡がある。また，1592の高台内は，景徳鎮特有の鉄鉋の跡が明瞭に観察されるものである。

1349・1613～1617は，最近南九州でだんだん資料が増えつつある黒褐色を呈する陶器で，中国南部のものではなかろうかと言われているものである。（文責：鶴田靜彦）

６　近世

近世の遺構は，Ｈ－18区いわゆる曲輪２の南端部とＤ－13区を中心とする曲輪３より一段低い部分の２か所から検出された。

・掘立柱建物跡について

Ｈ－８区から検出された掘立柱建物跡は４軒×１軒でその桁行は東西である。柱穴の径も50㎝前後で，柱痕跡が最大で40cmと言うような柱穴もある。ほとんどの柱穴が根石を持ち，柱の高さ調節用の土の上に根石を置き，その上に柱が建てられていたものと思われる。削平された部分を

考慮すると柱は，１ｍ以上の埋設部分があったと想像される。291ページの柱穴間の計測値からもかなり大規模で特殊な建物であったことが考えられる。

次に向栫城におけるこの建物の立地条件をみて見ると，尾根状の最も見晴しの良い場所（標高約50m）で，伊作田の水田地帯が一望に見渡され，そして，その先には，伊作田城，東シナ海が見渡せ，振り向くと鶴丸城が見えると言う位置である。また，長辺である桁行は８ｍあり，東シナ海に平行しているように建てられたかのように思える。

このように，この建物の規模及び立地条件を考慮すると，その性格は，物見櫓的なものと考えられる。時期については，根石を持つ建物であること，建物の柱穴から近世の遺物の小片が若干出土したのみであることなどから，未だ，中世の凄惨な攻防の匂いの残る時期，中世末から近世初期と思われる。（文責：鶴田靜彦）

・近世の陶磁器について

D-13区を中心に，その周辺から陶磁器が出土した。これらの陶磁器は，同区で建物跡としては確認できなかったが柱穴が数多く検出されていることから，当時何らかの建物が存在し，それに伴う遺物であると考えられる。そこで出土した遺物から，この柱穴群の性格について若干の考察を述べておきたい。

出土した遺物は肥前系磁器・薩摩焼・肥前系陶器等であり，その中で目に付く特徴は次のようなことである。

肥前系磁器（1710～1720）について，1713・1714は18世紀後半～19世紀代と思われる染付で，波佐見焼のくらわんか碗であるが，その他は17世紀後半～18世紀代と思われる肥前の染付・白磁や１点であるが色絵の碗も見られ，上手の製品である。また，未掲載の陶片の中にも上手のものが多い。

薩摩焼（1721～1757）は出土した陶磁器の中でも多く，その中でも苗代川焼（1721・1728～1757）が大部分を占める。器種は碗・蓋・片口・徳利・擂鉢・甕壷用の蓋・甕・壷・把手付甕・甑・植木鉢・動物形土製品等様々なものが出土している。胎土は緻密で灰褐色系の色調を呈し，光沢の弱い褐釉や灰緑色系の灰釉が薄くかかる。成形方法は粘土紐巻き上げ後，タタキ成形を行っている。その他器形や器種の構成等から，これらの苗代川焼は堂平窯（日置市東市来町）のⅡ期（17世紀中頃～後半）の製品と考えられる。堂平窯の製品については近年の報告書刊行によりその様相が明らかにされたため，消費地での出土例は少ない。本遺跡は堂平窯と同じ日置市東市来町に所在するという地理的な条件もあり，堂平窯の製品が出土することは不思議ではないが，今回のような器種構成で大量に出土したことは，柱穴群の性格を考える上で興味深い資料である。中でも植木鉢は，藩の特注品として生産されていたものと思われ，その流通も限られた社会的身分のみであったと考えられる。その他の薩摩焼としては，竪野系の製品で「白薩摩」と呼ばれる白色陶胎の碗（1722）や皿（1726・1727），山元窯（姶良郡加治木町）の碗（1723）や皿（1725）等，17世紀後半のものと思われる資料が出土している。特に竪野系白薩摩については，渡辺芳郎氏が，当時の社会的身分や階層と結びついて流通している可能性を指摘しており，柱穴群の性格を考える上で興味深い資料である。

肥前陶器は，18世紀前半頃と思われる京焼風陶器が出土しているほか，やや時代は遡るが16世

紀末～17世紀始め頃と思われる胎土目の皿､砂目で象嵌技法による三島手の大皿も出土している。その他，備前産の餌擂鉢が数個体出土している点も興味深い。

以上のことからＤ－13区を中心とした地域から出土した陶磁器は，17世紀後半頃と思われる資料が中心であり，その様相としては，上手の肥前系陶磁器や堂平窯産の植木鉢，竪野系の白薩摩，肥前産の餌擂鉢が出土していることなどから，当時の社会的身分や階層を有するものが使用していた可能性が考えられる。従って柱穴群の性格を考察すると，建物跡には復元できなかったものの，この場所に17世紀後半を中心とした時期に地方役人クラスの屋敷等の建物が存在した可能性が考えられよう。（文責：関明恵）

＜参考文献＞

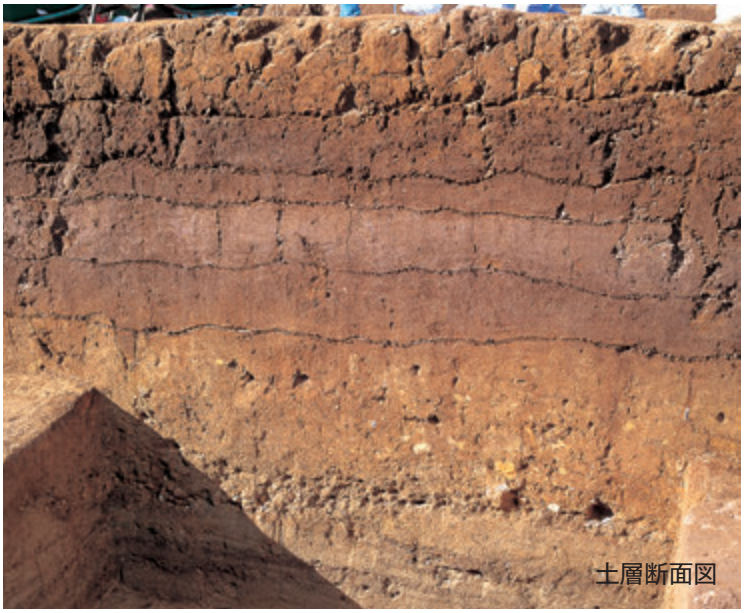
『九日田遺跡』1993　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（２）
『一湊松山遺跡』1996　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（19）
『干迫遺跡』1997　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（22）
『垂水・宮之城島津家屋敷跡』2003 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（48）
『楠元遺跡』2003　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（57）
『上野城跡』2004　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68）
『上ノ平遺跡』2004　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（70）
『高篠遺跡』2004　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（71）
『桐木遺跡』2004　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（75）
『大島遺跡』2005　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）
『桐木耳取遺跡』2005　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（91）
『中ノ原遺跡』2006　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（102）
『堂園平遺跡』2006　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（104）
『市ノ原遺跡５地点』2006　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（105）
『堂平窯跡』2006　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（106）
『安茶ヶ原遺跡』2007　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（118）
『中原遺跡』2003　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（54）
『苦辛城跡』1983　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（27）
『成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ平遺跡』1983　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（28）
『鹿児島県の中世城館跡－中世城館跡調査報告書－』　1987　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（43）
『榎崎Ａ遺跡』1992　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（63）
『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』　2000　太宰府の文化財（49）
『草野貝塚』　1988　鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（９）
『谷山弓場城跡』　1992　鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（11）
『川上城跡』　1994　鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（18）
『油須木城跡』　2003　郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）
『平泉城跡』　1982 大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（１）
『山門野遺跡』　1983　東町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）
『中之城跡』　2003　阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書（４）
『金丸城跡』　2004　大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）
『中原遺跡』　1985　志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（９）
『一湊松山遺跡』　1981　上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書
『川上（市来）貝塚』　1991　市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）
『川上（市来）貝塚』　1993　市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（２）
『伊作田城跡』　1995　東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（６）
『松尾城及び宗功寺跡（３）』　1997　宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）
『上之城跡』　1980　加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（２）
『上加世田遺跡-１（第Ⅱ地点)』　1985　加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
『麦之浦貝塚』　1987　川内市土地開発公社　本川地区造成事業に伴う文化財発掘調査報告書
『柳井谷遺跡』　1986　志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（６）
『日輪城跡』　2003　大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（28）
『浜の館』阿蘇大宮司居館跡　1977　熊本県教育委員会熊本県文化財調査報告書（21）
『歴史の道調査報告書　第1集「出水筋」』　1993　鹿児島県教育委員会
『鹿児島考古』第25号「市来貝塚特集」　1991　　鹿児島県考古学会
『鹿児島考古』第28号「特集　鹿児島県の中世山城」　1994　鹿児島県考古学会
東洋陶磁学会編　2002　東洋陶磁史―その研究の現在―
九州陶磁学会編　2000　九州陶磁の編年―九州近世陶磁学会10周年記念
日本貿易陶磁器研究会編　1998　貿易陶磁研究　No.1-No.5　六一書房
中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社
海剛美術館編『海剛陶磁美術館　海剛美術館図録　第１冊』1990　海剛美術館
兵庫埋蔵銭調査会編　1996　日本出土銭総覧　兵庫埋蔵銭調査会
鹿児島県立埋蔵文化財センター編　2004「研究紀要・年報」『縄文の森から２号』　桑波田武士　「石清水型削器小考」
渡辺芳郎　2000「宋胡録と薩摩焼宋胡録―考古学資料の検討―」『メコン流域の文明化に関する考古学的研究』鹿児島大学法文学部
渡辺芳郎　2001「考古学から見た近世薩摩焼」『鹿児島のプロフィール２』鹿児島大学
小都　隆　2005『中世城館の考古学的研究』　渓水社
竹内 理三編　1983『角川日本地名大辞典・46 鹿児島県』角川書店
芳 即正・五味 克夫編　1998『日本歴史地名大系第47巻・鹿児島県の地名』平凡社
東市来町誌編さん委員会　2005『東市来町郷土誌』

写　真　図　版



空堀遠景

図版2


土層断面図


発掘風景

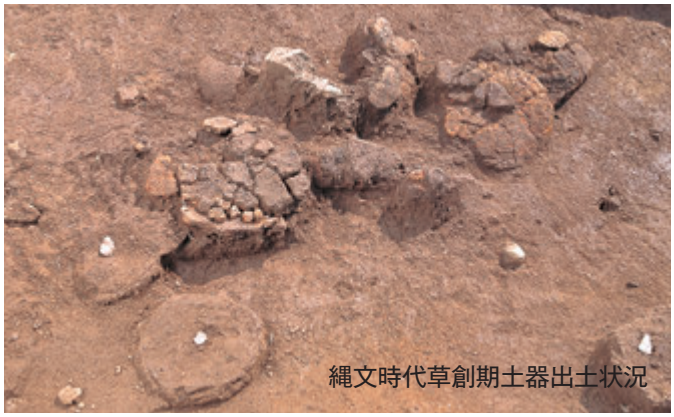

調査中の故 勇氏

土層断面図・調査中の故勇氏


剥片尖頭器出土状況


旧石器時代遺物出土状況


縄文時代草創期遺物出土状況


縄文時代草創期土器出土状況


配石遺構

旧石器・縄文時代草創期遺構

図版4



縄文時代草創期１号集石出土状況



縄文時代草創期２号集石出土状況

縄文時代草創期集石



縄文時代４号集石



縄文時代５号集石

縄文時代集石

図版6


1号住居跡完掘状況


3号住居跡完掘状況


2号住居跡完掘状況


5号住居跡完掘状況

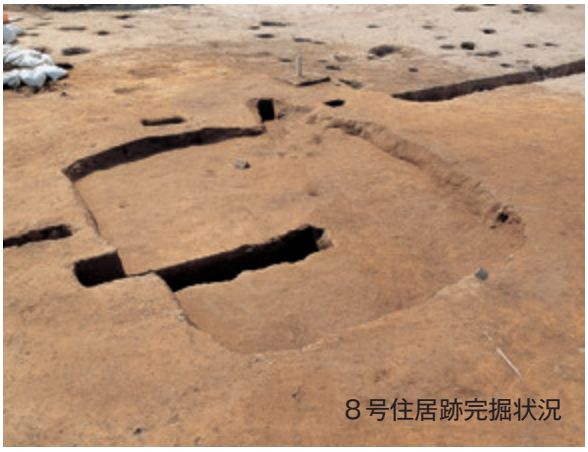

6号住居跡完掘状況

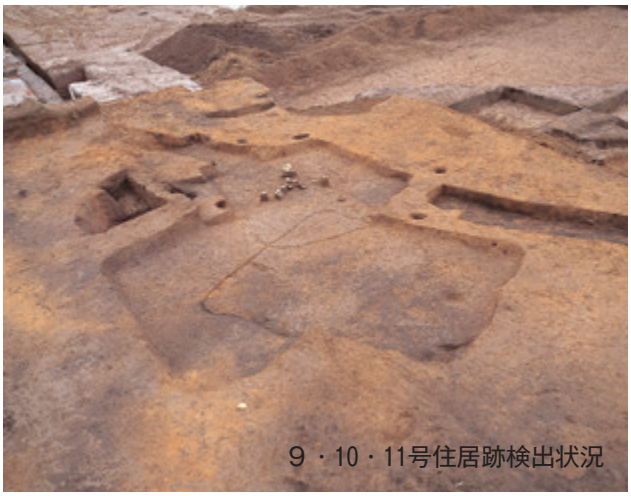

成川式土器出土状況


成川式土器出土状況

古墳時代住居他（1）


7号住居跡完掘状況


8号住居跡完掘状況


9・10・11号住居跡検出状況


円形周溝遺構平面プラン


円形周溝遺構検出状況


円形周溝遺構内出土遺物

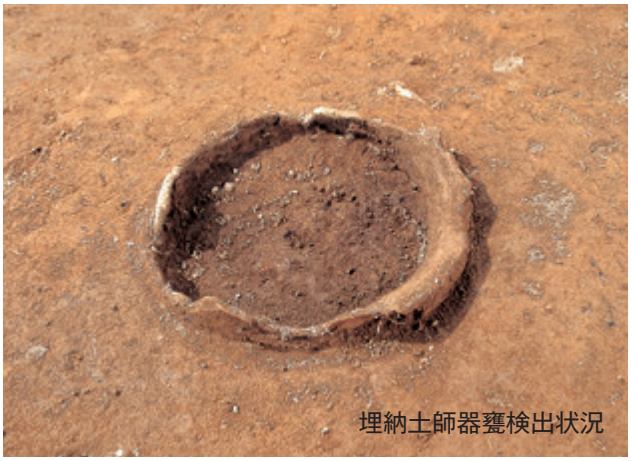

発掘風景

古墳時代住居他（2）

図版8


竪穴遺構検出状況


竪穴遺構出土遺物


埋納土師器甕検出状況


埋納土師器甕検出状況


土坑２検出状況


土坑１検出状況


土坑４完掘状況


土坑４遺物出土状況

古代遺構・遺構内遺物他



発掘前の空堀全景

図版10



空堀近景



曲輪１から曲輪２・３を臨む

図版12

⬆ 曲輪２



曲輪１空堀俯瞰


掘立柱建物跡３


掘立柱建物跡１


掘立柱建物跡２


竪穴遺構３検出状況

中世掘立柱建物跡

図版14





曲輪２全景等



中世墓４



中世墓検出風景



中世墓検出風景

中世墓

図版16



炉跡（1）

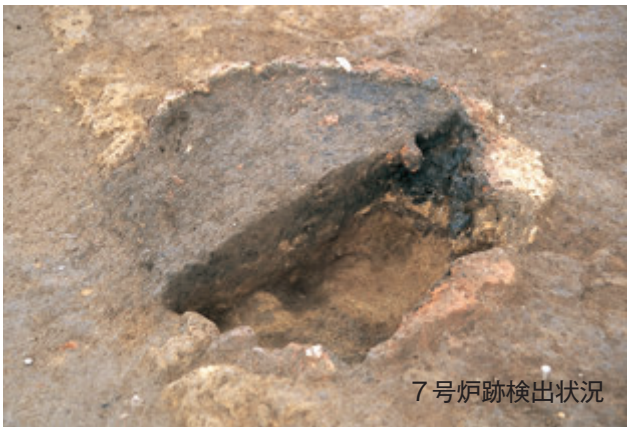


炉跡（2）

図版18


２号炉跡平面プラン


２号炉跡検出状況


７号炉跡検出状況

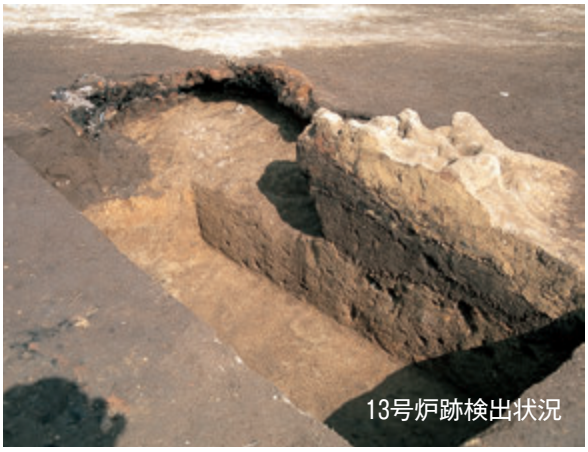

９号炉跡検出状況

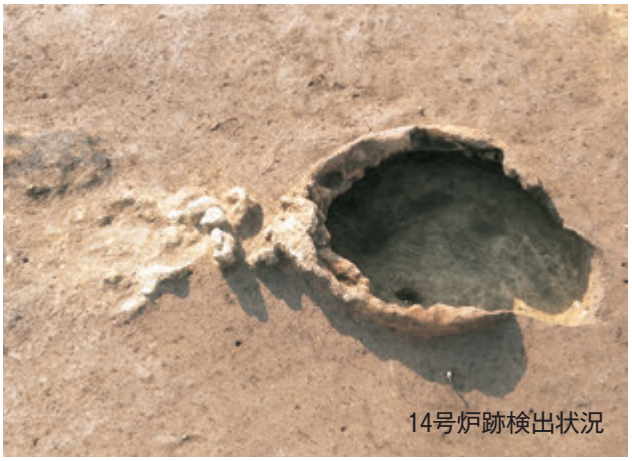

10号炉跡検出状況

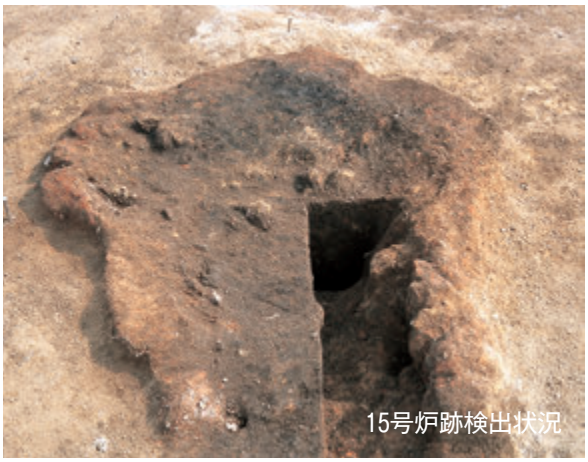

11号炉跡検出状況

炉跡（3）


12号炉跡検出状況


13号炉跡検出状況


14号炉跡検出状況


15号炉跡検出状況


1号炉跡検出状況

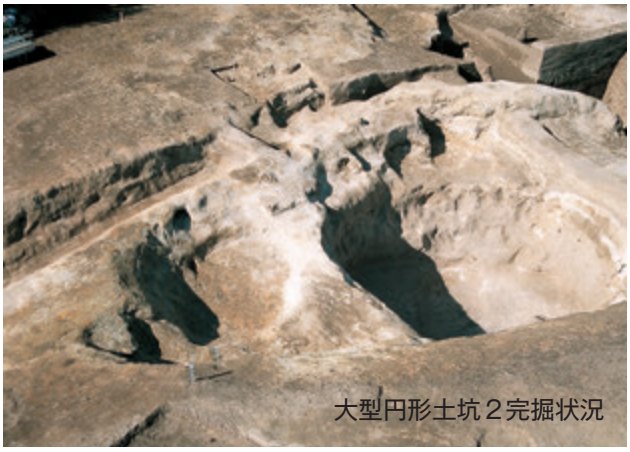

18号炉跡検出状況


残留磁気測定風景


土坑48及び出土遺物

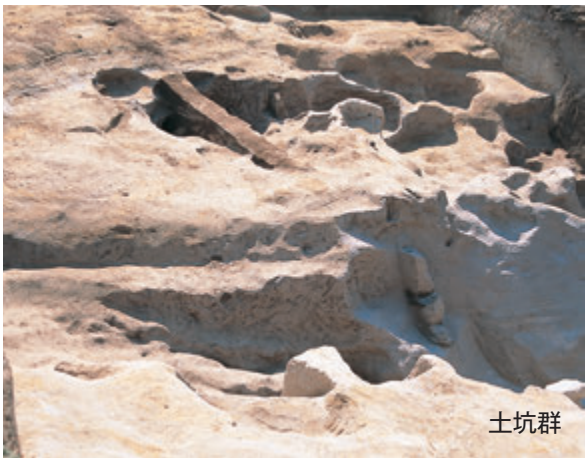
炉跡（4）

図版20


大型円形土坑２完掘状況


大型円形土坑２出土遺物


大型円形土坑２出土遺物


土坑群


階段状遺構

大型円形土坑２他


曲輪より空堀を望む


空堀・帯曲輪確認トレンチ


空堀２発掘風景


帯曲輪検出状況


曲輪a（上）空堀２（下）

曲輪・空堀・帯曲輪等

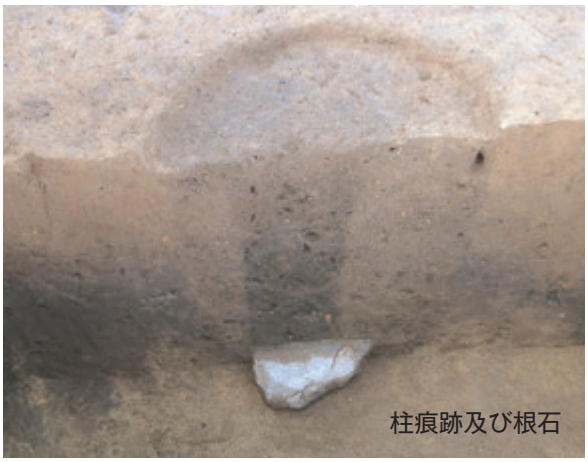


近世掘立柱建物跡（1）


柱穴及び根石


柱痕跡及び根石


柱穴及び根石


柱痕跡及び根石


近世土坑群

近世掘立柱建物跡（2）


薩摩焼出土状況


近世出土遺物

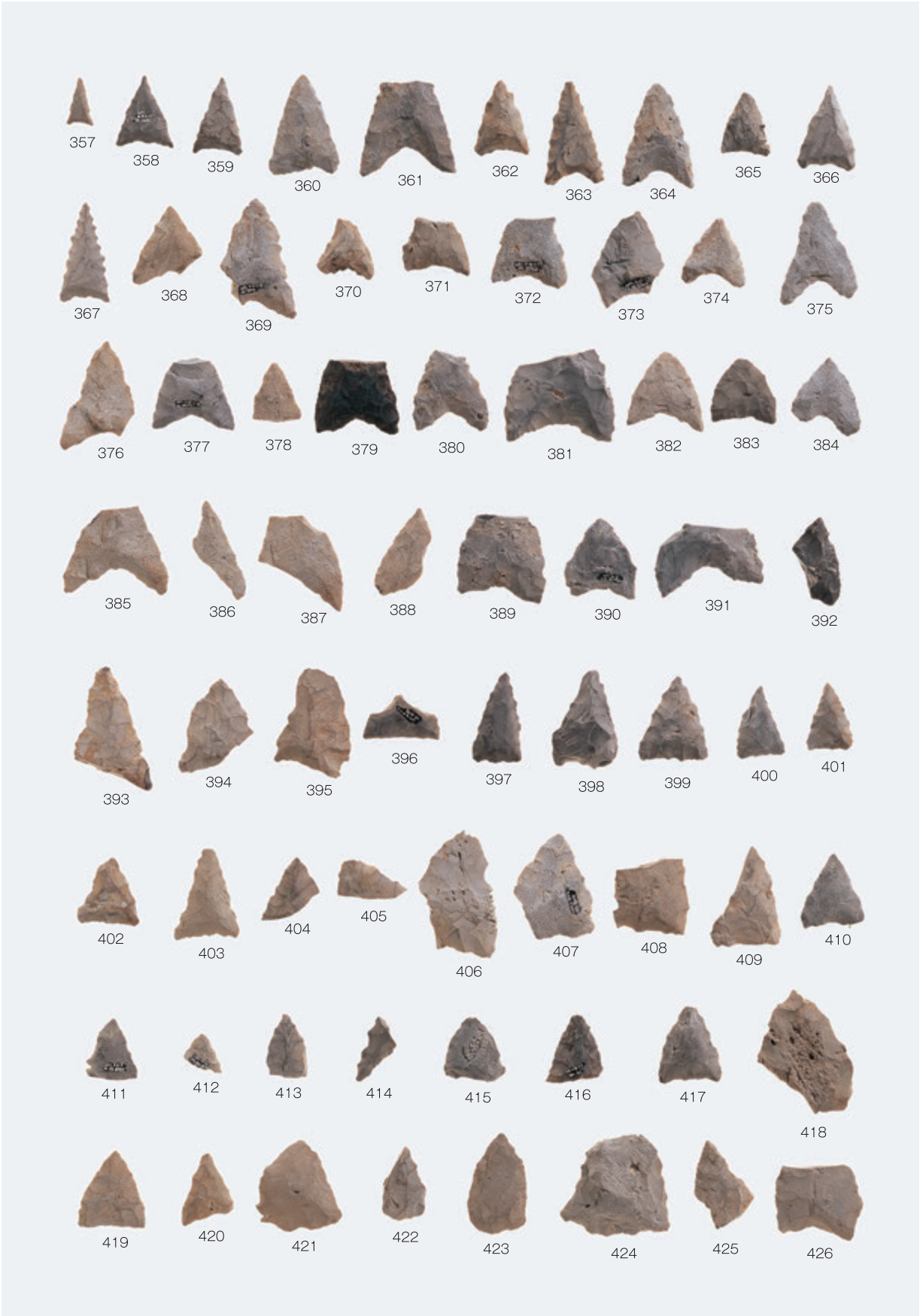

薩摩焼出土状況


薩摩焼出土状況

薩摩焼他



旧石器時代石器（1）



縄文時代草創期出土遺物（1）



縄文時代草創期出土遺物（2）



縄文時代草創期出土遺物（3）


467
468
471
470
478
477
482
494
522
527
524
531
562
554
561
559
571
565
568
570
585
583

縄文時代早期出土遺物



縄文時代前期～後期出土遺物







縄文時代後期出土遺物（1）



縄文時代後期出土遺物（2）



縄文時代後期～晩期出土遺物


857
858
859
860
861
863
865
862
447
449
448
866
867
873
870
871
878
875
876
877
881
879
880
883
882

縄文時代出土遺物


951


958


950


955


957

1・2号住居跡出土土器


967


975


973


972

3号住居跡出土土器


989


990

5号住居跡出土土器

古墳時代住居跡出土遺物（1）

図版36


1003
7号住居跡出土遺物


1005
8号住居跡出土遺物


1014
8号住居跡出土遺物


1015
8号住居跡出土遺物


1040
9号住居跡出土遺物


1043
9号住居跡出土遺物


1046
9号住居跡出土遺物

古墳時代住居跡出土遺物（2）



古墳時代住居跡出土遺物（3）

図版38


1077


1087


1079


1095


1096


1078


1080

古墳時代包含層出土遺物


1100


1101


1102


1103


1111


1102
1103
1100・1101
円形周溝内出土遺物


1113
1114
1115
1116
1117
1118
1119
1120
1121
1122

古代遺構内出土遺物（1）



古代土坑１出土遺物



古代土坑２出土遺物

古代遺構内出土遺物（2）



埋納土師器甕



竪穴遺構内出土甕

古代遺構内出土遺物

図版42

























古代出土遺物（1）


1183


1184


1210


1208


1212


1205


1209


1217


1213


1218


1219


1220


1142

古代出土遺物（2）





古代出土遺物（3）



土師器甕集合



空堀・曲輪・土坑等投弾







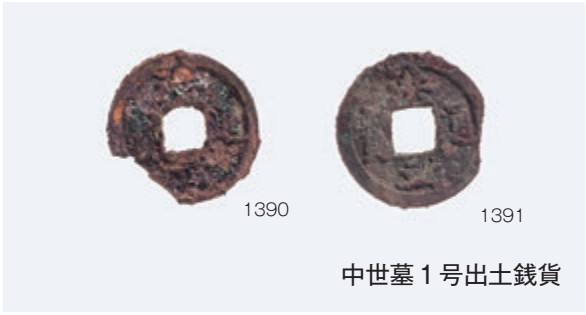
中世大型円形土坑２内出土遺物


1336
1335
1332
1311
1310
1305
1307
1317
1306
1316
1318
1312
1313
1315
1314
1319

中世遺構内出土遺物（1）



中世墓１号出土遺物



中世墓１号出土銭貨



中世墓４号出土銭貨



中世土坑出土遺物

中世遺構内出土遺物（2）







埋納遺構出土青磁・土師器


1416


1458


1457


1459


1456


1455


1460


1461


1454


1448


1452


1450


1453


1441


1446

中世出土遺物（1）


1532


1519


1552


1534


1498


1489


1488

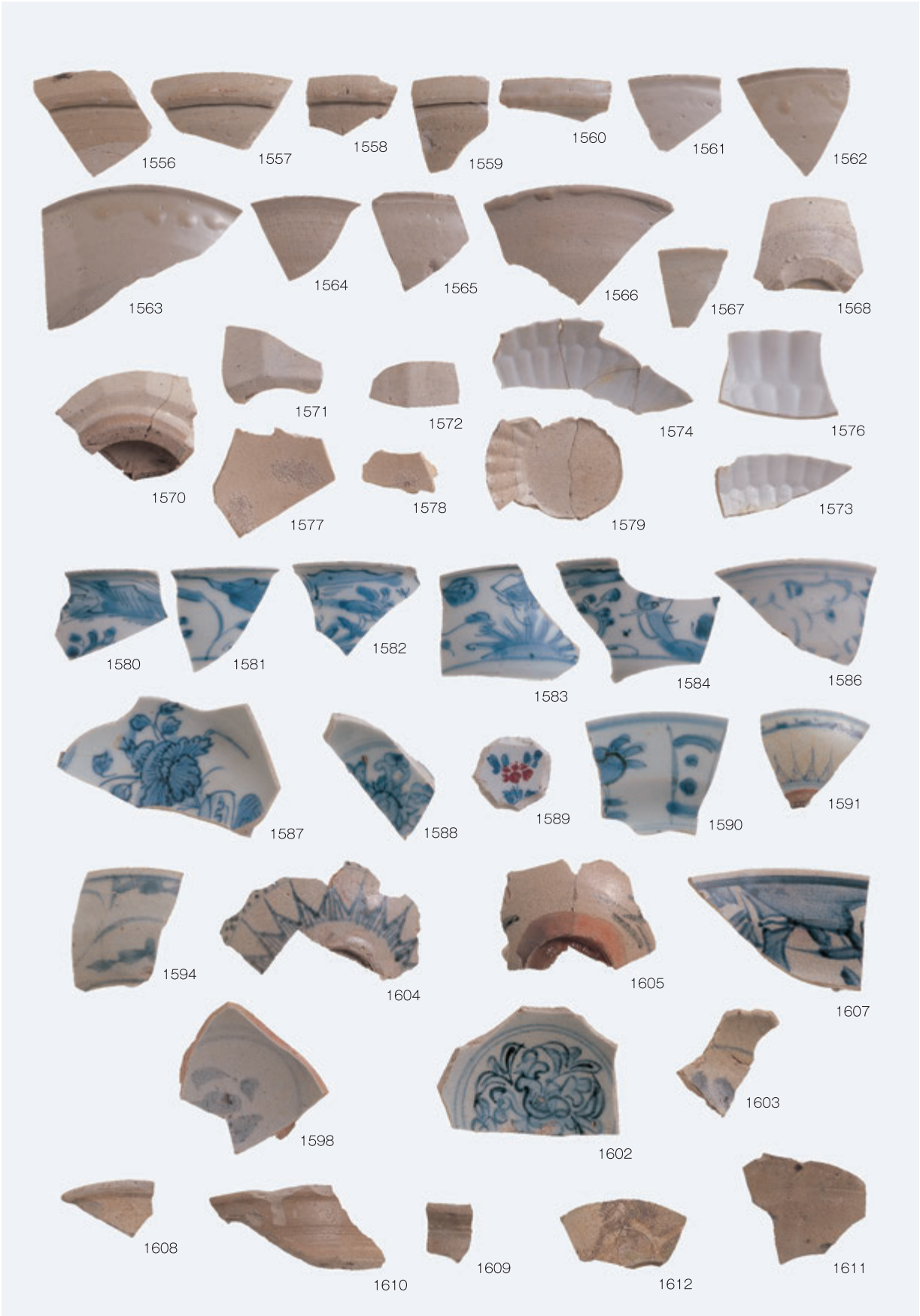
中世出土遺物（2）



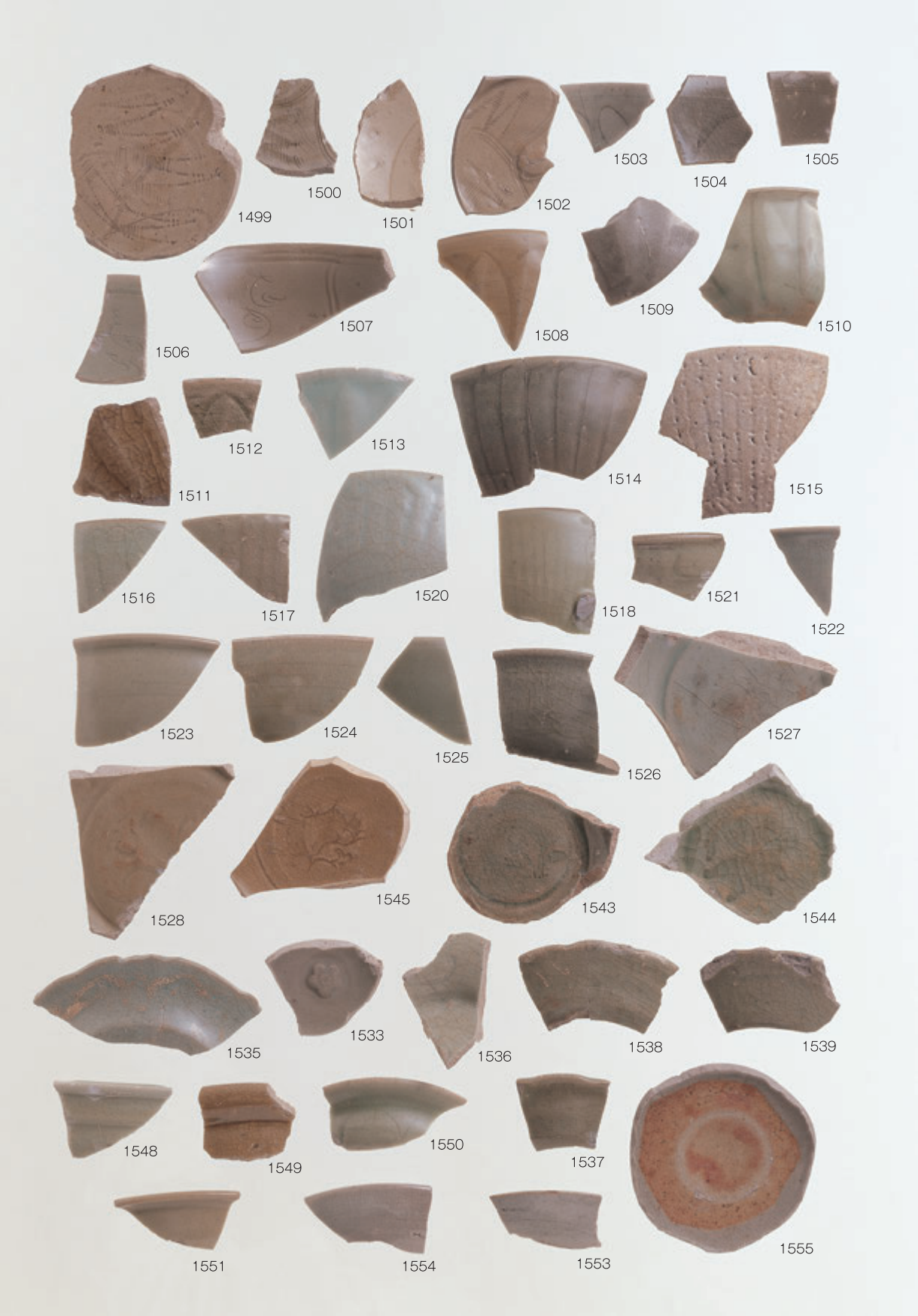
中世出土遺物（3）


1424
1423
1425
1463
1462
1422
1426
1421
1420
1427
1428
1465
1419
1467
1470
1495
1496
1494
1497
1626
1627
1623
1625
1622
1440
1617
1615
1613
1614

中世出土遺物（4）


1556
1557
1558
1559
1560
1561
1562
1563
1564
1565
1566
1567
1568
1570
1571
1572
1574
1576
1577
1578
1579
1573
1580
1581
1582
1583
1584
1586
1587
1588
1589
1590
1591
1594
1604
1605
1607
1598
1602
1603
1608
1610
1609
1612
1611

中世出土遺物（5）


1499
1500
1501
1502
1503
1504
1505
1506
1507
1508
1509
1510
1511
1512
1513
1514
1515
1516
1517
1520
1518
1521
1522
1523
1524
1525
1526
1527
1528
1545
1543
1544
1535
1533
1536
1538
1539
1548
1549
1550
1537
1555
1551
1554
1553

中世出土遺物（6）


1628
1629
1630
1631
1632
1633
1634
1635
1636
1637
1638
1639
1640
1641
1642
1643
1644
1645
1646
1647
1648
1649
1650
1651
1652
1653
1654
1655
1656
1657
1658
1659
1660
1661
1662
1663
1664
1665
1666
1667
1668
1669

中世出土銭貨（1）


1670
1671
1672
1673
1674
1675
1676
1677
1678
1679
1680
1681
1682
1683
1684
1685
1686
1687
1688
1689
1690
1691
1692
1693
1694
1695
1696
1697
1698
1699
1700
1701
1702
1703
1704
1705
1706
1707
1708
1709

中世出土銭貨（2）













近世出土遺物

図版60



薩摩焼集合

あ と が き

「城を攻めるには，寄手の軍勢は篭城軍の何倍もの人員と時間が必要だ。」と，言われるものである。記録保存としての向栫城をやっと攻略した。調査をともにしながら調査終了後，病を得て亡くなられた勇健三氏も天国から我々の攻防を見ながら応援してくれていたことと思う。彼が生きていたら，「まだ，いい作戦はないかなぁ。」と，聞きたい時も何度もあった。「とにかく，落城させました。」と，彼の霊前に報告したい。

文献にもないような城であったが，攻め落として城の中を見てみると，遺構も遺物もすばらしかった。薩摩の中世武士（もののふ）の意気込みを見るようであった。我々非力な寄手に数々の作戦や名案を授けて下さった方々に感謝して，この城の城門を閉じることとする。

鹿児島県立埋蔵文化財センター(129)
南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査ＸＸⅥ
（伊集院IC～市来IC間）

向　栫　城　跡

発行日　2008年３月

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-48-5811

印刷所　凸版印刷株式会社
〒892-0844　鹿児島県鹿児島市山之口町1-10
TEL 099-226-9141